

授 業 要 覧

(平成19年度入学者用)

2007

神戸大学工学部

Faculty of Engineering
Kobe University

授業要覽

(平成19年度入学者用)

2007

神戸大学工学部

目 次

I	工学部の教育理念	
1.	工学部教育について	3
2.	工学部の教育組織	4
3.	履修に関する諸規則等について	5
4.	授業科目の履修等について	6
5.	資格取得の要件について	9
II	全学共通授業科目	
1.	全学共通授業科目に対する考え方	11
2.	共通専門基礎科目及び専門基礎科目に対する考え方	11
3.	全学共通授業科目の履修科目一覧表	12
4.	授業科目の内容	
III	建築学科	
1.	教育の目指すもの	15
2.	構成と教育組織	16
3.	建築学科の学習・教育目標	17
4.	履修科目一覧表	18
5.	履修上の注意	21
6.	各授業科目の関係	23
7.	授業科目の内容	24
IV	市民工学科	
1.	教育の目指すもの	91
2.	構成と教育組織	92
3.	学習・教育目標	93
4.	履修科目一覧表	94
5.	履修上の注意	97
6.	各授業科目の関係	99
7.	授業科目の内容	100
V	電気電子工学科	
1.	教育の目指すもの	147
2.	構成と教育組織	148
3.	履修科目一覧表	149
4.	履修上の注意	152

5. 各専門科目の関係	153
6. 授業科目の内容	155
VI 機械工学科	
1. 教育の目指すもの	209
2. 機械工学科の構成	210
3. 履修科目一覧表	211
4. 履修上の注意	213
5. 工学部機械工学科 履修体系概念図	214
6. 授業科目の内容	215
VII 応用化学科	
1. 教育の目指すもの	267
2. 構成と教育組織	269
3. 履修科目一覧表	270
4. 履修上の注意	273
5. 各授業科目の関係	274
6. 授業科目の内容	275
VIII 情報知能工学科	
1. 教育の目指すもの	323
2. 構成と教育組織	324
3. 履修科目一覧表	325
4. 履修上の注意	328
5. 各授業科目の関係	329
6. 授業科目の内容	331
IX 工学部共通科目	
1. 授業科目の内容	381
X 神戸大学校舎配置図	
1. 神戸大学配置図	393
2. 工学部案内図	394
3. 工学部配置図	395
4. 工学部学舎平面図	396
5. 工学部教室設備等一覧表	404
6. 部局等所在地及び電話番号	405

I 工学部の教育理念

1. 工学部教育について

大学は、学校教育法により「学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を発展させることを目的とする。」と定められている。ここでは将来の社会人として、広い視野に立つことのできる教育を受けるとともに、専門の領域において深く学問を追究し、知的で道徳的かつ応用的な能力を高めることが要求されており、その目的を達成するために学部がおかれている。

工学部は、自然科学の中で基礎から応用に至る広範囲な領域の教育と研究を行っている学部である。工学の研究はその成果を社会に還元してゆくべきものであって、工学部ではサイエンスとしての基礎研究を推進すると共に、社会に役立つ応用研究を目指した複眼的な視野を持つ研究者・技術者の育成を目指している。こうした観点から工学部では、将来国際的な場において活躍することができ、社会に貢献し得る有用な技術者、あるいは新たな科学技術分野を開拓する研究者を養成することを念頭に置いた教育を行っている。

ところで最近の科学技術の発展は目を見張るものがある。高度化はいきおい専門分野を細分化し、工業を中心とした産業構造も変化してきた。このような社会の変化に対応する形で、工学部は以前に設立時の5学科から11学科に学科を増設し、社会的要請に応える努力を続けてきた。しかし工業分野の進化はさらに急で、学際的・先端的な分野への展開が進む一方で、それらを総合する能力を持った人材が求められるようになってきた。このような変化に対応するために、工学部では、教育体制をより幅が広く基礎的かつ総合的な知識を有し、かつ最新の各種の科学技術への応用が可能な能力を持った学生を教育することを目的として、平成4年度に元の11学科を統合して大きな単位の5大学科に再編成し、抜本的に教育組織を改革するとともに、教員の組織である講座を規模の大きな講座へと改組して、教育研究においてより幅広い展開を可能にする体制にした。さらに平成19年度からは、建設学科を市民工学科と建築学科に改組して6大学科から成る新たな工学部の体制が整うこととなった。

また、全学の教員が一般教育の責任を分担した教育体制を確立するために、4年一貫教育を行うこととして、1年生入学時から専門の教育を受けられるようにするとともに、社会人としてより広い教養を身につけるために、ある程度大学の教育に慣れてきた2年生から、他学部の専門分野を主とした全学共通授業科目を受講できるようにした。特に本学部は平成4年度から全学に先駆けてこの教育方法を採用し、先導的役割を果たしてきた。社会と結びついた科学技術である工学という分野は、専門の知識だけではなく、幅の広い人道的な素養を特に必要とするものである。諸君がこの全学共通授業科目の履修で工学以外の分野を学ばれることに大きな期待を持っている。

本学では、諸君が大学における講義や演習に出席して勉強するだけでなく、教室以外でも十分な復習や予習をすることを可能とするため、1年間に履修し取得することが可能な単位数に制限を設けている。この趣旨を十分理解して、勉学に励んでいただきたい。ただし成績優秀者に対しては、この制限を越えて履修し、より多くの単位を取得すること、また早期に卒業することも可能としている。いずれにせよ、諸君の勉学に対する意欲と努力が大学生活を真に有意義なものとすることに変わりはない。

最近の工学部の顕著な傾向は、学部学生の大学院進学希望者が多いことである。本学ではそのことに配慮して、5年制の大学院工学研究科（平成19年度からは従来の自然科学研究科を工学研究科等へ改組）（博士課程）を設置し、その内容を充実させている。この内2年の博士前期課程を修了した段階で修士の学位を、また3年の後期課程を修了し学位論文を提出して審査に合格した段階で博士の学位を授与している。この大学院には学部の4年生修了者だけでなく、3年生からのいわゆる飛び級による受験も可能であり、社会人の入学への道も開かれている。また前期課程2年・後期課程3年を短縮して修士及び博士の学位を取得できる道もある。

本学部では、諸君がより高度な教育を受けることができ、世界的レベルの研究を行うことが可能な体制を整備することに努力している。この授業要覧を参考にして、大学生活が充実したものになることを心から期待している。

2. 工学部の教育組織

学科	講 座	教育研究分野
建 築 学 科	空 間 デ ザ イ ン	建築・都市デザイン
		住宅・コミュニティデザイン
		構造デザイン
		建築マネジメント
	建 築 計 画 ・ 建 築 史	建築史・歴史環境論
		地域・住宅計画
		建築・都市安全計画
	構 造 工 学	構造性能工学
		構造制御工学
		構造システム工学
	環 境 工 学	音・光環境計画
		熱・空気環境計画
		都市環境・設備計画
市 民 工 学 科	人 間 安 全 工 学	構造安全工学
		地盤安全工学
		交通システム工学
		地盤防災工学
		地震減災工学
		流域防災工学
		環境共生工学
	環 境 共 生 工 学	環境流体工学
		水圏環境工学
		地圏環境工学
		広域環境工学
		都市保全工学
		都市経営工学
電 気 電 子 工 学 科	電 子 物 理	メゾスコピック材料学
		フォトニック材料学
		量子機能工学
		ナノ構造エレクトロニクス
		電磁エネルギー物理学
		電子情報
	電 子 情 報	集積回路情報
		計算機工学
		通信情報
		アルゴリズム
		知的学習論

学科	講 座	教育研究分野	
機 械 工 学 科	熱 流 体	応用流体工学	
		混相熱流体工学	
		エネルギー変換工学	
		エネルギー環境工学	
	材 料 物 理	固体力学	
		破壊制御学	
		材料物性学	
	設 計 生 産	表面・界面工学	
		複雑系機械工学	
		機械ダイナミクス	
		コンピュータ統合生産工学	
	応 用 化 学 科	物 質 化 学	知能システム創成学
			創造設計工学
応用物理化学			
応用無機化学			
応用有機化学			
応用高分子化学			
化 学 工 学		機能分析化学	
		高分子コロイド化学	
		機能分子化学	
		触媒反応工学	
		移動現象工学	
		化学システム工学	
		粒子流体工学	
生物化学工学			
生物プロセス工学			
材料プロセス工学			
情 報 知 能 工 学 科	情 報 基 礎	情報メディア	
		プログラミング言語	
		知能システム	
		人工知能	
		知的ソフトウェア	
		情報数理	
	情 報 シ ス テ ム	知能ロボティクス	
		無線通信	
		情報フォトリクス	
		計算機システム	
	シ ス テ ム デ ザ イ ン	プロセッサ・アーキテクチャ	
		システム計画	
		システム設計	
システム制御			
システム情報			
システム構造			
分布系同定・応用関数解析			
分布系制御・非線型解析			

3. 履修に関する諸規則等について

学生諸君にとって修学上関係の深い諸規則については、下記のとおりであるが、別途配付される「神戸大学工学部学生便覧」に内容が記載されているので、必読すること。

- (1) 教学規則
- (2) 共通細則
- (3) 大学教育推進機構規則等
 - ①大学教育推進機構規則（抄）
 - ②全学共通授業科目の履修方法に関する申合せ
 - ③全学共通授業科目履修規則
 - ④全学共通授業科目の再受験資格制度に関する内規
 - ⑤全学共通授業科目の追試験に関する内規
- (4) 工学部規則
- (5) 修学上に関する工学部内規等
 - ①再試験制度について
 - ②定期健康診断の受検に関する申合せ
 - ③交通機関の運休、台風等の場合における授業、学期末試験の取扱いについて
 - ④履修科目の登録の上限を超えて登録することができる者の基準について
 - ⑤早期卒業の認定基準に関する内規
 - ⑥早期卒業に関する学科別認定基準等について
 - ⑦3年以上在学する学生の工学研究科入学資格等について
 - ⑧神戸大学工学部と明石工業高等専門学校との相互履修について
 - ⑨神戸大学工学部と放送大学との間における単位互換について
 - ⑩外国人留学生のための日本語等授業科目の単位の取扱いに関する申合せについて
 - ⑪転部に関する申合せ
 - ⑫転科に関する申合せ
 - ⑬既修得単位の認定に関する内規
 - ⑭編入学者で退学した者又は除籍された者の認定単位の取扱い（申合せ）
 - ⑮工学部学生の試験における不正行為に関する申合せ
- (6) その他の工学部周知事項
 - ①工学部学生の心得
 - ②工学会館使用心得
 - ③奨学制度
 - ④学生教育研究災害障害保険制度
 - ⑤ネットワークID利用上の注意

4. 授業科目の履修等について

1 授業科目、授業科目の区分及び履修について

本学部の授業科目は工学部規則（学生便覧に掲載）に定められており、各授業科目の年次配当及び授業内容については14ページ以降に掲載してある。なお、授業科目の区分は次のとおりである。

(1) 共通科目

① 教養原論

学生は、教養原論の授業科目の中から8科目16単位を修得しなければならない。

教養原論は、1, 2年の前期と後期に開講する。

② 外国語科目

外国語科目は、以下の区分からなる。

・外国語第Ⅰ：英語

・外国語第Ⅱ：独語、仏語、中国語、ロシア語

・外国語第Ⅲ：独語、仏語、韓国語、スペイン語、イタリア語

各学科により履修することのできる科目は異なるので、詳細は授業要覧12頁「3. 全学共通授業科目の履修科目一覧表を参照すること。

③ 情報科目

情報科目は情報基礎と情報科学からなるが、このうち情報基礎は全学科の必修科目、情報科学は建築学科、市民工学科、電気電子工学科及び機械工学科の選択科目である。

④ 健康・スポーツ科学

健康・スポーツ科学は、健康・スポーツ科学講義、健康・スポーツ科学実習Ⅰ及び健康・スポーツ科学実習Ⅱからなる。

⑤ その他必要と認める科目

その他必要と認める科目は、学生の自主的な学習に応える科目である。

(2) 専門科目

専門科目は、各学科においてそれぞれ定められており、必修科目、選択必修科目及び選択科目からなる。

(3) 外国人留学生のための日本語科目

外国人留学生が、日本語科目を修得したときは、外国語の修得単位数に算入することができる。（学生便覧の「外国人留学生のための日本語等授業科目の単位の取扱いに関する申し合わせ」を参照すること。）

(4) 全学共通授業科目と工学部授業科目

授業科目の区分は、上記(1)～(3)に示したとおりであるが、規則上から説明すると、大学教育推進機構により開講される全学共通授業科目と工学部により開講される工学部授業科目に分かれる。

全学共通授業科目は、神戸大学全学共通授業科目履修規則（学生便覧に掲載）に定められた授業科目の中から、本学部の教育上、必要な授業科目を選んだものであり、上記の「(1)共通科目」、 「(3)日本語科目」及び「(2)専門科目の一部」からなる。

工学部授業科目は、文字どおり工学部により開講される授業科目で、上記「(2)専門科目の大部分」からなる。

なお、内規等については、後で個々に説明するが、全学共通授業科目に適用されるものと工学部授業科目に適用されるものとの2本立てとなっているので、十分に注意すること。

2 履修要件

学生は、それぞれの学科において定められた区分に従って、単位を修得しなければならない。各学科の「履修上の注意」の項を参照すること。

3 履修登録・確認の手続きについて

科目の履修に際しては、授業要覧に記載されている「履修科目一覧表」及び毎学期始めに配付する「授業時間割表」により、教学委員・指導教員等の指示に従い履修科目を十分に検討した上、毎学期指定された期間内に WEB により履修登録・確認を行わなければならない。(教養原論、総合科目については、抽選登録をしなければならない。登録期間等詳細は掲示にてお知らせする。)

なお、履修登録されていない授業科目は、たとえ履修・受験しても無効であり、登録されている授業科目でも異なる教員の授業科目を履修・受験した場合も無効である。

また、他学部の講義を履修しようとする場合は、開講学部等で曜日時限を確認し、開講学部の教務(学生)係に申し出なければならない。

4 学期末試験について

① 学期末試験は、授業が終了した後に実施するが、担当教員によっては授業の終了する前に行うこともある。

学期末試験を実施せずに、平常の成績、レポート等をもって学期末試験の代わりとする場合もある。

レポートをもって試験に代えるときは、提出期限を厳守すること。

試験は、あらかじめ正規の届をした授業科目のみ受験することができる。

学期末試験時間割表及び試験室の指定は、その都度掲示等をするので注意すること。

② 再履修について

単位を修得しようとする授業科目で一度不合格になったときは、次の学期以降に改めて履修(再履修)し受験しなければならない。

ただし、共通専門基礎科目については、一定の条件を満たした場合に限り、再履修せずに同一科目の試験を再受験できる制度がある。

(学生便覧の「神戸大学全学共通授業科目の再受験資格制度に関する内規」を参照すること。)

なお、さきの共通専門基礎科目以外の工学部専門科目については、定期試験における不合格者のうち、所定の基準を満たした者に対し「再試験」が実施されることがある。(学生便覧の「再試験制度について」を参照すること。)

③ 追試験について

試験に欠席した者の追試験は行わない。ただし、全学共通授業科目については、一定の条件を満たした場合に限り行うことがある。(学生便覧の「神戸大学全学共通授業科目の追試験に関する内規」を参照すること。)

④ 試験に関する注意

イ. 試験場にて不正行為のあるときは、直ちに厳重なる処罰をする。

ロ. 試験場での喫煙を禁ずる。

ハ. 試験開始20分間は、受験者の退室を認めない。

ニ. 試験開始20分を経過した後は、受験者の入室を認めない。

ホ. 答案用紙は、答案の成否に拘らず各枚毎に必ず学籍番号・氏名を記入して提出すること。

ヘ. 答案用紙に他事記載を禁ずる。もし、これを記載したときは不利益を受けることがある。

ト. 試験に不必要なものは、一切鞆類の中へしまいか、又は所定の場所へ置くこと。

チ. 一旦退室した者は、いかなる理由によるも、受験者全員の答案回収が済むまで再入室を認めない。

リ. 携帯電話等の通信機器を時計替わりに使用することは認めないので、必ず鞆等の中へしまっておくこと。

これらの機器を机の上に置いている場合は、不正行為とみなすので注意すること。

なお、全学共通授業科目の試験については、別途指示があるので注意すること。

5 学業成績について

成績は、優、良、可及び不可に分け、可以上を合格とする。

いったん修得した単位は、取り消すことはできない。

6 交通機関の運休、台風等の場合における授業、学期末試験の取り扱いについて

① 午前6時までに交通機関が運行し、又は警報が解除された場合

1時限目の授業から実施する。

② 午前10時までに交通機関が運行し，又は警報が解除された場合

3時限目（午後）の授業から実施する。

なお，この取り扱いは，全学共通授業科目及び工学部授業科目について，一部を除き，同様の取扱いである。

（学生便覧の「交通機関の運休，台風等の場合における授業，学期末試験の取扱いについて」を参照すること。）

7 授業教室について

授業は，入学した年度の1年間は，主に鶴甲第1キャンパスの教室で行うが，一部の授業は工学部キャンパスの教室を使用する。鶴甲第1キャンパスの教室配置図は，別途配付する「学生生活案内」を，工学部キャンパスの教室配置図は395ページ以降を参照すること。

5. 資格取得の要件について

○建築士（建築士法）

一級建築士試験の受験資格は、大学において正規の建築又は土木に関する課程を修めて卒業した後、建築に関して2年以上の実務の経験を有する者となっている。

二級建築士試験の受験資格は、大学において正規の建築に関する課程を修めて卒業した者又は正規の土木に関する課程を修めて卒業した後、建築に関して1年以上の実務の経験を有する者となっている。

（ただし、建築士法は現在改正の議論がなされており、今後受験資格が変更される可能性があるので注意すること。）

○測量士（測量法）

市民工学科の卒業生で、測量に関する授業科目を修得した者は、卒業後1年以上測量に関する実務に従事した場合は、願い出により測量士の資格を受けることができる。

市民工学科の卒業生で、測量に関する授業科目を修得した者は、願い出により測量士補の資格を受けることができる。

（主務官庁・国土交通省）

○電気主任技術者（電気事業法）

第1種電気主任技術者免状取得資格は、電気電子工学科において、電気事業法の規定に基づく主任技術者の資格等に関する省令第7条第1項の各号の科目を修めて卒業（大学院においては修了以下同じ。）し、5万ボルト以上の電気工作物の工事、維持又は運用の実務経験が、卒業前の経験年数の2分の1と卒業後の経験年数との和で5年以上あること。

（主務官庁・経済産業省）

○陸上無線技術士国家試験（無線従事者規則）

電気電子工学科の卒業生で、在学中に所定の単位を修得した者は、第1級陸上無線技術士国家試験を受験する際、「無線工学の基礎」を免除される。（ただし、卒業の日から3年以内に限る。）

（主務官庁・総務省）

○電気通信主任技術者試験（電気通信主任技術者規則）

電気電子工学科在学中に所定の単位を修得した者は、電気通信主任技術者試験を受験する際、試験科目の内、電気通信システムの試験が免除される。

（主務官庁・総務省）

○自動車整備士（自動車整備士技能検定規則）

機械工学科卒業生は、上記規則により、自動車の整備作業に関し6か月以上の実務経験を有していれば三級自動車整備士の受験資格ができる。

（主務官庁・国土交通省）

○ボイラー技士（ボイラー及び圧力容器安全規則）

機械工学科卒業生で、在学中ボイラーに関する科目を修得した者でかつ、卒業後ボイラーの取扱いについて2年以上の実地修習を経たものは、特級ボイラー技士免許試験を受験できる。

機械工学科卒業生で、在学中ボイラーに関する科目を修得した者でかつ、卒業後ボイラーの取扱いについて1年以上の実地修習を経たものは、一級ボイラー技士免許試験を受験できる。

機械工学科卒業生で、在学中ボイラーに関する科目を修得した者でかつ、卒業後ボイラーの取扱いについて3か月以上の実地修習を経たものは、二級ボイラー技士免許試験を受験できる。

（主務官庁・厚生労働省）

○エネルギー管理士（エネルギーの使用の合理化に関する法律）

エネルギー管理士免状には、熱管理士免状と電気管理士免状とがあり、次の2通りの取得方法があります。

1. 国家試験による取得

財団法人省エネルギーセンターが毎年8月に行うエネルギー管理士試験（熱、電気）に合格すること。

特に受験資格に制約はありませんが、受験の前後にエネルギーの使用の合理化に関する1年以上の実務経験が

必要です。

2. 認定研修による取得方法

財団法人省エネルギーセンターが毎年12月に行うエネルギー管理研修（熱，電気別）を受講し，修了すること。

（修了試験に合格すること。）ただし，エネルギー管理研修を受けるためには，研修申込時までにエネルギーの使用に関する合理化に関する3年以上の実務経験が必要です。

（主務官庁・経済産業省）

○危険物取扱者（消防法）

応用化学科卒業生であれば，甲種危険物取扱者試験を受験できる。

（主務官庁・各都道府県）

○技術士国家試験（技術士法）

工学部卒業生は，第1次試験（技術士補）の共通科目の試験が免除される。第2次試験（技術士）は，次のいずれかの要件を備えている者に限り受験することができる。

- (1) 技術士補として技術士を補助したことがある者で，その補助した期間が通算して4年を超えるもの。
- (2) 科学技術に関する専門的応用能力を必要とする事項についての計画，研究，設計，分析，試験，評価又はこれらに関する指導の業務に従事した者で，その従事した期間が通算して7年を超えるもの。（技術士補となる資格を有するものに限る。）
- (3) 科学技術に関する専門的応用能力を必要とする事項についての計画，研究，設計，分析，試験，評価又はこれらに関する指導の業務を行う者の監督（文部科学省令で定める要件に該当する内容のものに限る。）の下に当該業務に従事した者で，その従事した期間が通算して4年（技術士補となる資格を得た後のものに限る。）を超えるもの（技術士補となる資格を有するものに限る。）

（主務官庁・文部科学省）

○安全管理（労働安全衛生規則）

工学部卒業生で，3年以上産業安全の実務経験がある者は，安全管理者に就任できる。

（主務官庁・厚生労働省）

Ⅱ 全学共通授業科目

1. 全学共通授業科目に対する考え方

新しい知識の創造は、一専門分野の知識のみならずより広い分野の知識の修得を経て初めて実現できる。全学共通授業科目は、教養原論、外国語科目、情報科目及び健康・スポーツ科学を通じて大学生として必要な基本的・基礎的能力を養わせると共に、幅の広い視野をもたせることを目的としている。

本学における教育は、専門教育と全学共通教育によって構成される。全学共通授業科目は、一般教育としての教養原論科目、外国語教育としての外国語科目、情報処理教育としての情報科目、保健体育教育としての健康・スポーツ科学及び、次項で説明する共通専門基礎科目の5分野によって実施される。

これらの科目については全学共通的に大学教育推進機構のもとで企画、運営、評価がなされる。

学生は、入学後直ちに専門科目を履修することによって各学問分野における高等教育としての知識を身に付けるとともに、より広い学問的知識を修得することによってさらに新しい知識を創造することが求められる。

2. 共通専門基礎科目及び専門基礎科目に対する考え方

工学部における専門教育は、各学科の専門分野と深く結びついた学問分野の教育を行うための専門科目と、その基礎となる学問分野について教育するための共通専門基礎科目及び専門基礎科目から構成される。このうち共通専門基礎科目及び専門基礎科目は、工学の各専門分野を深く理解しその根本原理を身につけるための基礎学力の修得を目的としており、工学の広い分野にわたって共通的に利用されている自然科学系の科目が中心となっている。

このように工学部における専門基礎教育のための科目は、共通専門基礎科目と専門基礎科目によって構成される。前者については、全学共通的に大学教育推進機構のもとで企画、運営、評価がなされ、後者については一般専門科目と同様に工学部が教育にあっている。

学生は、各専門分野をより深く理解するために、これらの共通専門基礎科目及び専門基礎科目を履修し、各学問分野の基礎となる理論を十分に学ぶことが求められる。

3. 全学共通授業科目の履修科目一覧表

授業科目の区分等	授 業 科 目	単 位	毎週の授業時間								備 考				
			1		2		3		4						
			前	後	前	後	前	後	前	後					
※1 教 養 原 論	人間形成と思想	哲学	2												
		行為と規範	2												
		論理学	2												
		心理学	2												
		心と行動	2												
		教育学	2												
		教育と人間形成	2												
		文学と芸術	日本の文学	2											
			世界の文学	2											
			言語と文化	2											
			伝統芸術	2											
			芸術と文化	2											
		歴史と文化	日本史	2											
			西洋史	2											
			アジア史	2											
			考古学	2											
			歴史と現代	2											
			科学史	2											
			芸術史	2											
		人間と社会	社会学	2											
			社会思想史	2											
			地理学	2											
			文化人類学	2											
			現代社会論	2											
			越境する文化	2											
			生活環境と技術	2											
			学校教育と社会	2											
		法と政治	法の世界	2											
			社会生活と法	2											
			国家と法	2											
			政治の世界	2											
			現代社会と政治	2											
		経済と社会	経済入門	2											
			経済社会の発展	2											
			現代の経済	2											
			企業と経営	2											
		数理と情報	構造の数理	2											
			現象の数理	2											
			数理の世界	2											
			「カタチ」の文化学	2											
			「カタチ」の科学	2											
			情報の世界	2											
		物質と技術	素粒子と宇宙	2											
		現代の物性科学	2												
		分子の世界	2												
		物質の成り立ち	2												
		資源・材料とエネルギー	2												
		ものづくりと科学技術	2												
		情報化社会を支える基盤技術	2												
		惑星系の起源・進化・多様性	2												
	生命と環境	身体の成り立ちと働き	2												
		健康と病気	2												
		生命の成り立ちと営み	2												
		生物の多様性と進化	2												
		生物の生態と自然環境	2												
		生物資源と農業	2												
		食と健康	2												
		地球と惑星	2												
	総合教養	社会と人権	2												
		神戸大学の成り立ち	2												
		神戸大学史	2												
		社会科学のフロンティア	2												
		海への誘い	2												
		瀬戸内海学入門	2												
		国際協力の現状と課題	2												
		阪神・淡路大震災	2												

授業科目の区分等	授 業 科 目	単 位	毎週の授業時間								備 考
			1		2		3		4		
			前	後	前	後	前	後	前	後	
外国語第Ⅰ	英語リーディングⅠ	1	2								
	英語リーディングⅡ	1		2							
	英語リーディングⅢ	1			2						
	英語オーラルⅠ	1	2								
	英語オーラルⅡ	1		2							
	英語オーラルⅢ	1			2						
	英語アドバンストA	1									
英語アドバンストB	1										
英語アドバンストC	1										
外国語第Ⅱ	独語ⅠA	1	2								
	独語ⅠB	1	2								
	独語ⅡA	1		2							
	独語ⅡB	1		2							
	独語SA	1		2							
	独語SB	1		2							
	独語ⅢA	1			2						
	独語ⅢB	1				2					
	独語ⅣA ※2	1					2				
	独語ⅣB ※2	1						2			
	仏語ⅠA	1	2								
	仏語ⅠB	1	2								
	仏語ⅡA	1		2							
	仏語ⅡB	1		2							
	仏語SA	1		2							
	仏語SB	1		2							
	仏語ⅢA	1			2						
	仏語ⅢB	1				2					
	仏語ⅣA ※2	1					2				
	仏語ⅣB ※2	1						2			
	中国語ⅠA	1	2								
	中国語ⅠB	1	2								
	中国語ⅡA	1		2							
	中国語ⅡB	1		2							
	中国語SA	1		2							
	中国語SB	1		2							
	中国語ⅢA	1			2						
	中国語ⅢB	1				2					
	中国語ⅣA ※2	1					2				
	中国語ⅣB ※2	1						2			
	ロシア語ⅠA	1	2								
	ロシア語ⅠB	1	2								
ロシア語ⅡA	1		2								
ロシア語ⅡB	1		2								
ロシア語ⅢA	1			2							
ロシア語ⅢB	1				2						
ロシア語ⅣA ※2	1					2					
ロシア語ⅣB ※2	1						2				
外国語第Ⅲ	独語ⅩⅠ ※2	1			2						
	独語ⅩⅡ ※2	1				2					
	仏語ⅩⅠ ※2	1			2						
	仏語ⅩⅡ ※2	1				2					
	韓国語ⅩⅠ ※2	1			2						
	韓国語ⅩⅡ ※2	1				2					
	スペイン語ⅩⅠ ※2	1			2						
	スペイン語ⅩⅡ ※2	1				2					
	イタリア語ⅩⅠ ※2	1			2						
	イタリア語ⅩⅡ ※2	1				2					
情報科目	情報基礎	1	1								
	情報科学 ※3	2		2							
健康・スポーツ科学	健康・スポーツ科学講義	2	2								
	健康・スポーツ科学実習Ⅰ	1	2								
健康・スポーツ科学	健康・スポーツ科学実習Ⅱ	1		2							
共通専門基礎科目※4	(略)										
その他必要と認める科目	総合科目Ⅰ										
	総合科目Ⅱ										

※1 教養原論は、全ての科目が正規配当となるわけではない。

※2 これらの外国語科目は、建築学科、市民工学科及び電気電子工学科対象の開設科目である。

※3 情報科学は、建築学科、市民工学科、電気電子工学科及び機械工学科対象の開設科目である。

※4 共通専門基礎科目は、各学科の履修科目一覧表に掲載している。

4. 授業科目の内容

※全学共通授業科目の授業科目の内容については、大学教育推進機構の発行する「全学共通授業科目授業概要集」を参照のこと。

Ⅲ 建筑学科

1. 教育の目指すもの

今日、地球温暖化対策が重要な課題となり、一方、わが国は少子高齢化の進展、人口の減少など、高度成長期とは根本的に異なる局面を迎えており、建築や地域空間のストックが重要性を増すと同時に、持続的発展を可能にする環境と社会の創造がますます大きな社会的要請となっている。このような状況のもとで、より安全で豊かな生活空間を創出し、これをあまねく市民が享受できる状態を実現し、また、有史以来の普遍的課題と現代的課題の両面に実践的にとりくむことが、今日における建築学の使命であると考えます。

建築学は人間生活の基盤である住宅や建築施設を創造する最も普遍的な学のひとつであるが、このような課題に応えるためには、「計画」・「構造」・「環境」という建築の基礎的学問領域を修めると同時に、これらを総合して現実的課題に対する具体的解答を導き出す「空間デザイン」の能力を備えた人材の養成が求められている。

建築学科では、神戸大学教育憲章に基づき、人間性・社会性の教育、国際性の教育、創造性の教育、専門性の教育、総合性の教育を学習・教育目標として、大きく変化する時代に的確に、また、総合的に対応できる人材の養成を目指して、専門性と総合性の結合した教育を行う。

建築学科では、大学院工学研究科建築学専攻を構成する4つの大講座に属する教員により教育が行われ、学生はいずれかの指導教員の下に卒業研究を行うことになる。

2. 構成と教育組織

講座名	教育研究分野	教授 (室番)	准教授 (室番)	助教 (室番)	助手 (室番)	技術職員 (室番)	事務職員 (室番)
空間デザイン	建築・都市デザイン	安田 丑作 (1E-302)	末包 伸吾 (1E-304)	栗山 尚子 (1E-301)		木山 正典 (1E-301)	橘 美保 (1E-101)
	住宅・コミュニティデザイン	重村 力 (N3-812)	三輪 康一 (1E-303)	浅井 保 (N3-818)	山口 秀文 (N3-813)	緒方 太 (建築防災実験室)	古井 裕子 (1E-101)
	構造デザイン	長尾 直治 (N3-716)	藤谷 秀雄 (1E-204)			石井 悦子 (N3-728)	木村 優子 (1E-101)
	建築マネジメント		大谷 恭弘 (1E-205)	藤永 隆 (1E-G07)			
建築計画 ・ 建築史	建築史・歴史環境論	足立 裕司 (1E-306)	黒田 龍二 (1E-307)	中江 研 (1E-305)			
	地域・住宅計画	塩崎 賢明 (N3-501)	山崎 寿一 (N3-815)				
	建築・都市安全計画	北後 明彦 (1E-309)	大西 一嘉 (1E-308)				
構造工学	構造的性能工学	田淵 基嗣 (N3-715) 孫 玉平 (1E-206)	田中 剛 (N3-717)				
	構造制御工学		福住 忠裕 (1E-207)				
	構造システム工学	谷 明勲 (N3-720)	難波 尚 (N3-727)	山邊友一郎 (N3-724)			
環境工学	音・光環境計画	森本 政之 (N3-509)	阪上 公博 (N3-504)	佐藤 逸人 (心理実験室)			
	熱・空気環境計画	松下 敬幸 (1E-202)	高田 暁 (1E-203)				
	都市環境・設備計画	森山 正和 (N3-810)		竹林 英樹 (N3-728)			

1E：建設棟，N3：自然科学研究科棟

3. 建築学科の学習・教育目標

建築学科の教育・研究は、さまざまな人間活動や地球環境時代の社会的要請に対応した建築のあり方、生活空間のあり方を考えるとともに、それを形成する技術・理論体系の構築を目指している。そのために、以下に示す学習・教育目標を掲げ、基礎学力から応用力をつけられるカリキュラムを編成している。下記のA～Eのそれぞれの目標に対応する必修科目、選択必修科目、選択科目が用意され、大学院へとつながる教育・研究体制が整えられている。

A. 人間性・社会性の教育	A 1 技術者倫理, 環境倫理	建築分野の社会及び環境への関わりの重要性と、建築家または建築技術者の果たすべき社会的責任を理解・自覚し、自ら判断・提言できる倫理性を養う。
	A 2 人間自身の理解	人間の尊厳や人間の知性、理性及び感性とそれらを包含した人間性への理解を高める。
	A 3 人間と社会集団の関係の理解	人間と社会や集団との関係性を理解し、社会性についての自覚を高める。
B. 国際性の教育	B 1 地球的視野の修得と涵養	異なる文化に対する深い理解力と、物事を地球的視野から考える能力を養う。
	B 2 多様な価値を理解する能力	物事を多面的な視点から把握し、分析・考察できる能力を養う。
	B 3 コミュニケーション能力	自己の考えを論理的、客観的に記述・説明でき、意見交換、討議が行える能力を養う。
C. 創造性の教育	C 1 課題発見の能力	好奇心をもって建築や社会に接し、その課題を自分で発見し、目標を設定できる能力を養う。
	C 2 課題解決の能力	課題を再構成し、情報収集・分析や学習・作業方針のプロセスが設定でき、課題を解決する能力を養う。
	C 3 自己管理の能力	自主的、継続的に学習でき、目標に向かって自己管理ができる能力を養う。
D. 専門性の教育	D 1 工学の基礎知識	工学の基礎となる数学、自然科学に関する知識と、図形及び情報リテラシーの知識と技術を修得する。
	D 2 包括的専門知識	建築の計画、構造・生産、環境の各分野における専門の基礎となる知識と技術を修得する。
	D 3 高度な専門知識	<ul style="list-style-type: none"> ・計画分野においては、造形および空間創造のためのデザイン能力、住宅・建築・地域を設計・計画するための専門知識を養う。 ・構造分野においては、建築の諸構造に関する専門知識、動的外力を受ける建築の挙動に関する専門知識を養う。 ・環境分野においては、建築の物理的環境に関する専門知識、建築設備工学に関する専門知識を養う。
E. 総合性の教育*	E 1 専門分野を統合する能力	卒業研究（卒業論文）を通して高度な専門性を備え、具体的な建築の課題を科学的に追究してゆく能力を養う。
	E 2 学術・技術・芸術を総合する能力	卒業研究（卒業設計）を通して、建築にかかわる学術・技術・芸術を総合的にデザインする能力を養う。
	E 3 理論と実践を統合する能力	卒業研究を通して、理論と実践の関係を総合的に把握する能力を養う。

* E 1, E 2 は卒業研究のうち、卒業論文、卒業設計の選択により、どちらか一方を適用する。

4. 建築学科履修科目一覧表（その1）

専門基礎および専門科目

（◎印は必修，○印は選択必修，無印は選択科目）

区分	選必修別	授業科目	単位	毎週の授業時間								担当教員	備考	
				1		2		3		4				
				前	後	前	後	前	後	前	後			
（ 専 門 基 礎 ） 科 目	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	微分積分学	2	2										
		微積分演習	1		2									
		多変数の微分積分学	2		2									
		線形代数学Ⅰ	2	2										
		線形代数学Ⅱ	2		2									
		数理統計学	2			2								
		物理学C 1	2	2										
		物理学C 2	2		2									
		物理学B 2	2			2								
		素材化学Ⅰ	2	2										
		図学	2	2										
	図学演習	1		2										
	○	複素関数論	2			2								
		常微分方程式論	2			2								工学部 共通授業 科目
		フーリエ解析	2			2								
		熱・統計力学	2							2				
	◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎	卒業研究	10							6	24	建築学科教員		
		建築情報工学Ⅰ	1			2						建築学科教員		
		建築情報工学Ⅱ	1			2						建築学科教員・尾瀬 [Ⓢ]		
建築倫理		1							2		建築学科教員			
建築・住居論		2	2								安田・重村			
設計演習Ⅰ		2			8						建築学科教員			
設計演習Ⅱ		2				8					建築学科教員			
設計演習Ⅲ		3					12				建築学科教員，橋本 [Ⓢ] ，吉羽 [Ⓢ] ，李 [Ⓢ]			
構法システム		2	2								長尾			
構造力学A		2		2							難波			
構造力学B		2			2						田中（剛）			
建築素材論		2		2							菅 [Ⓢ]			
ライフサイクルマネジメント		2							2		大谷・谷			
造形演習Ⅰ		1	2								藤原 [Ⓢ] ，藤岡 [Ⓢ]			
造形演習Ⅱ		1		2							藤原 [Ⓢ] ，藤岡 [Ⓢ]			
建築演習		1	2								建築学科教員			
特別演習		1					4				建築学科教員			
学外演習		1									建築学科教員			
測量学	2							2		中田 [Ⓢ]				
○ ◎ ○ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎	都市・住宅史	2		2							黒田・山崎			
	建築計画	2		2							大西・北後			
	住宅設計論	2			2						山崎			
	施設計画論	2				2					安田・三輪・山崎			
	日本建築史	2			2						黒田			
	西洋建築史	2				2					足立			
	都市計画	2				2					三輪			
	居住環境論	2					2				塩崎			
	建築防災	2						2			北後			
	環境造形論	2						2			重村			
	建築設計論（※）	2							2		末包			
	計画演習Ⅰ（※）	3							12		計画系教員・遠藤 [Ⓢ] ・與謝野 [Ⓢ]			
	計画演習Ⅱ	3								12	計画系教員・柏木 [Ⓢ] ・武田 [Ⓢ]			
	近代建築史	2					2				足立			
	都市設計	2						2			安田			
	まちづくり論	2							2		後藤 [Ⓢ] ・森崎 [Ⓢ]			
	ランドスケープデザイン	2							2		増田 [Ⓢ]			
	建築・都市・環境法制	2							2		浅野 [Ⓢ]			

4. 建築学科履修科目一覧表（その2）

専門基礎および専門科目

（◎印は必修，○印は選択必修，無印は選択科目）

区分	選必修別	授業科目	単位	毎週の授業時間								担当教員	備考	
				1		2		3		4				
				前	後	前	後	前	後	前	後			
（ 専 門 基 礎 ）	構 造	◎ 建築材料学	2			2							田淵	
		◎ 構造力学C	2				2						大谷	
		○ 構造演習Ⅰ	1			2							構造系教員	
		○ 構造演習Ⅱ	1				2						構造系教員	
		◎ 建築鋼構造学	2				2						田中（剛）	
		◎ 建築コンクリート構造学	2				2						孫	
		◎ 振動学	2					2					藤谷	
		○ 防災構造工学	2			2							藤谷	
		○ 構造設計学	2					2					田淵・谷	
	系	○ 建築耐震構造	2						2				福住	
		○ 構造計画学	2						2				谷	
		システム構造解析	2					2					大谷	
		板の力学	2						2				福住	
		建築複合構造学	2							2			孫	
		◎ 建築生産学	2					2					長尾・福住	
		建築構法	2						2				阪井 ^非 ・吉澤 ^非	
		構造設計Ⅰ（※）	2						6				構造系教員	
		構造設計Ⅱ	2							6			構造系教員	
○ 構造材料実験	2					2					構造系教員			
専 門 科 目	環 境 系	◎ 建築環境工学Ⅰ	2			2							森本	
		◎ 建築環境工学Ⅱ	2			2							松下	
		◎ 建築環境工学Ⅲ	2				2						森山	
		○ 音環境計画	2					2					阪上	
		○ 都市環境計画	2					2					森山	
		○ 熱環境計画	2				2						高田（暁）	
		建築設備システム	2						2				未定	
		建築環境設計（※）	2						2				北村 ^非 ・環境系教員	
		○ 建築環境工学演習	1						2				環境系教員	
		建築環境設計演習（※）	1						2				北村 ^非 ・環境系教員	
そ の 他		特別講義Ⅰ	2										注3	
		特別講義Ⅱ	2											
		特別講義Ⅲ	2											
		特別講義Ⅳ	1											
		特別講義Ⅴ	1											
他		その他必要と認める専門科目										その都度定める		

注1 非印は非常勤講師。◎印は必修，○印は選択必修，無印は選択科目を示す。

2 ※印は重点プログラム科目。（「5. 履修上の注意」（2）-5）を参照

3 開講時期は定めていない科目。その都度，掲示する。「学外演習」は事前申請により実施した成果をもとに承認を得て履修登録することができる。

4 専門基礎科目1のシラバスは大学教育推進機構の要覧，専門基礎科目2は末尾にある工学部共通科目の項をそれぞれ参照。

4. 履修科目一覧表（その3）

週授業時間数

	計	1		2		3		4	
		前	後	前	後	前	後	前	後
◎ 必修	90	4	4	20	24	6	0	8	24
○ 選択必修	64	8	14	8	4	22	8	0	0
選 択	88	6	2	4	4	8	34	30	0
合 計	242	18	20	32	32	36	42	38	24

単位数

	計	1		2		3		4	
		前	後	前	後	前	後	前	後
◎ 必修	55	4	4	13	17	6	0	1	10
○ 選択必修	50	8	12	7	3	13	7	0	0
選 択	55	4	1	4	4	5	20	17	0
合 計	160	16	17	24	24	24	27	18	10

注 特別講義Ⅰ～Ⅲ（各2単位，選択），特別講義Ⅳ，Ⅴ（各1単位，選択）および学外演習（1単位，選択）は含んでいない。

5. 履修上の注意

(1) 履修規則

- 1) 専門科目総準備単位 169単位
- 2) ◎印は必修科目, ○印は選択必修科目, 他は選択科目である。
- 3) 学生が1年間に履修登録可能な単位数は, 工学部規則第6条に規定されている単位を上限とする。(工学部学生便覧参照)
- 4) 学生の卒業に必要な単位は126単位以上とする。その内訳は次のとおりである。(工学部規則第5条, 別表第2)
- 5) 他学科または他学部の専門科目の授業科目中, 当学科が認めた場合は, 当学科取得単位の取り扱いは, 工学部規則第7条, 及び第8条に従う。
- 6) 外国人留学生の外国語科目の必要修得単位の取り扱いについては, 工学部内規に従う。

表1 卒業に必要な単位数

授業科目の区分等		授業科目名等	必要単位数		備 考
教 養 原 論		別表第1イに掲げる授業科目	16		人文, 社会系科目から12単位以上, 自然系科目から4単位以上を修得*
外 国 語 科 目	外国語第Ⅰ	英語リーディングⅠ 英語リーディングⅡ 英語リーディングⅢ 英語オーラルⅠ 英語オーラルⅡ 英語オーラルⅢ	1 1 1 1 1 1	6	
	外国語第Ⅱ	独語ⅠA, 仏語ⅠA, 中国語ⅠA, ロシア語ⅠA 独語ⅠB, 仏語ⅠB, 中国語ⅠB, ロシア語ⅠB 独語ⅡA*, 仏語ⅡA*, 中国語ⅡA*, ロシア語ⅡA 独語ⅡB*, 仏語ⅡB*, 中国語ⅡB*, ロシア語ⅡB	1 1 1 1	4	独語, 仏語, 中国語及びロシア語のうちから1科目を選択すること。 *独語, 仏語及び中国語のⅡA及びⅡBについては必修であるが選択した語学のSA及びSBで代替することを認める。
情 報 科 目		情報基礎	1	1	
健康・スポーツ科学		健康・スポーツ科学実習Ⅰ	1	1	
選 択 科 目 (全学共通授業科目)		英語アドバンストA 英語アドバンストB 英語アドバンストC 独語ⅢA, 仏語ⅢA, 中国語ⅢA, ロシア語ⅢA 独語ⅢB, 仏語ⅢB, 中国語ⅢB, ロシア語ⅢB 独語ⅣA, 仏語ⅣA, 中国語ⅣA, ロシア語ⅣA 独語ⅣB, 仏語ⅣB, 中国語ⅣB, ロシア語ⅣB 独語XⅠ, 仏語XⅠ, 韓国語XⅠ, スペイン語XⅠ, イタリア語XⅠ 独語XⅡ, 仏語XⅡ, 韓国語XⅡ, スペイン語XⅡ, イタリア語XⅡ 健康・スポーツ科学講義 健康・スポーツ科学実習Ⅱ 情報科学	98		1. 外国語(9単位), 健康・スポーツ科学(3単位)及び情報科学(2単位)を修得した場合は, 必要修得単位数に算入する。ただし, 上限は2単位とする。 1) 独語, 仏語, 中国語及びロシア語のⅢA, ⅢB, ⅣA及びⅣBについては, 外国語第Ⅱの必修で選択した語学のみ履修を認める。 2) 独語, 仏語, 韓国語, スペイン語及びイタリア語のXⅠ及びXⅡについては, 外国語第Ⅱの必修で選択していない語学を選択すること。 3) 専門科目は, 96単位以上修得すること。 2. 専門科目について(共通専門基礎科目及び専門基礎科目を含む) 1) 必修科目55単位(含む卒業研究10単位)及び選択必修科目32単位を含む96単位以上を修得すること。 2) 共通専門基礎科目及び専門基礎科目から12単位以上修得すること。
専 門 科 目		授業要覧 p.18~19の一覧表に掲げる授業科目			
合 計			126		

*人文, 社会系科目とは, 「授業概要集」の区分のうち「人間形成と思想」「文学と芸術」「歴史と文化」「人間と社会」「法と政治」「経済と社会」「総合教養」に含まれる科目を指し, 自然系科目とは同上区分の「数理と情報」「物質と技術」「生命と環境」に含まれる科目をいう。

(2) 建設学科履修内規

1) 卒業研究申請要件について（工学部規則第7条2項）

卒業研究の申請をしようとする者は、表2に示す単位を修得していること。

表2 卒業研究の申請に必要な単位数

授 業 科 目	単 位 数
教 養 原 論	16単位（人文・社会系科目から12単位以上、自然系科目から4単位以上を修得）*
外 国 語 科 目	10単位
情 報 科 目	1単位（「情報基礎」を修得）
健 康 ・ ス ポ ー ツ 科 学	1単位（「健康・スポーツ科学実習Ⅰ」を修得）
専 門 基 礎 お よ び 専 門 科 目	74単位（建築学科履修科目一覧表に記載された科目から修得する。 必修科目28単位、必修科目及び選択必修科目の合計62単位以上を含む。）
合 計	102単位以上

*人文・社会系科目とは、「授業概要集」の区分のうち「人間形成と思想」「文学と芸術」「歴史と文化」「人間と社会」「法と政治」「経済と社会」「総合教養」に含まれる科目を指し、自然系科目とは同上区分の「数理と情報」「物質と技術」「生命と環境」に含まれる科目をいう。

2) 履修科目の登録の上限を超えて登録することができる者の基準について（「学生便覧」参照）

次の要件を満たした場合は、2年次生及び3年次生に限り、当該年度における履修科目の登録の上限を超えて登録することができる。

「前年度に42単位以上を取得し、その科目数の70%以上が優であって、可が4単位以下であること。」

この登録を希望する者は、「履修科目の上限超過登録申請書」を所定の期日までに学科へ提出し審査を受けなければならない。審査の結果、要件を満たしていると認定された者に限り、当該年度の履修科目の上限を超えた登録が認められる。

3) 早期卒業に関する認定基準について

学生便覧における「早期卒業の認定基準に関する内規」および「早期卒業の認定基準に関する学科別認定基準等について」を参照すること。なお、早期卒業を希望するものは、入学1年後所定の期日までに学科に届け出を行い、教学委員の指導を受けなければならない。

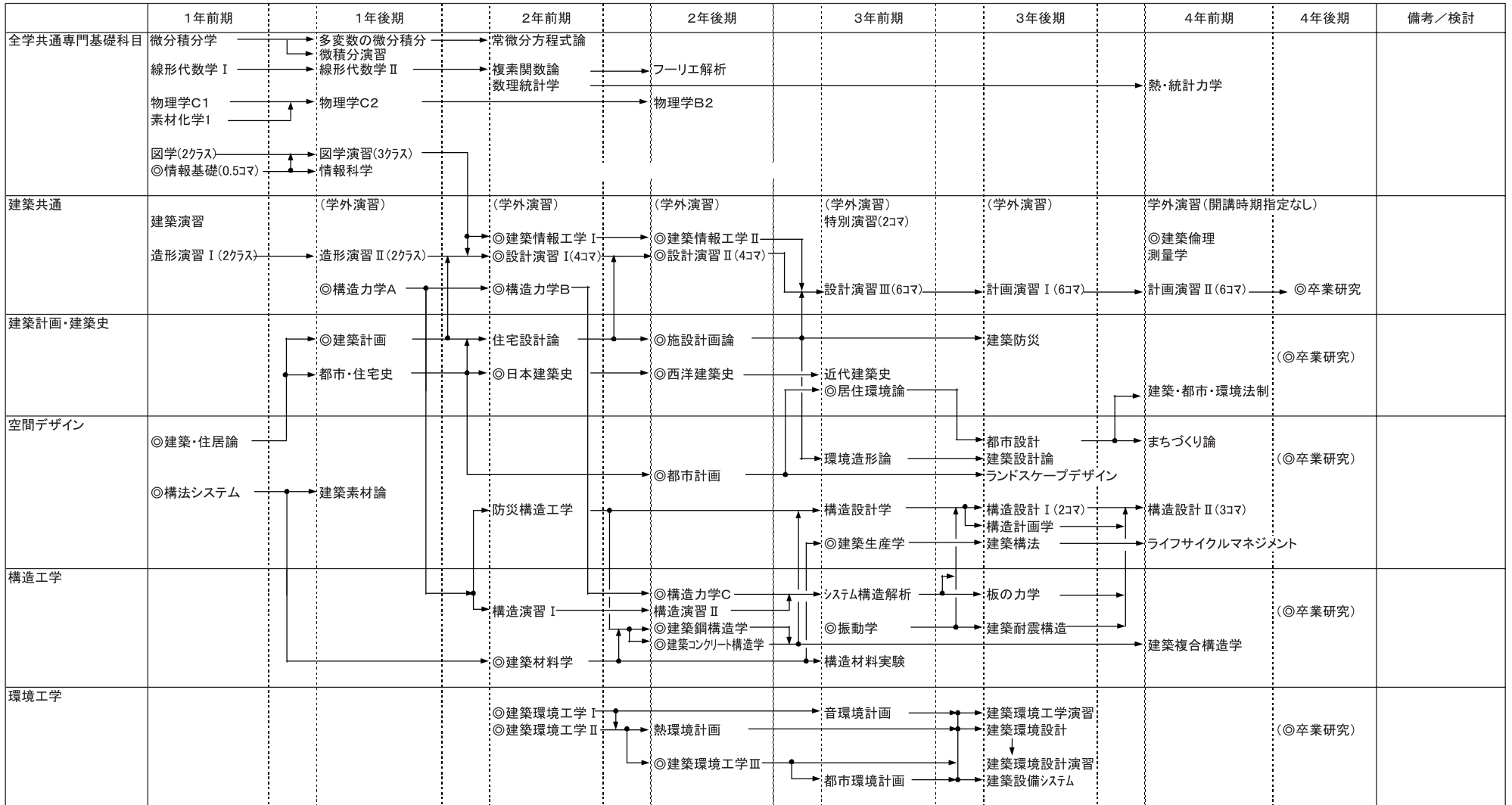
4) 3年後期の「重点プログラム」について

3年進学者は3年後期に下記の3つの重点プログラムから1つを選択して、各プログラムが指定する授業科目を履修すること。（シラバス及び、「6. 各授業科目の関係」の表を参照。）

「計画重点プログラム」・「構造重点プログラム」・「環境重点プログラム」

各プログラムの定員は35名を上限とし、配属は履修者の希望によって決定する。定員を上回る希望者がある場合は、3年前期までの全科目の成績を考慮して選考を行う。事前にガイダンス等で詳細を説明する。

6. 各授業科目の関係



全学共通科目
(上記以外)

教養原論
教養原論
◎外国語第一
◎外国語第一
◎外国語第二
◎外国語第二
◎健康スポーツ実習 I
健康スポーツ講義

教養原論
教養原論
◎外国語第一
◎外国語第一
◎外国語第二
◎外国語第二
◎健康スポーツ実習 II

教養原論
教養原論
◎外国語第一
◎外国語第一
外国語第二

教養原論
教養原論
外国語第一(アドバンスト)
外国語第一(アドバンスト)
外国語第二
外国語第三

外国語第二(アドバンスト)

外国語第二(アドバンスト)

卒業研究		Graduation Research	
学期区分	通年	区分・単位	必修 10単位
担当教員	建築学科教員		
<p>授業の目的： 卒業研究は、学習・教育の総まとめであり、その目的は、各自の研究テーマに関連した事前の調査、研究計画の立案、研究結果の整理、分析と考察、そしてプレゼンテーションにいたる、一連の研究の方法を実習し体得することである。なお、卒業研究は卒業論文もしくは卒業設計のどちらか一方を選択して行う。</p> <p>到達目標： 卒業研究に着手する際に、指導教員の研究室に配属される。ここでは、教員による個別指導や学生による自主的な勉学、共同研究や研究室内で人間関係を通じた人間性、社会性の修得、研究テーマの設定から研究の具体的な進め方、研究結果のとりまとめとそのプレゼンテーションといった、研究にかかわる一連の流れを発展させていく能力の滋養を目標としている。さらに卒業研究終了時の研究発表会は、創造性の教育、総合性の教育の成果と卒業研究の学術的成果を確認する場となる。</p> <p>授業内容： 3年次までの講義や演習等で習得してきた知識をもとに、卒業研究では、それぞれが独自性ある研究テーマに取り組み、建築学の間口の広さとともに奥行きを深さを実感することとなる。研究は、配属された研究グループにて行う。テーマの設定や研究の進め方については、研究グループの教員との討議を通じて決定される。3年次までの座学的な進め方ではなく、学生による主体的な取り組みが強く求められることに留意する必要がある。 研究グループと研究の内容は、3年次の後期に発表される。研究成果は、「論文」もしくは「設計」、および「要旨」として提出し、発表会においてプレゼンテーションを行う必要がある。</p> <p>授業の進め方： 学生は1つの研究グループに所属して指導を受ける。所属する研究グループによって、研究テーマや方法などが異なるが、日々の研究を中心に、文献講読や各学生による研究計画等の発表と討議を行うことが多い。</p> <p>成績評価方法： 所属する研究グループにおける研究への取りくみとともに、卒業研究における下記の諸点を総合的に評価する。 1) 調査する能力 2) 課題や問題を提起する能力 3) 研究計画を立案する能力 4) 研究にかかわる諸課題を解決する能力 5) 結果等を整理・考察する能力 6) 文章や図面等での確にプレゼンテーションする能力</p> <p>履修上の注意： 卒業研究を申請しようとする学生は、別途、内規により定めた申請条件を満たし、研究グループに配属されること。</p>			
<p>教科書・参考文献など： オフィスアワー、学生へのメッセージ： オフィスアワーの日は授業開始時に通知します。</p>			

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
					◎							◎	◎	◎

建築情報工学 I Architectural Graphic Information Processing I														
学期区分			前期			区分・単位			必修 1 単位					
担当教員			建築学科教員											
<p>授業の目的： 建築に関連する情報収集のための基礎的手法をはじめ、コンピューターを用いて様々な情報を処理し可視化する基礎的手法を表計算ソフト等の利用を通じて習得する。</p> <p>到達目標： 各種ソフトを用いて様々な建築情報の統計処理とそれを可視化する具体的な手法を習得すると共に、集団での討議、発表を通じてプレゼンテーション能力を身につける。</p> <p>授業内容： 上記の目的および到達目標を達成するため、本講義では、コンピューターやそのソフトを実際に利用することを中心に進める。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス ■情報収集・処理Ⅰ：表計算ソフトを用いて、建築に関わる数値計算や数値をグラフ化する手法を習得する。 <ol style="list-style-type: none"> 2. 表計算ソフトでできること 3. グラフ化 4. 様々なグラフの作成方法とプレゼンテーション手法 ■情報収集・処理Ⅱ：建築学に関連するアンケート調査の企画、集計、分析を行う。 <ol style="list-style-type: none"> 5. 建築情報の利用と分析方法 6. アンケート調査の方法と調査票の設計 7. エクセルを用いたアンケートの単純集計 8. エクセルを用いたアンケートのクロス集計 9. 図表の作図方法 10. 調査結果のまとめと考察、グループ討論 ■情報収集・処理Ⅲ：収集した環境に関わる情報の収集とその分析を行う。 <ol style="list-style-type: none"> 11. 環境に関わる情報とその収集方法 12. 環境情報の収集 13. 環境情報の分析 14. 分析結果のまとめと考察、グループ討論 ■演習成果の発表・講評 <ol style="list-style-type: none"> 15. 演習で作成した図表を全員のまえでプレゼンテーションし、講評する（発表会） <p>授業の進め方： 具体的な進め方については、開講時・課題説明時に行う。</p> <p>成績評価方法： 上記の課題により評価する。（単位修得には課題全てを提出する必要がある）</p> <p>履修上の注意： 「図学」、「図学演習」を受講していること。本講義の受講に当たっては、各自のアカウントおよびパスワードが必要である。（アカウントの取得方法は入学時ガイダンスの資料を参照すること）</p>														
<p>教科書・参考文献など：別途指示する</p> <p>オフィスアワー・学生へのメッセージ： オフィスアワーの日は授業開始時に通知します。 建築に関連する分野でも、コンピューターを活用して様々な情報を処理することは、今後ますます増えてくるでしょう。この授業では、コンピューターを活用して情報を処理する場合に必要な基礎的な技術を学んでください。なお、コンピューターを利用する場合に必要な基本的なルールについても示しますので、授業中にコンピューターを利用する際にはルールを遵守して下さい。</p>														

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
							○		◎					

建築情報工学Ⅱ Architectural Graphic Information Processing Ⅱ														
学期区分			後期			区分・単位			必修 1単位					
担当教員			尾瀬耕司・建築学科教員											
<p>授業の目的： 近年、建築物やその周辺環境などの計画や設計にあたっては、その支援ツールとしてCAD (Computer Aided Design) の重要性が高まっている。本演習は、建築学におけるコンピューター利用技術について理解し、特にCADに関する基礎的な操作法を習得し、CADソフトを用いた空間表現力の向上することを目的とする。</p> <p>到達目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> ① コンピューター利用技術及びCADに関する応用的事項を習得する。 ② CADソフトを用いた2次元表現法に関する基礎的な手法を、具体的な建築物の作図を通じて習得する。 ③ CADソフトを用いて、様々な情報を立体的（3次元）に可視化する手法とその基礎的概念を理解する。 ④ 上記で作成したCADによる図面をプレゼンテーション用に加工し空間表現力を向上させる。 <p>授業内容： 上記の目的および到達目標を達成するため、本講義では、設計演習Ⅱと連動させつつ、設計課題の活用も視野に入れ、コンピューターやそのソフトを実際に利用することを中心に進める。</p> <p>■ 2次元CAD技術の習得と、演習例を用いた活用方法の理解 (一木構造のCAD化を通じて)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 建築情報工学Ⅰで習得した2次元CAD操作技術の向上および演習課題説明（講義） 2. 課題の平面図をCAD化する 3. 同上 4. 3次元のCAD操作技術の解説と、作成した平面図を3次元化する 5. 同上 <p>■ 各自が選んだ著名な建築作品の平面図と断面図のCAD化を通じて図面を読む</p> <ol style="list-style-type: none"> 6. 課題説明および立体構成の解説について（講義） 7. 平面図をCAD化する 8. 同上 9. 断面図をCAD化する 10. 同上 <p>■ 作成した建築作品の平面図と断面図を活用し、3次元化を通して空間・設計コンセプトを読む</p> <ol style="list-style-type: none"> 11. 建築作品を3次元化する 12. 同上 13. 立体構成のCAD化 14. 同上、およびプレゼンテーション作業 15. プレゼンテーション（講評） <p>授業の進め方： 具体的な進め方については、開講時・課題説明時に行う。</p> <p>成績評価方法： 上記の課題によりCADの基本的な操作法の習熟度とCADを用いた空間表現力から評価する。(単位修得には課題全てを提出する必要がある)</p> <p>履修上の注意： 「建築情報工学Ⅰ」と一体となった教育カリキュラムとなっているので、「建築情報工学Ⅰ」を受講していること。また、「図学」、「図学演習」を受講していること。「建築情報工学Ⅰ」と同様に受講に当たっては、各自のアカウント及びパスワードが必要である。</p>														
<p>教科書・参考文献など：別途指示する</p> <p>オフィスアワー・学生へのメッセージ： オフィスアワーの日は授業開始時に通知します。 建築に関連する分野でも、コンピューターを活用して様々な情報を処理することは、今後ますます増えてくるでしょう。この授業では、コンピューターを活用して情報を処理する場合に必要な基礎的な技術を学んでください。</p>														

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号はP.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
						○			◎					

建築倫理		Architectural Ethics														
学期区分		前期			区分・単位			必修 1単位								
担当教員		建築学科教員														
<p>授業の目的： 本講義は、建築専門家として直面する倫理問題についてその概要を知り、自分が背負う責任の重さを知るとともに、どう対処すべきかを考えることを目的とする。</p> <p>到達目標： ・建築倫理に関する議論の中で用いられる諸概念について理解する。 ・建築専門家が直面する様々な倫理的・社会的問題としてどのようなものがあるかを理解する。 ・建築倫理の議論で用いられる典型的なケースについて理解する。</p> <p>授業内容： 1. ガイダンス；JABEE について、特別講義 2. 講義（1） 3. 講義（2） 4. グループ討論・発表準備（1） 5. グループ討論・発表準備（2） 6. 発表（1） 7. 発表（2）</p> <p>授業の進め方： 「建築倫理」について講義を受講した後に、10名程度のグループに分かれ、各グループを担当する教員の指導のもと、題材を選定し討論する。毎回、指示された書式に従い、小レポートを提出すること。</p> <p>成績評価方法： 提出されたレポートおよび最終的な発表を、授業の目的に則して評価する。</p> <p>履修上の注意：</p>																
<p>教科書・参考文献など： 「建築倫理用教材」、日本建築学会編、日本建築学会（2003、10）</p> <p>学生へのメッセージ： 建築と社会と人間の関係を考える講義です。</p>																

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
◎														

建築・住居論		General Theory of Architecture and Dwelling																											
学期区分	前期	区分・単位	必修 2単位																										
担当教員	安田丑作, 重村 力																												
<p>授業の目的: 建築学の原点を理解し, 建築と住居の学習研究の方法について学ぶ。</p> <p>到達目標: 住居に関する基礎理論の理解, 建築学とデザインの関係, 及び社会的位置づけの理解</p> <p>授業内容:</p> <table border="0"> <tr><td>建築と住居</td><td>(重村)</td></tr> <tr><td>住居と定住</td><td>(重村)</td></tr> <tr><td>さまざまな住居 (気候風土と住居)</td><td>(重村)</td></tr> <tr><td>さまざまな住居 (社会と住居)</td><td>(重村)</td></tr> <tr><td>集まって住む形</td><td>(重村)</td></tr> <tr><td>住宅のデザイン</td><td>(重村)</td></tr> <tr><td>建築をいかに学ぶか—学として術として—</td><td>(安田) 1回</td></tr> <tr><td>建築デザインの基礎概念—空間のデザイン—</td><td>(安田) 1回</td></tr> <tr><td>建築デザインの手法—プログラムと空間構成—</td><td>(安田) 1回</td></tr> <tr><td>建築から都市へ—建築と都市の歴史に学ぶ—</td><td>(安田) 2回</td></tr> <tr><td>現代建築の諸相—20世紀の建築デザイン—</td><td>(安田) 1回</td></tr> <tr><td>建築と社会—建築に携わる人々—</td><td>(安田) 1回</td></tr> </table> <p>授業の進め方: 建築と住居に関して基礎的知見を講述する。適宜文献を紹介し, 見学ないしはスケッチする物を紹介する。適宜小レポートの提出を求める。</p> <p>成績評価方法: 提出物, 試験等による。</p> <p>履修上の注意: 特になし</p>						建築と住居	(重村)	住居と定住	(重村)	さまざまな住居 (気候風土と住居)	(重村)	さまざまな住居 (社会と住居)	(重村)	集まって住む形	(重村)	住宅のデザイン	(重村)	建築をいかに学ぶか—学として術として—	(安田) 1回	建築デザインの基礎概念—空間のデザイン—	(安田) 1回	建築デザインの手法—プログラムと空間構成—	(安田) 1回	建築から都市へ—建築と都市の歴史に学ぶ—	(安田) 2回	現代建築の諸相—20世紀の建築デザイン—	(安田) 1回	建築と社会—建築に携わる人々—	(安田) 1回
建築と住居	(重村)																												
住居と定住	(重村)																												
さまざまな住居 (気候風土と住居)	(重村)																												
さまざまな住居 (社会と住居)	(重村)																												
集まって住む形	(重村)																												
住宅のデザイン	(重村)																												
建築をいかに学ぶか—学として術として—	(安田) 1回																												
建築デザインの基礎概念—空間のデザイン—	(安田) 1回																												
建築デザインの手法—プログラムと空間構成—	(安田) 1回																												
建築から都市へ—建築と都市の歴史に学ぶ—	(安田) 2回																												
現代建築の諸相—20世紀の建築デザイン—	(安田) 1回																												
建築と社会—建築に携わる人々—	(安田) 1回																												
<p>教科書・参考文献など: 授業中に提示する。</p> <p>オフィスアワー, 学生へのメッセージ: オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 質問や相談等については講義中に提示する。</p>																													

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目 (表中の記号は P.17の表を参照のこと)

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
			◎	○						○				

設計演習 I		Exercise of Architectural Design and Planning I			
学期区分	前期	区分・単位	必修 2単位		
担当教員	建築学科教員				
<p>授業の目的： 設計演習 I では、設計の基礎となる製図法の基本事項を講述するとともに、各種建築物の図面コピーを通じた演習、および小規模建築物（小事務所）の設計演習を行う。設計図面を的確に読解して建築的課題を発見し、正確に描く技術を修得して創造的な設計の基礎を習得することを目的とする。</p> <p>到達目標： 製図法に則って、建築設計の一般図である平面図、立面図、断面図や透視図が作成ができる基礎知識、基礎技術を獲得し、簡単な小規模建物の創造的な設計ができる設計能力を身に付けることを目標とする。</p> <p>授業内容： 1. 製図法（RC 事務所の図面コピー、透視図） 平面図、立面図、断面図、詳細図、透視図 この課題を通じて、製図法の基本と設計図面を的確に読解し、正確に描く技術を修得する。また透視図は図学で得た透視図の基本知識をもとにして、図面作成を行い、レタリングやレイアウトなどにも工夫することによって作品を完成させる。この課題を通じて、空間表現技法を修得する。</p> 2. 事務所設計（小規模建築の設計） 製図法で得た知識、技法を用いて小規模な事務所を設計する。敷地、規模、構造などの基本条件が与えられた中で、学生一人ひとりが個性的な事務所建築を設計する。この課題を通じて、設計のための諸条件・問題の解決能力、空間創造のためのデザイン能力を養う。 <p>授業の進め方： 担当教員、支援スタッフ、ティーチングアシスタント（TA：大学院生）がチームを組んで、スタジオ形式で指導を行なう。課題によっては現地見学を行なう。</p> <p>成績評価方法： 課題毎に図面の仕上がり、課題意図に対する達成度、授業中の小課題等を総合して担当教員が評価し、全課題の評点を平均して最終評価とする。課題未提出は0点、提出が遅れたものは減点の対象となる。</p> <p>履修上の注意： 1) 製図室で図面作成作業を行ない、指導を受けること。 2) 図面、成果品の提出期限を厳守のこと。 3) すべての課題を提出することが単位取得の基本条件となる。</p>					
<p>教科書・参考文献など： 「設計演習 I, II 参考資料集」神戸大学工学部建築学科、購入方法はアナウンスします。 「第2版 コンパクト建築設計資料集成」日本建築学会編、丸善</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知する。 自分の机、学年のスタジオが与えられているので、責任をもって清掃や環境整備に取り組むこと。</p>					

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
						◎	◎	◎						

設計演習Ⅱ		Exercise of Architectural Design and Planning Ⅱ													
学期区分	後期	区分・単位	必修									2単位			
担当教員	建築学科教員														
<p>授業の目的： 設計演習Ⅱでは、設計演習Ⅰに引き続き、各種建築物の図面コピーを通じた演習、および小規模建築物（住宅）、さらに地域図書館の設計演習を行なう。住宅から地域図書館という設計・計画の基礎から応用にいたる課題を通じて、設計図面の読解と描く技術を養い、建築的課題を発見するとともに創造的な設計を行いうる能力を獲得することを目的とする。</p> <p>到達目標： 木構造の平面図、立面図、断面図と詳細図が作成できる基礎知識、作成技法を修得し、住宅や地域図書館に関する基本的な設計能力から一歩進んだ創造的能力を獲得することを目標とする。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 製図法（木造住宅）と住宅設計 製図法では、平面図、立面図、断面図、詳細図の作成を行い、木構造の基本と設計図面を的確に読解し、正確に描く技術を修得する。 製図法で得た知識、技法を用いて住宅を設計する。ここでは敷地と基本的な設計条件が与えられ、学生一人ひとりが自由に住宅建築を設計する。この課題を通じて、課題作品を完成させるための時間管理や問題解決能力、空間創造のためのデザイン能力を養う。 2. 地域図書館の設計 住宅に比べ、計画・設計上の難易度が高い地域図書館を設計する。ここでは、上記での能力を養うとともに、環境を読み解く力や参考事例など資料の収集とその分析力を養う。 <p>授業の進め方： 担当教員、支援スタッフ、ティーチングアシスタント（TA：大学院生）がチームを組んで、製図指導を行なう。本演習では少人数（30人程度）グループによるスタジオ形式の指導を行なう。またグループ単位での現地調査、作品事例発表会、学年全体での作品講評会など、グループ（集団）活動や発表・コミュニケーション能力の向上にも配慮した指導を行なう。</p> <p>成績評価方法： 課題毎に図面の仕上がり、課題に対する達成度、授業中の小課題等を総合して担当教員が評価し、全課題の評点を平均して最終評価とする。課題未提出は0点、提出が遅れたものは減点の対象となる。</p> <p>履修上の注意：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 製図室で図面作成作業を行ない、指導を受けること。 2) 図面、成果品の提出期限を厳守のこと。 3) すべての課題を提出することが単位取得の基本条件となる。 															
<p>教科書・参考文献など： 「設計演習Ⅰ、Ⅱ 参考資料集」神戸大学工学部建築学科、購入方法はアナウンスします。 「第2版 コンパクト建築設計資料集成」日本建築学会編、丸善</p> <p>オフィスパワー、学生へのメッセージ： オフィスパワーの日時は授業開始時に通知します。 図面で理解した建物が、実際にはどうなっているか、その構造、ディテール、仕上げなどを現実の建物をよくみて歩き、学習してください。その他、自分の机、学年のスタジオが与えられているので、責任をもって清掃や環境整備に取り組むこと。</p>															

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号はP.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
						◎	◎	◎						

設計演習Ⅲ		Exercise of Architectural Design and Planning Ⅲ										
学期区分	前期	区分・単位	選択必修									3単位
担当教員	建築学科教員，橋本健治，吉羽逸郎，李 暎一											
<p>授業の目的： 設計演習Ⅲでは，設計演習Ⅰ，設計演習Ⅱおよび関連専門講義で修得した知識を総合化し，デザイン・造形及び空間創造のための専門能力を養うことを目的とする。ここでは，演習を通じて，建築設計の進め方を修得し，多様な機能の建築物の設計ができる専門能力を身に付け，専門的知識を縦横に駆使して総合的な技術に高める基礎づくりを行う。</p> <p>到達目標： 設計演習Ⅲでは，与えられた課題に対して立地環境の特徴を把握し，必要諸室空間を一つの建築としてまとめあげる設計方法や空間構成力を修得する。さらに作品として，図面，模型，写真，文章などを総合した図面表現，口頭発表を通じて表現能力，伝達能力を高める。</p> <p>授業内容： 第1課題は，比較的大規模で機能も複雑な地域施設の設計を行う。ここでは設計コンセプトの設定から敷地計画，建物の設計，模型製作，図面表現にいたる一連の設計方法，図面作成技術を取得し，自分の建築作品を完成させる。第2課題は，現場で実務を行なう建築家を講師に迎え，少人数で双方向的な設計教育を行なう。ここでは講師から個性ある課題が与えられ，総合的なデザイン能力を研磨する。各課題終了後，作品講評会を行い，デザイン系の教員，非常勤講師，学生が一堂に介して討論する。 第2課題は年度により異なるが，平成18年度の課題は，以下の通り。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 保育所設計 2. グループ別課題－学外講師課題 <ol style="list-style-type: none"> A) 渡来人×渡航人「多文化共生中心」(展示，交流，庭園等の複合施設) B) 青年の城(若者の交流施設) C) デザインの過程(process)を重視する建築設計(まちの駅+地域コミュニティ機能) <p>授業の進め方： 担当教員，支援スタッフ，ティーチングアシスタント(TA：大学院生)がチームを組んで，製図指導を行なう。ここでは少人数(30人程度)グループによるスタジオ形式の指導を行ない，現地調査，計画案の発表会，学年全体での作品講評会など，発表・コミュニケーション能力の向上にも配慮した指導を行なう。</p> <p>成績評価方法： 課題毎に図面の仕上がり，課題に対する達成度，授業中の小課題等を総合して担当教員が評価し，全課題の評点を平均して最終評価とする。課題未提出は0点，提出が遅れたものは減点の対象となる。</p> <p>履修上の注意：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 製図室で図面作成作業を行ない，指導を受けること。 2) 図面，成果品の提出期限を厳守のこと。 3) すべての課題を提出することが単位取得の基本条件となる。 												
<p>教科書・参考文献など： 各種建築物の実例集，課題ごとに参考文献等を紹介する。 「第2版 コンパクト建築設計資料集成」日本建築学会編，丸善</p> <p>オフィスアワー，学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 演習を通じて習得できる，調査の考え方，課題設定，情報収集の方法，計画立案に至る一連のプロセスは，将来計画，デザインの専門分野に携わらないとしても貴重です。演習ではスケジュール管理をはじめとする自己管理能力が問われます。その他，スタジオ棟の環境管理，環境整備に取り組むことも期待しています。</p>												

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目(表中の記号はP.17の表を参照のこと)

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
								◎						

構法システム		Introduction to Building Structural Systems														
学期区分	前期	区分・単位	必修												2単位	
担当教員	長尾 直治															
<p>授業の目的： 本講義は建物の造りかたを修得するものであり、建築を主として構造の面から概要と特質を講義し、専門科目履修のために基礎的知識を付与することを目的としている。人体にたとえれば、人体を支えている骨組や筋肉の形、働き、成り立ち、名称などの理解に相当する。外見上はその存在や機能が分かり難いが、それなくしては人体は存在し得ない。同様に、建築の柱、梁、壁などからなる材料、構造部材、構造は建築にとって欠くことのできない重要な構法システムを形成している。したがって、建築構造のなりたちや名称、形態、機能などは建築の設計、施工、解体に際して建築学のABCに相当する基本常識となる。</p> <p>到達目標： 単に、材料・構法システムの名称、機能、形態を憶えるだけでなく、以後の専門教育において以下の点で役立つことを期待している。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 構造力学において、構造モデル化の建築的意味を理解する。 (2) 設計演習において、構法、材料選定時の基礎知識とする。 (3) 設計図の作成時に、1本1本の線や1枚1枚の面の構法システム上の意味を理解する。 (4) 既存の建築物の見学、鑑賞時に各部位を認識、識別するとともに、適切に説明できる。 <p>授業内容： (1) 建物の造りかた、(2) 構法システム・モジュール、(3) 木造住宅、(4) 鉄筋コンクリート造住宅、 (5) いろいろな構造（2回）、(6) 工業化住宅とビルディングエレメントの性能、(7) 鉄筋コンクリート造（2回）、 (8) 作品紹介（2回）、(9) 地盤・基礎、(10) 建築部品（2回）、(11) レポートの作成</p> <p>授業の進め方： 教科書、スライド、配布資料を併用しながら、講義する。</p> <p>成績評価方法： 期末筆記試験（約50%）とレポート課題（約50%）によるが、履修状況も評価の参考にする。</p> <p>履修上の注意： 建築学は広い分野から成り立っており、興味深く、情熱を傾注すべき学問である。 1年生前期という重要な時期に、専門に関して初めて受講する授業であるが、学生諸君の受講態度や成績は一重に専門への自覚と熱意にかかっている。</p>																
<p>教科書・参考文献など： 教科書：日本建築学会編「構造用教材」（丸善） 参考書：構法システムの他に、構法計画、一般構造、構造システム、建築生産学などの名称で、同類の教科書、参考書が市販されている。</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知する。 教科書は図面が主体で、日本語の解説文はほとんど無い。理解を深めるためには講義時によく耳を傾け、さらには参考書などによる自習で補うこと。講義その他に関する質問はいつでも大歓迎である。教員不在の時もあるが、研究室スタッフは教員の予定を把握しているので相談されたい。</p>																

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号はP.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
							◎			○				

構造力学 A		Structural Mechanics A															
学期区分	後期	区分・単位	必修 2単位														
担当教員	難波 尚																
<p>授業の目的： ニュートン力学等の自然科学の基礎知識を基に、設計された建築構造物に、外力が作用したときに発生する変形および応力を求めるための初歩的・基礎的な力学を体系的に理解させる。外力の作用に対して、建築構造物がどのように変形するか、また抵抗するかを構造力学によって定量的に解析することによって、その建築構造物の性能を説明することができる。本講義では、静力学、構造解析の基礎を習得することによって、簡単な静定構造物の変形と応力を定量的に求める手法を講述する。</p> <p>到達目標： 作用した外力と発生する変形と応力の関係を解析する基礎的理論を理解し、具体的に比較的単純な静定構造物を対象に、変形と応力を求める手法を習得する。</p> <p>授業内容：</p> <table border="0"> <tr> <td>(1) 構造力学の役割、構造物に働く力、構造部材</td> <td>(2) 静力学の基礎</td> </tr> <tr> <td>(3) 力およびモーメント</td> <td>(4) フックの法則、応力－ひずみ関係</td> </tr> <tr> <td>(5) 微小ひずみ、単純せん断</td> <td>(6) 骨組の解析原理</td> </tr> <tr> <td>(7) 棒材の断面力、安定性と静定性</td> <td>(8) 静定ばり、静定ばりの断面力</td> </tr> <tr> <td>(9) 静定ばりの解析</td> <td>(10) 断面に作用する応力と断面力</td> </tr> <tr> <td>(11) 安全率、許容応力度設計</td> <td>(12) 弾性直線棒材の伸び</td> </tr> <tr> <td>(13) 弾性部材の曲げ変形とたわみ（2回）</td> <td></td> </tr> </table> <p>授業の進め方： 主に板書によって説明する。特に変形状態を理解できるように、学生が自ら構造物の変形状態を作図するなど、筆記を重視する。適宜、理解を確実なものにするために宿題を課す。</p> <p>成績評価方法： 試験の成績を重視して評価を行う。ただし宿題の提出を加味する。</p> <p>履修上の注意： 高校の物理のうち力学関係を十分理解していることが望ましい。講義ではあまり演習を行う時間がないので、各自例題を解く復習を怠らないこと。</p>				(1) 構造力学の役割、構造物に働く力、構造部材	(2) 静力学の基礎	(3) 力およびモーメント	(4) フックの法則、応力－ひずみ関係	(5) 微小ひずみ、単純せん断	(6) 骨組の解析原理	(7) 棒材の断面力、安定性と静定性	(8) 静定ばり、静定ばりの断面力	(9) 静定ばりの解析	(10) 断面に作用する応力と断面力	(11) 安全率、許容応力度設計	(12) 弾性直線棒材の伸び	(13) 弾性部材の曲げ変形とたわみ（2回）	
(1) 構造力学の役割、構造物に働く力、構造部材	(2) 静力学の基礎																
(3) 力およびモーメント	(4) フックの法則、応力－ひずみ関係																
(5) 微小ひずみ、単純せん断	(6) 骨組の解析原理																
(7) 棒材の断面力、安定性と静定性	(8) 静定ばり、静定ばりの断面力																
(9) 静定ばりの解析	(10) 断面に作用する応力と断面力																
(11) 安全率、許容応力度設計	(12) 弾性直線棒材の伸び																
(13) 弾性部材の曲げ変形とたわみ（2回）																	
<p>教科書・参考文献など： 教科書：建築構造力学 図説・演習 I（開講時における最新版） オフィスアワー、学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 復習を重視してほしい。</p>																	

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
						○			◎					

構造力学B		Structural Mechanics B			
学期区分	前期	区分・単位	必修 2単位		
担当教員	田中 剛				
<p>授業の目的： 構造力学は、構造物の設計を行う際に必要とされる力学を体系化したものである。建物の荷重が作用した時に、各部材にはどのような応力や変形が起こるかを知らなければならないことは、建物の安全性を確認するために不可欠なことである。本講義では、静定ラーメン、静定トラスおよび不静定梁に生じる応力および変形の弾性解析方法を講述する。また、建物の崩壊を予測するための初歩として、梁の塑性曲げおよび柱の座屈についても述べる。</p> <p>到達目標： ・静定構造物（静定ラーメン、静定トラス）の断面力と変形の求め方を習得する。 ・簡単な不静定構造物の断面力と変形の求め方を習得する。 ・梁の塑性曲げに関する考え方を理解し、解析手順を習得する。 ・柱の座屈に関する考え方を理解し、解析手順を習得する。</p> <p>授業内容： 本講義では、以下の内容について講述する。 1. ガイダンス（1回） 講義の内容、目的およびスケジュールの説明と「何故、構造力学を学ぶのか」についての話。 2. 静定トラス（3回） トラスの基本構成、静定トラスの応力、静定トラスの弾性変形 3. 静定ラーメン（3回） ラーメンの基本構成、静定ラーメンの応力、静定ラーメンの弾性変形 4. 簡単な不静定梁の解法（3回） 応力法による不静定梁の解法 5. 梁の塑性曲げ（2回） 単純梁の塑性曲げ、全塑性モーメント、塑性ヒンジと塑性崩壊荷重 6. 柱の座屈（2回） 変形後の力の釣合、柱の座屈 7. 期末テスト（1回）</p> <p>授業の進め方： 講義を中心に授業を進めていく。講義用配布資料に沿って、教科書と板書を用いて行う。必要に応じて視聴覚教材を使用する。</p> <p>成績評価方法： 期末テスト（70%）と講義を補うために課すレポート（30%）により評価し、60点以上を合格とする。</p> <p>履修上の注意： ・「構造力学A」の内容は理解できているという前提で講義を行う。 ・同時に「構造演習I」を履修することが極めて望ましい。</p>					
<p>教科書・参考文献など： 教科書：建築構造力学 図説・演習I（中村恒善編著、野中他共著）、丸善 オフィスアワー、学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 構造力学は、建築を造る上で必要不可欠な普遍的な学問です。ただし、講義で得た知識を本当の意味で自分に根付かせるためには、建築を観察し、実際の骨組がどのように構成されているのかを実感し、あれこれ自分で考えることが大切です。そのような習慣を是非身につけてください。</p>					

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号はP.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
						○			◎					

建築素材論		Building Materials												
学期区分	後期	区分・単位	選択必修											2単位
担当教員	菅 健夫													
<p>授業の目的： 巨大都市から小さな町にいたるまで、すべての建物は、複数材料の組合わせでできあがっており、その空間が、人間の営みを包みこむ。街を構成する建物を見ていくと、その土地の環境・風土と調和しているとき気持ちは和み、逆にその組合わせが無秩序であれば「喧騒」を感じ、不愉快になる。この授業では、建築を構成する各部位の素材について、その性質を知り、それらが組み合わされたとき、どういう働きをし、その空間にどう影響するかを学ぶ。</p> <p>到達目標： 1) 建築品質に影響する、材料の基本的性質や寿命が理解できる。 2) 材料の採掘、製造過程、その組合わせ、施工方法を知る。 3) 次に、空間を想定しつつ、各部位毎に材料の標準的組合わせを、バランス良く考えられる。</p> <p>授業内容： 1) 総論（建築の世界遺産、建築家とその作品） 2回 2) 材料別各論（石、木、ガラス、金属その他） 7回 3) 部位別各論（屋根、天井、壁、床その他） 1回 4) 性能別各論（防水、断熱、音響その他） 2回 5) 材料の寿命とメンテナンス 1回 6) 生産、流通、購買、施工体制 2回</p> <p>授業の進め方： 実物の建築材料に触れることを大切に、できるだけ五感を働かせて素材そのものを理解してほしい。 特に視覚を重視し、OHP、VTR等を利用する。 毎回授業冒頭にレジメを配布。 講義終了前5分間で、設問に回答してもらう。 記入され、提出されたレジメ半ページを「出席票」として提出。</p> <p>成績評価方法： （期末テストの内容 + 提出レポートの内容 + 受講票に記入されたコメントの内容）により総合評価を行う。</p> <p>履修上の注意： 建築の材料を学ぶには、まず身近な環境を観察することからスタートしたい。 通学途中の気になる建物、建築中の現場、建材ショールームなど、タウン・ウォッチ。 新聞の折込広告、雑誌、パンフレット類も良き教材である。</p>														
<p>教科書・参考文献など： 日本建築学会編 「建築材料用教材」（丸善） その他、授業中に適宜紹介。</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 偏食、食わず嫌いは厳禁、貪欲に知識を吸収してほしい。</p>														

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号はP.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
										◎				

ライフサイクルマネジメント		Life-cycle Management	
学期区分	前期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	谷 明勲, 大谷恭弘		
<p>授業の目的:</p> <p>建物の一生は、設計や構造計画段階から始まり、建設施工段階を経て供用段階に入り、そして、維持管理のもと何度かの改修を経て、最終的に解体・撤去され、その生涯を終える。この様な建物の生涯期間、すなわちライフサイクルを通して、建物に関わる問題を考える手法が近年発達し、実務においても活用されつつある。</p> <p>例えば、建物に掛かる費用において、単に初期建設コストのみについての縮減を考えるのではなく、使用段階における運用コストや維持管理コスト、さらには最終的に掛かる解体・撤去・処理コストまでもを含めて考えるライフサイクル・コスト (LCC) について最適化を図り、トータルとしてのコスト縮減を目指すことが考えられたり、あるいは、地球環境負荷に対して、建物の生涯期間に渡って排出される二酸化炭素の低減を目指してライフサイクル二酸化炭素 (LCCO2) などを評価するライフサイクル・アセスメント (LCA) を議論することが求められるようになってきている。特に、建築環境マネジメントに関しては、日本でも CASBEE (Comprehensive Assessment System for Building Environmental Efficiency) と呼ばれる、新しい概念に基づく建築物の総合環境性能評価システムが産官学の研究組織により最近開発され、その運用がスタートしている。このように長期的視点、時間的視点から建物に関わるコストや環境負荷等を捉える手法を獲得することは、建築家や建築技術者がしかなるべき環境倫理や技術者倫理を育むために極めて重要な要素でもある。</p> <p>本授業では、この様なライフサイクルを考慮した手法についての基本的な考え方を理解し、建物の計画や管理などのマネジメントに対して、あるいは環境性を評価する幾つかの具体的手法とその応用について学習することを目的としている。</p> <p>到達目標:</p> <p>建築物のライフサイクルを経済的・環境的・構造的観点からとらえ、時間的視点から建築物の計画・管理や環境性について考えるための基本的概念について理解する。</p> <p>授業内容:</p> <p>下記項目に関する基本的考え方とその応用について講義・説明を行い、それらに関する演習を実施する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス：授業の目的と授業予定の説明 (1回) 2. 建築物のライフサイクルと計画期間 (2回) 3. 建築積算の概念とライフサイクル・コスト (LCC) (3回) 4. 建築物の維持管理とファシリティ・マネジメント (FM) (3回) 5. 建築物の環境性とライフサイクル・アセスメント (LCA) およびライフサイクル二酸化炭素 (LCCO2) (3回) 6. CASBEE による建築物の総合環境性能評価 (3回) <p>授業の進め方:</p> <p>授業は各テーマの内容に関する講義や説明を配布資料等に沿って板書・OHP等を併用して行い、その後、具体的手順の修得を目的とした演習を行う形で進める。</p> <p>成績評価方法:</p> <p>課題レポートにより評価する。</p> <p>履修上の注意:</p> <p>履修要件は特になし。</p>			
<p>教科書・参考文献など:</p> <p>参考図書：シリーズ地球環境建築・専門編「建築環境マネジメント」日本建築学会編、彰国社 「地球環境時代の建築マネジメント」中島康孝・太田昌孝編著、朝倉書店 「建築物のライフサイクルコスト」建築保全センター編集、経済調査会発行 「建物の LCA 指針－環境適合設計・環境ラベリング・環境会計への応用にむけて」日本建築学会</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ： オフィスアワーの日は授業開始時に通知します。 建築物の空間設計はもちろん、時間設計についても意識をもつこと。</p>			

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目 (表中の記号は P.17の表を参照のこと)

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
			○							◎				

造形演習 I		Drawing and Painting I			
学期区分	前期	区分・単位	選択	1単位	
担当教員	藤原洋次郎, 藤岡智紀				
<p>授業の目的: 建築をデザインする上で必要となる基礎的な造形力を獲得することを目的とし、デッサンや立体造形の制作を通じて、素描力や造形力を修得するとともに、形態や調子、色彩感覚、素材の質感、平面と立体との関係などの造形感覚を養う。</p> <p>到達目標: 鉛筆と水彩によるデッサン、紙を素材とした立体構成作品を制作することで、建築デザインの基礎となる造形力を修得する。</p> <p>授業内容: 作品制作を通して、造形の基礎技術を習得しつつ多様な価値の理解、自己能力の開発および表現能力を身につける。 課題内容は年度によって異なるが、平成18年度は以下のとおりである。</p> <p>1. 平面造形 (担当: 藤原) 鉛筆および着色によるデッサン</p> <p>① 講義 (導入・デッサンについて) 1週 ② 鉛筆デッサン (ティッシュ箱の鉛筆デッサン) 1週 ③ 鉛筆・淡彩デッサン (ティッシュ箱・レモンをモチーフにデッサン, 着色する) 2週 ④ 鉛筆・淡彩スケッチ (構内の建造物のスケッチから夢の建築物を作る) 2週</p> <p>2. 立体造形 (担当: 藤岡) 紙を素材とした具象物および空間造形の制作</p> <p>① 平面の表情をつける (自然・人工物から抽出した18片の表情を平面造形としてまとめる) 2週 ② 2分割の空間構成 (1枚の紙を2分割して作成した2つの造形を1つの空間に構成する) 2週 ③ 3分割の再構成 (1辺9cmの立方体を3分割しA4判紙面に再構成する) 2週</p> <p>授業の進め方: 受講生は2つのグループに分かれて、平面造形と立体造形の両方の課題を前期期間を2分して受講する。また、演習は専用の演習室において課題作品の制作を行い、その間、担当教員が個人指導を行う。具体的な運用は学期の最初にガイダンスする。</p> <p>成績評価方法: 成果品としての提出作品の仕上がり、および履修状況を評価対象とする。</p> <p>履修上の注意:</p> <p>① 学期の途中で演習時間および担当教員が変わるので交代時期に注意すること。 ② 受講者は、期間内に所定の作品を提出すること。</p>					
<p>教科書・参考文献など: 教科書は特に使用しない</p> <p>各自の準備物: ケント紙, デッサン用鉛筆, 水彩絵の具, 練りゴム, 消しゴム, カッターナイフ, スチール定規, メンディングテープ, のりなど (大学生協売店にて販売)</p> <p>オフィスアワー, 学生へのメッセージ オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 この演習は、建築デザインを行う基礎となる造形力を養うものであるが、デッサンの対象や素材と向き合うことによって、ものの見方, 感じ方を豊かにし、立体的な構成や空間に対する感覚を磨いてほしい。</p>					

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目 (表中の記号は P.17の表を参照のこと)

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
									◎					

造形演習Ⅱ		Drawing and Painting Ⅱ	
学期区分	後期	区分・単位	選択 1単位
担当教員	藤原洋次郎, 藤岡智紀		
<p>授業の目的: 造形演習Ⅰに引き続き、建築デザインの基礎となる造形力をより高めることを目的とし、デッサンや立体造形の制作を通して、より高度な素描力を修得するとともに、造形と色彩、素材の質感の関係を理解し、さらに抽象的なイメージを具象化する能力を養う。</p> <p>到達目標: デッサンの技法を修得し、その作品および、紙や木などを素材とした立体構成作品を制作することで、建築デザインに応用できる高度な造形力とイメージを形態化する能力を修得する。さらに都市や自然の中の環境造形について理解を得る。</p> <p>授業内容: 作品制作を通して、より高度な造形の基礎技術を習得するなかで、豊かな感性と想像力を身につける。あわせて、多様な価値の理解、造形と人および環境との関わり方について考える。 課題内容は年度によって異なるが、平成18年度は以下のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 平面構成 (担当: 藤原) 鉛筆と着色によるデッサンおよびドローイング <ol style="list-style-type: none"> ① 鉛筆デッサン (1枚の紙による立体造形をモチーフにデッサン) 1週 ② 静物デッサン・彩色 (紙の角柱, リンゴ, レモンをモチーフにデッサン, 淡彩着色) 2週 ③ スケッチ構成 (構内建造物のスケッチを素材に再構成しドローイング, 着色する) 3週 2. 立体造形 (担当: 藤岡) 卵を素材とした具象・抽象造形の制作 <ol style="list-style-type: none"> ① 卵をつくる (鶏の卵をスーパーリアルに石膏で彫刻する) 2週 ② 卵を染める (自然素材から色を抽出し, ①で制作した石膏卵を染める。レポート提出) 1週 ③ 卵を守る紙の造形 (様々な紙を用い落下に耐える構造とデザインを加味した造形制作) 3週 <p>授業の進め方: 受講生は2つのグループに分かれて、平面造形と立体造形の両方の課題を後期間を2分して受講する。 また、演習は専用の演習室において課題作品の制作を行い、その間、担当教員が個人指導を行う。具体的な運用は学期の最初にガイダンスする。</p> <p>成績評価方法: 成果品としての提出作品の仕上がり、および履修状況を評価対象とする。</p> <p>履修上の注意:</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 学期の途中で演習時間および担当教員が変わるので交代時期に注意すること。 ② 「造形演習Ⅰ」を受講していることが望ましい。 			
<p>教科書・参考文献など: 参考書は特に使用しない。</p> <p>各自の準備物: ケント紙, デッサン用鉛筆, 水彩絵の具, 練りゴム, 消しゴム, カッターナイフ, スチール定規, メンディングテープ, のり, など (大学生協売店にて販売)</p> <p>オフィスアワー, 学生へのメッセージ: オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 この演習は、建築デザインを行う基礎となる造形力を養うものであるが、デッサンによるより高度な表現力と構造的表現を通して、抽象的なイメージを空間表現する自由な発想を養ってほしい。</p>			

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目 (表中の記号は P.17の表を参照のこと)

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
									◎					

建築演習		Primary Seminar of Architecture														
学期区分	前期	区分・単位	選択											1単位		
担当教員	建築学科教員															
<p>授業の目的： 建築学を学ぶにあたって、基本的な学習の姿勢、視座を確認するため、建築学科全教員の1/3と学生による少人数・双方向的演習を行う。</p> <p>到達目標： この演習を通じて、学生・教員間の相互理解・交流、学生の自己表現力の向上、大学における学習目標の獲得が図られることが期待される。</p> <p>授業内容： 学生と教員の小グループ演習を通じて、建築学に対する期待、可能性、社会的役割についての基本的視座を確認し、自己表現しうるゼミナール、建築に関する演習を実施する。</p> <p>授業の進め方： この演習は、知識や技術を修得するという一般的な専門科目の授業とは異なる性格をもち、今後の大学教育の出発点となる時期に、建築学を学ぶ意義や可能性を展望し、自らで学習目的を設定・獲得する契機となる場と教員との交流機会を提供するものである。年度によって進め方は異なるが、10名程度の学生がグループを形成し、教員とのゼミナール、共同実習を中心に演習を進めることを基本とする。</p> <p>成績評価方法： 演習中の様々なプログラムへの参加姿勢や演習における成果物により評価する。</p> <p>履修上の注意： 内容については入学時のガイダンスで説明する。</p>																
<p>教科書・参考文献など： 参考文献等は開講時に指示する。</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 この授業は、大学で建築の専門教育を受けるスタートの時点で、大学で学ぶことのおもしろさ、建築学を学ぶ楽しさや深さ、教員と学生相互の理解を深めるために設定されたものです。</p>																

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号はP.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
◎				○		○	○							

特別演習 Short Seminar													
学期区分	前期	区分・単位			選択			1単位					
担当教員	建築学科教員												
授業の目的： 少人数，双方向の教育を通じて，建築学への理解を深めることを目的とし，計画，構造，環境の各分野においてグループ形式の演習を行う。受講生は，上記3分野で実施される演習を一通り受講する。													
到達目標： 建築学への理解を深めるために，各分野における研究方法，学習方法を体験する。													
授業内容： 受講生は9班（1班10名程度）に分かれ，各班毎に計画，構造，環境の3分野で実施される演習を4週間単位で受講する。それぞれの分野で，担当教員の指導，助言の下，自主性を重んじた学習方式による演習を実施する。 計画系では，1）建築史・建築（設計）論，2）都市設計・都市計画，3）防災・地域計画，4）環境設計・生活環境，の4分野を設け，各グループ3名の教員が担当する。 構造系では，1）鋼構造骨組に関する諸問題，2）構造振動制御および建築的形態の形成，3）構造物の動的性状・性質，4）構造物，構造要素，構造材料の破壊，の4つのテーマを設けている。 環境系では，人を取りまくさまざまな環境要素のうち，1）音環境，2）視環境，3）熱環境，4）空気環境について，生活に密着したテーマを取り上げ，討論や話し合いの過程で具体的な演習内容を決めている。													
授業の進め方： 少人数教育の利点を生かした教員と受講生による対話型，受講生相互による討論型の演習である。 計画系では，計画分野の解説，研究・学習方法，具体的な建築事例や地域を対象としたフィールド調査や空間分析，等の演習を通じて，計画分野の基礎知識と視点，方法の修得を行う。最終の演習時にはビジュアルな成果をまとめ，計画系の合同発表会を実施し，総合討論を行う。 構造系では，模型製作，構造実験，コンピュータ・シミュレーション，等の演習を通して，受講生自身による問題提起，討論を行う。また，最終の演習時には，構造系の合同発表会を設け，成果のプレゼンテーションを行う。 環境系では，教員と受講生，受講生同士の討論や話し合いにより具体的なテーマを決め，屋内や屋外で実験・解析を行う。その結果をもとにレポート・プレゼンテーションの作成を通して，教員も含め議論を深めると同時に，プレゼンテーション能力の向上を図る。													
成績評価方法： 演習の成果によって評価する。													
履修上の注意： 受講希望者は，教務学生係への履修届の提出に先立ち，事前登録が必要である。申込方法等については，前もって掲示するので，建築学コースの掲示に注意しておくこと。													
教科書・参考文献など： 適宜，指示する。													
オフィスアワー，学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 建築に対する理解度を深めるためには，広い意味で自らが体験することが重要である。「体験する」とは，好奇心を持ち，疑問を抱き，答えを模索するプロセスである。本演習では，このプロセスを重視しているので，受講生には積極的な参加意識を持つことを心がけてほしい。													

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号はP.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
						◎				○				

学外演習 Professional Studies		区分・単位	選 択	1 単位
学期区分				
担当教員	建築学科教員			
<p>授業の目的： 学生提案型単位取得科目として開講する。学生が個人またはグループで企画・実施するプロジェクトに一定期間従事する事により、専門家とのコミュニケーション等を通して、建築学や建築実務についての理解を深めるとともに、建築と社会の関わりについて理解を深め、職能観・倫理観を育む。</p> <p>到達目標： プロジェクトの実施を通して、将来、建築に携わる上で、どのような問題意識をもたねばならないか、また具体的な諸問題に対して、いかなるアプローチをとり解決へと導くのか、を実際に体験すること。</p> <p>授業内容： プロジェクトとして以下に掲げるものを対象とする。 ・個人あるいはグループで企画・実施したプロジェクト ・企業でのインターンシップ参加（教室斡旋、大学斡旋、自由応募の別を問わない） ・専門分野での実務経験を伴うアルバイト経験 ・学協会の斡旋するオープンデスクや専門技術ボランティア活動への参加 ・国内・外の大学が実施する研修プログラムへの参加 ・ボランティア活動参加</p> <p>なお、プロジェクト認定条件としての必要従事時間、および従事した活動・作業・業務等に関する専門家との必要コミュニケーション時間等については、別途、説明会等で指示する。</p> <p>授業の進め方： 担当教員との以下のコミュニケーションを通して、企画書、実施レポートを作成する。</p> <p>① 「プロジェクト企画書」の提出。 プロジェクト企画書（A4で1枚程度）に含む内容： ・プロジェクトの仮称、予定実施期間、共同実施者（グループ・プロジェクトの場合） ・プロジェクトの目的（建築における位置づけと本人が得ようとするもの） ・プロジェクトの予定実施計画や内容 ・受け入れ側（企業や団体等であれば）の承諾を示すもの（コピー添付可）</p> <p>② 教員のヒアリングとアドバイス。 ③ プロジェクトでインターンシップ等の研修に参加した場合、終了後に「研修終了報告書」を提出。 ④ プロジェクト終了後、プロジェクト日誌と認定審査用の「プロジェクト実施レポート」の提出。 ⑤ 担当教員によるヒアリングとアドバイス。必要に応じてレポートの修正や課題追加。 なお、担当教員は必要に応じて受け入れ側や関係者に問い合わせをすることがある。 詳細は別途、説明会等で指示する。</p> <p>成績評価方法： プロジェクト実施レポートに基づいて成績を評価し単位を認定する。 プロジェクト実施レポートには、プロジェクトの名称・目的・実施期間・概要日誌を明記し、当初の目的達成状況や、プロジェクトの成果を簡潔にまとめる。詳細は別途、説明会等で指示する。</p> <p>履修上の注意： ・履修登録の方法については、別途、説明会等で指示する。 ・グループ・プロジェクト等で共同実施者がいる場合も、「プロジェクト企画書」と「プロジェクト実施レポート」は、個別に提出することが必要。 ・プロジェクト実施期間中は安全確保に注意し、あくまでも自己責任で実施すること。 ・万一に備え、加害者、被害者等の保険（学生教育研究災害傷害保険と学研災付帯賠償責任保険の両方、あるいはそれと同等以上の保険）に必ず加入のこと。 他の注意事項は別途、説明会等で指示する。</p>				
<p>教科書・参考文献など： 特になし。</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ： オフィスアワーの日は説明会等で通知します。 実務体験を通じて、大学での学習内容の意味付けが明確化されることが望ましい。 夏期休業期間等を有効に利用してプロジェクトを企画・実施し、建築への理解を深めることを期待する。</p>				

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
		◎												

測量学 Surveying														
学期区分			前期			区分・単位			選択			2単位		
担当教員			中田勝行											
<p>キーワード： 社会基盤形成，土木基礎技術，計測技術，空間情報，電子地図，TS,GPS,GIS,RS，ジオマチックス</p> <p>授業の目標： 測量とは地球上の種々地点の位置を決定する技術であり，点間の距離・方向・高さなどを測定し，その成果から地図（地形図・平面図）として表現する技術である。これは社会基盤形成のための，諸施設の計画・建設・利用にあたって必要な基礎技術である。本授業では基礎的な測量の理論と方法を理解すると共に，測量と言う言葉が空間情報工学やジオマチックスと言われる周辺領域との複合技術になってきている事を理解し視野を広める。</p> <p>学生の学習目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 測量知識の取得と理解。 ② 測量学と測量学実習を履修することにより測量理論と実技に熟知。 ③ 行財政における測量の役割を理解。 ④ 建設事業と測量の役割の理解。 ⑤ 測量技術者の役割と使命を理解。 <p>授業の概要： 測量学概論・測量機器・誤差論・基準点測量「距離・水準・測角（多角・三角測量）・GPS」・地形測量「実地測量（平板測量・スタジア測量・TS測量）・写真測量」・応用測量・写真判読とリモートセンシング・GIS。 実習については別途，測量学実習を用意し実技の修得をはかる。</p> <p>授業の進め方： 講義は教科書・配付資料・パワーポイント等によって説明・討議で進める。また，最新の測量技術，状況を理解するため必要に応じて学外見学会を実施したい。</p> <p>評価の方法と基準： 期間中に与える課題についてのレポートを30%，定期試験の結果を70%と評価し，その合計が60%を超えるものを合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど： 中田（非常勤講師）：前期期間講義日，その他の日に連絡が必要な場合は教学委員又は市民工学科事務室に連絡。</p>														
<p>テキスト・教材・参考書など：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1, 教科書として 改訂版測量学1基礎編（森忠次著）丸善 <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言： 必要に応じて，参考文献，参考図書の紹介や，資料・プリントの配付を行う。</p>														

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
									◎					

都市・住宅史		History of Houses and Cities			
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位		
担当教員	黒田龍二, 山崎寿一				
<p>授業の目的: 人間の生活や文化と建築の関係を, 歴史的に理解するとともに, 時代を代表する住宅や都市の特徴やそれを成立させた文化的・技術的背景を理解することを目的とする。</p> <p>到達目標: 歴史的な社会関係の中での住宅, 都市の形態と特徴を具体的に理解する。 住宅及び都市の変遷史(年表)と時代を代表する住宅, 都市の典型的なプランを書けるようになる。 地域・時代を代表する住宅の形態・プラン・機能を説明できる。</p> <p>授業内容: この授業は, 原始・古代から現代に至る人間居住の発展過程の理解を基礎に, 近世までの都市・住宅史については「建築史」の専門の立場から, 近代以降は「建築計画・地域計画」の立場から講義を行う。 序. 居住・建築・都市の2000年一紀元0年から現代までの人口と居住地の変遷</p> <p><u>1部. 都市・住宅の建築史(原始・古代から近世まで)</u></p> <p>1-1. 住宅の歴史</p> <p>1) 庶民の住宅(農家と町屋)</p> <p>2) 貴族・武士の住宅(寝殿造と書院造)</p> <p>3) 茶室・数寄屋の意匠と技法: 近世中心に</p> <p>1-2. 都市の歴史</p> <p>4) 都: 平城京・平安京を中心に</p> <p>5) 城郭と城下町</p> <p>1-3. 前半まとめ</p> <p><u>2部. 都市・住宅の計画史(近代以降)</u></p> <p>2-1. 住宅近代史</p> <p>1) 近世と近代をつなぐ住宅/中産階級住宅の発生/和風・洋風住宅</p> <p>2) 近郊住宅地の発達/近代的住宅</p> <p>3) 庶民住宅/公的住宅/最小限住宅</p> <p>4) 公営住宅と集合住宅の変遷</p> <p>2-2. 近代以降の都市計画と農村計画</p> <p>5) 明治以降の近代化と国土開発</p> <p>6) 近代以降の都市形成・農村変容(大都市, 地方都市, 農村地域)</p> <p>2-3. 後半まとめ</p> <p>授業の進め方: 配布資料・教科書を用いて, 講義形式で行う。 担当教員毎に, 個別のレポート課題(民家博物館, 住まいのミュージアム, 住宅・居住地のフィールドレポート等)が課せられる。</p> <p>成績評価方法: 定期試験(配点 黒田50点, 山崎50点の合計100点)にレポート点(20点)を加算し, 60点以上を合格とする。</p> <p>履修上の注意: 「建築・住居論」を受講していること</p>					
<p>教科書・参考文献など: 日本建築学会編「日本建築史図集」, 内田青蔵他「図説 近代日本住宅史―幕末から現代まで」鹿島出版会, 詳細は授業時に指示する。</p> <p>オフィスアワー, 学生へのメッセージ: 毎時間授業の終わりに質問を受け付けます。オフィスアワー等は授業中にアナウンスし, 自己学習のアドバイスもしますので気軽に声をかけてください。メールでも答えます。</p>					

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目(表中の記号はP.17の表を参照のこと)

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
									◎					

建築計画 Architectural Planning						必修		2単位																																																				
学期区分	後期	区分・単位																																																										
担当教員	大西一嘉, 北後明彦																																																											
<p>授業の目的: 建築物をつくる過程の中で計画・設計がいかに行われるかについて、受講生が考えはじめるきっかけを形成することを目的とする</p> <p>到達目標: 初歩的な建築設計の課題が与えられたとき、どのようにして解を導き出すことができるかの道筋を思い浮かべることができるレベルに達することを目標とする。</p> <p>授業内容: 建築物の計画と設計の方法を考察する。次に、計画の理論の最初として寸法の計画を取り上げ、建築空間を利用する人の大きさや動きから規定される寸法について述べるとともに、日常災害防止への配慮や高齢者・障害者への配慮について示す。また、人間の知覚や集合との関係で規定される建築空間について論及する。最後に、生活と住空間の計画との関わりについて示す。</p> <p>授業の進め方: 建築空間について具体的に想起されるように写真・図面等を積極的に示す。講義する項目は以下のとおりである。</p> <table border="0"> <tr> <td>1. 建築の計画と設計 (北後)</td> <td>1. 1</td> <td>どのように建物を計画し、設計するか</td> </tr> <tr> <td></td> <td>1. 2</td> <td>設計者の作業過程</td> </tr> <tr> <td></td> <td>1. 3</td> <td>建築計画の方法と展開</td> </tr> <tr> <td>2. 寸法の計画 (北後)</td> <td>2. 1</td> <td>いかにして寸法は決められるか</td> </tr> <tr> <td></td> <td>2. 2</td> <td>人体・動作が規定する空間寸法</td> </tr> <tr> <td></td> <td>2. 3</td> <td>寸法の規格化</td> </tr> <tr> <td>3. 日常災害防止への配慮 (北後)</td> <td>3. 1</td> <td>日常災害の動向</td> </tr> <tr> <td></td> <td>3. 2</td> <td>日常安全性の確保と設計・計画</td> </tr> <tr> <td>4. 高齢者・障害者と建築 (大西)</td> <td>4. 1</td> <td>福祉と建築の接点</td> </tr> <tr> <td></td> <td>4. 2</td> <td>バリアフリーとユニバーサルデザイン</td> </tr> <tr> <td></td> <td>4. 3</td> <td>住まいと安心</td> </tr> <tr> <td>5. 環境心理と建築空間 (大西)</td> <td>5. 1</td> <td>形態の知覚と視環境心理</td> </tr> <tr> <td></td> <td>5. 2</td> <td>空間の開放性と閉鎖性</td> </tr> <tr> <td></td> <td>5. 3</td> <td>人間行動と建築計画</td> </tr> <tr> <td>6. 計画と調査のデザイン (大西)</td> <td>6. 1</td> <td>場のデザイン</td> </tr> <tr> <td></td> <td>6. 2</td> <td>敷地と平面計画</td> </tr> <tr> <td></td> <td>6. 3</td> <td>計画と調査の科学</td> </tr> </table> <p>成績評価方法: 基本的に定期試験により成績評価を行うが、授業時間に出す課題や、レポートにより、理解度や学習度を把握し、加味することがある。</p> <p>履修上の注意: 「建築・住居論」「都市・住宅史」を履修していることが望ましい。</p>										1. 建築の計画と設計 (北後)	1. 1	どのように建物を計画し、設計するか		1. 2	設計者の作業過程		1. 3	建築計画の方法と展開	2. 寸法の計画 (北後)	2. 1	いかにして寸法は決められるか		2. 2	人体・動作が規定する空間寸法		2. 3	寸法の規格化	3. 日常災害防止への配慮 (北後)	3. 1	日常災害の動向		3. 2	日常安全性の確保と設計・計画	4. 高齢者・障害者と建築 (大西)	4. 1	福祉と建築の接点		4. 2	バリアフリーとユニバーサルデザイン		4. 3	住まいと安心	5. 環境心理と建築空間 (大西)	5. 1	形態の知覚と視環境心理		5. 2	空間の開放性と閉鎖性		5. 3	人間行動と建築計画	6. 計画と調査のデザイン (大西)	6. 1	場のデザイン		6. 2	敷地と平面計画		6. 3	計画と調査の科学
1. 建築の計画と設計 (北後)	1. 1	どのように建物を計画し、設計するか																																																										
	1. 2	設計者の作業過程																																																										
	1. 3	建築計画の方法と展開																																																										
2. 寸法の計画 (北後)	2. 1	いかにして寸法は決められるか																																																										
	2. 2	人体・動作が規定する空間寸法																																																										
	2. 3	寸法の規格化																																																										
3. 日常災害防止への配慮 (北後)	3. 1	日常災害の動向																																																										
	3. 2	日常安全性の確保と設計・計画																																																										
4. 高齢者・障害者と建築 (大西)	4. 1	福祉と建築の接点																																																										
	4. 2	バリアフリーとユニバーサルデザイン																																																										
	4. 3	住まいと安心																																																										
5. 環境心理と建築空間 (大西)	5. 1	形態の知覚と視環境心理																																																										
	5. 2	空間の開放性と閉鎖性																																																										
	5. 3	人間行動と建築計画																																																										
6. 計画と調査のデザイン (大西)	6. 1	場のデザイン																																																										
	6. 2	敷地と平面計画																																																										
	6. 3	計画と調査の科学																																																										
<p>教科書・参考文献など: 日本建築学会編「第3版コンパクト建築設計資料集成」(丸善) 「建築概論 建築・環境のデザインを学ぶ」(学芸出版社) 「建築計画教科書」(彰国社) 「建築計画1」(鹿島出版会) 「新・建築学大系(建築計画)」「新・建築学大系(環境心理)」(彰国社) 「空間デザインの原点」(理工学社) 「建築・都市計画のための調査・分析方法」(井上書院)</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ: オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 まずは計画学のもつ面白さを実感してほしい。授業についてのメッセージボードを開設しているので、利用してください。 北後 http://hpboard3.nifty.com/cgi-bin/bbs_by_date.cgi?user_id=PEG02522 大西 http://www.arch.kobe-u.ac.jp/~a7o/lecture/kenchiku-keikaku.html</p>																																																												

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目(表中の記号はP.17の表を参照のこと)

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
						◎				○				

住宅設計論		Theory of Housing Design				
学期区分	前期	区分・単位	選択必修			2単位
担当教員	山崎寿一					
<p>授業の目的： 住宅設計の基礎なる生活文化，家族，住生活，住宅計画，環境設計に関する基礎知識を修得し，現代を代表する住宅作品の評価，住宅設計の方法について学習する。</p> <p>到達目標： 人間生活における住宅のもつ役割，意義について理解し，住宅に係わる建築家・建築技術者・研究者・行政の社会的責務を考える能力を身に付けること。／住宅と生活（家族，住生活，コミュニティ，社会生活），環境（集住環境，地球環境）との関係を理解すること。／代表的な住宅作品に関する知識をもち，さらにその背景や設計理念，方法を理解すること。／住宅の設計方法を具体事例の学習を通じて理解すること。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 概要及び人間生活における住宅のもつ役割，意義（住宅人権思想と倫理） 2. 住宅設計の進め方と関連領域（居住論・住居論・住宅計画・住宅設計の関係） 3. 住宅設計の条件(1)：住宅と文化（風土，地域，習俗）の関係をつかむ 4. 住宅設計の条件(2)：住宅と生活（家族，コミュニティ，社会生活）の関係をつかむ 5. 住宅設計の条件(3)：住宅と環境（集住，環境共生）の関係をつかむ 6. 住宅作品・住宅計画理論にみる現代住宅史概説 7. 住宅計画・設計論の系譜(1)（独立住宅） 8. 住宅計画・設計論の系譜(2)（集合住宅） 9. 集住環境設計論（環境設計：居住地，集落） 10. 現代住宅分析(1)：環境共生の視点から（自然との共生，古民家再生） 11. 現代住宅分析(2)：居住福祉の視点から（コミュニティ，高齢者居住） 12. 集住環境分析：計画的集住体と集落 13. 住宅設計の手法(1) ワークショップ方式による事例分析1 14. 住宅設計の手法(2) ワークショップ方式による事例分析2 15. 総括 課題レポートの発表と講評 <p>授業の進め方： 基本的には講義形式で行う。必要に応じて，配布資料・パワーポイントなどを用いてヴィジュアルに示す。</p> <p>成績評価方法： 定期試験（80点），課題レポート（20点）をあわせて総合評価（100点）とする。 最終授業で予定している課題発表は課題レポートの評価に加味する。 課題レポートは個人課題とグループ課題があり，集団作業を伴い，コミュニケーション能力を問う。</p> <p>履修上の注意： 「建築・住居論」「都市・住宅史」を受講していること</p>						
<p>教科書・参考文献など： 第1回授業時に指示する。</p> <p>オフィスアワー，学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 相談，質問は yamazaki@kobe-u.ac.jp まで</p>						

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
											◎			

施設計画論		Facilities Planning												
学期区分	後期	区分・単位	必修											2単位
担当教員	安田 丑作, 三輪 康一, 山崎 寿一													
<p>授業の目的: 現代の建築施設の計画・設計に関わるさまざまな理論と方法のなかから、いくつかの重要テーマ（規模の計画、集合の計画、地域の計画、都市建築の計画）を取り上げて、その計画論を講ずる。さらにその計画プロセスについて具体的な事例をもとに論ずる。</p> <p>到達目標: 施設計画・建築設計における計画の理論と設計の技法を習得することで、今後、設計・計画演習や卒業設計、さらに将来の設計業務において、建築設計を実際に行う際に必要となる①計画・設計の目標と条件を受講者自ら設定できるようになること、②計画理論や設計手法を適用して設計が行えるようになることを目標とする。</p> <p>授業内容: 以下のテーマについて講述し、それぞれ事例を紹介する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 規模の計画（三輪）4回 建築の「規模」が意味するものを述べ、規模決定のプロセスを、①利用者などの需要の把握と②需要の空間への対応という2つの段階で説明する。さらに事務所建築を例として、具体の規模計画の基礎を紹介する。 2. 集合の計画（三輪）3回 さまざまなタイプの建築計画における、空間の各要素の集合関係とプランニングについて理解を深める。具体的には、事務所建築、学校建築、集合住宅をとりあげ、それぞれ、事例を通してプランタイプと空間構成との関連について講述する。 3. 地域の計画（山崎）4回 地域におけるコミュニティ・生活関連施設の位置づけと役割を示し、その立地と機能分担の考え方について考察する。具体的にはコミュニティ施設の計画及び共同空間をとりあげ、事例を通して地域との関連について講述する。 4. 都市建築の計画（安田）3回 単体の建築から複能化・複合化する都市建築の諸相を分析するとともに具体的事例を通じてその空間構成と計画構成について講述する。 5. 期末試験 <p>授業の進め方: 授業は表記担当教員が期間と内容を分担して行い、講義形式を基本とする。</p> <p>成績評価方法: 定期試験の成績による。</p> <p>履修上の注意: 「建築計画」を履修していることが望ましい。</p>														
<p>教科書・参考文献など: 教科書は、日本建築学会編『コンパクト設計資料集成』（丸善）、参考文献は、各講義のテーマに即してその都度、提示する。</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 現代の施設計画・建築設計は、時代の要請に応じて、機能と空間の多様化や複合化、構成原理の再構築などさまざまな変化がみられ、またこれからもそうした傾向が顕著になると思われる。この授業を通じて、基礎的な計画理論と設計手法をしっかりと身につけることで、新たな展開に応用できる資質を育ててほしい。</p>														

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
											◎			

日本建築史		History of Japanese Architecture			
学期区分	前期	区分・単位	必修 2単位		
担当教員	黒田龍二				
<p>授業の目的： 建築に関わる行為は、社会を物理的に改変する行為である。それゆえ、建築に携わる人間は、自分が改変しようとする環境がいかなるものであるかを明確に認識する必要がある。 また高度な建築設計行為においても、従来の建築文化がどのようなものであったかを知らずに新しい建築を創造する事はできない。 この講義は、社会的、文化的所産としての建築と歴史的環境の意義を認識することに重点をおきつつ、過去の日本建築のあり方を理解、習得することを目的とする。これによって、学生がこれからの建築のあり方を考える基礎能力の一端を形成する。</p> <p>到達目標： 伝統的日本建築は世界的にみても稀に見る精緻な構成と美をもっているが、その技術と様式、環境に関する知識がなくては、真に日本建築を理解することはできない。目標は、現代建築とは異なる日本建築独自の形態や技術を理解し、あわせてそれが生み出された歴史的背景を理解することである。教科書として使用する『日本建築史図集』解説が無理なく読解できる知識の水準を目指す。</p> <p>授業内容： 第1回 日本建築史学習の意義（歴史の学習を通じて人間と社会集団との関係、多様な価値を理解すべきことを述べる） 第2回 寺社建築の技法と構造（以下は建築史に関する包括的専門知識の習得を目的とする） 第3回 寺社建築の意匠 第4回 寺院建築史—飛鳥・奈良時代 第5回 寺院建築史—平安時代 第6回 寺院建築史—鎌倉時代、室町時代（大仏様とその時代背景） 第7回 寺院建築史—鎌倉時代、室町時代（禅宗様の規範） 第8回 寺院建築史—鎌倉時代、室町時代（折衷様の地域的展開） 第9回 神社建築史—神社建築とは何か 第10回 神社建築史—古代の神社建築形式 第11回 神社建築史—中世以降の神社建築 第12回 近世建築—桃山様式の形成 第13回 近世建築—近世建築の多様性と技術、生産組織 第14回 歴史的環境の保全と整備（歴史的環境を通じて技術者倫理・環境倫理を考える学習） 第15回 期末テスト</p> <p>授業の進め方： 視覚的教材として『日本建築史図集』を中心に講義を行う。随時小テストを行う。要望があれば、学外見学を行うこともある。</p> <p>成績評価方法： 学期末に行う筆記試験の成績を主として、学習態度、小テスト成績、受験状況を加味する。</p> <p>履修上の注意： 講義を理解するには、中学、高等学校での日本歴史の知識が前提となっているから、復習しておくこと。市販の建築史の教科書の中には今の学問水準からは間違っただ記述を含むものがあるから要注意。</p>					
<p>教科書・参考文献： 教科書：日本建築学会『日本建築史図集』彰国社 参考図書：太田博太郎『日本建築史序説』彰国社／後藤治『日本建築史』共立出版</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ： オフィスアワーの日は授業開始時に通知します。 みずから『日本建築史図集』をハンドブックとして古建築を探訪してください。実物を見る、見ないは建築の理解にとって決定的な違いです。基本的に授業終了後の1時間ほどは質問の時間として考慮します。気軽に質問してください。</p>					

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号はP.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
										◎				

西洋建築史		History of Western Architecture			
学期区分	後期	区分・単位	必修 2単位		
担当教員	足立裕司				
<p>授業の目的： 「建築」という概念を創り上げてきた西洋建築の歴史を理解することを目的とする。それぞれの時代の造形上の特徴、理論から思想的、宗教的意味、さらにそれぞれの様式を成立させた都市のおよび社会的背景などの理解を通じ、建築とは何かを考察する能力を養う。</p> <p>到達目標： それぞれの時代を代表する様式についての形式的な理解ではなく、建築という領域を形づくる様々な要因を理解し、建築を総合的に捉えることができる歴史的かつ国際的な視野を涵養する。</p> <p>授業内容： 古代ギリシア・ローマから中世のビザンチン、ロマネスク、ゴシックを経て近世ルネサンスに至る様式の変遷を時代順に取り上げながら、それぞれの様式の理解とともに現代的な意義についても考察する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 西洋建築の領域と視点 2. 建築の源流とエジプト建築 3. ギリシア建築と古典理念の形成 1 4. ギリシア建築と古典理念の形成 2 5. ローマ建築の形成 6. ローマと古典建築の展開 7. キリスト教と教会建築の形成 8. 中世ヨーロッパの形成とキリスト協会 9. ビザンチン建築の形式と展開 10. ロマネスク建築と地域の多様性 11. ロマネスク建築の技術と展開 12. ゴシック建築の成立：技術と形式 13. ゴシック建築の展開：空間と理念 14. 中世からルネサンスへ：都市と建築 <p>授業の進め方： 講述だけでなく、必要に応じて OHP、スライドを用い、概念的な理解だけではなく視覚的な理解も重視する。</p> <p>成績評価方法： 学期末の試験と何度かのレポートを参考にして評価する。特に思考能力の有無を評価する。</p> <p>履修上の注意： 高校、大学の2年までの社会科学、人文科学の知識だけでも理解できるように努めているので、一回一回の授業に集中し、その場で理解するように努力してほしい。また、その都度参考図書を紹介しているので、できるだけ自分で本を読む習慣をつけ、自分の考えを形成できるようにしてほしい。</p>					
<p>教科書・参考文献など： 日本建築学会編『西洋建築史図集』</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 答えが一義的に定まるといったこれまでのような受動的な姿勢ではなく、むしろ思考の前提となっているもの、思考の枠組みがどのように形成されていくのかを自分自身で考えることを大事にしてほしい。</p>					

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
			○							◎				

都市計画 Urban Planning						必修		2単位	
学期区分	後期	区分・単位							
担当教員	三輪康一								
<p>授業の目的： 近代以降の都市計画の理念と計画技術の発展過程をふりかえり、現在の日本の都市が直面する計画課題について概観したうえで、都市計画の策定・実施プロセスに即した種々の都市計画の考え方や計画技法について論述する。とりわけ、今後の大都市で重要な課題となる市街地整備と市民参加のまちづくりについて注目し、その意義と実践プロセス、実現手段を、具体の事例を取り上げて論じる。以上の過程から、受講者が、建築から視点を広げて、地区、地域、都市、そして都市計画、まちづくりに対して自らの問題意識を育てていくことを目的とする。</p> <p>到達目標： これからの都市のあり方、都市計画・まちづくり・生活環境のあり方について、受講者各自が自らの考えをしっかりと確立し、さらに専門的な関連講義のための基礎となる包括的な専門知識を獲得することが目標。そのため、都市の物的環境と社会現象について基礎的な知識と正確な認識をもち、都市計画の基本的な考え方、方法、制度と仕組みについて理解することが求められる。</p> <p>授業内容： 以下のテーマについて講述し、それぞれ事例を紹介する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション（都市、都市計画を学ぶ姿勢を知る：理念・認識・技術） 2. 近代都市計画史（欧米①）（都市問題解決の歩みと先人の試みをふりかえり、専門家としての使命を学ぶ） 3. 近代都市計画史（欧米②）（同上） 4. 近代都市計画史（日本）（同上） 5. 都市解析①都市構造と都市化（都市の性格を把握するための基礎知識を獲得する） 6. 都市解析②市街地構成と環境評価指標（市街地の性格を把握するための基礎知識を獲得する） 7. 現代都市の問題と都市計画課題（現代都市が直面する問題を考え、都市計画の課題について認識する） 8. 都市基本計画の理論と構成（その計画理論と計画手法を学ぶ） 9. 土地利用計画と交通計画（その計画理論と計画手法を学ぶ） 10. 住宅地計画（事例にもとづき、その計画理論と計画手法を学ぶ） 11. 都市更新と市街地整備計画（その計画課題を理解し、整備の方向性と計画手法、整備制度を学ぶ） 12. 市民参加のまちづくり①（市民まちづくりの発生と必要性、支援の仕組みを学ぶ） 13. 市民参加のまちづくり②（事例をもとにその意義とプロセスを学び、今後のあるべき方向と専門家の役割を考える） 14. 都市環境（都市環境問題への認識を得て、今後のあるべき方向と専門家の役割を考える） 15. 期末試験 <p>授業の進め方： 授業時に配布する資料、図版、スライド等をもちいることによって、視覚的な情報を重視した講義を行う。また、必要に応じて、各回の講義の最後に、理解すべき事項を受講者自ら確認するために確認テストを行う。</p> <p>成績評価方法： 主として定期試験の成績によるが、上記確認テストの提出状況を適宜加味する。</p> <p>履修上の注意： 「都市・住宅史」を受講していることが望ましい。</p>									
<p>教科書・参考文献など： 教科書は特に指定せず、授業時に配布する資料により講義する。参考文献は、各講義のテーマに即してその都度、提示する。</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 講義で得た知識だけに留まっていたは意味がない。実際にまちを歩き、観察し、現実の都市や地域の問題を感得し、都市計画、まちづくりを実感することが大切。まちは生きた教科書だから。</p>									

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号はP.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
			○							◎				

居住環境論		Theory of Built Environment			
学期区分	前期	区分・単位	必修 2単位		
担当教員	塩崎賢明				
<p>授業の目的： 建築の中でも住宅は量的に最も多いだけでなく、特別重要な意味を持っている。それは個人と居住空間の関係だけでなく、人間集団とその居住空間の関係を含んでいる。住宅はまたその環境と切り離して考えることはできない。居住環境を総体として良好なものに形成していく行為は、人間の本性の欲求であるが、それは意識的・計画的に行う必要があり、人類史はその歴史であるともいえる。この授業では、人間居住の空間的拠点である住宅および居住環境についてその形成過程・計画・政策の側面から講述する。</p> <p>到達目標： 国内外の居住地計画・住宅政策の発展過程を学び、現代日本における課題を認識し、それに対する対応策に関する知識を習得する。あわせてこれらの問題に対する自らの考え方を養う。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 居住環境論概説 ② 住宅問題・住宅事情 ③ 住宅問題の発生と住宅政策－イギリスの経験－ ④ 戦前の住宅事情・住宅対策 ⑤ 戦後の住宅政策の系譜 ⑥ 高度成長と土地・住宅問題，および対応策 ⑦ 木造密集市街地の改善 ⑧ マンション居住と管理問題 ⑨ 高齢社会と福祉の住宅・まちづくり ⑩ 都市環境問題－サステイナブルシティー ⑪ 大規模災害と復興まちづくり ⑫ 震災と住宅復興 ⑬ 住宅・まちづくりと参加 <p>授業の進め方： 上記のテーマについて、教科書・配分資料・パワーポイントなどにより講義を行う。必要に応じてゲスト講師の特別講義を交える。</p> <p>成績評価方法： 定期試験によって成績を評価する。履修状況も加味する。</p> <p>履修上の注意： 住宅・まちづくりの重要なキーワードについて、教科書を熟読するとともに、講義レジュメなどに紹介する参考文献を自発的に学習することが望ましい。</p>					
<p>教科書・参考文献など： 教科書：塩崎賢明編『住宅政策の再生』（日本経済評論社）</p> <p>オフィスアワー，学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 住宅についての興味関心をひろげ、住宅・住環境が抱える建築的・都市計画的・政策的課題を認識することを希望する。この授業では、住宅・住環境の計画・設計の前提となる、現代社会における住宅を取り巻く諸問題を扱い、最小限の専門的常識を伝えることをねらいとしているので、ぜひともそれをつかんでほしい。</p>					

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
				◎										

建築防災 Architectural Safety and Security Planning														
学期区分			後期			区分・単位			選択必修			2単位		
担当教員			北後明彦											
<p>授業の目的： 建築及び都市の設計においては、人命、財産および機能の安全確保が最優先されるべきで、その安全性確保のための理論と手法を学んで、実際の設計に適用できるようにする。</p> <p>到達目標： 火災や地震などの建築や都市空間における破壊のメカニズムを理解したうえで、それからの被害を軽減する技術や手法を学ぶとともに、それを設計のなかで具体化できるデザイン力を身につける。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 建築防災の原論 <ol style="list-style-type: none"> 1.1 建築防災の意義 1.2 建築防災の原理 1.3 建築災害の動向 2. 危険事象と人間 <ol style="list-style-type: none"> 2.1 災害の構造 2.2 危険事象の特徴 2.3 安全のための人間工学 3. 避難計画と避難設計法 <ol style="list-style-type: none"> 3.1 避難行動の特性 3.2 避難計画の原則 3.3 避難計算と避難設計法 4. 建築火災のメカニズムと制御 <ol style="list-style-type: none"> 4.1 燃焼の基礎事項 4.2 建物の火災性状 4.3 煙の有害性と流動特性 4.4 煙制御の方法と防排煙計画 5. 建築防火計画のフレーム <ol style="list-style-type: none"> 5.1 総合的建築防火計画 5.2 火災安全の性能設計 6. 地震その他の災害からの安全 <ol style="list-style-type: none"> 6.1 地震災害対策 6.2 環境防犯設計 6.3 その他の対策 <p>授業の進め方： 必要に応じて資料を配付するとともに、具体的な設計事例を紹介し、実社会においても役立つ知識の啓発に努める。</p> <p>成績評価方法： 社会において設計等の業務に携わるうえで必要とされる防災に関わる基本的な考え方と最低限の知識のレベルを、試験により確かめる。なお、レポートを加味することもある。</p> <p>履修上の注意： 環境心理、人間工学あるいは燃焼科学の基礎知識をもっていることが望ましい。</p>														
<p>教科書・参考文献など： 「建築防災・安全」(鹿島出版会), 「やさしい火災安全計画」(学芸出版), 「新版 建築防火」(朝倉書店)などを参考文献として推奨する。</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 授業終了時に、質疑の時間をとるので、積極的に質問・コメントをすること。</p>														

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目 (表中の記号は P.17の表を参照のこと)

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
											◎			

環境造形論		Environmental Design Theory												
学期区分	前期	区分・単位			選択			2単位						
担当教員	重村 力													
<p>授業の目的： 人間は自分たちの住む環境をさまざまにかたちづくってきました。ピラミッドや、塔や、社寺や、城塞や、広場や、伽藍、バザールがそれです。住まいの形も様々です。その多様な形には時代、地域、人々の集団、技術、価値観が表現されています。この講義では、環境のデザインについて、関連する知見を学習しながら考察を深めます。これらを説明する様々な造形理論について、事例を紹介しながら、また私自身の計画デザイン事例を紹介しながら講述します。</p> <p>到達目標： 計画者、デザイナーに必要な代表的な環境造形の事例についてその背景を含めて知識を持つこと。造形理論に関連したいくつかの理論の基礎を理解すること。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 造形表現の原理 (機能と表現、造形と心理、意味の形成、集団の象徴) 2. 環境造形の固有の原型・原理、その分類と発達 (外部表現、内部空間、内外交流の諸空間と、その造形) 3. 生活行動・機能と環境造形表現の応答 (機能主義、有機主義) 4. 自然環境と建築・環境造形の応答 (気候風土、人工と自然、克服、対比、調和、生態学的な考え方) 5. 都市のイメージの形成とデザイン (集団が共有するイメージ、主体と参加、時間的の形成) 6. 地域性、場所性とデザイン (地域の材料と技法、生活の環境的作法、環境の文脈の形成) 7. 環境デザイン事例、調査法 <p>授業の進め方： 上記の内容について講述します。途中で、質問や感想などについて小レポートを提出してもらうことがあります。その後の講義で、これらの内容に応えます。その他に講義中に指示する文献について読んだレポートを提出してもらうことがあります。</p> <p>成績評価方法： 講義では出席をとりません。ただし、随時要求する提出物 (内容にそった適切なもの)、試験、自己申告評価、の三点を勘案して成績を評価します。この授業に関連して自分で行った読書、建築物の鑑賞が、この授業を理解しふさわしいものである場合、特にこれも評価します。講義の内容を理解し、自分の考えもしっかりしているものに A を与えます。</p> <p>履修上の注意： 「建築・住居論」「居住環境論」「建築計画 I」を履修していることが望ましい。</p>														
<p>教科書・参考文献など： 吉阪隆正「環境と造形」「世界の建築」(勁草書房)、香山壽夫「建築意匠講義」(東京大学出版会)、ケビン・リンチ「都市のイメージ」(岩波書店)、岡田光正「建築人間工学、空間デザインの原点」(理工学社)</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ： この講義に関連した研究室への質問時間は、自然科学棟 3 号館812のドアに表示する。メールで質問するものは、QA-shige@arch.kobe-u.ac.jp (ただし時間的に直ちに答えるとは限らない)</p>														

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目 (表中の記号は P.17の表を参照のこと)

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
											◎			

建築設計論		Theory of Architectural Design														
学期区分	後期	区分・単位			選択			2単位								
担当教員	末包伸吾															
<p>授業の目的： この講義では、主に建築のデザインとその考え方に焦点をあわせた、建築の設計にかかわる理論とそれにもとづくデザインについて、①建築の理論、②建築の構成、③建築の空間、④建築設計の拡がりという4つの視点から包括的に講述し、建築や都市の設計・デザインに関する知識や手法を習得することを目的とする。</p> <p>到達目標： 具体的な建築空間を対象に、空間の構成・意匠の視点からその設計・計画理念や設計手法を習得するとともに、その意義を考察できること。空間創造のための課題発見、計画立案、デザイン構築の能力を高めることを目標とする。</p> <p>授業内容： 1. 近代建築の設計理論とデザイン 2. 現代建築の設計理論とデザイン 3. 日本の戦後における建築の設計理論とデザイン</p> <p>授業の進め方： 建築設計に関する基礎的な知識のみならず、具体的な事例紹介を通して実践的な設計技法の習得が図れるよう、可能な限りビジュアルな教材を用いる。</p> <p>成績評価方法： 上記レポートを主に、討議への参加状況等を加味して評価する。</p> <p>履修上の注意： 特になし。</p>																
<p>教科書・参考文献など： 教科書：「テキスト建築意匠」（学芸出版社）および「近代建築史」（昭和堂） 参考文献：「建築20世紀」（新建築社）</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 設計というプロセスにおける様々な思考を扱う講義です。従って、自らの設計プロセスへと転換するためには、本講義への能動的な取り組みが求められます。</p>																

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号はP.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
											◎			

計画演習 I		Advanced Exercise of Architectural Design Studio I													
学期区分	後期	区分・単位	選択										3単位		
担当教員	計画系教員，遠藤秀平，與謝野久														
<p>授業の目的： 計画演習 I では，比較的制約の少ない設計条件のもとで，独創的で自由な発想の作品を期待した課題設定となっている。それにより，これまでのデザイン系の演習科目および関連する専門講義で修得した知識と技術を総合化し，より高度なデザイン・造形及び空間創造のための専門能力を養うことを目的とする。</p> <p>到達目標： 計画演習 I では，独創的な発想に基づく造形力，表現力や，論理的思考に基づく空間構成力，計画立案能力，さらに自己管理能力を養うことを目標としている。 また，図面，模型，写真，文章などを総合した図面表現技術や自分の意思を正確に伝達できるコミュニケーション能力の獲得も目標となる。</p> <p>授業内容： 第1課題は，研修と宿泊などの複数の機能をもつ比較的大規模なセミナーハウスの設計課題である。立地環境の読み取りや，建物と周辺環境の関係，プログラムと空間の関係を考えた，高度な計画立案能力，空間構成力の習得を期待した課題となっている。第2課題は，建築実務の現場で活躍している建築家による課題で，講師によって個性豊かなテーマが設定される。設計指導を通じて将来建築家として必要となる構想力，表現能力，計画立案能力が問われ，高度なデザイン能力を研磨する。 第2課題は年度により異なるが，平成18年度の課題は，以下の通り。 1. 神戸大学セミナーハウス 2. グループ別課題－非常勤講師課題 A) 開放系の「かたち」を考える－都心の新聞社・ホール複合ビル－ B) 面構造による葬送空間</p> <p>授業の進め方： 担当教員，支援スタッフ，ティーチングアシスタント（TA：大学院生）がチームを組んで，製図指導を行なう。ここでは少人数（15～20人程度）グループによるスタジオ形式の指導を行なう。各課題終了後，作品講評会を行い，デザイン系の教員，非常勤講師，学生が一堂に介して討論し，意見を交換する。</p> <p>成績評価方法： 課題毎に図面の仕上がり，課題に対する達成度，授業中の小課題等を総合して担当教員が評価し，全課題の評点を平均して最終評価とする。課題未提出は0点，提出が遅れたものは減点の対象となる。</p> <p>履修上の注意： 1) 製図室で図面作成作業を行ない，指導を受けること。 2) 図面，成果品の提出期限を厳守のこと。 3) すべての課題を提出することが単位取得の基本条件となる。</p>															
<p>教科書・参考文献など： 各種建築物の実例集，課題ごとに参考文献等を紹介する。 「第2版 コンパクト建築設計資料集成」日本建築学会編，丸善</p> <p>オフィスアワー，学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 特にスケジュール管理をはじめとする自己管理能力が問われます。その他，スタジオ棟の環境管理，環境整備に取り組むことも期待しています。</p>															

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
											◎			

計画演習Ⅱ		Advanced Exercise of Architectural Design Studio Ⅱ										
学期区分	前期	区分・単位	選択									3単位
担当教員	計画系教員， 柏木浩一， 武田史朗											
<p>授業の目的： 計画演習Ⅱでは，設計演習Ⅲ，計画演習Ⅰで修得した知識と技術を総合化し，より高度なデザイン・造形及び空間創造のための専門能力を養うことを目的とする。ここでは，計画演習Ⅰまでの課題のリプレゼンテーションとデザインの現場で活躍する建築家，ランドスケープアーキテクトによる演習課題を行なう。</p> <p>到達目標： 計画演習Ⅱは，計画演習Ⅰに引き続き，独創的な発想に基づく造形力，表現力や，論理的思考に基づく空間構成力，計画立案能力を養うことを目標としている。さらに卒業研究（設計）に取り組むことのできる，これまでより一段高度な構想力，専門能力や，自己管理能力も身に付ける。</p> <p>授業内容： 第1課題の「リプレゼンテーション」では，設計演習Ⅲ，計画演習Ⅰの作品から1つを選び，図面，模型，写真，文章などを総合的に表現するプレゼンテーション技術を問う。ここでは，自分の意思を図面と言葉で正確に伝達できるコミュニケーション能力の獲得も目標とされる。第2課題は，デザインの現場で活躍する建築家，ランドスケープアーキテクトによる課題で，講師によって高度なデザインテーマが設定される。設計指導を通じて将来建築家として必要となる構想力，表現能力，計画立案能力が問われ，高度なデザイン能力を研磨する。 第2課題は年度により異なるが，平成18年度の課題は，以下の通り。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. リプレゼンテーション 2. グループ別課題－非常勤講師課題 <ol style="list-style-type: none"> A) CONTEMPORARY ART MUSEUM B) 神戸大学の Central Spine をつくる <p>授業の進め方： 担当教員，支援スタッフ，ティーチングアシスタント（TA：大学院生）がチームを組んで，製図指導を行なう。ここでは少人数（15～20人程度）グループによるスタジオ形式の指導を行なう。各課題終了後，作品講評会を行い，デザイン系の教員，非常勤講師，学生が一堂に介して討論し，意見を交換する。</p> <p>成績評価方法： 課題毎に図面の仕上がり，課題に対する達成度，授業中の小課題等を総合して担当教員が評価し，全課題の評点を平均して最終評価とする。課題未提出は0点，提出が遅れたものは減点の対象となる。</p> <p>履修上の注意：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 製図室で図面作成作業を行ない，指導を受けること。 2) 図面，成果品の提出期限を厳守のこと。 3) すべての課題を提出することが単位取得の基本条件となる。 												
<p>教科書・参考書など： 各種建築物の実例集，課題ごとに参考文献等を紹介する。</p> <p>オフィスアワー，学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 特にスケジュール管理をはじめとする自己管理能力が問われます。</p>												

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
											◎			

近代建築史		History of Modern Architecture			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位		
担当教員	足立裕司				
<p>授業の目的： ヨーロッパの近代社会から近代建築が成立していく過程を、社会史、思想史、芸術史及び技術史等の背景との関連から考察し、それがどのように現代建築の礎を築くに至ったかを理解することを目的とする。</p> <p>到達目標： 近代建築という領域を形づくる様々な要因を理解し、建築を総合的に捉えることができる歴史的な視野を涵養する。形式的な理解ではなく、建築家がどのような理念、思想の下に新しい建築を創造するに至ったか、また新しい建築理念と形態はどのような整合性をもって意図されているかを考える能力を身につける。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 近代建築とは何か：講義の視点と現代との関連 2. ルネサンス建築の理念と形式 3. ルネサンス建築からマネエリスムへ 4. バロック建築の展開 5. ルネサンス建築の伝播 6. 新古典主義と歴史主義：ロマン主義とアカデミズム 7. 産業革命下の建築：新しい建築技術と建築形式 8. アーツ・アンド・クラフツ運動：建築・デザインと職能倫理 9. アール・ヌーヴォーと建築：大衆と都市文化 10. ドイツ工作連盟の理念と建築 11. 造形の革新：未来派、デ・ステイル、ロシア構成主義 12. バウハウスの建築理念 13. モダニズムの形成と理論 14. 近代主義の伝播と現代建築への展開 <p>授業の進め方： 講述だけでなく、必要に応じて OHP、スライドを用い、概念的な理解だけでなく視覚的な理解も重視する。</p> <p>成績評価方法： 学期末の試験と何度かのレポートを参考にして評価する。特に思考能力の有無を評価する。</p> <p>履修上の注意： 西洋建築史を引き継いで講義を行うので、同科目を履修していることが望ましい。思想史、理念史、芸術・造形史としての性格が強くなるので、必要に応じて自己学習が求められる。その都度参考図書を紹介しているので、できるだけ自分で本を読む習慣をつけ、自分の考えを形成できるようにしてほしい。</p>					
<p>教科書・参考文献など： 日本建築学会編『近代建築史図集』</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 現代に直接つながる設計思想を形成した時期であり、建築家の作品と志向がどのように関連しているのかを、自己の設計活動を通じて考えてほしい。</p>					

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
◎														

都市設計 Urban Design									
学期区分	後期	区分・単位			選択	2単位			
担当教員	安田丑作								
<p>授業の目的： 都市で生活し活動する人々にとってもっとも身近で具体的に知覚しうる環境としての景観に着目し，都市構造から身近な生活空間にいたる都市設計理論と具体的・実践的技法について講述する。</p> <p>到達目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 景観と知覚理論とその応用についての理解 ② 都市デザインの歴史とその特性についての理解 ③ 都市景観構成要素とその調査手法の習得 ④ 都市デザインとその具体的技法の習得 <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 都市計画と都市設計（1回） 2. 景観の基礎概念と知覚理論（3回） 3. 都市設計の系譜と空間構成技法（3回） 4. 都市景観構成要素と景観資源調査（2回） 5. 都市景観形成基本計画の立案と構成（2回） 6. 景観設計とその技法—コミュニティ・デザインの視点から—（2回） 7. 景観誘導とガイドライン（2回） <p>授業の進め方： 都市設計に関する基礎的知識のみならず，具体的な事例紹介を通して実践的な設計技法の習得が図れるように，出来る限りヴィジュアルな教材を用いて進める。</p> <p>成績評価方法： 授業中での小演習および期末試験，履修状況により総合的に評価。</p> <p>履修上の注意： 「都市・住宅史」，「都市計画（建築系）」を履修しておくことが望ましい。</p>									
<p>教科書・参考文献など： 適宜プリントを配布する他，参考文献などをその都度紹介する。</p> <p>オフィスアワー，学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 日ごろから身近な街や建築，そこでの人々の行動などに興味をもち観察・考察する習慣を身につけることが何より大切。</p>									

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
											◎			

まちづくり論 Theory of Community Development														
学期区分			前期			区分・単位			選択			2単位		
担当教員			後藤祐介, 森崎輝行											
<p>授業の目的: この授業の目的は、地域社会（コミュニティ）を主体とするまちづくりのあり方を様々な角度から論じ、その方向について学習することにある。 居住環境の改善、歴史的環境保全、地域活性化、住民参加型まちづくりなどの課題について講述し、特に阪神大震災の復興過程における具体的事例を中心にまちづくりの手法を解説する。</p> <p>到達目標: まちづくりに関する基本的な概念、手法について理解する。 また、住民参加型まちづくりの進め方、評価すべき点、問題点を把握し、今後の市民まちづくりのあり方を考えるための基礎を学び、具体的な地区についてまちづくりのあり方を考えてみる。</p> <p>授業内容: Part I（前半） 1. 授業の目標と進め方 2. なぜ住民参加のまちづくりなのか* 3. 「まちづくり論」の系譜（近隣住区論とまち住区論等） 4. 阪神・淡路大震災の復興まちづくりの特性 5. 「ルールづくり」によるまちづくり 6. 「ものづくり」によるまちづくり 7. 「既成市街地」まちづくりの実践例（岡本, 若宮等） Part II（後半） 8. 授業の目標と進め方 9. まちづくりとは何か（都市計画との違いを含めて） 10. まちづくりの計画の組立て（論理的側面と帰納的側面） 11. コミュニティ・アーキテクトとまちづくり（いえづくりからまちづくり）* 12. いえをデザインする, まちをデザインする 13. まちづくりを推進するために（テーマの共同化, 運命の共同化） 14. 事業地区と白地地区のまちづくりについて 15. 成果報告と講評 （1～7後藤, 8～14森崎, 但し, 1～7, 8～14の順番は前後する場合がある。） *印については、プランナー、建築家としての倫理観を含めて講述する。</p> <p>授業の進め方: 基本的には講義形式で行う。必要に応じて、まちづくりの計画・事業・進展等について、配布資料・スライドなどを用いてヴィジュアルに示す。</p> <p>成績評価方法: 各担当それぞれ50点で評価し、合計点（最高100点）を成績とする。 各担当の評価は、基本的には最終課題レポートで行ない、授業時の理解確認のための小レポートを加味する場合もある。</p> <p>履修上の注意:</p>														
<p>教科書・参考文献など: 「アメリカ大都市の生と死」J. ジェイコブス・黒川紀章（SD 選書）（レポート課題で読んでもらう）（後藤） その他授業時に指示する。</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ: オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 「好きこそものの上手なれ」で、まちづくりでも建築でも興味をもって、積極的に取り組んでほしい。</p>														

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
				○						◎				

ランドスケープデザイン		Landscape Design	
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	増田 昇		
<p>授業の目的： 本授業では、ランドスケープデザインの基礎的知識を習得するとともにランドスケープを構成する自然の多様な様相に対する洞察力と創造的なデザイン能力を結びつける論理的思考力を養うことを目標とする。</p> <p>到達目標： ランドスケープデザインに関する基礎的な概念と知識、論理的思考力を獲得すること。</p> <p>授業内容： ランドスケープ領域の基本的枠組み並びに意義と役割： 環境から捉えた時代認識を背景に、ランドスケープの構成要素や構成概念を論述するとともにランドスケープの果たすべき役割と意義を概説する。 ランドスケープデザインの系譜： ヨーロッパと日本の庭園史を通じてランドスケープデザインの系譜を概説する。 公園緑地等の歴史的変遷： 欧米における都市公園の成立から日本における発展過程を論説するとともに大都市圏から都市域における広域緑地計画の歴史的変遷を概説する。 世界各国におけるランドスケープデザイン事例の紹介： ランドスケープデザインの事例紹介を通じて、デザインの対象領域を認識するとともに事例に対する自由討議を実施し、現代的課題を認識する。 ランドスケープのデザインプロセス： 具体的な対象空間を事例に、プランニングからデザイン、マネジメントに至る一連のデザインプロセスを学習する。 環境共生時代におけるランドスケープデザインの方向性： 先進事例を紹介し、事例に対する自由討議を通じて新たな方向性や課題を認識する。 植栽・緑化デザイン： ランドスケープの主要な構成要素である植物や植生に関する基礎的知識とそのデザイン手法を概説する。</p> <p>授業の進め方： 参考資料のコピー配布、パワーポイントを交えて講述する。</p> <p>成績評価方法： 基本的には定期試験に代えて、レポート提出とする。</p> <p>参考図書： 景観計画（鹿島出版会）、アーバンデザイン（青銅社）、住環境の計画・3（彰国社）、造園学（朝倉書店）、都市緑地の計画と設計（彰国社）</p> <p>履修上の注意： 特になし</p>			
<p>教科書・参考文献など： 講義の始めに述べる。</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。</p>			

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号はP.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
			○							◎				

建築・都市・環境法制 Law and Regulation of Building, Urban Regional Development and Environmental Conservation														
学期区分			前期			区分・単位			選択			2単位		
担当教員			浅野高史											
<p>授業の目的： 単体としての建築をはじめ，都市や地域などにおける開発行為および，環境保全のための各種法制度の基本的な考え方とその内容を概括し，建築計画，都市計画，地域開発，建築防災，公害防止などにおける行政上の諸問題について具体的な問題を参考にしながら，実務者としての考え方を含めて講述する。</p> <p>到達目標： 建築から都市，地域の環境をコントロールするための法制度の基本的な体系と仕組みを理解することを目標とする。またそれを踏まえて，今後の地球環境問題にまで関わる専門家としての基本的な姿勢を自ら身につける契機になることが期待されている。</p> <p>授業内容： 建築に関わる法制度の体系と考え方，都市計画の制度とまちづくりの仕組み，地域開発の誘導と環境保全制度等について，事例を紹介しながら講述する。 講義内容は，年度により異なるが，平成18年度は以下のように講義を行った。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 神戸のまちづくり・すまいづくり (1回) 2. 都市計画法と建築基準法 (2回) 3. 建築基準法概論 (1回) 4. 神戸市民の住環境等をまもりそだてる条例 (1回) 5. 市街地再開発事業の仕組みと課題 (2回) 6. 市街地再開発事業 (1回) 7. 建築物の安全・安心の取組み (1回) 8. 密集市街地整備と細街路整備 (1回) 9. まちづくり条例・まちづくり協議会 (2回) 10. 住民主体のまちづくり (1回) 11. 建築紛争と建築協定 (1回) 12. 期末テスト (1回) <p>授業の進め方： 授業時に配布する資料にもとづく講義形式とする。また，講義に関連する内容に応じて，適宜現地における見学会を実施する。</p> <p>成績評価方法： 定期試験の成績による。</p> <p>履修上の注意： 既修得科目の要望は特にない。</p>														
<p>教科書・参考文献など： 教科書は特に指定はせず，授業時に配布する資料により講義する。参考文献は，各講義のテーマに即してその都度，提示する。</p> <p>オフィスアワー，学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 行政組織のなかでの実務を通じた具体的かつ現実的な事例を紹介していきたい。</p>														

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
				○						◎				

建築材料学		Structural Materials	
学期区分	前期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	田淵基嗣		
<p>授業の目的： 建物を設計・施工するのに際して、使用する構造材料の性質を理解しておくことは極めて重要である。本講義では、建築で使用される代表的な構造材料である鋼・コンクリート・木材について、製造方法、機械的（力学的）性質、材料試験方法、施工性、耐久性など、建物を設計するのに不可欠な専門基礎知識について講述する。</p> <p>到達目標： 建築構造材料の機械的性質および使用上の注意事項を理解し、設計・施工・維持管理するために必要な基礎知識の修得。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 本講義の目的と予定（専門基礎知識としての構造材料の種類、要求性能について考える） 1回 2. 鋼（構造材料としての鋼に関する専門基礎知識を修得させる） 4回 <ul style="list-style-type: none"> ・製造方法 ・化学成分・熱処理が鋼の性質に与える影響 ・機械的性質 ・鋼の種類 3. コンクリート（構造材料としてのコンクリートに関する専門基礎知識を修得させるとともに、技術者のあり方を考える） 7回 <ul style="list-style-type: none"> ・セメントの製造方法・種類 ・骨材 ・混和材料 ・フレッシュコンクリートの性質 ・硬化コンクリートの機械的性質 ・コンクリートの施工 4. 木材（構造材料としての木材に関する専門基礎知識を修得させる） 2回 <ul style="list-style-type: none"> ・種類 ・機械的性質 5. 定期試験（理解度を確認する） 1回 <p>授業の進め方： 鋼・コンクリート・木材の製造方法、機械的性質および施工上の注意点などの理解を深めるためにVTRを積極的に使用する。コンクリートについては、材料の選択ミス・施工ミスにより生じたトラブルの例を紹介し、技術者倫理・技術者のあり方について考える。</p> <p>成績評価方法： 鋼・コンクリートに関する講義が終了した時点で課する2つのレポートと定期試験により評価する。</p> <p>履修上の注意： 履修要件は特にない。理解を深める手助けのために使用するVTRは必ず見るようにすること。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 日本建築学会編「建築材料用教材」丸善 その他、適宜資料を配布する</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ： 構造材料に関する正しい知識を習得して建物を見てほしい。今まで漠然と見ていた建物についても、材料に関する知識が加わるだけで新しい発見があると思う。質問があれば、各授業後に質問表を配布するので授業中の質問以外にも不明な点は確認してほしい。</p>			

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号はP.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
										◎				

構造力学 C		Structural Mechanics C			
学期区分	後期	区分・単位	必修 2単位		
担当教員	大谷 恭弘				
<p>授業の目的： 本授業では、「構造力学 A」と「構造力学 B」で学んだ静定梁や静定骨組の解法、及び比較的単純な不静定構造の解析に関する理論や手法をさらに発展させ、2次元場における応力やひずみ、一般的な不静定骨組構造の解析法について学習する。また、構造物の解析においては極めて重要な原理・定理である「仮想仕事の原理」、およびエネルギー諸定理について、その理論と骨組構造の解析への適用について学習する。そして、構造物における「力の場」と「変形の場」を解析するための2種類の方法、すなわち「応力法」と「変位法」の基本的な考え方を理解する。</p> <p>到達目標：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2次元平面場における応力やひずみ、およびそれらの関係について理解する。 ・「仮想仕事の原理」の意味を理解し、エネルギー諸定理の構造解析への応用と適用法を習得する。 ・低層少スパンの剛接骨組構造に対して極めて有用な解析手法である「たわみ角法」の理論を理解し、解析手順・手法を習得する。 ・構造力学の「からくり」を理解し、複雑な問題の単純化とその解法における手順を学ぶことにより、新たな問題に対する自主的解決能力の向上、ならびに創造性を育むための自己能力の開発の動機付けと基礎を築く。 <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス（1回） 基礎的専門科目としての本講義の内容と目的及び授業予定の説明、「構造力学におけるモデル化」、「力の世界と変形の世界」についての話 2. 2次元平面場（2回） 2次元応力場におけるモールの応力円や主応力、2次元平面場における応力とひずみ、およびそれらの関係 3. 仮想仕事の原理（4回） ひずみエネルギーの計算、「仮想変位の原理」、「仮想力の原理」の解説と応用、「単位仮想荷重法」の解説と応用 4. エネルギー諸定理（2回） 「ポテンシャルエネルギー最小の原理」、「コンプリメンタリーエネルギー最小の原理」、「カステリアノの定理」、「最小仕事の原理」、「相反作用の定理」等の誘導と適用 5. 「応力法」による骨組構造物の解析（2回） 弾性方程式法による不静定構造物の一般的解法 6. 「変位法」による骨組構造物の解析（4回） たわみ角法の理論の説明と公式の誘導、簡単な構造への適用、剛接骨組構造の解析 <p>授業の進め方： 講義形式で行う。講義用配布資料に沿って、教科書と板書を用いて行う。必要に応じて OHP 等を併用する。</p> <p>成績評価方法： 期末試験（筆記試験＋口頭試問（一部））により評価する。また、中間に実施する小テストの成績も勘案する。</p> <p>履修上の注意： 「構造力学 A」、および「構造力学 B」を修得していることが極めて望ましい。</p>					
<p>教科書・参考文献など：</p> <p>教科書：「建築構造力学 図説・演習Ⅰ」（中村恒善 編著 野中 他 共著）丸善 「建築構造力学 図説・演習Ⅱ」（中村恒善 編著 石田 他 共著）丸善</p> <p>参考図書：「建築骨組の力学」（伴／金谷／藤原 共著）森北出版 「構造力学 第Ⅱ巻」（小西一郎 他 共著）丸善 「構造解析学Ⅱ」（小松定夫 著）丸善</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 授業に関する情報を下記の URL に記載。http://www.kobe-u.ac.jp/scs/class.html</p>					

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
								○		◎				

構造演習 I		Structural Exercises I	
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 1単位
担当教員	構造系教員		
<p>授業の目的： 演習を通して、構造力学で学んだ内容に関する理解を深めることを目的とする。演習内容は、「構造力学 A」および「構造力学 B」の範囲である。演習は、3つのクラスに分かれて行い、問題を独力で解くことにより進める。</p> <p>到達目標：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・断面の性質を理解し、断面諸量を求めることができる。 ・静定構造物（静定梁、静定ラーメン、静定トラス）の断面力と変形を求めることができる。 ・簡単な不静定構造物の断面力と変形を求めることができる。 ・梁の全塑性曲げモーメントを求め、静定構造物の塑性崩壊荷重を求めることができる。 <p>授業内容： 本演習では、以下の内容に関する演習を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 静定梁の応力 3. 断面の性質 4. 静定トラス 5. 静定ラーメン 6. 不静定梁 7. 全塑性曲げモーメント <p>授業の進め方： 課題に対する解答をテスト形式で行う。</p> <p>成績評価方法： 演習の成績により評価し、60点以上を合格とする。</p> <p>履修上の注意：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「構造力学 A」および「構造力学 B」の内容を理解していること。 			
<p>教科書・参考書など： 教科書：建築構造力学 図説・演習 I（中村恒善編著，野中他共著），丸善 オフィスアワー，学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 構造力学は、建築を創る上で必要不可欠な普遍的学問です。ただし、講義で得た知識を本当の意味で自分に根付かせるためには、問題を自分で解いて、理解を深めることが重要です。紙と鉛筆を用意して、あれこれ考えながら問題を解いていく習慣を身につけましょう。</p>			

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
								○			◎			

構造演習Ⅱ		Structural Exercises Ⅱ			
学期区分	後期	区分・単位	選択必修	1単位	
担当教員	構造系教員				
<p>授業の目的： 演習を通して、「構造力学C」、「建築鋼構造学」および「建築コンクリート構造学」で学んでいる内容に関する理解を深めることを目的とする。</p> <p>到達目標：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「2次元平面場の応力と歪」、「仮想仕事の原理」、「エネルギー諸定理」、「たわみ角法」などの理論や解法を理解し、構造物に適用することができる。 ・ 建築コンクリート造建物の部材の許容応力設計を行うことができる。 ・ 建築鋼構造建物の部材および接合部の許容応力度設計を行うことができる。 <p>授業内容： 本演習では、以下の内容に関する演習を行う。</p> <p>「構造力学C」：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2次元平面場 2. 仮想仕事の原理 3. エネルギー諸定理 4. たわみ角法 5. 「応力法」および「変位法」による不静定構造物の一般的解法 <p>「建築コンクリート構造学」：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 梁の曲げ設計 2. 柱の曲げ設計 3. 柱および梁のせん断設計 4. 床スラブの設計 5. 耐震壁の設計 <p>「建築鋼構造学」：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 引張材の設計 2. 圧縮材の設計 3. 曲げ材の設計 4. 高力ボルト接合部の設計 5. 溶接接合部の設計 <p>授業の進め方： 課題に対する解答をテスト形式で行う。</p> <p>成績評価方法： 演習の成績により評価する。</p> <p>履修上の注意：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「構造力学C」、「建築鋼構造学」および「建築コンクリート構造学」の内容を理解していること。 					
<p>教科書：参考文献など： 「構造力学C」、「建築鋼構造学」および「建築コンクリート構造学」で使用している教科書・参考文献</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知する。 実際に建築を設計し、造りあげるためには、構造力学と各種構造に対する知識が不可欠であるばかりではなく、一品生産の建築に柔軟に適用し、問題を解決できる能力が必要である。演習を通して、学んだ知識を実際に応用できる力を身につけることを望む。</p>					

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号はP.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
								○			◎			

建築鋼構造学		Steel Structure for Buildings			
学期区分	後期	区分・単位	必修 2単位		
担当教員	田中 剛				
<p>授業の目的： 建築鋼構造設計の入門として、建築鋼構造に用いられる鋼材の基本性質および部材と接合部の基本的な力学的挙動を講述するとともに許容応力度設計法に基づく設計の考え方を理解する。</p> <p>到達目標： 建築鋼構造の部材および接合部の挙動を理解し、許容応力度設計が行えるようになること。</p> <p>授業内容： 本講義では、以下の内容について講述する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 鋼構造骨組の概要（4回） <ol style="list-style-type: none"> 1-1. 鋼の製造 1-2. 鋼材の性質 1-3. 鋼構造骨組の軸組と接合部の概要 1-4. 鋼構造の許容応力度設計 2. 座屈と座屈補剛（6回） <ol style="list-style-type: none"> 2-1. 単一圧縮材の曲げ座屈 2-2. 圧縮材の曲げ座屈補剛 2-3. 曲げ材の横座屈 2-4. 板の座屈 3. 部材・接合部の挙動と設計（4回） <ol style="list-style-type: none"> 3-1. 部材・接合部の設計条件 3-2. 部材の設計 3-3. 接合部の設計 4. 期末テスト（1回） <p>授業の進め方： 講義を中心に授業を進めていく。座屈現象および接合部の破壊現象などを見るために、視聴覚教材を利用する。講義を補うために、レポートを課す。</p> <p>成績評価方法： 期末テスト（70%）とレポート（30%）により評価し、60点以上を合格とする。</p> <p>履修上の注意：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「建築材料学」、「構造力学A」、「構造力学B」の内容は理解できているという前提で講義を行う。 ・同時に「構造演習Ⅱ」を履修することが極めて望ましい。 					
<p>教科書・参考文献など： 教科書：建築鋼構造の理論と設計（井上一朗），京都大学学術出版会</p> <p>オフィスアワー，学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 設計とは、クリエイティブな作業です。構造設計もまた然り。構造設計の第一歩は、紙と鉛筆を用意して、あれこれ考えながら試行錯誤を繰り返すことから始まります。ここで、設計式は与えられたものとして使うのではなく、時に疑問を感じながら、時になるほどと納得しながら使うことを心がけてください。構造設計への理解が深まるとともに設計の面白さが味わえるでしょう。</p>					

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号はP.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
											◎			

建築コンクリート構造学		Reinforced Concrete Structure for Buildings			
学期区分	後期	区分・単位	必修 2単位		
担当教員	孫 玉平				
<p>授業の目的： 鋼とコンクリートは建築物に最も多く利用される材料である。本講義は鋼とコンクリートを組み合わせて部材を構成する鉄筋コンクリート構造の基本的力学的性状を理解し、基本的な部材である梁および柱の設計ができるようになることを目的として行う。また、主として許容応力度設計法を講述するが、終局強度設計法についても簡単に紹介する。</p> <p>到達目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 鉄筋コンクリート構造の長所・短所を理解する。 2. 許容応力度法の原理を理解し、応用できる。 3. 鉄筋コンクリート主要部材の各種応力に対する抵抗メカニズムを理解する。 4. 鉄筋コンクリート主要部材の各種応力に対する設計方法を理解し、応用できる。 5. 鉄筋コンクリート主要部材の構造制限を把握する。 <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 鉄筋コンクリート構造概説（材料特性，許容応力度設計法） 2回 2. 鉄筋コンクリート梁の曲げ設計（基本仮定，許容曲げ耐力式の誘導と応用） 2回 3. 鉄筋コンクリート柱の曲げ設計（基本仮定，N-M 相関曲線の誘導と応用） 2回 4. 鉄筋コンクリート部材のせん断挙動とせん断補強（せん断抵抗メカニズム，せん断補強筋の設計） 4回 5. 耐震壁のせん断設計（耐震壁の力学的特性，許容水平せん断力の算定法） 1回 6. 床スラブ・基礎の設計（床スラブの曲げ設計，基礎底面積の算定） 2回 7. 付着・定着と配筋詳細（付着のメカニズム，付着・定着の検定方法） 1回 8. 期末試験 1回 <p>なお，講義中には2回ほど小テストを行う。</p> <p>授業の進め方： 講義は指定した教科書に従い進める。各回講義の目的と詳細内容は第一回目の講義時に説明する。 なお，本講義の特性を鑑み，板書を中心に講義を行う。</p> <p>成績評価方法： 期末テストと小テストの成績を以下の比率で最終成績の評価を行う。 テスト：小テスト＝8：2</p> <p>履修上の注意： 構造力学 A と構造力学 B を履修していること。 本講義内容に関する演習は構造演習Ⅱで行うため，構造演習Ⅱを併せて受講することが望ましい。</p>					
<p>教科書・参考書など</p> <p>教科書： 福島正人他：「鉄筋コンクリート構造」（第6版） 森北出版 参考書： 谷川他：「鉄筋コンクリート構造－理論と実践－」 森北出版 日本建築学会：「鉄筋コンクリート構造計算規準・同解説」 金田他：「建築の耐震・耐風入門」 彰国社</p> <p>オフィスアワー，学生へのメッセージ： オフィスアワー：毎週月曜日 午後5時～6時30分 学生へのメッセージ：厚い教科書が薄くなるように読んでいただきたい。また，担当教員を困らせるほどの鋭い質問を期待している。</p>					

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
											◎			

振動学 Structural Dynamics																												
学期区分			前期			区分・単位			必修			2単位																
担当教員			藤谷 秀雄																									
<p>授業の目的： 建築構造物が動的外力を受けた場合、どのような挙動をするかをニュートンの運動方程式に基づいて理解させる。建築物を簡単な振動系にモデル化して、それが満足する運動方程式の解法を修得させる。</p> <p>到達目標： 日本の建築物は、地震力および台風の強風にさらされる。日本において建築物を設計するためには、建築物の挙動についての動力学的理解が不可欠である。動的外力を受ける建築構造物の振動解析の方法を修得する。</p> <p>授業内容：</p> <table border="0"> <tr> <td>(1) 振動学の役割と構造設計法</td> <td>(2) 建築物の振動理論の基礎知識</td> </tr> <tr> <td>(3) 運動方程式と解</td> <td>(4) 非減衰1自由度系建築物の自由振動</td> </tr> <tr> <td>(5) 減衰1自由度系の自由振動</td> <td>(6) 減衰1自由度系の調和外力による強制振動</td> </tr> <tr> <td>(7) 減衰定数を求める方法</td> <td>(8) 等価粘性減衰定数</td> </tr> <tr> <td>(9) 弾性1自由度系の応答解析</td> <td>(10) 地震応答スペクトル</td> </tr> <tr> <td>(11) 地震応答予測</td> <td>(12) エネルギー応答スペクトル</td> </tr> <tr> <td>(13) 多層建築物の自由振動</td> <td>(14) 多層建築物の強制振動</td> </tr> </table> <p>授業の進め方： 簡単な振動モデル（模型）によって理解を容易にする。時間内の講義内容の理解を確実にするために、動力学の簡単な演習問題を解く。</p> <p>成績評価方法： 試験の成績を重視して評価を行う。ただし宿題の提出を加味する。</p> <p>履修上の注意： 高校の物理のうち力学関係を十分理解していることが望ましい。</p>															(1) 振動学の役割と構造設計法	(2) 建築物の振動理論の基礎知識	(3) 運動方程式と解	(4) 非減衰1自由度系建築物の自由振動	(5) 減衰1自由度系の自由振動	(6) 減衰1自由度系の調和外力による強制振動	(7) 減衰定数を求める方法	(8) 等価粘性減衰定数	(9) 弾性1自由度系の応答解析	(10) 地震応答スペクトル	(11) 地震応答予測	(12) エネルギー応答スペクトル	(13) 多層建築物の自由振動	(14) 多層建築物の強制振動
(1) 振動学の役割と構造設計法	(2) 建築物の振動理論の基礎知識																											
(3) 運動方程式と解	(4) 非減衰1自由度系建築物の自由振動																											
(5) 減衰1自由度系の自由振動	(6) 減衰1自由度系の調和外力による強制振動																											
(7) 減衰定数を求める方法	(8) 等価粘性減衰定数																											
(9) 弾性1自由度系の応答解析	(10) 地震応答スペクトル																											
(11) 地震応答予測	(12) エネルギー応答スペクトル																											
(13) 多層建築物の自由振動	(14) 多層建築物の強制振動																											
<p>教科書・参考文献など： 教科書：西川孝夫他「建築の振動」（朝倉書店） 参考書：柴田明德著「最新耐震構造解析」（森北出版）</p> <p>オフィスアワー，学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知する。 復習を重視してほしい。</p>																												

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
										◎				

防災構造工学		Disaster Prevention in Structural Engineering			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位		
担当教員	藤谷秀雄				
<p>授業の目的： 建築構造物の力学的特性と災害との関係を理解させる。建築物に作用する各種外乱の性質を定性的・定量的に理解し、これら外乱による被害例を検証し、それに対する構造工学に基づく防災対策について講述する。また防災計画における構造工学の役割についても講述する。</p> <p>到達目標： ・建築構造物に作用する外力の性質および設計で慣用される設計外力の考え方を理解する。 ・自然災害と建築構造の技術発展の関係を理解する。 ・防災計画における構造工学の役割について理解する。</p> <p>授業内容： (1) 防災における構造工学の役割，構造設計の目的 (2) 設計体系と荷重の種類 (3) 固定荷重，積載荷重 (4) 積雪荷重の性質と耐雪設計 (5) 風荷重の性質 (6) 耐風設計 (7) 地震災害事例 (8) 地震荷重 (9) 耐震設計 (10) 部材の変形性能，塑性ヒンジ (11) 保有水平耐力 (12) 地震被害の歴史と構造工学の進歩 (13) 耐震診断，耐震改修 (14) 防災のための新しい構造技術（免震構造・制振構造など）</p> <p>授業の進め方： 教科書の他，様々な学術・技術資料，スライド，OHP等を適宜使用する。</p> <p>成績評価方法： 試験の成績を重視して評価を行う。ただし宿題の提出を加味する。</p> <p>履修上の注意： 高校の物理のうち力学関係を十分理解していることが望ましい。</p>					
<p>教科書・参考文献など： 教科書：建築の耐震・耐風入門，彰国社 参考書：適宜，学会資料等を配布する。</p> <p>オフィスアワー，学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 復習を重視してほしい。</p>					

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号はP.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
											◎			

構造設計学		Structural Design			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位		
担当教員	田淵基嗣, 谷明勲				
<p>授業の目的： 地震国である我が国では、建物の耐震設計は極めて重要な問題である。本講義では、耐震設計の基本となる終局強度型設計法の考え方を中心に、鉄筋コンクリート構造物および鋼構造物の設計上の諸問題について、建築コンクリート構造学および建築鋼構造学の許容応力度設計法の内容を前提にして、より専門的な項目について個別的に講述する。</p> <p>到達目標： 耐震設計の基本的な考え方および終局強度型設計法の基本的考え方を理解することを目標とする。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 耐震設計の基本概念（大地震時における耐震設計の考え方に関する専門知識を習得する） 1回 鋼構造物の耐震設計（鋼構造を対象に、建築構造に関する専門知識を習得するとともに、技術者倫理についても考える） <ul style="list-style-type: none"> 鋼材に要求される性能 1回 梁、柱部材の設計の考え方 1回 接合部の設計の考え方 2回 柱脚の設計の考え方 1回 骨組の設計の考え方 1回 鋼構造に関する試験 1回 鉄筋コンクリート構造物の耐震設計（鉄筋コンクリート構造を対象に、建築構造に関する専門知識を習得するとともに、技術者倫理についても考える） <ul style="list-style-type: none"> 鉄筋コンクリート構造物に要求される構造性能 1回 保有水平耐力の考え方と構造計画 2回 梁、柱部材の終局曲げ強度 2回 構造部材の終局せん断強度 1回 鉄筋コンクリート構造に関する試験 1回 <p>なお、鉄筋コンクリート構造に関する講義では、2回程度演習を中心とした講義を行う（理論と実践の知識を統合する能力、自主的解決能力の養成、コミュニケーション能力）</p> <p>授業の進め方： 適宜参考資料を用いるとともに、実験例、地震被害例等を紹介しながら授業を進める。</p> <p>成績評価方法： 鋼構造に関する内容と鉄筋コンクリート構造に関する内容に分けて2度の試験を行う。成績は2つの試験の合計点で評価する。</p> <p>履修上の注意： 「建築コンクリート構造学」および「建築鋼構造学」の履修者を対象とする。</p>					
<p>教科書・参考文献など： 適宜資料を配付する。</p> <p>参考書： 鋼構造：井上一朗「建築鋼構造の理論と設計」京都大学学術出版会 鉄筋コンクリート構造：国土交通省住宅局建築指導課・日本建築主事会議・(財)日本建築センター編集：「2001年版建築物の構造関係技術解説書」工学図書株式会社</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ： 実験例、地震被害例を示しながら授業を進めるので、実構造物の破壊状況を理解しながら耐震設計の考え方を理解してほしい。オフィスアワーに関しては、担当教員に確認すること。</p>					

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号はP.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
								○			◎			

建築耐震構造		Earthquake Resistant Design for Buildings			
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位		
担当教員	福住忠裕				
<p>授業の目的： 建築構造物の耐震性能の意味を理解し、耐震性の高い構造物の創生をいかにしうるかを習得することを目的とし、構造物の地震応答解析および応答性状についての基本的な事柄を学ぶ。</p> <p>到達目標： 構造物の地震応答を具体的に把握するには、耐震構造解析のプロセスを完全に理解している必要がある。その上で地震動、地盤、構造物という3つのファクターが構造物の地震応答を決めるということが認識でき、地震応答性状が把握出来るようになれば本授業の目標は達成である。</p> <p>授業内容： 耐震構造の概説および建物の地震被害の観察から初め、地震力は応答レスポンスから概略認知出来ることを学習する。構造物の地震挙動は構造物の地震応答解析を行ってこそ真に理解できるものである。地震応答解析法を習得することは大事なことで考えている。同様に地盤に対する応答解析、さらには地盤-建物連成系としての応答解析についても学習する。最終的には地震時における多層構造物の挙動や応答性状を把握し、建築物の耐震性に関する基礎知識を習得する。このほかフレームや立体トラスについてもふれることとし、講義内容は以下のようなものとする。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 耐震構造の考え方 2. 地震被害 3. 数値積分法による応答解析法 4. モーダルアナリシスおよびスペクトル法による応答解析法 5. 地震応答スペクトル 6. 平面的ねじれ振動 7. 弾塑性応答解析と応答性状 8. 地震応答評価 9. 耐震補強, リニューアル, 免震設計 10. フレームおよび立体トラスの部材レベルでの解析 11. 地震動の性質 12. 地震波のフーリエスペクトル 13. 地盤の地震応答解析 14. 地盤-建物連成系応答解析 (スウエイ・ロッキング振動) 15. 耐震構造のまとめ <p>授業の進め方： 資料を適宜配布する。パワーポイントを常用し、場合によってはビデオもプレゼンテーションで用いる。</p> <p>成績評価方法： 小レポート3回程度および最終レポート1回の結果により評価するが、授業の取り組みも考慮する。</p> <p>履修上の注意： 前期の建築振動学は本講義のベースである。</p>					
<p>教科書・参考文献など： 参考書：「最新耐震構造解析」(柴田明德著, 森北出版)</p> <p>オフィスアワー, 学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 建築物創作の専門家になろうとする皆さんには、構造物の耐震性は認識不可欠であり、デザインを考案する以前に配慮し具備すべき必要条件である。</p>					

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目 (表中の記号は P.17の表を参照のこと)

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
											◎			

構造計画学		Structural Planning												
学期区分	後期	区分・単位	選択必修										2単位	
担当教員	谷 明勲													
<p>授業の目的： 建築は、人間・社会・地球環境等と密接な関係を有しており、その最適な形態を求めることは容易ではない。また、設計・計画を行う際には、造形性、機能性、力学性、安全性、環境適応性、快適性、経済性、施工性等、考慮すべき因子は多岐にわたる。建築構造物の設計・計画を行う際にはこれらの因子を総合的に考慮することが必要であり、客観的判断ばかりでなく主観的・経験的な要素も加味する必要がある。このような観点から、本講義では、建築を人間・社会・環境システムという総合的観点からとらえ直し、システム論的手法を用いた最適化とそのプロセスを提示することを目的とする。</p> <p>到達目標： 建築物の設計・計画を行う際に必要となる総合的な考え方を理解するとともに、様々な問題意識を持って建築構造物の設計・計画が行える基礎的知識を習得することを本講義の目標とする。</p> <p>授業内容： 本講義は、以下の2つに関する講義を行う。 1. 構造計画を行うための基礎的知識として、①建築構造の最適化（1回）、②構造デザイン（1回）、③構造空間システム（1回）、④自然の形態（1回）、⑤ユビキタス建築生産情報（1回）、⑥環境適応型建築（1回）、⑦建築構造制御（1回）に関する講義を行う。ここでは、建築構造計画を行う際に必要となる高度な専門的知識の習得や、建築構造計画に必要な知識の総合化と自主的解決能力の基礎を築くとともに、問題意識の涵養を行うとともに、関連する情報システムや建築構造分野の先端的技术についても講述する。 2. 最適化を行うためのシステム論的手法として、①数理計画（1回）、②知的システム（2回）、③最適設計（2回）、④人工生命（1回）、⑤複雑系（1回）に関する講義を行う。ここでは、構造・計画・環境という専門的知識を統合化する能力や、人間・社会・環境システムに適応可能な総合的な設計・計画を実践するための能力の基礎を築くために、新しいITや計算科学的手法（数理計画法、知的システム、複雑系など）に基づいた先端的、応用的な方法論と、これらを用いた最適構造計画手法について講述する。 3. 期末試験（1回）</p> <p>授業の進め方： コンピュータによるプレゼンテーションを用いて講義を行う。また、資料を適宜配布するとともに、必要事項は板書する。冬休みには構造計画に関する課題を課す。</p> <p>成績評価方法： 期末テスト、冬休みのレポート課題、各講義時に提出する感想・質疑を以下の比率で考慮して成績評価を行う。 期末テスト：冬休みのレポート課題：各講義時の感想・質疑＝8：1：1</p> <p>履修上の注意： 本講義では、問題意識の涵養と自主的解決能力の基礎を築くことを目指しており、受講生からの質問や問題提起を歓迎する。積極的な問題提起を期待する。</p>														
<p>教科書・参考文献など： 参考書：日本建築学会：やさしくわかる建築・都市・環境のためのソフトコンピューティング 加藤直樹，大崎純，谷明勲：建築システム論，共立出版 日本建築学会編：知的システムによる建築・都市の創造，技報堂出版</p> <p>学生へのメッセージ： 講義に対する質問や問題提起を歓迎する。オフィスアワーは、原則講義日の午後とする。不在の場合もあるが、研究室スタッフが教員の予定を把握しているので相談されたい。</p>														

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号はP.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
							○				◎			

システム構造解析		Analysis of Structural Systems			
学期区分	前期	区分・単位	選択	2単位	
担当教員	大谷 恭弘				
<p>授業の目的： 多層多スパンの骨組構造システムを対象とする解析には、静的や動的性能、あるいは線形弾性挙動や非線形挙動を明らかにするなど様々の解析目的があり、また、それぞれの解析目的に対しても種々の手法が存在する。本授業では、その様な解析手法の中でも骨組構造システムの基本的性能であり、構造設計でも重要となる弾性挙動および最大耐力を明らかにする解析手法について学習する。弾性挙動の解析手法では、コンピュータを用いた骨組の数値解析法として確立されてきており、非弾性挙動を初め、非線形挙動解析等に置いて実務でも広く使用されているマトリックス変位法の基礎理論について学習し、線形弾性解析に対するその具体的な適用のための諸手順を習得する。また、最大耐力の解析手法では、骨組に崩壊機構が形成されることによって最大強度に至る場合の荷重を求めるための単純塑性理論について学習し、その適用法や解析手順を習得する。</p> <p>到達目標： ・マトリックス変位法を用いた骨組構造の弾性解析の基本概念と手順を習得する。 ・骨組構造に対する極限解析法（単純塑性理論）の理論と解析手順を習得する。</p> <p>授業内容： 1. ガイダンス（1回） 建築構造に対する専門知識を講述する本講義の目的と授業予定の説明。外乱を受ける骨組構造システムを解くことの意味とその手法について概説し、その意義と位置づけについて説明 2. マトリックス変位法（7回） 節点変位と節点荷重、トラス部材および梁部材の要素剛性マトリックスの誘導、マトリックス直接剛性法の説明、境界条件の考慮、マトリックス方程式の解法、中間荷重の取り扱い、比較的簡単な骨組構造の弾性挙動解析 3. 骨組の単純塑性理論（極限解析法）（7回） 完全弾塑性梁要素の曲げモーメントー曲率関係、塑性ヒンジの概念、骨組の塑性崩壊と崩壊機構、「上界定理」・「下界定理」・「解の唯一性の定理」の証明と適用方法、骨組の塑性解析と崩壊荷重の計算</p> <p>授業の進め方： 講義形式で行う。講義用配布資料に沿って、教科書と板書を用いて行う。必要に応じて OHP 等を併用する。</p> <p>成績評価方法： 中間時での課題レポートと期末試験（筆記試験）の成績により評価する。</p> <p>履修上の注意： 「構造力学 A」, 「構造力学 B」 および 「構造力学 C」 を履修していること。</p>					
<p>教科書・参考文献など： 教科書 ・ 「建築構造力学 図説・演習Ⅱ」 （中村恒善 編著 石田 他 共著） 丸善 参考図書 ・ 「建築構造力学 図説・演習Ⅰ」 （中村恒善 編著 野中 他 共著） 丸善 ・ 「建築骨組の力学」 （伴／金谷／藤原 共著） 森北出版 ・ 「塑性設計法」 （木原博 監修） 森北出版 ・ 「マトリックス法による構造解析」 （村上／青山 共著） 培風館 ・ 「構造解析学Ⅱ」 （小松定夫 著） 丸善</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 授業に関する情報を下記の URL に記載。 http://www.kobe-u.ac.jp/scs/class.html</p>					

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
											◎			

板の力学 Mechanics of Plates and Shells														
学期区分			後期			区分・単位			選択			2単位		
担当教員			福住 忠裕											
<p>授業の目的： 板構造（壁板，床板，曲面板）を数理的に理解すると共に構造的特徴を把握し，さらに各種建築構造物として採用されている構造システムの特徴と外力に対する抵抗の仕組みを理解する事が目的である。</p> <p>壁，板，シェルに外力が作用した時，発生する応力・変形状態を認識出来るようになるためには，これら構造物の解析基本式の成り立ち方を理解している必要がある。ここではこれら構造物の解析式の誘導を習得し，それに対する具体的解析法を示し，各構造物の挙動の特徴を理解する。</p> <p>到達目標： 壁板，床板，曲面板に発生する面内力，面外力，曲げモーメントといった応力と変形を理解し外力に対する挙動を把握できるように学習する。さらに構造システムの構成が離散的な場合についてもふれ，連続的な場合との関係も理解する。結果的に種々な構造システムの成立つ仕組みや力学的効率を理解出来ることを目標とする。</p> <p>授業内容： 講義の主な項目は以下のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 取り扱い対象構造物の解析と応答概要 2. 壁板の解析（面内応力解析） 3. 平板の解析（面外応力） 4. シェルの解析（面内と面外応力） 5. 構造物の形状と変位・応力の関係 6. 板の塑性解析入門（降伏条件と降伏線理論） <p>授業の進め方： 外力に対する抵抗の仕組みを理解出来ることが，基本的に大切なことと認識しており，その理解を必須とする。これをベースにした上で各種構造物の把握，構造と意匠面との関係を理解できるように学習を進める。従って実在構造物も資料として提示する。</p> <p>成績評価方法： 中間時と期末の2つのレポートで評価する。</p> <p>履修上の注意： 構造解析関係科目を出来るだけ多く履修していることが望ましい。</p>														
<p>教科書・参考書など： 参考書：「平板の基礎理論」（半谷裕彦著，彰国社）</p> <p>オフィスアワー，学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。</p> <p>建築構造物を構成する壁，床，曲面構造の外力に対する挙動を理解し，さらに多様な構造システムも理解する。構造的な知識はデザインを考案する以前に必要な知識である。</p>														

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
											◎			

建築複合構造学		Composite Structure for Buildings															
学期区分	前期	区分・単位	選択 2単位														
担当教員	孫 玉平																
<p>授業の目的： 建築コンクリート構造学，建築鋼構造学，構造設計学で習得した知識を基に，近年世界各国で注目されつつある鋼・コンクリート合成構造に関する基本的な力学性状，構造性能とその設計法を理解・習得し，応用できる能力を養うことを本講義の目的とする。</p> <p>到達目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 鋼・コンクリート合成構造の長所・短所を理解する。 2. 塑性強度，累加強度，および終局強度の違いを理解する。 3. 鉄筋コンクリートと鉄骨からなるハイブリッド断面の耐力算定法を理解し，応用できる。 4. コンクリート充填鋼管柱における相互拘束効果のメカニズムと評価方法を理解し，応用できる。 <p>授業内容：</p> <table border="0"> <tr> <td>1. 鋼・コンクリート合成構造の発展史と地震被害</td> <td>2回</td> </tr> <tr> <td>2. 鉄骨鉄筋コンクリート構造の構法の概要</td> <td>1回</td> </tr> <tr> <td>3. 塑性設計法，累加強度式，および終局強度算定法</td> <td>4回</td> </tr> <tr> <td>4. 鉄骨鉄筋コンクリート構造の各種部材の力学的性能</td> <td>4回</td> </tr> <tr> <td>5. コンクリート充填鋼管柱の力学的性能と性能評価法</td> <td>3回</td> </tr> <tr> <td>6. 期末試験</td> <td>1回</td> </tr> </table> <p>なお，上記2～5の講義中，3回程度演習に重点を置いた講義を行う。</p> <p>授業の進め方： 講義は指定した教科書に従い進める。各回講義の目的と詳細内容は第一回目の講義時に説明する。 なお，本講義の特性を鑑み，板書を中心に講義を行う。</p> <p>成績評価方法： 期末テストと演習の結果を以下の比率で成績評価を行う。 テスト：演習＝7：3</p> <p>履修上の注意： 建築コンクリート構造学，建築鋼構造学，構造力学を理解していること。</p>						1. 鋼・コンクリート合成構造の発展史と地震被害	2回	2. 鉄骨鉄筋コンクリート構造の構法の概要	1回	3. 塑性設計法，累加強度式，および終局強度算定法	4回	4. 鉄骨鉄筋コンクリート構造の各種部材の力学的性能	4回	5. コンクリート充填鋼管柱の力学的性能と性能評価法	3回	6. 期末試験	1回
1. 鋼・コンクリート合成構造の発展史と地震被害	2回																
2. 鉄骨鉄筋コンクリート構造の構法の概要	1回																
3. 塑性設計法，累加強度式，および終局強度算定法	4回																
4. 鉄骨鉄筋コンクリート構造の各種部材の力学的性能	4回																
5. コンクリート充填鋼管柱の力学的性能と性能評価法	3回																
6. 期末試験	1回																
<p>教科書・参考書など： 教科書：松井千秋編著 建築学構造シリーズ「建築合成構造」 オーム社 参考書：日本建築学会 「鉄骨鉄筋コンクリート構造計算規準・同解説」</p> <p>オフィスアワー，学生へのメッセージ： オフィスアワー：毎週月曜日 午後5時～6時30分 学生へのメッセージ：授業内容についてクラスメートとよく議論すること。講義中の積極的な質問のほか，電子メール（sunlili@people.kobe-u.ac.jp）による質問も歓迎する。</p>																	

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
											◎			

建築生産学		Construction Engineering and Management																												
学期区分	前期	区分・単位			必修			2単位																						
担当教員	長尾直治, 福住忠裕																													
<p>授業の目的: 本講義は、建築をつくるための全体的な仕組みや地盤・基礎構造に関する基本的な知識を習得するものであり、建築生産に関する組織、制度、運営、工法などを体系的に理解することを目的としている。</p> <p>建物の建設は多用な技術が適用される工学的なものであるが、同時に、社会的・経済的活動の一つであり、品質確保などのための多くの社会的な制度が存在する。このような建築生産に関するハードの部分と同時にソフトの部分に関する知識を習得することや、完成後には隠れて見えない部分である基礎構造の重要性などを理解することは、建築活動に携わる者にとって必須である。</p> <p>到達目標: 建築の計画、設計、施工、維持管理、解体などからなる一連の建築活動や活動主体などの体系や各種工事ごとの施工法の概略を理解し、地質調査図と基礎構造の関係を理解することを目標としており、国家資格「一級建築士」に要求される知識水準に到達するための知識を習得する。</p> <p>授業内容:</p> <table border="0"> <tr> <td>(1) 建築生産と施工の概論</td> <td>(2) 管理と監理</td> <td>(3) 法律・制度</td> </tr> <tr> <td>(4) 情報伝達</td> <td>(5) 施工手順・工程管理</td> <td>(6) 杭・地業工事</td> </tr> <tr> <td>(7) 鉄筋コンクリート工事（2回）</td> <td>(8) 鉄骨工事（2回）</td> <td>(9) 土質・地盤概論</td> </tr> <tr> <td>(10) 地質調査</td> <td>(11) 土のせん断強さと許容地耐力</td> <td>(12) 基礎構造の計画と設計</td> </tr> <tr> <td>(13) レポート作成</td> <td></td> <td></td> </tr> </table> <p>授業の進め方: スライド、配布資料を併用しながら、講義する。</p> <p>成績評価方法: 期末筆記試験（約50%）とレポート課題（約50%）によるが、履修状況も評価の参考にする。</p> <p>履修上の注意: 構法システム、および、建築材料学の単位を取得していることが望ましい。</p>																(1) 建築生産と施工の概論	(2) 管理と監理	(3) 法律・制度	(4) 情報伝達	(5) 施工手順・工程管理	(6) 杭・地業工事	(7) 鉄筋コンクリート工事（2回）	(8) 鉄骨工事（2回）	(9) 土質・地盤概論	(10) 地質調査	(11) 土のせん断強さと許容地耐力	(12) 基礎構造の計画と設計	(13) レポート作成		
(1) 建築生産と施工の概論	(2) 管理と監理	(3) 法律・制度																												
(4) 情報伝達	(5) 施工手順・工程管理	(6) 杭・地業工事																												
(7) 鉄筋コンクリート工事（2回）	(8) 鉄骨工事（2回）	(9) 土質・地盤概論																												
(10) 地質調査	(11) 土のせん断強さと許容地耐力	(12) 基礎構造の計画と設計																												
(13) レポート作成																														
<p>教科書・参考文献など: 参考書：建築生産学の他に、建築施工、基礎構造などの名称で、同類の教科書、参考書が市販されている。</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ: オフィスアワーの日は授業開始時に通知する。 モノづくりの現場で多くの技術者や技能者が行っていることを理解し、目に見えない部分に気を配ることの大切さを理解することは、優良な社会資産を形成するための基本的な態度である。学生諸君にはそのような内容を汲み取ることも期待している。</p>																														

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
										◎				

建築構法 Applied Construction Engineering of Building Structure														
学期区分			後期			区分・単位			選択			2単位		
担当教員			阪井 聡, 吉澤幹夫											
<p>授業の目的: 本講義は「建築生産学」で修得した内容を基に、建築物の生産活動における施工工法計画, 施工管理, 設計施工技術に関するより専門的な知識を習得することを目的とする。特に、基礎構造については地盤と構造物との相互作用を理解させ、基礎設計のより専門的な知識を習得することを目的とする。できるだけ現場見学, 施工記録などの実体験あるいは疑似体験を通じて建築に対する感性を磨き、情報社会においての“ものづくり”の重要性を再認識させる。</p> <p>到達目標: 将来建築に携わることになる学生にとって、建築生産に関わるより専門的な知識を習得し、机上の情報や知識だけではなく、現場見学などを通して建築生産での様々なプロセスにおいて試行錯誤しながら建築生産がなされている実態を理解する。また、敷地地盤と上部構造に適した基礎構造物の設計・施工について理解する。</p> <p>授業内容: 建築生産の概説と慣用語語 (1回) 設計 (意匠・構造・設備) と施工の関係 (2回) 土・地盤・地質調査 (2回) 建設地盤の力学的評価 (1回) 各種基礎構造の力学特性 (3回) 基礎構造の計画・設計・施工 (1回) 建築生産における最新の話 (1回) 建築生産における品質・コスト・工程・安全管理 (1回) 建築生産に関する技術者倫理 (2回) 現場見学 (1回)</p> <p>授業の進め方: 学生から理解し難いあるいは知りたい点をそのつど聞き取って、それらの内容を踏まえて授業を進める。できるだけ感性を高められるように、調査や工事の実際をビデオで紹介し、実際の現場見学を行う。プロジェクターによるプレゼンテーションと板書を併用し、資料は適宜配付する。</p> <p>成績評価方法: 小レポートおよび最終レポートの結果により評価するが、授業への取り組みも考慮する。</p> <p>履修上の注意: 「構法システム」, 「建築生産学」を受講していること。随時アンケートを実施する。</p>														
<p>教科書・参考文献など: 参考書: 「建築施工教科書」建築施工教科書研究会編, 彰国社 「建築基礎構造設計指針」日本建築学会などのほか, 同類の建築施工, 基礎構造の名称で多数市販されている。</p> <p>オフィスアワー, 学生へのメッセージ: オフィスアワーの日時は授業開始時に通知する。 施工や設計に活かせる知識を分かり易く講義する。技術者や技能者が現場で行っている目に見えないモノづくりがあることを理解し、優良な社会資産形成を計ることを体得されることを期待する。</p>														

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目 (表中の記号は P.17の表を参照のこと)

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
											◎			

構造設計 I		Exercises of Structural Design I												
学期区分	後期	区分・単位	選択									2単位		
担当教員	構造系教員													
<p>授業の目的： これまでに履修した建築構造系の授業および演習に基づいて、鋼構造および鉄筋コンクリート構造の比較的単純な建物を対象として一貫した構造設計の演習課題を課し、総合的な応用力を養うことを目的としている。</p> <p>到達目標： 与えられた課題を、教科書およびノートさらに担当教員からのヒントを参考にして、独力で問題解決できるようになることを目標とする。</p> <p>授業内容： 許容応力度設計法に基づく鉄骨構造と鉄筋コンクリート構造の設計をおこなう。</p> <p>(1) 鋼構造に関する一貫した構造設計演習課題 構造計算プログラムをベースとした簡単な鋼構造の設計を行う。 1) 課題の説明 2) 架構形式, 荷重, 許容応力度, 応力図 3) プログラム演習 (8回) 4) 構造部材の算定 5) 構造図面の説明</p> <p>(2) 鉄筋コンクリート構造に関する一貫した構造設計演習課題 手計算をベースとした簡単な鉄筋コンクリート構造の設計を行う。 1) 課題の説明 2) 架構形式, 荷重, 許容応力度 3) 鉛直荷重時応力・水平荷重時応力 4) 柱・梁・床スラブの設計 (8回) 5) 配筋詳細図の作成</p> <p>(3) 現場見学 (2回) (4) 課題の講評 (2回) (5) 特別講義 (2回)</p> <p>授業の進め方： 演習課題ごとに、担当教員が授業時間内に課題説明を行う。また、質問時間を十分に確保する。 構造計算にはコンピュータを活用する。</p> <p>成績評価方法： 課題のレポートの完成度によるが、履修状況も評価の参考にする。</p> <p>履修上の注意： 建築構造系の講義を履修していることが望ましい。また、構造材料実験の単位を取得していることが望ましい。</p>														
<p>教科書・参考書など： 参考書：構造技術者協会編「S 建築構造設計」, 「RC 建築構造設計」, あるいは日本建築学会「鉄筋コンクリート構造計算基準・同解説」などの教科書, 参考書が市販されている。</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ： 建物の構造設計を行うものはもちろんのこと、意匠設計, 計画, 施工に携わる者も、各種解析手法や構造設計法を理解しておくことは、建物に作用する力や建物に発生している応力を知る上で重要なことである。オフィスアワーについては、担当教員によって異なるので、各担当教員に確認することが望ましい。 なお、各種の質問には、ティーチング・アシスタント (TA) を通じて行っても良い。</p>														

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A1	A2	A3	B1	B2	B3	C1	C2	C3	D1	D2	D3	E1	E2	E3
							○				◎			

構造設計Ⅱ		Exercises of Structural Design Ⅱ			
学期区分	前期	区分・単位	選択 2単位		
担当教員	構造系教員				
<p>授業の目的： これまでに履修した建築構造系の授業および演習と「構造設計Ⅰ」によって修得した構造設計に関する基礎技術をさらに発展させるとともに、新しい建築技術を取り入れた構造設計を行うことを目的としている。</p> <p>到達目標： これまでの構造設計に関する知識を基に、実施設計に近い建築の構造設計に対応する総合的な設計能力を身に付けることが目標である。</p> <p>授業内容： 鉄筋コンクリート構造に対する二次設計（保有水平耐力の計算）やコンピュータを用いた地震応答解析、および自由演習課題を行う。</p> <p>(1) 演習の目的と内容の説明（2回） (2) 「構造設計Ⅰ」で実施した許容応力度設計に基づく鉄筋コンクリート構造建物に関する二次設計（層間変形角の確認、保有水平耐力の算定）（12回） (3) 構造図の作成（5回） (4) コンピュータを用いた地震応答解析（6回） (5) コンピュータを用いた自由課題の構造設計（14回） (6) 現場見学（2回） (7) 課題の講評（2回）</p> <p>授業の進め方： 演習課題ごとに、担当教員が授業時間内に課題説明を行う。また、質問時間を十分に確保する。 構造計算や地震応答解析にはコンピュータを活用する。</p> <p>成績評価方法： 課題のレポートの完成度によるが、履修状況も評価の参考にする。</p> <p>履修上の注意： 建築構造系の講義を履修していることが望ましい。また、構造材料実験の単位を取得していることが望ましい。</p>					
<p>教科書・参考書など： 参考書： 構造技術者協会編「S 建築構造設計」, 「RC 建築構造設計」, あるいは日本建築学会「鉄筋コンクリート構造計算基準・同解説」などの教科書, 参考書が市販されている。</p> <p>オフィスアワー, 学生へのメッセージ： 優れた構造設計を行うには、構造原理に関する確かな知識に裏付けられた創造力や想像力が要求される。実際の構造物をよく観察し、長所や短所を自分で判断できるように構造的なセンスを養ってほしい。オフィスアワーについては、担当教員によって異なるので、各担当教員に確認することが望ましい。なお、各種の質問には、ティーチング・アシスタント (TA) を通じて行っても良い。</p>					

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
								○			◎			

構造材料実験 Methodology and Practice of Experiments on Structural Materials and Members														
学期区分			前期			区分・単位			選択必修			2単位		
担当教員			構造系教員											
<p>授業の目的： 建築構造物に用いられる構造材料および構造部材の力学的性状や破壊現象を把握するための各種実験手法を学ぶとともに、それらの実験や実習を通して材料や部材の実挙動を理解させ、加えて、挙動を予想するための解析手法や、実験結果の整理方法を習得させることを目的とする。</p> <p>到達目標： 建築構造物に用いられる構造材料および構造部材の力学的性状については、既に他の講義で学習している。ここでは、実験での観察を通して構造材料や構造部材の実挙動をより理解し、また、挙動の予測解析や実験結果の整理や解析などに関する実習を通して、結果のまとめ方を学習するとともに、結果に対する考察を行い、課題の発見や解決能力を育むことを目標とする。</p> <p>授業内容： 本授業科目は、週に2コマで開講され、1コマは実験に、もう1コマは実験解析やデータの整理に当てられる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 構造材料実験の進め方、機器等の概要、安全教育（3コマ） 2. コンクリートの調査設計と打設（3コマ） 3. コンクリートシリンダーの4週強度試験とデータ整理（3コマ） 4. 鉄筋コンクリート梁の曲げ実験と解析およびデータ整理（3コマ） 5. 鉄筋コンクリート梁のせん断実験と解析およびデータ整理（3コマ） 6. 鋼材の引張試験、短柱圧縮実験とデータ整理（3コマ） 7. 座屈実験と解析およびデータ整理（3コマ） 8. 鉄骨の圧縮実験、曲げ実験と解析およびデータ整理（3コマ） 9. 木材の圧縮実験、曲げ実験と解析およびデータ整理（3コマ） 10. 振動実験と解析およびデータ整理（3コマ） <p>授業の進め方： 最初に教室で各実習・実験の概要説明および解析方法の講述を行う。その後、実験室で実習・実験を実施する。実習・実験は、担当教員とTA（大学院のアシスタント）の指導の下で、学生諸君が主体的に行う。必要に応じて班分けをして実施する。</p> <p>成績評価方法： 各実習・実験に関する提出レポートおよび、実習・実験への取り組みを評価して成績評価を行う。</p> <p>履修上の注意： 「材料工学」、「建築コンクリート構造学」、「建築鋼構造学」および「振動学」を履修していることが望ましい。作業が出来る服装、足の指が覆われる靴（運動靴など）で受講すること。</p>														
<p>教科書・参考書など： 教科書 日本建築学会「建設材料実験用教材」 参考図書 日本材料学会「建設材料実験」</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ： 実習・実験を通して、材料および部材の力学的性状や破壊現象を実感して欲しい。また、不明な点は、担当教員およびTAに積極的に質問すること。オフィスアワーについては、担当教員によって異なり、また研究室に不在のこともあるので、各担当教員に確認すること。学生傷害保険に未加入の学生は、加入しておくこと。</p>														

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号はP.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
							○			◎				

建築環境工学 I Architectural Environmental Engineering I														
学期区分			前期			区分・単位			必修			2単位		
担当教員			森本政之											
<p>授業の目的： さまざまな建築環境要素の中でも，健康で快適でかつ作業能率を高めるような建築空間を作り出すためには，人間を評価の中心に据えた物理環境の制御が必要である。本講義では，主に，建築空間の用途にあった音環境と光環境を実現するための条件や評価方法並びに制御方法の修得を目的とし，人間による環境評価システムすなわち人間と物理環境の関係や，音と光について物理と心理の両面から基礎的な事項について講述する。</p> <p>到達目標： 建築における音，光環境制御のための基礎知識の修得。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 環境評価システム（技術者の役割も含めて，建築環境工学とは何か？について考える） 2回 2. 音波と聴覚の基礎（人間自身を理解するために感覚器官である聴覚も含めて音の基礎的な事項について知識を得る。） 3回 3. 騒音制御（社会集団としての騒音問題の重要性を理解し，騒音の測定，評価，防止の方法に関する専門知識を修得し，かつ自主的解決能力を養う。） 3回 4. 吸音（音場制御に不可欠な吸音のメカニズムと特徴について専門知識を修得し，それらを使った自主的解決能力を築く。） 1回 5. 日照と居住環境（社会集団として居住環境における日照の持つ意味について考える。） 1回 6. 光に関する基礎知識（測光量を初めとする光環境の理解に不可欠な専門知識を修得する。） 2回 7. 採光計画（昼光率を中心とした採光計画について専門知識を修得する。） 2回 8. 人工照明（人工照明計画について専門知識を修得する。） 1回 <p>授業の進め方： 音環境については，下記の教科書を使い，音を実際に聞かせるなどのデモンストレーションをまじえながら講義する。一方，光環境については別に配布するプリントを用いて講義する。また，授業中に小テストを毎回実施する。</p> <p>成績評価方法： 音環境に関する中間試験と光環境に関する期末試験の結果を合わせて評価する。</p> <p>履修上の注意： 対数計算ができる関数電卓が必要。</p>														
<p>教科書・参考文献など： 前川純一，森本政之，阪上公博「建築・環境音響学」（共立出版）</p> <p>オフィスアワー，学生へのメッセージ： オフィスアワーの日は授業開始時に通知します。 本講義だけで満足せず，音と光に関するより高度な専門知識の修得をめざし，「音環境計画」および「建築環境設計」を受講することを希望する。</p>														

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
							○			◎				

建築環境工学Ⅱ		Architectural Environmental Engineering Ⅱ			
学期区分	前期	区分・単位	必修 2単位		
担当教員	松下 敬幸				
<p>授業の目的： 安全、健康、快適な居住環境を構成するためには、熱、空気などの物理的な環境要素を適切に維持する必要がある。一方、これを実現し維持し続けるためには、資源、エネルギーが必要であり、地球環境と人間との関わりを考慮することが不可欠である。本講義では、熱、空気環境を主に対象として、建築システムを健康、快適に維持するための条件、評価、計画の方法を明らかにしながら、同時に建築システムの物理的挙動とその解析法、自然環境との関係、エネルギーの有効利用法などの基礎理論を講述する。</p> <p>到達目標： 建築における熱、空気、湿気問題の工学的取扱いの基礎の修得。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 本講義の目的と予定（地球的視点、技術者のあり方を含めて、建築環境工学のあり方を考える） 1回 2. 定常時の熱移動（熱の工学的取扱いの基礎を通して、自主的解決能力の基礎を築く） 3回 3. 湿気－結露問題－（結露問題の物理的位置付けと工学的解決法を通して、自主的解決能力の基礎を築く） 2回 4. 空気 <ol style="list-style-type: none"> 4－1. 空気衛生（空気環境の形成目的、評価法を通して、自主的解決能力の基礎を築くとともに、人間の存在について考える） 1回 4－2. 換気力学（空気の流れ、換気の意味と工学的取扱いの基礎を学び、自主的解決能力の基礎を築く） 5回 5. 熱環境と体感（工学的取扱いによる人間の環境評価法を通して人間の生理的、心理的一側面を理解するとともに、本講義の基礎的専門知識を統合した人間環境の形成を考える。また、環境倫理との関係における技術者のあり方を考える） 2回 6. 期末試験 1回 <p>授業の進め方： 配布するプリントに従って講義を進める。適宜、理解度を確認するための演習を行う。必要に応じて宿題を課す。</p> <p>成績評価方法： 出席状況、演習の提出、学習態度によって評価を行う。なお、試験は期末を原則とするが、状況に応じて講義途中で実施することもある。</p> <p>履修上の注意： 「本講義の目的と予定」において建築環境工学のあり方を考える上で、光環境の内容も一部関係するので、「建築環境工学Ⅰ」と並行して履修することが望ましい。</p>					
<p>教科書・参考書など： プリントを配布する。 （参考書）・鈴木修一他；エース建築環境工学Ⅱ－熱・湿気・換気－，朝倉書店 ・日本建築学会編；建築設計資料集成1（環境），丸善</p> <p>オフィスアワー，学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 理解度の確認の演習をがんばりましょう。質問は授業中および教員室で随時受け付けますので、気軽に問いかけて下さい。</p>					

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号はP.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
							○				◎			

建築環境工学Ⅲ Architectural Environmental Engineering Ⅲ														
学期区分			後期			区分・単位			必修			2単位		
担当教員			森山正和											
<p>授業の目的： 本講義は建築をひろく環境一般からとらえ直し、近年の都市や建築に関する環境問題をベースとして建築設備システムの基礎的な知識や基本的な考え方の習得を目的とする。</p> <p>到達目標： 建築分野に関連する環境問題に対する広い視野を身につけるとともに、建築設備システムの基本概念を把握すること。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 気候と建築1（世界の伝統的建築と熱環境において人間自身及び多様な価値の視点を重視） 2. 気候と建築2（日本の伝統的建築と熱環境、建築設備の歴史において総合的視野を重視） 3. 空気調和の基礎（用語と単位、熱の移動、空気線図） 4. 空気調和の設計条件（冷暖房設備の目的、熱・空気環境の快適性・健康性、気象条件） 5. 空気調和の負荷1（冷暖房負荷の基本概念、時間最大冷暖房負荷の計算方法1） 6. 空気調和の負荷2（時間最大冷暖房負荷の計算方法2） 7. 空気調和の方式（設備概要、空気調和システムの方式） 8. 熱源設備（冷凍機・ヒートポンプの原理） 9. 設備計画（省エネルギー手法、設備の事例） 10. エコロジー建築（ドイツ・日本の事例）（地球的、総合的、実践的視点を重視） 11. 自然エネルギーと建築（太陽熱、太陽光発電、風力発電、バイオガスなど、地球的視点を重視） 12. 給排水設備の計画 13. 震災と建築設備 14. 講義のまとめ <p>授業の進め方： 原則として毎時間、10分程度で行う小演習を課する。</p> <p>成績評価方法： 定期試験、小演習により総合的に評価する。</p> <p>履修上の注意： 「建築環境工学Ⅰ、Ⅱ」を履修していること。</p>														
<p>教科書・参考文献など： 参考書は授業中に授業内容に応じて適宜指示する。</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 遠慮なく質問すること。</p>														

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号はP.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
			○								◎			

音環境計画		Acoustical Design in Architectural Environment												
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位											
担当教員	阪上公博													
授業の目的： 既習の「建築環境工学Ⅰ」に引き続き、建築の音環境計画についてより詳しく述べる。さらに、各種建築物における計画上の諸問題について、より専門的かつ具体的に講述する。														
到達目標： 建築の音環境計画、特に室内の音響計画、騒音防止計画など、快適な建築環境を実現する上で必要な専門的知識を、単に覚えるだけでなく十分に理解させる。なお、3年後期に開講される「建築環境工学演習」ではこの講義の範囲についても取り扱うので、より深い理解のために履修することが望ましい。														
授業内容： <ol style="list-style-type: none"> 音環境の評価（1回） 建築における環境評価の基礎となる心理評価システムを解説し、音環境計画の基本的考え方を述べる。 室内の音響現象とその評価（4回） 室内音場で生じる種々の音響現象を解説し、人間の聴覚心理の特性を理解した上で、心理評価と物理量の関連、評価指標について述べる。 室内音場の解析（3回） 室内音場を理論的に解析する手法として、エネルギー的な手法と、波動音響学的手法を解説し、室内の音環境設計における課題解決の基礎を修得する。また、実際の音響設計への応用についても触れておく。 音響材料（吸音材料・遮音材料）（2回） 音環境を調整する上で重要な働きをする各種音響材料の性質、応用上の問題について解説する。 空気音の遮断（1回） 単層壁、二重壁の遮音性能と、吸音処理の影響など、建物内における遮音の問題を解説する。 管路系の騒音対策（1回） 空調ダクトなど管路系による騒音伝搬の概要を述べ、その対策法について講述する。 防振と固体音対策（2回） 設備機械や交通振動に起因する固体音問題を概説し、その対策法、特に防振処理について述べる。 建築における音環境設計の実際（1回） 上記基礎の応用として、実際の建物における音環境計画のポイントを、建物用途ごとに整理して概説する。また、音環境設計における問題への取り組み方や、技術者としてのあり方についても触れる。 														
授業の進め方： 適宜デモンストレーションを交えながら講義する。また、授業中に演習問題を課する。														
成績評価方法： 期末試験および授業中に実施する演習・小テストの成績をもって判定する。														
履修上の注意： 対数計算のできる関数電卓を必ず用意すること。														
教科書・参考文献など： 教科書：前川純一ほか「建築・環境音響学（第2版）」（共立出版） その他、必要に応じてプリントを配布する。														
オフィスアワー、学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は、授業開始時に通知します。 単なる暗記ではなく、背景となる考え方を理解するよう努力して下さい。授業で理解できなかったことは、そのままにせず必ず質問して解決しましょう。質問は、授業中のほか、随時教員室で受け付けます。積極的に受講してください。														

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号はP.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
											◎			

都市環境計画		Urban Environmental Planning			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位		
担当教員	森山正和				
<p>授業の目的： 広域的・都市的スケールにおける環境計画及び環境工学上の諸問題をテーマとし、その分析・評価・計画手法について、できるだけ具体的事例をとおして講述する。全体として、自然環境計画と地域冷暖房計画の2つのサブテーマから構成し、建築とのかかわりにおいて今後の方向性を適切に判断しうる人の養成を目的とする。</p> <p>到達目標： 自然生態系の基本概念を理解し、種々の矛盾を抱える現代都市を自然環境とエネルギー需給の視点から分析し、改善策を提示できること。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 環境形成の歴史（古代・中世、近世・近代、現代について、地球的視野、環境倫理的観点から講述） 2. 地表付近の風と気温（地表付近の風、地表付近の温度、大気の安定度） 3. 地表付近の熱収支（地表面熱収支の成分、湿潤・乾燥気候における熱収支比較、地球の熱収支） 4. リモートセンシングによる環境計測（リモートセンシングの原理、緑と熱のリモートセンシング） 5. 都市熱環境の形成（都市気候の概要、都市の熱収支） 6. みどりによる熱環境の対策（夏季熱環境対策、緑化計画について環境改善の意識形成、総合的視点を重視） 7. 建物や道路の都市熱環境対策（クールルーフ、環境舗装） 8. 空気環境の計画（風害の制御、大気汚染） 9. 都市環境のクリマアトラス・ドイツ編（背景、気候解析図、計画指針図） 10. 都市環境クリマアトラス・近畿編（近畿地域の都市気候、都市環境気候図の作成） 11. 都市エネルギーシステムの計画1（都市インフラ、地域冷暖房計画） 12. 都市エネルギーシステムの計画2（コージェネレーション、未利用エネルギー） 13. エコシティの計画（エコシティの概念、プロジェクトについて、地球的・総合的視野を重視） 14. 講義のまとめ <p>授業の進め方： 原則として毎時間、10分程度で行う小演習を課する。</p> <p>成績評価方法： 定期試験、小演習により総合的に評価する。</p> <p>履修上の注意： 「建築環境工学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」の知識を必要とする。</p>					
<p>教科書・参考文献など： 参考書は下記のほか、適宜指示する。 都市環境学教材編集委員会編：都市環境学（森北出版） 森山正和編：ヒートアイランドの対策と技術（学芸出版社） 日本建築学会編：都市環境のクリマアトラス（ぎょうせい）</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知する。 遠慮なく質問すること。</p>					

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号はP.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
			○								◎			

熱環境計画		Thermal Design in Architectural Environment											
学期区分	後期	区分・単位	選択必修									2	単位
担当教員	高田 暁												
<p>授業の目的： 室内の熱，空気環境は，外界気象や人間活動の影響を受け，複雑な挙動を示す。一方，快適かつ健康な室内環境を実現するために，資源，エネルギーが必要となる。建築システムの熱，空気性状の変化の特徴およびその解析方法を理解することが，資源，エネルギーを有効に利用する上で重要である。快適性，健康性を維持しながら，環境への負荷が少ない建築設計のあり方および熱環境制御法を講述する。</p> <p>到達目標： 建築における熱・空気移動問題の工学的取り扱いに関する高度な専門知識の修得。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 本講義の目的と予定（熱，空気の基礎の復習と共に，地球的視点からの建築熱環境設計のあり方を考える）1回 2. 放射熱伝達（建築物における熱放射の取扱いを詳述し，放射問題の応用例を紹介すると共に，自主的解決の専門的能力を築く）5回 3. 非定常熱伝導（時間的に変化する熱環境の取扱いを詳述し，熱環境設計への応用を紹介すると共に，自主的解決の専門的能力を築く）5回 4. 流体力学（時間的に変化する室内空気環境の取扱いを場のモデルの立場から概説し，室内熱および空気環境予測の現状を紹介すると共に，自主的解決能力の基礎を築く）4回 <p>授業の進め方： 配布するプリントに従って講義を進める。適宜，理解度を確認するための演習を行う。必要に応じて宿題を課す。</p> <p>成績評価方法： 履修状況，演習の提出，試験の成績によって評価を行う。なお，試験は期末を原則とするが，状況に応じて講義途中で実施することもある。</p> <p>履修上の注意： 本講義は建築環境工学Ⅱの内容を基礎として高度な専門的取扱い，解析法の習得を目指しているため，「建築環境工学Ⅱ」を履修しておくことが望ましい。</p>													
<p>教科書・参考文献など： プリントを配布する。 （参考書）・ 鈴木修一他；エース建築環境工学Ⅱ－熱・湿気・換気－，朝倉書店 ・ 日本建築学会編；新建築学大系10（環境物理），彰国社</p> <p>オフィスアワー，学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 質問は授業中，随時教員室で受け付けますので，気軽に問いかけて下さい。</p>													

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
							○				◎			

建築設備システム		System of Building Services			
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位		
担当教員	未定				
<p>授業の目的： 現代の建築物の機能において、建築設備の果たす役割は非常に大きい。建築設備における室内環境計画のあり方を考えることは建築環境工学の基礎理論を実現化する上でも重要である。講義では、設備計画の実際における具体例を示すことにより、実務知識の会得と建築設備の重要性を認識させる。 また、建築設計は環境性、安全性、経済性、快適性など多面的なアプローチが必要である。本講義中の演習では、建築設備設計の実務プロセスの中に、これらの与条件をどのように整合させ組み立て実現してゆくのか、その方法と事例について講述し、レポートの作成を通して理解を深める。</p> <p>到達目標： 建築設備の基本計画、基本設計、実施設計のプロセスをとおして、設計意図を実現するために各段階で必要とされる、要素技術、設計手法、評価手法、法体系等について学び、演習を通して実際の展開方法を理解して身につけること。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 建築設備全般に関する概要とシステムの考え方について説明する (1回) 2. 社会ニーズに対応した建築設備技術－1－（環境への配慮について講述する） (1回) 3. 社会ニーズに対応した建築設備技術－2－（機能性について講述する） (1回) 4. 社会ニーズに対応した建築設備技術－3－（安全性について講述する） (1回) 5. 建築設計のフローと設備設計について講述する (1回) 6. 省エネルギー及びエネルギーの効率的利用の評価指標：熱負荷とその削減方法を、取扱いの基礎を講述し、さらに実例を交えて説明する (2回) 7. 空調用熱源方式（熱源方式を講述すると共に、実務上の工夫を紹介し、建物用途別の最適空調システムの考え方や実務の現状を紹介する） (1回) 8. 空気調和のダイヤグラムとエネルギーの流れ（建築設備設計における実務図面の紹介を通して建築計画での設備スペースの考え方を説明し、設計時の注意点も合わせて講述する） (1回) 9. 空調システムの分類 (1回) 10. 冷暖房負荷（熱負荷の詳細と制御について講述する） (1回) 11. 湿り空気と湿り空気線図、空調システムの要素と空調過程（空気の加熱、冷却、加湿、除湿の状態変化の取扱いの基礎と共に、使用法を学ぶ） (2回) 12. ファン・ポンプの特性と所要動力 (1回) 13. 期末試験 (1回) <p>授業の進め方： 配布するプリント、スライド、OHP、見学などを交えながら講義する。また、授業中に演習問題を実施する。</p> <p>成績評価方法： 学期末の試験成績およびレポート、演習・小テストの成績によって評価を行う。</p> <p>履修上の注意： 「建築環境工学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」を履修しておくことが望ましい。</p>					
<p>教科書・参考文献など： プリントを配布する。 （参考書）・空気調和設備計画・設計の実務と知識、オーム社 オフィスアワー、学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 内容としては、建築と建築設備とをいかに融合させるかという点を主眼に説明します。実務知識も含めて講義を行います。幅広い関心を持って、自分の頭で考え、自分の力を高めて欲しい。</p>					

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号はP.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
							○				◎			

建築環境設計		Environmental Designing in Architecture																
学期区分	後期	区分・単位	選択	2単位														
担当教員	北村薫子, 環境系教員																	
<p>授業の目的: 3年前期までの建築環境系科目で修得した内容を補いながら, さらに高度に発展させるとともに統合し, 実際の建築設計における光・音・熱・都市環境の問題に対処する能力を養う。また, 実例や実務の内容にも触れながら, 設計実務の側面についても講述する。</p> <p>到達目標: 建築環境工学を学ぶ目的は, 建築空間の諸環境要素を適切に制御し, 快適・安全かつ健康的・衛生的な空間を創出することにある。3年前期までに修得した基礎理論や知識をもとに, 実際の建築環境設計への橋渡しとなるように理論と実際を結びつけ, 建築環境技術者として必要な基本的センスを養うことを目標とする。</p> <p>授業内容: 講義内容は, 既習の建築環境系科目よりさらに進んだ関連事項を講述し, その時の新しい技術や話題となっている問題, また優れた建築作品における建築環境設計の実際の側面の紹介など, 自由な内容も盛り込みながら, 以下の4分野各々について分担して講義を行う。具体的内容については, 講義のはじめに詳しく説明する。</p> <table border="1" data-bbox="188 734 1401 1108"> <thead> <tr> <th>テーマ</th> <th>回数</th> <th>概要</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1. 光と色の環境設計</td> <td>7回</td> <td>光環境・視環境のより進んだ内容と, 照明設計・色彩設計の基礎を講述する。</td> </tr> <tr> <td>2. 環境共生都市・建築の設計</td> <td rowspan="3">8回</td> <td>都市環境の進んだ内容, 環境共生都市・建築の設計について講述する</td> </tr> <tr> <td>3. 音環境の設計</td> <td>音楽ホールの音響設計を中心に, 建築における音響設計の実際的問題を取り上げて講述する。</td> </tr> <tr> <td>4. 熱・空気環境の設計</td> <td>流体力学に基づく室内気流性状, 換気力学に基づく多数室換気問題, 建築火災時の煙と空気の移動問題など, 熱環境・空気環境のより発展的な内容及び実用問題について講述する。</td> </tr> </tbody> </table>						テーマ	回数	概要	1. 光と色の環境設計	7回	光環境・視環境のより進んだ内容と, 照明設計・色彩設計の基礎を講述する。	2. 環境共生都市・建築の設計	8回	都市環境の進んだ内容, 環境共生都市・建築の設計について講述する	3. 音環境の設計	音楽ホールの音響設計を中心に, 建築における音響設計の実際的問題を取り上げて講述する。	4. 熱・空気環境の設計	流体力学に基づく室内気流性状, 換気力学に基づく多数室換気問題, 建築火災時の煙と空気の移動問題など, 熱環境・空気環境のより発展的な内容及び実用問題について講述する。
テーマ	回数	概要																
1. 光と色の環境設計	7回	光環境・視環境のより進んだ内容と, 照明設計・色彩設計の基礎を講述する。																
2. 環境共生都市・建築の設計	8回	都市環境の進んだ内容, 環境共生都市・建築の設計について講述する																
3. 音環境の設計		音楽ホールの音響設計を中心に, 建築における音響設計の実際的問題を取り上げて講述する。																
4. 熱・空気環境の設計		流体力学に基づく室内気流性状, 換気力学に基づく多数室換気問題, 建築火災時の煙と空気の移動問題など, 熱環境・空気環境のより発展的な内容及び実用問題について講述する。																
<p>授業の進め方: 適宜, 実物や模型によるデモンストレーションやスライド, OHP, 現場見学などを交えながら講義する。また, 授業中に演習問題を実施することもある。</p> <p>成績評価方法: 授業中に実施する演習・小テスト・レポート等の成績をもって評価する。</p> <p>履修上の注意: 関数電卓, 定規を必ず用意すること。その他必要なものは随時指示する。</p>																		
<p>教科書・参考文献など: 3年前期までの環境系科目で使用した教科書。その他の参考書は, 随時指示する。</p> <p>オフィスアワー, 学生へのメッセージ: オフィスアワーの日時は, 各担当教員から授業開始時に通知します。 教室での基礎的な勉強から, 実際の建築における環境設計への橋渡しとなる科目です。広く関心を持って, 自分の頭でしっかり考え, 着実に自分の力を高めて欲しいと思います。</p>																		

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目 (表中の記号は P.17の表を参照のこと)

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
											◎			

建築環境工学演習 Exercises of Architectural Environmental Engineering														
学期区分			後期			区分・単位			選択必修			1単位		
担当教員			環境系教員											
<p>授業の目的： これまでに修得した建築環境工学の講義内容に関して、実際に問題を解く作業や、測定機器を使用した実習によって、建築環境工学全般（光・音・熱・空気・都市環境）についてより深く理解することを目的とする。</p> <p>到達目標： 建築環境工学の各分野の問題を解くこと、および実習によって、建築空間の光・音・熱・空気および都市環境の問題の背後にある考え方に対する理解を深め、問題の解析法を理解し、実地に応用する力を修得する。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス及び小テスト 演習の実施要領についてガイダンスを行う。また、小テストにより講義で学んだ基礎知識の確認を行う。 2. 日影図、日影時間図の作成と室内照度分布の計算 日影図及び日影時間図の作成方法を修得する。室内照度分布の計算方法を修得し、窓の位置による違いを理解する。 3. 騒音計の使用法と各種測定法の実習 騒音計による各種騒音の測定法を修得する。また、室内音響現象を騒音計による実測を通して体験的に理解する。 4. 騒音伝搬の予測と遮音計算 屋外における騒音伝搬の予測方法と、壁体の遮音性能を考慮した室内騒音レベルの予測方法を修得する。 5. 室内音場理論の基礎と応用 室内音場を評価する上で基礎となる残響理論を理解し、用途に応じた室の残響設計の方法を修得する。 6. 壁、窓の熱損失評価 壁体熱損失評価指標の熱貫流率の求め方を修得し、種々の壁、窓の熱損失について評価する。 7. 室の熱負荷計算 壁体の熱貫流率を用いた室の熱収支式の作り方を修得し、壁、窓の構成の違いによる熱負荷を評価する。 8. 結露発生の予測と結露防止計算 表面・内部結露発生の有無の判定法を修得し、壁、窓の構成の違いによる結露防止効果を評価する。 9. 日射及び放射による熱移動 日射の等価外気温と放射熱移動計算に用いる立体角投射率の求め方を修得し、室への熱的影響を評価する。 10. 地表面熱収支の計算 地表面熱収支の計算手法を修得し、屋上緑化、高反射性屋根などの建築被覆材材料が都市熱環境に及ぼす影響を評価する。 11. 都市風環境の評価 都市風環境の評価手法を修得し、密集地域、中高層地域などの様々な街区形態の都市における風環境を評価する。 12. 街路空間の放射環境の計算 街路空間の放射環境の計算手法を修得し、様々な街路幅、建物高さを持つ街路空間の放射環境を評価する。 13. 建築物のライフサイクル評価 建築物のライフサイクル評価手法を修得し、モデル建物の一生涯を通しての総合的な環境負荷を評価する。 14. 総合演習 環境工学系研究室の実験装置等を見学・体験し、これまで演習で行った各種評価との結びつきを考える。 <p>授業の進め方： 第1回は課題説明および小テストを行う。以降、翌週の課題のための予習プリントを配布するので、予習の上で授業に臨むこと。 授業中には演習課題の解答を行い、授業時間の終わりには提出する。</p> <p>成績評価方法： 提出課題の完成度により評価を行う。</p> <p>履修上の注意： 対数計算のできる関数電卓、定規を必ず用意すること。その他、必要なものは適宜指示する。 建築環境工学Ⅰ、建築環境工学Ⅱ、建築環境工学Ⅲ、音環境計画、熱環境計画、都市環境計画を履修しておくことが望ましい。</p>														
<p>教科書・参考文献など： 課題の予習プリントを適宜配布する。 参考書：伊藤克三他「建築環境工学」(オーム社)、前川・森本・阪上「建築・環境音響学(第2版)」(共立出版)、木村建一他「新建築学体系8 自然環境」(彰国社)</p> <p>オフィスアワー、学生へのメッセージ： オフィスアワーの日時は授業開始時に通知します。 演習では、問題を解決するプロセスを理解することが、最も重要である。分からないところはそのままにせず、必ず授業中に質問して解決しておくこと。</p>														

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号はP.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
							○				◎			

建築環境設計演習 Exercise on Environmental Designing in Architecture														
学期区分			後期			区分・単位			選択			1単位		
担当教員			北村薫子，環境系教員											
授業の目的： 「建築環境設計」で学ぶ内容を，演習問題を自分の手で解くことによってより理解を深め，応用できる能力を涵養する。														
到達目標： 建築環境工学の知識は，知っているだけでは意味はなく，現実に建築や都市に関連して起きるさまざまな環境の問題を解決するためのものである。この演習によって，そのための能力を身につけることが本演習の目標である。														
授業内容： 「建築環境設計」の講義内容にあわせて具体的内容を決め，講義の最初に詳しく説明する。 この演習で取り上げるテーマは，だいたい以下の通りである。														
テ　　マ			回数			備　　考								
1．光と色の環境設計			7回			色彩計画，照明計画についてのフィールドワークを含む								
2．環境共生都市・建築の設計			8回			都市気候図の作成，環境共生建築の視察などを含む								
3．音環境の設計						建築音響設計の実際的問題								
4．熱・空気環境の設計						熱環境・空気環境のより発展的な内容								
授業の進め方： 毎回，「建築環境設計」の講義進度にあわせて，関連した演習問題を課する。課題に応じて，プレゼンテーションやワークショップ，見学会，フィールドワークなどを行う。														
成績評価方法： 提出課題によって評価する。														
履修上の注意： 関数電卓，定規を必ず用意すること。その他必要なものは随時指示する。														
教科書・参考文献など： 3年前期までの環境系科目で使用した教科書は，すべて参考書として随時参照する。														
オフィスアワー，学生へのメッセージ： オフィスアワーの日は，各担当教員から授業開始時に通知します。 講義を聴くという受け身的な学び方から，自分の頭を使って答えを出すという，能動的な学び方への転換が重要なポイントです。														

学習・教育目標 ○該当する項目 ◎重点項目（表中の記号は P.17の表を参照のこと）

A. 人間性・社会性の教育			B. 国際性の教育			C. 創造性の教育			D. 専門性の教育			E. 総合性の教育		
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	C 3	D 1	D 2	D 3	E 1	E 2	E 3
						○	○				◎			

IV 市民工学科

1. 教育の目指すもの

市民生活の利便性の向上と安全を確保するためには、新たな都市施設の建設だけではなく、老朽化してきた施設の更新や維持管理、そしてそれらを支える技術開発が重要な課題となってきた。最近ではとくに、環境に配慮するとともに市民の意見を広く反映した都市・地域の計画や施設計画が進められるようになり、設計基準や制度の国際標準化も大きく進展してきている。このような背景の下で、従来の土木工学を包含した幅広い内容を持つ工学領域を21世紀型の新しいCivil Engineering（＝市民工学）としてとらえ、土木工学を基盤としつつ安全・安心で環境に調和した市民社会の創生のための基礎的な教育を進める学科として、市民工学科が設立された。

市民工学科は、人間安全工学講座と環境共生工学講座の2つの講座から構成されており、それぞれの講座で6つの教育研究分野を設けている。人間安全工学講座では、自然災害やテロ・事故などの社会災害に対して安全な都市・地域の創造に関する教育を、環境共生工学講座では、自然と共生する都市・地域を目指した環境の保全と都市施設の維持管理・再生に関する教育を行う。

市民工学科のカリキュラムは、伝統的な土木工学の科目を基盤として、これらの価値目標を達成するための基礎となる科目を用意している。また、近年の社会基盤事業では、プロジェクトに関する専門知識だけではなく、一般市民に対する説明能力やコミュニケーション能力が不可欠となってきたため、具体的な事例を通じた少人数教育により学生の能力向上を目指している。教員はいずれかの教育研究分野に所属し、学生は教員の指導の下に卒業研究を行うことになる。

21世紀の都市が達成すべき価値観は「安全」、「環境」および「創生」であると考えられる。市民工学科では、21世紀の市民社会が必要とする「パブリックサービス」の担い手となるための専門基礎知識および創造性を持った国際性豊かな人材の育成を目標としている。

2. 構成と教育組織

講座名	教育研究分野	教授 (室番)	准教授 (室番)	助教 (室番)	技術職員, 事務職員等 (室番)
人間安全工学	構造安全工学	川谷 充郎 (1W-307)		野村 泰稔 (1W-302)	市成 準一*) (R103)
	地盤安全工学	澁谷 啓 (1W-207)	加藤 正司 (1W-206)	河井 克之 (1W-105)	口池 尚子 (1W-107)
	交通システム工学	喜多 秀行 (1W-306)	竹林 幹雄 (1W-305)	長江 剛志 (自N3-803)	小林 秀恵 (1W-G02)
	地盤防災工学	田中 泰雄*) (R206)	吉田 信之*) (R203)		前田 浩之 (1W-308)
	地震減災工学	高田 至郎 (1W-111)	鍛田 泰子 (1W-109)		
	流域防災工学	藤田 一郎 (1W-309)		神吉 和夫 (1W-205)	石田 幸子 (1W-204)
環境共生工学	環境流体工学	中山 昭彦 (自N3-115)			川島 悠子 (1W-302)
	水圏環境工学	道奥 康治 (1W-209)	宮本 仁志 (1W-208)		柳岡 智子 (1W-104)
	地圏環境工学	沖村 孝*) (R202)	上西 幸司*) (R103)	鳥居 宣之*) (R205)	山崎 操*) (R101)
	広域環境工学	飯塚 敦*) (R204)		斎藤 雅彦*) (R205)	
	都市保全工学	森川 英典 (1W-108)	芥川 真一 (1W-110)		
	都市経営工学	朝倉 康夫 (自N3-811)	富田 安夫 (自N3-814)	井料 隆雅 (自N3-826)	

*) 都市安全研究センター所属

3. 学習・教育目標

市民工学科においては、自然と共生できる社会システムを創造・保全することを目的とし、社会基盤施設の企画、計画、設計、施工から維持、再生に至るプロジェクトの実行およびマネジメントを、強い使命感と高い倫理観をもって行える技術者・研究者として成長できる人材を育成する。そのために、以下に示す一般、専門、総合に分類した学習・教育目標を設定し、基礎学力から応用力に至るまでを修得できるカリキュラムを編成している。専門科目については、市民工学共通、構造工学系、水工学系、地盤工学系、計画系および環境系の科目から履修できる。

学習・教育目標

一 般	(A)	多面的思考・分析能力	物事を多面的な視点から把握し、分析・考察できる能力を養う。
	(B)	技術者倫理	土木事業の持つ社会的影響の重要性和土木技術者の果たすべき社会的責任を理解・自覚し、自ら判断・提言できる技術者倫理を身に付ける。
	(C)	自然科学，人文科学，社会科学，情報基礎等一般基礎学力	土木工学に関連する数学，自然科学，人文科学，社会科学の主要科目と情報基礎を確実に習得し，土木技術者として必要な一般基礎学力を身に付ける。
専 門	(D)	基礎専門学力	土木材料・力学一般／構造工学・地震工学／地盤工学／水工水理学／交通工学・国土計画／環境システムのうち少なくとも3分野以上の基礎知識を身に付け，土木構造物や関連するシステムを計画，設計施工，維持管理，評価する上で必要な専門知識を習得する。
	(E)	現象把握・解析能力，応用能力	実験・実習科目を通して，理論と実現象の関係を把握し，対象への理解を深めるとともに，実際問題を解析し説明できる能力を身に付ける。
	(F)	ツールの応用力，創造的思考能力	実践に必要な機器操作技術や情報処理技術など最新の工学ツールを使い，自ら創造的に課題を探求し，これを分析・考察して論理的に結果をまとめて説明できる能力を習得する。
	(G)	総合的課題解決能力	数学，自然科学，社会科学，人文科学，専門基礎，土木専門の科目の知識を総動員して，課題を探求し，論理を組み立て，解決する能力を習得する。
	(H)	環境観，文化・歴史を活かせる能力	自然環境，景観，文化，歴史の意義を理解し，調和のとれた社会基盤整備に必要な基礎能力を身に付ける。
総 合	(I)	協働能力，コミュニケーション能力	自己の考えを論理的，客観的に記述・説明でき，口頭発表，討議が行える日本語能力を身に付け，異なる専門分野，異なる国の人々と共同で仕事のできる協調性と指導力を身に付ける。
	(J)	生涯学習能力	社会の要請，変化に柔軟に対応して自主的，継続的に学習できる能力を身に付ける。
	(K)	計画的実務遂行能力	自然および社会経済的制約の下で問題を解決し，計画的に仕事を進め，まとめる能力を身に付ける。
	(L)	自己管理能力	自己の健康やスケジュールを管理し，他人と協調を図りながら，仕事を進める能力を身に付ける。

4. 履修科目一覧表（その1）

専門科目

（◎印は必修，○印は選択必修，無印は選択科目を示す）

区分	必修 の別	授 業 科 目	単 位	毎週の授業時間								担 当 教 員	備 考
				1		2		3		4			
				前	後	前	後	前	後	前	後		
共通専門基礎科目（*1）	○	微分積分学	2	2									全学共通授業科目
	○	微積分演習	1		2								
	○	多変数の微分積分学	2		2								
	○	線形代数学Ⅰ	2	2									
	○	線形代数学Ⅱ	2		2								
	○	数理統計学	2			2							
	○	物理学C1	2	2									
	○	物理学C2	2		2								
	○	物理学B2	2			2							
	○	素材化学Ⅰ	2	2									
	○	図学	2	2									
○	図学演習	1		2									
専門基礎科目（*2）	○	数学演習	1	2							加藤	工学部共通科目	
	○	複素関数論	2			2							
	○	常微分方程式論	2			2							
	○	フーリエ解析	2				2						
	○	解析力学A	2				2						
市民工学専門科目（*3）		（市民工学共通科目）											
	◎	市民工学概論	2	2							沖村，高田，田中（非）		
	○	創造思考ゼミナールⅠ	2	2							市民工学科教員		
	◎	測量学	2			2					中田（非）		
	◎	測量学実習	2			6					鋤田		
	◎	土木CAD製図	1				2				森川，鋤田		
	○	市民工学のための確率・統計学	2				2				富田		
	○	学外実習（*4）	1					(*)			川谷		
	○	国際関係論	2					2			飯塚，竹林，土佐（非）		
	◎	実験及び安全指導	2					4			鋤田他		
	◎	数値計算実習	1						2		吉田他		
	◎	市民工学倫理	2						2		市民工学科教員		
	○	創造思考ゼミナールⅡ	2						2		市民工学科教員		
	○	プロジェクトマネジメント	2						2		竹林他		
	○	連続体力学	2						2		飯塚・上西		
	○	合意形成論	2						2		朝倉		
	○	公共施設工学	2						2		富田		
◎	卒業研究	10							6 24	市民工学全教員			
	（構造工学系科目）												
◎	構造力学Ⅰ	2		2						川谷			
◎	材料工学	2		2						森川			
○	構造力学Ⅱ及び演習	3			4					芥川・鋤田			
○	構造力学Ⅲ	2				2				芥川			
○	コンクリート構造学	2					2			森川			

4. 履修科目一覧表（その2）

専門科目

（◎印は必修，○印は選択必修，無印は選択科目を示す）

区分	選択必修の別	授業科目	単位	毎週の授業時間								担当教員	備考
				1		2		3		4			
				前	後	前	後	前	後	前	後		
	○	構造動力学	2					2				高田	
	○	地震安全工学	2						2			高田	
	○	橋梁工学	2						2			川谷	
市		（水工学系科目）											
	◎	水工学の基礎及び演習	3			4						藤田	
	○	管路・開水路の水理学及び演習	3			4						宮本	
	○	水文学	2					2				道奥	
	○	河川・流域工学	2					2				藤田	
	○	海岸・港湾工学	2						2			宮本・勝海（非）	
	○	環境流体の解析学	2						2			中山	
民		（地盤工学系科目）											
	◎	土質力学Ⅰ及び演習	3			4						澁谷，河井	
	○	土質力学Ⅱ及び演習	3			4						飯塚，加藤	
	○	地盤基礎工学	2					2				吉田	
	○	地形工学	2						2			沖村	
	○	地盤調査・施工法	2						2			田中	
学		（計画系科目）											
	◎	計画学Ⅰ及び演習	3			4						喜多，井料	
	○	都市地域計画	2					2				富田	
	○	計画学Ⅱ	2					2				朝倉	
門	○	交通工学	2					2				朝倉	
		（環境系科目）											
	◎	地球環境論	2	2								中山	
	○	水圏環境工学	2					2				道奥	
	○	都市環境工学（*5）	2					2				杉山（非）	
	○	都市安全工学	2					2				沖村，加藤	
	○	地圏環境工学	2						2			吉田	
	○	上下水道工学	2						2			松下（非），浜口（非）	
目（*3）	○	シビックデザイン	2						2			秦（非）	
		（その他）											
		特別講義Ⅰ（*6）	2									（未定）	
		特別講義Ⅱ（*6）	2									（未定）	
		特別講義Ⅲ（*6）	2									（未定）	
	特別講義Ⅳ（*6）	2									（未定）		
	その他必要と認める専門科目											その都度定める	

- （*1） 共通専門基礎科目とは学生便覧における共通専門基礎科目を指す。
- （*2） 専門基礎科目とは学生便覧における専門基礎科目を指す。
- （*3） 共通専門基礎科目，専門基礎科目および市民工学専門科目を総称して学生便覧における専門科目を指す。
- （*4） 学外実習は，3年生の夏休み期間を利用して実施する。
- （*5） 都市環境工学は，夏休み期間に集中講義により開催される。
- （*6） 特別講義Ⅰ～Ⅳは集中講義等により不定期に開催される。

4. 履修科目一覧表（その3）

週授業時間数

	計	1		2		3		4	
		前	後	前	後	前	後	前	後
◎ 必修	68	4	4	16	6	4	4	6	24
○ 選択必修	98	12	8	10	16	24	28	0	0
選 択	8	2	2	0	2	0	2	0	0
合 計	174	18	14	26	24	28	34	6	24

*）特別講義Ⅰ～Ⅳ（各2時間）および学外演習は含んでいない。

単位数

	計	1		2		3		4	
		前	後	前	後	前	後	前	後
◎ 必修	37	4	4	10	4	2	3	0	10
○ 選択必修	93	11	6	9	14	25	28	0	0
選 択	8	2	2	0	2	0	2	0	0
合 計	138	17	12	19	20	27	33	0	10

*）特別講義Ⅰ～Ⅳ（各2単位）は含んでいない。

5. 履修上の注意

(1) 履修規則

- 1) 専門科目総準備単位 138単位
- 2) ◎印は必修科目, ○印は選択必修科目, 他は選択科目である。
- 3) 卒業要件に関わる科目の履修登録単位数の上限は1年間で56単位とする。(教学規則第29条, 工学部規則第6条第1項)。
- 4) 学生の卒業に必要な単位は126単位以上とする。その内訳は次のとおりである。(工学部規則第5条, 別表第2)。

表1 卒業に必要な単位数

授業科目の区分等	授 業 科 目 名 等	必要単位数		備 考
教 養 原 論	別表第1イに掲げる授業科目	16		
外 国 語 科 目	外国語第Ⅰ	英語リーディングⅠ 英語リーディングⅡ 英語リーディングⅢ 英語オーラルⅠ 英語オーラルⅡ 英語オーラルⅢ	1 1 1 1 1 1	6
	外国語第Ⅱ	独語ⅠA, 仏語ⅠA, 中国語ⅠA, ロシア語ⅠA 独語ⅠB, 仏語ⅠB, 中国語ⅠB, ロシア語ⅠB 独語ⅡA*, 仏語ⅡA*, 中国語ⅡA*, ロシア語ⅡA 独語ⅡB*, 仏語ⅡB*, 中国語ⅡB*, ロシア語ⅡB	1 1 1 1	4
情 報 科 目	情報基礎	1	1	
健康・スポーツ科学	健康・スポーツ科学実習Ⅰ	1	1	
選 択 科 目 (全学共通授業科目)	英語アドバンストA 英語アドバンストB 英語アドバンストC 独語ⅢA, 仏語ⅢA, 中国語ⅢA, ロシア語ⅢA 独語ⅢB, 仏語ⅢB, 中国語ⅢB, ロシア語ⅢB 独語ⅣA, 仏語ⅣA, 中国語ⅣA, ロシア語ⅣA 独語ⅣB, 仏語ⅣB, 中国語ⅣB, ロシア語ⅣB 独語XⅠ, 仏語XⅠ, 韓国語XⅠ, スペイン語XⅠ, イタリア語XⅠ 独語XⅡ, 仏語XⅡ, 韓国語XⅡ, スペイン語XⅡ, イタリア語XⅡ 健康・スポーツ科学講義 健康・スポーツ科学実習Ⅱ 情報科学	98		1. 外国語(9単位), 健康・スポーツ科学(3単位)及び情報科学(2単位)を修得した場合は, 必要修得単位数に算入する。ただし, 上限は2単位とする。 1) 独語, 仏語, 中国語及びロシア語のⅢA, ⅢB, ⅣA及びⅣBについては, 外国語第Ⅱの必修で選択した語学のみ履修を認める。 2) 独語, 仏語, 韓国語, スペイン語及びイタリア語のXⅠ及びXⅡについては, 外国語第Ⅱの必修で選択していない語学を選択すること。 3) 専門科目は, 96単位以上修得すること。
専 門 科 目	授業要覧 p.94~95の一覧表に掲げる授業科目			2. 専門科目について 1) 必修科目37単位(卒業研究10単位を含む)を修得すること。 2) 共通専門基礎科目及び専門基礎科目の選択必修科目から14単位以上修得すること。 3) 市民工学専門科目の選択必修科目から45単位以上修得すること。 4) ①構造工学系科目, ②水工学系科目, ③地盤工学系科目, ④計画系科目, ⑤環境系科目のそれぞれから6単位以上を修得すること。
合 計		126		

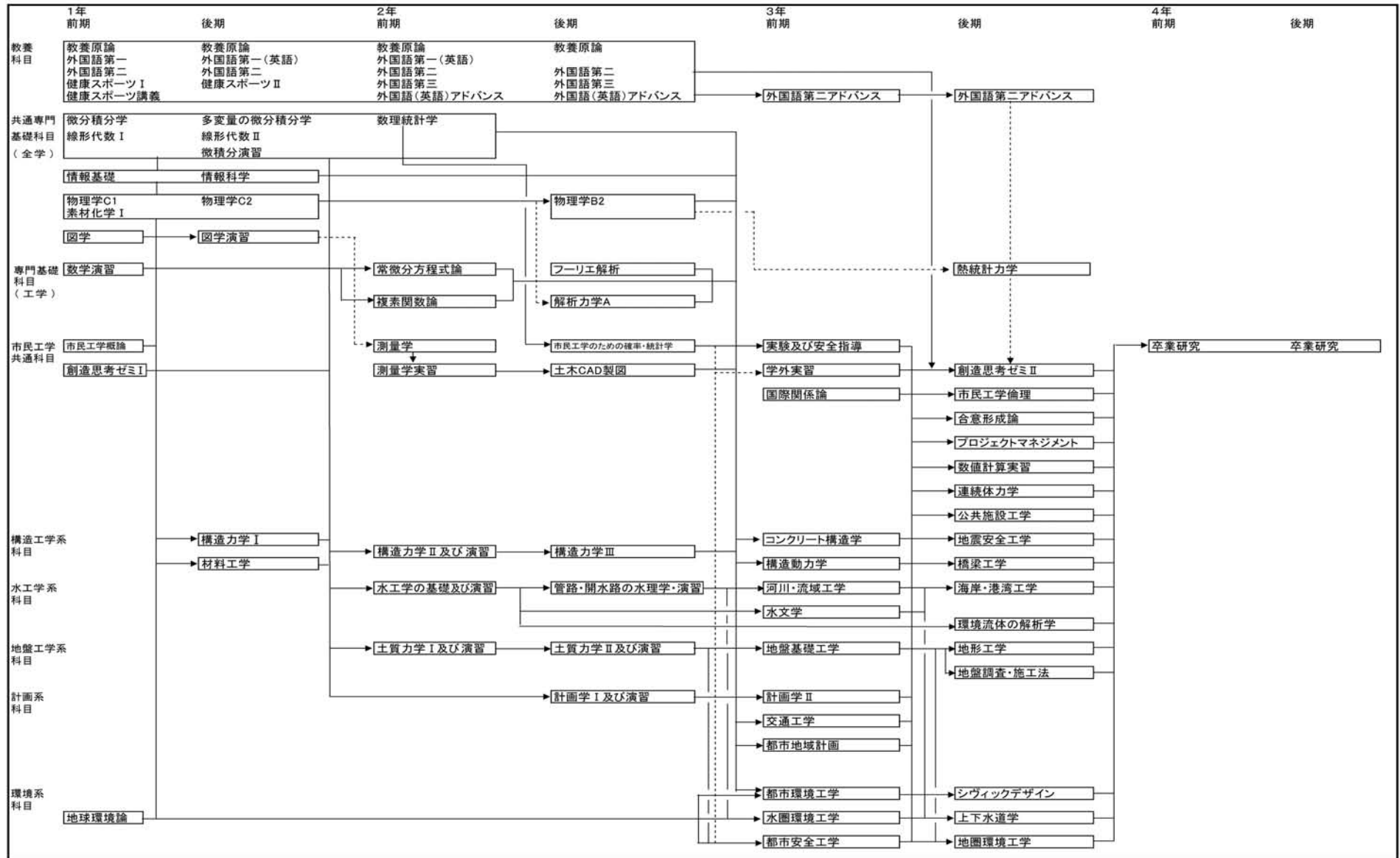
- 5) 他学科または他学部の専門科目の授業科目中、当学科が認めた場合は、当学科の選択科目とみなすことができる。他大学（外国の大学を含む）、及び入学前の既修得単位の取り扱いは、工学部規則第8条、第9条及び第10条に従う。
- (2) 市民工学科履修内規
- (1) 卒業研究申請要件について（工学部規則第7条2項）
卒業研究の申請をしようとする者は、表2に示す単位を修得していること。

表2 卒業研究の申請に必要な単位数

授 業 科 目	単 位 数
教 養 原 論	14単位
外 国 語 科 目	10単位
情 報 科 目	1 単位
健 康 ・ ス ポ ー ツ 科 学 健康・スポーツ科学実習 I	1 単位
専 門 科 目 等	74単位（必修科目21単位，選択必修科目53単位以上を含む）
合 計	100単位以上

- (2) 履修科目の登録の上限を超えて登録することができる者の基準について
学生便覧における「履修科目の登録の上限を超えて登録することができる者の基準について」を参照すること。
- (3) 早期卒業に関する認定基準について
学生便覧における「早期卒業の認定基準に関する内規」および「早期卒業に関する学科別認定基準等について」を参照すること。

6. 各授業科目の関係



市民工学概論 Introduction to Civil Engineering											
学期区分	1年前期	区分・単位	必修 2単位								
担当教員	沖村 孝 (Takashi OKIMURA), 高田至郎 (Shiro TAKADA) 田中輝彦 (Teruhiko TANAKA), 他市民工学科教員										
<p>キーワード: 社会基盤施設, 土木事業, 土木工学体系, 公共の福祉, 土木技術者</p> <p>授業の目標: 講義および現地施設見学をとおして土木施設が社会に果たす役割, 施設の計画・設計・施工・維持管理と土木工学体系の関係を理解させるとともに, 土木技術者の使命を理解し, 多面的に物事を把握する視野の広さを養わせる。</p> <p>学生の学習目標:</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 土木事業と土木工学体系の理解, ② 土木施設の種類と社会における役割の理解, ③ 公共土木事業と行財政の仕組みの理解, ④ 土木技術者の役割と使命の理解 <p>授業の概要:</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> <ol style="list-style-type: none"> 1. 市民工学の学問体系 2. 公共施設概論 (I) (力のバランス) 3. 公共施設概論 (II) (施設と力学) 4. 公共施設概論 (III) (地盤) 5. 現地施設見学 (1) 6. 公共施設概論 (IV) (建設材料) 7. 公共施設概論 (V) (橋梁) 8. 市民工学の実社会 (I) (災害) </td> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> <ol style="list-style-type: none"> 9. 現地施設見学 (2) 10. 市民工学の実社会 (II) (技術者の倫理) 11. 公民事業と社会 (I) (市民工学の役割) 12. 現地施設見学 (3) 13. 公民事業と社会 (II) (公共事業とプロジェクトマネジメント) 14. 公民事業と社会 (III) (海外プロジェクトと国際協力) 15. 公共事業と社会 (IV) (市民工学の将来) </td> </tr> </table> <p>関連する学習・教育目標の項目: (A), (B), (D), (J)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け: 市民工学共通科目で全員が1学年に履修。</p> <p>授業の進め方: 講義中は教科書・参考書及びパワーポイントによるプレゼンテーションなどを含み分かりやすく説明する。また, 3回の現地見学を通して実際の土木構造物に触れる機会を持つ。</p> <p>評価の方法と基準: 出席回数, 授業中のレポート2回 (70点), 現地見学のレポート3回 (30点) によって評価する。出席回数70%未満のものは不合格。なお, レポート用紙は配布した用紙以外は認めない。</p> <p>オフィスアワーなど:</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 15%;">沖村・高田</td> <td>: 前期期間毎週金曜日, 15:30-17:00 (都市安全研究センター2F 沖村教授室・1W棟1F, 高田教授室)</td> </tr> <tr> <td>田中 (非常勤講師)</td> <td>: 前期期間講義日, 15:30-17:00 (1W棟1F, 1W111 高田教授室)</td> </tr> <tr> <td>現地見学関係</td> <td>: 見学引率者がその都度指定</td> </tr> </table> <p>テキスト・教材・参考書など: 重力の達人 (田中輝彦著: 岩波ジュニア新書)</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言: 現地見学は見学先の都合により, 日時は固定されていないので, 第1回目授業時にスケジュール表を渡す。 新聞その他のメディアでの土木事業に関する報道に絶えず関心を払うこと。</p>				<ol style="list-style-type: none"> 1. 市民工学の学問体系 2. 公共施設概論 (I) (力のバランス) 3. 公共施設概論 (II) (施設と力学) 4. 公共施設概論 (III) (地盤) 5. 現地施設見学 (1) 6. 公共施設概論 (IV) (建設材料) 7. 公共施設概論 (V) (橋梁) 8. 市民工学の実社会 (I) (災害) 	<ol style="list-style-type: none"> 9. 現地施設見学 (2) 10. 市民工学の実社会 (II) (技術者の倫理) 11. 公民事業と社会 (I) (市民工学の役割) 12. 現地施設見学 (3) 13. 公民事業と社会 (II) (公共事業とプロジェクトマネジメント) 14. 公民事業と社会 (III) (海外プロジェクトと国際協力) 15. 公共事業と社会 (IV) (市民工学の将来) 	沖村・高田	: 前期期間毎週金曜日, 15:30-17:00 (都市安全研究センター2F 沖村教授室・1W棟1F, 高田教授室)	田中 (非常勤講師)	: 前期期間講義日, 15:30-17:00 (1W棟1F, 1W111 高田教授室)	現地見学関係	: 見学引率者がその都度指定
<ol style="list-style-type: none"> 1. 市民工学の学問体系 2. 公共施設概論 (I) (力のバランス) 3. 公共施設概論 (II) (施設と力学) 4. 公共施設概論 (III) (地盤) 5. 現地施設見学 (1) 6. 公共施設概論 (IV) (建設材料) 7. 公共施設概論 (V) (橋梁) 8. 市民工学の実社会 (I) (災害) 	<ol style="list-style-type: none"> 9. 現地施設見学 (2) 10. 市民工学の実社会 (II) (技術者の倫理) 11. 公民事業と社会 (I) (市民工学の役割) 12. 現地施設見学 (3) 13. 公民事業と社会 (II) (公共事業とプロジェクトマネジメント) 14. 公民事業と社会 (III) (海外プロジェクトと国際協力) 15. 公共事業と社会 (IV) (市民工学の将来) 										
沖村・高田	: 前期期間毎週金曜日, 15:30-17:00 (都市安全研究センター2F 沖村教授室・1W棟1F, 高田教授室)										
田中 (非常勤講師)	: 前期期間講義日, 15:30-17:00 (1W棟1F, 1W111 高田教授室)										
現地見学関係	: 見学引率者がその都度指定										

創造思考ゼミナールⅠ Seminar for Creative Thinking I																			
学期区分	1年前期	区分・単位	選択必修 2単位																
担当教員	市民工学科教員																		
<p>キーワード： 問題発見，ディベート，分析・批判・評価，プレゼンテーション</p> <p>授業の目標： 土木に関連した共通テーマを設定し，討議，調査，分析，発表を通じて，創造的思考のための方法および技術を修得させ，主体的に勉強および研究に取り組む能力を養うことを目的とする。</p> <p>学生の学習目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 問題発見能力の修得 ② ディベート能力の修得 ③ 分析・批判・評価能力の修得 ④ プレゼンテーション能力の修得 <p>授業の概要：</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 50%;">1. テーマ説明・グループ分け，</td> <td style="width: 50%;">9. 調査・分析（Ⅳ），</td> </tr> <tr> <td>2. 問題整理，</td> <td>10. 調査・分析（Ⅴ），</td> </tr> <tr> <td>3. 調査・分析（Ⅰ），</td> <td>11. 調査・分析（Ⅵ），</td> </tr> <tr> <td>4. 調査・分析（Ⅱ），</td> <td>12. 調査・分析（Ⅶ），</td> </tr> <tr> <td>5. 調査・分析（Ⅲ），</td> <td>13. 発表準備，</td> </tr> <tr> <td>6. 発表準備，</td> <td>14. 最終発表会（Ⅰ），</td> </tr> <tr> <td>7. 中間発表会（Ⅰ），</td> <td>15. 最終発表会（Ⅱ）</td> </tr> <tr> <td>8. 中間発表会（Ⅱ），</td> <td></td> </tr> </table> <p>関連する学習・教育目標の項目： (A)，(B)，(D)，(H)，(I)，(J)，(L)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け： 市民工学共通科目で希望者が1学年に履修。</p> <p>授業の進め方： 6名程度のグループに分かれて，各グループを担当する教員の指導のもと，指定されたテーマに取り組む。</p> <p>評価の方法と基準： 各グループの教員による個人評価（70%），および最終発表会における成果に対するグループ評価（30%）の割合で総合評価し，60%以上を合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど： 各教員より指示。</p> <p>テキスト・教材・参考書など： インターネットおよび図書館を活用すること。また，適宜，関係機関・施設を訪問してヒアリングを実施。</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言： このゼミナールを通じて，創造的思考のための方法および技術を修得するとともに，教員と身近に接することができるようになることを望んでいます。</p>				1. テーマ説明・グループ分け，	9. 調査・分析（Ⅳ），	2. 問題整理，	10. 調査・分析（Ⅴ），	3. 調査・分析（Ⅰ），	11. 調査・分析（Ⅵ），	4. 調査・分析（Ⅱ），	12. 調査・分析（Ⅶ），	5. 調査・分析（Ⅲ），	13. 発表準備，	6. 発表準備，	14. 最終発表会（Ⅰ），	7. 中間発表会（Ⅰ），	15. 最終発表会（Ⅱ）	8. 中間発表会（Ⅱ），	
1. テーマ説明・グループ分け，	9. 調査・分析（Ⅳ），																		
2. 問題整理，	10. 調査・分析（Ⅴ），																		
3. 調査・分析（Ⅰ），	11. 調査・分析（Ⅵ），																		
4. 調査・分析（Ⅱ），	12. 調査・分析（Ⅶ），																		
5. 調査・分析（Ⅲ），	13. 発表準備，																		
6. 発表準備，	14. 最終発表会（Ⅰ），																		
7. 中間発表会（Ⅰ），	15. 最終発表会（Ⅱ）																		
8. 中間発表会（Ⅱ），																			

測量学 Surveying			
学期区分	2年前期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	中田勝行 (Katsuyuki NAKATA)		
<p>キーワード: 社会基盤形成, 土木基礎技術, 計測技術, 空間情報, 電子地図, TS,GPS,GIS,RS, ジオマテックス</p> <p>授業の目標: 測量とは地球上の種々地点の位置を決定する技術であり, 点間の距離・方向・高さなどを測定し, その成果から地図(地形図・平面図)として表現する技術である。これは社会基盤形成のための, 諸施設の計画・建設・利用にあたって必要な基礎技術である。本授業では基礎的な測量の理論と方法を理解すると共に, 測量という言葉が空間情報工学やジオマテックスと言われる周辺領域との複合技術になってきている事を理解し視野を広める。</p> <p>学生の学習目標:</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 測量知識の取得と理解。 ② 測量学と測量学実習を履修することにより測量理論と実技に熟知。 ③ 行財政における測量の役割を理解。 ④ 土木事業と測量の役割の理解。 ⑤ 測量技術者の役割と使命を理解。 <p>授業の概要: 測量学概論・測量機器・誤差論・基準点測量「距離・水準・測角(多角・三角測量)・GPS」・地形測量「実地測量(平板測量・スタジア測量・TS測量)・写真測量」・応用測量・写真判読とリモートセンシング・GIS。 実習については別途, 測量学実習を用意し実技の修得をはかる。</p> <p>関連する学習・教育目標の項目: (A), (B), (C), (D), (E), (F), (K), (L)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け: 市民工学共通科目で全員が2学年に履修。</p> <p>授業の進め方: 講義は教科書・配付資料・パワーポイント等によって説明・討議で進める。また, 可能なら最新の測量技術, 状況を理解するため, 学外見学会を実施したい。</p> <p>評価の方法と基準: 期間中に与える課題についてのレポートを30%, 定期試験の結果を70%と評価し, その合計が60%以上を合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど: 中田(非常勤講師): 前期期間講義日, その他の日に連絡が必要な場合は教学委員又は土木系事務室に連絡。 又, 初回講義日に連絡先メールアドレスを提示するので, メールにて連絡可能にする。</p>			
<p>テキスト・教材・参考書など:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 教科書として 改訂版 測量学 1 基礎編(森 忠次 著)丸善 <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言: 必要に応じて, 参考文献, 参考図書の紹介や, 資料・プリントの配付をおこなう。</p>			

測量学実習 Survey (Field training)											
学期区分	2年前期	区分・単位	必修 2単位								
担当教員	鍬田泰子 (Yasuko KUWATA), 河井克之 (Katsuyuki KAWAI), 神吉和夫 (Kazuo KANKI), 鳥居宣之 (Nobuyuki TORII), 斎藤雅彦 (Masahiko SAITO), 野村泰稔 (Yasutoshi NOMURA), 井料隆雅 (Takamasa IRYO), 長江剛志 (Takeshi NAGAE)										
<p>キーワード: 測量技術, 平板測量, 角測量, 距離測量, 土木技術者</p> <p>授業の目標: 測量学で学んだ内容を理解するために実習を行う。具体的には, 測量学の講義で学んだ内容を再認識するとともに, 野外で測量を行うにあたり必要な知識を習得する。また, 測量器具の名称を確認し, その正しい使い方を修得する。共同作業を通して, 作業遂行に必要な実習態度ならびに経験知識を習得する。</p> <p>学生の学習目標:</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 測量機器の取り扱いに慣れること。 ② 距離測量を行えるようになること。 ③ 平板測量を行えるようになること。 ④ 水準測量を行えるようになること。 ⑤ トラバース測量を行えるようになること。 ⑥ スタジア測量を行えるようになること。 <p>授業の概要:</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 50%;">1. ガイダンス,</td> <td style="width: 50%;">5. 水平角の測定,</td> </tr> <tr> <td>2. 距離測量,</td> <td>6. トラバース測量,</td> </tr> <tr> <td>3. 平板測量,</td> <td>7. スタジア測量,</td> </tr> <tr> <td>4. 水準測量,</td> <td>8. 三角測量,</td> </tr> </table> <p>なお, (5) トラバース測量の前後に, セオドライトの取り扱いに関する試験を行う。</p> <p>関連する学習・教育目標の項目: (A), (C), (D), (E), (F), (K), (L)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け: 市民工学共通科目で全員が2学年に履修。</p> <p>授業の進め方: 実習科目である。必要に応じて直接に指導を行ったり, プリントを配布して説明する。</p> <p>評価の方法と基準: 各課題のレポートならびに図面 (80%), セオドライトの実技試験 (20%) の配分で評価し, 60%以上を合格とする。ただし, 原則として, 各課題のレポートおよび図面は当該課題について70%以上出席したもののみを採点対象とする。</p> <p>オフィスアワーなど: 全担当教員: 実習日の昼休み。</p> <p>テキスト・教材・参考書など: 「測量学」に同じ。</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言: 「測量学」を必ず履修していること。</p>				1. ガイダンス,	5. 水平角の測定,	2. 距離測量,	6. トラバース測量,	3. 平板測量,	7. スタジア測量,	4. 水準測量,	8. 三角測量,
1. ガイダンス,	5. 水平角の測定,										
2. 距離測量,	6. トラバース測量,										
3. 平板測量,	7. スタジア測量,										
4. 水準測量,	8. 三角測量,										

土木 CAD 製図		CAD Drawing in Civil Engineering	
学期区分	2年後期	区分・単位	必修 1単位
担当教員	森川英典 (Hidenori MORIKAWA), 楯田泰子 (Yasuko KUWATA)		
<p>キーワード: CAD, 製図, デザイン</p> <p>授業の目標: 土木構造物の設計, 施工を行うにあたり必要とされる土木製図法, CAD 製図法についての基本的な知識を習得することを目的とし, 製図法の基礎について講述するとともに, 実際の土木構造物に関する製図の演習を行う。</p> <p>学生の学習目標:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 鉄筋コンクリート構造物, 鋼構造物などの土木構造物に関する製図の表記法, 読み方, 製図法に習得する。 2. CAD 製図の基礎について習得する。 3. 構造物デザインにおける創作についての理解を深める。 <p>授業の概要:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 土木製図法概説 2. CAD 製図法概説 3. CAD 操作法概説 4. CAD 製図実習 コンピューター演習室において, CAD ツールを用いて製図実習を行う。 課題1: 規定課題として, 指定の製図を行う。 課題2: 自由課題として, 指定条件のもとに, 構造物デザインの創作, デッサン, 製図を行う。 <p>関連する学習・教育目標の項目: (C), (E), (F)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け: 市民工学共通科目で全員が2学年に履修。</p> <p>授業の進め方: 授業の最初に概説を講述し, その後, コンピューター演習室において, 各自実習を行う。基本的な操作法について適宜, プロジェクターを使用して解説する。実習中は, 担当教員とティーチングアシスタントで共同して, 個別指導にあたる。また実習の過程で個別実技試験を課す。</p> <p>評価の方法と基準: 出席回数70%以上でかつ個別実技試験に合格した者に対して成績を評価するものとし, 課題1の成果(50%)と課題2の成果(50%)で評価し, 60%以上を合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど: 講義日 17:30-19:00 (1W棟 1階 1W-108 森川教授室) (1W棟 1階 1W-109 楯田准教授室)</p> <p>テキスト・教材・参考書など: ・清水泰弘「土木製図入門第二版 基準からCAD製図まで」(彰国社), その他講義中にプリントを配付する。</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言: ・この実習のためには, 製図法の知識を理解するとともに, コンピューターの操作に慣れることが必須です。</p>			

市民工学のための確率・統計学 Mathematical Statistics for Civil Engineering																			
学期区分	2年後期	区分・単位	選択必修 2単位																
担当教員	富田安夫 (Yasuo TOMITA)																		
<p>キーワード： 確率統計理論，回帰分析，確率効用モデル</p> <p>授業の目標： 社会基盤の計画にあたっては，1) 諸現象の記述・分析のための数学理論，および，2) 計画代替案の作成・評価に関連した数学理論，を必要とする。本講義では，前者について理解させることを目的とする。</p> <p>学生の学習目標：</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 確率・統計理論の理解 ② 回帰分析の理解 ③ 確率シミュレーションの理解 <p>授業の概要：</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 50%;">1. 確率論 (I)，</td> <td style="width: 50%;">9. 回帰分析 (I)，</td> </tr> <tr> <td>2. 確率論 (II)，</td> <td>10. 回帰分析 (II)，</td> </tr> <tr> <td>3. 確率論 (III)，</td> <td>11. 回帰分析 (III)，</td> </tr> <tr> <td>4. 確率論 (IV)，</td> <td>12. 回帰分析 (IV)，</td> </tr> <tr> <td>5. 推定と検定 (I)，</td> <td>13. 確率シミュレーション (I)，</td> </tr> <tr> <td>6. 推定と検定 (II)，</td> <td>14. 確率シミュレーション (II)，</td> </tr> <tr> <td>7. 推定と検定 (III)，</td> <td>15. 確率シミュレーション (III)</td> </tr> <tr> <td>8. 推定と検定 (IV)，</td> <td></td> </tr> </table> <p>関連する学習・教育目標の項目： (D)</p> <p>カリキュラムの中での位置付け： 市民工学共通科目で希望者が2学年に履修。</p> <p>授業の進め方： 授業中に配布するプリントによる講義および演習の併用形式とする。 随時，中間試験を実施し理解度を確認する。中間試験の採点結果は翌週，返却する。</p> <p>評価の方法と基準： 授業中の中間試験2回 (40%)，および期末試験 (60%) の結果により判定する。出席回数70%未満のものは不合格，出席回数70%以上で，かつ，中間および期末試験の総合判定の点数が60%以上の場合を合格とする。また，中間試験の返却時に欠席した者は「未受験扱い」とする。</p> <p>オフィスアワーなど： 富田：後期期間毎週月曜日，15：30-17：00 (自然科学3号館8F，富田准教授室)</p> <p>テキスト・教材・参考書など： 必要に応じて講義中に資料を配布する。</p>				1. 確率論 (I)，	9. 回帰分析 (I)，	2. 確率論 (II)，	10. 回帰分析 (II)，	3. 確率論 (III)，	11. 回帰分析 (III)，	4. 確率論 (IV)，	12. 回帰分析 (IV)，	5. 推定と検定 (I)，	13. 確率シミュレーション (I)，	6. 推定と検定 (II)，	14. 確率シミュレーション (II)，	7. 推定と検定 (III)，	15. 確率シミュレーション (III)	8. 推定と検定 (IV)，	
1. 確率論 (I)，	9. 回帰分析 (I)，																		
2. 確率論 (II)，	10. 回帰分析 (II)，																		
3. 確率論 (III)，	11. 回帰分析 (III)，																		
4. 確率論 (IV)，	12. 回帰分析 (IV)，																		
5. 推定と検定 (I)，	13. 確率シミュレーション (I)，																		
6. 推定と検定 (II)，	14. 確率シミュレーション (II)，																		
7. 推定と検定 (III)，	15. 確率シミュレーション (III)																		
8. 推定と検定 (IV)，																			

学外実習 Civil Engineering Practice				
学期区分	3年前期	区分・単位	選択必修	1単位
担当教員	川谷充郎 (Mitsuo KAWATANI)			
<p>キーワード: 土木技術の役割と使命, インターンシップ, 企業内実習</p> <p>授業の目標: 土木工学の実際を学ぶ。学外諸機関(企業, 官庁他)における実際業務を体験し, 土木技術の役割・使命について学ぶのと同時に, 将来のあり方について考える。</p> <p>学生の学習目標: 所属した諸機関で, 実務がどのように行われているか。将来の土木技術を担うものとして, どのような問題意識をもたねばならないか。土木技術者が遭遇している諸問題に対して, どのようなアプローチをとって, 解決をはからねばならないか, 実地に見聞・経験・実習する。</p> <p>授業の概要: 夏休みの期間を利用して, 学外の土木系各機関に派遣される。派遣先では, それぞれ指示された業務に携わる。帰学後には, 「実習」した内容をレポートとして提出し, さらに, 発表会にて内容を披露する。 なお, 学外実習に際しては, 事前に「学生教育研究災害傷害保険」ならびに「学研災付帯賠償責任保険」への加入を義務づける。</p> <p>関連する学習・教育目標の項目: (A), (B), (E), (G), (I), (J), (K), (L)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け: 市民工学共通科目で希望者が3学年に履修。</p> <p>授業の進め方: 夏休み期間中を利用して, 学外の指定された機関にて実務などを実習する。</p> <p>評価の方法と基準: 派遣先で良好な態度で実習に参加した者に対して, 実習レポート(30%), 実習の発表会(70%)の配分で成績を評価し, 60%以上を合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど: オフィスアワーは特に指定しない。しかし, 実習生との緊急連絡網を設定するため, 緊急連絡先(携帯などの電話番号, e-mail アドレス)の提示を求める。前期の他の授業の妨げにならない時間に, 適時, ガイダンスを実施し, 各実習希望者の派遣先を決定する。派遣先によっては, 実習先で知り得た内容に対する守秘義務等の誓約をとりかわす場合もある。学外派遣先には限りがあり, 実習期間も派遣先の都合に左右されうることから, 履修定員を定めることがある。実習先, 実習期間は, 前期の早い時期に決定されるので, 履修希望者はガイダンス等の案内の掲示に注意しておくこと。なお, 履修希望者は, 実習先で何を修得したいのか, 問題意識を明確にすること。それを達成するには, どこ(企業, 官庁など)を希望すればよいのか事前に調査しておくこと。</p> <p>テキスト・教材・参考書など: 指定しない。</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言: 他のあらゆる工学分野に先んじて, 現在, 価値観のコペルニクス的大転回が求められている土木工学に対して, 将来のあるべき姿を熟考するきっかけとしてほしい。</p>				

国際関係論		International Relations in Civil Engineering		
学期区分	3年前期	区分・単位	選択必修	2単位
担当教員	飯塚 敦 (Atsushi IIZUKA), 竹林幹雄 (Mikio TAKEBAYASHI) 国際協力研究科 土佐弘之 (Hiroyuki TOSA)			
<p>キーワード: 社会思想, 国際協調, 国際行政, 国際貢献</p> <p>授業の目標: 21世紀に入り, 我が国が単独で成立することは最早あり得ないことは自明である。経済, 政治に関わらず, 工学自身も国際的な舞台での相互関係を無視しては機能し得ない。特に, 土木工学を市民のための工学として位置付けるとき, 国際社会における我が国のおかれた状況を俯瞰的, 客観的に看破し, そのあり方と今後の対応と展望を提示できずして, 人類普遍の市民のための工学として機能することは叶わない。本授業は, このような視点の下, 国際的相互関係を読み解く基礎知識の修得を目標とする。</p> <p>学生の学習目標: 国際関係を読み解く, 基礎的な知識を修得する。まず始めに, 国際関係論の学問的位置付けを学び, 政治史的権力構造の変遷, 国際的行政学, そして我が国の国際貢献を振り返りながら, 土木工学技術の国際的展開のあり方, 国際市民社会における価値を考究する動機付けを与える。</p> <p>授業の概要:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 国際関係論の位置付け (国際関係論概要) 2. 国際関係思想の潮流, 権力構造, 制度と規範 <ol style="list-style-type: none"> (1) リアリズム思想 (2) リベラリズム思想 3. 国際公共政策過程と国際行政 4. 地球環境政策と国際行政 5. 国際開発政策と国際行政 6. 国際貢献 7. 事例研究 <p>関連する学習・教育目標の項目: (C), (D), (H)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け: 市民工学共通科目で希望者が3学年に履修。2年生までに学んだ専門科目の質的相互関係を国際的視野の下で把握できる能力を身につける。事前の履修要件はない。</p> <p>授業の進め方: 授業内容の1から6までは, 講義形式で教授するが, 7では小人数グループに別れ, 個々に設定されたテーマごとに調査し, 成果を討論する。 教科書は指定しない。必要に応じてプリントを配布する。</p> <p>評価の方法と基準: 演習課題 (40%), 定期試験 (60%) の配分で評価し, 60%以上の得点を合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど: 国際協力研究科の土佐教授に対しては授業終了後。他の学科の教員に対しては授業開講日の随時</p> <p>テキスト・教材・教科書など: 参考書: 岩田一政他著, 国際関係論入門, 東京大学出版 参考書: 福田耕治, 国際行政学, 有斐閣ブックス その他履修上の注意事項や学習上の助言: 次代を担う土木技術者としての自覚をもって, 授業に臨んでほしい。</p>				

実験及び安全指導 Practice in Civil Engineering and Safety Guidance			
学期区分	3年前期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	鍬田泰子 (Yasuko KUWATA), 川谷充郎 (Mitsuo KAWATANI), 森川英典 (Hidenori MORIKAWA), 澁谷 啓 (Satoru Shibuya), 加藤正司 (Shoji KATO), 河井克之 (Katsuyuki KAWAI), 鳥居宣之 (Nobuyuki TORII), 中山昭彦 (Akihiko NAKAYAMA), 藤田一郎 (Ichiro FUJITA), 宮本仁志 (Hitoshi MIYAMOTO), 斎藤雅彦 (Masahiko SAITO)		
<p>キーワード: 構造実験, 材料実験, 水理実験, 土質実験, 安全管理, 土木技術者</p> <p>授業の目標: 土木構造物の建設計画・設計を行うにあたり必要な土木工学各分野の材料実験および実習を行う。また, 実験中は, 機械装置, 電気機器, 電動工具, 薬品などの取り扱いや重量物の移動作業などの安全に十分な配慮が必要となる。実習の最初の段階で, 安全に関する基礎知識を習得する。</p> <p>学生の学習目標:</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 土木工学の建設計画・設計などにおける土木工学各分野の実験手法および評価方法を学ぶこと ② 機械装置, 電気機器, 電動工具, 薬品などの取り扱いや重量物の移動作業などの安全に配慮できるようになること。 <p>授業の概要:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 安全指導: 構造系, 材料系, 水理系, 土質系に分けて, 安全に関する基礎知識, 注意事項について学ぶ。 2. 構造工学実験: 鋼材の強度特性および構造物の静力学, 動力学の挙動を確認するための実験を行う。 3. 材料学実験: 基本的な土木材料の一つであるコンクリートを配合設計し, その材料特性を確認するための一連の実験を行う。 4. 水工学実験: 簡単な装置を用いた室内水理実験により, 運動量則, ベルヌーイの定理, 渦発生, 摩擦法則, 水面波動など, 土木工学上の流れに関する特性・メカニズムを理解する。 5. 地盤工学実験: 土構造物に設計する際に必要な土質定数の算定法を学ぶ, 特に, 土質分類, 変形強度特性, 締固め特性に関する実験を行う。 <p>関連する学習・教育目標の項目: (D), (E), (F)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け: 市民工学共通科目で全員が3学年に履修。</p> <p>授業の進め方: 学生が主体となって, 実験・実習を行う。必要に応じて直接指導, またはプリント配布して説明する。</p> <p>評価の方法と基準: 構造工学実験レポート25%, 材料学実験レポート25%, 水工学実験レポート25%, 地盤工学実験レポート25%で評価し, 各課題の評価を合計して平均し, 60%以上を合格とする。ただし, 原則として無断欠席者のレポートは採点の対象外とする。</p> <p>オフィスアワーなど: 全担当教員: 実験当日の昼休み。</p> <p>テキスト・教材・参考書など: 開講時に適宜指示する。</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言: 「構造力学Ⅰ」「構造力学Ⅱ及び演習」「構造力学Ⅲ」「構造動力学」「材料工学」「水工学の基礎及び演習」「管路・開水路の水理及び演習」「土質力学Ⅰ及び演習」「土質力学Ⅱ及び演習」を履修していることが望ましい。</p>			

数値計算実習 Numerical Simulation Exercise			
学期区分	3年後期	区分・単位	必修 1単位
担当教員	井料隆雅 (Takamasa IRYO), 齋藤雅彦 (Masahiko SAITO), 吉田信之 (Nobuyuki YOSHIDA), 芥川真一 (Shinichi AKUTAGAWA)		
キーワード:	プログラミング, 論理的思考, 視覚的效果		
授業の目標:	<p>情報化社会における土木工学分野でのコンピュータの利用に関する基礎知識を習得し, 数種類の分野における演習問題の実施を通して, プログラミングの基礎, アルゴリズムの構築, iMac 環境におけるプログラミング技法, コンピュータを利用した教育方法などに関する基礎知識を得ることを目的とする。</p>		
学生の学習目標:	<p>① プログラミング技法の理解, ② アルゴリズム構築概念の理解, ③ 四則演算など基礎的演算技法の理解, ④ 応用プログラミング技法の理解</p>		
授業の概要:	<p>基礎編: 1. ソフトウェアの基本操作法, 2. 四則演算, 3. 繰り返し, 4. 判断, 関数, 5. 入出力, 6. グラフィック出力</p> <p>応用編: 7 & 8. 高次方程式, 9 & 10. 線形, 非線形計画法, 11 & 12. 連立一次方程式, 13 & 14. 2階偏微分方程式, 15. その他</p>		
関連する学習・教育目標の項目:	(C), (D), (E), (F), (G)		
カリキュラムの中の位置付け:	市民工学共通科目で全員が3学年に履修。		
授業の進め方:	<p>講義中は各自1台ずつのコンピュータを使用する部屋を使用し, プログラミングの基礎を概説してから, 実際に各自が与えられた課題についてプログラミングを行う。与えられたテーマは講義中に, あるいは課題として次週に提出するなどの方法もとる。また実習中はTA数名を配し, 細かい指導が行き届くようにしている。</p>		
評価の方法と基準:	<p>各担当教員から課されるレポート100点満点で評価 (25点×4教員=100点) し, 60%以上を合格とする。出席回数70%未満のものは不合格とし, 出席せずに提出されたレポートは受け付けない。</p>		
オフィスアワーなど:	<p>井料: 前期期間講義日, 15:30-17:00 (自然科学研究科3号棟, 823) 齋藤: 前期期間講義日, 15:30-17:00 (都市安全研究センター2F, R205) 吉田: 前期期間講義日, 15:30-17:00 (都市安全研究センター2F, R203) 芥川: 前期期間講義日, 15:30-17:00 (1W棟1F, 1W110)</p>		
テキスト・教材・参考書など:	1. 講義中に配布する資料を用いる。		
その他履修上の注意事項や学習上の助言:	最初の壁を越えると, どんな問題でもプログラミングできるようになります。その楽しさを味わってください。		

市民工学倫理		Ethics for Civil Engineers																	
学期区分	3年後期	区分・単位	必修 2単位																
担当教員	市民工学科教員																		
<p>キーワード： 市民工学倫理，問題発見，ディベート，分析・批判・評価，プレゼンテーション</p> <p>授業の目標： 「市民工学倫理」を共通テーマとして設定し，少人数による主体的な討議，調査，分析，発表を通じて，現状の問題点，専門責任，土木技術者のあるべき姿について考究し，土木技術者としての倫理性を涵養するとともに判断力を養成することを目的とする。</p> <p>学生の学習目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 土木技術者としての倫理性の涵養 ② 問題発見能力の修得 ③ ディベート能力の修得 ④ 分析・批判・評価能力の修得 ⑤ プレゼンテーション能力の修得 <p>授業の概要：</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 50%;">1. 工学倫理全般，</td> <td style="width: 50%;">9. 調査・分析（Ⅳ），</td> </tr> <tr> <td>2. 市民工学（総論），</td> <td>10. 調査・分析（Ⅴ），</td> </tr> <tr> <td>3. 市民工学（事例），</td> <td>11. 調査・分析（Ⅵ），</td> </tr> <tr> <td>4. グループ分け・問題整理（Ⅰ），</td> <td>12. 調査・分析（Ⅶ），</td> </tr> <tr> <td>5. 問題整理（Ⅱ），</td> <td>13. 発表準備（Ⅰ），</td> </tr> <tr> <td>6. 調査・分析（Ⅰ），</td> <td>14. 発表準備（Ⅱ），</td> </tr> <tr> <td>7. 調査・分析（Ⅱ），</td> <td>15. 発表会</td> </tr> <tr> <td>8. 調査・分析（Ⅲ），</td> <td></td> </tr> </table> <p>関連する学習・教育目標の項目： (A)，(B)，(H)，(I)，(J)，(L)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け： 市民工学共通科目で全員が3学年に履修。</p> <p>授業の進め方： 「工学倫理」および「市民工学倫理」についての体系的な講義を受講した後に，15名程度のグループに分かれて，各グループを担当する教員の指導のもと，「市民工学倫理」に関連したテーマに取り組む。</p> <p>評価の方法と基準： 最終プレゼンテーション内容45%，最終プレゼンテーション時の個人討議5%，最終プレゼンテーション内容への個人的貢献度50%として評価し，合計で60%以上を合格とする。出席回数70%未満のものは不合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど： 各教員より指示。</p> <p>テキスト・教材・参考書など： インターネットおよび図書館を活用すること。また，適宜，関係機関・施設を訪問してヒアリングを実施。</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言： このゼミナールを通じて，創造的思考のための方法および技術を修得するとともに，教員と身近に接することができるようになることを望んでいます。</p>				1. 工学倫理全般，	9. 調査・分析（Ⅳ），	2. 市民工学（総論），	10. 調査・分析（Ⅴ），	3. 市民工学（事例），	11. 調査・分析（Ⅵ），	4. グループ分け・問題整理（Ⅰ），	12. 調査・分析（Ⅶ），	5. 問題整理（Ⅱ），	13. 発表準備（Ⅰ），	6. 調査・分析（Ⅰ），	14. 発表準備（Ⅱ），	7. 調査・分析（Ⅱ），	15. 発表会	8. 調査・分析（Ⅲ），	
1. 工学倫理全般，	9. 調査・分析（Ⅳ），																		
2. 市民工学（総論），	10. 調査・分析（Ⅴ），																		
3. 市民工学（事例），	11. 調査・分析（Ⅵ），																		
4. グループ分け・問題整理（Ⅰ），	12. 調査・分析（Ⅶ），																		
5. 問題整理（Ⅱ），	13. 発表準備（Ⅰ），																		
6. 調査・分析（Ⅰ），	14. 発表準備（Ⅱ），																		
7. 調査・分析（Ⅱ），	15. 発表会																		
8. 調査・分析（Ⅲ），																			

創造思考ゼミナールⅡ Seminar for Creative Thinking Ⅱ									
学期区分	3年後期	区分・単位	選択必修 2単位						
担当教員	市民工学科教員								
<p>キーワード： 科学論文，資料作成，資料解読・分析，ディスカッション，意見集約</p> <p>授業の目標： 4年次での卒業研究を始めるにあたり，専門知識をどのようにまとめ，第三者に伝達するかを修得することは非常に重要である。本ゼミナールでは外国語文献を含む専門資料の整理，データ分析，打ち合わせ資料の整理，文章化成文化，口頭発表など，卒業研究を始める上で不可欠な基礎的コミュニケーション技術の習得を目標とする。特に，卒業研究時に配属される研究グループ単位での少人数教育を行い，学生1人1人の能力の向上を図る。</p> <p>学生の学習目標： ①研究資料の整理方法，分析方法の習得。 ②論文形式の作文法の修得。 ③研究グループの研究概要の把握。 ④グループ単位での共同作業による作業遂行の実施。</p> <p>授業の概要：</p> <table border="0"> <tr> <td>1. 科学論文の様式と書き方</td> <td>2. 資料の収集方法</td> </tr> <tr> <td>3. データの分析方法とプログラム作成</td> <td>4. 打ち合わせ資料の作成手順</td> </tr> <tr> <td>5. 打ち合わせと意見集約法</td> <td>6. プレゼンテーションでの作法</td> </tr> </table> <p>関連する学習・教育目標の項目： (A)，(B)，(D)，(H)，(I)，(J)，(L)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け： 共通科目の選択科目で希望者が3学年に履修。</p> <p>授業の進め方： 研究グループごとに課題を設け，研究グループ単位で指導を行う。最後にプレゼンテーションを行う。</p> <p>評価の方法と基準： 作成する論文50%，プレゼンテーション内容50%として評価し，合計で60%以上を合格とする。出席回数70%未満のものは不合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど： 各研究グループに問い合わせること（オフィスアワーは混雑するので，予約すること）。</p>				1. 科学論文の様式と書き方	2. 資料の収集方法	3. データの分析方法とプログラム作成	4. 打ち合わせ資料の作成手順	5. 打ち合わせと意見集約法	6. プレゼンテーションでの作法
1. 科学論文の様式と書き方	2. 資料の収集方法								
3. データの分析方法とプログラム作成	4. 打ち合わせ資料の作成手順								
5. 打ち合わせと意見集約法	6. プレゼンテーションでの作法								
<p>テキスト・教材・参考書など： 1. 研究グループが提供する資料など。</p>									

プロジェクトマネジメント Project Management			
学期区分	3年後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	竹林幹雄 (Mikio TAKEBAYASHI) 他		
<p>キーワード： プロジェクト，マネジメント，建設マネジメント，契約と責任，海外事業</p> <p>授業の目標： インフラの計画，施工，管理・運営をプロジェクトの管理運営の視点から講述する。特に実際のプロジェクトを題材に具体的にインフラ整備・運営の特徴を紹介するとともに，事例に示されたプロジェクトで留意すべき事項を理論的に説明する。</p> <p>学生の学習目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 実際のプロジェクト事例・ケーススタディを通して建設分野におけるプロジェクトの特徴を理解する。 2. プロジェクトマネジメントで重要となる Plan/Do/See の概念とその構造について理解する。 3. 建設プロジェクトを実行する上で必要な発注・受注関係，組織論，契約に伴う法的責任について習得する。 4. プロジェクトを最適に実行するための数学的方法を習得する。 5. 国内事業と海外事業の差異について理解する。 <p>授業の概要：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ケーススタディ：(1) 国内プロジェクト，(2) 海外プロジェクト，(3) JV (ジョイントベンチャー) 2. プロジェクトマネジメント理論：(1) 概論，(2) プロジェクトサイクル，(3) 実施方法 3. 建設マネジメント：(1) 概論，(2) 発注と受注，(3) 契約と責任，(4) 組織，(5) 最適化の方法と計算手法 <p>関連する学習・教育目標の項目： (A)，(B)，(D)，(G)，(H)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け： 市民工学共通科目で希望者が3学年に履修。各系で履修した基礎部門を実際の建設プロジェクトに結びつける応用科目として位置づけられる。</p> <p>授業の進め方： 板書，テキスト，配付資料，スライド，ビデオ教材を用いて講義を進める。特に実際のプロジェクトを理解するためにケーススタディの紹介を行う。</p> <p>評価の方法と基準： 定期試験 (40%)，レポート (60%) の配分で評価し，100点満点中60点以上のものを合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど： 原則として講義日の15：30-17：00 (1W棟 3階 1W-305 竹林准教授室)</p>			
<p>テキスト・教材・参考書など： ・講義中でのプリント配付，WEBでの資料のダウンロードを併用する。</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言： ・実際のプロジェクトがどのようなものであるかを知り，そのプロジェクトを実行するための理論に関心を持ってもらいたい。</p>			

連続体力学 Introduction to Continuum Mechanics			
学期区分	3年後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	飯塚 敦 (Atsushi IIZUKA), 上西幸司 (Koji UENISHI)		
<p>キーワード: 運動, 変形, 応力, ひずみ, つりあい, 幾何学的適合, 支配方程式, 弾性体, 境界値問題</p> <p>授業の目標: 力学系の基礎である連続体の力学を講義する。構造力学, 水理学, 土質力学などの個々の体系を縦断し, 包含する概念, 考え方, 道具を, 連続体力学として提供する。</p> <p>学生の学習目標: 連続体力学の基礎を学ぶ。構造力学, 水理学, 土質力学に共通の基となっている力学概念を習得し, 力学的問題に対して自分なりのアプローチを模索できる基礎を得る。構造力学, 水理学, 土質力学などの他の専門基礎力学系基礎科目を縦断的に把握できる。</p> <p>授業の概要: 連続体の変形問題を取り扱う。応力, ひずみの概念, 弾性固体, 弾性流体などの材料特性と代表的な構成式を学ぶ。ついで, 力学問題に対する境界値問題としての定式化, その特徴, そして簡単な例題を通して, その解法を学ぶ。連続体力学の学習で, 受講生にとってもっとも大きな障害となるのは, 道具として用いるベクトル・テンソル解析である。この数学的技法についても, 線形代数との関連性を重視して, 十分に説明される。</p> <p>関連する学習・教育目標の項目: (C), (D)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け: 市民工学共通科目で希望者が3学年に履修。</p> <p>授業の進め方: 講義を主体にすすめられる。力学理論の演繹性を重視するが, 毎時間, 授業の最初に, その日の授業で理解しなければならない「到達目標」を述べる。受講生とのインタラクションを重視する。わからないこと, 理解できなかったことは, 授業中に, 積極的に表明, 発言してほしい。さらに, 教官の側からも, 受講生に多く問いかける。</p> <p>評価の方法と基準: 定期試験 (80%), レポート (20%) の配分で評価し, 60%以上の得点を合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど: 飯塚: 後期間講義曜日の13:00-17:00 (都市安全研究棟 R206飯塚教授室) 上西: 後期間講義曜日の13:00-17:00 (都市安全研究棟 R103上西准教授室)</p>			
<p>テキスト・教材・参考書など: 参考書: 富田佳宏著「連続体力学の基礎」, 養賢堂, 田村武著「連続体力学入門」朝倉書店</p>			

合意形成論 Conflict Management : Theory and Practice				
学期区分	3年後期	区分・単位	選択必修 (計画系)	2単位
担当教員	朝倉康夫 (Yasuo ASAKURA)			
<p>キーワード: 合意形成, 社会的選択, ゲーム理論, 参加型アプローチ, まちづくり・交通・環境</p> <p>授業の目標: 社会資本の整備と運用には, それに関わる利害関係者 (ステークホルダー) の合意形成が必須の条件である。本講義では合意形成に関する数理的手法の基礎知識を習得するとともに, 参加型アプローチを中心とする合意形成の技術と実例を学び, 総合的な課題解決能力を習得することを目標とする。</p> <p>学生の学習目標:</p> <ul style="list-style-type: none"> ①合意形成に関する数理的手法の修得 ②参加型アプローチを中心とする合意形成技術の修得 ③幅広い知識を総動員した総合的な課題解決能力, 協同能力・コミュニケーション能力の修得 <p>授業の概要:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 合意形成の数理 代替案の総合評価とコンフリクト, ゲーム理論 2. 合意形成の技術としての参加型アプローチ パブリックインボルブメント (workshop, facilitation), リスクコミュニケーション 3. 合意形成の実際 まちづくり, 環境保全, 交通計画 (モビリティマネジメント) <p>関連する学習・教育目標の項目: (B), (D), (H)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け: 市民工学共通科目で希望者が3学年に履修。</p> <p>授業の進め方: 数理的手法は講義形式, 技術と実際問題に関しては演習・討論方式。</p> <p>評価の方法と基準: 演習レポート (50%) と期末試験 (50%) の成績により評価する。評価点数が60%以上の場合を合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど: 講義のある曜日に1.5時間 (時間帯は未定) 設定する。事前にメールで予約することが望ましい。</p>				
<p>テキスト・教材・参考書など: 標準テキストは指定しない。講義中にプリントを配布する。</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言: 市民工学のための確率・統計学, 都市地域計画, 計画学 I 及び同演習, 計画学 II を履修しておくことが望ましい。</p>				

公共施設工学 Infrastructure Design and Management												
学期区分	3年後期	区分・単位	選択必修 2単位									
担当教員	富田安夫 (Yasuo TOMITA) 他											
<p>キーワード： 公共施設，土木構造物，設計，管理・運営</p> <p>授業の目標： 土木工学で対象とする構造物の多くは公共施設として供用されるものであるが，要求される機能性や公共施設として供用されてきた歴史的経緯，適用される法制度の違いなどの点から構造物固有の方法論が採られることが多い。ゆえに，個々の土木構造物の特徴を把握し，それに沿った計画・設計・施工・運営手法を知ることが土木技術者として極めて重要である。本講義では公共施設の特徴を代表的構造物に関して講述し，個々の公共施設の計画・設計・施工・運営に関する基礎的知識の習得を目的とする。</p> <p>学生の学習目標： ①土木工学における代表的構造物の特徴に関する理解を深めること。 ②個々の公共施設の計画・設計・施工・運営に関して基礎的な知識を習得すること。</p> <p>授業の概要：</p> <table border="0"> <tr> <td>1. 公共施設概論</td> <td>2. 道路</td> <td>3. トンネル・岩盤・地下構造物</td> </tr> <tr> <td>4. 鉄道</td> <td>5. 廃棄物処理施設</td> <td>6. 河川・海岸構造物</td> </tr> <tr> <td>7. 港湾と空港</td> <td>8. 土木遺産・歴史構造物</td> <td></td> </tr> </table> <p>関連する学習・教育目標の項目： (B)，(D)，(H)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け： 市民工学共通科目で希望者が3学年に履修。</p> <p>授業の進め方： 板書を中心として講義を行う。また，講義資料は全てWEBからのダウンロードないし講義中に配布される。</p> <p>評価の方法と基準： 定期試験100点満点中60点以上のものを合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど： 講義期間中毎週金曜日，15：30－17：00</p>				1. 公共施設概論	2. 道路	3. トンネル・岩盤・地下構造物	4. 鉄道	5. 廃棄物処理施設	6. 河川・海岸構造物	7. 港湾と空港	8. 土木遺産・歴史構造物	
1. 公共施設概論	2. 道路	3. トンネル・岩盤・地下構造物										
4. 鉄道	5. 廃棄物処理施設	6. 河川・海岸構造物										
7. 港湾と空港	8. 土木遺産・歴史構造物											
<p>テキスト・教材・参考書など：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. テキストは講義中に随時配布する。 2. オフィスアワーは混雑するので，予約すること。 												

構造力学 I Structural Mechanics (Civil)			
学期区分	1年後期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	川谷充郎 (Mitsuo KAWATANI)		
<p>キーワード： 構造物の抽象化，荷重の抽象化，力の釣り合い，断面の力，構造力学的センス</p> <p>授業の目標： 構造物の設計は，基本的には「どんな形にするか」，「どんな材料を用いるか」，「計算はどうするか」ということになる。構造力学は「計算はどうするか」について学ぶ科目で，構造力学の初歩的な内容を体系的に理解させる。また，この講義に続く土木構造力学Ⅱ及び演習，土木構造力学Ⅲを学ぶために必要な基礎的事項が理解できるレベルを到達目標とする。</p> <p>学生の学習目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 力の性質と法則を復習し，力の釣り合いを理解する。 ② 力の関係を抽象化し，自由物体の釣り合いを理解する。 ③ 構造物の内部に働く力を求め，図化する能力を身に付ける。 ④ 構造物の内部に生じる応力の求め，応力の状態を考察する。 <p>授業の概要：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 構造力学への導入， 2. 力の性質・法則，力の釣り合い， 3. 構造物の支え方，構造物の断面に働く力の概念， 4. トラス構造物に働く力の求め方， 5. 構造物の断面に働く力の求め方と性質， 6. 構造材料の簡単な力学的性質， 7. 構造物の内部に働く応力状態， <p>関連する学習・教育目標の項目： (D)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け： 構造工学系科目で全員が1学年に履修。</p> <p>授業の進め方： 教科書を中心に講義する。必要に応じてプリント資料を配布し，授業内容を補足する。章末の演習問題を各自解いておくこと。ほとんどの授業の後半の時間に，講義内容の理解確認のための小テストを実施する。</p> <p>評価の方法と基準： 毎授業時間に実施する小テストの成績と，期末試験の結果を総合的に評価する。期末試験と小テストの評価割合は，期末試験60%，小テスト40%（全部で）の割合になる。</p> <p>オフィスアワーなど： 講義時間の終了後 (1W棟3F, 1W-307, 川谷教授室)</p>			
<p>テキスト・教材・参考書など： 教科書：構造力学（上）（崎元達郎：森北出版）</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言： 授業中に小テストを行うのは，授業内容をその時間内に理解することを目的としている。授業に集中すること。</p>			

材料工学 Materials Science and Engineering			
学期区分	1年後期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	森川英典 (Hidenori MORIKAWA)		
<p>キーワード： 鋼，コンクリート，材料設計，性能，劣化，耐久性，維持管理，補修，補強</p> <p>授業の目標： 土木構造物の設計・施工・維持管理において基礎となる土木材料（鋼，コンクリートおよびFRPなど）の力学的諸特性，材料試験法，施工性，耐久性などについて講述し，土木構造材料の基礎知識を習得させることを目的としている。</p> <p>学生の学習目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 建設分野における種々の材料の特性と利用形態について理解する。 2. 耐久性に関連する材料の基本的な性質と劣化の機構を理解した上で，材料設計に対する必要事項を習得する。 3. 鋼の製法，力学的特性について理解する。 4. コンクリートを製造するためのセメント，混和剤（材），骨材に関する知識，フレッシュコンクリートの性質および硬化コンクリートの特性，劣化機構，配合設計法，施工・品質管理法，維持管理法を理解する。 5. コンクリートの補修・補強の考え方とその方法，それに用いられるFRP，樹脂系材料などの材料特性を理解する。 <p>授業の概要：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 総論：(1) 材料の分類，(2) 材料に要求される性能，(3) 材料の機械的性質，材料の物理的性質，材料の化学的性質 2. 鋼：(1) 鋼の製造方法，(2) 鋼の特性，(3) 鋼材の種類，(4) 合金鋼 3. コンクリート：(1) 要求性能，(2) セメントの種類と特性，(3) 混和材料の種類と特性，(4) 骨材の性質，(5) コンクリートの配合設計，(6) フレッシュコンクリートの性質と施工法，(7) 硬化コンクリートの性質，(8) コンクリートの劣化と耐久性と維持管理法 4. 補修・補強材料：(1) 補修・補強工法とFRP，樹脂系材料などの材料特性 <p>関連する学習・教育目標の項目： (A)，(B)，(D)，(G)，(H)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け： 構造工学系科目で全員が1学年に履修。コンクリート構造学に対する基礎として位置づけられる。</p> <p>授業の進め方： 板書，テキスト，配付資料，OHP，ビデオ教材を用いて講義を進める。材料学と社会との関わりを考察するため，調査レポートを課す。</p> <p>評価の方法と基準： 出席回数70%以上の者に対して成績を評価するものとし，定期試験（80%），レポート（20%）の配分で評価し，60%以上を合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど： 毎木曜日 17：30-19：00（1W棟 1階 1W-108 森川教授室）</p> <p>テキスト・教材・参考書など： ・西村・藤井・湊「最新土木材料」（森北出版），その他講義中にプリントを配付する。</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言： ・劣化や欠陥など建設材料に対する関心と問題意識を持って授業に望んでほしい。</p>			

構造力学Ⅱ及び演習 Structural mechanics II and exercise in Civil Engineering			
学期区分	2年前期	区分・単位	選択必修 3単位
担当教員	芥川真一 (Shinichi AKUTAGAWA), 鋤田泰子 (Yasuko KUWATA)		
<p>キーワード: 変形概念, 不静定構造, 柱, 影響線</p> <p>授業の目標: 構造力学で学んだ基本の確認からスタートし, 主に梁構造を取り扱いながら, 「構造物に生じる変形量の計算方法」, 「力の釣合式だけでは解くことの出来ない複雑な問題の取り扱い方法」, 「柱という構造物に生じる座屈という現象の考え方」, 「影響線概念」について講義と, それに並行して行われる演習を通して学習する。最終的にはこれらの事象が複合的に生じる実際の構造物についてその構造設計の基本手順が理解できる準備を整えることを目的とする。</p> <p>学生の学習目標:</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 梁の変形について基本概念と計算方法を理解すること。 ② 不静定問題の考え方を理解すること。 ③ 柱の設計, 座屈について理解すること。 ④ 影響線の考え方を理解すること。 <p>授業の概要:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 構造力学の復習と理解度の確認 2. 梁のたわみの計算 3. 不静定構造の解法 4. たわみ角法 5. 柱 6. 影響線 <p>関連する学習・教育目標の項目: (D)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け: 構造工学系科目で希望者が2学年に履修。</p> <p>授業の進め方: 講義と演習を週1コマずつ行い, 学習したことをすぐに確認しながら進行する。講義は板書を中心に行う。</p> <p>評価の方法と基準: 演習課題 (40%), 中間試験 (30%), 期末試験 (30%) の割合で総合評価する。</p> <p>オフィスアワーなど: 芥川: 前期期間講義および演習日, 17:00-18:00 (1W棟1F, 1W-110) 鋤田: 前期期間講義および演習日, 17:00-18:00 (1W棟1F, 1W-106)</p>			
<p>テキスト・教材・参考書など:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「構造力学 (上)」 崎元達郎著, 森北出版 <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言: 構造力学は原則を正しく理解しておけば, あとはどんな問題でも解けるようになっている。「解答のパターンを覚えてそれを使って問題を解く。」というような概念から脱却し, 「原理・原則を理解し, その自然な延長線上にある応用問題を自在に解く。」ことが出来るようになることを望む。どのような疑問も, それを感じたときに直ちに解明しておくことが必要。</p>			

構造力学Ⅲ Structural Mechanics III in Civil Engineering				
学期区分	2年後期	区分・単位	選択必修	2単位
担当教員	芥川真一 (Shinichi AKUTAGAWA)			
<p>キーワード： エネルギー原理，変形の適合条件，コンピュータによる構造解析，力学的センス</p> <p>授業の目標： 構造物設計の基礎となる構造力学理論の内，不静定構造物の解法を体系的に理解させる。一般にエネルギー原理と呼ばれる種々の原理や方法を理解させ，不静定構造物の解析への応用させる。また，構造技術者として知っておかなければならない有限要素法の原理が理解できるレベルを到達目標とする。</p> <p>学生の学習目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 仕事の概念を理解し，構造解析への応用を修得する。 ② 力学現象の相反性を理解し，構造解析への応用を修得する。 ③ ひずみエネルギーの概念を理解し，構造解析への応用を修得する。 ④ 骨組み構造物への直接剛性法の適用を理解し，その応用を修得する。 <p>授業の概要：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 剛体に対する仮想変位の原理， 2. 弾性体に対する仮想仕事の原理， 3. 相反定理と影響線， 4. カステリアーノの定理，最小仕事の原理， 5. 静定基本系の不静定力，余力法， 6. 有限要素法解析に必要なマトリックス代数学の基礎， 7. 有限要素法による骨組構造物の解析 <p>関連する学習・教育目標の項目： (D)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け： 構造工学系科目で希望者が2学年に履修。</p> <p>授業の進め方： 教科書を中心に講義する。1～2章進む毎に，演習問題を配布し，1～2週間後に正解を配布して各自の解答を確認させる。コンピュータを利用した計算演習も必要に応じて実施する。</p> <p>評価の方法と基準： レポート，中間試験の成績と，期末試験の結果を総合的に評価する。期末試験と中間試験，レポートの評価割合は，40%，30%，30%程度の割合になる。</p> <p>オフィスアワーなど： 後期期間講義日，17：00～18：00 (1W棟1F，1W-110 芥川准教授室)</p> <p>テキスト・教材・参考書など： 教科書：構造力学（下）（崎元達郎：森北出版）</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言： 実務的にはコンピュータ構造解析が主流であるが，計算結果をチェックするには構造力学的センスが要求される。単に構造力学の理論を学ぶだけではなく，実際に自分で問題を解いて，問題解法に習熟し，構造力学的センスを磨く必要がある。</p>				

コンクリート構造学 Concrete Structures															
学期区分	3年前期	区分・単位	選択必修 2単位												
担当教員	森川英典 (Hidenori MORIKAWA)														
<p>キーワード: 鉄筋コンクリート, 性能照査型設計, 限界状態設計, 維持管理, 信頼性理論</p> <p>授業の目標: 土木構造物に使用される鉄筋コンクリート構造部材の要求性能, 基本的な力学的挙動, 損傷および破壊のメカニズムとその解析法, 各種の考え方に基づく設計法の基礎を習得させることを目的としている。</p> <p>学生の学習目標:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 性能照査型設計法と設計・施工・維持管理を統合した性能保証の概念について理解する。 2. 性能照査型設計の根幹をなす限界状態設計法の基本的考え方を理解する。また許容応力設計法, 終局強度設計法と合わせた設計法の概要を把握する。 3. 安全性・信頼性の評価を核とした構造物の設計理論の基本と体系について理解する。 4. 鉄筋コンクリート構造部材の基本的な力学的挙動, 破壊挙動を理解するとともに, 使用性能, 耐荷性能などの評価を基礎とする各種限界状態における安全性照査法と設計手法を習得する。 <p>授業の概要:</p> <table border="0"> <tr> <td>1. 性能照査型設計法と性能保証の概念,</td> <td>7. 曲げに対する解析, 設計法,</td> </tr> <tr> <td>2. 安全性・信頼性評価法概説,</td> <td>8. せん断挙動,</td> </tr> <tr> <td>3. 耐震設計法概説,</td> <td>9. せん断に対する解析, 設計法,</td> </tr> <tr> <td>4. 一般設計法概説,</td> <td>10. 曲げと軸力に対する挙動と解析, 設計法,</td> </tr> <tr> <td>5. 材料特性, 弾性挙動と付着特性,</td> <td>11. 構造細目, 許容応力度設計法</td> </tr> <tr> <td>6. ひび割れ挙動, 曲げ挙動,</td> <td></td> </tr> </table> <p>関連する学習・教育目標の項目: (B), (D), (E), (H)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け: 構造工学系科目で希望者が2学年に履修。「材料工学」に続く科目として位置づけられる。</p> <p>授業の進め方: 板書, テキスト, 配付資料, OHP を用いて講義を進める。講義内容の理解を助けるために, 計算演習を3回程度行う。</p> <p>評価の方法と基準: 出席回数70%以上の者に対して成績を評価するものとし, 定期試験 (85%), 演習 (15%) の配分で評価し, 60%以上を合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど: 毎木曜日 17:30-19:00 (1W棟 1階 1W-108 森川教授室)</p> <p>テキスト・教材・参考書など: ・小林和夫「コンクリート構造学」(森北出版), その他講義中にプリントを配付する。</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言: ・構造物の設計体系の変革期にある現在, コンクリート構造の不変的な基礎知識と変化に対する応用力を身につけてほしい。</p>				1. 性能照査型設計法と性能保証の概念,	7. 曲げに対する解析, 設計法,	2. 安全性・信頼性評価法概説,	8. せん断挙動,	3. 耐震設計法概説,	9. せん断に対する解析, 設計法,	4. 一般設計法概説,	10. 曲げと軸力に対する挙動と解析, 設計法,	5. 材料特性, 弾性挙動と付着特性,	11. 構造細目, 許容応力度設計法	6. ひび割れ挙動, 曲げ挙動,	
1. 性能照査型設計法と性能保証の概念,	7. 曲げに対する解析, 設計法,														
2. 安全性・信頼性評価法概説,	8. せん断挙動,														
3. 耐震設計法概説,	9. せん断に対する解析, 設計法,														
4. 一般設計法概説,	10. 曲げと軸力に対する挙動と解析, 設計法,														
5. 材料特性, 弾性挙動と付着特性,	11. 構造細目, 許容応力度設計法														
6. ひび割れ挙動, 曲げ挙動,															

構造力学 Structural Dynamics																			
学期区分	3年前期	区分・単位	選択必修 2単位																
担当教員	高田至郎 (Shiro TAKADA)																		
<p>授業の目標： 講義をととして構造物の動的挙動を解明するための基礎理論について講述する。講義の前半では質点系および連続体の振動理論について述べる。後半では自由振動の近似解法および、具体的な外力による動的応答解析、外力が不規則に変動する場合の応答の評価法について述べる。</p> <p>到達目標： ①振動理論，②構造物の動的応答，③振動の影響につき，数式で表されている内容を具体的なイメージをもって理解し，将来，土木技術者として実務で遭遇する振動問題に取り組む基礎力を身に付ける。</p> <p>授業内容：</p> <table border="0"> <tr> <td>① 振動の概念</td> <td>⑧ 連続体の強制振動 (Ⅱ)</td> </tr> <tr> <td>② 1自由度系の自由振動 (Ⅰ)</td> <td>⑨ 連続体の強制振動 (Ⅲ)</td> </tr> <tr> <td>③ 1自由度系の強制振動 (Ⅱ)</td> <td>⑩ 固有値近似解法</td> </tr> <tr> <td>④ 2自由度系の自由振動 (Ⅰ)</td> <td>⑪ 不規則外力による応答</td> </tr> <tr> <td>⑤ 2自由度系の強制振動 (Ⅱ)</td> <td>⑫ 応答スペクトル</td> </tr> <tr> <td>⑥ 2自由度系の不規則振動 (Ⅲ)</td> <td>⑬ 耐震設計 (Ⅰ)</td> </tr> <tr> <td>⑦ 多自由度系の振動</td> <td>⑭ 耐震設計 (Ⅱ)</td> </tr> <tr> <td>⑧ 連続体の自由振動 (Ⅰ)</td> <td>⑮ 耐震設計 (Ⅲ)</td> </tr> </table> <p>関連する学習・教育目標の項目： (A), (C), (D), (E)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け： 構造工学系科目で希望者が3学年に履修。専門基礎科目の物理学C1 (力学) および構造力学Ⅰ，構造力学Ⅱ及び演習，構造力学Ⅲを基礎として，本科目で構造物の動的解析法を理解し，3年次後期の地震安全工学および橋梁工学につなげる。</p> <p>授業の進め方： 講義中テキストを用いて，適宜板書をおこない分かりやすく説明する。また，振動解析の演習を通じて実務に役立つよう理解させる。</p> <p>成績評価方法： 定期試験 (80%)，レポート (20%) の配分で評価点数とする。出席回数70%未満のものは不合格，出席回数70%以上で且つ評価点数60%以上を合格とする。</p> <p>履修上の注意： 高田：前期期間毎週金曜日，15：30-17：00 (1W棟1F，高田教授室)</p>				① 振動の概念	⑧ 連続体の強制振動 (Ⅱ)	② 1自由度系の自由振動 (Ⅰ)	⑨ 連続体の強制振動 (Ⅲ)	③ 1自由度系の強制振動 (Ⅱ)	⑩ 固有値近似解法	④ 2自由度系の自由振動 (Ⅰ)	⑪ 不規則外力による応答	⑤ 2自由度系の強制振動 (Ⅱ)	⑫ 応答スペクトル	⑥ 2自由度系の不規則振動 (Ⅲ)	⑬ 耐震設計 (Ⅰ)	⑦ 多自由度系の振動	⑭ 耐震設計 (Ⅱ)	⑧ 連続体の自由振動 (Ⅰ)	⑮ 耐震設計 (Ⅲ)
① 振動の概念	⑧ 連続体の強制振動 (Ⅱ)																		
② 1自由度系の自由振動 (Ⅰ)	⑨ 連続体の強制振動 (Ⅲ)																		
③ 1自由度系の強制振動 (Ⅱ)	⑩ 固有値近似解法																		
④ 2自由度系の自由振動 (Ⅰ)	⑪ 不規則外力による応答																		
⑤ 2自由度系の強制振動 (Ⅱ)	⑫ 応答スペクトル																		
⑥ 2自由度系の不規則振動 (Ⅲ)	⑬ 耐震設計 (Ⅰ)																		
⑦ 多自由度系の振動	⑭ 耐震設計 (Ⅱ)																		
⑧ 連続体の自由振動 (Ⅰ)	⑮ 耐震設計 (Ⅲ)																		
<p>教科書・参考文献など： 1. 入門建設振動学 (小坪清真著：森北出版)</p> <p>学生へのメッセージ： 地震安全工学あるいは橋梁工学を受講するためには，本講義を受講しておくことが望ましい。段階をおって振動理論を理解させるので欠席のないようにすること。</p>																			

地震安全工学 Earthquake Engineering and Structural Reliability																			
学期区分	3年後期	区分・単位	選択必修 2単位																
担当教員	高田至郎 (Takada Shiro)																		
<p>授業の目標： 講義をとおして地震時における土木構造物の挙動と設計法を理解させるとともに、常時・地震時の荷重の作用の相違など多面的に物事を把握する視野の広さを養わせる。</p> <p>到達目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 地震発生メカニズムの理解, ② 地震時土木構造物挙動の理解, ③ 土木構造物耐震設計の理解, ④ 地震時安全性の理解 <p>授業内容：</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 50%;">1. プレートテクトニクス理論,</td> <td style="width: 50%;">9. スペクトル設計法,</td> </tr> <tr> <td>2. 日本・世界の地震発生,</td> <td>10. 応答変位法,</td> </tr> <tr> <td>3. 地震の規模と強さ,</td> <td>11. 橋梁設計,</td> </tr> <tr> <td>4. 地盤震動 (I),</td> <td>12. ライフライン設計,</td> </tr> <tr> <td>5. 地盤震動 (II),</td> <td>13. 地震時安全性 (I),</td> </tr> <tr> <td>6. 震度法,</td> <td>14. 地震時安全性 (II),</td> </tr> <tr> <td>7. 修正震度法,</td> <td>15. 特別講演</td> </tr> <tr> <td>8. 動的解析,</td> <td></td> </tr> </table> <p>関連する学習・教育目標の項目： (A), (C), (D), (E), (H)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け： 構造工学系科目で希望者が3学年に履修。</p> <p>授業の進め方： 講義はテキストを用いて、適宜板書をおこない分かりやすく説明する。また、耐震設計の演習を通じて実務に役立つよう理解させる。</p> <p>成績評価方法： 定期試験 (80%), レポート (20%) の配分で評価点数とする。出席回数70%未満のものは不合格、出席回数70%以上で且つ評価点数60%以上を合格とする。</p> <p>履修上の注意： 高田：後期期間毎週水曜日, 15:30-17:00 (1W棟1F, 高田教授室)</p>				1. プレートテクトニクス理論,	9. スペクトル設計法,	2. 日本・世界の地震発生,	10. 応答変位法,	3. 地震の規模と強さ,	11. 橋梁設計,	4. 地盤震動 (I),	12. ライフライン設計,	5. 地盤震動 (II),	13. 地震時安全性 (I),	6. 震度法,	14. 地震時安全性 (II),	7. 修正震度法,	15. 特別講演	8. 動的解析,	
1. プレートテクトニクス理論,	9. スペクトル設計法,																		
2. 日本・世界の地震発生,	10. 応答変位法,																		
3. 地震の規模と強さ,	11. 橋梁設計,																		
4. 地盤震動 (I),	12. ライフライン設計,																		
5. 地盤震動 (II),	13. 地震時安全性 (I),																		
6. 震度法,	14. 地震時安全性 (II),																		
7. 修正震度法,	15. 特別講演																		
8. 動的解析,																			
<p>教科書・参考文献など：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 地震工学概論 (元田良孝・萩原良二：森北出版) <p>学生へのメッセージ： 3年生前期に開講される構造動力学を受講していることが望ましい。</p>																			

橋梁工学 Bridge Engineering			
学期区分	3年後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	川谷充郎 (Mitsuo KAWATANI)		
<p>キーワード： 道路橋示方書，許容応力度設計，限界状態設計，性能照査型設計，荷重，疲労，安全率</p> <p>授業の目標： 橋梁は土木構造物の中では目立つ構造物であり，桁橋，トラス橋，ラーメン橋，アーチ橋，斜張橋，吊橋など多くの構造形式がある。それらの力学的な特徴を理解し，橋梁を造り・維持管理する立場から問題点を把握できるようにする。</p> <p>学生の学習目標： 構造力学では構造物に外力が作用する場合の断面力や変形の解析手法を習得する。それを基礎として，本科目ではそのような断面力に耐え，変形を小さくする構造物（橋梁）をどのようにして設計・製作するかを習得する。また，前提となる外力である荷重の評価を理解する。鋼道路橋の最も基本的な桁橋を中心とし，将来，土木技術者として実務で橋梁に関わる場合の基礎力を身に付ける。</p> <p>授業の概要： 主な項目は以下の通り（括弧内は下記の教科書の該当する章）。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 橋梁の種類，橋梁の構成，橋梁の調査・計画・設計の概要（1章） 2. 設計荷重と荷重の組み合わせ（2章） 3. 構造材料（鋼材）と許容応力度（3章） 4. 溶接継手，高力ボルト継手（4章） 5. 鉄筋コンクリート床版，鋼床板，床組（5章） 6. プレートガーター橋（6章） 7. 合成げた橋（7章） 8. 支承と付属施設（8章） <p>関連する学習・教育目標の項目： (A)，(C)，(D)，(E)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け： 構造工学系科目で希望者が3学年に履修。材料工学，構造力学Ⅰ，構造力学Ⅱ及び演習，構造力学Ⅲ，構造動力学を基礎として，本科目で橋梁工学の概要を習得する。</p> <p>授業の進め方： 教科書に基づき講義する。追加資料は授業中に配布。適宜，演習課題のレポート提出。 橋梁は景観創造に寄与するものであり，多くの写真資料を授業中に回覧する。阪神間の橋梁・製作工場見学を企画する。</p> <p>評価の方法と基準： レポート（20%），期末試験（80%）の割合で総合評価し，60%以上を合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど： 講義の後，2時間（1W棟3F，1W-307，川谷教授室）</p> <p>テキスト・教材・参考書など： 教科書：林川俊郎著：橋梁工学，朝倉書店，2000。 参考書：橋 善雄著，中井 博改訂：橋梁工学 第4版，共立出版，1996。</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「材料工学」，「構造力学Ⅰ」，「構造力学Ⅱ及び演習」，「構造力学Ⅲ」，「構造動力学」を履修していること。 ・阪神間はわが国でも有数の新形式橋梁の多いところである。見学会を企画するも限界があり，自主的に現地を訪れることを勧める。 			

水工学の基礎及び演習 Basic Hydraulics and Practice																		
学期区分	2年前期	区分・単位	必修 3単位															
担当教員	藤田一郎 (Ichiro FUJITA)																	
<p>キーワード： 水の流れ，質量，運動量，エネルギー，保存則，完全流体，波動場</p> <p>授業の目標： 水工学の基礎となる流体の運動や力学を記述する数理的方法について，主として完全流体を対象とした講述を行う。講義と並行して演習を行い，講義で示した理論内容の理解をさらに深めさせる。また，身のまわりの現象を題材とした簡単な実験例を示して理論の具体的な応用手法について理解させる。</p> <p>学生の学習目標： ①完全流体力学の基礎方程式を物理現象と関連づけて理解できること。 ②基礎方程式から流速，圧力，エネルギーなどの空間的な分布や時間的な変化を導けること。 ③具体的な水工学の応用問題に対処できる能力を身につけること。</p> <p>授業の概要：</p> <table border="0"> <tr> <td>1. イントロダクション</td> <td>2. 静水の力学(平面，曲面に作用する力)</td> <td>3. 静水の力学 (浮体の安定)</td> </tr> <tr> <td>4. 流れの観察法</td> <td>5. 完全流体の基礎方程式</td> <td>6. 完全流体の基礎方程式の応用</td> </tr> <tr> <td>7. ベルヌーイの定理</td> <td>8. ベルヌーイの定理の応用</td> <td>9. ポテンシャル流れ(速度ポテンシャル，流れ関数)</td> </tr> <tr> <td>10. ポテンシャル流れ(円柱まわりの流れ)</td> <td>11. 微小振幅波理論</td> <td>12. 運動量保存則</td> </tr> <tr> <td>13. 運動量保存則の応用</td> <td></td> <td></td> </tr> </table> <p>関連する学習・教育目標の項目： (C)，(D)，(E)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け： 水工学系科目で全員が2学年に履修。次学期開講の「管路・開水路の水理学及び演習」に引き継がれる。</p> <p>授業の進め方： 授業は，講義ノートを基にして板書を中心に行う。毎週，前回の講義に関するクイズを行い理解しやすいように配慮する。演習は，講義時間中に総合問題を解くとともに適宜レポート課題を与える。二，三の例題についてはミニ実験を行い，理解を深めさせる。</p> <p>評価の方法と基準： 成績は，上記の学習目標の達成度に対して，クイズ (10%)，中間試験 (30%)，演習レポート (30%)，期末定期試験 (30%) の結果を総合的に評価し，評価が60%以上となったものを合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど： 毎週授業時間日 (1W棟3F，1W-309藤田教授室)</p>				1. イントロダクション	2. 静水の力学(平面，曲面に作用する力)	3. 静水の力学 (浮体の安定)	4. 流れの観察法	5. 完全流体の基礎方程式	6. 完全流体の基礎方程式の応用	7. ベルヌーイの定理	8. ベルヌーイの定理の応用	9. ポテンシャル流れ(速度ポテンシャル，流れ関数)	10. ポテンシャル流れ(円柱まわりの流れ)	11. 微小振幅波理論	12. 運動量保存則	13. 運動量保存則の応用		
1. イントロダクション	2. 静水の力学(平面，曲面に作用する力)	3. 静水の力学 (浮体の安定)																
4. 流れの観察法	5. 完全流体の基礎方程式	6. 完全流体の基礎方程式の応用																
7. ベルヌーイの定理	8. ベルヌーイの定理の応用	9. ポテンシャル流れ(速度ポテンシャル，流れ関数)																
10. ポテンシャル流れ(円柱まわりの流れ)	11. 微小振幅波理論	12. 運動量保存則																
13. 運動量保存則の応用																		
<p>テキスト・教材・参考書など： 講義用テキスト：水工学研究会編，水理学－水工学序論－，技法堂出版 演習用テキスト：有田正光・中井正則著「水理学演習」，東京理科大学出版</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言： 水工学に出てくる数式は複雑だが，理路整然とした理論体系で構築されているので，じっくりと学問に取り組むつもりで受講して下さい。</p>																		

管路・開水路の水理学及び演習		Hydraulics of Pipe and Open-channel Flows and Practice																		
学期区分	2年後期	区分・単位	選択必修	3単位																
担当教員	宮本仁志 (Hitoshi MIYAMOTO)																			
<p>キーワード: 粘性流体, 力学 (エネルギー則と運動量則), 開水路, 管水路, 定常流</p> <p>授業の目標: 「水工学の基礎及び演習」で学んだ理想流体に関する基礎知識をもとにして, 実在する流れの力学的挙動を数理表現するための粘性流体力学に関する講義と演習を行い, 河川や各種パイプなどの定常流れへの適用を通して, 講義での理論と現実的な水工環境設計問題との関連性を習得させる。</p> <p>学生の学習目標:</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 水や気体の流れを解析するための粘性流体に関する基礎理論の理解 ② 河川・上下水道などの水工設計に要する抵抗則などの基礎理論の理解 ③ 実水域の流れと力学理論, 室内実験とを結ぶ相似法則などの基礎知識の理解 <p>授業の概要:</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 50%;">1. イントロダクション,</td> <td style="width: 50%;">2. 理想流体と粘性流体,</td> </tr> <tr> <td>3. 粘性流体の力学その1 (ナビエ・ストークス方程式),</td> <td>4. 粘性流体の力学その2 (レイノルズ応力),</td> </tr> <tr> <td>5. 粘性流体の力学その3 (対数則),</td> <td></td> </tr> <tr> <td>6. 開水路の定常流その1 (等流における平均流速公式),</td> <td>8. 開水路の定常流その3 (常流・射流),</td> </tr> <tr> <td>7. 開水路の定常流その2 (急変流におけるエネルギー則),</td> <td>10. 開水路の定常流その5 (漸変流の水面形),</td> </tr> <tr> <td>9. 開水路の定常流その4 (急変流における運動量則),</td> <td>12. 管路の定常流その2 (形状損失),</td> </tr> <tr> <td>11. 管路の定常流その1 (摩擦損失),</td> <td>14. 相似法則・次元解析</td> </tr> <tr> <td>13. 管路の定常流その3 (応用例),</td> <td></td> </tr> </table> <p>関連する学習・教育目標の項目: (C), (D), (E)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け: 水工学系科目で希望者が2学年に履修。先行して履修する「水工学の基礎及び演習」を基礎として, 次学期開講の「河川・流域工学」に引き継がれる。</p> <p>授業の進め方: 授業は, 講義ノートを基にして板書を中心に行う。毎週, 前回の講義に関するクイズを行い理解しやすいように配慮する。演習は, 講義時間中に総合問題を解くとともに適宜レポート課題を与える。</p> <p>評価の方法と基準: 成績は, 上記の学習目標の達成度に対して, 授業ごとに行なうクイズ (10%), 中間試験 (30%), 演習レポート (30%), 期末定期試験 (30%) の結果を総合的に評価し, 評価が60%以上となったものを合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど: 毎週授業時間日 (1W棟2F, 1W-208宮本准教授室)</p> <p>テキスト・教材・参考書など: テキスト: 水工学研究会編, 水理学—水工学序論—, 技法堂出版, 259p, 1995。 有田正志, 中井正則, 水理学演習, 東京電気大学出版局, 329p, 1999。 参考書: 日野幹雄, 明解 水理学, 丸善, 345p, 1983。: 瀬津家久, 富永晃宏, 水理学, 朝倉書店, 319p, 2000。</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言: 「水工学の基礎及び演習」を履修しておくこと。基礎方程式の形は複雑だが, それが河川や地下水路など自然界・都市域の流れの現象をよく記述することに興味をもち, 水理学に対する理解を深めて欲しい。</p>					1. イントロダクション,	2. 理想流体と粘性流体,	3. 粘性流体の力学その1 (ナビエ・ストークス方程式),	4. 粘性流体の力学その2 (レイノルズ応力),	5. 粘性流体の力学その3 (対数則),		6. 開水路の定常流その1 (等流における平均流速公式),	8. 開水路の定常流その3 (常流・射流),	7. 開水路の定常流その2 (急変流におけるエネルギー則),	10. 開水路の定常流その5 (漸変流の水面形),	9. 開水路の定常流その4 (急変流における運動量則),	12. 管路の定常流その2 (形状損失),	11. 管路の定常流その1 (摩擦損失),	14. 相似法則・次元解析	13. 管路の定常流その3 (応用例),	
1. イントロダクション,	2. 理想流体と粘性流体,																			
3. 粘性流体の力学その1 (ナビエ・ストークス方程式),	4. 粘性流体の力学その2 (レイノルズ応力),																			
5. 粘性流体の力学その3 (対数則),																				
6. 開水路の定常流その1 (等流における平均流速公式),	8. 開水路の定常流その3 (常流・射流),																			
7. 開水路の定常流その2 (急変流におけるエネルギー則),	10. 開水路の定常流その5 (漸変流の水面形),																			
9. 開水路の定常流その4 (急変流における運動量則),	12. 管路の定常流その2 (形状損失),																			
11. 管路の定常流その1 (摩擦損失),	14. 相似法則・次元解析																			
13. 管路の定常流その3 (応用例),																				

水文学 Hydrology				
学期区分	3年前期	区分・単位	選択必修	2単位
担当教員	道奥康治 (Kohji MICHIOKU)			
<p>キーワード: 降水, 流域, 治水, 利水, 河川環境, 水文統計, 流出解析</p> <p>授業の目標: 河川の洪水防衛や水資源の利用のための計画と管理に関する技術を習得するために, 流域に降った雨が河川に流出する現象を再現する技術, 降水と流域の情報を河川の治水計画, 利水計画に応用する方法について講述する。</p> <p>学生の学習目標: ①降水の統計的性質と確率降雨の概念を修得すること, ②降雨や流量などの時系列シミュレーション手法とその工学的位置づけを理解すること, ③地勢・地被などの流域特性と流出特性の関係を理解すること, ④流出解析の基本概念を理解すること, ⑤河川計画への応用性を理解すること,</p> <p>授業の概要: 1. 水文学の概論 (水文循環, 水文学の歩み, 学問体系), 2. 水文と気象 (大気・海洋循環, 気候帯, 降水の要因, DAD 解析), 3. 水文素過程 (蒸発散, 降雨遮断・窪地貯留, 浸透, 融雪), 4. 水文観測 (降水観測, 水位・流量観測, 流域地形, GIS), 5. 水文統計 (リターン・ピリオド, 対数正規分布, 極値分布, 相関解析), 6. 流出解析 (合理式, 単位図法, 流出関数法, 貯留関数法, タンクモデル, キネマティック・ウェーブ・モデル, SWMM),</p> <p>関連する学習・教育目標の項目: (A), (C), (D)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け: 水工学系科目で希望者が3学年に履修。水理学と併行しながら理解を進める。</p> <p>授業の進め方: ノート講義とする。必要に応じて資料を配付する。河川計画など実例を引用しながら水文学の応用性を解説する。</p> <p>評価の方法と基準: 定期試験(記述式)の成績より評価する。60%以上の得点を合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど: 前期は毎週月曜日の15:30-17:00</p>				
<p>テキスト・教材・参考書など: 土木学会編:水理公式集 高橋裕:河川工学, 東京大学出版会 日本河川協会編:改訂新版 建設省河川砂防技術基準(案)同解説, 計画編・調査編, 山海堂</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言: 国の河川・農林施策, 河川災害, 地球水循環をとりまく国際動向, に留意すること。授業で取り上げる内容について学生諸君自らも情報収集につとめ高い環境倫理観を醸成することを期待する。</p>				

河川・流域工学		River and Watershed Engineering																
学期区分	3年前期	区分・単位	選択必修 2単位															
担当教員	藤田一郎 (Ichiro FUJITA)																	
<p>キーワード： 治水, 利水, 河川整備, 河川工法, 河川環境, 土砂水理学, 洪水流</p> <p>授業の目標： 治水, 利水, 環境保全を前提とする河川法に基づいて, 総合的な河川流域整備のための計画論・管理技術を講述する。講義および課題をとおして, 河川に対する関心を高め, 幅広い視点から河川に関わる様々な問題に対処できる判断能力を修得させる。また, 具体的な事例紹介をとおして河川技術者が有すべき倫理観を身につけさせる。</p> <p>学生の学習目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> ①流域における水循環と河川整備計画の理解。 ②河川の水理学的あるいは地形学的な特徴の理解。 ③豊かな河川環境を創造するための河川管理手法の理解。 ④河川技術者としての役割と使命の理解。 <p>授業の概要：</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 33%;">1. 河川事業の歴史の変遷</td> <td style="width: 33%;">2. 河川の地形学的・水文学的特徴</td> <td style="width: 33%;">3. 河川の調査法</td> </tr> <tr> <td>4. 河川法・水防法</td> <td>5. 河川整備計画</td> <td>6. 流出解析の基礎</td> </tr> <tr> <td>7. 利水計画</td> <td>8. 洪水流の水理 (1)</td> <td>10. 洪水流の水理 (2)</td> </tr> <tr> <td>11. 土砂移動の水理現象 (1)</td> <td>12. 土砂移動の水理現象 (2)</td> <td>13. 河川環境問題</td> </tr> <tr> <td>14. 国際的な水防災問題</td> <td></td> <td></td> </tr> </table> <p>関連する学習・教育目標の項目： (B), (D), (H)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け： 水工学系科目で希望者が3学年に履修。</p> <p>授業の進め方： 授業は, パワーポイントによるプレゼンテーションやビデオなどを用いてわかりやすく説明する。毎週, 講義内容に関するクイズを行い理解しやすいように配慮する。</p> <p>評価の方法と基準： 成績は, 上記の学習目標の達成度に対して, クイズ (30%), レポート (30%), 期末定期試験 (40%) の結果を総合的に評価し, 評価が60%以上となったものを合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど： 毎週授業時間日 (1W棟3F, 1W-309藤田教授室)</p>				1. 河川事業の歴史の変遷	2. 河川の地形学的・水文学的特徴	3. 河川の調査法	4. 河川法・水防法	5. 河川整備計画	6. 流出解析の基礎	7. 利水計画	8. 洪水流の水理 (1)	10. 洪水流の水理 (2)	11. 土砂移動の水理現象 (1)	12. 土砂移動の水理現象 (2)	13. 河川環境問題	14. 国際的な水防災問題		
1. 河川事業の歴史の変遷	2. 河川の地形学的・水文学的特徴	3. 河川の調査法																
4. 河川法・水防法	5. 河川整備計画	6. 流出解析の基礎																
7. 利水計画	8. 洪水流の水理 (1)	10. 洪水流の水理 (2)																
11. 土砂移動の水理現象 (1)	12. 土砂移動の水理現象 (2)	13. 河川環境問題																
14. 国際的な水防災問題																		
<p>テキスト・教材・参考書など： テキスト：玉井信行編, 「大学土木河川工学」, オーム社, 水工学研究会編, 水理学－水工学序論－, 技法堂出版 パワーポイントファイルは, 担当教員のHPからのダウンロードに対応させる</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言： 日頃から河川をとりまく諸問題に関心を持ち, 新聞その他のメディアが発する河川事業に関する報道に絶えず関心を払っておくことが望ましい。</p>																		

海岸・港湾工学 Coastal and Harbor Engineering			
学期区分	3年後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	宮本仁志 (Hitoshi MIYAMOTO), 勝海 務 (Tutomu KATSUUMI)		
<p>キーワード: 波動論, 波の変形, 波力, 高潮・津波, 漂砂, 港湾行政, 埠頭計画, 震災復旧</p> <p>授業の目標: 海岸工学に関しては, 沿岸域における波の変形, 流れ, 砂の移動, 波力など海岸構造物の設計・施工に必要な波動・流れの諸現象と解析方法を述べる。港湾工学については, 港湾建設に関連する行政の仕組み, 港湾と埠頭の計画と施工法について事例と現地見学を取り入れながら講述する。</p> <p>学生の学習目標:</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 波動の水理特性の理解, ② 海岸・港湾構造物の役割と機能の理解, ③ 海岸・港湾設計に必要な外力諸元の評価方法の理解, ④ 海岸・港湾における自然災害の実態とその復旧方法の理解, ⑤ 物流拠点としての港湾の役割の理解, <p>授業の概要:</p> <p>I. 海岸工学: 1. 不規則波, 有義波, 2. 風波の発生発達, 3. 波の変形, 4. 高潮と津波, 5. 波圧・波力, 6. 越波, 7. 海浜流・漂砂</p> <p>II. 港湾工学: 1. 港湾の概念, 機能, 種類, 2. 港湾行政と港湾計画の概要, 3. 港湾計画理論, 景観, 埠頭計画, 4. 港湾施設の設計, 5. 港湾施設の施工, 6. 港湾施設の現地調査, 7. 災害復旧</p> <p>関連する学習・教育目標の項目: (B), (D), (G), (H)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け: 水工学系科目で希望者が3学年に履修。 「水工学の基礎及び演習」で海岸・港湾工学の理解に必要な波の基礎理論を教授する。海域環境に関しては「水圏環境工学」において講述する。港湾工学に関しては, 「土質力学Ⅰ及び演習」, 「土質力学Ⅱ及び演習」, など地盤工学系科目で港湾構造物の施工に関する基礎理論が教授される。</p> <p>授業の進め方: 前半は海岸工学を宮本が担当し, 後半は港湾工学を勝海が担当する。海岸工学はテキストと講義ノートを中心として講義を進める。港湾工学は, 配付資料・その他関連資料による講義を中心とし, 1, 2回程度の港湾見学を実施する。</p> <p>評価の方法と基準: 海岸工学については試験(記述式)の成績より評価する。港湾工学についてはレポートにより成績評価する。海岸工学(50%)と港湾工学(50%)の配分割合で評価を行い, 総合点が60%以上となる場合を合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど: 宮本: 講義時間の終了後 勝海: 講義時間の終了後</p> <p>テキスト・教材・参考書など: テキスト: 海岸工学: (榎木亨・出口一郎著: 共立出版, 1996)</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言: 神戸に立地した本学では神戸港や大阪湾など海岸・港湾工学の授業内容を現地に見聞できるよい事例があるので, 課外時間を利用して海岸・港湾施設に接し, 問題意識を高めることを勧める。</p>			

環境流体の解析学 Environmental Fluid Mechanics																	
学期区分	3年後期	区分・単位	選択必修 2単位														
担当教員	中山昭彦 (Akihiko NAKAYAMA)																
<p>キーワード: 流体の運動学, 保存則, 運動方程式, エネルギー式, 相似則, 成層, 拡散, 乱流</p> <p>授業の目標: 水・空気など環境に存在する流体の運動とそれによる物質や熱の輸送, 混合, 拡散現象を記述し解析する基礎理論を習得し, 比較的簡単な場合についての解析例を学ぶ。</p> <p>学生の学習目標:</p> <ol style="list-style-type: none"> ① ベクトルとテンソルを用いた力学解析手法の習得 ② 流体運動と基礎法則の理解 ③ 回転・曲線座標などによる解析手法の習得 ④ 相似律と実現象解析法の把握 ⑤ 環境の流体運動の特性とその多様性の理解を深める <p>授業の概要:</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 50%;">1. 環境流体の概要,</td> <td style="width: 50%;">8. 曲線座標での記述,</td> </tr> <tr> <td>2. ベクトルとテンソルによる記述法,</td> <td>9. 相似律と無次元数,</td> </tr> <tr> <td>3. 流体運動の記述法,</td> <td>10. 層流の解析法,</td> </tr> <tr> <td>4. 質量・運動量についての基礎法則,</td> <td>11. 乱流の各種平均・解析法,</td> </tr> <tr> <td>5. エネルギーについての基礎式,</td> <td>12. 乱流モデル,</td> </tr> <tr> <td>6. 回転座標での記述,</td> <td>13. 実問題への適用例</td> </tr> <tr> <td>7. 圧縮性と成層の影響,</td> <td></td> </tr> </table> <p>関連する学習・教育目標の項目: (D), (H)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け: 水工学系科目で希望者が3学年に履修。 水工学系の基礎科目, 「水工学の基礎及び演習」および「管路・開水路の水理学及び演習」を履修した上で, 3年次に履修し, より複雑な環境での流体運動を理解し解析する基礎知識を身に付ける。</p> <p>授業の進め方: 参考書を指定しているが, 特別に作成し配布したプリントをもとに授業をすすめる。課題と中間試験により理解度をチェックし, 理解の不十分な点を補足しながらすすめる。</p> <p>評価の方法と基準: 課題5回, 中間試験および期末試験を実施し, それぞれ25%, 25%, 50%の重みで採点し, 合計点数60%以上を合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど: 授業前後2時間 (自然科学総合研究棟3号館115室, 中山研究室)</p> <p>テキスト・教材・参考書など: 1. 参考書: 地球環境を学ぶための流体力学: 成山堂書店</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言: やや高度な数学手法を用いるので, 基礎から十分な理解が大事。課題を一つずつこなしていこう。</p>				1. 環境流体の概要,	8. 曲線座標での記述,	2. ベクトルとテンソルによる記述法,	9. 相似律と無次元数,	3. 流体運動の記述法,	10. 層流の解析法,	4. 質量・運動量についての基礎法則,	11. 乱流の各種平均・解析法,	5. エネルギーについての基礎式,	12. 乱流モデル,	6. 回転座標での記述,	13. 実問題への適用例	7. 圧縮性と成層の影響,	
1. 環境流体の概要,	8. 曲線座標での記述,																
2. ベクトルとテンソルによる記述法,	9. 相似律と無次元数,																
3. 流体運動の記述法,	10. 層流の解析法,																
4. 質量・運動量についての基礎法則,	11. 乱流の各種平均・解析法,																
5. エネルギーについての基礎式,	12. 乱流モデル,																
6. 回転座標での記述,	13. 実問題への適用例																
7. 圧縮性と成層の影響,																	

土質力学 I 及び演習 Soil Mechanics I and Practice			
学期区分	2年前期	区分・単位	必修 3単位
担当教員	澁谷啓 (Satoru SHIBUYA), 河井克之 (Katsuyuki KAWAI)		
<p>キーワード: 物理特性, 透水性, 締固め, 有効応力, 圧縮・圧密</p> <p>授業の目標: 地盤工学とは地球表面部のごく浅い部分を形成する“地盤”の工学的問題を取り扱う学問であり, 土質力学とは地盤の大部分を構成する“土”材料の物理・力学特性を体系化した学問である。本講義では, 土質材料の物理特性及び変形・応力に関する基本的な事項について学習し, 地盤工学入門への基礎知識を習得することを目的とする。</p> <p>学生の学習目標:</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 地盤の構成, 土質力学の考え方について理解, ② 土質材料の工学的性質と定量的評価方法の理解, ③ 地盤と工学的問題及び対応方法についての理解, ④ 演習を通じて, 上記土質材料の工学的性質・問題についての習熟 <p>授業の概要: 講義及び演習により, 以下の内容について習熟する</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 土の物理的性質 (土粒子, 水, 空隙から構成される土の状態を定量的に評価する方法など) 2. 土の締固め (最適含水比, 締固め効果の理解など) 3. 地盤中の水の浸透 (地下水の流れ, 水の圧力, ダルシー則, 流線網など) 4. 土の有効応力 (全応力, 間隙水圧, 有効応力の原理, 土の力学特性との関係など) 5. 土の圧密 (飽和土が外力を受け, 排水を伴い応力が変化し変形する現象・理論の理解など) <p>関連する学習・教育目標の項目: (A), (C), (D), (E)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け: 地盤工学系科目で全員が2学年に履修。</p> <p>授業の進め方: 講義中は教科書及び配布資料に基づき, 教室授業を中心に進める。</p> <p>評価の方法と基準: 演習のレポート (30%), 中間および期末試験結果 (70%) によって評価する。 但し, 学習態度が悪い場合には減点の対象とする</p> <p>オフィスアワーなど: 澁谷: 講義終了後2時間 (1W棟2F, 1W-207澁谷教授室) 河井: 講義終了後2時間</p>			
<p>テキスト・教材・参考書など:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 土質力学 (石原研而, 丸善) を教科書とする。適宜資料を配布する。 <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言: 必ず土質力学Ⅱ及び演習を履修すること。土質材料の基本的性質の理解には, 複雑な理論の習得は必要ないが, 自然の材料ゆえに独特な力学的考え方を把握する必要がある。“土”の不思議についての理解を深めてほしい。</p>			

土質力学Ⅱ及び演習 Soil Mechanics II and Practice			
学期区分	2年後期	区分・単位	選択必修 3単位
担当教員	飯塚 敦 (Atsushi IIZUKA), 加藤正司 (Shoji KATO)		
<p>キーワード: 地盤内応力, 土の力学的性質, せん断, 強度, 間隙水圧, 有効応力, 土圧, 変形と安定, 土/水連成</p> <p>授業の目標: 地盤を構成する土質材料の力学的特性, 特に, せん断特性について学ぶ。本授業は, 「土質力学Ⅰ及び演習」の履修が前提となっており, その続編と位置づけられる。さらに, 本講義で学んだ内容は, 「構造物基礎工学」「地盤調査・施工法」の基礎を与える。このような一連の土質力学の講義によって, 地盤材料の力学特性, 地盤工学における種々の問題に対するアプローチの仕方を修得する。</p> <p>学生の学習目標: 土は, 土粒子自身によって構成される骨格, その間隙を満たす空気と水によって構成される。本講義では, 間隙が水で満たされている飽和土に話題を限定するが, その飽和土のせん断特性の理解と地盤内の土圧の考え方を理解し, 地盤の変形, 安定問題の考え方を習得することが目標である。</p> <p>授業の概要: 講義と演習を交互に組み合わせて, 授業をすすめる。 地盤内応力: 土のせん断理論: (1) せん断とは, (2) 地盤内の応力状態の表わし方—Mohrの応力円, (3) 土の破壊基準, (4) せん断試験法, (5) ダイラタンシー特性, (6) 間隙水圧の変化と有効応力経路, (7) 土要素の応力—ひずみ特性, (8) 土の状態曲面 土圧理論: (1) 受動土圧と主動土圧, (2)ランキンの土圧理論, (3) クーロンの土圧理論, (4) 土圧理論と実際の設計問題 安定理論の基礎:</p> <p>関連する学習・教育目標の項目: (C), (D), (E)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け: 地盤工学系科目で, 希望者が2学年時に履修。あらかじめ「土質力学Ⅰ及び演習」の履修が求められる。</p> <p>授業の進め方: 講義で習った内容を, 演習で確認, 理解する。講義は, 参考書・講義内容ノートにそって行われる。</p> <p>評価の方法と基準: 講義と演習をそれぞれ50%ずつとして評価する。講義については定期試験で評価する。演習については中間試験を15%, 定期試験を15%, レポートを20%として評価する。ただし, 出席が70%未満の不合格とし, 提出期限より後にレポートを提出した場合は採点の対象外とする。講義と演習の合計が60%以上の得点を合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど: 飯塚:後期間講義曜日の13:00—17:00 (都市安全研究センター 2F, 飯塚教授室) 加藤:後期間演習曜日の13:00—17:00 (1W棟 2F, 1W-206, 加藤准教授室)</p> <p>テキスト・教材・参考書など: 参考書:山内豊聡著「土質力学—全訂新版—」理工図書, 柴田徹編著「ニューパラダイムテキストブック 地盤力学」山海堂, 希望者には講義内容ノートが配布される。</p>			

地盤基礎工学 Foundation Engineering																			
学期区分	3年前期	区分・単位	選択必修 2単位																
担当教員	吉田信之 (Nobuyuki YOSHIDA)																		
<p>キーワード： 支持力，地盤内応力，抗土圧構造物，基礎構造物，限界状態設計法</p> <p>授業の目標： 社会基盤を支える抗土圧構造物や基礎構造物の設計に必要な基礎（理論），最近基礎工学の分野で注目されつつある限界状態設計法の考え方について講述し演習を通してそれらの修得を図る。</p> <p>学生の学習目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 抗土圧構造物や基礎構造物の種類と役割の理解， ② 抗土圧構造物の設計に必要な基礎概念（理論）の理解， ③ 基礎構造物の設計に必要な基礎概念（理論）の理解， ④ 基礎工学における限界状態設計法の考え方の理解 <p>授業の概要：</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 50%;">1. 土圧論の復習（1），</td> <td style="width: 50%;">9. 直接基礎（2），</td> </tr> <tr> <td>2. 土圧論の復習（2），</td> <td>10. 杭基礎（1），</td> </tr> <tr> <td>3. 擁壁（1），</td> <td>11. 杭基礎（2），</td> </tr> <tr> <td>4. 擁壁（2），</td> <td>12. ケーソン基礎，</td> </tr> <tr> <td>5. 支持力論（1），</td> <td>13. 特殊基礎，</td> </tr> <tr> <td>6. 支持力論（2），</td> <td>14. 限界状態設計法（1），</td> </tr> <tr> <td>7. 支持力論（3），</td> <td>15. 限界状態設計法（2）</td> </tr> <tr> <td>8. 直接基礎（1），</td> <td></td> </tr> </table> <p>関連する学習・教育目標の項目： (A), (C), (D), (E), (H)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け： 地盤工学系科目で希望者が3学年に履修。</p> <p>授業の進め方： 板書，配付資料，OHPを用いて講義を進める。また，理解を深めるために演習レポートを随時課する。</p> <p>評価の方法と基準： 定期試験（80%），レポート（20%）の配分で評価する。</p> <p>オフィスアワーなど： 毎金曜日 15：30-17：00（都市安全研究センター 2階 R203）</p>				1. 土圧論の復習（1），	9. 直接基礎（2），	2. 土圧論の復習（2），	10. 杭基礎（1），	3. 擁壁（1），	11. 杭基礎（2），	4. 擁壁（2），	12. ケーソン基礎，	5. 支持力論（1），	13. 特殊基礎，	6. 支持力論（2），	14. 限界状態設計法（1），	7. 支持力論（3），	15. 限界状態設計法（2）	8. 直接基礎（1），	
1. 土圧論の復習（1），	9. 直接基礎（2），																		
2. 土圧論の復習（2），	10. 杭基礎（1），																		
3. 擁壁（1），	11. 杭基礎（2），																		
4. 擁壁（2），	12. ケーソン基礎，																		
5. 支持力論（1），	13. 特殊基礎，																		
6. 支持力論（2），	14. 限界状態設計法（1），																		
7. 支持力論（3），	15. 限界状態設計法（2）																		
8. 直接基礎（1），																			
<p>テキスト・教材・参考書など： ・講義中にプリントを配付する。適宜，参考図書を示す。</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言： ・1回目の講義時に，科目の概説，講義の進め方等々について説明する。 ・「土質力学Ⅰ及び演習」と「土質力学Ⅱ及び演習」の修得が望ましい。</p>																			

地形工学 Landform Engineering						
学期区分	3年後期	区分・単位	選択必修	2単位		
担当教員	沖村 孝 (Takashi OKIMURA)					
<p>キーワード： 地形, 低地, 氾らん平野, 段丘, 丘陵, 山地, 人工地形, 成因と地盤強度, 数値地形モデル</p> <p>授業の目標： 建設工事の対象場所である地盤の特性を知るための一手法として, 地形情報から得られる地盤の工学的特徴に関する情報取得および活用方法について理解させる。本講では現状の地形のみならず, 現在に至るまでの地形形成過程を理解させることにより, 土木構造物が存在する間の自然の変化を配慮できる広い視野を養うこと, 地盤災害のリスクを回避するための土木技術者の判断を養うことを目的とする。</p> <p>学生の学習目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 地形の4大区分, ② 小地形の成因と工学的特徴の把握, ③ 土木工事にとって問題となる地形の理解 ④ 土木技術者に必要な地形解析手法の理解 <p>授業の概要：</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> <ol style="list-style-type: none"> 1. 地形の読み方, 2. 地形の成り立ち, 3. 低地, 沿岸部の地形形成と工学的特徴, 4. 氾らん平野の地形形成と工学的特徴, 5. 段丘の地形形成と工学的特徴, 6. 丘陵・山地の地形形成と工学的特徴, 7. 軟弱地盤と人工地形, 8. 地すべり原因とその対策, </td> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> <ol style="list-style-type: none"> 9. 山くずれ原因とその対策, 10. 土木工事と地形・地質災害 (I, スライド), 11. 土木工事と地形・地質災害 (II), 12. GIS (地理情報システム) と数値地形モデル, 13. 数値地形モデルを活用した地形の定量化, 14. 数値地形モデルを活用した崩壊の予知, 15. 今後の斜面防災のあり方 </td> </tr> </table> <p>関連する学習・教育目標の項目： (B), (C), (D), (H)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け： 地盤工学系科目で希望者が3学年に履修。</p> <p>授業の進め方： 講義中はOHP, スライド, パワーポイント等を活用して, 形が示す重要性を分かりやすく説明する。最初に本講義で修得すべき内容を質問形式で出題し, 最終講義でその回答を説明することにより, 講義の内容を理解させる。</p> <p>評価の方法と基準： 出席回数と期末試験によって評価する。出席回数70%未満のものは不合格, 出席回数70%以上でかつ期末試験点数60点以上を合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど： 後期講義開講日, 11:00-12:30 (都市安全研究センター研究棟2F, 沖村教授室)</p> <p>テキスト・教材・参考書など： テキスト：「建設計画と地形・地質」(地盤工学会編, 土質基礎工学ライブラリー26) 教材：その他, 関連する教材は, 講義中に配布する。</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言： 普段何気なく見ている自然の地形が, 科学的には多くの作用の結果であることを理解してほしい。毎年ニュースとなる自然災害も, その多くは地形条件に由来することに気をつけて欲しい。</p>					<ol style="list-style-type: none"> 1. 地形の読み方, 2. 地形の成り立ち, 3. 低地, 沿岸部の地形形成と工学的特徴, 4. 氾らん平野の地形形成と工学的特徴, 5. 段丘の地形形成と工学的特徴, 6. 丘陵・山地の地形形成と工学的特徴, 7. 軟弱地盤と人工地形, 8. 地すべり原因とその対策, 	<ol style="list-style-type: none"> 9. 山くずれ原因とその対策, 10. 土木工事と地形・地質災害 (I, スライド), 11. 土木工事と地形・地質災害 (II), 12. GIS (地理情報システム) と数値地形モデル, 13. 数値地形モデルを活用した地形の定量化, 14. 数値地形モデルを活用した崩壊の予知, 15. 今後の斜面防災のあり方
<ol style="list-style-type: none"> 1. 地形の読み方, 2. 地形の成り立ち, 3. 低地, 沿岸部の地形形成と工学的特徴, 4. 氾らん平野の地形形成と工学的特徴, 5. 段丘の地形形成と工学的特徴, 6. 丘陵・山地の地形形成と工学的特徴, 7. 軟弱地盤と人工地形, 8. 地すべり原因とその対策, 	<ol style="list-style-type: none"> 9. 山くずれ原因とその対策, 10. 土木工事と地形・地質災害 (I, スライド), 11. 土木工事と地形・地質災害 (II), 12. GIS (地理情報システム) と数値地形モデル, 13. 数値地形モデルを活用した地形の定量化, 14. 数値地形モデルを活用した崩壊の予知, 15. 今後の斜面防災のあり方 					

地盤調査・施工法 Ground Investigation and Execution Method					
学期区分	3年後期	区分・単位	選択必修 2単位		
担当教員	田中泰雄 (Yasuo TANAKA)				
<p>キーワード： 地盤調査, 土構造物, 軟弱地盤, 地盤改良, 施工・管理</p> <p>授業の目標： 地盤上に構造物を安全に構築するためには, 支持地盤の工学的性質を十分に把握しなければならない。本講義の前半では, 地盤の工学的性質を調査するための技術と理論について述べ, 後半では地盤上に構造物を安全・経済的に建設するための知識を習得することを目的とする。</p> <p>学生の学習目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 地盤工学の実際問題への適用について理解する, ② 地盤調査と地質学・地盤工学との関係の理解, ③ 地盤調査と設計・施工との関係の理解, ④ 自然地盤環境についての理解 <p>授業の概要：</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> <ol style="list-style-type: none"> 1. 地盤調査計画・概要, 2. 地盤探査・検層 (PS 検層, 弾性波探査), 3. ボーリング及びサンプリング (I), 4. ボーリング及びサンプリング (II), 5. サウンディング (標準貫入試験), 6. サウンディング (コーン貫入試験), 7. サウンディング (ベーンせん断試験, 孔内水平載荷試験), </td> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> <ol style="list-style-type: none"> 8. 現場計測手法, 9. 軟弱地盤とは, 10. 地盤改良工法 (I), 11. 地盤改良工法 (II), 12. 土構造物の施工と変形・破壊 (I), 13. 土構造物の施工と変形・破壊 (II), 14. 土構造物の施工・管理 </td> </tr> </table> <p>関連する学習・教育目標の項目： (A), (C), (D), (H)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け： 地盤工学系科目で希望者が3学年に履修。</p> <p>授業の進め方： 講義中は配布資料に基づき, 教室授業を中心に進める。</p> <p>評価の方法と基準： 出席回数, 授業中のレポート2回 (10%), 期末試験結果 (90%) によって評価する。出席回数70%未満のものは不合格, 出席回数70%以上で且つレポートと期末試験の合計定数60%以上を合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど： 田中：後期期間毎週火曜日, 11:00-12:30 (都市安全研究センター2F, 田中教授室)</p> <p>テキスト・教材・参考書など：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 地盤調査法 (地盤工学会) <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言： 土質力学I及び演習, 土質力学II及び演習を履修すること。</p>				<ol style="list-style-type: none"> 1. 地盤調査計画・概要, 2. 地盤探査・検層 (PS 検層, 弾性波探査), 3. ボーリング及びサンプリング (I), 4. ボーリング及びサンプリング (II), 5. サウンディング (標準貫入試験), 6. サウンディング (コーン貫入試験), 7. サウンディング (ベーンせん断試験, 孔内水平載荷試験), 	<ol style="list-style-type: none"> 8. 現場計測手法, 9. 軟弱地盤とは, 10. 地盤改良工法 (I), 11. 地盤改良工法 (II), 12. 土構造物の施工と変形・破壊 (I), 13. 土構造物の施工と変形・破壊 (II), 14. 土構造物の施工・管理
<ol style="list-style-type: none"> 1. 地盤調査計画・概要, 2. 地盤探査・検層 (PS 検層, 弾性波探査), 3. ボーリング及びサンプリング (I), 4. ボーリング及びサンプリング (II), 5. サウンディング (標準貫入試験), 6. サウンディング (コーン貫入試験), 7. サウンディング (ベーンせん断試験, 孔内水平載荷試験), 	<ol style="list-style-type: none"> 8. 現場計測手法, 9. 軟弱地盤とは, 10. 地盤改良工法 (I), 11. 地盤改良工法 (II), 12. 土構造物の施工と変形・破壊 (I), 13. 土構造物の施工と変形・破壊 (II), 14. 土構造物の施工・管理 				

計画学Ⅰ及び演習 Infrastructure Planning I : Mathematical Programming and Practice			
学期区分	2年後期	区分・単位	必修 3単位
担当教員	喜多秀行 (Hideyuki KITA), 竹林幹雄 (Mikio TAKEBAYASHI), 井料隆雅 (Takamasa IRYO)		
<p>キーワード: 社会基盤施設, 応用数学, 分析と評価, 最適化</p> <p>授業の目標: 土木計画では, 諸現象の分析, 代替案の作成, さらには代替案の評価と選択を体系的かつ科学的に実行することが求められている。こういった要求から土木計画学では様々な計画・評価手法を導入し, その手法を応用・展開することが求められている。本講義・演習では応用数学を主軸とした分析・評価手法の習得を行うことを目的とし, 主に計画代替案の作成・評価に関連した数学的手法の理解を目的とする。</p> <p>学生の学習目標: ①土木計画学における計画代替案の作成・評価に関連した数学的手法に対する理解。 ②具体的な計画問題に対し, 数理的に表現し, 自力で求解できること。</p> <p>授業の概要: 1. 線形代数と写像 2. 最適化問題 3. 問題の定型化と定式化, 4. 線形計画法の理論と解法 5. 整数計画法の理論と解法 6. 非線形計画法の理論と解法</p> <p>関連する学習・教育目標の項目: (C), (D), (F), (J)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け: 計画系科目で全員が2学年に履修。</p> <p>授業の進め方: 板書を中心として講義を行う。また, 教科書以外の講義資料は全てWEBにて配布を行う。</p> <p>評価の方法と基準: 講義中に行われる小テスト (10%), 中間試験 (30%) および定期試験 (60%) の配分で評価し, 100点満点中60点以上のものを合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど: 講義期間中原則として講義日の15:30-17:00 (1W棟3F 喜多教授室, 竹林准教授室:予約制 井料助教室)</p>			
<p>テキスト・教材・参考書など: 1. 教科書は講義中に指定する。その他講義資料はWEBを通じてダウンロードできる。 2. オフィスアワーは混雑するので, 予約すること。</p>			

都市地域計画		Urban and Regional Planning																	
学期区分	3年前期	区分・単位	選択必修 2単位																
担当教員	富田安夫 (Yasuo TOMITA)																		
<p>キーワード： 都市計画，地域計画，国土計画，土地利用計画，市街地整備計画，都市施設計画</p> <p>授業の目標： 都市地域計画に関する基本的な考え方，方法，制度および代表的な計画分析手法について理解させることを目標とする。</p> <p>学生の学習目標： ① 都市地域計画に関する基本的な考え方，方法，制度の理解 ② 代表的な計画分析手法の理解</p> <p>授業の概要：</p> <table border="0"> <tr> <td>1. 都市の歴史，</td> <td>9. 市街地整備計画，</td> </tr> <tr> <td>2. 都市計画思想，</td> <td>10. 都市交通計画（Ⅰ），</td> </tr> <tr> <td>3. 諸外国の都市地域計画（Ⅰ），</td> <td>11. 都市交通計画（Ⅱ），</td> </tr> <tr> <td>4. 諸外国の都市市域計画（Ⅱ），</td> <td>12. 公園・緑地計画，</td> </tr> <tr> <td>5. 日本の都市地域計画の歴史，</td> <td>13. 計画分析手法（Ⅰ），</td> </tr> <tr> <td>6. 国土計画及び大都市圏計画，</td> <td>14. 計画分析手法（Ⅱ），</td> </tr> <tr> <td>7. 土地利用計画（Ⅰ），</td> <td>15. 計画分析手法（Ⅲ）</td> </tr> <tr> <td>8. 土地利用計画（Ⅱ），</td> <td></td> </tr> </table> <p>関連する学習・教育目標の項目： (C)，(D)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け： 計画系科目で希望者が3学年に履修。都市計画を実現するための制度について学習するための実際的な科目。</p> <p>授業の進め方： 講義形式。</p> <p>評価の方法と基準： 中間試験（30%）と期末試験（70%）の結果により判定する。出席回数70%未満のものは不合格，出席回数70%以上で，かつ，中間および期末試験の総合判定の点数が60%以上の場合を合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど： 後学期間毎週月曜日，15：30－17：00（自然科学3号館8F，富田准教授室）</p>				1. 都市の歴史，	9. 市街地整備計画，	2. 都市計画思想，	10. 都市交通計画（Ⅰ），	3. 諸外国の都市地域計画（Ⅰ），	11. 都市交通計画（Ⅱ），	4. 諸外国の都市市域計画（Ⅱ），	12. 公園・緑地計画，	5. 日本の都市地域計画の歴史，	13. 計画分析手法（Ⅰ），	6. 国土計画及び大都市圏計画，	14. 計画分析手法（Ⅱ），	7. 土地利用計画（Ⅰ），	15. 計画分析手法（Ⅲ）	8. 土地利用計画（Ⅱ），	
1. 都市の歴史，	9. 市街地整備計画，																		
2. 都市計画思想，	10. 都市交通計画（Ⅰ），																		
3. 諸外国の都市地域計画（Ⅰ），	11. 都市交通計画（Ⅱ），																		
4. 諸外国の都市市域計画（Ⅱ），	12. 公園・緑地計画，																		
5. 日本の都市地域計画の歴史，	13. 計画分析手法（Ⅰ），																		
6. 国土計画及び大都市圏計画，	14. 計画分析手法（Ⅱ），																		
7. 土地利用計画（Ⅰ），	15. 計画分析手法（Ⅲ）																		
8. 土地利用計画（Ⅱ），																			
<p>テキスト・教材・参考書など： 必要に応じて講義中に資料を配布する。</p>																			

計画学 II Infrastructure Planning II			
学期区分	3年前期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	朝倉康夫 (Yasuo ASAKURA)		
<p>キーワード： 社会基盤の計画，費用便益分析，利用者行動分析，マーケティング</p> <p>授業の目標： 市民生活を支える社会資本の効率的で公正な整備・運用のためには，社会基盤施設の利用者である市民の行動分析や需要の動向分析・マーケティングと，費用便益分析を中心とする計画評価が重要である。本講義では社会資本に関する需要分析と計画評価の基礎的手法を習得することを目標とする。</p> <p>学生の学習目標：</p> <ul style="list-style-type: none"> ①土木技術者としての基礎学力の修得 ②社会資本の計画と運用に関する専門的基礎知識の修得 ③都市・地域の現象に幅広く関心を持ち，自主的，継続的に学習・説明できる能力の修得 <p>授業の概要：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 計画の基礎知識： 公共事業の意思決定プロセス，計画の段階（調査，分析，予測，評価），需要関数と利用者均衡 2. 需要分析： 実験計画法，消費者行動分析，マーケティング，データマイニング 3. 社会資本整備の便益推定： 費用便益分析，消費者余剰，ヘドニックアプローチ，仮想市場評価法（CVM） 4. 社会資本整備計画に関する最近の話題： PFI（private finance initiatives），アセットマネジメント <p>関連する学習・教育目標の項目： (A)，(C)，(D)，(F)，(J)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け： 計画系科目で希望者が3学年に履修。</p> <p>授業の進め方： 講義形式を原則とするが，具体的な例題を通して方法論を理解するための演習時間も設ける。</p> <p>評価の方法と基準： 中間試験（50%）と期末試験（50%）の成績により評価する。評価点数が60%以上の場合を合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど： 講義のある曜日に1.5時間（時間帯は未定）設定する。事前にメールで予約することが望ましい。</p>			
<p>テキスト・教材・参考書など： 標準テキストは指定しない。講義中にプリントを配布する。</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言： 市民工学のための確率・統計学，都市地域計画，計画学 I 及び同演習を履修しておくことが望ましい。</p>			

交通工学 Transportation Engineering													
学期区分	3年前期	区分・単位	選択必修 2単位										
担当教員	朝倉康夫 (Yasuo ASAKURA)												
<p>キーワード： 交通調査，交通行動，需要予測，交通計画，交通流，道路計画</p> <p>授業の目標： 交通現象の理解を踏まえた交通システム計画のための需要解析・予測の手法と，交通流理論および道路計画の考え方について，体系的に修得する。交通システムの計画手法，道路交通の計画手法について，体系的に修得し，交通の計画に関する実践的応用力を養うことを目標とする。</p> <p>学生の学習目標：</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 土木技術者としての基礎学力の修得 ② 交通工学に関する専門的基礎知識の修得 ③ 都市，交通に幅広く関心を持ち，自主的，継続的に学習・説明できる能力の修得 <p>授業の概要：</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 50%;">1. 交通システムの構成，</td> <td style="width: 50%;">6. 交通容量，</td> </tr> <tr> <td>2. 交通行動調査，</td> <td>7. 道路の設計と計画，</td> </tr> <tr> <td>3. 交通需要の分析と予測，</td> <td>8. 交通運用，</td> </tr> <tr> <td>4. 道路交通流の調査，</td> <td>9. 地区交通計画，</td> </tr> <tr> <td>5. 道路交通流の理論，</td> <td>10. 道路交通環境</td> </tr> </table> <p>関連する学習・教育目標の項目： (B)，(C)，(D)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け： 計画系科目で希望者が3学年に履修。</p> <p>授業の進め方： 講義形式を原則とするが，具体的な例題を通して方法論を理解するための演習時間も設ける。</p> <p>評価の方法と基準： 期末試験の成績により評価する。評価点数が60%以上の場合を合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど： 講義のある曜日に1.5時間（時間帯は未定）設定する。事前にメールで予約することが望ましい。</p>				1. 交通システムの構成，	6. 交通容量，	2. 交通行動調査，	7. 道路の設計と計画，	3. 交通需要の分析と予測，	8. 交通運用，	4. 道路交通流の調査，	9. 地区交通計画，	5. 道路交通流の理論，	10. 道路交通環境
1. 交通システムの構成，	6. 交通容量，												
2. 交通行動調査，	7. 道路の設計と計画，												
3. 交通需要の分析と予測，	8. 交通運用，												
4. 道路交通流の調査，	9. 地区交通計画，												
5. 道路交通流の理論，	10. 道路交通環境												
<p>テキスト・教材・参考書など： 「交通工学」，国民科学社，佐佐木監修・飯田編著を標準テキストとする。</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言： 都市地域計画，土木計画学，社会統計解析を履修しておくことが望ましい。</p>													

地球環境論 Introduction to Global Environment																	
学期区分	1年前期	区分・単位	必修 2単位														
担当教員	中山昭彦 (Akihiko NAKAYAMA)																
<p>キーワード： 地球の誕生と歴史，生物と環境，気候変動，エネルギー問題</p> <p>授業の目標： まず地球環境の歴史的起源と変遷の要点を説明し，地球環境の本質と現状を理解させる。次に地球の大気，水域，地圏，生態の諸要素の詳細を客観的，定量的に学ぶことにより，現在また将来の諸問題についてその原因，現状，対策などについて考える知識を習得する。</p> <p>学生の学習目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 地球の誕生と地球環境の歴史を学ぶ ② 生物の誕生・進化と地球環境変遷の関係を理解する ③ 大気，水域，地圏の構造と環境との関係を理解する ④ 人間活動と環境との関係を把握する ⑤ 環境問題の例と対策法を考える基礎を学ぶ <p>授業の概要：</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 50%;">1. 地球誕生と地球環境の歴史，</td> <td style="width: 50%;">8. 騒音・振動・廃棄物問題，</td> </tr> <tr> <td>2. 生物の誕生と進化，</td> <td>9. エネルギーと環境問題，</td> </tr> <tr> <td>3. 気候と地球環境の変遷と急変，</td> <td>10. 炭素の循環と地球環境，</td> </tr> <tr> <td>4. 大気の構造と地球環境，</td> <td>11. 地球環境の将来，</td> </tr> <tr> <td>5. 水域の環境，</td> <td>12. 環境問題と対策Ⅰ，</td> </tr> <tr> <td>6. 地圏環境，</td> <td>13. 環境問題と対策Ⅱ</td> </tr> <tr> <td>7. 森林と環境，</td> <td></td> </tr> </table> <p>関連する学習・教育目標の項目： (A)，(C)，(D)，(G)，(H)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け： 環境系科目で全員が1学年に履修。</p> <p>授業の進め方： 講義は板書を主に進めるが，写真やグラフはOHPを使い分かりやすくする。またホームページにより資料や授業内容を学生に公開する。</p> <p>評価の方法と基準： レポート1回，中間試験および期末試験を実施し，それぞれ25%， 25%， 50%の重みで採点し，合計点数60%以上を合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど： 授業開講日15：30－17：00 (自然科学総合研究棟3号館115室，中山研究室)</p> <p>テキスト・教材・参考書など： 1. 参考書：地球環境科学 (樽谷修：朝倉書店)</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言： 地球環境について客観的な判断ができるような基礎知識を主に学びますが，最近の問題について関心をもつことも大事です。</p>				1. 地球誕生と地球環境の歴史，	8. 騒音・振動・廃棄物問題，	2. 生物の誕生と進化，	9. エネルギーと環境問題，	3. 気候と地球環境の変遷と急変，	10. 炭素の循環と地球環境，	4. 大気の構造と地球環境，	11. 地球環境の将来，	5. 水域の環境，	12. 環境問題と対策Ⅰ，	6. 地圏環境，	13. 環境問題と対策Ⅱ	7. 森林と環境，	
1. 地球誕生と地球環境の歴史，	8. 騒音・振動・廃棄物問題，																
2. 生物の誕生と進化，	9. エネルギーと環境問題，																
3. 気候と地球環境の変遷と急変，	10. 炭素の循環と地球環境，																
4. 大気の構造と地球環境，	11. 地球環境の将来，																
5. 水域の環境，	12. 環境問題と対策Ⅰ，																
6. 地圏環境，	13. 環境問題と対策Ⅱ																
7. 森林と環境，																	

水圏環境工学 Environmental Limnology				
学期区分	3年前期	区分・単位	選択必修	2単位
担当教員	道奥康治 (Kohji MICHIOKU)			
<p>キーワード： 河川，水質，生態系，沿岸環境，停滞水域，水系一貫</p> <p>授業の目標： 開発と環境保全のトレードオフ関係を理解し，水環境整備事業に対する技術者の判断力を養うことを目標とする。人間活動が水圏の自然環境の変貌におよぼす影響を考える。社会基盤整備を担う技術者の立場から自然と人との共生・調和を目指した水環境保全技術を講述する。</p> <p>学生の学習目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 水環境に関わる水質諸項目の化学的・生物学的・物理学的性質の理解， ② 湖沼・貯水池など停滞水域における有機汚濁現象の理解， ③ 沿岸域における波・潮流・海流など物理環境と生態系や水質との関係の理解， ④ 河川における水質・生態系と環境要素との関わりの理解， ⑤ 水環境の保全と創生に果たす技術者の役割の考究， <p>授業の概要：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 水質の基礎知識（化学的汚染，有機汚濁，水質指標と環境基準，光・熱環境と水質，化学的環境と生物化学的諸過程の基礎，水環境における生態系と水質，モデルによる解析）， 2. 湖沼や貯水池の水環境（湖沼・貯水池の特徴，水温成層，水温成層の特性による水域の分類，水域内の流れと混合，冷水害，濁水問題，貯水池の富栄養化問題，水質の解析法，湖沼・貯水池の水質環境改善法，湖岸の植生と水域環境，湖沼・貯水池の景観および親水活動）， 3. 海洋・海岸の水環境（海洋・海岸の流れ，流れによる物質輸送，海域の生物環境，海域の水質，閉鎖性内湾の海水交換，閉鎖性内湾の水質浄化法，外洋の水環境，エルニーニョ現象，汚濁物質の拡散予測シミュレーション，海域の景観と親水性）， 4. 河川の水環境（河川環境の成り立ち，河川の物理環境，河川の化学環境，河川の植生，河川の魚類と底生生物，河口部の環境，河川環境と人間社会）， 5. その他時事トピックス <p>関連する学習・教育目標の項目： (B)，(D)，(H)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け： 環境系科目で希望者が3学年に履修。水工学系科目との関連性が高い。</p> <p>授業の進め方： テキストを中心とした講義であるが，各主題の最新情報を極力取り入れ，ビデオや図面などを紹介する。</p> <p>評価の方法と基準： 定期試験（記述式）の成績より評価する。60%以上の得点を合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど： 前期は毎週月曜日の15：30－17：00</p> <p>テキスト・教材・参考書など： テキスト：水圏環境（有田正光他著：東京電機大学出版局）， 参考書：川のなんでも小事典（土木学会関西支部編：講談社ブルーバックス）</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言： 水環境に関連する社会情勢，世論，法令などがめまぐるしく変化するので，授業で取り上げる内容について学生諸君自らも情報収集につとめ高い環境倫理観を醸成することを期待する。</p>				

都市環境工学 Urban Environment Engineering																					
学期区分	3年前期	区分・単位	選択必修（環境系） 2単位																		
担当教員	杉山郁夫 (Ikuro SUGIYAMA)																				
<p>キーワード： 地球環境問題，社会資本整備，生活の質，市民参加，デザイン能力，持続可能性</p> <p>授業の目標： 現代の都市は，人工の減少・経済の低成長，地球環境問題の深刻化，景観・日照等に関わる事業者と市民のコンフリクトなど様々な問題を抱えており，建設系技術者にとって，新たな都市環境を創造するための「基礎知識と発想力に基づくデザイン能力」が必要となっている。本講義では，都市環境問題の歴史的経緯，社会資本整備の現状および今後のあり方，生活の質の評価手法などについての理解を深め，将来のあるべき都市およびその実現方策を提案することのできる「発想力とデザイン能力」を磨くことを目的とする。</p> <p>学生の学習目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 地球環境問題および都市発展についての理解 ② 社会資本整備の方向性とその評価手法についての理解 ③ 市民参加と土地利用コンフリクトの現状についての理解 ④ 持続可能な都市のあり方についての考察 ⑤ 以上①-⑤を総合したデザイン能力の育成 <p>授業の概要：</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 33%;">1. 20世紀の都市問題</td> <td style="width: 33%;">2. 都市発展の歴史</td> <td style="width: 33%;">3. 現代日本の都市問題</td> </tr> <tr> <td>4. 環境経済学の基礎</td> <td>5. 人工減少化の社会資本整備（Ⅰ）</td> <td>6. 人工減少化の社会資本整備（Ⅱ）</td> </tr> <tr> <td>7. 「生活の質」指標による社会資本整備評価方法（Ⅰ）</td> <td>8. 「生活の質」指標による社会資本整備評価方法（Ⅱ）</td> <td></td> </tr> <tr> <td>9. 事業者と市民のコンフリクト事例</td> <td>10. テーマ研究（Ⅰ）</td> <td></td> </tr> <tr> <td>11. テーマ研究（Ⅱ）</td> <td>12. テーマ研究（Ⅲ）</td> <td>13. テーマ研究（Ⅳ）</td> </tr> <tr> <td>14. テーマ研究（Ⅴ）</td> <td>15. 発表会</td> <td></td> </tr> </table> <p>関連する学習・教育目標の項目： (D), (G)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け： 環境系科目で希望者が3学年に履修。特に，都市環境について扱っている。</p> <p>授業の進め方： 講義はパワーポイントを用いて分かりやすく進める。講義の最後にグループ別にそれぞれのテーマを設定し，今後の都市のあり方についてグループ間のディベートを通じて知識を深める。なお，本講義は，夏期休暇中の集中講義とする。</p> <p>評価の方法と基準： 講義中における論議の参加程度（40%），および，各グループ別のテーマ研究成果（60%）に基づいて成績を判定する。総合点数が60%以上の場合を合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど： 非常勤講師なので質問等はメール（sugiyama@nikken.co.jp）にて受け付ける。</p> <p>テキスト・教材・参考書など： 必要に応じて講義中に資料を配布する。</p>				1. 20世紀の都市問題	2. 都市発展の歴史	3. 現代日本の都市問題	4. 環境経済学の基礎	5. 人工減少化の社会資本整備（Ⅰ）	6. 人工減少化の社会資本整備（Ⅱ）	7. 「生活の質」指標による社会資本整備評価方法（Ⅰ）	8. 「生活の質」指標による社会資本整備評価方法（Ⅱ）		9. 事業者と市民のコンフリクト事例	10. テーマ研究（Ⅰ）		11. テーマ研究（Ⅱ）	12. テーマ研究（Ⅲ）	13. テーマ研究（Ⅳ）	14. テーマ研究（Ⅴ）	15. 発表会	
1. 20世紀の都市問題	2. 都市発展の歴史	3. 現代日本の都市問題																			
4. 環境経済学の基礎	5. 人工減少化の社会資本整備（Ⅰ）	6. 人工減少化の社会資本整備（Ⅱ）																			
7. 「生活の質」指標による社会資本整備評価方法（Ⅰ）	8. 「生活の質」指標による社会資本整備評価方法（Ⅱ）																				
9. 事業者と市民のコンフリクト事例	10. テーマ研究（Ⅰ）																				
11. テーマ研究（Ⅱ）	12. テーマ研究（Ⅲ）	13. テーマ研究（Ⅳ）																			
14. テーマ研究（Ⅴ）	15. 発表会																				

都市安全工学 Urban Disaster Prevention Engineering																			
学期区分	3年前期	区分・単位	選択必修 2単位																
担当教員	沖村 孝 (Takashi OKIMURA), 加藤正司 (Shoji KATO)																		
<p>キーワード: 都市防災, 豪雨災害, 地震災害, 防災空間, 防災と減災, 地盤災害</p> <p>授業の目標: 我が国と自然災害の関係を理解させ, 特に都市における自然災害の特徴と現状の対策について理解させる。更に, 今後の都市災害対策の手法とあり方について理解を深めることにより, 土木事業の果たすべき役割を理解させる。</p> <p>学生の学習目標:</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 都市災害の特徴の理解 ② 豪雨災害の原因と対策手法の理解 ③ 地震災害の特徴と対策手法の理解 ④ 阪神・淡路大震災以降の都市防災の考え方の理解 ⑤ 地盤災害のメカニズムと予測および対策手法の理解 <p>授業の概要:</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 50%;">1. 国土の特徴と災害</td> <td style="width: 50%;">9. 土砂災害のメカニズム</td> </tr> <tr> <td>2. 豪雨災害の原因と対策 (洪水)</td> <td>10. 土砂災害の予測手法</td> </tr> <tr> <td>3. 豪雨災害の原因と対策 (土砂災害)</td> <td>11. 土砂災害の調査</td> </tr> <tr> <td>4. 兵庫県南部地震による被害の概要</td> <td>12. 土砂災害の対策手法</td> </tr> <tr> <td>5. 地震災害の特徴と対策</td> <td>13. 液状化のメカニズム</td> </tr> <tr> <td>6. 土砂災害対策新法の目的と概要</td> <td>14. 液状化の対策手法</td> </tr> <tr> <td>7. 都市防災の特徴</td> <td>15. 今後の都市防災のあり方</td> </tr> <tr> <td>8. 土砂災害の種類</td> <td></td> </tr> </table> <p>関連する学習・教育目標の項目: (B), (C), (D), (G), (H)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け: 環境系科目で希望者が3学年に履修。</p> <p>授業の進め方: 講義中は OHP, スライド, パワーポイント等を活用して, 過去の災害事例をその原因を分かりやすく説明する。特に, 都市災害の特徴と阪神・淡路大震災以降の新しい防災の考え方を紹介し, 受講者自身が都市防災という課題を探求する契機を提供する。</p> <p>評価の方法と基準: 出席回数と期末試験によって評価する。出席回数70%未満のものは不合格, 出席回数70%以上でかつ期末試験点数60点以上を合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど: 沖村: 前期講義開講日, 9:00-10:20 (都市安全研究センター研究棟 2F, 沖村教授室) 加藤: 前期講義開講日, 9:00-10:20 (1W 棟 2F, 1W-206 加藤准教授室)</p> <p>テキスト・教材・参考書など: 教材: 教科書は特に指定せず, 関連する教材を講義中に配布する。</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言: 毎年, ニュースとなる豪雨や地震による災害を他人事とせず, 科学者の一人としてその原因と対策を考察する取り組みを期待している。</p>				1. 国土の特徴と災害	9. 土砂災害のメカニズム	2. 豪雨災害の原因と対策 (洪水)	10. 土砂災害の予測手法	3. 豪雨災害の原因と対策 (土砂災害)	11. 土砂災害の調査	4. 兵庫県南部地震による被害の概要	12. 土砂災害の対策手法	5. 地震災害の特徴と対策	13. 液状化のメカニズム	6. 土砂災害対策新法の目的と概要	14. 液状化の対策手法	7. 都市防災の特徴	15. 今後の都市防災のあり方	8. 土砂災害の種類	
1. 国土の特徴と災害	9. 土砂災害のメカニズム																		
2. 豪雨災害の原因と対策 (洪水)	10. 土砂災害の予測手法																		
3. 豪雨災害の原因と対策 (土砂災害)	11. 土砂災害の調査																		
4. 兵庫県南部地震による被害の概要	12. 土砂災害の対策手法																		
5. 地震災害の特徴と対策	13. 液状化のメカニズム																		
6. 土砂災害対策新法の目的と概要	14. 液状化の対策手法																		
7. 都市防災の特徴	15. 今後の都市防災のあり方																		
8. 土砂災害の種類																			

地圏環境工学 Geo-Environmental Engineering																			
学期区分	3年後期	区分・単位	選択必修 2単位																
担当教員	吉田信之 (Nobuyuki YOSHIDA)																		
<p>キーワード: 地球, 地圏, 大深度地下, 環境問題, 廃棄物, 地盤汚染</p> <p>授業の目標: 講義を通して, 地球の成り立ちから順を追って考えることにより「地圏とは何か」からはじめ, 地球環境問題の概要, 大深度地下利用における環境問題, 土(岩)の環境特性並びに地圏環境の二大問題である廃棄物処理・処分・跡地利用や地盤汚染の現状・対策について技術者が果たすべき役割や守るべき倫理観を含めて修得することを目指す。</p> <p>学生の学習目標:</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 地球の生い立ちと地圏の理解, ② 地球・地圏・大深度地下における環境問題の理解, ③ 土(岩)環境特性の理解, ④ 廃棄物問題の理解, ⑤ 地盤汚染問題の理解, ⑥ 土木技術者の果たすべき役割と倫理の理解 <p>授業の概要:</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 50%;">1. 地球と地圏 (1),</td> <td style="width: 50%;">9. 土の環境特性 (2),</td> </tr> <tr> <td>2. 地球と地圏 (2),</td> <td>10. 廃棄物の処理・処分 (1),</td> </tr> <tr> <td>3. 地球と地圏 (3),</td> <td>11. 廃棄物の処理・処分 (2),</td> </tr> <tr> <td>4. 地球環境と地圏環境 (1),</td> <td>12. 埋立地盤の利用と課題,</td> </tr> <tr> <td>5. 地球環境と地圏環境 (2),</td> <td>13. 地盤汚染と対策 (1),</td> </tr> <tr> <td>6. 大深度地下と環境 (1),</td> <td>14. 地盤汚染と対策 (2),</td> </tr> <tr> <td>7. 大深度地下と環境 (2),</td> <td>15. 技術者の役割と倫理</td> </tr> <tr> <td>8. 土の環境特性 (1),</td> <td></td> </tr> </table> <p>関連する学習・教育目標の項目: (A), (B), (C), (D), (H)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け: 環境系科目で希望者が3学年に履修。</p> <p>授業の進め方: 板書を基本に配付資料やOHPを用いて講義を進め, 理解を深めるために小テストを随時行う。また, リポートも課する。</p> <p>評価の方法と基準: 成績評価は, リポート (20%), 小テスト (20%), 定期試験 (60%) で行う。</p> <p>オフィスアワーなど: 毎金曜日 9:00-10:30 (都市安全研究センター 2階 R203)</p> <p>テキスト・教材・参考書など: ・特に教科書は指定しないが, 授業中に参考図書を紹介する。 ・適宜資料を配付する。</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言: ・1回目の講義時に, 科目の概説, 講義の進め方等々について説明する。 ・「市民工学概論」及び「土質力学I及び演習」を修得していることが望ましい。</p>				1. 地球と地圏 (1),	9. 土の環境特性 (2),	2. 地球と地圏 (2),	10. 廃棄物の処理・処分 (1),	3. 地球と地圏 (3),	11. 廃棄物の処理・処分 (2),	4. 地球環境と地圏環境 (1),	12. 埋立地盤の利用と課題,	5. 地球環境と地圏環境 (2),	13. 地盤汚染と対策 (1),	6. 大深度地下と環境 (1),	14. 地盤汚染と対策 (2),	7. 大深度地下と環境 (2),	15. 技術者の役割と倫理	8. 土の環境特性 (1),	
1. 地球と地圏 (1),	9. 土の環境特性 (2),																		
2. 地球と地圏 (2),	10. 廃棄物の処理・処分 (1),																		
3. 地球と地圏 (3),	11. 廃棄物の処理・処分 (2),																		
4. 地球環境と地圏環境 (1),	12. 埋立地盤の利用と課題,																		
5. 地球環境と地圏環境 (2),	13. 地盤汚染と対策 (1),																		
6. 大深度地下と環境 (1),	14. 地盤汚染と対策 (2),																		
7. 大深度地下と環境 (2),	15. 技術者の役割と倫理																		
8. 土の環境特性 (1),																			

上下水道工学 Water Supply and Sewerage					
学期区分	3年後期	区分・単位	選択必修 2単位		
担当教員	松下 眞 (Makoto MATSUSHITA), 浜口哲男 (Tetsuo HAMAGUCHI)				
<p>キーワード: 上水道工学：ライフライン, 上水道, 水資源, 水循環, 水質基準, おいしい水 下水道工学：社会基盤施設, 下水道の目的・意義, 水質環境基準, 高度処理, 水環境・水循環</p> <p>授業の目標: 講義および施設見学をとおして上下水道が社会に果たす役割, 施設の計画・設計・施工・維持管理を理解し, また現在の課題と将来の方向性を認識する。</p> <p>学生の学習目標: 講義および施設見学をとおして上下水道が社会に果たす役割, 施設の計画・設計・施工・維持管理を理解し, また現在の課題と将来の方向性を認識する。</p> <p>授業の概要:</p> <table border="0"> <tr> <td style="vertical-align: top;"> 「上水道工学」 (1) 上水道の計画 (2) 水源および貯水施設 (3) 上水処理方法 (4) 水質基準と水質管理 (5) 送配水施設と水理 (6) 施設の設計・施工 (7) 維持管理技術 </td> <td style="vertical-align: top;"> 「下水道工学」 (1) 下水道の役割・意義 (2) 下水道の基本計画 (3) 下水道の排除方式と課題 (4) 下水道と水質環境基準 (5) 下水道施設の設計・施工 (6) 水処理の方法 (7) 汚泥処理の方法 </td> </tr> </table> <p>関連する学習・教育目標の項目: (D), (G)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け: 環境系科目で希望者が3学年に履修。</p> <p>授業の進め方: テキスト, パワーポイント, OHP, 資料配付により授業を進める。また, 施設の見学を通して, 実際の上下水道システムを理解する。</p> <p>評価の方法と基準: レポート (40%), 定期試験 (60%) の結果を総合して評価し, 60%以上達成したものを合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど: 松下・浜口 (非常勤講師) : 後学期間講義日</p>				「上水道工学」 (1) 上水道の計画 (2) 水源および貯水施設 (3) 上水処理方法 (4) 水質基準と水質管理 (5) 送配水施設と水理 (6) 施設の設計・施工 (7) 維持管理技術	「下水道工学」 (1) 下水道の役割・意義 (2) 下水道の基本計画 (3) 下水道の排除方式と課題 (4) 下水道と水質環境基準 (5) 下水道施設の設計・施工 (6) 水処理の方法 (7) 汚泥処理の方法
「上水道工学」 (1) 上水道の計画 (2) 水源および貯水施設 (3) 上水処理方法 (4) 水質基準と水質管理 (5) 送配水施設と水理 (6) 施設の設計・施工 (7) 維持管理技術	「下水道工学」 (1) 下水道の役割・意義 (2) 下水道の基本計画 (3) 下水道の排除方式と課題 (4) 下水道と水質環境基準 (5) 下水道施設の設計・施工 (6) 水処理の方法 (7) 汚泥処理の方法				
<p>テキスト・教材・参考書など:</p> <ol style="list-style-type: none"> 「上水道工学」川北和徳監修 森北出版 [新版下水道工学] 松本順一郎・西堀清六 朝倉書店 現地見学は見学先の都合により, 日時・場所は未定, 第1回目の授業時にスケジュール表を渡す。 					

シビックデザイン Civic Design																	
学期区分	3年後期	区分・単位	選択必修 2単位														
担当教員	秦 恒夫 (Tsuneo HATA)																
<p>キーワード： 公共土木施設，土木構造物，景観，美観，地域環境，デザイン</p> <p>授業の目標： 講義および実技課題をとおして公共土木施設の計画・設計における多面的観点（地域の歴史・文化，環境および美観・景観など）の重要性を理解し，実践面での基礎知識を身につけさせる。</p> <p>学生の学習目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 公共土木施設に求められるシビック・デザインの本質の理解， ② 景観および造形・色彩等に関する基礎知識の理解， ③ 具体的な土木施設の景観の特徴，デザインの要点などの理解 ④ 具体的な土木施設の事例観察 <p>授業の概要：</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 50%;">1. 概論Ⅰ（シビックデザインの歴史と本質），</td> <td style="width: 50%;">8. 橋梁のデザインⅢ，</td> </tr> <tr> <td>2. 概論Ⅱ（シビックデザインの実際），</td> <td>9. 水辺空間のデザイン，</td> </tr> <tr> <td>3. デザインの基本Ⅰ（景観とものの見え方），</td> <td>10. 道路空間のデザイン，</td> </tr> <tr> <td>4. デザインの基本Ⅱ（景観の予測手法と造形の基本），</td> <td>11. 都市のデザイン，</td> </tr> <tr> <td>5. デザインの基本Ⅲ（色彩と光）</td> <td>12. ストリートファニチュア，</td> </tr> <tr> <td>6. 橋梁のデザインⅠ，</td> <td>13. ダムのデザイン</td> </tr> <tr> <td>7. 橋梁のデザインⅡ，</td> <td></td> </tr> </table> <p>関連する学習・教育目標の項目： (D)，(E)，(H)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け： 環境系科目で希望者が3学年に履修。</p> <p>授業の進め方： 講義中はパワーポイントによるプレゼンテーションなどを主体に分かりやすく説明する。また，簡単な作画実技を行い，プレゼン技術の基礎テクニックと構造デザインの感覚を身につける。尚，講義内容の理解に役立つ事例を紹介し，各自で積極的に見学・観察を行うよう指導する。</p> <p>評価の方法と基準： 出席回数，定期試験によって評価する。出席回数70%未満のものは不合格，出席回数70%以上で且つ定期試験点数60%以上を合格とする。</p> <p>オフィスアワーなど： 秦（非常勤講師）：後期期間講義日，15：10－16：40（1W棟3F，1W302 交通計画資料室）</p> <p>テキスト・教材・参考書など：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. テキストは毎回配布する。 <p>参考書として 景観用語事典（景観デザイン研究会 彰国社）， 景観と意匠の歴史的展開（馬場俊介 信山社サイテック）， 橋梁デザインノート（日本道路協会 丸善）</p> <p>その他履修上の注意事項や学習上の助言： 講義内容の理解に役立つ事例を紹介するので，各自で積極的に見学・観察を行うこと。</p>				1. 概論Ⅰ（シビックデザインの歴史と本質），	8. 橋梁のデザインⅢ，	2. 概論Ⅱ（シビックデザインの実際），	9. 水辺空間のデザイン，	3. デザインの基本Ⅰ（景観とものの見え方），	10. 道路空間のデザイン，	4. デザインの基本Ⅱ（景観の予測手法と造形の基本），	11. 都市のデザイン，	5. デザインの基本Ⅲ（色彩と光）	12. ストリートファニチュア，	6. 橋梁のデザインⅠ，	13. ダムのデザイン	7. 橋梁のデザインⅡ，	
1. 概論Ⅰ（シビックデザインの歴史と本質），	8. 橋梁のデザインⅢ，																
2. 概論Ⅱ（シビックデザインの実際），	9. 水辺空間のデザイン，																
3. デザインの基本Ⅰ（景観とものの見え方），	10. 道路空間のデザイン，																
4. デザインの基本Ⅱ（景観の予測手法と造形の基本），	11. 都市のデザイン，																
5. デザインの基本Ⅲ（色彩と光）	12. ストリートファニチュア，																
6. 橋梁のデザインⅠ，	13. ダムのデザイン																
7. 橋梁のデザインⅡ，																	

卒業研究 Undergraduate Thesis Project			
学期区分	通年	区分・単位	必修 10単位
担当教員	市民工学全教員		
<p>キーワード： 問題発見，研究企画，専門知識の応用，研究実行，論文作成，コミュニケーション，プレゼンテーション，技術英語力</p> <p>授業の目標： 所属する研究分野における高度な専門知識を習得するとともに，これらの知識，技術を用いて研究を行い，その成果を一定形式の卒業論文としてまとめる。また，その過程において，多面的思考，技術者倫理，現象把握・解析，ツール応用力・創造的思考，総合的課題解決，コミュニケーション，技術英語力，自己学習・継続学習，計画的実務遂行，自己管理といった多様な能力を身に付けさせる。</p> <p>学生の学習目標： 所属する研究分野の研究を通じて ①問題発見能力，②研究企画能力，③専門知識の応用能力，④研究の実行能力，⑤論文作成能力，⑥技術英語力，⑦コミュニケーション能力，⑧プレゼンテーション能力 を身に付ける。</p> <p>授業の概要： 所属する研究分野により異なる。各研究分野の内容は研究グループ配属ガイダンスで説明するが，建設学科土木系ホームページなどにも公開している。</p> <p>関連する学習・教育目標の項目： (A)，(B)，(C)，(D)，(E)，(F)，(G)，(I)，(J)，(K)，(L)</p> <p>カリキュラムの中の位置付け： 市民工学共通科目で，卒業研究着手要件を満たした学生が4年次に履修する。</p> <p>授業の進め方： 指導教員の指導のもとに相談・討議しながら進める。</p> <p>評価の方法と基準： 各研究室において月々の取り組みや進行状況を学生と指導教員がチェックし，研究への取り組みの状況や研究に対する意欲などを定期的に評価する。学生は，毎月，卒業研究日誌を指導教員に提出し，研究遂行についてのチェックを受けるとともに，学習教育目標毎の必要時間数が満足されるように，指導教員から指示を受けるものとする。評価は，各研究室における個別指導を含むゼミおよび中間発表（30%），卒業研究発表（30%），卒業論文（40%）として行い，60%以上を合格とする。なお，ゼミの評価にあたっては学習・教育目標ごとの達成度を考慮している。</p> <p>オフィスアワーなど： 随時</p>			
<p>テキスト・教材・参考書など： 必要に応じて，所属する研究室において示される。</p>			

V 電氣電子工学科

1. 教育の目指すもの

【教育・研究の目標】

近年、電気電子工学の対象とする学問・技術は、電力、新エネルギー、交通、自動車、情報、通信、海洋、航空、宇宙、医療、環境、安全といった最先端分野から、身近な家電・民生分野にいたるまでの広範囲な領域において急速に発展している。そのため、対象とする研究領域もますます拡大し、他の学問分野との境界領域での研究・技術開発が必要とされ、いわゆる“学際化”が進んでいる。また一方では、既存の学問分野の成果のみでは対応できない、ナノ材料・エレクトロニクス、情報ネットワーク・IT、超大容量コンピュータ・人工知能、メカトロニクス、バイオエレクトロニクス等の分野においては、研究・開発の専門化・高度化が進んでいる。この様なトレンドを念頭におき、電気電子工学科では、次世代の電気電子工学の新しい展開に柔軟に対応できる高度な専門基礎学力を持ち、関連する異分野での科学と技術にも十分な興味と理解を持つ、学際的、かつ創造性豊かな人材を育成することを目指して教育を推進している。一方、研究機関としての大学という面では、主要な基礎研究分野において、世界的水準の研究を遂行し、その成果をはじめとする先端的情報の発信基地として活発な活動を行っている。さらに、大学の中心的な使命として、電気電子工学の学問分野の発展、およびその学問的体系化・蓄積を目指し、将来を担う若手研究者・教育者の育成に努めている。

【教育・研究組織と分野】

電子物理

メゾスコピック材料学、フォトニック材料学、量子機能工学、ナノ構造エレクトロニクス、電磁エネルギー物理学の各研究分野があり、電子・光子現象の工学的応用の基礎となる固体物理学、表面物理学、光・電子物性、電子材料工学、その応用としての集積回路デバイス、光エレクトロニクスデバイス、量子効果デバイス、ナノ材料・ナノデバイス等の材料およびデバイスの物理と設計・製作、電気エネルギーシステムの高効率化や安定化のための電気エネルギー変換システム制御理論・技術、プラズマエネルギー応用機器や超電導電力システムの設計・制御等に関連した教育・研究を行っている。

電子情報

集積回路情報、計算機工学、通信情報、アルゴリズム、知的学習論の各教育研究分野があり、IT技術・電子情報通信システムの基本要素となる回路技術およびアルゴリズム、計算機援用システム設計（CAD）、情報の伝送・処理・変換に関する技術・理論としての計算機ハードウェア、ユビキタスネットワーク、ウェアラブルコンピュータ、パターン認識、システム最適化の理論と応用等、幅広い教育・研究を行っている。

【カリキュラムの特徴】

前述の教育・研究の目標を達成すべく、電気電子工学の学問・技術分野の基礎から応用まで調和の取れたカリキュラムを編成している。開講されている科目を分類すると、1，2年次には、電気電子工学の“専門基礎科目”として、物理、数学、化学分野の基礎科目が開講され、これと並行して、1～3年次に、自主的な学習法を体得することを目的とした少人数教育による電気電子工学導入ゼミナールをはじめ、“専門科目”として、電磁気学、電気回路論、電子回路、プログラミング演習、電気電子工学実験などが開講されている。更に、2，3年次になると“専門応用科目”として、量子物理学、固体物性工学、半導体電子工学などの電子物理学系科目と、情報理論、計算機工学、データ構造とアルゴリズムなどの電子情報工学系科目、および電力工学、電気機器、制御工学などの電気エネルギー制御工学系科目が開講されている。その他、電気主任技術者などの資格取得のための科目も開講されている。

2. 構成と教育組織

講座名	教育研究分野	教授 (室番)	准教授 (室番)	助教・助手 (室番)	技術職員・事務職員等 (室番)	
電子物理	メゾスコピック材料学	林 真至 (自201)	森脇 和幸 (自202)		伊地知武吉 (2E-207) 北山 良和 (2E-110)	富澤 佳苗 (2E-302) 横山 千帆 (2E-302)
			藤井 稔 (自208)			
		浦野 俊夫 (B-201)				
	フォトニック材料学	和田 修 (B-204)	喜多 隆 (B-206)	小島 磨 (B-105)		
	量子機能工学		青木 和徳 (B-301)			
	ナノ構造エレクトロニクス	小川 真人 (B-305)	土屋 英昭 (B-202)	相馬 聡文 (B-208)		
電磁エネルギー物理学	八坂 保能 (B-304)	竹野 裕正 (B-203)	米森 秀登 (2E-111)			
			中本 聡 (2E-111)			
		本間 康浩 (B-404)				
電子情報	集積回路情報	沼 昌宏 (B-406)	黒木 修隆 (B-405)		原田 和男 (2E-307)	
	計算機工学	塚本 昌彦 (B-205)			土居原知良 (2E-407)	
	通信情報	森井 昌克 (B-303)	桑門 秀典 (B-302)	栗林 稔 (2E-307)	山中 和彦 (2E-203)	
	アルゴリズム	増田 澄男 (B-402)		山口 一章 (B-308)		
	知的学習論	阿部 重夫 (自303)	小澤 誠一 (自302)			

自：自然科学総合研究棟3号館(西)

3. 履修科目一覧表

専門科目

(◎印は必修, ○印は選択必修, 無印は選択科目を示す)

記号	授業科目	単位数	毎週の授業時間								担当教員	備考	
			1		2		3		4				
			前	後	前	後	前	後	前	後			
	基礎解析Ⅰ	2	2									U	全学共通授業科目
	基礎解析Ⅱ	2		2								U	
	微積分演習	1		2								U	
	線形代数学Ⅰ	2	2									U	
	線形代数学Ⅱ	2		2								U	
	数理統計学	2			2							U	
	物理学C1	2	2									U	
	物理学C2	2		2								U	
	物理学実験	2		4								U	
	素材化学Ⅰ	2	2									U	
	素材化学Ⅱ	2		2								U	
	図学	2	2									U	
	数学演習	1	2									T	
	離散数学	2	2									T	
	複素関数論	2			2							T	
	常微分方程式論	2			2							T	
	偏微分方程式	2					2					T	
	数値解析	2						2				T	
	フーリエ解析	2				2						T	
	ベクトル解析	2		2								T	
	工業所有権法	1								1	山下・石井	T	
	複素関数論演習	1			1						栗林・相馬	T	
	常微分方程式論演習	1			1						栗林・相馬	T	
◎	電気電子工学導入ゼミナール	2	2								全教員	T	
◎	電気回路論Ⅰ	2		2							森脇(和)	T	
○	電気回路論Ⅱ	2			2						和田	T	
	電気回路論演習	1		2							森脇(和)・黒木・米森	T	
◎	電子回路	2				2					沼	T	
◎	電磁気学Ⅰ	2			2						喜多	T	
○	電磁気学Ⅱ	2				2					和田	T	
	電磁気学演習	1			2						藤井・土屋	T	
	電気計測	2				2					浦野・青木・本間	T	
	情報数学	2		2							寺西	T	
	論理数学	2			2						塚本	T, S	
○	量子物理工学Ⅰ	2			2						小川	T	
	量子物理工学Ⅱ	2				2					藤井	T, P	
	数理物理工学	2					2				土屋	T, P	
○	固体物性工学Ⅰ	2				2					林(真)	T	

履修科目一覧表

専門科目

(◎印は必修, ○印は選択必修, 無印は選択科目を示す)

記号	授 業 科 目	単 位 数	毎 週 の 授 業 時 間								担 当 教 員	備 考
			1		2		3		4			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
	固 体 物 性 工 学 II	2					2				林 (真)	T, P
	電 気 電 子 材 料 学	2					2				青木	T, P, E
	光 電 磁 波 論	2					2				未定	T, P
○	半 導 体 電 子 工 学 I	2					2				小島, 相馬	T
	半 導 体 電 子 工 学 II	2					2				小川 (真)	T, P
	集 積 回 路 工 学	2					2				高田	T, P, S
	デ ィ ジ タ ル 情 報 回 路	2					2				沼	T, S
	情 報 伝 送 I	2					2				森井	T
	情 報 伝 送 II	2					2				森井	T, S
○	情 報 理 論	2					2				桑門	T, S
○	計 算 機 工 学 I	2				2					塚本	T
	計 算 機 工 学 II	2					2				未定	T, S
	言 語 理 論 と オ ー ト マ ト ン	2					2				未定	T, S
○	デ ー タ 構 造 と アル ゴ リ ズ ム I	2			2						増田	T
	デ ー タ 構 造 と アル ゴ リ ズ ム II	2					2				増田	T, S
	応 用 電 波 工 学	2							2		王前・小林 (正)	T, P, S
	応 用 通 信 工 学	2						2			藤江	T, S
○	制 御 工 学 I	2				2					阿部	T
	制 御 工 学 II	2					2				阿部	T, S, E
○	電 気 機 器 I	2			2						小澤	T
	電 気 機 器 II	2				2					小澤	T, S, E
○	電 力 工 学 I	2					2				八坂	T
	電 力 工 学 II	2						2			竹野	T, S, E
	高 電 圧 放 電 工 学	2						2			八坂	T, P, E
	英 語 に よ る プ レ ゼ ン テ ー シ ョ ン	2	*		*		*		*		J.Caragata	T (注3)
	学 外 実 習	1					*	*			各教員	T (注4)
	電 気 機 械 設 計 論	1							1		深山	T, E
	電 気 製 図	1							3		飯野	T, E
	電 力 応 用	2						2			中村 (肇)・小山	T, E
	電 気 法 規 ・ 施 設 管 理	1							1		中川	T, E
◎	プ ロ グ ラ ミ ン グ 演 習	1		2							鈴木・桑門・山口	T
◎	電 気 電 子 工 学 実 験 I 及 び 安 全 指 導	2				4					全教員	T
◎	電 気 電 子 工 学 実 験 II	2					6				全教員	T
◎	電 気 電 子 工 学 実 験 III	2						6			全教員	T
◎	電 気 電 子 工 学 実 験 IV	1							3		各教員	T
◎	卒 業 研 究	10							10	20	各教員	T
	そ の 他 必 要 と 認 め る 専 門 科 目											その都度定める

週授業時間数

		時間数	1		2		3		4		備 考
			前	後	前	後	前	後	前	後	
◎	必修	59	2	4	2	6	6	6	13	20	
○	選択必修	22			8	8	6				
	選択 U	26	10	14	2						(注6)
	T	76	6	6	10	8	16	22	7	1	
	計	183	18	24	22	22	28	28	20	21	

単位数

		単位数	1		2		3		4		備 考
			前	後	前	後	前	後	前	後	
◎	必修	26	2	3	2	4	2	2	1	10	(注5)
○	選択必修	22			8	8	6				
	選択 U	23	10	11	2						(注6)
	T	72	5	5	9	8	16	23	5	1	
	計	143	17	19	21	20	24	25	6	11	

(注1) ◎印は必修科目，○印は選択必修科目を示す。その他は選択科目である。

(注2) 備考欄の記号について

P (電子物理工学系)，S (電子情報工学系)，E (電気エネルギー制御工学系) は、各系を主として履修しようとする学生にとって必修的に要望される科目であることを示す。

Uは全学共通授業科目中の専門科目であることを示し，Tはその他の専門科目を示す。

(注3) 「英語によるプレゼンテーション」は*印の1～4年前期(2時間)に開講するので，どの学年で履修してもよい。

(注4) 「学外実習」は*印の3年前・後期に随時開講する。

(注5) 卒業研究は4年後期に10単位として表に掲載している。

(注6) 「英語によるプレゼンテーション」は1年前期に2単位(2時間)として表に掲載している。「学外実習」の単位数は3年後期に1単位として表に掲載している。また，週授業時間数の表には算入していない。

4. 履修上の注意

- (1) 履修要領
- (a) 総準備単位数143単位（全学共通授業科目の教養原論，外国語科目，健康・スポーツ科学科目，および情報科目を含まない）。
- (b) 学生が1年間に履修登録可能な単位数は，工学部規則に規定されている単位数を上限とする。
- (c) 学生の卒業に必要な単位数は最低128単位とする（注1）。その内訳は，次の通り。

教養原論	16単位
外国語科目	
外国語第1（英語）	6単位
外国語第2	4単位
情報科目	
情報基礎	1単位
健康・スポーツ科学科目	
健康・スポーツ科学実習Ⅰ	1単位
専門科目	
必修	26単位（卒業研究10単位を含む）
選択（注2）	74単位（専門科目中の選択必修18単位以上を含む）

- (2) 内規
- (a) 神戸大学工学部規則第7条第2項に規定する卒業研究の履修に必要な単位数は，上記(1)(c)に規定する卒業に必要な単位中の最低109単位とする（但し，4年次開講科目の単位はここに含まない）（注1）。その内訳は，次の通り。

教養原論	16単位
外国語科目	
外国語第1（英語）	6単位
外国語第2	4単位
情報科目	
情報基礎	1単位
健康・スポーツ科学科目	
健康・スポーツ科学実習Ⅰ	1単位
専門科目	
必修	15単位
選択（注2）	66単位（専門科目中の選択必修16単位以上を含む）

（注1）「学外実習」は，卒業に必要な単位数128と，卒業研究の履修に必要な単位数109には含めない。

（注2）専門科目の「必修」と「選択必修」に算入していない専門科目（※1），及び他学部又は他学科の専門科目中，当学科が認めたものは参入される。また，全学共通授業科目の選択科目（外国語科目，健康・スポーツ科学科目，情報科目）からは最大14単位（※2）まで算入される。

（※1）3．履修科目一覧表の専門科目に記載されている全学共通授業科目12科目，及び工学部共通科目9科目を含む。「学外実習」は含まない。

（※2）英語アドバンストコースは3単位まで，外国語第2は4単位まで（但し，独語ⅢA・ⅢB，仏語ⅢA・ⅢB，中国語ⅢA・ⅢB，露語ⅢA・ⅢBのいずれかから2単位以内，独語ⅣA・ⅣB，仏語ⅣA・ⅣB，中国語ⅣA・ⅣB，露語ⅣA・ⅣBのいずれかから2単位以内），外国語第3（外国語第2で選択した言語以外のもの）は2単位まで，健康・スポーツ科学科目（実習Ⅱ，講義）は3単位まで，情報科目（情報科学）は2単位まで算入される。

5. 各専門科目の関係

1 年		2 年		3 年		4 年	
前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期
基礎解析 I 線形代数学 I 物理学 C 1 素材化学 I 図 学	基礎解析 II 線形代数学 II 物理学 C 2 物理学実験 素材化学 II 微積分演習	数理統計学					
離散数学 数学演習	ベクトル解析	複素関数論 複素関数論演習 常微分方程式論 常微分方程式論演習	フーリエ解析	偏微分方程式	数値解析		工業所有権法
[共通の科目] ◎電気電子工学導入ゼミナール *英語によるプレゼンテーション	◎プログラミング演習 ◎電気回路論 I 電気回路論演習 情報数学	○電気回路論 II ◎電磁気学 I 電磁気学演習 *英語によるプレゼンテーション	◎電子回路 ○電磁気学 II 電気計測 ◎電気電子工学実験 I 及び安全指導	◎電気電子工学実験 II *学外実習 *英語によるプレゼンテーション	◎電気電子工学実験 III *学外実習	◎卒業研究 ◎電気電子工学実験 IV *英語によるプレゼンテーション	◎卒業研究
[電子物理工学系科目]		○量子物理工学 I	量子物理工学 II ○固体物性工学 I	数理物理工学 固体物性工学 II ○半導体電子工学 I	光電磁波論 電気電子材料学 半導体電子工学 II 集積回路工学		
[電子情報工学系科目]		論理数学 ○データ構造とアルゴリズム I	○計算機工学 I	計算機工学 II デジタル情報回路 データ構造とアルゴリズム II 情報伝送 I ○情報理論	言語理論とオートマトン 情報伝送 II 応用通信工学	応用電波工学	
[電気エネルギー制御 工学系科目]		○電気機器 I	電気機器 II ○制御工学 I	制御工学 II ○電力工学 I	電力工学 II 高電圧放電工学 電力応用	電気機械設計論 電気製図 電気法規・施設管理	

◎印は必修科目，○印は選択必修科目，無印は選択科目を示す。 *印「学外実習」は卒業単位に含まれない。 *印「英語によるプレゼンテーション」は1～4年のどの学年で履修してもよい。

複素関数論演習 Exercises on Complex Functions				
学期区分	前期	区分・単位	選択	1単位
担当教員	助教 栗林 稔 M. Kuribayashi, 助教 相馬 聡文 S. Souma			
<p>授業の目的： 複素関数論は、フーリエ解析、常微分方程式論、偏微分方程式論などに用いられる解析学の基礎であり、工学の分野では極めて重要な役割を担うものである。特に、電磁気学や電気回路論をはじめとする電気電子工学科の専門科目を理解する上で必須の知識であり、十分に身につけておく必要がある。そこで、本演習では、並行して開講されている複素関数論の理解を深め、基礎的な知識を確実に修得することを目的とする。</p> <p>到達目標： 実際に自ら問題を解くことによって、複素関数論で学んだ内容の理解を確実なものとし、一変数複素関数の微分積分学に関する基礎的事項を実際に応用する力をつける。</p> <p>授業内容： 複素関数論の内容に関する演習を行う。予定内容は以下の通り。 第1回 演習方法など受講に関する一般的な説明 第2回 複素数と複素平面／複素数列と複素級数 第3回 複素関数の極限／正則関数／Cauchy-Riemann の方程式 第4回 整級数／指数関数と三角関数／対数関数とべき関数 第5回 複素積分／Cauchy の積分公式 第6回 Taylor 展開／Laurent 展開 第7回 留数／実定積分の計算</p> <p>授業の進め方： 常微分方程式論演習と隔週で実施する。可能な限り複素関数論の講義の順を追って、配布した演習問題から解答すべき問題を指示する。受講者は幾つかのグループに分かれて授業時間内に指示された問題を解く。授業終了30分前に解答を板書し、その解答を見て受講者は自分の解答を訂正し授業の終わりに答案を提出する。</p> <p>成績評価方法： 出席状況 (50%)、授業中の態度／答案 (25%)、授業中に指示したレポートの内容 (25%) を見て総合的に評価する。</p> <p>履修上の注意： 基礎解析 I, II, 線形代数学 I, II の知識を前提とする。複素関数論、常微分方程式論を履修していること。</p> <p>ホームページ： http://www.2.kobe-u.ac.jp/~kminoru/exercises/lecture.htm</p>				
<p>教科書・参考文献など： 演習問題は各講義毎に配布する。参考書としては、複素関数論で使用する教科書、サイエンスライブラリ演習数学7「演習 応用解析」(サイエンス社)、高木貞次「解析概論」(岩波書店) など。 授業で指定するホームページも適宜参照すること。</p> <p>学生へのメッセージ： (1) 遅刻をしないように。 (2) 授業中の私語は厳禁。 (3) まず初めに自分で考えることが大切です。いきなり友達や TA に正解を聞かないように。</p>				

常微分方程式論演習 Exercises on Differential Equations				
学期区分	前期	区分・単位	選択	1単位
担当教員	助教 栗林 稔 M. Kuribayashi, 助教 相馬 聡文 S. Souma			
<p>授業の目的： 工学の対象となる力学系や電気回路など多くのシステムは、常微分方程式によってモデル化され、その動的な振舞いは、その常微分方程式によって数学的に記述される。そこで、本演習では工学の基礎的な問題を解決するために必要な数学分野である微分方程式論を修得し、問題を解くことによって理解を深め、工学における現象と関連づけて活用できる応用能力を養うことを主目的とする。特に、1階線型微分方程式、2階線型微分方程式、連立微分方程式などの解法と解の性質とを電気回路とのアナロジー（類似性）を通して学ぶ。</p> <p>到達目標： 1階定係数線型微分方程式、2階定係数線型微分方程式は電気回路（例：CR回路、LCR回路、共振回路、分布定数線路）、制御（例：一次系、二次系）、通信（例：電信方程式）、物性（例：拡散方程式）との結びつきで極めて重要なので、これらの微分方程式を確実に解き、解の性質を理解することを目標とする。微分方程式は数学の一分野を形成するばかりではなく、自然現象を論理的かつ定量的に理解するための言語の役割を果たし、物理学・工学など科学の諸分野に広く応用されるので、厳密に学習しておくことが必要である。</p> <p>授業内容： 線型システムの振る舞いを記述するために必要となる常微分方程式の性質とその解法について、具体的な例題について各回ごとに演習を行う。</p> <p>第1回 1階の常微分方程式： 変数分離型・同次型・非同次型線型方程式・定数変化法</p> <p>第2回 非正規1階常微分方程式及び特殊な型</p> <p>第3回 完全微分方程式－積分因子</p> <p>第4回 ベルヌーイ・リカッチ型</p> <p>第5回 2階線型方程式、高階常微分方程式</p> <p>第6回 定係数n階線型常微分方程式・演算子法</p> <p>第7回 連立型常微分方程式</p> <p>授業の進め方： 複素関数論演習と隔週で実施する。可能な限り常微分方程式論の講義の順を追って、配布した演習問題から解答すべき問題を指示する。受講者は幾つかのグループに分かれて授業時間内に指示された問題を解く。授業終了30分前に解答を板書し、その解答を見て受講者は自分の解答を訂正し授業の終わりに答案を提出する。</p> <p>成績評価方法： 出席状況（50%）、授業中の態度／答案（25%）、授業中に指示したレポートの内容（25%）を見て総合的に評価する。</p> <p>履修上の注意： 基礎解析Ⅰ、Ⅱ、線型代数学Ⅰ、Ⅱの知識を前提とする。 複素関数論、常微分方程式論を同時に履修していること。 関連授業科目 ベクトル解析、フーリエ解析、偏微分方程式、数値解析</p> <p>ホームページ： http://www.2.kobe-u.ac.jp/~kminoru/exercises/lecture.htm</p>				
<p>教科書・参考文献など： 演習問題：各講義毎に配布する。 参考書：微分方程式入門、南部隆夫著、朝倉書店 常微分方程式、E.クライツィグ著、培風館 斎藤三郎他共著、理工系 微分方程式の解法、昭晃堂 木村俊房著、常微分方程式の解法、培風館 授業で指定するホームページも適宜参照すること。</p> <p>学生へのメッセージ： (1) 遅刻をしないように。 (2) 熱心に聴講する人を邪魔することのないように授業中の私語は厳禁。 質問はティーチングアシスタントに聞いてよい。 (3) ノートは自分専用。自分で学習したことをまとめておくことが重要である。 (4) 手に学ばせること。微分方程式をみたら「ひとりで手が動いていた」という状態が望まれる。</p>				

電気電子工学導入ゼミナール Introductory Seminar of Electrical and Electronic Engineering			
学期区分	前期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	電気電子工学科 全教員		
<p>授業の目的： 自分からテーマを模索し自ら研究するスタイルを学ぶことにより，電気電子工学科における学生の基本的な勉学姿勢を習得する。</p> <p>到達目標： 電気電子工学の歴史および工学倫理を理解し，技術者として身につけるべき課題探索能力，問題解決能力，プレゼンテーション能力の素養を養うことを目標とする。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 講義：大学生活の心得，自由研究ガイダンス 2. 講義：電気電子工学の歴史 3. 講義：工学倫理 4. 自由研究（複数時間実施） 5. ポスターセッションによる発表会 6. 総括 <p>授業の進め方： 内容1～3，6は講義形式で行う。内容4は割り当てられたグループを単位として，自らテーマを探索し，調査・研究を行う自由研究である。グループごとに自由研究の成果を10枚程度のレポートにまとめ，担当教員へ提出すること。自由研究の進め方について，毎回の授業時間に担当教員の指導を受けること。また，レポートのまとめ方やポスターセッションでの発表方法などについても指導を仰ぐこと。なお，最後の授業時に，発表会において高い評価を受けたグループを表彰する。</p> <p>成績評価方法： 本授業の成績は，講義と自由研究の得点を以下のように配分し，総合的に評価する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 講義 20点（講義担当教員から成績を集計して算出する） ○ 自由研究 80点 内訳は以下の通りとする。 <ul style="list-style-type: none"> ・平常点 40点（担当教員が評価） ・レポート 20点 ・発表 20点（ポスタープレゼンテーションの評価点を換算） <p>履修上の注意： 特になし</p>			
<p>教科書・参考文献など： ガイダンスや講義で資料を配布する。</p> <p>学生へのメッセージ： グループのメンバーと力を合わせて，楽しみながら自由研究を行ってください。面白い研究課題を見つけ，その成果を出して，他人に認められることは大きな自信につながります。</p>			

電気回路論 I Electric Circuit Theory I			
学期区分	後期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	准教授 森脇和幸 K. Moriwaki		
<p>授業の目的： 電気回路を初めて学ぶものを対象とし、基本的な回路要素について学んだ後、交流回路の定常解析、回路の諸定理、基本回路の過渡現象などについて講述する。</p> <p>到達目標： 基礎的な電気回路の概念に慣れ、簡単な回路の解析ができるようになる事を目標とする。その中でも特に、交流回路解析の基礎である複素表示（フェーザ表示）を理解し、その計算ができるようになる事を目標とする。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 電気回路の基礎と回路素子 抵抗，コイル，コンデンサ，変圧器 (2) 交流回路の基礎 複素計算法，インピーダンスとアドミタンス，直・並列接続，交流電力，共振回路 (3) 回路網の諸定理 キルヒホッフ則と閉路電流法 重ね合わせの理，テブナンの定理，ノートンの定理 (4) 基本回路の過渡現象 基本回路の過渡応答，時定数 <p>授業の進め方： テキストを用いて進めるが、基本的な概念についてはテキストを補足する資料も配付して特に詳しく説明し、理解が深まるよう配慮する。復習や予習のために、テキストのポイントを整理した資料を毎回配布すると共に、簡単な演習は毎回、宿題も随時取り入れて、講義を聞くだけでなく学習効果が上がるよう配慮する。交流計算のための複素表示については、講義時に特に復習を繰り返し、確実に修得できるように配慮する。</p> <p>成績評価方法： 基本的には中間と期末の2回のテストによって成績を評価する。主にはこのテストにより評価を行うが、毎回提出してもらう演習内容や意見を書いたメモ、随時行う宿題の結果も評価に加える。</p> <p>履修上の注意： 講義では演習を行うことが時間的に不十分なので、「電気回路論演習」を履修することが望ましい。またそれ以外にも、テキストの例題等、簡単な問題でいいので、自分でできるだけ多く解くことを勧める。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書は西巻正郎，森武昭，荒井俊彦「電気回路の基礎」（森北出版），および西巻正郎，下川博文，奥村万規子「続電気回路の基礎」（森北出版）。</p> <p>学生へのメッセージ： 担当教官居室は自然科学総合研究棟3号館（西）202。</p>			

電気回路論Ⅱ		Electric Circuit Theory Ⅱ	
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 和田 修 O. Wada		
<p>授業の目的： 基礎的な電気回路論および特性解析の理論を理解し、実際の回路解析にこの理論を適用するために、基本的な回路における信号伝送特性および過渡応答特性の解析手法を学習する。</p> <p>到達目標： 基礎的な電気回路論の大体系的な理解を深める一方、実際の回路解析に適用するための基本的な解析理論を学習し、基本的な回路の特性解析ができるように解析手法を習得する。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 2端子対網の回路論 各種行列表現法、伝送特性の解析の基礎を学び、これによって基本的な回路の入力端に与えられた信号が出力端に向けてどのように伝送されるかを解析できるようにする。 (2) 分布定数回路論の基礎 時間的に変動する信号が伝送回路に入力された場合の伝送特性を解析する方法を習得する。そのために、伝送線路上の電圧・電流・インピーダンスの関係にもとづいて信号の反射・透過特性の基礎を学習する。 (3) ラプラス変換による過渡現象の解析 回路の時間応答特性解析のための演算手法として極めて有効なラプラス変換法を学習し、基本的回路の過渡応答解析への応用ができるようにする。 (4) 分布定数回路の過渡現象 ラプラス変換による伝送線路の時間応答解析の手法を学習し、これによって伝送線路上における電圧、電流の時間的変化と空間的分布の様子が詳しく解析できるようにする。 <p>授業の進め方： テキストを用いて進めるが、基本的な概念については特に詳しく説明し、適宜演習問題を使って理解が深まるように配慮する。</p> <p>成績評価方法： 基本的にはテストによって成績を評価するが、出席、授業時間中の演習、宿題レポート等の結果も成績に反映させる。</p> <p>履修上の注意： 電気回路Ⅰを履修していること。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書は大野克郎、西 哲生「電気回路(1)」および「電気回路(2)」(オーム社)</p> <p>学生へのメッセージ： 数式の表面的な複雑さに惑わされず、考え方と基本的な方法論を身につけてください。演習問題によって、理解が充分かどうかチェックしながら学習を前進させてください。</p>			

電気回路論演習 Electric Circuit Theory Practice			
学期区分	後期	区分・単位	選択 1単位
担当教員	准教授 森脇和幸 K. Moriwaki, 准教授 黒木修隆 N. Kuroki, 助教 米森秀登 H. Yonemori		
<p>授業の目的： 「電気回路論Ⅰ」の内容について、演習を通じて理解を深めることを目的とする。</p> <p>到達目標： 演習問題を解くことにより、「電気回路論Ⅰ」での講義内容を補足して、基礎的な電気回路の考え方と計算手法を身につける。</p> <p>授業内容： 講義の「電気回路論Ⅰ」と進行を合わせながら、演習問題を解く。</p> <p>授業の進め方： 演習問題を解く。1～2回の演習問題解答発表を割り当てると共に、毎回の小テストを行う。</p> <p>成績評価方法： 演習問題解答発表結果と、小テスト結果と、履修態度により評価する。</p> <p>履修上の注意： 「電気回路論Ⅰ」を履修していること。できるだけ多くの問題を自分で解き、内容の理解を深めること。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書は西巻正郎，森武昭，荒井俊彦「電気回路の基礎」（森北出版），および西巻正郎，下川博文，奥村万規子「続電気回路の基礎」（森北出版）。 参考書は大野克郎，西哲生「電気回路（1）」（オーム社），および「電気回路（2）」（オーム社）。</p> <p>学生へのメッセージ： 演習問題を自分で解くことが理解を深めるのに重要と認識し，多くの問題を解いて欲しい。</p>			

電子回路 Electronic Circuits			
学期区分	後期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	教授 沼 昌宏 M. Numa		
<p>授業の目的： 基本的な電子回路の動作を理解し，解析・設計に必要な基礎的な知識を修得する。電子回路では非線形素子であるトランジスタの増幅作用を利用するが，小信号成分に対しては適切な等価回路を利用することで線形問題に帰着できる。バイアス電流の必要性や，直流成分と交流成分を分離した考え方，負帰還による特性改善，手軽に回路を構成できる演算増幅器の応用などについても学ぶ。</p>			
<p>到達目標： 電子回路の動作原理を理解し，回路の解析が行えるようになること。さらに，トランジスタまたは演算増幅器数個程度の回路であれば，自分で設計できるようになること。</p>			
<p>授業内容：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・電子回路の解析に必要な基礎知識 ・半導体素子 ・小信号等価回路 ・基本増幅回路 ・負帰還増幅回路 ・各種増幅回路 ・集積回路による実現を前提とした電子回路の構成方式 ・演算増幅器の応用 ・正弦波発振回路 			
<p>授業の進め方： 重要な項目については質問するので，積極的な挙手を求める。講義サポート Web ページに，レポート課題等の掲示内容を含め，参考になる情報を掲載しておくので参照のこと。 質問は講義中でも随時受け付けるので，遠慮なく挙手して呼びかけること。講義終了後はもちろん，居室，電子メール (numa@kobe-u.ac.jp) でも随時受け付ける。</p>			
<p>成績評価方法： 定期試験のほか，不定期に実施する小テスト及びレポート，講義参加への積極性を加味して評価する。</p>			
<p>履修上の注意： 電気回路論 I，II を履修していること。 負帰還増幅回路の安定性等について関連の深い，制御工学 I も必ず受講すること。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書：石橋幸男「アナログ電子回路」(培風館，ISBN4-563-03334-0) 参考書：職業能力開発教材委員会編著「プログラム学習による半導体回路 I」(廣済堂出版，ISBN4-331-15069-0)，菊池正典「最新 半導体のすべて」(日本実業出版社，ISBN4-534-04109-8)，棚木義則「電子回路シミュレータ PSpice 入門編」(CQ 出版，ISBN4-7898-3627-4) 自分の考え，将来展望を述べるレポート課題の調査対象として，自然科学系図書館 3F 書架にある日経エレクトロニクス (http://nikkeibp.jp/jp/electronics/)，日経マイクロデバイス，一般書店でも入手可能な専門雑誌 (CQ 出版：デザインウェブ，トランジスタ技術) を利用するので，親しんでおくとよい。</p>			
<p>学生へのメッセージ： 講義サポート Web ページでも紹介しているが，電子回路シミュレータ Orcad PSpice の試用版ソフトを収録した CD-ROM の貸出しを行うので，電子回路の理解を深めるために，ぜひ活用するとよい。</p>			

電磁気学 I		Electromagnetic Fields and Waves I	
学期区分	前期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	准教授 喜多 隆 T. Kita		
授業の目的：			
電磁気学は、電気電子工学および物理学の基礎科目として重要である。授業の中心課題はマクスウェルの方程式である。歴史的背景を持ついくつかの実験的法則を順次導入し、また、ベクトル解析の基礎知識の助けを借りてこれら方程式を展開する。電磁気学 I の講義は電場を中心に行い、電磁気学 II の磁場の取り扱いをもって完全なマクスウェルの方程式とたどり着く。			
到達目標：			
真空空間や誘電媒質中に置かれた電荷によって創られる電場を求めることから始まり、エネルギー、電位、静電容量等が計算できるようになる。			
授業内容：			
第1章	ベクトル解析	ベクトル解析は電磁気を持つ物理的性質を浮き彫りにし、物理現象の解釈を一層明確にする。この章では電磁気学に必要な内積、外積を復習するところから始まり、直交座標、円筒座標、球座標におけるベクトルの取り扱いを講義する。	
第2章	クーロンの法則・電界の強さ	クーロンの法則は電荷が存在するときに働く基本的な原理である。この章では真空、すなわち自由空間に静電界に制限して、先に学んだベクトルをふんだんに用いてクーロンの法則のもつ性質を講義する。	
第3章	電束密度・ガウスの定理・発散	ファラデイが得た（閉曲面を通過する電束）＝（その面で囲んだ全電）という関係を定式化し、ガウスの定理を導く。ガウスの定理を利用できる対称性の存在が明らかな問題の取り扱いについて講義する。またここから発展してマクスウェルの方程式の1つを導き、発散の定理を講義する。	
第4章	エネルギー・電位	点電荷に加える仕事からスタートし、電位へと考えを進めていく。電位の場合について講義した後、閉路に沿って単位電荷を動かしても仕事はなされないという保存性の場について述べる。さらに発展して電気双極子の創る電場、電位を求め、双極子モーメントを導く。また、静電界のエネルギーについて講義する。	
第5章	導体・誘電体・静電容量	導体における静電界の性質を講義する。特に導体と自由空間の境界条件について詳しく述べ、電磁気で極めて重要な影象法の考え方へと導く。また、誘電媒質を考えた電磁気の取り扱いについて講義する。保存性の場、ガウスの定理より異なる誘電媒質の境界条件を定式化し、境界での電界の屈折について説明する。また、これら応用としてさまざまな静電容量の求め方を講義する。	
授業の進め方：			
本授業は必修であり、2クラスの小人数でのより充実した教育の達成を目指す。授業の構成は講義と授業中の小テスト、発表よりなる。授業のガイドや授業に関するリアルタイムの情報はホームページで公開している。 http://www.kobe-u.ac.jp/ep4/lecture/EM/			
成績評価方法：			
評価は出席を重視しつつも、授業中の演習問題の解答発表や定期テストにより理解度を総合的に判断する。			
出席・・・授業毎に簡単な小テストを実施し、内容をA、B、C、Dの4段階評価する。これらの総計をもって出席点とする。Dは出席に値しないと判断します。			
試験・・・基礎的な電磁気の理解度を知らするための問題を与え、どの程度まで理解しているか判断する。			
発表・・・特に理解を深めてほしい重要な内容については演習問題を解いてもらい、それら解答を自発的に発表してもらう。			
履修上の注意：			
ベクトル解析の内容、および高校で学習した程度の線・面・体積積分を必要とする。			
教科書・参考文献など：			
W.H.ヘイト 著「工学系の基礎電磁気学」（朝倉書店）			
学生へのメッセージ：			
電磁気学は多くの専門科目の基礎知識となる科目ですので、本当に“身に”つけることが出来るよう励んで下さい。質問は随時受け付けます。また、電子メールでの質問等にも答えます。			

電磁気学Ⅱ		Electromagnetic Fields and Waves Ⅱ	
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 和田 修 O. Wada		
<p>授業の目的： 磁界に関する電磁気学の基礎理論を学習する。さらに時間変化を含むマックスウェルの方程式にもとづく電磁気学の基本体系を理解し、その応用として一様平面波の伝搬特性の基礎を習得する。</p> <p>到達目標： 電磁気学の基礎理論を理解し、これを用いて、基本的な電磁界の空間分布および物質の中の電磁界の分布の解析、さらにマックスウェルの方程式にもとづく電磁波の伝搬特性および物質との相互作用の解析ができるようにする。</p> <p>授業内容： 電磁気学Ⅰに続いて次の内容で講義を進める。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 定常磁界 アンペアの法則など基本的な法則によって磁界がどのようにして発生するかを学習し、これにもとづいて時間変化を含まない磁界の空間分布を解析するための基本的手法を習得する。 2. 定常磁界と物質の相互作用 磁界と物質の相互作用を考察する。磁界が運動荷電粒子に及ぼす力、物質中における磁界の変化を理解し、これによって磁界を介した物質の相互作用を解析する方法を学習する。 3. 時間的に変化する場・マックスウェルの方程式 定常的な電磁界では現れないが、時間的に変動する電磁界が存在するときにはじめて出現する現象を考察する。これに基づいて、時間変動を含む電磁界を総合的、体系的に扱うことができるマックスウェルの方程式を理解する。 4. 一様平面波 マックスウェルの方程式から導出される波動方程式を用いて、電磁波の伝播特性、および電磁波と物質との相互作用を解析する手法を習得する。 <p>授業の進め方： テキストに沿って進めるが、適宜演習問題を使って理解が深まるように配慮する。</p> <p>成績評価方法： 学期末試験の結果に、出席、授業中の小テストやレポートなどの結果を加味して評価する。</p> <p>履修上の注意： 電磁気学Ⅰを履修し、かつ、ベクトル解析、線・面・体積積分、微分方程式、フーリエ級数などについての学習を必要とする。</p>			
<p>教科書・参考文献など： W. H. Hayt (ヘイト), Jr. 著「工学系の基礎電磁気学」(山中惣之助, 岡本孝太郎, 宇佐美興一 訳) 朝倉書店 原典新版: W.H.Hagt, Jr., J.A.Buck; "Engineering Electromagnetics," 6th Ed., McGraw-Hill, 2001</p> <p>学生へのメッセージ： 演習問題で理解度をチェックしながら前進してください。電界と磁界の対応関係を絶えず見較べながら勉強し、学期末には全体系が理解できていることを目指して、学習を進めてください。</p>			

電磁気学演習 Practice on Electromagnetic Fields and Waves			
学期区分	前期	区分・単位	選択 1単位
担当教員	准教授 藤井 稔 M. Fujii, 准教授 土屋英昭 H. Tsuchiya		
<p>授業の目的： 演習と自主的学習によって電磁気学 I, II (特に I) の講義内容の理解を深める。</p> <p>到達目標： 電磁気学の基礎的な概念を修得するとともに初歩的問題を解く力をつける。</p> <p>授業内容： 電磁気学 I, II で用いるテキストの練習問題を中心に、適当な演習問題を加えて演習を行う。講義内容の簡単な復習の後、自ら問題を解き、教室内で発表する。</p> <p>成績評価方法： 出席と発表あるいはレポートで採点する。</p> <p>履修上の注意： あらかじめ該当する授業の復習をしておくこと。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書として、W. H. Hayt, Jr. 著「工学系の基礎電磁気学」(山中惣之助, 岡本孝太郎, 宇佐美興一 訳) 朝倉書店を用いる。</p> <p>学生へのメッセージ： 電磁気学は数学的な形式として「美しい」学問である。個々の問題にのみ気をとられることのないように全体を理解するよう心がけてください。将来、光エレクトロニクスや通信を勉強するための基礎となる重要な科目です。</p>			

電気計測 Electrical Instrumentation			
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	准教授 浦野俊夫 T. Urano, 准教授 本間康浩 Y. Homma		
<p>授業の目的： 電気工学・電子工学において必要な計測技術の基礎と実的な知識を習得することを目的とする。</p> <p>到達目標： 計測技術についての基本的な知識を習得し、必修科目の電気電子工学実験に用いる計測法や、将来の電気電子技術者に必要な測定技術の基本を理解することを目標とする。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 計測の基礎 測定と計測，測定法の分類，誤差と統計処理 2) 単位と標準 単位系，計測標準 3) 直流電圧・直流電流・直流電力の測定 計測機器，測定法と測定系， 4) 抵抗の測定 抵抗器，測定法と測定系， 5) 交流電圧・交流電流・交流電力の測定 測定量，計測機器と測定法， 6) インピーダンスの測定 インピーダンス，計測機器と測定法 7) 波形計測，周波数の測定 波形計測，周波数の測定 8) 磁気に関する測定 静磁界と磁束の測定，磁性材料の磁気特性に関する測定 9) 電磁界の測定 電磁界，電界強度の測定，磁界強度の測定 10) 光計測 レーザーパワーの測定，波長・周波数の測定 <p>授業の進め方： 基本的には講義形式で行う。また適宜演習を行う。</p> <p>成績評価方法： 定期試験の他，授業中に実施する演習，宿題のレポート等を加味して行う。</p> <p>履修上の注意： 特になし。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書：電子情報通信学会編，岩崎俊著「電磁気計測」（コロナ社）</p> <p>学生へのメッセージ： 将来の電気電子技術者として積極的な授業参加を期待する。</p>			

情報数学 Information Mathematics			
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	非常勤講師 寺西 大 M. Teranishi		
<p>授業の目的： 情報科学における諸概念を学習する上で、その基礎として必要性の高いグラフ理論、組合せ数学(漸化式を含む)、初等整数論について講義を行ないます。</p> <p>到達目標： グラフ理論、組合せ数学、初等整数論についての基本概念を習得すること。</p> <p>授業内容： この講義は離散数学と呼ばれる数学の一分野の入門的なものです。従来の数学は「無限」および「連続的」な対象を扱っており、物質やエネルギーを扱う物理学の基礎理論として重要な役割を果たしています。一方、離散数学は「有限」および「離散的」な対象（離散構造と呼ばれる）を扱い、コンピュータのソフトウェアやハードウェアなどを扱う情報科学の基礎理論として最も重要な位置を占めています。この講義では、この離散数学の中でも、特にグラフ理論、組合せ数学について述べます。また、離散構造を調べる上で役に立つ初等整数論についても触れます。</p> <p>授業の進め方： 指定した教科書を基に作成したプリントを使って授業を行ないます。また、できるだけ演習問題を多く取り入れて理解が深まるよう配慮します。</p> <p>成績評価方法： 定期試験、レポート、出席状況等から総合的に評価します。</p> <p>履修上の注意： 離散数学（前期開講）の講義内容である、集合、関係、写像、順序、束、代数構造を理解していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 参考書：「グラフ・ネットワーク・組合せ論」藤重 悟著、共立出版 参考書：「離散系の数学」野崎昭弘著、近代科学社 参考書：「やさしいグラフ理論」田澤新成ほか共著、現代数学社</p> <p>学生へのメッセージ： 特になし。</p>			

論理数学 Logic for Computer Engineering			
学期区分	前期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	教授 塚本昌彦 M. Tsukamoto		
<p>授業の目的： すべての数学や科学の理論的根拠を与える道具であり，計算機科学や人工知能の基礎にもなっている記号論理の基礎について講述する。</p> <p>到達目標： 一階述語論理の基礎とその計算機による扱い方を習得する。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 論理と計算機科学 論理学の歴史と，数学，計算機科学，人工知能における論理の役割について学ぶ。 2. 命題論理 命題論理と論理式の解釈，ブール代数との対応について学ぶ。 3. 述語論理 一階述語論理について，論理式の解釈，Hilbert 流，Gentzen 流（NK,LK）などの公理系の基礎について学ぶ。 さらに，Gödel の完全性定理，不完全性定理について学ぶ。 4. 導出原理 論理式の標準形，エルブランの定理，節形式の導出原理と完全性について学ぶ。 <p>授業の進め方： 板書による説明に演習問題を適宜加える。</p> <p>成績評価方法： 授業中の小テストと学期末試験で評価する。</p> <p>履修上の注意： 特に予備知識を必要としないが，集合や関係，関数など現代数学の基本的概念を修得していることが望ましい。 例えば，「離散数学」や「情報数学」を履修しておくといい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 特に使用しない予定。</p> <p>学生へのメッセージ： 論理を学ぶことは，論理回路の設計のみならず，あらゆる学問の論理的思考のための基礎となります。この授業を通じて，論理的思考法も身に付けてください。</p>			

量子物理工学 I Quantum Physics and Electronics I			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2 単位
担当教員	教授 小川真人 M. Ogawa		
<p>授業の目的：</p> <p>量子力学は、物質に対する基礎的理解や物性研究、電子デバイス開発のために必要です。</p> <p>さらに、光に関する理解や応用、情報系で研究されている量子コンピューターや量子暗号などの理解や応用のためにも欠かすことができません。</p> <p>本講義は、私たちが直接経験できるマクロな世界とは異なるミクロな世界での量子現象とその基本的考え方を学び、自分で具体的に計算ができて使えるようになり、更に後期の量子物理工学 II および固体物性工学 I などの量子力学に関連する科目に必要な基礎知識を養うことを目的とします。</p>			
<p>到達目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 粒子のドブロイ波長と量子力学的特色について説明ができる。 (2) 量子力学的波動関数と観測との関連について簡単な説明ができる。 (3) 古典的な物理量と演算子との関係を示すことができる。 (4) シュレディンガー方程式と古典力学との対応について簡単な説明ができる。 (5) 固有状態と固有値、物理量の演算子とその期待値について説明できる。 (6) ハイゼンベルグの不確定性原理について説明ができる。 (7) 1次元ポテンシャル井戸中の粒子の状態やトンネル現象について基本的な計算ができる。 			
<p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 古典力学の限界と量子力学の萌芽 2. アインシュタインの関係式、ドブロイの関係式 3. 古典的波動の性質と波動方程式 4. シュレディンガー方程式 5. 波動関数の意味と固有関数・固有値 6. エルミート演算子、ディラックの記法 7. 線型代数との関連性 8. 物理量の期待値と期待値の計算法、計算例 9. 交換関係、波束 10. 不確定性原理 11. エーレンフェストの定理、確率流密度、連続方程式（ガウスの定理） 12. 自由粒子、量子井戸（1）無限大閉じ込め 13. 量子井戸（2）有限閉じ込め 14. トンネル効果 15. まとめと量子物理学 II の内容とのつながり 			
<p>成績評価方法：</p> <p>毎回の出席テスト、宿題、および期末試験の成績で評価する。</p>			
<p>必要な知識：</p> <p>量子物理工学 I を理解し、かつ使いこなすために最低限必要な数学の基礎的事項は</p> <ul style="list-style-type: none"> ・線形代数（固有関数、固有ベクトル、固有値） ・常微分方程式 			
<p>教科書・参考文献など：</p> <p>「工学系のための量子力学（第2版）」（森北出版、上羽 弘著）</p> <p>ホームページ http://www.2.kobe-u.ac.jp/~lerl2/j_lectures.htm</p> <p>に適宜資料を掲載します。</p>			

量子物理工学Ⅱ Quantum Physics and Electronics Ⅱ			
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	准教授 藤井 稔 M. Fujii		
<p>授業の目的： 最近の電子材料，電子デバイスに関する技術のほとんどは，物質のミクロな性質を利用している。そのため，それらの性質や動作原理を理解するためには，ミクロの世界を記述する言語である量子力学の理解が不可欠である。本講義では，量子力学により物質のミクロな性質を解き明かしていく過程を示すとともに，量子力学的効果と最先端技術の関連を明らかにする。</p>			
<p>到達目標： 電気電子工学科で開講されている，電子物理工学系の講義を理解して実際に問題に応用するために必要な基礎概念を修得する。</p>			
<p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) トンネル効果 (1回) 2) 調和振動子 (2回) <ol style="list-style-type: none"> 2-1 調和振動子のシュレディンガー方程式。その解の物理的意味 2-2 エルミート多項式 3) 水素原子模型とその応用 (4～5回) <ol style="list-style-type: none"> 3-1 水素原子のシュレディンガー方程式 3-2 角運動量と方向の量子化 3-3 動径方向の波動関数とエネルギー固有値。水素原子のエネルギー固有値と波動関数 3-4 シリコン結晶の共有結合。半導体の不純物準位 4) 磁気モーメントとスピン (2～3回) <ol style="list-style-type: none"> 4-1 軌道磁気モーメント。ゼーマン効果 4-2 電子のスピンとスピン角運動量 5) 摂動論 (4～5回) <ol style="list-style-type: none"> 5-1 時間に依存しない摂動論 5-2 時間に依存する摂動論 5-3 遷移の選択則 5-4 光の吸収と放出 5-5 半導体の光吸収スペクトル。誘導遷移 			
<p>授業の進め方： 理解を深めるために，小テストを行う。また，毎回レポートの提出を義務付ける。</p>			
<p>成績評価方法： 小テスト，レポート，授業への参加度 (40点) 及び期末試験の結果 (60点) により評価する。</p>			
<p>履修上の注意： 「量子物理工学 I」を履修し，単位を取得していること。電磁気学の知識が必要である。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書： 上羽 弘「工学系のための量子力学」 参考書： 岸野正剛「量子力学の基礎」</p>			
<p>学生へのメッセージ： 量子力学は非常に美しい学問体系で，これを学ぶことによりこれまでに学んだ物理，化学の多くの事柄の本質が理解できます。少し取っ付きにくい学問ですが，粘り強く勉強してください。</p>			

数理物理学 Engineering Course of Mathematical Physics			
学期区分	前期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	准教授 土屋英昭 H. Tsuchiya		
<p>授業の目的： 大規模集積回路や半導体レーザーを中心とするエレクトロニクス技術は、高度電子情報処理社会を支える最も基盤となるハードウェア技術である。本講義では、エレクトロニクス発展の中心的役割を担う電子材料や電子デバイスの動作原理を理解するために必要な固体物性の基礎的事項を系統的に学ぶことを目的としている。</p> <p>到達目標： エレクトロニクスのハードウェア基盤技術を理解するために必要な固体物性理論を系統立てて理解することを目標としている。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 数理物理学とは (1回) <ul style="list-style-type: none"> ・エレクトロニクスと数理物理学 2) 確率と古典統計力学 (3回) <ul style="list-style-type: none"> ・統計分布, 確率の定義, 統計分布, 統計量 ・古典統計力学, マックスウェル・ボルツマン分布, ボルツマン定数, 平均速度と熱速度 3) 量子統計 (3回) <ul style="list-style-type: none"> ・粒子の統計性, フェルミ統計, ボーズ統計, パウリの排他律 ・フェルミ分布, ボーズ分布, プランク分布 4) 金属の自由電子モデル (3回) <ul style="list-style-type: none"> ・フェルミ分布の性質 (フェルミエネルギー, フェルミ面, フェルミ速度, フェルミ温度) ・状態密度, 電子比熱 5) 固体中の電子の伝導機構 (3回) <ul style="list-style-type: none"> ・ボルツマン方程式 ・ドリフト電流と移動度 ・ドリフト・拡散モデル ・主要な散乱過程 6) 格子振動, 比熱 (2回) <p>授業の進め方： 参考書および配布プリントを用いて講義する。理解を深めるために、各章の終了後に小テストを行う。授業に関するリアルタイムの情報は、下記ホームページで公開している。 「電気電子工学科 HP (http://www.eedept.kobe-u.ac.jp)」→「学科構成」→「土屋英昭」→「講義」</p> <p>成績評価方法： 小テストと期末試験の結果を総合的に判断して評価する。</p> <p>履修上の注意： 「量子物理学 I」, 「固体物性工学 I」を履修していることが望ましい。</p> <p>教科書・参考文献など： 教科書は特に用いない。参考文献として以下を挙げておく。 ○ 市村 浩 著「統計力学」(裳華房) および 岡部 豊 著「統計力学」(裳華房) ○ 阿部龍蔵 著「電気伝導」(培風館)</p> <p>学生へのメッセージ： 量子論からエレクトロニクス応用まで系統的に講述する。</p>			

固体物性工学 I Solid State Physical Engineering I			
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 林 真至 S. Hayashi		
<p>授業の目的：</p> <p>様々な電子機器は、半導体結晶をはじめ多種多様な固体材料により構成されている。新しい、電子素子や電子機器の開発は、固体の物理的性質をミクロな観点に立って理解することなしには成し得ない。本講義では、固体の基本的な物理的性質について考察する。固体中で生起する様々な物理現象は、劇にたとえる事ができる。その舞台は、規則正しく（結晶）あるいは不規則に配列した（非晶質）原子的構造である。その舞台の上で、電子や正孔、光子、音子、などが役者となり劇を演じる事になる。本講義では、まず舞台の成り立ちについて理解する事を目的とする。固体物性工学Ⅱでは、舞台の上で演じられる様々なドラマについて学ぶ事になる。</p>			
<p>到達目標：</p> <p>電気電子工学科で開講されている、さらに進んだ物性関連の講義を理解するための基礎を習得すること。</p>			
<p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 固体の分類 2. 結晶と非晶質 3. 結晶の育成法 4. 結晶格子 5. 逆空間と逆格子 6. 半導体結晶 7. 電子線・X線回折 			
<p>授業の進め方：</p> <p>図を多用しながら（プロジェクター及び配布資料）直感的にとらえやすく説明する。演習問題を提示しながら、学生参加、対話型の授業を行う。</p>			
<p>成績評価方法：</p> <p>出席、小テスト、レポート、質疑応答、筆記試験、口頭試問などにより評価する。ただ真面目に勉強して、物事を記憶したというよりも、ユニークなアイデアをアピールした学生、また優れた表現能力（文章表現も含む）を有する（あるいは獲得した）学生に高い評価を与える。</p>			
<p>履修上の注意：</p> <p>授業時には、携帯電話の電源を切り、鞆に入れておく事。私語を慎むこと。</p>			
<p>教科書・参考文献など：</p> <p>教科書は使用しないが、以下が参考になる。 キッテル「固体物理学入門 上・下」山下他 訳（丸善）</p>			
<p>学生へのメッセージ：</p> <p>富学而愚，是愚人中之大愚者（学に富て愚かなるは、これ愚人中の大愚者なり）。 学不至於楽，不可謂之学（学は楽しむに至らずんば、これを学と謂うべからず）。</p>			

固体物性工学Ⅱ Solid State Physical Engineering Ⅱ			
学期区分	前期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	教授 林 真至 S. Hayashi		
<p>授業の目的： 様々な電子機器は、半導体結晶をはじめ多種多様な固体材料により構成されている。新しい、電子素子や電子機器の開発は、固体の物理的性質をミクロな観点に立って理解することなしには成し得ない。本講義では、固体の基本的な物理的性質について考察する。固体中で生起する様々な物理現象は、劇にたとえる事ができる。その舞台は、規則正しく（結晶）あるいは不規則に配列した（非晶質）原子的構造である。その舞台の上で、電子や正孔、光子、音子、などが役者となり劇を演じる事になる。固体物性工学Ⅰでは、舞台の成り立ちについて学んだ。固体物性工学Ⅱでは、舞台の上で演じられる様々なドラマについて学ぶ事になる。</p>			
<p>到達目標： 電気電子工学科で開講されている、さらに進んだ物性関連の講義を理解するための基礎を習得すること。</p>			
<p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 量子力学の復習（水素原子の電子状態） 2. 共有結合 3. sp 混成軌道 4. 固体のバンド構造Ⅰ（強結合近似） 5. 固体のバンド構造Ⅱ（自由電子近似） 			
<p>授業の進め方： 演習問題を提示しながら、学生参加、対話型の授業を行う。</p>			
<p>成績評価方法： 出席、小テスト、レポート、質疑応答、筆記試験、口頭試問などにより評価する。ただ真面目に勉強して、物事を記憶したというよりも、ユニークなアイデアをアピールした学生、また優れた表現能力（文章表現も含む）を有する（あるいは獲得した）学生に高い評価を与える。</p>			
<p>履修上の注意： 授業時には、携帯電話の電源を切り、鞆に入れておく事。私語を慎むこと。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書は使用しないが、以下が参考になる。 キッテル「固体物理学入門 上・下」山下他 訳（丸善）</p>			
<p>学生へのメッセージ： Rome was not built in a day. What may be done at any time is done at no time. He who makes no mistakes makes nothing.</p>			

電気電子材料学 Electrical and Electronic Material Science				
学期区分	後期	区分・単位	選択	2単位
担当教員	准教授 青木和徳 K. Aoki			
授業の目的： 電子工学の分野に於いて新しい有用な材料の発明が画期的な技術革新をもたらすことがこれまでに多々あった。現存する電気電子材料の物性と、新しい材料及び素子の開発の指針になるような基礎知識について述べる。				
到達目標： 固体物性理論の復習をし、主に誘電体、磁性体について基本的考えを習得する。 半導体材料は大変重要であるが別途「半導体電子工学」の講義があるのでこれについては多くは述べない。				
授業内容： <ol style="list-style-type: none"> 1) 電気電子材料の基礎 [復習] <ul style="list-style-type: none"> ・孤立原子の電子エネルギー、孤立原子の電子エネルギー「量子井戸」 ・固体内電子のエネルギー「Sommerfeld の金属モデル」「Kronig-Penney モデル」 ・拡張ゾーンと還元ゾーン ・フェルミ球、状態密度（1次元、2次元、3次元、1次元量子井戸、量子細線、量子ドット） ・ホール（正孔）の概念 ・金属、絶縁物、半導体、半金属の違い、材料の分類 2) 誘電体・絶縁体材料 <ul style="list-style-type: none"> ・分極、巨視的な電場、反分極場、原子の場所の局所電場 ・空洞内の双極子による電場、誘電率と分極率 ・分極の種類（電子分極、原子分極、双極子分極） ・物質の静的誘電率、誘電分極の周波数特性、複素誘電率、デバイの分散式 ・強誘電体、焦電性、ランジュバン関数 3) 磁性体材料 <ul style="list-style-type: none"> ・電流ループの磁気能率、巨視的に見た磁化現象・簡単な原子模型の軌道磁気能率と角運動量 ・磁性体の分類「常磁性体（正の帯磁率）と反磁性体（負の帯磁率）、強磁性と反強磁性」 ・永久磁気双極子（電子の軌道角運動量、電子のスピン角運動量、原子核のスピン角運動量） 軌道磁気能率、電子のスピン磁気能率、原子核の磁気能率 4) 半導体材料 <ul style="list-style-type: none"> ・pn 接合、江崎ダイオード、バイポーラトランジスタ、FET、金属-半導体接触 ・受光素子 ・発光素子 ・光導電素子、光複合素子 ・ゼーベック効果（熱発電） ペルチェ効果（電子冷却） ・磁気抵抗、ホール効果素子 ・ガス検知素子、湿度検知 5) 電導体材料 <ul style="list-style-type: none"> ・金属の電気伝導（残留抵抗、Matthiessen の法則、Wiedemann-Franz の法則）、合金の抵抗、 ・透明導電材料 SnO₂、ネサ（NESA 膜）、In₂O₃（Indium Tin Oxide）ITO 膜 ・抵抗体材料、接点材料、イオン伝導材料、超電導材料 6) 分子電子材料、有機導電材料、有機半導体 7) 特殊電子材料（光電子放出材料、熱電子放出材料、熱電対材料等） 8) トピックス（水素吸蔵合金、ダイヤモンド膜、カーボンナノチューブ等） 				
授業の進め方： 個々の材料の特性を説明するのではなく、その材料を理解する上で必要な物理を中心に講義する。教科書を中心に OHP、プリントも使用する。				
成績評価方法： 定期試験の結果を主とし、レポート、小テスト、出席を考慮に入れて総合的に評価する。				
履修上の注意： 量子物理学 I、II、固体物性工学 I、II を履修していることが望ましい。				
教科書・参考文献など： C. Kittel 著、山下他 訳「固体物理学入門」（丸善）等				
学生へのメッセージ： 生半かな知識では社会にでてから役に立たない。基礎的な学問をしっかりと身につけよう。オフィスアワーは午後から夕方まで随時。電話：803-6078 / 電子メール：hongo@kobe-u.ac.jp				

光電磁波論		Electromagnetic Wave Theory	
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	未定		
<p>授業の目的： 近年、情報伝送媒体としての電磁波の重要性がますます高まっている。移動体通信や衛星通信などの無線通信における電波利用の拡大や、光ファイバ通信や光メモリなど光波利用の飛躍的な発展に見られるように、光電磁波は今日の高度情報社会において基盤となる情報伝送媒体となっている。「光電磁波論」では、電波と光の両領域にわたる電磁波について学ぶことにより、波動現象に共通な性質について理解を深めるとともに、それらを取り扱う手法を修得することを目的としている。</p>			
<p>到達目標： マイクロ波工学、アンテナ工学、光波工学等の電磁波工学における電磁界理論を系統立てて理解することを目標としている。</p>			
<p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 電波技術と光波技術の発展（1回） 電気通信技術における、より高い周波数の電磁波開拓の歴史や、レーザと光ファイバの登場による光波利用技術の発展などを学ぶ。 2) 電磁波の基本的性質（5回） マクスウェル方程式と電磁波動との関係を学び、代表的な電磁波である平面波について偏光、反射と屈折、干渉とコヒーレンスなどの基本的性質を学ぶ。 3) 電磁波の放射と回折（4回） 電荷が加速度をもって運動しているときには、電磁波が放射される。正弦波振動をする放射電磁界の一般的な表現を学んだ後、線状アンテナ、開口面アンテナ、レンズの回折によるフーリエ変換作用など具体的な電磁波の放射装置や利用技術について学ぶ。 4) 電磁波の伝送（5回） 情報を乗せた電磁波を伝送する方法の一つは導波路を用いる技術である。電磁波を導波路内に閉じこめて伝搬させるので外界の影響を受けることが少ない利点があるが、反面、導波路自身の持つ分散特性や損失特性が直接伝送品質に関わってくる。まず伝送波の一般的な性質を学び、続いて金属導波路、光ファイバ、電磁波ビームなどの具体的な導波路の伝送特性について学ぶ。 			
<p>授業の進め方： 教科書およびそれを補足する配布プリントを用いて講義する。理解を深めるために適宜演習問題（レポート）を課す。</p>			
<p>成績評価方法： 成績は、出席状況、レポートおよび試験の成績を総合的に判断して評価する。</p>			
<p>履修上の注意： 電磁気学の基礎知識が必要である。</p>			
<p>教科書・参考文献など： テキストは三好旦六著「光・電磁波論」（培風館）の前半を使用する。</p>			
<p>学生へのメッセージ： 光・電磁波工学の魅力は、マクスウェル方程式によってすべての現象が説明されるという明快さである。</p>			

半導体電子工学 I Semiconductor Electronics I			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	助教 小島 磨 O. Kojima, 助教 相馬聡文 S. Souma		
<p>授業の目的： トランジスタを中心とする超高密度集積回路や半導体レーザを中心とする光情報通信システムは近年飛躍的な発展を遂げ、高度な情報化社会を支える基盤技術となっている。半導体電子工学 I および II では、今日のエレクトロニクスの中心的役割を果たしている半導体について、その電氣的ならびに光学的諸性質を学ぶとともに、それを応用した電子デバイスや光デバイスの動作特性を学習する。半導体電子工学 I では、特に、半導体デバイスの動作原理を理解するために必要な半導体物理の基礎的事項を学び、その後 pn 接合やトランジスタなどの電子デバイスの動作原理を学ぶ。</p>			
<p>到達目標： 半導体中のマイクロな電子波の伝搬・散乱現象をマクロな古典粒子モデルにより表現する方法を理解するとともに、電子デバイスの動作原理を理解する。</p>			
<p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 半導体電子工学のあゆみ (1回) 2) 半導体の結晶構造と電子状態 (2回) 半導体結晶中の電子波の伝搬の様子を表す半導体のバンド構造について学び、電子の速度、有効質量、状態密度などの概念やバンド構造と半導体物性との関係を学習する。 3) 半導体中の熱平衡キャリア密度 (2回) 電子統計を学習し、真性半導体や不純物半導体中のキャリア密度を求める。 4) 半導体の輸送現象 (2回) 半導体中のキャリアの運動を記述するドリフト・拡散モデルについて学ぶ。 5) pn 接合 (4回) pn 接合は半導体デバイスの基本構造である。pn 接合のエネルギー準位図、整流特性、逆方向降伏特性、接合容量などについて学習する。 6) バイポーラトランジスタ (2回) 基本構造と増幅原理、電流伝送に関わる注入効率や輸送効率、高周波動作に関わる走行時間などについて学ぶ。 7) 電界効果トランジスタ (2回) MOSFET の基本構造と動作原理、各種の電界効果トランジスタについて学ぶ。 			
<p>授業の進め方： 教科書およびそれを補足する配布プリントを用いて講義する。理解を深めるために適宜演習問題 (レポート) を課す。</p>			
<p>成績評価方法： 成績は、出席状況、レポートおよび試験の成績を総合的に判断して評価する。</p>			
<p>履修上の注意： 「量子物理工学 I」「固体物性工学 I」を履修していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： テキストは、小長井誠著「半導体物性」(培風館)を使用する。</p>			
<p>学生へのメッセージ： この科目は、選択必修科目であるので、すべての電気関連の技術者に必須となる半導体デバイスの基本のみを講義する。設計に結びつく厳密な定式化や応用例は「半導体電子工学 II」で講義する。</p>			

半導体電子工学Ⅱ Semiconductor Electronics Ⅱ			
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	教授 小川真人 M. Ogawa		
<p>授業の目的： 半導体電子工学Ⅱでは、半導体電子工学Ⅰの基礎に立脚し、半導体内での非平衡状態にあるキャリアの挙動とそれがデバイス特性に及ぼす影響に関して学ぶ。特に、発生・捕獲・再結合現象などのキャリアの挙動とデバイス特性、及び半導体表面・界面の存在とデバイス特性との関連性について学ぶ。ついで、半導体の光学的性質を応用した光デバイスの内部の物理現象と基本的動作について学ぶ。</p> <p>到達目標： 半導体内部でのキャリアの発生、捕獲、再結合機構と強電界効果、半導体界面の存在による表面準位の発生を学ぶとともに、電子デバイス内部でそれらの果たす役割を理解する。特に MOSFET の動作について理解する。また、光デバイスの基本的な動作を理解する。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 半導体内でのキャリアの発生、捕獲、再結合（2回） 半導体結晶中での非平衡状態におけるキャリアの発生・捕獲・再結合現象：SRH（Shockley-Read-Hall）統計、オージェ再結合、衝突イオン化について学習する。 2) 半導体内の強電界効果（降伏現象、ツェナ効果）（1回） 半導体デバイスの耐圧と発生・再結合現象の関連、バンド間トンネルによる降伏現象につき学ぶ。 3) 半導体の表面の性質と MOS 構造（5回） 結晶の周期性が途切れる MOS 界面等での表面準位の発生と、MOS デバイス特性との関連につき学ぶ。 4) 光波電子工学の基礎（1回） 半導体ヘテロ接合の性質と半導体の光電子物性について、バンド構造と遷移型、ヘテロ pn 接合における電流注入等の基本的な性質を学習する。 5) 誘電体光導波路（2回） 半導体スラブ導波路における光波の閉じ込めと伝搬とをマックスウェル方程式による波動光学的な取り扱いを通して理解する。 6) 半導体レーザの基礎（4回） 光と電子の相互作用を理解して、光の増幅や吸収の起きる機構につき学習する。それを基にして、半導体レーザの構造と特性について学ぶ。 <p>授業の進め方： 座学およびレポート課題を主に行い、毎回理解度テストを実施する。 ホームページ http://www.2.kobe-u.ac.jp/~lerl2/device2.htm 以下に各授業日毎の内容・進度・課題・参考プログラム等を掲示している。板書とともに参考にさせていただきたい。授業内容は、受講生の理解度によっては下記の科目で修得すべき内容に関して復習せざるを得ない場合があるため上記の内容を網羅できない場合が起こり得ることを予めご了承下さい。</p> <p>成績評価方法： 成績は、理解度テストとレポート課題及び期末試験の成績を総合的に判断して評価する。</p> <p>履修上の注意： 「量子物理工学Ⅰ」「固体物性工学Ⅰ」「半導体電子工学Ⅰ」「光電磁波論」を修得し、それらの内容を理解していることが必須である。</p>			
<p>教科書・参考文献など： テキストは、岸野正剛「現代半導体デバイスの基礎」（オーム社） 参考書は、小長井誠著「半導体物性」（培風館） 岡部 洋一「絵でわかる半導体と IC」（日本実業出版社） 菊池 正典「半導体のすべて」（日本実業出版社） 菅野 卓雄 監修、堀口 勝治 編「ULSI 設計技術」（電子情報通信学会） 末松 安靖「光デバイス」（コロナ社）</p> <p>質問はメール等で随時受け付けている。</p>			

集積回路工学 Integrated Circuit Engineering			
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	非常勤講師 高田英裕 H. Takata		
<p>授業の目的：</p> <p>情報化社会の高度化にともない、集積回路に要求される機能が複雑化、大規模化され、特にデジタル設計においては人手で対応できる限界をはるかに超えている。この解決手段として計算機による設計自動化（EDA）が急激に進展して来ている。そのためトランジスタ物性、回路設計技術を知らなくても設計が可能となってしまう。自動設計ツールにそのノウハウが取り込まれたためである。このツールへの依存が強くなることは、トランジスタ能力を使い切るような高性能 LSI の開発が次第に困難になることを意味している。</p> <p>本講義では、高性能 LSI を設計する上で必要不可欠となる基礎知識の習得を目的とする。トランジスタ物性から論理回路、さらにはマクロブロック（メモリ、加算器、乗算器）へと特性が抽象化されていく過程を論じる。それと同時に、半導体製造技術にも言及し、最先端産業の現場での物作りについても紹介する。</p> <p>到達目標：</p> <p>プロセッサを含むシステムオンチップ（SoC）の背後にある要素技術を理解できる。 それぞれの段階で抽象化（シンボル化、モデル化）がどのように行われるのかについて理解できる。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 半導体市場／業界動向 2 半導体技術の進歩と最先端 SoC 3 半導体物性の基礎、PN 接合、MOS トランジスタ特性 4 CMOS 製造技術とレイアウト設計技術 5 CMOS 論理回路、演算器、メモリ 6 プロセッサの動作原理と高速化手法 7 最先端 SoC の設計、技術的課題と解決策 <p>授業の進め方：</p> <p>学問的追及よりは、むしろトランジスタの各物理定数が回路設計にどのように反映されるかについて、ノウハウも交えて紹介する。 大学とメーカーとの意見交換の場として、積極的な発言を期待したい。</p> <p>成績評価方法：</p> <p>レポート課題の成績と出席率で評価する。</p> <p>履修上の注意：</p> <p>特になし。</p>			
<p>教科書・参考文献など：</p> <p>参考図書：「集積回路工学」田丸啓吉・野澤博著／共立出版株式会社</p> <p>学生へのメッセージ：</p> <p>LSI の製造現場、メーカー間の競争など、教科書には書かれない現実を伝えたい。</p>			

デジタル情報回路 Digital Information Circuits			
学期区分	前期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	教授 沼 昌宏 M. Numa		
<p>授業の目的： デジタル回路の各種構成方式と特性，トランジスタ・レベルでの動作原理について講述する。ゲート，フリップ・フロップなどの基本回路，加算器，乗算器などの演算回路についての理解を求めるとともに，CPU，ASIC（Application Specific Integrated Circuit：特定用途向け集積回路），FPGA（Field Programmable Gate Array：書替え可能なゲートアレイ）などに関連した最新的话题を織りまぜながら，LSI（Large Scale Integration：大規模集積回路）設計の概要について述べる。</p>			
<p>到達目標： アナログ回路と対比させながら，デジタル回路の各種構成方式と特性の違いを理解すること。LSIに関連する最新の知識についても身につけること。</p>			
<p>授業内容：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・デジタルとアナログ ・LSI，CPU，メモリの概略構成，半導体製造工程の概要 ・デジタル回路の各種構成方式（CMOS，TTL） ・デジタル回路の特性（消費電力，スイッチング特性，ノイズマージン） ・基本回路 ・演算回路 ・ASICとFPGA ・LSI設計の概要 			
<p>授業の進め方： 重要な項目については質問するので，積極的な挙手を求める。講義サポート Web ページに，レポート課題等の掲示内容を含め，参考になる情報を掲載しておくので参照のこと。 質問は講義中でも随時受け付けるので，遠慮なく挙手して呼びかけること。講義終了後はもちろん，居室，電子メール（numa@kobe-u.ac.jp）でも随時受け付ける。</p>			
<p>成績評価方法： 定期試験のほか，不定期に実施する小テスト及びレポート，講義参加への積極性を加味して評価する。</p>			
<p>履修上の注意： 電子回路および計算機工学 I を履修していること。4年生で開講される集積回路工学も関連があるので，ぜひ履修することを勧める。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書：(1) 菊池正典「最新 半導体のすべて」(日本実業出版社，ISBN4-534-04109-8) (2) 猪飼，本多「定本 デジタルシステムの設計」(CQ出版社，ISBN4-7898-3049-7) 以上2冊の教科書を利用する。特に(1)については図解が多くて大変わかりやすく，興味深いので，1年生のときから先に購入して熟読しておくことを勧める。また，自分の考え，将来展望を述べるレポート課題の調査対象として，電子回路の欄で紹介した専門雑誌を利用するので，親しんでおくとよい。</p>			
<p>学生へのメッセージ： 講義サポート Web ページでも紹介しているが，FPGA を自分で設計できる無償版 CAD ソフト（MAX+PLUS II BASELINE 版）について，CD-ROM の貸出しを行う（http://www.altera.com/japan/でも入手可能）ので，ぜひ積極的に活用するように。また，パソコンや CPU の内部構成に関する調査レポートも出題する予定。</p>			

情報伝送 I Information Transmission I			
学期区分	前期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	教授 森井昌克 M. Morii		
<p>授業の目的： 信号の時間領域表示と周波数領域表示の概念，それらの間の相互変換を行う手法として重要なフーリエ級数展開並びにフーリエ変換，信号の保持する諸特性，など信号の基礎理論について学習し，実用的な各種の信号処理技術の理解に役立つ。</p> <p>到達目標： 情報システムにより提供される重要な機能は，信号理論により生み出された各種の信号処理技術に基づいている。実用化されている情報システムを，信号理論の見地から理論的に把握できるようになる。</p> <p>授業内容： 通信システムの概要，信号の時間領域表示と周波数領域表示，信号のクラス分け，一般化フーリエ級数，パーセバルの定理，指数関数型フーリエ級数，三角関数型フーリエ級数，振幅スペクトルと位相スペクトル，フーリエ変換，フーリエ変換定理，たたみ込み，電力スペクトル密度と自己相関，Wiener-Khinchine の定理，サンプリング定理，アナログ変調技術，AM，FM，PM，デジタル変調技術，DM，PCM，DPCM，信号の多重化，FDM，TDM，CDMA</p> <p>授業の進め方： 信号理論は高度な信号処理技術を支えるための学問であるから，実際に利用できることが重要である。したがって，信号理論の本質が理解できるように，大量の例題と演習問題を挿入しながら講義を進める。</p> <p>成績評価方法： 出席率を10%，演習問題のレポートの成績を20%，期末テストの成績を70%として総合的に評価する。</p> <p>履修上の注意： 解析学の基礎知識を修得していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： ノート，プリントのほか，適宜参考文献を紹介する。</p> <p>学生へのメッセージ： 学習効果を上げるための王道は，“講義の内容をその日の中に理解しておく”ことである。決して明日まで延期しないように！</p>			

情報伝送Ⅱ		Information Transmission Ⅱ	
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	教授 森井昌克 M. Morii		
<p>授業の目的： 移動体通信など様々な情報通新技術の進歩は著しい。これまでのアナログ通信に代わって、デジタル通信が急速な発展を遂げ、新しい技術が次々と実用化されている。このような状況では、情報通信の基幹となる伝送技術にの知識はますます重要になってくる。そこで、本講義では、主としてデジタル伝送理論とデジタル変調方式について理解することを目的とする。</p> <p>到達目標： 時間領域と周波数領域での信号の取り扱い方への理解を深め、デジタル通信の基礎と信号の多重化を習得する。</p> <p>授業内容： 1. フーリエ変換，信号の表現について説明する。 2. 情報のデジタル化について説明する。 3. デジタル変調の原理，誤り特性などについて説明する。</p> <p>授業の進め方： 受講者の理解度を確認するため，レポートや小テストを課しながら，講義を行う。</p> <p>成績評価方法： 原則として，レポート，小テスト，試験で成績評価をする。</p> <p>履修上の注意： 情報伝送Ⅰ，確率論の基礎とフーリエ解析の内容を理解していること。</p>			
<p>教科書・参考文献など： ノート，プリントのほか，適宜参考文献を紹介する。</p> <p>学生へのメッセージ： この講義の内容は，携帯電話に使われている技術の基礎であり，携帯電話の通信の仕組みを理解するのに役立ちます。なお，授業には，遅刻はしないように。</p>			

情報理論 Information Theory				
学期区分	前期	区分・単位	選択必修	2単位
担当教員	准教授 桑門秀典 H. Kuwakado			
<p>授業の目的： 情報とは何か、情報量はどのように測定するか、情報伝達のメカニズム、情報の符号化など、情報の本質的な基礎概念について学習し、情報を高信頼度・高速伝送するための基礎理論を修得する。</p> <p>到達目標： 情報の基礎概念を習得し、各種の情報システムに内在する本質が、情報理論の見地から明確に理解できるようになる。</p> <p>授業内容： 情報理論とは？、通信のモデル、情報とは何か、エントロピーの概念、情報量の測り方、符号化の概念、情報源と情報量、無記憶情報源とエントロピー、マルコフ情報源とエントロピー、エントロピーの性質、情報源の拡大、随伴情報源、符号の性質、一意に復号可能性、瞬時に復号可能性、Kraft の不等式、McMillan の不等式、コンパクト符号、シャノンの第一定理、Huffman 符号、符号の効率と冗長度、通信路モデル、BSC、BEC、Gilbert のモデル、相互情報量、通信路容量、縮退通信路と十分縮退通信路、シャノンの第二定理、情報の伝送速度と信頼性の交換、Hamming 符号、SEC-DED 符号、巡回符号、BCH 符号などの符号理論の基礎。</p> <p>授業の進め方： 情報理論は概念の学問であるから、実在する具体的な情報システムの例を示しながら、できるだけ物理的な意味の説明を付加して、聴講者の脳裏に情報の概念を構築する。</p> <p>成績評価方法： 出席率を10%、演習問題のレポートの成績を20%、期末テストの成績を70%として総合的に評価する。</p> <p>履修上の注意： 線形代数、確率に関する入門的知識を必要とする。</p>				
<p>教科書・参考文献など： ノーマン・アブラムソン著「情報理論入門」(好学社)(参考文献は別途紹介する。)</p> <p>学生へのメッセージ： 学習効果を上げるための王道は、“講義の内容をその日の中に理解しておく”ことである。決して明日まで延期しないように！</p>				

計算機工学 I Computer Engineering I			
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 塚本昌彦 M. Tsukamoto		
<p>授業の目的： 計算機科学の基礎である論理代数とそのハードウェアによる実現である論理回路との関係について習得することを目的とする。</p> <p>到達目標： 組み合わせ回路および同期式順序回路とその設計方法を修得する。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 計算機処理のためのデータ表現 2. 論理素子と基本的論理回路 3. スイッチング代数（公理，双対性の原理，形式） 4. 積和標準形・和積標準形 5. スイッチング形式の簡単化（カルノ図法） 6. 論理回路（演算回路，デコーダ，マルチプレクサ） 7. 順序回路（フリップフロップ） <p>授業の進め方： 黒板および配布資料を使用して説明を行う。</p> <p>成績評価方法： 演習，小テスト，定期試験により評価する。</p> <p>履修上の注意： 「論理数学」を履修しておくが良い。 黒板および配布資料</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書：松下俊介著「基礎からわかる論理回路」，森北出版</p> <p>学生へのメッセージ： 論理代数という理論とコンピュータ・ハードウェアという物理的実現との関連に興味を持ってください。</p>			

計算機工学Ⅱ		Computer Engineering Ⅱ	
学期区分	前期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	未定		
<p>授業の目的： デジタル計算機の心臓部である中央処理装置（CPU）を中心に，ハードウェアとソフトウェアの接点である計算機アーキテクチャについて習得する。</p> <p>到達目標： 計算機システムの基本的な原理について理解することを目標とする。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 数値表現と命令語 2. 算術演算回路 3. 命令の実行制御 4. 主記憶とキャッシュ 5. 多重処理と割り込み 6. 仮想記憶の管理 7. 入出力系の構成 <p>授業の進め方： 指定した教科書のほか，適宜，配布資料を利用して講義を進める。</p> <p>成績評価方法： 平常点と期末試験の成績により評価する。</p> <p>履修上の注意： 特になし。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 橋本昭洋著「計算機アーキテクチャ」昭晃堂。</p> <p>学生へのメッセージ： 計算機のハードウェアとソフトウェアに興味のある学生の参加を期待する。</p>			

言語理論とオートマトン Formal Languages and Finite Automata			
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	未定		
<p>授業の目的： 情報科学の中では歴史も古く、もっとも基礎的な分野の一つである言語理論とオートマトンについて講術する。</p> <p>到達目標： 状態遷移の概念とともに、コンパイラやソフトウェア、プログラミング言語の設計、さらに計算量の理論などの基礎となる、計算機科学における抽象的概念の取り扱い方を修得する。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 有限オートマトン 有限状態系、状態遷移図、有限オートマトンなどの基本的概念を学ぶ。続いて、非決定性有限オートマトンを定義し、決定性有限オートマトンとの等価性、空動作を有する非決定性有限オートマトンについて学ぶ。 2. 正則表現 正則表現を定義し、有限オートマトンとの等価性について学ぶ。続いて、正則集合の性質、有限オートマトンの最小化などについて学ぶ。 3. 順序回路とオートマトン 出力付きオートマトンを定義し、順序回路での実現方法を学ぶ。逆に、順序回路の解析に有限オートマトンを利用する。 4. 文脈自由文法 文脈自由文法の基本概念、導出木、簡単化、標準形について学ぶ。 <p>授業の進め方： 教科書に沿って進める。</p> <p>成績評価方法： 学期末試験を行い、出席点も加味する。</p> <p>履修上の注意： 特に予備知識を必要としないが、集合や関係、関数など現代数学の基本的概念を修得していることが望ましい。例えば、「離散数学」や「情報数学」、および「論理数学」などを履修しておくが良い。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書：J.ホップクロフト，R.モトワニ，J.ウルマン共著（野崎昭弘，高橋正子，町田元，山崎秀記共訳），「オートマトン言語理論 計算論Ⅰ」[第2版]，サイエンス社 参考書：同「オートマトン言語理論 計算論Ⅱ」[第2版]，サイエンス社</p> <p>学生へのメッセージ： 計算機科学は理論と応用がうまくブレンドされた学問です。そのエッセンスを感じとってください。</p>			

データ構造とアルゴリズム I Data Structures and Algorithms I			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 増田澄男 S. Masuda		
<p>授業の目的： 基本的なデータ構造およびアルゴリズム設計技法について講述する。これらの知識は、効率的な計算機プログラムを作成するために重要である。</p> <p>到達目標： アルゴリズムの計算量、基本的なデータ構造およびアルゴリズム設計技法について理解することを目標とする。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 準備 アルゴリズムの例、時間計算量と領域計算量、再帰的アルゴリズム、グラフに関する基本的な用語など (2) 基本データ構造 リスト、スタック、キュー、ヒープ (3) ソーティング バケットソート、選択法、挿入法、バブルソート、マージソート、クイックソート、ヒープソート (4) 探索のためのデータ構造 2分探索など (5) アルゴリズムの設計技法 分割統治法、動的計画法、グリーディ法など <p>授業の進め方： 具体例を多く示しながら、プロジェクトを用いて講義する。</p> <p>成績評価方法： 平常点と期末試験の成績により評価する。平常点は、主に、授業中に行う演習の結果により決定する。</p> <p>履修上の注意： 「プログラミング演習」を履修していること。また、「情報数学」を履修していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書として、平田富夫「アルゴリズムとデータ構造（改訂C言語版）」（森北出版）を用いる予定である。その他、プリントを配布する。</p> <p>学生へのメッセージ： 基本的なデータ構造やアルゴリズム設計技法について理解することは、決して難しいことではない。できれば、これらを“ある程度使いこなせる”レベルにまで到達して欲しい。</p>			

データ構造とアルゴリズムⅡ		Data Structures and Algorithms Ⅱ	
学期区分	前期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	教授 増田澄男 S. Masuda		
<p>授業の目的： 「データ構造とアルゴリズムⅠ」に引き続き、データ構造とアルゴリズムに関する基礎事項について講述する。本講義では、ストリングマッチング、いくつかのグラフ・ネットワーク問題、および線形計画問題に対する基本的なアルゴリズムについて説明する。</p> <p>到達目標： 個々のアルゴリズムについての確に理解することを目標とする。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 「データ構造とアルゴリズムⅠ」の復習 (2) ストリングマッチング 素朴なアルゴリズム、クヌース・モーリス・プラットのアルゴリズム、ボイヤー・ムーアのアルゴリズム (3) グラフ、ネットワークに関するいくつかのアルゴリズム グラフの表現、グラフの探索（深さ優先探索、幅優先探索）、2連結成分への分解、コスト最小スパニング木（クラスカルのアルゴリズム）、最短路問題（ダイクストラ法、ワーシャル・フロイドのアルゴリズム）など (4) 線形計画問題 <p>授業の進め方： 具体例を多く示しながら、プロジェクトを用いて講義する。</p> <p>成績評価方法： 平常点と期末試験の成績により評価する。平常点は、主に、授業中に行う演習の結果により決定する。</p> <p>履修上の注意： 「プログラミング演習」および「データ構造とアルゴリズムⅠ」を履修していること。また、「情報数学」を履修していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 平田富夫「アルゴリズムとデータ構造（改訂C言語版）」（森北出版）と適宜配布するプリントを用いる予定である。</p> <p>学生へのメッセージ： 本講義で扱う問題は、様々な応用をもつものばかりである。着実に理解して行って欲しい。</p>			

応用電波工学		Applied Radio Engineering	
学期区分	前期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	非常勤講師 小林正明 M. Kobayashi, 非常勤講師 王前弘史 H. Oumae		
授業の目的:			
(移動体通信)	電波の工学的応用の代表例として情報伝送を取り上げ、携帯電話に代表される近年の移動体通信システムの概要とその要素技術について解説する。また、電波計測への応用例として、全世界測位システム (GPS) 及び無線標定システム (レーダ装置) について概説する。		
(放送)	地上波テレビジョン放送について、アナログ放送及びデジタル放送の技術を解説する。主眼はデジタル放送の技術で、HDTV (ハイビジョン)、MPEG や OFDM (直行周波数多重変調)、また要素技術である SFN (単一周波数ネットワーク)、GI (ゴースト除去)、データ放送などについて概説する。		
到達目標:			
(移動体通信)	移動体通信等の電波応用システムの概要と基礎技術について理解を深め、獲得した知識を電波利用の実務あるいは研究開発において活かせる水準に到達することを目的とする。		
(放送)	地上波デジタルテレビジョン放送の特質を技術的な基礎を含めて理解することにより、データ伝送についての洞察を深める。		
授業内容:			
(移動体通信)	<ul style="list-style-type: none"> (1) 移動体通信システム (陸上, 海上, 航空) (2) 電波伝搬 (電波伝搬特性, フェージング及び対処技術) (3) 変復調方式 (狭帯域デジタル変復調) 及び音声符号化 (PCM, ADM, 音声評価) (4) スプレッドスペクトラム通信 (直接拡散, 周波数ホッピング, GPS の測位原理) (5) 無線標定 (レーダの基本原則, レーダ方程式, 探知確率と誤警報確率) 		
(放送)	<ul style="list-style-type: none"> (1) アナログテレビジョン放送の基礎 <ul style="list-style-type: none"> ・システム M, NTSC カラーと HDTV (2) テレビジョン放送の通信技術 (3) テレビジョン信号のデジタル化と圧縮 (4) ISDB-T 伝送路符号化方式 (5) OFDM 変調方式 (6) デジタルテレビジョン放送の要素技術 <ul style="list-style-type: none"> ・SFN, GI, データ放送など 		
授業の進め方:			
(移動体通信)	座学の他、一部の演習と体験実習 (音声評価試験の擬似体験) を行う。		
(放送)	基本的には座学のスタイルで進めます。		
成績評価方法:			
出席, 演習成果, 期末のレポート成果により評価する。			
履修上の注意:			
電子, 情報, 通信の各工学の基礎的事項が理解できること。			
教科書・参考文献など:			
特になし。必要に応じて資料を配布する。			
学生へのメッセージ:			
(移動体通信)	電波応用技術のキーワードである「周波数資源の有効利用」を念頭において授業に臨んで欲しい。授業では質疑への回答に加え、技術上あるいは実務上の課題についての議論も行いたい。		
(放送)	日頃何気なく見ているテレビの中にも数多くの最新技術が使われていることを理解して欲しい。		

応用通信工学 Applied Communication Engineering			
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	非常勤講師 藤江茂信 S. Fujie		
<p>授業の目的： 高度情報化社会を支えるインフラストラクチャとしての電気通信技術について、デジタル通信技術を中心に、その基礎知識と具体的な実現方式について解説する。 また、電気通信サービスの利用技術の側面から、コンピュータ通信を中心に、最新の動向についても言及する。</p> <p>到達目標： 電気通信の各構成要素について理解するとともに、その応用分野についてイメージを掴み、最新の技術動向に追隨できる素養の醸成。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 通信網技術 網形態、網の品質、デジタル網構成 2) 交換技術 回線、蓄積交換、デジタル交換 3) 線路技術 通信ケーブルの種類、光ファイバークーブル技術 4) 伝送技術 PCM 符号化、デジタル多重化、中継伝送、光通信 5) 無線通信技術 変調方式、固定通信方式、移動体通信方式、衛星通信方式 6) データ通信技術 OSI, ISDN, パケット通信, LAN 7) IP ネットワーク技術 IP プロトコル, ルーティング, ISP, ASP 8) 施設見学 電気通信設備を見学することにより、各種設備、装置のイメージを掴む。 <p>授業の進め方： プロジェクト等を使い、最新の技術動向を交えながら、ビジュアルに説明を加える。また、施設見学により、実際の電気通信設備を体験する。</p> <p>成績評価方法： 講義出席状況と定期試験の成績を加味して評価する。</p> <p>履修上の注意： PCM の原理、有線・無線通信の原理等、基礎的な事柄については、履修しておくことが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： テキストは別途連絡。</p> <p>学生へのメッセージ： 電気通信技術、とりわけ、近年の情報通信に関して興味をもっている学生には有益。</p>			

制御工学 I Control Engineering I			
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 阿部重夫 S. Abe		
<p>授業の目的： 制御理論は大きく発展をとげているが、古典制御理論は、制御理論の基礎であるとともに、実応用上も重要な理論である。本講義では古典制御理論に基づいて連続時間系のフィードバック制御を行なうための基礎的な理論を講述する。</p> <p>到達目標： システムの伝達関数による表現法、システムの安定性を判別するいくつかの手法、およびシステムの時間応答、周波数応答解析等、自動制御の基本的な概念を理解する。</p> <p>授業内容： 第1回 自動制御とは 第2回 ラプラス変換と微分方程式 第3回 逆ラプラス変換の計算法とラプラス変換の性質 第4回 ラプラス変換の性質（続）と伝達関数の定義 第5回 過渡応答と基本的な伝達関数 第6回 ブロック線図とフィードバック制御系 第7回 定常偏差と制御系の自由度 第8回 システムの応答の一般式 第9回 システムの極・零点とステップ応答とラウスの安定判別法 第10回 周波数応答とベクトル線図 第11回 ナイキストの安定判別法 第12回 ボード線図とそれを用いた安定判別</p> <p>授業の進め方： 毎回、授業の後に小テストを行なう。</p> <p>成績評価方法： 小テスト（$5 \times 11 = 55$点）、中間試験2回（$10 \times 2 = 20$点）、および期末テスト（50点）により総合的に評価する。</p> <p>履修上の注意： 電気回路論 I を履修していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 荒木 著「古典制御理論」（培風館）</p> <p>学生へのメッセージ： 抽象化されたモデル上での議論になるために、分かりにくいと思いがちであるが、モデルの物理的な意味を考えることにより、理解が深まるはずである。 授業中の積極的な質問を期待する。私語は厳禁である。</p>			

制御工学Ⅱ		Control Engineering Ⅱ	
学期区分	前期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	教授 阿部重夫 S. Abe		
<p>授業の目的： 近年マイクロプロセッサ，デジタルシグナルプロセッサなどの発展によりデジタル制御理論が重要となっている。本講では連続時間系の制御理論と関係づけながらデジタル制御理論を体系的に論じる。</p> <p>到達目標： デジタル制御システムのパルス伝達関数による表現，デジタル制御システムの安定判別および応答の解析。</p> <p>授業内容： 第1回 デジタル制御とは 第2回 数列およびインパルス列のz変換 第3回 z変換の性質と差分方程式の解法 第4回 逆z変換 第5回 デジタル制御システムの構成要素 第6回 過渡応答と安定性 第7回 周波数応答 第8回 制御対象側のパルス伝達関数とデジタル要素 第9回 閉ループ制御系の応答と安定性 第10回 各種の安定判別法 第11回 定常偏差 第12回 デジタル制御系の設計法</p> <p>授業の進め方： 毎回，授業の後に小テストを行なう。</p> <p>成績評価方法： 小テスト（$5 \times 11 = 55$点），中間試験2回（$10 \times 2 = 20$点），および期末テスト（50点）により総合的に評価する。</p> <p>履修上の注意： 制御工学Ⅰを履修していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 荒木 著「デジタル制御理論入門」（朝倉書店）</p> <p>学生へのメッセージ： 古典制御理論と対比して勉強することにより，理解を深めるように努力してほしい。 授業中の積極的な質問を期待する。私語は厳禁である。</p>			

電気機器 I		Electric Machine I	
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	准教授 小澤誠一 S. Ozawa		
<p>授業の目的： 電気機器，特に電磁力と電磁誘導を中心とする電磁現象を応用した機器の原理・特性について講述する。</p> <p>到達目標： 電気エネルギー変換の基本原理を習得するとともに，代表的な電気機器，すなわち変圧器，誘導機，直流機，同期機の基礎理論を理解する。</p> <p>授業内容：</p> <p>(1) 変圧器 理想変圧器と実際の変圧器，動作原理，等価回路，特性試験，構造など</p> <p>(2) 誘導機 構造，動作原理，回転磁界，すべり，同期速度，等価回路，特性試験動力とトルク，速度・トルク特性，速度・出力特性，始動，単相誘導電動機，速度制御など</p> <p>(3) 直流機 構造，動作原理，誘導起電力とトルク，エネルギー変換，電機子反作用，励磁方式，電動機特性，始動，速度制御など</p> <p>(4) 同期機 構造，動作原理，誘導起電力，等価回路，発電機の出力，電動機の出力・トルク始動方法など</p> <p>授業の進め方： スライドを利用した講義を行なう。基本的には教科書に沿って講義を進め，できる限り演習問題を多く取り入れて理解が深まるよう配慮する。また，復習課題や中間テストなどを適宜実施する。</p> <p>成績評価方法： 期末試験（70%）および課題，演習，中間テストの結果（30%）により評価する。 〔年度により変わることもあり〕</p> <p>履修上の注意： 電磁気学 I および電気回路論 I を履修していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など 教科書：特になし 参考書：難波江ほか「電気機器学」，電気学会 仁田・岡田・阿部・仁田「大学課程電気機器(1)」(改訂第2版)，オーム社</p> <p>学生へのメッセージ： 電気機器，特に電動機は身近なところで多用されているものであり，電気系の学生として基本原理については是非とも習得してもらいたい。</p>			

電気機器Ⅱ		Electric Machine Ⅱ	
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	准教授 小澤誠一 S. Ozawa		
<p>授業の目的： 電力用半導体を用いた電力の変換・制御を対象とするパワーエレクトロニクスの基礎理論と応用について講述する。</p> <p>到達目標： パワーエレクトロニクスの基礎として、電力用半導体素子パワーエレクトロニクスの基本回路を理解するとともに、パワーエレクトロニクスと制御技術の関連性を理解する。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 電力用半導体素子とその基本特性 (2) 順変換回路 単相・三相ダイオード整流回路，単相・三相サイリスタ整流回路など (3) 直流変換 降圧・昇圧チョッパ，昇降圧チョッパ，共振形チョッパ，DC-DC コンバータなど (4) 逆変換回路 他励インバータ，単相・三相電圧形自励インバータ，単相・三相電流形自励インバータ，PWM インバータなど (5) 交流変換 交流電力調整回路，サイクロコンバータなど (6) パワーエレクトロニクス技術の応用 電動機制御への応用など <p>授業の進め方： スライドを利用した講義を行なう。基本的には配布した資料に基づいて講義を進め，できるだけ演習問題を多く取り入れて理解が深まるよう配慮する。また，必要に応じて，理解度を確認するための復習課題や中間テストを実施する。</p> <p>成績評価方法： 期末試験（80%）および演習・課題，中間テスト（20%）の結果を総合して評価を行なう。 〔年度により変わることもあり〕</p> <p>履修上の注意： 電気機器Ⅰ，電気回路論Ⅰ，制御工学Ⅰを履修していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書：特になし 参考書：矢野・打田「パワーエレクトロニクス」，楠本編「パワーエレクトロニクス」，オーム社</p> <p>学生へのメッセージ： 電気機器Ⅰと同様，パワーエレクトロニクス技術は身近なものであり，電気系の学生として基本回路だけは習得しておいてもらいたい。</p>			

電力量工学 I Electric Power Engineering I			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 八坂保能 Y. Yasaka		
<p>授業の目的： 電力（電気エネルギー）は現代生活に欠かせないインフラであり、高い信頼度で（停電することなく）電力を供給することが求められている。また、電力消費量は増加の一途をたどっており、全消費エネルギーに占める電力の割合（現在4割程度）も増加傾向にある。この授業は、電力量工学Ⅱとあわせて、電力の発生、変換、伝送、分配、電力系統（電力システム）の運用、制御などに関する基礎的な知識を身につけることを目的とする。電力量工学Ⅰでは、発電工学、エネルギー変換工学と、電力応用工学の一部を講述する。</p>			
<p>到達目標： 水力、火力、原子力などの従来タイプの発電方式の原理、構成、運用方式を理解するとともに、太陽光発電、燃料電池、核融合などの新しい発電方式の原理、特徴などを知る。また、エネルギー貯蔵の各種方式と形態について知り、貯蔵、変換、利用に必要な各種電力回路技術とその応用について理解する。</p>			
<p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) エネルギー資源と電力 2) 従来の発電方式 水力、火力、原子力発電の原理・構成・運用 3) 新しい発電方式 太陽光発電、燃料電池、核融合発電など 4) エネルギー貯蔵と電力回路技術 			
<p>授業の進め方： 初めにスライドを用いて全般的導入を行なう。演習問題と小レポートをまじえて、理解を助けるようにする。</p>			
<p>成績評価方法： 定期試験の成績（70%）と演習・小レポートの成績（30%）によって評価する。</p>			
<p>履修上の注意： 電気機器Ⅰの基礎的な知識が必要である。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書：別途指示する。</p>			
<p>学生へのメッセージ： 各種発電方式について、水力学、熱力学、電磁流体力学などの基礎学問にもとづいて基本原理から理解することに重点を置いている。 私語などで他の人に迷惑をかけること。</p>			

電力量工学Ⅱ		Electric Power Engineering Ⅱ	
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	准教授 竹野裕正 H. Takeno		
<p>授業の目的： 電力（電気エネルギー）は現代生活に欠かせないインフラであり、高い信頼度で（停電することなく）電力を供給することが求められている。また、全消費エネルギーに占める電力の割合（現在4割程度）は増加傾向にあり、電力への依存は高まっている。この授業は、電力量工学Ⅰとあわせて、電力の発生、変換、伝送、分配、電力系統（電力システム）の運用、制御などに関する基礎的な知識を身につけることを目的とする。電力量工学Ⅱでは、送電工学、配電工学、電力系統工学の基本的な部分を講述する。</p>			
<p>到達目標： 送配電方式・設備・電気的特性、電力系統の制御と運用などについての基礎的な知識の修得を目標とする。</p>			
<p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 送配電方式と送配電網の構成・概要 2) 送配電設備 3) 交流送電路の基本的電気特性 4) 電力系統の故障特性（対称座標法と発電機の基本式、故障計算） 5) 電力系統の安定性 6) 送電網におけるコロナ、誘導障害、過電圧、保護継電方式 7) 電力系統の電力一周波数制御と電圧一無効電力制御 8) 発生電力の経済運用 			
<p>授業の進め方： 時間の許す限り演習を交えて、理解を助けるようにする。</p>			
<p>成績評価方法： 定期試験の成績および授業中の演習問題ないし宿題の解答を考慮して評価する場合がある。</p>			
<p>履修上の注意： 電気回路論や電磁気学など、電気電子工学の基礎科目に加え、電気機器および電力量工学Ⅰを履修していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書：江間、甲斐「電力量工学」（コロナ社） 参考書：松浦虔士 編著「電気エネルギー伝送工学」（オーム社） 大澤靖治 編著「電力システム工学」（オーム社）</p>			
<p>学生へのメッセージ： 電気エネルギーが供給される仕組みについて、電気の世界と称するに恥ずかしくない最低限の知識を身につけて下さい。</p>			

高電圧放電工学 High Voltage and Discharge Engineering			
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	教授 八坂保能 Y. Yasaka		
<p>授業の目的： 高電圧，放電は長い歴史を持つ学問分野であると同時に，現在も進化し，応用範囲をさらに拡大しつつある新規性に富んだ分野であるとも言える。高電圧を加えて気体を電離すると，荷電粒子と中性粒子の混合した自由度の高い導電性流体となってさまざまな現象が生じ，高輝度光源，レーザ，プラズマテレビ，半導体製造装置，さらには，核融合発電などへの応用が広がる。このような高電圧，放電，そしてプラズマ，それぞれの工学についての基本的な知識とその応用について学ぶことを目的とする。</p>			
<p>到達目標： 放電現象の基本的な知識，および理論的取扱い法の習得。高電圧の発生法，測定法についての知識の習得。基本的なプラズマ物性の知識，および理論的取扱い法の習得。高電圧，放電，プラズマの応用についての知識の習得。</p>			
<p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 放電工学，プラズマ工学の基礎事項 2) 電離気体中の基礎過程（衝突による励起，電離など） 3) 放電開始と定常状態 4) 高電圧の発生と測定 5) プラズマの基本的な物性 6) プラズマの生成と測定 7) 高電圧，放電，プラズマの応用 			
<p>授業の進め方： 初めにスライドを用いて全般的導入を行なう。演習問題と小レポートをまじえて，理解を助けるようにする。</p>			
<p>成績評価方法： 定期試験の成績（70％）と演習・小レポートの成績（30％）によって評価する。</p>			
<p>履修上の注意： 電磁気学Ⅰ，Ⅱを習得しておくことが最も重要である。他に電気・電子回路，電気計測など，電気工学の基礎となる科目の基本的な内容を習得しておくこと。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 別途指示する。</p>			
<p>学生へのメッセージ： プラズマという多少イメージのつかみにくいものについて原理的に理解できれば，その応用範囲がいかに広いかが見えてくるので，興味を持って取り組んで欲しい。 私語などで他の人に迷惑をかけること。</p>			

英語によるプレゼンテーション English Presentation																			
学期区分	前期	区分・単位	選択	2単位															
担当教員	非常勤講師 Joanne Elizabeth Caragata																		
<p>授業の目的： 今日、英語は世界共通の公用語となっており、研究者・技術者にとって英語による表現能力の向上は必須の課題となっている。実際、研究者として歩む場合遭遇する国際会議での発表、企業技術者として行う海外で企業活動の際等、当然のごとく要求される能力である。この授業では簡単な短い会話により英語で表現する恐怖感を取り除くことから始め、一步一步ステップを踏んで最終的には、より長い会話を覚書無しで行えるだけの英語による表現能力の習得を目的とする。</p>																			
<p>到達目標： (1) 授業においては「覚書なしで説得力ある10分程度の報告発表を行うことが出来るようになる」こと (2) 下記の英語能力検定試験のいずれかにおいて、少なくとも下記の最低ライン以上の認定を受けること 英検2級；TOEIC 450点；TOEFL (PBT) 450点；TOEFL (IBT) 45点</p>																			
<p>授業内容： まず、気構え・身振り・発声などの表現の基本について訓練する。次に短い表現になれば、聴衆の前で英語を用いた発表をする恐怖感を取り除き、表現能力を高める。この自信に基づき、公の場でのプレゼンテーション、比較的私的な場面での表現等、多様な状況への対応を訓練する。学生同士が他人のプレゼンテーションを見、お互いの評価を行うことでより自身の表現力について知る機会も持つ。</p>																			
<p>授業の進め方： パート1：全体説明、英語プレゼンテーションスキルの概要 パート2：体全体での表現（身振り、視線、発声）；学生同士による評価 パート3：まとまりあるスピーチ（説得力ある表現）；学生同士による評価 パート4：視覚情報を用いた表現；学生同士による評価 パート5：英語による表現の総合的スキルチェック</p>																			
<p>成績評価方法： 授業に合格し、実用英語検定2級以上、TOEIC 450点以上、あるいは、TOEFL (PBT) 450点以上、TOEFL (IBT) 45点以上を取得したものを合格とする（成績証明書の発行されない類似検定は認めない）。なお検定試験は在学中に受験することとし、検定部分の成績は次の基準で判定し、授業の成績と総合して科目の成績を決める。</p> <table border="0"> <tr> <td>優</td> <td>英検準1級, 1級</td> <td>TOEIC 650点以上</td> <td>TOEFL : PBT 520点以上</td> <td>: IBT 68点以上</td> </tr> <tr> <td>良</td> <td></td> <td>TOEIC 550点～649点</td> <td>TOEFL : PBT 490点～519点</td> <td>: IBT 57点～67点</td> </tr> <tr> <td>優</td> <td>英検2級</td> <td>TOEIC 450点～549点</td> <td>TOEFL : PBT 450点～489点</td> <td>: IBT 45点～56点</td> </tr> </table>					優	英検準1級, 1級	TOEIC 650点以上	TOEFL : PBT 520点以上	: IBT 68点以上	良		TOEIC 550点～649点	TOEFL : PBT 490点～519点	: IBT 57点～67点	優	英検2級	TOEIC 450点～549点	TOEFL : PBT 450点～489点	: IBT 45点～56点
優	英検準1級, 1級	TOEIC 650点以上	TOEFL : PBT 520点以上	: IBT 68点以上															
良		TOEIC 550点～649点	TOEFL : PBT 490点～519点	: IBT 57点～67点															
優	英検2級	TOEIC 450点～549点	TOEFL : PBT 450点～489点	: IBT 45点～56点															
<p>履修上の注意： 大学院に進学予定の「ものは、履修することが望ましい。授業に合格し、検定試験に合格しなかったものが再履修する場合は、授業の再受講を免除する。</p>																			
<p>教科書・参考文献など： Speaking of Speech, David Harrington&Charles LeBean, Macmillan Languagehouse (ISBN 4-89585-211-3)</p>																			
<p>学生へのメッセージ： 好き嫌いにかかわらず無く英語を自由に使いこなすことは必須であり、英語能力を向上する努力を積み重ねる習慣を身につけて欲しい。</p>																			

学外実習 Internship			
学期区分	前期または後期	区分・単位	選択 1単位
担当教員	電気電子工学科 各教員		
<p>授業の目的： 電気電子工学分野の高度な技術を習得するためには、それらの技術が実際にどのように使われているかを知ることが重要である。このために、学生が企業等で実際に就業を体験する。</p> <p>到達目標： 企業等の実際の現場を体験することにより、電気電子工学分野の高度な技術を深く理解すること。</p> <p>授業内容： インターンシップ（学生が、在学中に自らの専門、将来のキャリアに関連した就業を体験する）制度として実施する。4月上旬から学生に企業からのインターンシップ情報を公表するので、直接企業等へ申し込むか、学科からの推薦により実習企業を決定する。実習時期、期間、内容は、実習先企業によって異なる。</p> <p>授業の進め方： 実習先企業による。</p> <p>成績評価方法： 実習先企業に記入してもらう評価・所見票（学科で用意する）の内容に基づいて評価する。</p> <p>履修上の注意： 本科目は、卒業および卒業研究に必要な単位数には含まれない。また、本科目を履修する者は「学生教育研究災害保険」および「インターンシップに関する賠償責任保険」の両方に加入すること。これらに未加入の場合、事故等の際の保険が適用されない。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 実習先企業による。</p> <p>学生へのメッセージ： 学内の講義だけでは得られない体験ができ、将来のキャリアプランを考える機会にもなる。積極的な参加を望む。</p>			

電気機械設計論 Design of Electric Machine			
学期区分	前期	区分・単位	選択 1単位
担当教員	非常勤講師 深山三明 M. Miyama		
<p>授業の目的： 一般産業用として使用される同期発電機，誘導電動機について，その準拠すべき規格，要求される性能，機器の構造，製造工程等を理解し，理論に基づいた電気設計法を習得することを目的とする。</p> <p>到達目標： 日常では外観しか見ることの出来ない回転電機機器の内部構造と製造工程を理解し，電気設計法の基本を習得することを目標とする。</p> <p>授業内容： 以下に示すような内容の講義を予定している。 第1回 回転電機機器の準拠すべき規格について 第2回 回転電機機器の構造と製造工程について 第3回 同上 第4回 電気設計法について 第5回 同上 第6回 同上 第7回 まとめ</p> <p>授業の進め方： 教科書（講師が準備し配布）を主に講義を行うが，パワーポイントと配布資料で実情に即した事例を紹介しながら講義を進める。また，必要に応じて理解度を確認するための小テストを実施する。</p> <p>成績評価方法： 小テスト（50%）と出席率（50%）の結果を総合して評価を行なう。</p> <p>履修上の注意： 特になし。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書：講師が準備した資料による。 参考書：特になし。</p> <p>学生へのメッセージ： 通常では外観しか見ることの出来ない同期発電機，誘導電動機の内部構造，製造工程，各種性能を知ることにより，将来回転電機機器に関する職業に従事した時の一助になれば幸いです。</p>			

電気製図 Design of Electric Systems and Equipments			
学期区分	前期	区分・単位	選択 1単位
担当教員	非常勤講師 飯野隆夫		
<p>授業の目的： 電気図面の基本を理解し，電気回路のシステム設計演習，シーケンス制御回路の基本と応用演習を通じ，電気設備に関するシステムエンジニアリング力習得を目的とする。</p> <p>到達目標： 電気回路図およびシーケンス制御回路図を理解する知識の習得。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 電気設備と電気機器 <ul style="list-style-type: none"> ・電気設備の特質 ・電気設備に関する図記号 (2) 受変電設備の電気図面 <ul style="list-style-type: none"> ・単線結線図 ・電気室見学演習 ・地絡事故と短絡事故 (3) 電気計装制御設備の概要 <ul style="list-style-type: none"> ・論理回路図 ・ロックイン式警報回路の論理設計 ・PLC（プログラマブルコントローラ）概説 ・PLC 入出力設計 (4) シーケンス制御回路のシステム設計 <ul style="list-style-type: none"> ・展開接続図の表現法 ・展開接続図に関する図記号 ・電動機の制御回路図 <p>授業の進め方： 講師の作成したレジュメやスライドを交えて説明する。適宜演習を行う。</p> <p>成績評価方法： 日常の理解度状況および演習問題の解答内容を評価する。</p> <p>履修上の注意： なし。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 必要に応じ，講師がテキスト及び実機を用意する。</p> <p>学生へのメッセージ： 電気設備分野の実務に基づく講義であり，実践力の養成に主眼を置いている。</p>			

電力応用 Electric Power Application			
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	非常勤講師 中村 肇 H. Nakamura, 非常勤講師 小山健一 K. Koyama		
授業の目的:			
[照明工学]	電気工学の発展に伴って、電力応用分野も著しい進歩を示している。この応用に包含される“照明工学”を進歩に応じて、広くその内容を理解・修得するために、項目別に最近の動向と将来の可能性を含めて講義する。		
[電力技術・資源]	電力応用の代表的な幾つかの分野につき講述する。今後の先端技術の動向や自然エネルギーなど基礎知識・考え方を身につけてもらう。		
到達目標:			
[照明工学]	電力応用分野の一つである照明工学の基礎事項、光源と装置、照明計算と設計手法を履修する。		
[電力技術・資源]	今後の先端技術動向、21世紀の社会の課題、新発電方式、新エネルギー利用発電方式、新電力輸送技術などの概要を理解するとともに電力応用の基本知識・考え方を理解する。		
授業内容:			
以下に示すような内容の講義を予定している。			
[照明工学]	第1回	照明の基礎（用語、測光諸量）	
	第2回	色彩理論と測色	
	第3回	光源と点灯装置（発光原理、点灯回路の動作原理）	
	第4回	照明器具（名称、配光分類、全光束の算定）	
	第5回	照明計算（直射照度、光束法）	
	第6回	照明設計（屋内照明、屋外照明）	
	第7回	光放射の視覚以外へ応用（可視光、紫外放射、赤外放射）	
[電力技術・資源]	第1回	これからの先端技術の動向、技術のゆくえ、社会のイメージ	
	第2回	エネルギー資源の供給と需要	
	第3回	研究開発が進む新しい発電方式	
	第4回	研究開発が進む新しい電力供給方式	
	第5回	地球環境問題とエネルギー対策	
	第6回	その他の新しい電力関連技術	
授業の進め方:			
[照明工学]	基本的には、配布した資料に基づいて講義を進め、さらに OHP の使用、機器見本等の提示によって履修効果を高める。		
[電力技術・資源]	OHP・配布プリントを利用した講義を行なう。基本的には配布した資料に基づいて講義を進め、部分的に OHP を用い理解が深まるよう配慮する。		
成績評価方法:			
[照明工学]	平常点（出席状況）と課題レポート点の総合的判定とする。		
[電力技術・資源]	課題に対する提出レポートの採点及び講義への出席率の結果の評価を行なう。		
履修上の注意:			
教科書・参考文献など:			
[照明工学]	参考書「大学課程 照明工学（新版）」照明学会編 オーム社		
[電力技術・資源]	特になし。毎回、プリントを配布する。		
学生へのメッセージ:			
[照明工学]	電力応用分野の一つとして照明は非常に身近なものであるため、授業を通じて日常生活における照明の役割の重要性を認識して欲しい。		
[電力技術・資源]	今後の先端技術の動向や自然エネルギーなど基礎知識・考え方を身につけてもらうのが主旨。レポートは講義の内容を把握していれば特に難易度が高いものではない。		

電気法規・施設管理 Electricity Act			
学期区分	前期	区分・単位	選択 1単位
担当教員	非常勤講師 中川二與 T. Nakagawa		
<p>授業の目的： 1. 電気関係法規の知識を得る。</p> <p>到達目標： 電気事業法等の理解。</p> <p>授業内容： 1. 電気事業法 2. 電気用品安全法 3. 電気工事士法 4. 電気工事業の業務の適正化に関する法律他</p> <p>授業の進め方： 1. テキスト 2. 実際の事例 上記に沿って進める。</p> <p>成績評価方法： 試験（記述式）と出席</p>			
<p>教科書・参考文献など： 「電気法規及び施設管理」</p>			

プログラミング演習 Computer Programming Practice			
学期区分	後期	区分・単位	必修 1単位
担当教員	非常勤講師 鈴木良実 Y. Suzuki, 准教授 桑門秀典 H. Kuwakado, 助教 山口一章 K. Yamaguchi		
<p>授業の目的： 計算機を使用した演習を通じて、プログラミングの基礎を修得する。</p> <p>到達目標： 計算機の使用に慣れ、簡単なプログラムが独力で作成できるようになることを目標とする。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 計算機システムとプログラミングに関する基礎事項および業界動向 (2) 計算機の基礎的使用方法に関する演習 (3) C言語の文法に関する講義と演習 <ol style="list-style-type: none"> (a) 変数と型, 四則演算, 簡単な入出力, 制御構造 (b) 配列と関数 <p>授業の進め方： 講義と演習を交互に行いながら、授業を進める。演習では、一人1台の計算機を使ってプログラム作成を行う</p> <p>成績評価方法： 成績は下記の四点から総合的に判断する。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 授業中に課されるレポート (2) 演習で作成したプログラムおよびその考察に関するレポート (3) 平常点（出席, 小テスト） (4) 試験（中間試験, 期末試験） <p>履修上の注意： 1年前期「情報基礎」の内容を修得していること。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 初回の授業の時に教科書を指示する。また、適宜プリントを配布する。</p> <p>学生へのメッセージ： プログラミング能力を身につけるためには、自ら調べる自主性が何よりも重要である。諸君の積極的な取り組みを期待している。</p>			

電気電子工学実験Ⅰ及び安全指導		Electrical and Electronic Engineering Laboratory I and Safety Guidance	
学期区分	後期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	電気電子工学科 全教員		
<p>授業の目的：</p> <p>電気電子工学の分野における基礎的な実験を行う。</p> <p>電磁気学，電気回路論，データ構造とアルゴリズム，電気計測などで学んだ基本的な現象，回路の動作原理，アルゴリズムの計算量，測定法を，実際の測定器の使用法，測定法の実験を通して学ぶとともに，実験結果の整理の方法や報告書の書き方を修得する。また，電気電子工学実験Ⅱ，Ⅲ，Ⅳや卒業研究における実験では，高電圧を取り扱ったり危険物質（気体・液体・固体）を使用することがある。それらに関する基礎知識や取り扱う際の注意事項を認識させ，取り扱い時に感電，電気災害，爆発，火災，中毒などの重大な事故を起こさないように安全管理に役立たせる。</p>			
<p>到達目標：</p> <p>電気工学や電子工学の基礎となる諸原理，電気の基本的な測定装置の操作方法の修得と，得られた結果に対して考察を加える習慣を身につけること，グループごとに協調して行う態度と簡素で要を得た報告書を定められた締め切り期限内に作成して提出する態度を養成すること，同時に実験における安全管理を身につけることを目標とする。</p>			
<p>授業内容：</p> <p>電気電子工学実験Ⅰ</p> <p>下記の実習と実験テーマを実施し，提出されたレポートに関する指導も行う。</p> <p>実習</p> <p>デジタルオシロスコープ</p> <p>実験テーマ</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) アルゴリズム 2) 交流回路の基礎 3) ダイオードを用いた整流回路 4) トランジスタ回路 <p>安全指導</p> <p>感電の原因と対策，感電時の応急措置，電気災害，化学薬品や高圧ガスによる災害，レーザー光線による傷害，発火・引火・爆発・有毒性を持つ物質の分類と取り扱い，人工呼吸，放射線防護。</p>			
<p>履修上の注意と成績評価方法：</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 電気電子工学実験Ⅰ及び安全指導の単位を修得するためには，全ての実習を行い，安全指導のレポートを提出し，全ての実験テーマに関し実験を行い，全てのレポート指導を受け，かつ課せられたレポートを全て提出する必要がある。電気電子工学実験Ⅰ及び安全指導の単位を修得しないと，電気電子工学実験Ⅱ，電気電子工学実験Ⅲを受講できないので注意されたい。 (2) 実験実施日，レポート提出日の無断欠席は認めない。無断欠席した実験に対する報告書の提出は認めない。クラブ活動を理由にした欠席は認めない。病気及び事故の場合は，速やかに各実験テーマの担当者に連絡すること。病気および事故による欠席は考慮するが，医師の診断書等を実験担当者に提出すること。 (3) 実施方法と成績評価に関する詳細は第1回目のガイダンス時に説明するので，必ず出席すること。 			
<p>教科書・参考文献など：</p> <p>テキストは電気電子工学科編「電気電子工学実験Ⅰ及び安全指導」を前もって入手すること。また，入学時に配付される神戸大学工学部「安全の手引き（導入編）」を安全指導に用いる。</p> <p>「電気電子工学実験Ⅰ及び安全指導 補遺」（ガイダンス時に配付する）。</p>			

電気電子工学実験Ⅱ Electrical and Electronic Engineering Laboratory Ⅱ			
学期区分	前期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	電気電子工学科 全教員		
<p>授業の目的： 電子物理学，電子情報工学，電気エネルギー制御工学の基礎となる実験を行い，その基礎概念を修得すると共に，実験器具・装置の取り扱い，実験技術，データの処理方法等について習熟することを目的とする。</p> <p>到達目標： 電気工学や電子工学の基礎となる諸原理を習得し，基本的な測定装置の操作方法に習熟するとともに，得られた結果を整理し考察を加え，それを報告書にまとめる作業を身につける事を目標とする。</p> <p>授業内容： 実験1 光デバイスの基礎 実験2 デジタル回路 実験3 半導体デバイスの基礎 実験4 オペアンプとその応用 実験5 電気機器 実験6 自動制御</p> <p>授業の進め方： 9～10人の班に分かれて，原則として週一回，12週にわたって行う。</p> <p>成績評価方法： 採点は，出席，実験の態度，レポートの内容を総合的に評価して行う。すべてのテーマに関して実験を行い，かつ，課せられたレポートをすべて提出すること。</p> <p>履修上の注意： 電気電子工学実験Ⅱを履修するためには，電気電子工学実験Ⅰを取得しておく必要がある。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 各実験に際して，適宜，担当者が指示する。</p>			

電気電子工学実験Ⅲ Electrical and Electronic Engineering Laboratory Ⅲ			
学期区分	後期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	電気電子工学科 全教員		
<p>授業の目的： 本実験は、専門的な実験と総合実験による「物作り」によって実験の技術とその基礎となる知識を得る。また、実験の楽しさと重要さを体験学習することを合わせ、目的としている。</p> <p>到達目標： 1. 電気電子工学科の学生として基礎となる実験技術とその基礎となる知識を修得する。 2. 総合実験を適して実際に素子や回路を作製するための技術と知識を得る。 3. レポート執筆を通して、実験結果の整理、解析、文献調査などの基礎を身につける。</p> <p>授業内容： 本実験は下記の個別実験テーマおよび総合実験テーマから構成されている。(これらのテーマの開講に関しては各年度ごとに調整して決める。) 個別実験テーマは実験Ⅰ、実験Ⅱの上にさらに電気電子工学科の学生として修得すべき基礎的な実験がメニューとなっている。総合実験では、実際に「物を作る」ことに主眼をおいて、時間もたっぷりとして実験をするように配慮している。総合実験は学生の希望を取入れてテーマの選択と班の構成を決めることになっている。</p> <p>個別実験テーマ (1) 半導体の電気伝導 (2) 半導体素子と集積回路の基礎 (3) 光ファイバー伝送の基礎 (4) 同調増幅回路と変復調回路 (5) デジタル回路Ⅱ (6) デジタル制御</p> <p>総合実験テーマ (1) テーマ [P] 太陽電池の作製と半導体プロセスの基礎 (2) テーマ [SA] 論理回路の設計と実現 (3) テーマ [SB] CAD システムを用いた LSI の設計と検証 (4) テーマ [EA] 高電圧・放電計測 (5) テーマ [EB] インバータ駆動誘導電動機の制御</p> <p>授業の進め方： 実験は、実際の実験が終えた後、実験結果をまとめるために必要な事項について文献を調べたり、データの解析をするなどの自習を必要とする。最終的には、実験レポートとしてまとめ提出することによって一つの実験テーマが終えると考える。</p> <p>成績評価方法： 採点は、出席、実験の態度、レポートの内容を総合的に評価して行う。すべての実験テーマに関して、実験を行い、かつ、課せられた報告書(レポート)をすべて提出すること。</p> <p>履修上の注意： 電気電子工学実験Ⅲを履修するためには電気電子工学実験Ⅰを取得しておくことが必要である。事前に必ず実験指導書の該当する箇所を読み予習しておくこと。</p> <p>教科書・参考文献など： 「電気電子工学実験Ⅲ」(神戸大学電気電子工学科編)を用いる。</p> <p>学生へのメッセージ： 電気電子工学実験Ⅲは、電気電子工学科の3年後期に行う実験科目(必修!)です。これまでの実験とは若干異なり、総合実験では実際に回路や素子を作製します。電気電子工学科の学生としての、自覚と誇りをもって臨んで下さい。</p>			

電気電子工学実験Ⅳ Electrical and Electronic Engineering Laboratory Ⅳ			
学期区分	前期	区分・単位	必修 1単位
担当教員	電気電子工学科 各教員		
<p>授業の目的： この授業では、卒業研究に着手する上で必須となる基礎理論の理解と、実験器具・装置の取り扱い、実験技術、データの処理方法等の習熟を目的とした実験を行う。</p> <p>到達目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 卒業研究に取り組む上で必須となる基礎理論を理解する。 2. 実験器具・装置の取り扱い、実験技術、データの処理方法等に習熟する。 3. レポート執筆を通して、実験結果の整理・解析、文献調査などの基礎的な手法を身につける。 <p>授業内容： 電気電子工学科には電子物理工学大講座、電子情報工学大講座、電気エネルギー制御工学大講座があり、配属された研究室ごとに、実験テーマが指導教員より指定される。</p> <p>授業の進め方： 実験テーマや実験方法、レポートのまとめ方などについては指導教員から指示があるので、それに従って進める。得られた実験結果や考察を実験レポートとしてまとめ、指導教員に指定された期日までに提出する。</p> <p>成績評価方法： 授業への出席および取り組み姿勢と、レポートの内容とを総合的に評価する。</p> <p>履修上の注意： この授業の履修は、卒業研究の履修が可能なものに対してのみ認める。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 指導教員の指示による。</p> <p>学生へのメッセージ： 電気電子工学実験Ⅳは、卒業研究を行うための基礎能力の養成を目的としています。積極的に取り組み、すばらしい卒業研究につながるよう、がんばってください。</p>			

卒業研究 Graduate Research			
学期区分	通年	区分・単位	必修 10単位
担当教員	電気電子工学科 各教員		
<p>授業の目的： 学生が一つの研究室に一年間在籍し、指導教員の指導のもとで、研究動向の調査、研究テーマ・研究計画の策定、研究の遂行を行ない、研究とは何かを体得し、その面白みを理解する。</p> <p>到達目標： 1. 各自の研究テーマについて、世界的な研究動向を把握する。 2. 研究成果を他人に分かりやすく説明できるよう、プレゼンテーション能力を高める。 3. 研究成果を卒業論文としてまとめる。博士課程前期課程への進学予定者は、卒業論文をまとめた後で、国内外での口頭発表や、国内外の論文誌への投稿等を行なうことが好ましい。</p> <p>授業内容： 電気電子工学の研究室は電子物理工学、電子情報工学、電気エネルギー制御工学いずれかの大講座に属し、多岐多様な分野の研究を進めている。また、研究の進め方も、実験主体、理論主体、計算機実験主体など、異なっている。配属された研究室が扱う分野や進め方に沿って、研究を行なう。</p> <p>授業の進め方： 研究に必要な予備知識の習得、文献調査等を経て、研究のテーマを決め、研究を進めて行く。三年生までの受身の勉強から脱却して、自ら計画を立てて研究を進める必要がある。</p> <p>成績評価方法： 次の三つの項目で総合的に評価する。 (1) テーマの理解度 (2) 努力の傾注度 (3) 成果および卒業論文、発表会におけるプレゼンテーション</p> <p>履修上の注意： 最近の情報はほとんど英語で書かれているので、高い英語の読解能力が必要である。また、「英語によるプレゼンテーション」を履修して発表の能力も向上してほしい。 研究分野や進め方が自分に適した研究室を選ぶことが大切である。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 本に書かれたものは研究としてはすでに古いものである。論文誌、国際会議の論文集、特許等、研究に関連した最新の情報を常に収集する努力が必要である。WEBを活用すれば多くの最新情報を集めることができる。</p> <p>学生へのメッセージ： オリジナリティがなければ研究とは言えません。高いオリジナリティの研究とするにはどうしたらよいか常に考えて下さい。</p>			

VI 機械工学科

1. 教育の目指すもの

機械工学とは、数学・科学・技術を駆使して、情報、エネルギー、運動などを正確に高効率でかつ円滑に伝達あるいは変換することにより、人間生活に有益で環境に優しい高性能・高品質の製品を効率よく生産することを追及する学問分野である。

機械工学科では、自然環境との調和のもとでの人類の持続的な発展を実現するために必要なものづくりに要請される数学・物理・各種力学、材料学などの幅広い分野の基礎に重点をおいた教育を通じて、機械工学を考える上で基本となる現象を物理的に理解する能力を養い、計算機工学、制御工学、情報工学、システム工学、設計学、生産工学等の応用科目を修得させることにより学際的な問題に対応する能力を開発し、新しい発想に基づき柔軟で総合的に問題を解決できる能力を有し、機械工学に関する実践的な研究・開発・設計および生産に携わるエンジニアを養成することを理念としている。

機械工学科は、幅広い社会の要望に対応して、わが国の基盤産業を支え、将来の科学技術の発展を担う機械技術者・研究者を育成するため創設され、(1)流体エネルギーおよび熱エネルギーの生成機構と輸送メカニズムを解明するとともに、環境を考えた広い立場から教育研究を行う熱流体講座（応用流体工学、混相熱流体工学、エネルギー変換工学、エネルギー環境工学研究分野）、(2)固体の構造、組成、力学特性等を理論的及び実験的に解明し、その機能・強度・安定性の評価を行うとともに、表面及び界面の機能を設計するための教育研究を行う材料物理講座（固体力学、破壊制御学、材料物性学、表面・界面工学研究分野）、(3)持続可能で活力のある次世代型社会システムの構築に必要な技術基盤を、人工物の設計・生産・運用・再利用の観点から確立することを目的とした教育研究を行う設計生産講座（複雑系機械工学、機械ダイナミクス、コンピューター統合生産工学、知能システム創成学、創造設計工学研究分野）から成り立っている。

専門分野の基礎科目を精通して系統化することはもとより、機械工学の面白さを専門的観点から身に触れて解説する機械工学基礎（Fundamental Mechanical Engineering）を1年前期に、3年では習得した機械工学の知識と先端分野との有機的な合成を計るため先端機械工学詳論（I－IV）を組み入れるとともに、各研究分野の主任教授が先鋭化した最先端の機械工学を講述する先端機械工学通論を3年後期に配するなど、他に例を見ない個性化および活性化を行った。また、「ものづくり」という実践的教育も早くから取り入れており、工学倫理の教育と相乗させてバランスのとれた人材を作るよう心がけてきた。以上のような理念と実践的取り組みのもと、創造性及び国際性豊かな研究者・技術者を輩出している。本機械工学科における教育の特徴は、揺るぎ無い基礎学力を身につけると同時に、幅広い応用に対応できる柔軟な思考力と応用力を持ったエンジニアを育成することにある。そのため、学年進行に応じて基礎から応用へと系統的に用意された講義・演習と幅広い実験・演習などの体験学習、さらに最終学年の4年生では最先端の研究に触れて感性を磨き、応用力をつけるための卒業研究が用意されている。このような教育をうけ、新しい経験を積んだ卒業生は、ほとんどすべての産業分野で、時代を牽引していく中心的な人材として活躍が期待される。卒業生の70%程度は大学院博士課程前期課程へ進学し、さらに深い研究達成を希望するものに対して、博士課程後期課程への途が開かれている。

2. 機械工学科の構成

2007. 4. 1 現在

	教育・研究分野	教授 (室番)	准教授・講師 (室番)	助教・助手 (室番)	技術職員・事務職員等 (室番号)		
熱 流 体	応用流体工学 (MH-1)	蔦原 道久 (自1-603)	片岡 武 (自1-602)	田口 智清 (自2-510)	中崎 千善 (5E-202) 杉本 勝美 (3E-203)		
	混相熱流体工学 (MH-2)	竹中 信幸 (自1-601)	浅野 等 (5E-407)				
	エネルギー変換工学 (MH-3)	平澤 茂樹 (5E-408)					
	エネルギー環境工学 (MH-4)	富山 明男 (自1-607)	細川 茂雄 (自1-606)	宋 明良 (自2-511)			
材 料 物 理	固体力学 (MM-1)	富田 佳宏 (自3-226)	長谷部忠司 (自3-220)		古宇田由夫 (自3-225)	住友まゆみ (5E-301) 井之上章子 (自1-603) 田崎 彩野 (5E-302)	
			屋代 如月 (自3-221)				
	破壊制御学 (MM-2)	中井 善一 (自3-216)	田中 拓 (自3-217)	日和 千秋 (自3-120)			塩澤 大輝 (自3-121) 横田久美子 (自3-120)
				田中 章順 (5E-402)			
				田川 雅人 (5E-403)			
材料物性学 (MM-3)	保田 英洋 (5E-401)		木之下 博 (自3-123)				
表面・界面工学 (MM-4)	大前 伸夫 (自3-215)						
設 計 生 産	複雑系機械工学 (MA-1)	大須賀公一 (5E-414)	深尾 隆則 (5E-413)	福井喜一郎 (5E-203) 道脇 昭 (自3-B18)			
	機械ダイナミックス (MA-2)	神吉 博 (5E-411)	安達 和彦 (5E-412)				
			松田 光正 (5E-406)				
	コンピューター 統合生産工学 (MA-3)		柴坂 敏郎 (自3-113)			中本 圭一 (自3-B17)	
			鈴木 浩文 (自3-114)				
	知能システム創成学 (MA-4)	白瀬 敬一 (自3-403)				阪口 龍彦 (自3-409-2)	
創造設計工学 (MA-5)	田浦 俊春 (自3-402)	妻屋 彰 (自3-401)					
研究基盤センター		藤居 義和 (分析C-303)					

3. 履修科目一覧表（工学基礎，機械専門科目）

（◎印は必修，無印は選択科目）

記 号	授 業 科 目	単 位 数	毎 週 の 授 業 時 間								担 当 教 員	備 考	
			1		2		3		4				
			前	後	前	後	前	後	前	後			
◎	基礎解析Ⅰ(U)	2	2										
◎	線形代数学Ⅰ(U)	2	2										
	基礎解析Ⅱ(U)	2		2									
	線形代数学Ⅱ(U)	2		2									
	微積分演習(U)	1		2									
	数理統計学(U)	2		2									
	物理学C 3(U)	2		2									
	情報科学(U)	2		2									
	物理学実験(U)	2		4									
	数学演習(T)	1	2								宋		
	ベクトル解析(T)	2		2									
	複素関数論(T)	2			2								
◎	常微分方程式論(T)	2			2								
	複素関数論演習(T)	1			2						藤居		
	常微分方程式論演習(T)	1			2						阪口		
	フーリエ解析(T)	2				2							
	偏微分方程式(T)	2					2						
	工業所有権法(T)	1						1			石井，山下		
◎	基礎力学Ⅰ	3	4								松田，屋代		
◎	機械基礎数学	3	4								田中（章），田口		
	原子物理工学	2	2								鈴木（康）		
	基礎力学Ⅱ	2		2							藤居		
◎	材料力学	3		4							富田，中井，長谷部，田中（拓），屋代，塩澤		
◎	熱力学Ⅰ	3		4							平澤，浅野		
◎	機械力学Ⅰ	3			4						神吉，安達		
◎	流体工学	3			4						富山，細川，宋		
	材料工学Ⅰ	2			2						保田		
	機構学	2			2						大須賀		
	熱力学Ⅱ	2			2						平澤		
◎	生産プロセス工学	3				4					柴坂，鈴木（浩）		
	材料工学Ⅱ	2				2					保田		
	機械力学Ⅱ	2				2					安達		
	制御工学Ⅰ	2				2					大須賀		
	流体力学Ⅰ	2				2					蔦原		
	連続体力学	2				2					長谷部		
	熱・物質移動学	2				2					竹中		
	計測工学	2				2					大前		
	電気工学概論	2				2					中田		
◎	データ解析	2				2					長谷部，木之下，中本，塩澤		
	システムシンセシス	2					2				田浦		
	量子力学	2					2				田中（章）		
	材料強度学	2					2				中井，田中（拓）		

	弾性力学	2					2					田中 (拓)
	制御工学Ⅱ	2					2					深尾
	流体力学Ⅱ	2					2					片岡
	計算力学	2					2					田川
	エネルギー変換工学	2					2					竹中
	生産機械工学	2					2					鈴木 (浩)
	統計力学	2							2			田川
	固体力学	2							2			富田
	流体機械	2							2			片岡
	シミュレーション工学	2							2			未定
	生産システム工学	2							2			白瀬
	知能システム工学	2							2			妻屋
◎	安全工学・工学倫理	2							2			東海林
	工業経済	2							2			田中 (悟)
◎	機械工学基礎	3	4									全教員
◎	機械工学実習	1			3	3						白瀬
◎	機械製図	1			3	3						鈴木 (浩), 妻屋, 中本
◎	機械工学実験	2					4	4				全教員
◎	機械創造設計演習Ⅰ	4					8					柴坂, 池田, 川上, 佐藤
◎	機械創造設計演習Ⅱ	4							8			田浦, 白瀬, 大須賀, 妻屋
	応用機械工学演習	2							4			全教員
◎	英語特別演習	2							2	2		全教員
◎	先端機械工学詳論Ⅰ	2					2					未定
	先端機械工学詳論Ⅱ	2					2					未定
	先端機械工学通論	2							2			研究分野主任教員
	先端機械工学詳論Ⅲ	2							2			未定
	先端機械工学詳論Ⅳ	2							2			未定
◎	卒業研究	10								10	10	全教員

週授業時間数 (専門科目)

記号	授業科目	時間数	1		2		3		4		備考
			前	後	前	後	前	後	前	後	
◎	必修	100	16	8	16	12	14	14	10	10	
	選択	105	4	20	12	18	22	25	2	2	
	合計	205	20	28	28	30	36	39	12	12	

単位数 (専門科目)

記号	授業科目	単位数	1		2		3		4		備考
			前	後	前	後	前	後	前	後	
◎	必修	58	13	6	9	6	7	7	5	5	
	選択	95	3	17	10	18	22	23	1	1	
	合計	153	16	23	19	24	29	30	6	6	

注：機械工学実習，機械製図，機械工学実験，卒業研究の各単位を2学期に分割して記載している。

これらの科目の単位は最終期に与える。

4. 履修上の注意

- (1) 総準備単位数 189単位
- (a) 教養原論 16単位
- (b) 外国語科目 15単位
- (c) 健康・スポーツ科学 4単位
- (d) 情報科目 3単位
- (e) 専門科目 151単位
- 必修科目 58単位
- 選択科目 93単位
- (2) 学生は、卒業するためには、127単位以上を修得しなければならない。
- 卒業要件 127単位以上
- (a) 教養原論 16単位以上
- (b) 外国語科目
- 外国語第1（英語） 6単位（オーラルⅠ～ⅢおよびリーディングⅠ～Ⅲ）
- 外国語第2 4単位（ⅠA, ⅠB, ⅡA, ⅡB[#]）
- [#] S A, S BをⅡA, ⅡBに読替可能
- (c) 情報科目
- 情報基礎 1単位
- (d) 健康・スポーツ科学
- 実習Ⅰ 1単位
- (e) 専門科目、全学共通授業科目、情報科目（情報科学）
- ① 専門・必修科目 58単位（卒業研究10単位を含む）
- ② 専門・選択科目
- 全学共通授業科目・情報科目（情報科学）
- 全学共通授業科目・選択科目* } 計 41単位以上
- *全学共通授業科目の選択科目は学生便覧・神戸大学工学部規則の機械工学科履修要件（第5条関係）別表第2を参照のこと。
- (3) 継続科目（2つの学期にわたる）の単位については最終期に与える。
- (4) 機械工学科カリキュラム中
- ◎印：必修科目
- 無印：選択科目
- をそれぞれ表す。
- (5) 他学科または他学部の授業科目中、当学科が認めた場合は、当学科の選択科目とみなすことができる。
- （注）この履修規則は平成18年4月入学者から適用する。

機械工学科内規

- (1) 学生は、原則として在籍する学年より高学年において開講される必修科目を履修することはできない。
- (2) 同一時限に開講される授業科目の重複履修は認めない。
- (3) 神戸大学工学部規則第7条第2項に規定する卒業研究を申請しようとする者は、以下の条件をすべて満たした者とする。なお入学前の既修得単位の取り扱いには神戸大学工学部規則第10条に従う。
- (a) 教養原論、外国語科目、情報科目（情報基礎）、健康・スポーツ科学の卒業に必要な単位をすべて修得している。
- (b) 機械工学基礎、機械工学実習、機械製図、機械工学実験、機械創造設計演習Ⅰ、Ⅱの単位をすべて修得している。
- (c) 3年後期までに開講された専門科目の必修科目の未修得単位数が4以下である。
- (d) 3年後期までに開講された専門科目の選択科目と全学共通授業科目の情報科目（情報科学）、及び全学共通授業科目の選択科目の修得単位数が30以上である。

外国語科目に関する追記

- ※ 英語アドバンスⅠA, ⅠB, ⅠCは卒業要件の選択科目と認める。
- ※ 第2外国語はⅢA, ⅢBのみ卒業要件の選択科目と認める。
- ※ 第3外国語は卒業要件の単位として認めない。

5. 工学部機械工学科 履修体系概念図

		1年前期	1年後期	2年前期	2年後期	3年前期	3年後期	4年前後期
一般教養	語学	英語 ^U ×2 第2外国語 ^U ×2	英語 ^U ×2 第2外国語 ^U ×2	英語 ^U ×2 英語 ^U 第2外国語 ^U	英語 ^U ×2 第2外国語 ^U			英語特別演習
	健スポ	健・スポ実習 I ^U 健・スポ講義 ^U	健・スポ実習 II ^U					
	教養	教養原論 ^U ×2	教養原論 ^U ×2	教養原論 ^U ×2	教養原論 ^U ×2			
工学基礎	数学	基礎解析 I ^U 線形代数学 I ^U 数学演習 ^T	基礎解析 II ^U 線形代数学 II ^U ベクトル解析 ^T 微積分演習 ^U 数理統計学 ^U	複素関数論 ^T 複素関数論演習 ^T 常微分方程式論 ^T 常微分方程式論演習 ^T	フーリエ解析 ^T	偏微分方程式 ^T		
	物理	原子物理学	物理学C3 ^U 物理学実験 ^U		電気工学概論			
	情報	情報基礎 ^U	情報科学 ^U		データ解析	計算力学	シミュレーション工学	
機械専門		機械工学基礎 基礎力学 I 機械基礎数学	基礎力学 II	機械工学実習 機械製図	データ解析 機械工学実習 機械製図 計測工学	機械工学実験 機械創造設計演習 I 先端機械工学詳論 I 先端機械工学詳論 II	機械工学実験 機械創造設計演習 II 応用機械工学演習 先端機械工学詳論 III 先端機械工学詳論 IV 先端機械工学通論	
		機械基礎		機構学	生産プロセス工学	生産機械工学 システムシンセシス	生産システム工学 知能システム工学	
			設計生産	機械力学 I	機械力学 II 制御工学 I	制御工学 II		
			材料力学	材料工学 I	材料工学 II	弾性力学 材料強度学	固体力学	卒業研究
			材料物理	熱力学 I	熱力学 II	連続体力学 熱・物質移動学	エネルギー変換工学	
			熱流体	流体工学	流体力学 I	流体力学 II	流体機械	
	技術者教養					安全工学・工学倫理 工業経済 工業所有権法 ^T		

アンダーライン: 必修科目(週2コマ), 太字: 必修科目, 細字: 選択科目, U: 大教センター開講科目, T: 工学部開講科目

複素関数論演習 Exercises on Complex Variables															
学期区分	前期	区分・単位	選択 1単位												
担当教員	藤居義和														
<p>授業の目的： 工学で取り扱う現象の多くは偏微分方程式によって記述されるが，それらの方程式を解析し考察していくうえで複素関数の知識が必要となる。たとえば機械力学における振動・波動現象の振幅と位相の解析，流体力学における流れの安定性，翼形の空力特性など複素関数の知識は幅広く用いられ，またフーリエ解析の基礎でもある。複素関数論の基礎を述べる「複素関数論」の講義と密接に連携をとり，内容をより深く理解するため実際に問題を解き，必要な知識の整理を行っていく。</p> <p>到達目標： 複素変数の微分積分学を理解し，コーシーの積分定理，テイラー展開，ローラン展開，留数定理など主な定理を用いて実際の積分などの計算が行えるようになること。</p> <p>授業内容： 「応用解析I」の講義で取り上げる以下の各テーマに関し，演習を行う。</p> <p>複素関数論</p> <table border="0"> <tr> <td>1. 複素数と複素平面</td> <td>2. 複素平面上の線積分</td> <td>3. 解析関数と Cauchy-Riemann の関係式</td> </tr> <tr> <td>4. Cauchy の積分定理</td> <td>5. Cauchy の積分公式</td> <td>6. Taylor 展開</td> </tr> <tr> <td>7. 解析関数の特異点</td> <td>8. Laurent 展開</td> <td>9. 留数計算</td> </tr> <tr> <td>10. 実定積分の計算への留数の応用</td> <td>11. 解析的延長</td> <td></td> </tr> </table> <p>授業の進め方： 授業は毎回課題を与え，重要な点や若干のヒントを説明の後，各自で解答していく。時間内に正解を板書等です。また質問は教員，TA が授業中に受け付ける。</p> <p>成績評価方法： 定期試験は行わないが，毎回の演習で解いた答案を提出し，評価点とする。また内容の区切りで宿題を課し，毎回の提出答案と宿題の評価により成績とする。毎回出席して解答することが重要である。 宿題は正解になるまで再提出すれば，評価の対象とする。</p> <p>履修上の注意： 演習内容は，「複素関数論」の講義の進捗を考慮し，前回の講義で終了した部分を行うので講義と演習の両方を履修することが望ましい。</p>				1. 複素数と複素平面	2. 複素平面上の線積分	3. 解析関数と Cauchy-Riemann の関係式	4. Cauchy の積分定理	5. Cauchy の積分公式	6. Taylor 展開	7. 解析関数の特異点	8. Laurent 展開	9. 留数計算	10. 実定積分の計算への留数の応用	11. 解析的延長	
1. 複素数と複素平面	2. 複素平面上の線積分	3. 解析関数と Cauchy-Riemann の関係式													
4. Cauchy の積分定理	5. Cauchy の積分公式	6. Taylor 展開													
7. 解析関数の特異点	8. Laurent 展開	9. 留数計算													
10. 実定積分の計算への留数の応用	11. 解析的延長														
<p>教科書・参考文献など： 授業では教科書は用いないが，参考書としてたとえば E. クライツィグ著（丹生塵四郎・阿部寛治共訳）「複素関数論」（培風館），高木貞治著「解析概論」（岩波書店），田村二郎著「解析関数」などを推薦する。</p> <p>学生へのメッセージ： 実際に手を動かして定理を使ってみなければ内容を理解することはできません。出席を重視します。授業中に教員およびTA が巡回しますから，理解不足な点や，疑問点を億劫がらずに積極的に質問してください。どんな簡単な質問でもかまいません。</p>															

常微分方程式論演習 Exercises on Differential Equations			
学期区分	前期	区分・単位	選択 1単位
担当教員	阪口龍彦		
<p>授業の目的： 応用解析Ⅱの講義内容について、より深く理解する。</p> <p>到達目標： 常微分方程式論の内容を理解し、応用力を養う。</p> <p>授業内容： 以下の各テーマに関する演習を予定 常微分方程式論：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 変数分離形の微分方程式 2. 同次微分方程式 3. 線形微分方程式 4. Cauchy の折れ線法と常微分方程式の解の存在定理 5. 常微分方程式の解の一意性と解の延長 6. 連立線形常微分方程式 7. 連立線形常微分方程式の基本解系 8. 線形微分方程式の応用（自由振動と電気回路） 9. 定数変化法 10. n 階常微分方程式 <p>授業の進め方： 演習の最初に内容の説明を行う。演習問題を時間内に解答し、疑問点は担当教員及びティーチングアシスタントが答えていく。</p> <p>成績評価方法： 提出した解答の内容に基づいて成績の評価を行う。</p> <p>履修上の注意： 応用解析Ⅱを並行して履修あるいは同様の講義内容を履修していることが望ましい。講義の教科書、ノートなどを持参のこと。毎回出席のこと。</p>			
<p>教科書・参考文献など： たとえば「微分方程式の解法」吉田耕作著（岩波全書）、「常微分方程式論」コディントン・レビンソン著（吉岡書店）、「常微分方程式」ポントリャーギン著（共立出版）、「数理物理学の方法」クーラン、ヒルベルト著（東京図書）など。各自にあったものを用意すると良い。</p> <p>学生へのメッセージ： 各自の理解不足な点、疑問点を洗い出し、質問は積極的に行ってほしい。</p>			

基礎力学 I		Mechanics I	
学期区分	前期	区分・単位	必修 3単位
担当教員	松田光正, 屋代如月		
<p>授業の目的: 力学は力が働いている物体の運動を記述し、予測する科学であり、自然科学や工学諸分野の基礎である。本講義では、質点ならびに剛体の静力学、運動学および動力学を学習し、それらの機械工学への応用を理解することを目的とする。</p> <p>到達目標: 実際の現象に対して、その物体に働いている力の作用を明確にし、物体の運動を的確に表現する運動方程式を導出できることが目標である。</p> <p>授業内容: 力学では、取り扱う問題の性質に応じて物体を質点、質点系、剛体で置き換え、それらについて力学法則を適用して運動方程式を導出し、それを解くことにより運動を予測する。本講義の前半ではまず、静力学、すなわち静止状態での力学を扱い、高校までに学んだ力の釣り合いについて復習するとともに、高校では学ばない力のモーメントについて説明し、種々機械、構造物に作用する力の具体的求め方を学ぶ。後半では動力学、すなわち物体の運動状態での力学を説明する。高校までに学んだ質点の速度、加速度について復習するとともに、高校では学ばない剛体の速度、加速度の求め方を扱う。その上で、質点ならびに剛体の運動方程式の基本的な求め方を学ぶ。最後に、力学的エネルギーに基づく動力学問題の解法について述べる。教科書に沿って講義は以下の順で進める。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 力および力のモーメント 2. 集中力と支点の反力 3. 分布力と重心 4. 摩擦および仕事と動力 5. 質点および剛体の運動学 6. 質点の動力学 7. 剛体の動力学 8. エネルギーと運動量 <p>授業の進め方: 本講義は一週間に二回開講され、二つの講義室で別々の教員が同時に行う。講義の理解を助けるために、演習を組み合わせで行う。また、講義の理解度を見るために、3回の中間試験を行う。</p> <p>成績評価方法: 定期試験および中間試験の成績、演習等を総合的に判断して評価する。</p> <p>履修上の注意: 高等学校での数学、物理学は十分理解しているものとして講義を進める。</p>			
<p>教科書・参考文献など: 教科書：荻原芳彦著「よくわかる工業力学」(オーム社) 参考書：中川憲治著「工科のための一般力学」(森北出版) 演習書：岡山秀勇訳「メリアム 工業力学/動力学編 I, II」(サイエンス社) 長谷川節訳「工科のための力学(上)(下)」(ブレイン図書)</p> <p>学生へのメッセージ: 講義の初めの頃は高等学校の内容と重複するが、それを過ぎるとかなり高度な内容となる。自ら演習を行うなどして十分な復習をすること。 オフィスアワーは特に設けないので、疑問が生じたら担当教員室へ直接出向くか、電子メールを利用して質問すること。 メールアドレス：matsuda@mech.kobe-u.ac.jp (松田), yashiro@mech.kobe-u.ac.jp (屋代)</p>			

機械基礎数学 Fundamental Mathematics for Mechanical Engineering			
学期区分	前期	区分・単位	必修 3単位
担当教員	田中章順, 田口智清		
<p>授業の目的: 機械工学における専門科目を理解するために必要となる最低限の数学的素養を身に付けることを目的とする。講義と並行して十分な演習を実施することにより、学習した内容を実際に使用できるレベルまで高める。</p> <p>到達目標: 一般力学・電磁気学・流体力学・熱力学・固体力学等の数理物理学で多用される偏微分、重積分、ベクトルの積分に関する初歩的知識を得るとともに、簡単な計算を自力でできる能力を身に付ける。</p> <p>授業内容:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 多変数関数 <ol style="list-style-type: none"> 1-1 変数関数 1-2 偏導関数 1-3 2重積分 2. ベクトル解析 <ol style="list-style-type: none"> 2-1 空間ベクトル, 内積と外積 2-2 ベクトル関数の演算 2-3 曲線, 曲面, 点の運動 2-4 スカラー場, ベクトル場, 勾配, 発散, 回転 2-5 線積分, 面積分 2-6 積分定理 3. 微分方程式 <ol style="list-style-type: none"> 3-1 微分方程式の作成 3-2 変数分離型微分方程式, 同次形微分方程式 3-3 線形微分方程式, 完全微分方程式 3-4 高階微分方程式 <p>授業の進め方: 板書を中心に講義を行う。またほぼ1回の講義ごとに、当該講義内容に関する演習を行う。演習時間終了時に模範解答を配布し、解説を行う。</p> <p>成績評価方法: 講義大項目毎に試験を実施し、これらの3回の試験により成績を評価する。</p> <p>履修上の注意: 特になし。</p>			
<p>教科書・参考文献など: 市販の「物理数学」, 「応用数学」, 「工業数学」や、個別の内容としては「微分・積分」, 「ベクトル解析」, 「微分方程式」といった語がついた参考書がたくさん出版されており、本講義での内容は工学分野で頻繁に用いられる数学の基礎であり全ての書籍に網羅されている内容なので、特に指定はしない。</p> <p>学生へのメッセージ: 講義内容等に関し疑問がある場合は、積極的に質問すること。演習の時間にTA (ティーチングアシスタント) に質問してもよい。</p>			

原子物理工学		Atomic Physics in Engineering		
学期区分	前期	区分・単位	選択	2単位
担当教員	鈴木康文			
<p>授業の目的：</p> <p>20世紀に始まった現代物理学は、これまで、様々な分野の実験装置や科学機器の考案に寄与し、社会の発展に貢献してきた。従来の機械にさらに改良を加えようとする努力から、新たな現象の発見が生まれ、その現象を理解するために、新たな物理学が生まれる。このように、20世紀は物理学と工業技術がお互いに競って進歩し続けてきた時代であった。両者の深い関連を意識し、さらに物理現象の説明を通して原子や固体の諸性質に対する基礎的な考え方を教育することを目的とする。</p> <p>到達目標：</p> <p>本授業は高等学校で学ぶ物理Ⅱの現代物理学分野から本学で学ぶ量子力学への移行を目的としている。高等学校の物理Ⅱの選択項目である『原子と原子核』の内容をざっと復習した後、本題に入る。本授業では、現代物理学の基礎的考え方や簡単な数式の記述を理解すること、原子や分子、固体の諸性質が理解できるようになること、授業で紹介した機器の原理が分かるようになることを到達目標とする。</p> <p>授業内容：</p> <p>前半では、歴史をさかのぼり、古典物理学から現代物理学を生んだ背景について、いくつかの実験事実の発見と、それらを解釈するための物理学の進歩を中心に述べる。</p> <p>1.1 電子と原子（電子の発見、光量子説、光電効果、コンプトン効果、原子模型電子の波動性）</p> <p>1.2 熱放射に関する研究（シュテファン-ボルツマンの法則、ウィーン放射公式、レイリー・ジーンズの放射公式、プランクの内挿式、プランクの量子仮説）</p> <p>後半では、原子物理学や固体物理学への入門のために、いくつかのテーマを取り上げ、講述する。</p> <p>2.1 原子物理学序論（ハイゼンベルグの不確定性関係、電子の波動方程式、一電子原子、多電子原子）</p> <p>2.2 固体物理学序論（固体の原子構造、結晶の構造、固体中の電子状態）</p> <p>全般をとおり授業内容と関連のあるいくつかの機械を取り上げ、それらのなかで物理学がどのように応用されているかを述べる。</p> <p>授業の進め方：</p> <p>概して配布テキスト（自筆）に添って進める。</p> <p>実験に至る歴史的背景や、実験結果を理論的に説明するための数式は板書する。</p> <p>成績評価方法：</p> <p>毎回出席をとり、出席点は成績評価の1/4とする。</p> <p>1回レポートを課し、レポート点を成績評価の1/4とする。</p> <p>学期末の試験を行う。試験の得点は成績評価の1/2とする。試験はテキスト、ノート、参考書、電卓などの持ち込みを可とする。</p> <p>履修上の注意：</p> <p>本授業は物理学の工業・産業への応用を学ぶことを一つの目標にしているが、一方で高校で学んだ物理から、大学で習う現代物理学への架け橋となるよう配慮している。そのため、一回生で正規に履修してしまうことが望ましい。</p>				
<p>教科書・参考文献など：</p> <p>参考書：原 康夫著『現代物理学』（裳華房）</p> <p>小出昭一郎著『現代物理学』（基礎物理学5）（東京大学出版会）</p> <p>和田正信著『放射の物理』（物理学 One Point 19）（共立出版）</p> <p>阿部正紀著『初めて学ぶ 量子化学』（培風館）</p> <p>学生へのメッセージ：</p> <p>私は本学に常勤する教員ではありませんので、受講生諸君とは授業のとき以外は、まず会えません。単位や成績のことなど至急に連絡を取りたい場合は以下に電話、FAX、またはメールを入れてください。</p> <p>tel/fax 0729-78-3370 e-mail : susuki@cc.osaka-kyoiku.ac.jp</p>				

基礎力学Ⅱ		Mechanics Ⅱ	
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	藤居義和		
<p>授業の目的： 機械を設計する際には、その力学的強度や構造の安定性に関わる静力学的問題や、振動や回転運動における動力学的問題を解決する必要があります。そして、このような力学的問題を解決するためには、現実の対象物の力学系としての数学モデルの構築と運動方程式の誘導、そしてその解析を要求されます。本科目ではこれらの力学的問題を、力学の基礎概念を新しい視点から理解する解析力学の手法によって解きます。解析力学とは、固体力学とか流体力学のように扱う対象の性質による分類ではなく、系の運動を数学的にどう記述すると計算が簡単になり便利かということに重点が置かれたその方法が「解析的」な力学です。数学・力学の基礎的な内容を理解した上で、解析力学の手法を教授し力学の基礎概念を新しい視点から理解することによって、実際の機械・構造物を設計する際の力学問題の解析的基礎を与えます。</p>			
<p>到達目標： ある与えられた系の力学問題を解くうえで最も難しいことの一つは、その系を数式化するときどのように表したらよいかということです。解析力学におけるラグランジュの方法は、適当な座標系を選びさえすればあとは全く機械的に簡単に計算を進めるだけで、その系の力学問題を解くことが出来るという素晴らしい方法です。この解析力学の基本原理の理解をいくつかの具体例で演習を行うことによって進め、現実の対象物の力学系としての数学モデルの構築、ラグランジュの運動方程式による力学の一般形の解法を修得することを到達目標とします。</p>			
<p>授業内容： 応用との関連に留意して適時例題を取り入れる。 1. 力学場のベクトル解析：場のポテンシャル、ベクトル解析操作の数学的表現、曲線座標系における解析操作 2. 一般化座標：一般化座標、一般化力、エネルギー保存則 3. 仮想仕事の原理：仮想変位、仮想仕事の原理、束縛力とラグランジュの未定乗数法 4. ダランベールの原理：ダランベールの原理、ラグランジュの変分方程式 5. 変分法：変分法の問題、オイラーの微分方程式、条件をとともなう変分法の問題 6. ハミルトンの原理：ハミルトンの原理、最小作用の原理 7. ラグランジュの運動方程式：束縛条件と一般化座標、一般化力、ラグランジュの運動方程式の応用</p>			
<p>授業の進め方： OHPと板書によるノート講義で進めますが、理解を深めるために演習を頻繁に行います。講義においては、式の展開など数学的な表現の一部を空白とし、学生が補う部分を設けます。また、応用との関連に留意して適時例題を演習形式で進めます。また、授業が一方通行にならないように授業中に随時質問を受け付け、理解の進んでいない場合には適宜反復して講義を進めます。また、授業に対する質問・疑問・希望・要望・提案・他なんでも書いて提出してもらおうということを頻繁に行い、学生の授業に対する期待と理解度を随時把握して、講義の速度と方向を適宜修正しながら進めます。</p>			
<p>成績評価方法： 出席は取りませんが、授業中に行う演習課題成果などを中心に、定期試験と併せて、総合的に評価します。</p>			
<p>履修上の注意： 基礎力学Ⅰ、機械基礎数学を履修していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 参考書は自分に最も良く合ったものを選ぶことが大切です。「解析力学」という語がついた参考書が沢山あるので、図書館や大きな書店などで、自分にあったものを搜してみてください。希望があれば授業中に、教科書に準ずる参考書を推薦します。</p>			
<p>学生へのメッセージ： 一見複雑でその解法が難解に見える力学系が、解析力学の手法によって、ある一種の美しさをもって解くことが出来ます。これらの手法にふれることによって、力学の基礎概念を新しい視点から理解する喜びを味わって下さい。</p>			

材料力学 Strength of Materials			
学期区分	後期	区分・単位	必修 3単位
担当教員	中井善一, 富田佳宏 演習担当: 長谷部忠司, 田中 拓, 屋代如月, 塩澤大輝		
<p>授業の目的: 材料力学は、機械が安全かつ経済的に使われるために必要な強度、構造設計における基礎学問である。材料の強度、部材の変形・剛性、構造の安全性の評価を考える上で不可欠な理論として広く実用され、機械技術者が理解すべき最重要科目と見なされている。本講義では、一様断面の直線棒とみなせる形状の部材を主として取上げ、固体材料を安全かつ経済的に使用するために必要な変形と応力の解析法について述べる。</p> <p>到達目標: 直線棒に引張り、圧縮の力、ねじり、曲げのモーメント等が作用した場合に生じる変形、ひずみ、応力を解析するための理論を理解し、それを実際の機械・構造の設計に自由に用いることができる能力をもつこと。</p> <p>授業内容: 本講義では、まず、材料力学の歴史と関連の力学について解説した後、力の平衡、変形、ひずみ、応力など材料力学において必要な物理量の説明を行う。つぎに、直線棒にかかる力およびモーメントの方向により、問題を、引張り圧縮、ねじり、曲げに分類し、個々の問題に対する解析法を説明する。 引張りおよび圧縮では、外力および自重による変形、熱応力、残留応力、不静定問題について説明する。ねじりでは円形断面棒の問題を中心に、ねじりモーメントと発生する応力、ねじれ角の関係について説明する。曲げでは、種々の対称性を有する断面形状のはりに作用する曲げモーメント、せん断力、曲げ応力、せん断応力、たわみなどの解析法を説明する。ついで、曲げとねじりが同時に作用した場合について、その解析法を説明する。圧縮力を受ける柱の座屈問題では、オイラーの座屈を中心に説明を加える。また、曲線棒に引張りおよび曲げモーメントが加わった場合の応力および変形の解析法を述べる。材料力学の問題を統一的に解析する手法として有力なカスチリアーノの定理を中心にエネルギー法とその利用法について説明を加える。これらの基礎的な事項に加えて、切欠きにおける応力集中の問題について説明する。</p> <p>授業の進め方: 材料力学は、機械技術者にとって極めて重要な基礎学問であり理解することが強く要請されている。そこで、1学年を2クラスに分けて、少人数で週2回の講義を行うと同時に、演習は4クラスに分けて、7～8回行い応用力を養う。さらに、講義の進捗状況に応じて、力学的な発想能力を養うための課題を与えレポートを提出させるとともに、講義期間中に試験を4回程度行う。なお、講義に関する各種連絡は、講義中あるいは下記の掲示板で行う。</p> <p>成績評価方法: 演習(7～8回)成績の平均、講義中試験(4回)成績の平均、定期試験成績が全て40点以上のものに対して、次式で成績を評価する。演習成績の平均$\times 0.2$+講義中試験成績の平均$\times 0.4$+定期試験成績$\times 0.4$として、成績を評価する。(全ての成績は100点満点とする。また、欠席は0点として平均を計算する。)追試は、成績が40点以上のものについてのみ行う。追試において、60点以上のものについて単位を認定する。ただし、この場合の成績はCとする。</p> <p>履修上の注意: 基礎力学I, 機械基礎数学を履修し、それらの内容を十分に理解していること。</p>			
<p>教科書・参考文献など: 教科書: 富田佳宏, 中井善一他著「材料の力学」(朝倉書店) 参考書: なし</p> <p>学生へのメッセージ: 本講義内容の理解のためには、予習、復習を行い、演習問題を各自独力で解くことは不可欠です。また、力学的な発想力を養うために周りにあるものの強度・安全性についても興味を持ちましょう。 講義内容に関する質問は、随時受付けています(メールでもかまいません)。その他、講義に関する情報を、固体力学研究室ホームページ(http://solid.mech.kobe-u.ac.jp)に掲載するとともに、メールでも通知しています。</p>			

熱力学 I Thermodynamics I			
学期区分	後 期	区分・単位	必 修 3 単位
担当教員	平澤茂樹, 浅野 等		
<p>授業の目的:</p> <p>私たちの生活では様々な形態でエネルギーを使用しています。特に、電気エネルギーは必要不可欠ですが、電力使用量のうち8～9割は熱エネルギーを動力に変換する機関を利用して発電されています。また、自動車エンジンや空調機器においても熱エネルギーによる機関が利用されています。</p> <p>すなわち、地球環境保護に基づいた省エネルギーを推進するためにはこれらの動作原理を知ることが重要です。この授業では、熱エネルギーを動力に変換する、あるいは空調システムのように熱を授受するための基本事項について講述します。また、これらの基本事項に基づいて動力機関や冷凍機器・ヒートポンプ、あるいはそれらを構成する動作原理について説明します。</p> <p>到達目標:</p> <p>熱エネルギーから仕事を取り出す過程を理解し、作動流体の状態変化について計算できる能力を身につける。さらには、ガソリンエンジン・ディーゼルエンジン・ガスタービン・蒸気タービン・冷凍システム等の原理を理解し、エネルギー変換効率を評価できることを目標とする。</p> <p>授業内容:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. エネルギー・環境問題における熱力学の役割 2. 状態方程式, 内部エネルギー, 比熱 3. 熱力学の第1法則, 等温・等積・等圧・断熱過程 4. 系, 状態量, 熱力学の第0法則 5. エンタルピー, エントロピー 6. サイクル, カルノーサイクル 7. 熱力学の第2法則, クラジウスの原理, トムソンの原理 8. スターリングエンジン 9. エントロピー増大 10. 自発的に起こる変化, 平衡条件 11. 自由エネルギー 12. 定常流動系, 最大仕事 13. 有効エネルギー, エクセルギー <p>授業の進め方:</p> <p>板書による講義を中心に進める。また、週2回の授業のうち1回は基本的に演習を行う。</p> <p>成績評価方法:</p> <p>中間試験, 期末試験, ならびに演習, レポートの結果を総合的に評価する。</p> <p>履修上の注意:</p> <p>特になし</p>			
<p>教科書・参考文献など:</p> <p>教科書: JSME テキストシリーズ 熱力学 (日本機械学会)</p> <p>参考文献: 工業熱力学基礎編 谷下市松著 (裳華房)</p> <p>学生へのメッセージ:</p> <p>熱力学は覚える学問ではありません。式や定義を単に記憶するのではなく、その概念を理解するように心がけるようにして下さい。演習では、関数電卓を使用しますので、必ず携帯しておいて下さい。</p>			

機械力学 I Machine Dynamics I			
学期区分	前期	区分・単位	必修 3単位
担当教員	神吉 博, 安達和彦		
<p>授業の目的: 自動車や鉄道車両は走行中に、飛行機やヘリコプターは飛行中に、また船舶は航行中にいろいろな力を受けて振動する。各種の産業機械は動力部や可動部が原因となり振動する。建物や橋は風や地震が原因となり振動する。機械力学は機械・構造物に発生する振動を工学の立場から論じる。 機械力学 I では、機械・構造物に発生する振動を解析するための基本的な考え方、振動の小さい機械を設計する基礎と、発生した振動を低減または抑制する方法を理解することを目的とする。</p> <p>到達目標: 機械・構造物の動力学系としての数学モデルの構築、運動方程式の誘導、振動現象の解析ができること。数学モデルによる振動解析の結果と実際の物理現象との関連を理解できること。 特に機械力学 I では、最低限、1自由度系と2自由度系の振動を完全に理解できること。</p> <p>授業内容: 以下の順で講義を行う。 1. 振動学の基礎 (単振動, 二つの単振動の合成, 振動系の基本要素, 励振の種類) 2. 力学の基礎事項と運動方程式 (自由度と一般化座標, 仕事とエネルギー, 運動方程式の誘導, 運動方程式の線形化) 3. 1自由度系の振動 (非減衰自由振動, 固有振動数の計算法, 減衰自由振動, 強制振動, 過渡振動) 4. 多自由度系の振動 (2自由度系の振動, 多自由度系の振動の一般論) 5. 連続体の振動 (弦の振動, 棒の縦振動およびねじり振動, はりの曲げ振動, 連続体の固有振動数の計算法)</p> <p>授業の進め方: 板書中心の講義と、毎回の講義で講義内容のポイントとなる事項について小テストを行う。講義に関連する内容のレポートを次回の講義までの宿題とする。</p> <p>成績評価方法: 中間試験, 学期末試験, 小テストおよびレポートを総合的に評価する。上記の到達目標への達成度を中間試験と学期末試験の成績に重点において評価し、成績評価を行う。</p> <p>履修上の注意: 基礎力学 I および II で学んだ力学の知識を利用する。また線形代数学 I の行列に関する知識も利用する。この講義は、より実的な振動を扱う機械力学 II や、振動を制御することもできる制御工学 I・II の講義へつながる。</p>			
<p>教科書・参考文献など: 教科書: 「工業振動学」, 中川・室津・岩壺 共著, 第2版, 森北出版 参考書: 「振動の工学」, 鈴木 著, 機械工学基礎コース, 丸善 (内容は比較的易しい) 「機械力学 I ー線形実践振動論ー」, 井上・松下 著, 機械工学基礎講座, 理工学社 「振動の考え方・とらえ方」, 井上・木村・古池・佐藤・佐藤・鈴木・田中・森井・矢鍋 共著, オーム社 演習書: 「例題で学ぶ 振動工学」 鈴木 編, 丸善 数学関係の参考書: (内容が易しい) 「キーポイント フーリエ解析」, 船越 著, 理工系数学のキーポイント9, 岩波書店</p> <p>その他の文献: 「機械振動論」, デン・ハルトック 著, 谷口・藤井 共著, 改訂版, コロナ社 (古典的名著, 教科書ではあるが実例が豊富で機械工学 I と II の内容を網羅している) 「振動をみる」, 田中・大久保 共著, テクノライフ選書, オーム社 「振動を制する ダンピングの技術」, 鈴木 著, テクノライフ選書, オーム社 「モード解析入門」, 長松 著, コロナ社 「モード解析ハンドブック」, モード解析ハンドブック編集委員会 編, コロナ社 「技術屋の心眼」, E. S. ファーガソン 著, 藤原・砂田 訳, 平凡社</p> <p>学生へのメッセージ: 機械力学 I の講義では、振動現象の解析と評価、振動の対策のために最も重要な基礎をみなさんに講義します。機械力学の知識なくして、振動や騒音の問題は解決できません。理論的にじっくりと考え、振動という物理現象を正しく理解する能力を身に付けましょう。 板書量も多いですが、教科書と自筆ノートが、将来、現場で振動や騒音と問題に直面したとき、きっとみなさんの役に立ちます。</p>			

流体工学 Fluid Engineering			
学期区分	前期	区分・単位	必修 3単位
担当教員	富山明男, 細川茂雄, 宋 明良		
<p>授業の目的: 管路系における流れの基礎, 流体機械内部の流れの基礎としての, 実用的な流れの振る舞いの理論, 実験結果について理解を深める。また, 流体力学の基礎についても理解する。</p> <p>到達目標: 実用的な流れの特性を理解し, さまざまな応用問題について簡単な演算により解決できる実力を養う。</p> <p>授業内容: 流体の性質 密度, 比重, 圧縮率, 粘性, 表面張力 流体静力学 静止流体の圧力, 浮力と浮揚体 完全流体の流れの諸定理 連続の式, 運動方程式, ベルヌーイの式, 運動量の法則, 角運動量の法則 粘性流体の流れと管摩擦 層流と乱流, 管摩擦による圧力損失, 円管内の層流, 乱流の摩擦応力と速度分布, 粘性流体に対するベルヌーイの式の拡張, 実用公式 管路系の損失ヘッド 水力勾配線およびエネルギー勾配線, 種々の損失ヘッド, 複合管路における流れ 物体の抵抗と揚力 物体に作用する力, 境界層, 摩擦抵抗, 圧力抵抗, 翼および翼列, 翼周りの循環と揚力</p> <p>授業の進め方: 週2回の授業で流体工学の基礎および考え方を講述し, 適宜行う演習により授業内容のより深い理解をはかるとともに, 問題解決の力を養うことを目指す。授業中にも適宜演習問題を取り上げる。</p> <p>成績評価方法: 期末試験, 中間試験, および出席を考慮して成績を評価する。</p> <p>履修上の注意: 簡単な力学と微積分学との知識を前提としている。</p>			
<p>教科書・参考文献など: 参考書: 「水力学」宮井善弘, 木田輝彦, 仲谷仁志 著, 森北出版</p> <p>学生へのメッセージ: 特にオフィスアワーはもうけないが, 疑問点があればいつでも質問に応じる。</p>			

材料工学 I		Engineering Materials I	
学期区分	前期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	保田英洋		
<p>授業の目的： 固体中の原子と電子のふるまいに基づく材料物性学の基礎について述べる。 物質を構成する原子の結合と結晶構造，結晶の対称性と結晶構造を同定するための回折現象，結晶中の自由電子とその並進対称性の問題，原子の運動によっておこる格子振動等について取りあげる。原子・電子レベルの素過程が種々の材料の諸性質を決定するが，それを理解するために必要な基本的内容について説明する。</p> <p>到達目標： 材料を結晶構造や電子構造のレベルにまでさかのぼったミクロな視点で理解するための基礎知識を習得する。また，それに基づき，様々な条件下で使用される材料の諸性質に関して理解してゆくための素養を身につけることを目標とする。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 物質の結晶構造 2. 結晶結合 3. 結晶による回折 4. 自由電子論 5. エネルギーバンド 6. 格子振動 <p>授業の進め方： 授業はノート講義とする。</p> <p>成績評価方法： 授業時間中に定期的に行う簡単な演習やレポートの成績および期末試験の成績を総合して判定する。</p> <p>履修上の注意： 物理学，化学に関する初歩的な知識をもつことを必要条件とする。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書として，「キッテル固体物理学入門 上」（丸善）を使用する。参考書としては，「固体物理学 ー新世紀物質科学への基礎ー」（シュプリンガー），「バーンズ固体物理学②固体論の基礎，同③固体の電子論」（東海大学出版会）等を適宜参照されたい。</p> <p>学生へのメッセージ： 材料は機械を構成する部品にすぎないと考えられがちであるが，近年，マイクロアクチュエータのように材料そのものの結晶構造変化を利用して機械的な動作をするものも出てきている。今後，小さな機械を創るためには，部品を組み立てるという概念が取り除かれ，材料自身が高機能化され，ミクロなスケールで構造化されることが必要となっている。こうした背景から，材料を常に原子のレベルで観ることを念頭に置いて受講することを希望する。授業中の質問は大歓迎です。</p>			

機構学 Mechanism and Mechatronics			
学期区分	前期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	大須賀公一		
<p>授業の目的： 全ての機械（自動車，ロボット，メカトロニクスシステムなど）には何らかの運動要素が含まれており，それらが組み合わさってその機械全体の動きが生み出される。この運動要素を「機構」と呼び，どのような機構が考えられ，ある所望の運動を実現するためにはどのような機構を構成すればよいかを数理的に考察する学問が「機構学」である。本講ではいろいろな具体例を挙げながら機構学の基礎を身につけることを目指す。</p> <p>到達目標： まずいくつかの機械をとりあげ，その中に機構がどのように入っているかを概観する。次に，具体的な機構の例を数多く示し，機構の3次元運動のイメージを体感する。そして，いろいろな機構の運動解析や機構設計などについてその方法論を理解する。</p> <p>授業内容： 本講では以下の内容を講義する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. プロローグ 2. ベクトルとフレーム 3. 回転変換 4. 姿勢と姿勢変換 5. 成分演算と投影，微分関係 6. 歯車列，カム装置，リンク装置 7. 立体カム機構 8. シリアルロボット 9. パラレルロボット 10. エピローグ <p>授業の進め方： テキストの内容に則って進める（ただし適宜順序は入れ替えることもある）。基本的にはパワーポイントやビデオなどによる視覚的な講義を行い，簡単な実演なども行う。また，適宜補足資料を配付する。</p> <p>成績評価方法： 数回のレポートと期末試験により総合的に評価する。</p> <p>履修上の注意： 力学，線形代数，関数解析など基礎知識を身につけているとよい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書：牧野洋著：次元機構学（日刊工業新聞社） 参考書：高行男著：機構学入門（山海堂） J. Angeles 著，その他：カム機構の最適化（日刊工業新聞社） 小峯龍男著：Mathematicaによるメカニズム（東京電機大学出版局） 伊藤茂編：メカニズムの事典—機械の素・改題縮刷版（理工学社）</p> <p>学生へのメッセージ： 機構学は機械の設計には欠かせない学問です。是非とも受講してください。出席はとりません。すなわち最終試験に合格する自信があれば無理に出てくる必要はありません。ただし，出席するならば時間の最初から出席し，私語は慎むこと。</p>			

熱力学Ⅱ Thermodynamics Ⅱ			
学期区分	前期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	平澤茂樹		
<p>授業の目的： 「熱力学Ⅰ」では基礎事項を対象にしたが、「熱力学Ⅱ」では「熱力学Ⅰ」での基礎事項の拡張や実際の熱機関への応用が主になる。「熱力学Ⅰ」で修得した熱力学の基礎事項を、一般的に拡張すること、燃焼の基礎を解説する。ガスサイクル、実在気体を作動流体とする蒸気サイクルや冷凍機関について講述する。</p> <p>到達目標： 熱力学の一般関係式の運用、燃焼現象の理解、各種の熱機関の効率などが求められるようになること。</p> <p>授業の内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 熱力学の一般関係式、マクスウェルの熱力学関係式、ギブス-ヘルムホルツの式、比熱に関する式、ジュールトムソン効果、絞り膨張と自由膨張、クラペイロンクラウジウスの式 2. 化学反応、ギブス自由エネルギー、化学平衡 3. 燃焼、空気量、理論火炎温度 4. ガスサイクル、内燃機関の諸効率、オットーサイクル、ディーゼルサイクル、サバテサイクル、ガスタービン、ブレイトンサイクル 5. 蒸気の状態変化、相平衡、実在気体 6. ランキンサイクル、再熱サイクル、再生サイクル、複合サイクル 7. 冷凍機、ヒートポンプのサイクル、液化装置のサイクル、空気調和 <p>授業の進め方： 教科書と板書による講義と演習で進める。</p> <p>成績評価方法： 期末試験と演習レポートで評価する。</p> <p>履修上の注意： 「熱力学Ⅰ」をマスターしていることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書：JSME テキストシリーズ「熱力学」 参考文献：谷下市松著「工業熱力学（基礎編）」裳華房</p> <p>学生へのメッセージ： 「熱力学」は抽象的な理論から実用的な熱機関や冷暖房装置にまで適用できる壮大な科学である。</p>			

生産プロセス工学 Manufacturing Process Engineering			
学期区分	後期	区分・単位	必修 3単位
担当教員	柴坂敏郎, 鈴木浩文		
<p>授業の目的： 多くの工業製品は、部品素材に必要な形に加工し、他の部品と組み合わせ、性能試験をした後、市場に出荷される。製品の生産には、部品素材に必要な形を付与する時どのような加工法を用いるか、その際の加工装置にどのような機能、性能を持たせるか、さらにはそれらによる生産工程を如何に合理的に運用するかなどの知識が必要とされる。本講義では、部品素材に必要な形を付与する生産プロセスを対象とし、加工法の原理および具体的な加工方法を学ぶ。</p> <p>到達目標： 種々の加工法の特質に関する知識を身につけるとともに、機械部品形状が与えられたとき、適切な加工法が選定できること。さらに、より高度には機械から形状を想定したとき、その形状が製作可能であるかどうかの判断ができること。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 概要：生産プロセスの機械工学での位置付け、モノの作られ方とモノづくりの技術史 2～3. 塑性加工：塑性加工原理（塑性加工とは）、各種塑性加工法 4～6. 切削加工：切削加工原理（切削機構、被削性）、各種切削加工法 7. 研削加工：研削加工原理、各種研削法 8～9. 鋳造：鋳造原理、砂型鋳造、特殊鋳造 10. 精密加工：精密砥粒加工原理、各種砥粒加工法、超精密加工 11～12. 特殊加工：熱的加工法、電気化学的加工法、機械的加工法 13. 溶接：融接、圧接、溶断、ろう付け <p>授業の進め方： 多くの加工法があることから、講義を主体として授業は進め、講義内容は図形的な要素が多いことから OHP あるいは実際の製品を用いる。演習的要素として、使用工具、機械部品など実際の加工形状に触れることにより加工法の理解と重要性を体得させる。また、機械部品からその製作法と問題点などについてレポートにまとめさせる。</p> <p>成績評価方法： 授業の中でのレポートと学期末試験により成績を評価する。学期末試験は約 7 割程度、レポートは 3 割程度の評価とする。</p> <p>履修上の注意： 機械設計の基礎的素養となるので、機械部品と製作法の関係を十分理解すること。加工原理の理解には材料工学、材料力学、機械力学、流体工学などが必要とされるのでそれらの既修得が望ましい。また、生産工学の大系として、生産システム、生産機械工学の修得を希望する。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 講義資料はプリント配布する。 参考図書：機械工学便覧 加工学・加工機器 日本機械学会編 丸善、基礎切削加工学 杉田他 共立出版</p> <p>学生へのメッセージ： 気軽な来室による質問などは歓迎します。特に、5 時以後の夕方に時間的な余裕があります。メールでの質問は大歓迎です。</p>			

材料工学Ⅱ		Engineering Materials Ⅱ	
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	保田英洋		
<p>授業の目的： 材料組織を理解するために重要な平衡状態図の見方，構造に敏感な材料の諸性質を支配する格子欠陥，材料の処理における基礎的なプロセスである原子の拡散とそれに関連した相変態，機械的性質に重要な役割を果たす転位の挙動，材料のつくり込みの基本となる加工と熱処理等について取りあげる。原子レベルで起こるできるだけ単純な素過程の理解に立脚して，種々の性質を解釈できるような説明を行う。</p> <p>到達目標： 材料の機械的性質をはじめとした諸性質を支配する因子を把握し，それらを原子のレベルにまでさかのぼったミクロな視点で理解するための基礎知識を習得する。また，それに基づき，様々な環境や条件下で使用する材料の基本設計ならびに選択ができる必要最低限の素養を身につけることを目標とする。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 材料の構造の安定性（材料組織，平衡状態図，固体の熱力学と自由エネルギー） 2. 結晶格子欠陥（点欠陥，転位，面欠陥） 3. 原子の拡散と相変態（フィックの法則と拡散係数，拡散の機構） 4. 強度と変形（弾性と塑性，理想強度，転位の運動と結晶塑性，強化機構） 5. 加工と熱処理（加工硬化，回復・再結晶，析出） <p>授業の進め方： 授業はノート講義とする。</p> <p>成績評価方法： 授業時間中に定期的に行う簡単な演習やレポートの成績および期末試験の成績を総合して判定する。</p> <p>履修上の注意： 材料工学Ⅰを履修していることと，物理学，化学に関する初歩的な知識をもつことを必要条件とする。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書として，「改訂 機械材料学」（（社）日本材料学会）を使用し，「実用二元合金状態図集」（アグネ技術センター），「拡散現象の物理」（朝倉書店），「転位論入門」（アグネ技術センター），「金属物理学序論」（コロナ社），「金属塑性加工学」（丸善），「レスリー鉄鋼材料学」（丸善）「金属材料」（朝倉書店）等を適宜参照されたい。</p> <p>学生へのメッセージ： 一般的に，原子のレベルで制御された材料が，組あがった機械・構造物の目に見える特性の「縁の下の力持ち」としての能力を発揮します。「どのようなところにどのような材料が使われているか？」から「どこにはどんな材料を使えばよいか。」が考えられることが重要です。簡単なことでも質問は歓迎します。</p>			

機械力学Ⅱ		Machine Dynamics Ⅱ	
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	安達和彦		
<p>授業の目的： 本講義は機械力学Ⅰに引き続いて行われ、機械力学ⅠとⅡを合わせて履修することにより、機械力学のほとんどの範囲を学習できる。 本講義では、機械力学の基礎的な内容（機械力学Ⅰ）を理解した上で、自励振動、非線形振動など現実の機械に発生する振動を解析するための知識を身に付けることを目的とする。さらに、産業機械で振動が特に問題になる回転体の振動や振動計測についての知識など実務に役立つ技術を身に付けることを目指す。</p> <p>到達目標： 機械・構造物の動力学系としての数学モデルの構築し、振動現象の解析ができること。数学モデルによる振動解析の結果と実際の物理現象との関連を理解できること。特に自励振動や非線形振動など現実の機械に発生する振動現象について理解できること。</p> <p>授業内容： 以下の順で講義を行う。 1. 機械力学Ⅰの復習 2. 不規則振動（不規則振動の解析、自己相関関数、相互相関関数、パワスペクトル密度関数） 3. 自励振動（1自由度系の自励振動、多自由度系の自励振動、安定の定義、線形系の安定判別） 4. 非線形系の振動（非線形振動、非線形微分方程式の解法、非線形振動の特徴） 5. 回転体の振動（危険速度、ふれまわり、ロータのつり合わせ） 6. 振動計測とデータ処理（振動計測、データ処理、振動試験）</p> <p>授業の進め方： 板書中心の講義と、毎回の講義で講義内容のポイントとなる事項について小テストを行う。講義に関連する内容のレポートを次回の講義までの宿題とする。</p> <p>成績評価方法： 学期末試験、小テストおよびレポートを総合的に評価する。上記の到達目標への達成度を中間試験と学期末試験の成績に重点において評価し、成績評価を行う。</p> <p>履修上の注意： 機械力学Ⅰで基礎を学び、本講義で実際の現象に適用する。基礎力学Ⅰで修得した力学の基礎を用いる。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書：「工業振動学」, 中川・室津・岩壺 共著, 第2版, 森北出版 参考書：「振動の工学」, 鈴木 著, 機械工学基礎コース, 丸善（内容は比較的易しい） 「機械力学Ⅱ－非線形振動論－」, 井上・末岡 著, 機械工学基礎講座, 理工学社 「振動の考え方・とらえ方」, 井上・木村・古池・佐藤・佐藤・鈴木・田中・森井・矢鍋 共著, オーム社 「モード解析入門」, 長松 著, コロナ社 「モード解析ハンドブック」, モード解析ハンドブック編集委員会 編, コロナ社 数学関係の参考書：（内容が易しい） 「キーポイント フーリエ解析」, 船越 著, 理工系数学のキーポイント9, 岩波書店 その他の文献： 「機械振動論」, デン・ハルトック 著, 谷口・藤井共著, 改訂版, コロナ社（古典的名著, 教科書ではあるが実例が豊富で機械力学ⅠとⅡの内容を網羅している）</p> <p>学生へのメッセージ： 機械力学Ⅱの講義では、現実の機械に発生する自励振動や非線形振動を解析するための知識、産業機械で振動が特に問題となる回転体の振動や振動計測についての知識をみなさんに講義します。機械力学の知識なくして、振動や騒音の問題は解決できません。理論的にじっくりと考え、振動という物理現象を正しく理解する能力を身に付けましょう。 板書量も多いですが、教科書と自筆ノートが、将来、現場で振動や騒音と問題に直面したとき、きっとみなさんの役に立ちます。</p>			

制御工学 I		Control Engineering (part 1)	
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	大須賀公一		
<p>授業の目的： 「制御」の目的は、動きのある「物」「事」を自由にあやつることである。本講義では、制御を行う際に必要になる基本的な考え方について説明する。その過程で、制御のアイデアは難しいものではなく非常に直感的な考え方の上に立っていることを理解させる。</p> <p>到達目標： まず、制御とは何か、制御対象が与えられて所望の制御ができるようになるまでの道程、地図（海図）が体感できる。次に代表的な制御方策であるフィードバック制御の考え方や標準的な制御系の構造を理解する。そして、実際に制御対象を与えられてから制御系を構成するまでの具体的な方法論を理解し実施できるようになる。</p> <p>授業内容： 本講では古典制御理論を主とした基礎的内容を講義する。具体的には、制御対象の捉え方に関する考え方からモデリング方法について示す。そして、まず安定な制御対象に対する制御方策として周波数伝達関数に基づいた方法を述べ、そのあとで安定とは限らない制御対象に対する制御方策を示す。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. プロローグ 2. 動的システム（はじめに制御対象ありき） 3. 安定な線形動的システムの設計用モデル 4. 安定な線形動的システムの特解解析 5. 安定な線形動的システムのフィードバック制御 6. 一般的な線形動的システムの設計用モデル 7. 一般的な線形動的システムの安定解析 8. 一般的な線形動的システムのフィードバック制御 9. フィードバック制御の実現 10. エピローグ <p>授業の進め方： テキストの内容に則って進める（ただし適宜順序は入れ替えることもある）。基本的にはパワーポイントやビデオなどによる視覚的な講義を行い、簡単な実演なども行う。また、毎回補足資料を配付する。</p> <p>成績評価方法： 数回のレポートと期末試験により総合的に評価する。</p> <p>履修上の注意： 力学、複素関数論、フーリエ解析などの基礎知識を身につけているとよい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書：大須賀公一著 「制御工学」 （共立出版） 参考書：大須賀公一、足立修一著 「システム制御へのアプローチ」 （コロナ社） 荒木光彦著：古典制御理論—基礎編 （培風社） 足立修一著：MATLAB による制御工学単行本 （東京電機大学出版局）</p> <p>学生へのメッセージ： 出席はとりません。すなわち最終試験に合格する自信があれば無理に出てくる必要はありません。ただし、出席するならば時間の最初から出席し、私語は慎むこと。本講義は制御に関する一つの物語になっています。講義全体の大きなストーリーを掴むよう心がけてください。</p>			

流体力学 I		Fluid Mechanics I	
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	蔦原道久		
<p>授業の目的： 連続体としての流体の力学を基礎から講述する。流れを場としてとらえ，場に対して保存則を適用した基礎方程式の意味と働きを理解できるようにする。また流体力学の基礎として，非粘性，非圧縮性流体の力学を学習し，その適用性および限界を理解するとともに，複雑な流体運動を解析的に解くことができる力を養う。</p> <p>到達目標： 流体力学における数々の概念の意味を理解し，これらを用いて基礎的な問題が解ける。また複雑な流体現象を，方程式と境界条件でどのように表しうるかが分かるようにする。</p> <p>授業内容： 基礎的な事項 流体の定義，連続性，速度，加速度，変形速度，渦度，循環，応力テンソル，ニュートン流体，Biot-Savart の法則 基礎方程式 連続の式，流れの関数，Navier-Stokes 方程式，エネルギー消散の式，渦度方程式，エネルギー方程式，流れの相似性，次元解析 非粘性流体流れ 循環の保存，渦線の動き，渦なし流れでの速度ポテンシャル，Bernoulli の方程式， 非粘性流体の非回転流れ Laplace 方程式と解の一意性，一様流れと3次元特異点，点わき出しと点吸い込み，2重わき出し，解の重ね合わせ，球を過ぎる流れ，付加質量，特異点に働く力 2次元の非回転流れ 複素ポテンシャル，等角写像，円柱を過ぎる流れ，Joukowski 翼型，Blasius の定理</p> <p>授業の進め方： 授業で流体力学の基礎および考え方を講述し，適宜行う演習により授業内容のより深い理解をはかるとともに，問題解決の力を養うことを目指す。</p> <p>成績評価方法： 期末試験，中間試験，および出席を考慮して成績を評価する。</p> <p>履修上の注意： 連続体力学と微積分学，および流体工学の知識を前提としている。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書：「流体力学」今井 功著，岩波物理テキストシリーズ9 岩波書店 参考文献：「流体力学－理論への入門」チャ・シュン・イー著 蔦原ら訳，アイピーシー</p> <p>学生へのメッセージ： 特にオフィスアワーはもうけないが，疑問点があればいつでも質問に応じる。</p>			

連続体力学 Continuum Mechanics				
学期区分	後期	区分・単位	選択	2単位
担当教員	長谷部忠司			
<p>授業の目的： 連続体力学の枠組みを学ぶことを通して、機械工学科で学ぶ複数の基礎力学科目（材料力学、流体力学、熱力学、機械力学）を一般的な観点から統一的に理解するとともに、さらに高度な各種数値解析を行う上で必要十分な基礎的能力を習得することを目的とする。本講義で得た知識は、後続の弾性力学、固体力学、流体力学等の三次元連続体を取り扱う力学を学ぶ上での不可欠な基礎をなす。また、設計・製造における CAE 技術の基礎となる有限要素法等を理解し実際に使用する上での基盤を築くことができる。</p> <p>到達目標： 連続体力学は応用数学の一分野と看做すことができ、閉じた理論体系の中で、各種幾何学量および物理量を厳密な形で導出していく。ここではテンソルの概念が中心をなし、その広範囲な適用性の故、内容は極めて抽象的である。本講義では、連続体力学を通してテンソル解析の一端を実践的に習得するとともに、学術研究のみならず実際の設計・製造におけるこうした抽象的な学問体系のもつ、普遍的かつ強力な側面を体感し、高度な視点で研究や実際のものづくり等を捉える能力について考える機会を提供したい。</p> <p>授業内容：</p> <p>第1回 連続体力学の概要： 連続体力学の位置付け・応用例。連続体とは何か？テンソルとは何か？ 物体と配置，物質表示と空間表示，物質時間導関数。</p> <p>第2回 変形と運動学(1)～変形とは何か？～：変形勾配テンソルと極分解。直交テンソルとその性質。</p> <p>第3回 変形と運動学(2)～ひずみの測度とひずみテンソル～： Green-Lagrange および Almansi-Euler ひずみテンソル，微小ひずみテンソル</p> <p>第4回 変形と運動学(3)～速度勾配テンソル～： 非線形問題と増分解析，ひずみ速度テンソル。スピントテンソルと軸性ベクトル。</p> <p>第5回 物理基本法則と応力(1)～体積積分の物質時間導関数～： 各種物理量の体積積分標記，Green-Gauss の発散定理</p> <p>第6回 物理基本法則と応力(2)～質量保存則と連続の式～： 全体系と局所系。</p> <p>第7回 物理基本法則と応力(3)～運動量の保存則と力の概念～： 力とは何か？ 表面力と応力ベクトル</p> <p>第8回 物理基本法則と応力(5)～運動方程式と応力テンソル： 応力ベクトルと応力テンソル，応力テンソルの対称性</p> <p>第9回 物理基本法則と応力(6)～各種応力テンソルと相互関係：Cauchy 応力，第一種・第二種 Piola-Kirchhoff 応力，Kirchhoff 応力テンソル，応力速度。</p> <p>第10回 運動学と力学を結ぶ構成式(1)～Hooke 弾性体の構成式～： 幾何学量と力学量，弾性と塑性，弾性力学と塑性力学</p> <p>第11回 運動学と力学を結ぶ構成式(2)～Newton 粘性流体の構成式～： 流体の分類と現象論，Stokes の式，Navier-Stokes の式</p> <p>第12回 まとめ(1)～有限要素法定式化に向けて～： 境界値問題，有限要素法の考え方と定式化</p> <p>第13回 まとめ(2)～さらなる学習に向けて～： 熱力学第2法則と構成式の定式化，一般化連続体力学の概要，最先端のマルチスケール固体力学</p> <p>授業の進め方： 平成18年度より，ppt 中心の授業スタイルに切り替えている。毎回講義内容に関するオリジナルプリントを配布し，スクリーン上に図や式を表示しながら詳細な説明を加える形式を採る。専門用語については，英語標記を必ず併記するとともに，発音についても説明を加える。また，受講生からの要望に応じて英語での説明・講義を行う。</p> <p>成績評価方法： 随時基礎事項および練習問題に関するレポートを課し，授業の受講態度や内容を加味して平常点とする。学期末の試験期間中に試験を実施し，平常点（30%程度考慮）と併せて総合的に評価する。必要に応じて中間試験を実施する（平常点算出の際に加算）。</p> <p>履修上の注意： 材料力学および基礎力学を習得していることが望ましい。</p>				
<p>教科書・参考文献など：</p> <p>教科書： 富田佳宏著，連続体力学の基礎，養賢堂。標準教科書として使用する。</p> <p>参考書： (1)久田俊明著，非線形有限要素法のためのテンソル解析の基礎，倍風館 テンソル解析の具体的かつ豊富な演習問題が含まれており，高度なテンソル演算を習得するためには併用することが望ましい。</p> <p>(2)A. J. M. Spencer, Continuum Mechanics, Dover (ISBN 0-486-43594-6) 本科目を英語で学習したい場合に参照されたい。</p> <p>(3)その他：適宜，講義中に紹介する。</p> <p>学生へのメッセージ： 本講義は後続の各種力学の講義の基礎となる内容であるので，できるだけ受講し，講義内容を理解しておくことが望ましい。</p>				

熱・物質移動学 Heat and Mass Transfer			
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	竹中信幸		
<p>授業の目的： 熱移動現象は例えば熱機関，冷凍，暖冷房機器など，また機械工学分野だけでなく他の化学，原子力，宇宙工学などあらゆる分野において，温度差のあるすべての対象物で生じる熱エネルギーの移動プロセスである。本講義では3つの熱移動形態－熱伝導，熱対流，熱放射（ふく射）－の定性的な機構の説明から，個々の移動形態，実用計算，さらに実際の機器の性能向上に至る必要な概念，また，濃度差がある時に生じる物質伝達について述べる。</p> <p>到達目標： 伝熱に関する3つの形態について理解すると共に各種伝熱機器の熱設計計算が出来る。</p> <p>授業内容： 以下の項目について講義する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 伝熱の基礎：熱伝導に対するフーリエの法則，対流伝熱に対するニュートンの冷却法則，放射伝熱に対するステファン・ボルツマンの法則および伝熱基礎の紹介。 2. 定常熱伝導：平板から円筒（管），球などの定常状態における熱伝導の実用計算，ひれ付き伝熱面の計算法。 3. 非定常熱伝導：厚さ一定の無限平板，直径一定の無限円柱，球，半無限固体の非定常熱伝導の数学的解法。 4. 熱伝達と境界層理論：固体表面に生ずる速度，温度境界層の説明，平板と管内の強制対流熱伝達の基礎理論について流れが層流のと乱流の場合。 5. 強制対流熱伝達：強制対流による平板と管内の熱伝達，直交流をうける物体廻りの熱伝達などに関する実用公式。 6. 自然対流熱伝達：流れを強制的に起こさずに温度上昇による密度差すなわち浮力の作用によって生ずる自然対流熱伝達の解析と共に各種物体の自然対流熱伝達の実験式。 7. 沸騰と凝縮：相変化を伴う熱伝達の内，最も重要な凝縮と沸騰熱伝達。 8. 熱放射：熱放射の基礎，固体面又はガス体から放出または吸収される熱放射，放射エネルギーを放出する物体面とそれを受ける受熱面の性質と形態。 9. 熱交換器：高温の流体から低温の流体に熱を伝える熱交換器の熱計算。 <p>授業の進め方： 教科書に沿った講義と演習問題（レポート）。</p> <p>成績評価方法： 各授業毎のレポートの評価，中間と期末テストの結果から判定。</p> <p>履修上の注意： 流体工学，熱力学の修得，理解が必要。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書：八田夏夫著，「熱の流れ」，森北出版(株) 参考文献：谷下市松著，「伝熱工学」，裳華房， J.P.ホールマン著「伝熱工学」，ブレイン図書</p> <p>学生へのメッセージ： 演習問題に習熟していく事。</p>			

計測工学 Engineering Metrology			
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	大前 伸夫		
<p>授業の目的： 機械工学分野に関連する計測の重要性について講述する。例えば設計を行う時、その設計値は理想値（あるいは仮想値）であって、実際に加工して得る値は現実値である。現実値と理想値の差に関して、許し得る最大値と最小値の差が公差であって設計のビジョンやシビアリティ、または特殊性などに依存して変化する。物理量・機械量についていかに精密に（あるいは正確に）測定するかという問題を提起し、講義を行う。</p> <p>到達目標： 原理や基礎知識を理解することは勿論であるが、講義の成果として卒業研究テーマにおける工夫や改良に活用でき、また社会人として常識あるエンジニアを育てることを目的とする。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 測定論 精密度を正確度、あいまいさ 2) 系統的誤差と偶然誤差 3) アナログとデジタル 4) 寸法の測定 ノギス、マイクロメータから走査トンネル顕微法まで 5) 角度の測定 6) 真円度、円筒度等の形状測定 7) 表面あらかの測定 8) 質量の測定 9) 温度の測定 10) 抵抗、電流の測定 11) 周波数の測定、など <p>授業の進め方： 本年度はテキストを定めていない。従って、プリントの配布、OHPによるプレゼンテーション、ビデオ等で講義を進めるが、測定器の実物を紹介することもある。</p> <p>成績評価方法： 試験80点、レポート等20点の合計100点満点で評価する。</p> <p>履修上の注意： 講義の後半では測定する項目を予告し、予習に関する課題を与えることがある。 たとえ基本的な理解であっても参考書などを読むか、図書館等にて調査することが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 参考書：計測工学（第2版）松代、吉田編著（産業図書） 精密測定等 築添著（養賢堂）など</p> <p>学生へのメッセージ： 予習も復習も大事ですが、何よりも授業時間中に理解すること。 毎年有効数字の桁数もまともに回答できない受講生がいます。常識の欠如を残念に感じる。</p>			

電気工学概論				
学期区分	後期	区分・単位	選択	2単位
担当教員	中田修平			
<p>授業の目的： 電気の歴史，電磁気学と電気・電子回路の基礎，種々の電気機器の仕組みや動作原理を学習しながら，電気・電子工学の基礎知識を修得する。</p> <p>到達目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 比較的簡単な電気回路，電子回路についてその動作が理解できること。 2. 身近な電気機器がどのような原理で動いているかを説明できること。 3. 実験装置の設計や計測装置の製作にあたって必要な電気部品を想定できること。 <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 0. 序論：授業内容の概要，工学と技術，電気の歴史 1. 電荷と電界：電位，電界，コンデンサ，静電エネルギー 2. 電流と磁界：電流によって発生する磁界，磁束密度，電磁誘導，インダクタンス 3. 電気回路：交流回路，インピーダンス，共振回路，過渡現象 4. 電気機器：モータ，発電機，変圧器 5. 電力工学：3相交流，電力の発生・輸送，パワーエレクトロニクス 6. 半導体：半導体物性，トランジスタ，パワーデバイス 7. 電子回路：トランジスタの等価回路，増幅回路，発振回路，論理回路，電源回路 8. 電気工学の応用：エネルギー貯蔵，電気自動車，加速器・核融合，リニアモーターカー <p>授業の進め方：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 電気部品，電気機器の実物回覧，プロジェクターなどを使って直感的に理解しやすくする。 2. 授業毎の演習などによって理解を深める。 <p>成績評価方法： 出席，講義毎の理解度テスト，レポート，学期末試験</p> <p>履修上の注意： 電気磁気学の基礎と微分方程式解法を修了していることが望ましい。</p>				
<p>教科書・参考文献など： 参考書 北村池，「電気工学概論」，電気学会（出版元：オーム社）</p> <p>学生へのメッセージ： 電気回路，電気機器に親しむ「きっかけ」をつかんで欲しい。</p>				

データ解析 Data Analysis			
学期区分	後期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	長谷部忠司, 木之下博, 中本圭一, 塩澤大輝		
授業の目的: 機械工学における情報処理教育の基礎として, データ解析の基本的な概念を学び, プログラミングに関する講義および演習を通して以下の能力を身につける。 1. 確率・統計, 多変量解析等の理論的概念の基礎。 2. 計算機を利用したデータ解析能力。			
到達目標: 1. 確率・統計, 多変量解析等の基礎を理解する。 2. データ解析に関するプログラミング能力を身につける。			
授業内容: 1. 確率・統計の基礎 (3回) (a) データの整理 データの持つ情報を失うことなく, データ全体を的確に表現するために使用される, 平均値, 標準偏差および分散などのデータの縮約値を理解する。 (b) 確率の基礎と確率分布 離散型分布である2項分布およびポアソン分布, 連続分布である正規分布, 一様分布や指数分布の特性について述べ, それらの確率分布の期待値, 分散について解説する。 2. データ解析手法 (3回) (a) サンプルデータからの統計量の算出方法や, 最小二乗法などのデータ解析法について講述し, それらのプロセスをフローチャート化する方法を学ぶ。 (b) 上記フローチャートに基づく Fortran および C 言語でのプログラミングについて解説する。 (c) 回帰分析を中心にモデルの基礎を解説する。 3. プログラミング言語の解説と演習 (3+4回) (a) Fortran および C 言語の基礎 (講義) 四則演算, ループ, 関数, 変数などについて, サンプルプログラムを交え, 両言語を対比しながら解説する。 (b) Fortran および C 言語の応用 (講義) サブルーチン, ファイル入出力などについて, サンプルプログラムを交えて, 両言語を対比しながら解説する。 (c) 統計処理プログラムの作成 (演習) 平均, 分散, 標準偏差, 偏差値を求める Fortran および C 言語プログラムを作成する演習を行う。 (d) 最小二乗法プログラムの作成 (演習) 最小二乗法を用いて与えられたデータに多項式をあてはめるプログラムを作成する演習を行う。			
授業の進め方: 各テーマ毎に講義内容に関するプリントを配布し, それに基づく講義を行う。理解を深めるために毎回講義終了時にレポート課題を提示する。計算機演習では, 各言語の一般的な問題から本科目に関する問題まで, スムースに移行できるよう配慮する。			
成績評価方法: 毎回の出席および提出レポート内容 (50%) および期末試験 (50%) を総合して成績を評価する。			
履修上の注意:			
教科書・参考文献など: 教科書: テーマ毎にプリントを配布。 参考書: 富田豊「初心者のための FORTRAN77プログラミング第2版」共立出版 川崎晴久, 「C & FORTRAN による数値解析の基礎」共立出版 加賀敏郎, 橋本茂司「回帰分析と主成分分析」日科技連 岡本雅典, 鈴木義一郎, 杉山高一「基本統計学」実教出版株式会社,			
学生へのメッセージ: 様々な実験データを収集し, 解析するためには計算機を活用することは必修である。積極的な姿勢で取り組み, 最も基本的なデータ解析手法を実際に計算機を使いながら身につけてもらいたい。			

システムシンセシス System Synthesis			
学期区分	前期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	田浦俊春		
<p>授業の目的： 工業製品や、それらのシステム（製造システムや資源循環システム等）を構築するための方法論について学習する。一般的に、システムを構築するためには、すでに存在するものに対して、その性質や振る舞いを理解する分析的手法（アナリシス）と、未だ存在していない原理や構造を新たに構築していく総合的手法（シンセシス）の双方が必要であると云われている。本講では、後者に関する手法のなかで、特にシステムを創造的かつ合理的にシンセシスするための方法論について学び、工業製品や生産システムの設計に必要な基本的な考え方を理解する。</p> <p>到達目標： シンセシスにより新たな知識や概念を創成することと、創成された知識や概念を合理的に最適化することの必要性と意味を理解するとともに、種々の手法の原理を理解し、実際の問題に応用できるようにする。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. アナリシスとシンセシス 2. 推論による知識創成（その1） 3. 推論による知識創成（その2） 4. アナロジー／メタファーによる概念創成 5. 合成による概念創成（その1） 6. 合成による概念創成（その2） 7. 最適化法（線形計画法） 8. 〃 （動的計画法その1） 9. 〃 （動的計画法その2） 10. 思決定法（基本的考え方） 11. 〃 （ミニマックス原理他） 12. ケーススタディその1 13. ケーススタディその2 <p>授業の進め方： 教室における講義が主であるが、必要に応じて演習も行う。</p> <p>成績評価方法： 定期試験の成績、レポート、出席状況などを総合的に考慮して評価する。</p> <p>履修上の注意： 問題意識をもって聴講することが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 近藤次郎著「システム工学」（丸善）、渡辺茂著「システムと最適化」（共立出版）、松原望著「意思決定の基礎」（朝倉書店）、佐藤充一著「問題構造学入門」（ダイヤモンド社）</p> <p>学生へのメッセージ： シンセシスの考え方の重要性和難しさを是非理解して欲しい。</p>			

量子力学 Quantum Mechanics			
学期区分	前期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	田中章順		
<p>授業の目的： 量子力学は、機械工学の基礎となる物理学の中で、特に材料の構造や物性を原子レベルで扱う時に不可欠な学問体系である。量子力学の基本概念を理解することにより、材料・物質に対するミクロな見方、考え方を習得することを目的とする。</p> <p>到達目標： 量子力学誕生のきっかけとなった古典物理学では説明できない事象とは何かという点から導入し、光と物質の二重性の概念、シュレーディンガー方程式、原子構造など原子レベルの現象を記述できる量子力学の基本概念を理解し、最終的には簡単な系における量子力学の基本方程式であるシュレーディンガー方程式を自力で導出できることを目標とする。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 量子力学の形成：光の二重性、物質の二重性、物質波、粒子と波 2. 量子力学の原理：波の重ね合わせ、粒子と波束、不確定性原理、状態の記述、波動関数、物理量とエルミート演算子、固有値と固有関数、シュレーディンガー方程式、波束の運動、状態の時間的变化 3. 量子力学の適用：自由粒子、ポテンシャル中の粒子、固体内の電子、トンネル効果 <p>授業の進め方： 板書を中心に講義を行う。基本概念の理解を深めるために、適時演習を行い、演習時間終了時に模範解答を配布し、解説を行う。</p> <p>成績評価方法： 学期末試験を実施し、その結果により成績を評価する。</p> <p>履修上の注意： 基礎力学Ⅰ、機械基礎数学、基礎力学Ⅱ、電磁気学、を履修していることが望ましい。また、フーリエ解析は量子力学の基本概念の理解の助けとなります。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 市販の「量子力学」という語がついた参考書がたくさん出版されており、本講義での内容は量子力学の一般論であり全ての書籍に網羅されている内容なので、教科書は特に指定はしない。</p> <p>学生へのメッセージ： 量子力学は、相対性理論と並んで、この世の中を支配している物理学的法則の最も根底に位置する学問です。一見難解に見える学問ですが、開き直れば、その基本概念の本質にふれることが出来ます。そして、この世の中を支配している力学を新しい視点から理解する喜びを味わって下さい。</p>			

材料強度学		Strength and Fracture of Materials	
学期区分	前期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	中井善一, 田中 拓		
<p>授業の目的:</p> <p>本講義の目的は、固体材料に力が加わったときに、加えた力に対して固体材料が示す抵抗を、普遍的で使いやすい形で定量化するとともに、それを用いて、機械および構造物の強度を評価し、それらが定められた使用期間中、安全性を保證できるように設計し、あるいは必要な点検と保守を加えることにより、実際に安全を保證するための諸体系を構成するために必要な知識と資料を提供することである。</p> <p>到達目標:</p> <p>固体材料の強度と破壊のメカニズムを理解することによって、強度設計を行う能力を養うとともに、破壊事故が起こった場合に、その原因を究明することのできる基礎的な学力を身につける。</p> <p>授業内容:</p> <p>本講義では、まず、変形および破壊の駆動力について述べ、それら駆動力が、どのような強度現象に対して有効であるかを説明する。次に、固体材料の破壊のメカニズムとその微視機構についての概論を述べる。その後、静的破壊、破壊じん性、疲労強度、高温強度、環境強度、および硬さと衝撃値について述べる。静的破壊および破壊じん性は、単調増加負荷のもとで起こる非時間依存性の破壊であって、機器・構造物の最終的な不安定破壊の原因となる現象である。疲労破壊は、繰り返し数依存型の破壊現象である。実機の破壊事故原因の大部分は、この疲労によるものであると言われており、最も重要である。高温強度とは、高温疲労や高温クリープのように、絶対温度で表した融点の1/2以上の温度域で顕著となる破壊現象であって、エネルギー関連機器などの高温で使用される機器の設計に不可欠な知識である。環境強度は、腐食疲労や応力腐食割れ、水素ぜい化などのように、腐食あるいは水素環境中で起こる時間依存型の破壊現象である。海洋構造物や化学プラント、発電設備などの設計に必要となるものである。硬さおよび衝撃値は材料の強度特性を簡便に評価する方法である。</p> <p>授業の進め方:</p> <p>授業内容の理解を促進するとともに、学生の理解度を授業内容に反映させるため、授業時間中に演習を行う。さらに、講義の進捗状況に応じて、課題を与え、レポートを提出させる。なお、講義に関する各種連絡は、原則として講義中に行う。</p> <p>成績評価方法:</p> <p>中間試験(40点)、演習(10点)、レポート(10点)、期末試験(40点)の合計で成績を評価する。試験には、教科書、ノート等の持ち込みを認める。ただし、出席回数が全講義回数の2/3以下のものは、成績評価の対象としない。</p> <p>履修上の注意:</p> <p>材料力学、および材料工学Iを既に履修し、それらの内容を十分に理解していること。</p>			
<p>教科書・参考文献など:</p> <p>大路清嗣, 中井善一著「材料強度」(コロナ社)</p> <p>学生へのメッセージ:</p> <p>本講義内容の理解のためには、予習・復習を行い、演習問題を各自独力で解くことが不可欠です。講義に関する質問は随時受け付けていますが、講義中でも、遠慮せずに質問して下さい。</p>			

弾性力学 Theory of Elasticity			
学期区分	前期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	田中 拓		
<p>授業の目的：</p> <p>機械や構造物を安全かつ経済的に設計するためには、固体材料に関する力と変形の力学が必要となる。この種の力学の中で最も初歩的な材料力学では、棒、はり、軸などの基本的な機械構造要素を対象として、これらに作用する応力とひずみの状態を様々な仮定によって単純化して解析する。本講義の弾性力学は、材料力学と比べてより精密な解析や、応力集中部をはじめとする複雑な形状要素の解析を行うもので、材料力学のアドバンスト・コースとも言える。</p> <p>本講義の序盤では、弾性力学の基礎方程式を解説するが、数学的取り扱いに偏らずに、図解説明を通して弾性力学の感覚を養うことも目的とする。講義の中盤では、基礎理論の応用例として、比較的単純な二次元問題や薄板の曲げ問題などの解法を修得する。講義の終盤では、弾性問題の最も代表的な数値解析法である有限要素法の基礎について説明する。</p> <p>到達目標：</p> <p>弾性問題の解析における基礎知識の修得および問題解決能力の養成を目標とする。具体的には、弾性解析のための基礎理論を理解すること、簡単な二次元弾性問題が解けること、簡単な応力集中問題の解をもとに強度計算ができること、薄板の曲げなどの基本的な問題が解けること、および弾性問題の数値解析法の基礎を理解することが目標となる。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 応力, (2) ひずみ, (3) 応力とひずみの関係, (4) 基礎方程式と境界条件, (5) 二次元弾性論と応力集中, (6) 薄板の曲げ, (7) ひずみエネルギーとエネルギー原理, (8) 弾性問題の数値解析法 <p>授業の進め方：</p> <p>教科書に沿って講義を進める。実際の弾性力学の問題を解く能力を養成するために、随時例題を盛り込み、さらに演習問題のレポート提出を期間中に数回課す。</p> <p>成績評価方法：</p> <p>期末試験の成績（70％）にレポートの成績（30％）を加えて総合成績を判定する。</p> <p>履修上の注意：</p> <p>材料力学を履修しておくこと。また、連続体力学も履修しておくことが望ましい。偏微分の知識を前提とする。</p>			
<p>教科書・参考文献など：</p> <p>当授業用の書き下ろし教科書を使用する。入手については学期開始前に掲示で連絡する。</p> <p>弾性力学に関する参考書は数多く、例えば以下のようなものがある。</p> <p>村上敬宜著 「弾性力学」 （養賢堂，1985年）</p> <p>井上達雄著 「弾性力学の基礎」 （日刊工業新聞社，1979年）</p> <p>小林繁夫，近藤恭平共著 「弾性力学」 （培風館，1987年）</p> <p>学生へのメッセージ：</p> <p>質問は随時受け付けるので、遠慮なく担当者のところまで来て下さい。弾性力学では非常に多くの数式を扱うこととなりますが、必要とされる数学的知識は限られたものであり、修得意欲さえあれば見た目ほど難しいものではありません。</p>			

制御工学Ⅱ		Control Engineering (part 2)	
学期区分	前期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	深尾隆則		
<p>授業の目的： 制御工学Ⅰではモデルとして周波数伝達関数や伝達関数を用いた古典制御理論を学んだ。本講義では、モデルとして状態方程式を用いた制御理論である現代制御理論に関する基礎知識を得る。</p> <p>到達目標： まず、古典制御理論と現代制御理論との関連を含めて制御理論全般が概観できるようになる。そして、モデルとして状態方程式を用いた制御理論である現代制御理論の基本的な考え方が理解でき、さらに先端制御理論を知ることができる。</p> <p>授業内容： 本講では現代制御論とその発展に関する制御理論を学ぶが、その応用例題として自動車のサスペンションシステムやステアリングシステムを考える。具体的には、以下のような内容を講述する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 現代制御論とは 2. モデリング，状態方程式 3. 安定性，可制御性 4. 極配置 5. 可観測性，オブザーバ 6. 最適レギュレータ 7. H_{∞}制御 8. H_{∞}標準問題 9. 非線形システムの安定性 10. ロボットの制御 <p>授業の進め方： テキストの内容を基に，理解しやすいと考える順に内容を入れ替えて進める。理解を助けるために，毎回授業内容をまとめた資料を配付する。</p> <p>成績評価方法： 数回のレポートと期末試験により総合的に評価する。</p> <p>履修上の注意： 基礎力学，複素関数論，常微分方程式論などの基礎知識を身につけているとよい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書：吉川恒夫，井村順一著 「現代制御論」 (昭晃堂) 参考書：大須賀公一，足立修一著 「システム制御へのアプローチ」 (コロナ社) 森泰親著「演習で学ぶ現代制御論」(森北出版) 野波健蔵，西村秀和著「MATLABによる制御理論の基礎」(東京電機大学出版局)</p> <p>学生へのメッセージ： 出席はとりません。本講義は制御に関する一つの物語になっています。講義全体の大きなストーリーを掴むよう心がけてください。また，ロボット制御の基礎にもなりますので，志のある人はしっかり理解して下さい。</p>			

流体力学Ⅱ Hydrodynamics Ⅱ			
学期区分	前期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	片岡 武		
<p>授業の目的： 流体力学Ⅰで学んだ基礎的事項をもとにして、我々が日常経験する実際の流れにより近い流体運動についての理解を深めることを目的とする。具体的には、渦運動、物体を過ぎる遅い流れ、および物体を過ぎる速い流れをイメージする。渦運動の本質を記述するため、完全流体の流れを支配するオイラー方程式系を取り扱う。物体を過ぎる流れにおいては、流体の粘性が物体に及ぼす力が支配的なため、粘性を考慮した基礎方程式であるナビエ・ストークス方程式を取り扱う必要がある。とくに速い流れの現象解明に必要な境界層理論の基礎的な考え方を解説する。</p> <p>到達目標： 最初に流体现象を支配する基礎方程式、つまり質量保存則、運動量保存則、エネルギー保存則の物理的意味と導出法を把握する。そこから導出されるオイラー方程式系をもとに、渦運動についての解説をおこない、その流れの特徴およびその物理現象を理解する。レイノルズ数が小さい遅い流れに対しては、ストークス方程式が用いられるが、その理論解の特徴と問題点等を解説する。物体を過ぎる速い流れに対しては、境界層流れの基礎方程式をナビエ・ストークスの方程式から導き、理論解、近似解を学ぶ。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 流体の振舞を支配する方程式 <ol style="list-style-type: none"> 1. 1 はじめに 1. 2 保存則 1. 3 導出 1. 4 Newton 流体, Fourier の法則 1. 5 非圧縮性流体 (密度一定の流体) の振舞を支配する方程式系 1. 6 渦に関する定義 2. 非圧縮性完全流体 <ol style="list-style-type: none"> 2. 1 支配方程式と境界条件 2. 2 渦の諸定理 2. 3 渦なし流れ 2. 4 渦領域をもつ流れ 3. 非圧縮性粘性流体 <ol style="list-style-type: none"> 3. 1 応力テンソル 3. 2 支配方程式と境界条件 3. 3 簡単な流れ (線形流) 3. 4 Reynolds の相似則 3. 5 Stokes 近似 3. 6 Oseen 近似 3. 7 境界層 <p>授業の進め方： 講義するとともに、適宜、演習問題を行う。</p> <p>成績評価方法： 期末試験の結果で成績を評価する。</p> <p>履修上の注意： 流体力学Ⅰを修得していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 参考書：「流体力学」巽 友正著 培風館</p> <p>学生へのメッセージ： 数多くの式が登場しますが数式の導出にとらわれるのではなく、その式が何を表すのかという物理的な説明ができるように心がけて下さい。</p>			

計算力学 Computational Mechanics			
学期区分	前期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	田川雅人		
<p>授業の目的： 材料、構造、流体、熱等の場の方程式で記述される諸現象を、コンピュータを用いて数値的に解析する際に必要となる基礎知識を講義する。離散化手法としては差分法、有限要素法を取りあげ、1次元と2次元の楕円型微分方程式の境界値問題、および放物型、双曲型微分方程式の初期値境界値問題を扱う。</p> <p>到達目標： 卒論や修論などで数値計算を行う際の基礎をしっかりと身に付けることを狙っている。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 物理現象と偏微分方程式 現象の数値モデル 拡散、波動、定常現象に対応する偏微分方程式 非線形現象と数値モデル (2) 数値計算手法の概説 差分法 有限要素法 (3) 1次元シミュレーション 楕円型方程式の境界値問題 放物型および双曲型方程式の初期値・境界値問題 精度と誤差 (4) 大規模な連立方程式の数値解法 クレマーの方法・ガウス消去法など (5) 2次元、3次元シミュレーション モデル化と実際の適用例 <p>授業の進め方： 基礎的な講義の合間に随時実際の本格的数値シミュレーションの可視化の画像を見せるなどしてシミュレーション技術の有用性多様性を認識させる。</p> <p>成績評価方法： 期末試験を最重要視するが、講義への出席、レポート提出などを考慮する。</p> <p>履修上の注意： 微分方程式、偏微分方程式、フーリエ級数、コンピュータプログラミング、流体力学、構造力学、熱伝導などの基礎知識を持っていることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 板書を主体とするが副読本として以下の文献を参照すること</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 偏微分方程式に数値シミュレーション…登坂宣好，大西和柴著…東京大学出版会 (2) 有限要素法概要…菊地文雄著…サイエンス社 (3) 数値流体力学シリーズ ①非圧縮性流体力学 ②圧縮性流体力学…東京大学出版会 (4) 流体力学の数値計算法…藤井孝蔵著…東京大学出版会 <p>学生へのメッセージ： 数値シミュレーション技術の基礎としての計算力学は、聴講するだけでなく、自ら計算をしてみることが理解を深めるために必要である。</p>			

エネルギー変換工学 Energy Conversion Technology			
学期区分	前期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	竹中信幸		
<p>授業の目的： 受講済みの必修科目である熱力学，流体力学，熱物質移動学の知識を基礎として，エネルギー変換にかかわる基本的事項を理解させる。発電等のエネルギー変換システムの事例とその効率について理解させ，高効率のエネルギー変換技術の可能性を検討させる。</p> <p>到達目標： 継続的にエネルギー問題に関心を持つようにする。各種ガスサイクル，相変化サイクルや直接変換サイクルの基礎を理解し，複合サイクルやコージェネレーション等の応用事例の知識を持たせる。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. エネルギーの基礎 2. 各種発電システムの原理 3. エネルギー変換における熱力学 4. エネルギー変換における流体力学 5. エネルギー変換における熱物質移動 6. 各種ガスサイクル 7. 原子力発電の原理 8. ランキンサイクル 9. 新しいエネルギーシステム <p>授業の進め方： 授業は板書で行う。 エネルギー変換に関する最近の話題について，適宜プリントを配布して説明する。 2，3回のレポート課題あり。</p> <p>成績評価方法： 試験を行う。ノート持ち込み可。コピー不可。 授業で行った基礎的事項の計算問題と論述問題。</p> <p>履修上の注意： 特になし。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書なし。 参考書は，熱力学，熱物質移動で使用の教科書</p> <p>学生へのメッセージ： エネルギー問題は今後共に重要な問題であり，機械工学に携わるものとしてはもちろんのこと，一般常識としても，基本事項を身につけ，継続的に関心を持ち続けることが望ましい。</p>			

生産機械工学		Machine Tool Engineering	
学期区分	前期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	鈴木浩文		
<p>授業の目的： 多くの工業製品は要望に基づいて設計（材料，形状，寸法の決定）され，部品素材を必要な形に加工し，他の部品とともに組み立てられ，性能試験をした後に市場に出荷される。製品性能は設計とともに生産（製造）過程（プロセス）にも大きく依存し，設計と生産は表裏一体の関係をもつ。製品の生産には，必要な形を付与する時どのような加工方法を用いるか，その際の加工装置にどのような機能・性能を持たせるか，さらにそれらによる生産工程を如何に合理的に運用するか等の知識が必要とされる。本科目では，各種生産機械のうち工作機械を代表例として，加工装置の構造・機能・性能について具体的に学ぶ。</p> <p>到達目標： 工作機械の基本的な構造，構成機械要素，運動機構，センシング・制御技術，さらにシステム化手法などの基礎的知識を習得する。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 工作機械の概要 2～4. 工作機械の基本的な構造構成 5～6. 工作機械の自動化と制御 7～8. 工作機械と加工システム 9～10. 工作機械と計測システム 11～12. 工作機械の試験および検査 13. 工作機械および加工システムの信頼性と保全対策 <p>授業の進め方： 資料のプリント配布とそのOHPに基づいて講義を進める。また理解を深めるため，3回程度の調査レポートおよびまとめ課題を与えるとともに，自動化工場などの機械の動きに関するビデオも活用する。</p> <p>成績評価方法： 学期末テストにより評価する。レポートは参考成績とする。</p> <p>履修上の注意： 機械工学実習で加工法について体験的に学び，生産プロセス工学などで多くの加工法を原理的に理解していることを前提として講義を進める。関連科目として制御工学，機械力学，フーリエ解析などを理解していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 講義資料はプリント配布する。配布資料の出展は主に「工作機械工学，伊東・森脇，コロナ社」である。 参考図書：基礎的事項に関する関連図書は自然科学系図書館に多数有る。</p> <p>学生へのメッセージ： 気軽な来室による質問なども歓迎します。特に，5時以降の夕方に時間的余裕があります。不在の場合にはメールでの質問も大歓迎です。 鈴木浩文：自然科学研究棟3号館114室 Tel 078-803-6149 Email: suzuki@mech.kobe-u.ac.jp</p>			

統計力学 Statistical Mechanics			
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	田川雅人		
<p>授業の目的： 熱力学で学んだ内部エネルギー・圧力・エントロピーや流体力学・流体力学で学んだ流速・粘性係数等は，気体・液体等の流体を連続体として捉えた場合の巨視的物理量であり，その物理的意味をより深く理解するには流体を構成する個々の分子の運動とその統計的性質を把握しなければならない。本講義では，熱力学・流体力学のさらなる理解を深めるために，分子の運動量やエネルギー等の微視的変数から巨視的変数を捉えなおすことが目的である。</p> <p>到達目標： 温度・内部エネルギー・エントロピー・圧力・流速・粘性係数・熱伝導係数等の巨視的変数，熱力学の第一，二法則，連続の式，ナビエーストークスの式等が，分子や原子の運動の統計平均の結果として得る方法を修得することにより，微視的世界と巨視的世界の関係を把握する。また，微小機器の設計・開発に必要な微視的熱流動現象を解析するための基礎力を身に付ける。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 2. 状態数 3. ボルツマン分布 4. 気体分子運動論 5. 平均自由行程 6. 分布間衝突過程 7. 固体比熱 8. 古典統計と量子統計 9. 電子放射とフェルミ分布 <p>授業の進め方： 板書講義する。また，確率・統計の基本を理解するための簡単な演習も講義中に実施する。</p> <p>成績評価方法： 学期末試験とレポートを基に評価する。両者の成績評価における比率は講義において説明する。</p> <p>履修上の注意： 熱力学，量子力学，材料工学を修得している方が望ましい。</p>			
<p>教科書・参考書など： 参考書として，「工業熱力学入門」竹中・小澤著，コロナ社，「統計熱物理学」藤田著，裳華房を推薦する。</p> <p>学生へのメッセージ： 事前準備として熱力学・材料工学の復習をしておくこと。講義中わかりにくいことがあれば積極的に質問すること。</p>			

固体力学		Mechanics of Solids	
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	富田佳宏		
<p>授業の目的： 機械工学において対象とする材料は、金属材料、高分子材料から木材あるいは生体材料まで多種多様であり、その応答も弾性変形とは大きく異なる。このような材料が最近多用されるようになり、その変形応答のモデル化ならびに設計法について理解することが機械、構造を設計する上で重要となっている。過酷な条件のもとで稼働する機械や構造物の設計においては、弾制限を超えた応力状態を想定した設計が行われる場合が多く、また、このような機械や構造物の安全性や成形性を考える場合、材料の非弾性的な応答を知り、その変形状態を予知することが不可欠となる。本講義では、連続体力学の非線形固体材料への特殊化の実際とその構成式、境界値問題の解析法、力学的最適設計の方法などについて述べる。</p> <p>到達目標： 弾塑性材、ひずみ速度依存性材、高分子材、生体材料等の構成式の表現方法、非弾性変形問題の数値シミュレーション法として多用されている有限要素法、最適設計法の基礎を理解する。</p> <p>授業内容： 材料の非弾性変形の特徴について述べ、弾塑性材料の降伏条件、流れ法則、弾塑性構成式の導出過程を詳しく述べ、後続の有限要素法に導入しやすい形式で表す。ついで、材料の変形応答のひずみ速度依存性を考慮するために粘弾塑性材料の構成式、ゴムやポリマーなどの高分子材料の構成式、生体材料の構成式について説明を加える。このような各種固体の変形挙動を解析するための指導原理となる変分原理や重み付き残差法について述べ、非線形有限要素法を導出する。最後に、材料や構造の最適設計法、生体に学ぶ新しい概念の設計法について概説する。</p> <p>授業の進め方： 教科書ならびに配布プリントを資料として講義を行う。講義と並行して適宜理解度を深めるための演習およびレポートならびに理解度を検証するテストを行う。</p> <p>成績評価方法： 成績は、演習、レポート、中間テスト及び期末テストにより総合的に評価する。</p> <p>履修上の注意： 材料力学、連続体力学、弾性力学及び計算力学等を履修し、理解していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書：富田佳宏著 弾塑性力学の基礎と応用 森北出版、富田佳宏著 連続体力学の基礎 養賢堂（連続体力学教科書）、富田佳宏 中井善一他著 材料力学 朝倉書店（材料力学教科書） いずれも、講義用に書き下ろされたもので、基本となる原理、基礎式の導出過程、応用について深い理解を得るために多くの例題と演習問題、詳細な解答をつけている。 参考書：講義にて知らせる。</p> <p>学生へのメッセージ： 講義内容についての質問は随時受け付けているので、講義担当者（富田佳宏教授）のところまで来られたい。特別な理由により、テストを受けられない場合は、上記までテスト開始以前に連絡をすること。連絡無しに、テストに欠席した場合は、単位が得られない。次年度新規に本講義を受講しなければならない。その場合、同時に開講されている講義科目は受講できない。 固体力学に関する各種情報は、固体力学研究室のホームページ（http://solid.mech.kobe-u.ac.jp）に掲載している。成績等についても、ホームページあるいは e-mail 等にて知らせる。</p>			

流体機械 Fluid Machinery			
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	片岡 武		
<p>授業の目的： 流体機械は、流体力学、流体力学で講述された流体の特性を積極的に利用した工学機器であり、幅広い分野で利用されている。流体力学、流体力学は、これらの機器の特性・作動原理の理解、開発・設計の基礎をなすものであり、本講義では流体力学の工業的利用形態の一つとして流体機器を取り上げ、講述する。 流体機器の種類と特性、流体力学的な動作原理の解説を通し、流体機器を利用、設計する上での基礎知識を得るとともに、流体力学の応用力を伸ばすことを目的とする。</p> <p>到達目標： ポンプ、圧縮機等、代表的な流体機械の作動原理を理解するとともに、それらを利用できる基礎知識を身に付けることを目標とする。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> はじめに 流体機械の定義、流体機械の種類について概説する。 流体力学の復習と管路設計 ベルヌーイの式および管路損失について復習するとともに配管部品の種類・規格について概説する。 水車 水力発電と水車の概説、水車の種類と特性およびその作動原理を解説するとともに、流体機械における相似法則について概説する。 ポンプ ポンプの種類を解説するとともに、ターボ機械の作動原理を理解するための基礎知識を解説する。また、キャビテーション、水撃現象などの流体機械で重要な流体现象について解説する。 送風機と圧縮機 送風機・圧縮機の種類を概説した後、ターボ形送風機・圧縮機の作動原理と特性および容積形圧縮機の作動原理と特性について解説する。 流体継手・トルクコンバータ 流体継手およびトルクコンバータの構造および作動原理を解説する。 <p>授業の進め方： 講義するとともに、適宜、演習問題を行う。</p> <p>成績評価方法： 期末試験の結果で成績を評価する。</p> <p>履修上の注意： 流体力学を修得していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 参考書：「流体機械」大橋秀雄，森北出版，「流体機械」村上光晴・部谷尚道，森北出版</p> <p>学生へのメッセージ： 流体機械は人の暮らしを支える身近で重要な機械・設備の要素です。身近な流体機械を探して講義内容と結び付けてください。</p>			

シミュレーション工学 Simulation Engineering			
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	未定		
<p>授業の目的： 最近、理論、実験につぐ第三の研究法としてのコンピュータシミュレーションが非常に注目されるようになって来た。空間スケールが極端に大きい現象（地球規模の現象など）、空間スケールが小さい現象（分子群の挙動など）、時間スケールが長い現象（将来の予測）、実験が不可能な危険な現象（原子炉の爆発による核物質の拡散など）などはどうしてもシミュレーションによらなければならない。さらにシミュレーションによって芽生えた分野もある。一例としては分子動力学である。カオスはシミュレーションを抜きにしては語れない。機械設計にはVR（ヴァーチャル・リアリティ）が援用されるようになった。このようにシミュレーションは確固とした第三の手法として確かにその可能性を有する。シミュレーションは非常に若々しく発展段階中で、将来が非常に楽しみな分野である。このように発展段階中にあるシミュレーションの考え方と手法について基本的な事柄から出発して最近の研究動向を交えて講義する。</p> <p>到達目標： 種々の現象を、モデル化し、基礎方程式系を定式化し、差分法で離散化し、プログラミングし、計算を実行し、得た数値データ群を図形化できることを通してシミュレーションの考え方を修得することが目的である。</p> <p>授業内容： 次の順序で進める。最近の研究動向にも触れる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. なぜシミュレーションか？（理論と実験的手法との相違） 2. 現象のモデル化 3. 基礎方程式系の定式化 4. アルゴリズム 5. スキームと離散化と近似精度 6. 打ち切り誤差と数値粘性 7. プログラミング 8. 丸め誤差と数値安定性 9. 数値解の妥当性 10. 数値データ群の図形表示 11. カオスとシミュレーションの関係 12. 複雑系とシミュレーションの関係 13. 分子動力学とシミュレーションの関係 <p>授業の進め方： 講義と演習（レポート）を組み合わせで行う。レポートは細かな内容のものが数個で、最後のレポートはある課題に対して上記の授業内容の1～10に基づいて、実際にプログラミングし、コンピュータで数値計算を実行するものである。</p> <p>成績評価方法： 定期試験とレポートで最終成績を決める。なお定期試験では考え方を問う。</p> <p>履修上の注意：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 計算力学を履修していること。 2. 本科目が興味深くなるためには、数学系の科目、物理系の科目、力学系の科目の力が重要である。 3. シミュレーションを応用できるための対象とする現象は機械工学の諸科目で扱われる。 4. 試験直前の集中的な勉強のみでは実力は養成されない。毎回の講義後の復習を必ず積み重ねる習慣をつけること。 			
<p>教科書・参考文献など： 教科書はない。参考書としては例えば、矢部ら著「シミュレーション物理入門」（朝倉書店）など。</p> <p>学生へのメッセージ： シミュレーション工学の学問体系は諸君より若く、現在、急速に発展中であって、今後、極めて発展する分野である。</p>			

生産システム工学 Manufacturing System Theory			
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	白瀬 敬一		
<p>授業の目的： 身の回りの工業製品は要求仕様を満足するように構造や形状が決められ、個々の部品を加工して組み立てることで仕様として与えられた機能を実現している。こうした工業製品を適正な品質と価格でタイムリーに提供するためには、設計から製造に至る生産プロセスの無駄を廃し、生産システムを合理的に運用する必要がある。ここでは生産システムにおける“ものづくり”の考え方、生産システムの構成と変遷、生産技術の現状と問題点を理解することを目的とする。</p> <p>到達目標： 工業製品を適正な品質と価格でタイムリーに提供することの難しさ、生産システムや生産技術の現状と問題点を理解し、次世代の生産システムを創意・工夫できるようなセンスを磨く。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 生産システムにおける“ものづくり” 工業製品を適正な品質と価格でタイムリーに提供することの難しさ、エンジニアの創意と工夫で変貌を遂げてきた生産システムの変遷について説明する。 2. 工業製品の設計と生産の流れ 人々のニーズを満たす（要求された仕様を満足する）工業製品が、どのようなことを考えて設計され、どのような機械や設備を使用して生産されるのかを考えながら、生産システムの概要を説明する。 3. 生産システム 生産システムの主要な構成要素として製品設計、生産設計、生産管理、生産工程、設備保全が挙げられる。これら構成要素の関係や役割を簡単に述べた後、生産設計に含まれる工程設計、作業設計について説明する。生産設計では生産のしやすさを考慮した設計の考え方、工程設計では加工法や加工順序の選択、作業設計では最適加工条件の決定などを説明する。 4. 生産システムとコンピュータ ハードウェアではNC工作機械やロボットの制御がコンピュータ化され、多品種の製品生産に柔軟に対処できるFMSが登場した。ソフトウェアではコンピュータを援用した設計・生産（CAD・CAM）、設計案の性能評価（CAE）、工程設計（CAPP）が実用化され、工場の自動化（FA）に貢献している。こうした生産システムの変遷とコンピュータの関わりとともに、コンピュータ統合生産（CIM）や仮想工場（ヴァーチャルファクトリ）に代表される最新の技術動向について説明する。 <p>授業の進め方： プリントを配布する。講義ではPCプロジェクタ、ビデオを用いて解説をする。</p> <p>成績評価方法： 期末試験の結果で成績を評価する。成績不良の場合には再試験を実施するが、授業の出席回数が少ない場合には再試験の受験を認めない。</p> <p>履修上の注意： 2年後期の「生産プロセス工学」、3年前期の「生産機械工学」と密接な関係にある。また、設計という観点では材料力学、材料工学、流体工学、機械力学、熱力学などの機械工学を網羅する総合的な知識が求められる。機械工学に関わる知識を総動員して“ものづくり”の本質を見極めて欲しい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 特定の教科書は用いない。参考図書を以下に示す。 ・NEDEK研究会「生産工学入門」、森北出版 ・人見「入門編生産システム工学」、共立出版。 ・岩田・中沢共著「生産工学」、コロナ社 ・藤村・安井共著「工作機械と生産システム」、共立出版 ・101選編集委員会編「やさしい生産加工技術101選」、工業調査会 など</p> <p>学生へのメッセージ： 現状の生産システムは、多くのエンジニアの創意と工夫で発展を遂げてきた。将来を担うエンジニアとして、生産システムや生産技術の現状と問題点を理解し、その解決のために創意と工夫ができるセンスを磨いてください。</p>			

知能システム工学 Intelligent System Theory			
学期区分	後 期	区分・単位	選 択 2 単位
担当教員	妻屋 彰		
<p>授業の目的： 様々な要求のため、今日の人工物はますます複雑・高度なものへとなっている。それに伴い、機械や装置の設計開発において、優れた要素開発を行うだけではなく、それらをどのように組み合わせることにより実現できるかという点が重要になってきている。本講義では、どのように問題を見つけ出して整理し、そのポイントにあわせた技法を組み合わせることで解決案を考案し、評価・決定するか、という創造活動の方法論と個々の技法の集まりであるシステム工学について、その基本的な考え方を理解し、用いられる技法とその利用方法を学ぶことを目的とする。</p> <p>到達目標： システム工学の基本的な考え方を理解するとともに、システム開発の各過程で用いられる技法を学び、実際のシステム開発において、問題設定とその解決を行うための基礎能力を身につける。</p> <p>授業内容： 以下の項目について、概ねこの順序で進める。また、近年の研究・技法や実際の事例、周辺分野での関連するトピックなどについても適宜紹介する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. システムとシステム工学 2. システムの価値と評価 3. プロジェクト・スケジューリング 4. データの統計的手法と要因の発見 5. システムのモデリングとシミュレーション 6. 最適化手法 7. システムの信頼性 <p>授業の進め方： 基本的にはプロジェクトを使用した講義で進める。基礎的内容を確認できるよう、ほぼ毎回、授業時間中の10分程度で簡単なクイズを行う。</p> <p>成績評価方法： 定期試験60%、クイズ（出席含む）・レポート40%</p> <p>履修上の注意： 「システム工学」という学問の性質上、機械工学の各分野に関連するが、特に、「システムシンセシス」や「生産システム工学」などの設計・生産に関連する科目は関連性が高いため、履修している（あるいは履修中である）ことが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書は使用しない。参考文献は講義中に紹介する。</p> <p>学生へのメッセージ： システム工学は確固たる理論的体系のある学問では（少なくとも現時点では）ありませんので、雑駁としていてわかりにくいかもしれませんが、自分の持っている多くの工学知識を組み合わせることで人工物を創造する、という皆さんの多くが将来行うであろうことへの一助になると思いますので、考え方をしっかりと自分のものにして下さい。質問などは、授業時間後でも研究室に来てもらってもかまいません。気軽に質問して下さい。</p>			

安全工学・工学倫理 Education for Mechanical safety and Engineering ethics			
学期区分	後 期	区分・単位	必 修 2 単位
担当教員	東海林 泰夫		
<p>授業の目的：</p> <p>近年、技術システムが巨大化かつ複雑・多様化してきたため、技術者にはより専門的な知識が要求されるようになった。一方で、技術があまりにも高度化しすぎてしまった結果、われわれ技術者の思惑とは異なり、技術の進歩が社会環境を益々悪くする一因にもなっている。すなわち、技術者それぞれの個人レベルのみでは、社会や技術システム全体への見通しや意志決定の方式がうまく機能しない状況になってきた。しかし、人類の存亡にかかわる技術を生業とする技術者には、専門家としての責任と社会からの期待がある。これからの時代の技術のあるべき姿を目指して、技術哲学をベースとした工学倫理・安全工学を修めることで、人類の健全で永続的な発展に寄与しうる責任感と使命感をもった技術者を育成する。</p> <p>習得スキル：</p> <p>企業内で活動する研究者・技術者あるいは技術マネージャーとして、技術を通じて「安全と安心」や「地球環境問題」についての社会的責務を果たすことができる素養、能力および倫理観。</p> <p>職務において相反する価値のはざまに倫理的な問題に遭遇したとき、速やかに意志を決定し、対応法やとるべき行動の方向性を見出すことができる技術者としての能力。</p> <p>内 容：</p> <ol style="list-style-type: none"> はじめに 講義の進め方と成績評価方法、なぜいま技術者の倫理か（専門職としての倫理）、工学倫理の位置づけ、ハインツのジレンマと創造的第3の解決法、倫理とモラルと道徳、マンハッタン計画（原爆開発プロジェクト）と科学者・技術者、技術倫理と技術者倫理 事例研究1 スペースシャトル・チャレンジャー号事故&コロンビア号事故と組織文化、シティーコープ・ビル崩壊 事例研究2 防止の成功例、ドイツ高速鉄道の脱線事故など 事例と倫理的考察 技術者倫理 技術者の社会的責任、二律背反（ジレンマ）、決疑論（線引き法）、ヒポクラテスの誓いとパターナリズムの弊害、技術者の説明責任、技術者の心眼、技術者の覚悟 事例研究3 フォード・ピント事件と費用・便益分析、功利主義の限界、三菱（ふそう）自動車の欠陥隠し事件、JCOの臨界事故と企業体質、東京電力の原発トラブル隠し事件と悲劇 事例研究4 の原子力技術、知力と体力、 ビジネス倫理 マスコミ報道の現状と対応、企業の社会的責任（ステイクホルダー）、集団心理と企業風土、意志決定のトリック、内部告発の現状と課題、倫理的利己主義（フリードマン） 環境倫理1 公害とPPPの原則、環境倫理学の3つの課題（地球の有限性、世代間倫理、生物保護）、地球環境問題と人間中心主義の限界、土地倫理から生態系中心主義へ、 環境倫理2 ディープエコロジー、エネルギー問題の現状、共有地の悲劇、地球温暖化問題（気候変動枠組み条約）を巡る国際状況、石油枯渇問題を考える 倫理学入門 ホッブスの自然状態、功利主義（最大多数の最大幸福）、個人を保護する視点の必要性、義務論（カント）、正義論（ロールズ）、徳倫理（アリストテレス）、倫理と法 応用倫理、生命倫理と環境倫理、経済倫理（利他主義と救命艇状況） 事例研究5 水俣病事件と職業倫理、トヨタの欠陥隠しと電子化偏重の課題、回転ドア事故と「技術の系譜」の問題、ハインリッヒの法則、雪印乳業の食中毒事件、牛肉偽造事件、営団地下鉄/日比谷線の脱線衝突事故と鉄道技術の課題 事例研究6 安全工学 事故調査の必要性と課題、安全に関連した心理学、ヒューマンファクター、組織事故、事故にともなう風評被害、「安全と安心」についての技術者の役割と責任 ま と め 技術コンサルタントのジレンマ、研究者の倫理と事例、日本の技術者の現状と立場、技術者としての存在価値をもつ、授業の総括 			
<p>教科書・参考文献など：</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 村田 純一：「現代社会の倫理を考える13－技術の倫理学」、丸善（2006） ○ 松木 純也：「基礎からの技術者倫理－技を生かす眼と心」、電気学会（2006） ○ 佐々木 力：「科学論入門」、岩波新書（1996） ○ 加藤 尚武：「環境倫理学のすすめ」（1991）& 「新・環境倫理学のすすめ」（2005）、丸善ライブラリー ○ 熊野 純彦：「西欧哲学史」、岩波新書（2006） ○ 村上陽一郎：「安全と安心の科学」、集英社新書（2005） など 			

工業経済 Industrial Economics			
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	田中 悟		
<p>授業の目的： 近年、イノベーション・グローバル化・規制緩和の進展を通じて、企業戦略は大きく変化し、これが日本の産業に大きな影響を与えている。本講義では、経済学（ビジネス・エコノミクス／産業組織論）の立場から、企業が用いる戦略の意味と効果について考える。講義の後半では、昨今のイノベーションをめぐる企業間競争と企業間協調についてやや詳しい検討を加え、イノベーションが産業の競争構造にどのような影響を及ぼすのかを、現在進行している知的財産権の強化政策の意味を交えながら考えていく。</p> <p>到達目標： 企業戦略の有り様を規定する経済的メカニズムを把握すると共に、イノベーションをめぐる企業行動と知的財産権制度が市場競争に与える効果の概観を理解することが期待される。</p> <p>授業内容： 講義はおおむね以下の順で進められる。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① ビジネス・エコノミクス（産業組織論）の基礎理論：競争と独占の経済理論 企業戦略を考察する上で必要不可欠な経済学的な論理について概説する。 ② 価格支配力を持つ企業の企業戦略 企業が採用する価格戦略・製品戦略について、現実の例を挙げながら紹介する。 ③ 競争と協調の企業戦略 企業が直面する市場環境に応じて、企業がどのように他企業と競争ないしは協調を行うかを考える。 ④ イノベーションをめぐる企業戦略 知的財産権制度の経済的意味と内容について概説した上で、イノベーションをめぐる重要な企業行動（研究開発活動・ライセンス・技術標準の形成と維持）の意味と効果について考察する。 ⑤ 知的財産権をめぐる政策とその功罪 上記④の内容をベースにしながら、近年の知的財産権強化政策（プロ・パテント政策）の功罪について考える。 <p>授業の進め方： 基本的には講義形式で授業を行うが、講義の後半部（上記④⑤部分）においては質疑応答を交えながら授業を進める。</p> <p>成績評価方法： 授業中に数回行われる課題・宿題（30%）と定期試験の結果（70%）を総合して評価を行う。</p> <p>履修上の注意： 特になし。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書：特に指定しない。 参考書：伊藤元重（2004）『ビジネス・エコノミクス』（日本経済新聞社） 浅羽茂（2004）『経営戦略の経済学』（日本評論社） 長岡貞男・平尾由紀子（1998）『産業組織の経済学』（日本評論社） Varian, H.R., Farrell, J. & C. Shapiro. (2004), The Economics of Information Technology: An Introduction, Cambridge University Press. 竹田和彦（2004）『特許の知識（第7版）』（ダイヤモンド社） * その他の参考書は、授業中に適宜指示する。</p> <p>学生へのメッセージ： 講義内容は積み重ね的な要素が強いので、講義へ出席し内容を理解していくことが望ましい。</p>			

機械工学基礎 Fundamental Mechanical Engineering			
学期区分	前期	区分・単位	必修 3単位
担当教員	白瀬敬一		
<p>授業の目的： 機械工学科に入学してきた学生が社会に寄与できる技術者・研究者になる夢を持てるよう、機械工学の概要、歴史、社会での役割、面白さ、難しさなどを概観・体験する。これによって、自発的に勉強・研究に取り組む今後の勉学環境へのソフトランディングを図る。</p> <p>到達目標： 機械工学の概要とその重要性を理解する。これによって、機械工学への興味を育み、自発的に学ぶ心構えを身に付ける。</p> <p>授業内容： 機械工学に関する入門的講義を行い、種々の角度から機械工学の歴史、社会的役割、工夫、仕組みなどを学ぶ。また、学科内研究室と企業の機械開発・製造現場の見学、レポート提出に必要な学科CAD室講習などを行う。最後にグループで機械設計製作を体験し、機械工学の面白さ、大切さ、難しさ、共同作業を体感する。</p> <p>(1) はじめに：機械工学とは何か、機械工学の歴史、社会的役割、可能性について平易な言葉で解説する。 (2) 機械工学の具体的紹介「産業と機械工学」：各産業から代表的なテーマを設定し、各テーマと機械工学との関わりを具体的に紹介する。 (3) CAD室講習とラボツアー：学科CAD室の使用心得を説明し、機械製作のためにインターネットから情報を収集する方法を紹介する。また各研究室を見学し、最先端の研究に触れる。 (4) 先輩からメッセージ：機械工学科を卒業して企業の第一線で活躍されている先輩を講師に招き、企業の現場での体験を聞く。 (5) 企業見学：機械に関わる企業の生産現場を見学し、ものづくりの本質に親しむ。 (6) 機械製作：少人数グループで3種類程度のテーマについて模型を製作する。いかに工夫して性能の良いものを作るか？ 機械工学（流体力学、熱力学、材料力学、機械力学、制御・機械加工など）を勉強すると性能アップに結び付く。最後は作品発表。</p> <p>授業の進め方： (1) はじめに：機械工学の概要を平易な言葉で解説する。 (2) 機械工学の具体的紹介：各産業からテーマを設定し、機械工学との関連を講義する。主に教授が担当。 (3) CAD室講習とラボツアー・グループに分かれて順に行う。CAD室講習は実習形式。全教員担当。 (4) 先輩からのメッセージ：機械工学科OBが自身の企業現場での体験を講義する。機械工学科卒業生が担当。 (5) 企業見学：地元企業の生産現場を見学する。 (6) 機械製作：少人数のグループ共同作業。グループ対抗の作品発表会を実施。全教員担当。</p> <p>成績評価方法： 授業の出席状況、レポート及び機械製作への取組みと作品および発表を基に厳格に行う。</p> <p>履修上の注意： 特になし</p>			
<p>教科書・参考文献など： テキストとしてプリント配布。</p> <p>学生へのメッセージ： 機械工学の世界へようこそ！ 機械工学の楽しさ、可能性、社会的意義と難しさを体感しましょう！</p>			

機械工学実習 Manufacturing Engineering Practice			
学期区分	前期・後期	区分・単位	必修 1単位
担当教員	白瀬敬一		
<p>授業の目的： 機械工学の目的の一つは、人類・社会に貢献する各種製品を製造することにある。こうしたいわゆるモノづくりの方法論を習得し、関連する学問内容を理解するためには、単に座学で学ぶだけでは不十分で、実際に自ら手足を動かして具体的な方法論を体得することが重要である。ここでは代表的な機械生産の基礎と方法を実習という形で体験し、各種の機械装置の基本的な操作方法を習得し、各種加工プロセスに対する理解を深めるとともに、機械生産に関連する学問の基礎を学ぶ。</p> <p>到達目標： 機械生産に用いられる各種機械装置・工具などの基本的な原理と操作・使用方法を習得し、自ら操作・使用できるようになること。ならびに、各種加工プロセスの基本的な原理を理解し、実際に生じる加工現象を観察して分析、評価する能力を養うこと。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 機械加工：代表的な工作機械である旋盤を用いて、基本的な切削加工を行う。 (2) 溶接：ガス溶接およびアーク溶接の溶接作業と製品の製作プロセスを学ぶ。 (3) 手仕上げ：罫書き、やすりがけ、ボール盤による穴あけなど、基本的な手作業と、フライス盤を用いた切削加工を行う。 (4) 鍛造：熱間鍛造によるたがね作りを通じて鍛造作業の実習を行うとともに、焼き入れなどの熱処理による金属材料の改質を体験する。 (5) F A：FMCを用いたNCプログラミングと切削およびシステム運転を行う。 (6) 機械解剖：エンジン付ポンプの分解、組み立てを行い、そのメカニズムの理解や機械要素の使い方を実践的に学ぶ。 <p>授業の進め方： 各実習の始めに基本的な機械装置の操作法、加工の原理、実習における注意事項などの説明を行い、各担当職員の指導のもとに実作業を体験する。</p> <p>成績評価方法： 基本的には実習終了後にレポートを提出させ、その内容に基づいて成績評価を行う。その他、実習時における作業態度も一部成績に反映されることがある。</p> <p>履修上の注意： 実際に金属加工を行う実機を用いての実習であるため、危険がつきものである。服装〔作業着を着用すること(各自持参)、帽子を着用すること(実習工場に配備)、作業に適した履物(運動靴など)〕に注意し、前日は十分睡眠を取って体調を整えるなど、災害予防に努めることが第一である。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 機械工学実習指導書。なお後で履修する生産プロセス工学、生産機械工学に関連した参考書は有用である。</p> <p>学生へのメッセージ： とにかく先ず自分の体で実際に体験することが重要で、その意味で積極的に機械・装置に接すること。担当の職員は、将来卒業研究等で実験装置を試作、依頼加工したりする場合にも相談相手になってくれる人達ばかりで、勤務時間内はいつでも相談可能。</p>			

機械製図 Machine Drawing			
学期区分	前期・後期	区分・単位	必修 1単位
担当教員	鈴木浩文, 妻屋 彰, 中本圭一		
<p>授業の目的: 機械製図とは、機械を製作する際に必要なもので、設計者の意図を製作者に伝える共通言語である。正確な図面を描かないと思うような機械を製作することはできない。機械製図は機械設計、機械製作の最低限の基礎である。 JIS 機械製図法に従う製図法の基礎を習得する。さらに、コンピュータを利用した製図を行う CAD の基礎を習得する。</p> <p>到達目標: 図面の作成法、三角法による立体の表現、寸法の記述法、ネジや特殊な形状の表現法、公差、はめあい、表面粗さの記述法、加工法や材質の指定方法などを習得する。図面を製図規則に準じて正しく描けること。</p> <p>授業内容: 製図の基礎について講義を行い、製図の演習を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 機械製図の基礎 授業方法, JIS 製図について, 製図用具, 図面の作成法, 線の引き方, 文字の書き方・課題 1 2. 三角法による立体形状の記述 図形の表し方, 一角法と三角法, 寸法の記入法・課題 2 3. 主要機械部品の図示 ねじ, 歯車, 軸受け製図, 組立図, 部品図・課題 3 4. 公差, 表面粗さの表示 はめあい, 公差, 表面粗さ・課題 4 5. CAD 製図 CAD 製図について, 三次元 CAD ソフト (Solid works) による製図実習・課題 5 <p>授業の進め方: 授業時間の前半に製図の基礎について講義を行い、講義のあと、製図の演習を行う。演習時間中に検図を行う。</p> <p>成績評価方法: 課題の図面について、製図演習時間内の決められた時間に提出する。製作できない図面を作成した場合は、再提出を求める。課題の全てを提出することが、単位取得の条件である。図は製図規則に準じていること。その正確さと分かりやすさで判定する。</p> <p>履修上の注意: 機械製図は、機械創造設計演習など、製図に関する授業の基礎であり、ものづくりの原点である。卒業研究のみならず企業で機械・機器を製作する場合に必要であり、設計者が製作者にその形状・機能を正確に伝えるための言語としてとえられる。ただ課題を写す作業をするのではなく、課題の三次元構造を理解した上で、的確に製作者に伝えるよう丁寧に作図すること。</p>			
<p>教科書・参考文献など: 大西著「JIS 規則にもとづく標準製図法」(理工学社), 製図用具 (授業で指示), Solid works</p>			

機械工学実験 Mechanical Engineering Laboratory			
学期区分	通年	区分・単位	必修 2単位
担当教員	全教員		
<p>授業の目的： 機械工学科における講義に基づいて、機械工学に関する基礎的な現象あるいは機械の特性に関する実験を行い、機械工学の基礎的な現象とその測定方法、データ処理法に関する知識を体得させる。また、理論と実際の現象との類似点、相違点に関する感覚も養う。</p> <p>到達目標： 機械工学の基礎的な実験手法を体得し、実験結果を吟味し考察する力を養う。</p> <p>授業内容： 以下の各テーマに関する実験を実施する予定。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 構造物の防振メカニズムと回転軸のふれまわり振動 ② 自動制御基礎実験 ③ 固体材料における弾性変形の測定 ④ 金属材料の微視組織と強度の関係 ⑤ 切削加工実験 ⑥ ピトー管および球の抵抗の実験 ⑦ 内燃機関の性能特性 ⑧ 熱伝達実験 ⑨ 計算機実験Ⅰ（有限要素法） ⑩ 計算機実験Ⅱ（差分法） ⑪ アナログ回路 ⑫ デジタル回路 <p>授業の進め方： 各実験の最初に内容と実験手順等の説明を行う。実験の終了後は結果をまとめて考察を行い、実験レポートを作成する。</p> <p>成績評価方法： 実験終了後、「実験の目的、方法、実験結果、考察、課題に対する解答」を整理した実験レポートを各自提出し、その内容に基づいて成績の評価を行う。</p> <p>履修上の注意： テキストの「機械工学実験指導書」により各自予習を行い、内容を十分に把握しておくこと。実験中は安全に注意すること。（実験指導書、「安全の手引き」（入学時に配布）を熟読しておく。）</p>			
<p>教科書・参考文献など： 「機械工学実験指導書」をテキストとして用いるので、学期の始めに各自大学生協で購入のこと。</p>			

機械創造設計演習 I Machine Design and Training I			
学期区分	前期	区分・単位	必修 4単位
担当教員	柴坂敏郎, 池田順平, 川上 孝, 佐藤修一		
<p>授業の目的:</p> <p>機械設計とは、求められる機能を満足する機構や形状を、機械工学の知識をもとに具体化することである。この設計演習 I では、機械設計に必要な予備知識として各種機械要素の設計手順を学ぶとともに、実際の機械を対象に、設計仕様を満足するための検討（強度計算、形状や寸法の決定）から製図までの一連の設計作業を実践的に体験することで、機械設計に必要な能力を修得する。</p> <p>また、設計支援ツールとして広く用いられるようになった MATLAB を利用して、基礎的なプログラミング、数値解析やシミュレーション、制御系設計を体験しながら設計支援ツールの活用に必要な能力を修得する。</p> <p>到達目標:</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 機械設計において主要な機械要素を適切に利用する能力の修得 (2) 機械設計において各種工学知識を活用する能力の修得 (3) 制御系設計において設計支援ツール MATLAB を活用する能力の修得 <p>授業内容:</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 主要な機械要素に関する基礎知識の学習 <ul style="list-style-type: none"> ・ねじ：ねじの定義と記号，用途と種類，締付けねじの基礎力学と設計 ・軸：軸の種類と強度，軸締結の種類，軸継手の種類，軸締結の設計と軸継手の選択 ・歯車：歯車の種類と名称および記号，インボリュート平歯車の設計 ・軸受け：すべり軸受け，転がり軸受け ・その他機械要素：カム，クラッチ，ブレーキ等 (2) 実際の機械を対象にした設計製図 <ul style="list-style-type: none"> ・タービンやポンプ等を対象とした設計演習 ・設計仕様を満足するための検討（強度計算，形状や寸法の決定）から製図までの一連の設計作業 (3) 設計支援ツール MATLAB による制御系設計 <ul style="list-style-type: none"> ・基礎的なプログラミング ・制御系設計における数値解析とシミュレーション ・倒立振り子・台車系における実機実験 <p>授業の進め方:</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 主要な機械要素に関する基礎知識の学習 <ul style="list-style-type: none"> ・講義を中心に演習も行う (2) 実際の機械を対象にした設計製図 <ul style="list-style-type: none"> ・2～3班に分かれて演習，講義室での設計作業と製図室での製図作業 (3) 設計支援ツール MATLAB による制御系設計 <ul style="list-style-type: none"> ・3～4人の小グループで MATLAB を利用した演習 <p>成績評価方法:</p> <p>出席状況，演習，レポートや設計図などの提出物，を総合的に考慮して評価する。</p> <p>履修上の注意:</p> <p>機械設計は機械工学科で学ぶ全ての内容を含む総合的な演習である。従って，履修条件ではないが，既に開講された科目を履修していることが望ましい。特に，基礎力学，材料力学，機械力学，熱力学，流体工学，材料工学，制御工学などに関する知識は修得しているという前提で演習を進める。</p>			
<p>教科書・参考文献など:</p> <p>教科書：瀬口・尾田・室津共著「機械設計工学 I [要素と設計]」（培風館）</p> <p>参考書：日本機械学会編「機械工学便覧 B1 機械要素設計・トライボロジー」など</p> <p>その他に必要な資料，演習課題についてはプリントを配布する。</p> <p>学生へのメッセージ:</p> <p>設計をするためには機械工学科で学ぶ全ての知識を総動員しなければいけません。考えれば考えるほどいろんな疑問が湧くと思いますから質問は大いに歓迎します。</p>			

機械創造設計演習Ⅱ Machine Design and Training Ⅱ			
学期区分	後 期	区分・単位	必 修 4 単位
担当教員	田浦俊春, 白瀬敬一, 大須賀公一, 妻屋 彰 他		
<p>授業の目的： 「機械創造設計演習Ⅰ」で修得した設計能力のレベルアップを目指し、正解のない問題へ挑戦する能力をプロジェクト方式で身につける。具体的には、高度の創造性が要求される新規設計を行うことのできる能力の修得を目的とする。一方で、創造性の高い設計といえども、脈絡もなく思考を進めることは有効ではないので、体系化されている設計方法論について学び、手順の重要性について理解することも行う。 また、非常に簡単な機械装置を設計し、実際に設計図に基づいて加工・組立することで、機械創造の手順を経験し、材料の選択、形状や寸法の決定、公差や精度の決定といった設計の重要性を理解する。</p> <p>到達目標： (1) 新規設計におけるデザイン能力を身につけることを目的とする。正解のない問題に対し、自ら問題点を整理し、必要な情報を収集し、互いに協力しながら具体的な機械システムを構想・具体化する能力の修得を目指す。 (2) 機械設計から加工・組立に至る一連の機械創造の手順を経験する。</p> <p>授業内容： (1) 設計方法論の学習 ・設計とは何か？ ・概念設計過程 ・基本設計過程 ・詳細設計過程 (2) 正解のない問題を対象とした設計演習 (3) 簡単な機械装置の設計・部品加工・組立 ・設計図の検討 ・部品加工と装置の組立</p> <p>授業の進め方： (1) 設計方法論の学習 ・講義により行う (2) 正解のない問題を対象とした設計演習 ・2～3班に分かれて演習を行う (3) 簡単な機械装置の設計・部品加工・組立 ・5～6人の小グループでスターリングエンジン等の機械装置を製作する</p> <p>成績評価方法： 出席状況、演習、レポートや設計図などの提出物、を総合的に考慮して評価する。</p> <p>履修上の注意： 機械創造設計演習Ⅱは、機械設計に関する講義や演習の総仕上げを行うものであり、「機械製図」および「機械創造設計演習Ⅰ」で学んだ製図や機械要素に関する知識だけでなく、いままでに機械工学科で学習した全ての知識を総動員することになる。この機会に今までに習ったことを復習するなど、積極的な学習態度が望まれる。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書：G. ポール, W. バイツ著, ケン・ワラス編「工学設計」(培風館) その他に必要な資料、演習課題についてはプリントを配布する。</p> <p>学生へのメッセージ： 正解のない問題に挑戦することの喜びと苦しみを味わってください。納得がいくまで考えて設計をしてください。そして、将来までとっておきたいようなレポートを書いてください。 また、機械装置の設計・部品加工・組立では、機械を創造するという喜びと苦しみを体験してください。</p>			

応用機械工学演習 Practice of Applied Mechanical Engineering			
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	機械工学科教員全員（テーマ毎に担当決定）		
<p>授業の目的： 3年生までの科目は学生にとって受動的な種類のものが多いが、本演習は自らプロジェクトを進めるという方法で学習を進める。プロジェクトを提案し、推進し、完成させ、発表するというプロセスを通じ、一流エンジニアになる基本として自主性、創造性、協調性などを修得する。</p> <p>到達目標： 自ら提案したテーマを達成し、発表会で成果を発表すること。これにより、物事の達成の難しさ及び達成によって得られる喜びと自信を体得する。</p> <p>授業内容： 学生自ら、又は教員との協議の結果生まれた各種テーマについて、期間、予算を考慮し、実施可能なものについて、3～8名のグループで調査や実験の計画、設計、製作、評価を行う。</p> <p>授業の進め方： 学生のグループからテーマを提案又は、教員のヒントを得て学生がテーマをまとめて提案の後、適切な指導教員を決定し実習を行う。期末には成果発表会を実施し、優秀なグループには賞を与える。テーマは例えば新しいロボット、ソーラカー、モデル実験装置、新しいソフトウェアや新技術の調査など学生が是非やりたいというものを毎年募集する。</p> <p>成績評価方法： テーマの内容、実施状況、成果を総合判断する。</p> <p>履修上の注意： 本演習は中味がハードであり途中でやめることが出来ないため、やる気のある学生のみが参加すること。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 特になし。</p> <p>学生へのメッセージ： 是非楽しいテーマ；良いテーマを提案して下さい。そのためには普段からアイデアをねっておくことが大切です。</p>			

英語特別演習			
学期区分	通 年	区分・単位	選 択 2 単位
担当教員	機械工学科各教員		
<p>授業の目的： 機械工学関係の外国語の本，特に英語で書かれた本を読み，機械工学を中心とした科学技術英語を理解する能力を身に付ける。また将来専門的な学術論文を講読するための基礎力を養うとともに，英語の論文を執筆したりするための英語の語法，表現法について学ぶ。さらにプレゼンテーション手法についても実践的な練習を行なう。</p> <p>到達目標： 科学技術文献に現れる基礎的な語法，表現法を学び，読解と作文の基礎力を身に付ける。</p> <p>授業内容： 指定されたテキスト，配布資料あるいは学術論文等を講読する。詳細は各教員が授業の最初に説明する。</p> <p>授業の進め方： テキスト，資料を講読し，英語の語法，表現法を学ぶ。具体的な授業の進め方については，各教員が授業の最初に説明する。</p> <p>成績評価方法： レポート等の提出物，出席，プレゼンテーション及び理解度などを総合して成績を評価する。</p> <p>履修上の注意： 配布された文献や資料を単に英語から日本語に翻訳するだけでなく，たとえば結果を述べるための表現，実験装置などの説明に関する表現など，科学技術英語に特有な表現を各自が整理して身につけていく，というような積極的な態度が望まれる。また相手に伝わるプレゼンテーションの手法についても各自の積極的な工夫が必要である。そのためには，まず内容を十分理解することが必要不可欠であることを忘れてはならない。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 各教員が指定する。</p> <p>学生へのメッセージ： 講義中で取り上げるもの以外にも，各自が積極的に外国語の文献を読んで下さい。また長文を短時間で読み，概要を把握していく訓練も心がけて下さい。</p>			

先端機械工学詳論Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ		Special lectures of Advanced Mechanical Engineering Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ																			
学期区分	前期・後期	区分・単位	Ⅰのみ 必修 2単位，Ⅱ～Ⅳは選択各2単位																		
担当教員	未定																				
<p>授業の目的： 現在の機械工学における先端分野を学習することで，習得した機械工学の基礎知識を有機的に結び付け，さらに理解を深める。また，実社会の問題に対して機械工学がどのように応用されているか知ることで，今後の工学探求の動機付けとし，より幅広い機械工学の知見を得る。</p> <p>到達目標： ・機械工学の基礎知識を有機的に関連付ける。 ・機械工学の幅広い知識，先端分野の動向に対する知見を得る。</p> <p>授業内容： 下記の機械工学先端分野のうち当該学期に開講される2テーマを選択して受講する。</p> <table border="0"> <tr> <td>(1) バイオメカニクス</td> <td>(10) 空気調和と地球環境</td> </tr> <tr> <td>(2) 材料表面制御工学</td> <td>(11) モニタリング診断</td> </tr> <tr> <td>(3) マイクロマシン・マイクロエンジニアリング</td> <td>(12) ロボット・メカトロニクス</td> </tr> <tr> <td>(4) 省エネルギー工学</td> <td>(13) オプト・エレクトロデバイス工学</td> </tr> <tr> <td>(5) エンジン工学</td> <td>(14) 先端精密工学</td> </tr> <tr> <td>(6) 気液二相流工学</td> <td>(15) 知能機械論</td> </tr> <tr> <td>(7) 原子力工学</td> <td>(16) 塑性加工学</td> </tr> <tr> <td>(8) 自動車性能論</td> <td>(17) 溶接工学</td> </tr> <tr> <td>(9) 航空宇宙工学</td> <td>(18) 統計的品質管理</td> </tr> </table> <p>授業の進め方： 4半期を一区切りとした講義が行われるので，2テーマを選択し受講する。</p> <p>成績評価方法： ・各テーマの成績評価法は，各テーマ教員に確認のこと。 ・3テーマ以上を選択した場合，成績上位の2テーマを先端機械工学詳論Ⅰの成績とする。</p> <p>履修上の注意： ・取得テーマ数と取得科目の関係は以下の通りとなる。 2テーマ取得…先端機械工学詳論Ⅰ 4テーマ取得…先端機械工学詳論Ⅰ，ⅡまたはⅠ，Ⅳ 6テーマ取得…先端機械工学詳論Ⅰ，Ⅱ，ⅢまたはⅠ，Ⅱ，Ⅳ 8テーマ取得…先端機械工学詳論Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ ・テーマは各年度ごとに変更になることがあるので確認のこと。</p>				(1) バイオメカニクス	(10) 空気調和と地球環境	(2) 材料表面制御工学	(11) モニタリング診断	(3) マイクロマシン・マイクロエンジニアリング	(12) ロボット・メカトロニクス	(4) 省エネルギー工学	(13) オプト・エレクトロデバイス工学	(5) エンジン工学	(14) 先端精密工学	(6) 気液二相流工学	(15) 知能機械論	(7) 原子力工学	(16) 塑性加工学	(8) 自動車性能論	(17) 溶接工学	(9) 航空宇宙工学	(18) 統計的品質管理
(1) バイオメカニクス	(10) 空気調和と地球環境																				
(2) 材料表面制御工学	(11) モニタリング診断																				
(3) マイクロマシン・マイクロエンジニアリング	(12) ロボット・メカトロニクス																				
(4) 省エネルギー工学	(13) オプト・エレクトロデバイス工学																				
(5) エンジン工学	(14) 先端精密工学																				
(6) 気液二相流工学	(15) 知能機械論																				
(7) 原子力工学	(16) 塑性加工学																				
(8) 自動車性能論	(17) 溶接工学																				
(9) 航空宇宙工学	(18) 統計的品質管理																				
<p>教科書・参考文献など： 各テーマごとに異なるので，各テーマ教員に確認のこと。</p> <p>学生へのメッセージ： 習得した機械工学の基礎知識がどのように応用され，役立っているか理解して下さい。</p>																					

先端機械工学通論 Review of Advanced Mechanical Engineering			
学期区分	後期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	各研究分野主任教員		
<p>授業の目的： 入学時に機械工学で機械工学基礎への入門講義を行っているが、その後数多くの専門講義を受けた後、本講義ではこれらの各専門がどのように実際の問題に使われ、研究がすすめられているかを知ることにより、機械工学の先端の概要をつかむとともに、4年生での卒業研究のテーマ選択にも役立てる。</p> <p>到達目標： 3年生で各専門科目は比較的、各論的に習ってきたが、本講義により全体の流れを頭で整理する。 また、最新の各分野の研究や応用の現状を知り、将来の卒業研究や就職や進学の見通しについての希望や選択についての知見を得る。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 各研究分野に関連し、これまでの講義と分野の技術全般との関連まとめ。 2. 各研究分野に関連した現実社会との関連。 3. 各研究分野の最近の技術発展動向。 4. 各研究分野の大学内での研究状況の紹介。 <p>授業の進め方： 各研究分野主任教員より、上記の内容をオムニバス方式でビジュアルな資料を交え講義する。</p> <p>成績評価方法： 各教員毎に異なるが、各教員から提出された成績を集計して科目の成績とする。</p> <p>履修上の注意： 出席して各教員の話聞く必要があり、出席を基本とする。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 機械工学科ガイダンス資料など、プリントはその都度配布する。</p> <p>学生へのメッセージ： 卒研に進む前の準備として役立つので、是非受講して下さい。</p>			

卒業研究 Research Works			
学期区分	通年	区分・単位	必修 10単位
担当教員	全教員		
<p>授業の目的： 各学生が1つの研究分野に1年間所属し、指導教員の元で1つの研究テーマについて研究を行う。ここでの研究活動を通じて、これまでに勉強してきた様々な知識の活用・実践・応用をはかり、より深い理解を目指す。さらに、与えられたテーマに対して個人が問題点を抽出し、文献を調べ、解決法を自らの力で見いだすことが重要である。また新しい知識・技術の創造・開発を通じて機械工学の研究者・エンジニアに必要な能力の養成を行う。</p> <p>到達目標： 所属する研究分野における高度な専門知識を習得するとともに、これらの知識、技術を用いた研究を行い、その成果を卒業論文としてまとめること。また各自の研究内容をプレゼンテーションできるスキルを養うこと。</p> <p>授業内容： 所属する研究分野によって異なる。各研究分野の内容については機械工学科のホームページ等を参照すること。あるいは随時、直接教員に質問することも歓迎する。</p> <p>授業の進め方： 詳細は研究分野によって異なるが、基本的には (1) 問題抽出と研究企画、(2) 基礎技術の習得、(3) 研究の計画・実行、(4) 得られた結果の解析とまとめ・プレゼンテーションというステップに分けられる。</p> <p>成績評価方法： 各研究における日々の研究への取り組みの状況や研究に対する意欲等を別に定める基準に従って定期的な評価を行い、卒業論文発表会における研究成果の評価とあわせ、総合的な判断が行われる。具体的には、10月に「卒業研究チェックシート（10月用）」に基づいて研究の進捗状況のチェックを行い、それ以降の研究の進め方を確認する。卒業研究を提出して発表を終了したときに「卒業研究チェックシート（2月用）」に基づいて一年間の成績評価を行う。</p> <p>履修上の注意： 卒業研究を申請しようとする学生は、機械工学科内規(3)により定められた申請条件を満足していなければならない。 研究室配属後は生活の大部分が卒業研究中心となる。毎日研究室に出てきて勉強、研究に励むこと。また教員、研究者、学生と協調した研究生活を送ること。</p>			
<p>教科書・参考文献など：</p> <p>学生へのメッセージ：</p>			

Ⅶ 応 用 化 学 科

1. 教育の目指すもの

化学工業は石油化学製品、金属、セラミックス、プラスチックのような基礎素材の生産だけでなく、エレクトロニクス、ナノテクノロジー、分子機能工学、エネルギー工学、バイオテクノロジー、医工学、食品工学などあらゆる分野の工学や産業において多大の貢献をしている。近年のめざましい、かつ急速な科学技術発展の根幹には、化学の分野の研究者・技術者によってなされた“材料革命”と呼べる精密かつ高度な機能を有する物質、材料のめざましい研究開発と、高度生産技術の研究開発がある。エネルギー・環境問題を視野に入れた、化学工業の“健全な発展”無くしては、将来の人類の繁栄と安泰を語ることはできないと言っても過言ではない。

応用化学科は、そのような社会情勢に呼応して、新しい理念により従来の工業化学科と化学工学科を有機的に統合して生まれた工学部の総合的な化学系学科である。本学科では、分子レベルのミクロな基礎化学から、分子集合体である化学物質・材料への機能性の付与、機能性の発現、物質の創製および生産技術への生物機能の工学的応用、実際のマクロな工業規模の製造、生産の技術やシステムにわたる広範囲の教育内容を、新しい規範により縦横に統合して一貫性のある教育を行うことを目指している。その実現のため、応用化学科は以下の教育研究の目標を有する2つの講座から構成されている。

1) 物質化学講座

原子とそれによって構成される分子の世界と、分子の集合により作り出される多様な機能とを結びつけることを目的とし、原子・分子レベルの物質からナノ、メゾ、マクロに至る広範囲の集合体を対象として、化学物質・材料の精密かつ高度な機能性の付与及び機能性の創製を行い、工学の立場から機能発現の機構解明とそれに基づく新規な物質創製技術について教育研究する。

2) 化学工学講座

化学反応及び生物反応に基づく物質・エネルギー変換過程における、分子間相互作用、生体分子機能及び物質・エネルギー移動現象の解明に基づいて、新規素材・反応触媒の開発、反応・移動現象の制御法の確立、新規生産プロセスの創造をすすめ、有用物質、エネルギーの高効率、低環境負荷生産プロセスの開発について教育研究する。

これらの目的のため、将来の世界の化学工業を背負って立つ研究者・技術者の育成を目指して、学部段階では基礎に重点をおいた教育を行う。この際、まず全学共通科目として教養原論、外国語、情報、健康・スポーツ関連の各科目の他、専門基礎科目がカリキュラムとして組まれている。これらにより、国際社会に通用する知育、徳育、体育の修得を行う。さらに専門教育においては、厳選された講義を履修し、その中で積極的に自己学習の機会を設け、徹底した基礎学力の充実・理解を図る。その際、実験・演習を数多く取り入れることで、自ら手足を動かすことによる実体験、自ら積極的に発表することによるコミュニケーションを通して学習し、応用力をつけることを特徴とするカリキュラムを組んでいる。特に、1年次の導入ゼミナールおよび2年次の探求ゼミナールにおいて、少人数単位での教員とのふれあいの場を設け、化学研究に対する能動的な動機付け、課題探求能力の発掘を図っている。また、一部科目では複数教員が合同で講義し、少人数教育によって授業の質的向上に努めている。これらによって培われるべき知識、経験は厳正に成績評価され、合格と判断されたもののみが卒業研究のための研究室への配属が認められる。一方、教員側においてもカリキュラムの適切な進行について検討委員会を通して常にモニターし、問題点を洗い出すとともに、教育理念に沿った形に軌道を修整するシステムを構築している。また、特別講義や特別講演として社会との架け橋となるべく学外の多彩な研究者・技術者による化学工業の実践的な授業も採り入れ、より一層の幅をもたせたカリキュラムにしている。

本学は研究志向型の大学を目指していることから、卒業研究は下記の本学科の教育研究分野に基づく研究グループに分かれて行う。卒業研究のテーマは、指導教員との相談の上で個別に設定される。さらに、その研究過程において世界的水準に照らして最先端の研究となるべく、教員と学生は各研究室で少人数での卒業研究・ゼミナールなどを通じて、親密な交流、チームワーク能力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力の修得に努めており、人間的にも調和のとれた化学研究者・技術者の育成を目指している。

本学科が所属する工学部と本学大学院工学研究科とは、多様な人材を養成する教育改革および先端的研究の推進をより強力に図るため、学部教育と大学院教育とを通じて一貫した教育研究組織を構築している。この目的を実現するために、応用化学科から大学院工学研究科応用化学専攻への進学によって、さらに専門的・実践的な化学に関する教育・研究の機会が与えられている。

【教育研究分野】

◎物質化学講座

- i) 応用物理化学：新素材の構造と機能を平衡論，電子遷移，構造解析など物理化学の観点から関連づけ，分子ナノテクノロジーの基礎的研究と結晶成長や配向構造を制御した新規デバイスの開発を目指した研究にとりくむ。
- ii) 応用無機化学：高濃度電解水溶液の物性・構造，異相共存場効果の解明と応用，緩和分散を用いる金属超微粒子の合成と機能，液相析出法による酸化薄膜の合成と物性に関して無機材料化学や電気化学の観点から研究を進める。
- iii) 応用有機化学：新規有機化合物の合成・反応・構造，有機理論計算・反応機構に関する基礎研究や，新型の医薬・農薬の開発を目指した生物活性物質の設計・合成・活性評価，新規機能性ヘテロ環化合物の開発等に関する応用研究を行う。
- iv) 応用高分子化学：高分子材料の微細構造と力学物性・表面物性・熱物性に関する研究を行う。材料の構造と物性の相関を明らかにし，高機能化・高性能化された高分子材料，高分子複合材料の新規創製を行い，次世代材料の開発をめざす。
- v) 機能分析化学：材料として注目される多彩な構造形態を持つリン酸塩の合成法，特異反応性・構造特異性・表面物性，錯体生成における高分子電解質効果，疎水の相互作用などに関する研究を行う。
- vi) 高分子コロイド化学：異相複雑系を取り扱うコロイド化学的視点から多機能性を有する知能型高分子微粒子の精密設計と新しい創製法の開発，及び情報，生医学などの先端工業分野への応用に関する基礎的研究に取り組む。
- vii) 機能分子化学：分子レベルにおける相互作用を利用して有機機能性分子材料を開発する研究を行う。超分子組織化を適用することで高選択的な分子認識能，触媒活性，生理活性を有する超分子人工材料の創製をめざす。

◎化学工学講座

- viii) 触媒反応工学：種々の化学工業プロセスのみならず，環境・エネルギー問題を解決するうえで重要な触媒に関する基礎・応用研究を行う。特に省資源・省エネルギーの観点から選択的な酸化・還元触媒の開発やクリーンで無尽蔵な光エネルギーの利用を目指した光触媒の開発を行う。
- ix) 移動現象工学：流動，伝熱，物質移動を取り扱う移動現象論を基礎として，化学プロセスに現れる複雑な現象の解明とモデル化，さらに，地球環境との調和を実現する新しいプロセスの開発を目指した研究を行う。
- x) 化学システム工学：環境問題をも視野に入れ広い立場から，化学プロセスの生産工程を計画設計し，運転制御するための基礎的方法論を構築するとともに，取り扱う流体の諸物性に対する温度・圧力効果の解明を目指す。
- xi) 粒子流体力学：省エネルギー型空調システムの構築，高効率混合や機能性薄膜の高効率化などに応用される，非ニュートン流体やサスペンション等の複雑流体のレオロジーについて研究を行う。
- xii) 生物化学工学：遺伝子組換えなどの技術を用いて生物機能を高度化することにより，高効率のバイオリクターによる有用物質の生産，環境・エネルギー問題に対応できる新しいバイオプロセスの構築などの研究を行う。
- xiii) 生物プロセス工学：生物機能を利用した効率的かつ高度なバイオ生産・分離プロセスの開発を目指して，微生物を利用した有用物質生産・環境修復，およびバイオ分子間特異的認識による高純度精製・高感度検出法などの研究を行う。
- ivx) 材料プロセス工学：水資源確保，大気環境保全，水素エネルギーの効率的利用といった環境・エネルギー分野への貢献をめざして，分離機能膜などの新規な材料について，素材の創製から微細構造制御法の確立，さらにプロセスの構築にいたる研究を行う。

2. 構成と教育組織

講座名	教育研究分野	教授 (室番)	准教授 (室番)	講師 (室番)	助教 (室番)	助手 (室番)	技術職員・ 事務職員等 (室番)
物質化学	応用物理化学	上田 裕清 (4E-214)	石田 謙司 (4E-211)			小柴 康子 (4E-405)	熊谷 宜久 (4W-406)
	応用無機化学	出来 成人 (自1-310)	水畑 穰 (自2-302)		梶並 昭彦 (自2-302)	綾部いつ子 (自1-310)	曾谷 知弘 (4W-204)
	応用有機化学	森 敦紀 (4E-213)	岡田 悦治 (4E-203) 神鳥 安啓 (4E-210)			鈴木登代子 (自2-304)	
	応用高分子化学	西野 孝 (4E-310)			小寺 賢 (4E-309)		
	機能分析化学		成相 裕之 (4W-308)		牧 秀志 (4W-402)		古東 孝子 (4W-202)
	高分子コロイド化学	大久保政芳 (自1-301)	南 秀人 (自1-302) P.B.Zetterlund (4E-204)				紀 久美恵 (4W-202)
	機能分子化学	竹内 俊文 (自1-604)	新森 英之 (自1-312)				
化学工学	触媒反応工学		西山 覚 (4W-302)		市橋 祐一 (D2-406)		
	移動現象工学	大村 直人 (4W-303)	今駒 博信 (4E-212)				
	化学システム工学			松尾 成信 (4W-309)	南原 興二 (4W-305)		
	粒子流体工学	薄井 洋基 (4E-207)	鈴木 洋 (自1-506)			菰田悦之 (4W-312)	
	生物化学工学	福田 秀樹 (自1-507) 近藤 昭彦 (自1-508)	山地 秀樹 (4W-307)			田中 勉 (自2-404)	
	生物プロセス工学	加藤 滋雄 (自1-505)				勝田 知尚 (自2-406)	
	材料プロセス工学	松山 秀人 (4E-205)					

3. 履修科目一覧表

専門科目

(◎は必修, ○印は選択必修, 無印は選択科目を示す)

記号	授業科目	単位数	毎週の授業時間								担当教員	備考
			1		2		3		4			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
◎	微分積分学	2	2									全学共通授業科目
○	多変数の微分積分学	2		2								
◎	線形代数学Ⅰ	2	2									
◎	線形代数学Ⅱ	2		2								
	微積分演習	1		2								
○	物理学B 1	2	2									
○	物理学B 2	2		2								
○	物理学B 3	2		2								
◎	物理化学Ⅰ	2	2							上田		
◎	物理化学Ⅱ	2	2							松山		
○	材料化学	2			2							
◎	化学実験	2		4							成相, 牧	
	数学演習	1	2							南原, 勝田	工学部共通科目	
○	複素関数論	2		2								
◎	常微分方程式論	2		2								
○	フーリエ解析	2			2							
◎	導入ゼミナール	1	2								応用化学科教員	
◎	探求ゼミナール	1		2							応用化学科教員	
◎	物理化学Ⅲ	2		2							松尾	
◎	物理化学Ⅳ	2			2						西山, 石田	
◎	物理化学演習Ⅰ	1		2							上田, 松尾	
○	物理化学演習Ⅱ	1				2					石田, 松尾	
◎	無機化学Ⅰ	2		2							水畑	
○	無機化学Ⅱ	2			2						出来	
○	無機化学Ⅲ	2			2						出来	
○	分析化学	2			2						成相	
◎	機器分析化学	2				2					竹内, 新森	
◎	無機・分析化学演習	1					2				水畑, 新森, 梶並, 牧	
◎	有機化学Ⅰ	2		2							岡田	
○	有機化学Ⅱ	2			2						神鳥	
○	有機化学Ⅲ	2			2						森	
◎	高分子化学Ⅰ	2		2							南	
○	高分子化学Ⅱ	2			2						西野	
○	高分子コロイド化学	2					2				大久保	
◎	有機・高分子化学演習	1				2					岡田, 神鳥, 南, 小寺	

3. 履修科目一覧表

専門科目

(◎は必修, ○印は選択必修, 無印は選択科目を示す)

記号	授業科目	単位数	毎週の授業時間								担当教員	
			1		2		3		4			
			前	後	前	後	前	後	前	後		
○	化学工学量論	2			2							薄井, 菰田
◎	移動現象論	2				2						大村
◎	分離工学	2					2					加藤
◎	移動現象論・分離工学演習	1						2				今駒, 鈴木, 勝田
○	プロセスシステム工学	2					2					大村
○	プロセス設計	1						2				松山
◎	化学反応工学	2					2					西山
◎	化学反応工学演習	1						2				西山, 市橋
○	生化学	2			2							山地
◎	生物化学工学	2					2					福田
○	生物機能化学	2						2				近藤
○	バイオマテリアル	2					2					西野
◎	生物化学工学演習	1						2				福田, 近藤, 山地
○	コンピュータ基礎	1	1									鈴木, 小寺, 菰田
	コンピュータ演習	1							2			大村, 今駒, 南原, 菰田
	安全工学	2							2			非常勤
	環境・エネルギー化学	2							2			非常勤
	粉体工学	2							2			非常勤
◎	化学実験安全指導	1			2							応用化学科教員
◎	応用化学実験Ⅰ	3					6					応用化学科教員
◎	応用化学実験Ⅱ	3					6					応用化学科教員
◎	応用化学実験Ⅲ	3						6				応用化学科教員
◎	応用化学実験Ⅳ	3						6				応用化学科教員
◎	外国書講読	1							2			応用化学科教員
	特別講義Ⅰ	1							1			非常勤
	特別講義Ⅱ	1							1			非常勤
	特別講義Ⅲ	1							1			非常勤
	特別講義Ⅳ	1							1			非常勤
◎	卒業研究	10								← 30 →		
	その他必要と認める専門科目											

週授業時間

		時間数	1		2		3		4	
			前	後	前	後	前	後	前	後
◎	必修	110	10	12	8	6	22	20	17	15
○	選択必修	43	3	6	10	12	6	6	0	0
	選択	16	2	2	0	0	0	0	12	0
	計	169	15	20	18	18	28	26	29	15

単位数

		単位数	1		2		3		4	
			前	後	前	後	前	後	前	後
◎	必修	66	9	9	7	5	15	10	1	10
○	選択必修	41	3	6	10	12	5	5	0	0
	選択	13	1	1	0	0	0	0	11	0
	計	120	13	16	17	17	20	15	12	10

4. 履修上の注意

履修要領

- (1) 専門科目総準備単位数 120単位
- (2) ◎印は必修科目，○印は選択必修科目を示す。その他は選択科目である。
- (3) 学生の卒業に必要な単位数は125単位以上とする。その内訳は次のとおり。

教養原論	16単位
外国語科目	
外国語第1の必修科目	6単位（リーディングⅠ～ⅢおよびオーラルⅠ～Ⅲ）
外国語第2の必修科目	4単位（ⅠA，ⅠB，ⅡA，ⅡB）
情報科目	
情報基礎	1単位
健康・スポーツ科学科目	
健康・スポーツ科学実習の必修科目	1単位
専門科目	
必修科目	66単位（卒業研究の10単位を含む。）
選択必修科目	24単位以上
全学共通授業科目の外国語科目の選択科目，健康・スポーツ科学科目の選択科目と専門科目の合計	97単位

- (4) 当学科の授業科目以外で，当学科が認めた科目は，当学科の専門科目の選択科目とみなすことができる。
 - (5) 学生が1年間に履修登録可能な単位数は，工学部規則第6条に規定されている単位を上限とする。（工学部学生便覧参照）
- （注）この履修規則は平成19年4月入学者から適用する。

（内 規）

1. 応用化学実験Ⅰ，Ⅱ，ⅢおよびⅣを履修するためには，以下の科目を修得していなければならない。
 - (1) 化学実験および化学実験安全指導
 - (2) 物理化学Ⅰ，Ⅱ，ⅢおよびⅣ，無機化学Ⅰ，有機化学Ⅰ，高分子化学Ⅰ，移動現象論の8必修科目のうち，5科目以上
 - (3) 2年次の履修科目の上限超過登録要件を満たし，2年次において応用化学実験を履修することを認められた者については，上記(1)(2)の適用を免除する。
2. 工学部規則第7条に規定する卒業研究を申請しようとする者は，次の4項を満たすことが必要であり，また，残る2学期をもって卒業に必要な全単位を修得できる見込みのある者に限る。
 - (1) 卒業に必要な外国語科目，情報基礎，健康・スポーツ科学科目の全単位および教養原論14単位以上を修得していること。
 - (2) 導入ゼミナールおよび探求ゼミナールの単位を修得していること。
 - (3) 3年生終了までに課せられる必修指定の実験科目の全単位を修得していること。
 - (4) 工学部規則において指定する専門科目のうち3年生終了までの授業科目において，修得科目数および修得単位数について以下の条件を満たすこと。
 - ① 未修得の必修科目数が4科目以下であること。
 - ② 選択必修科目の修得単位数が20単位以上であること。
3. 工学部規則第15条2項の規定の適用を申請しようとする者は，早期卒業に関する認定基準についての「早期卒業の認定基準に関する内規」のほか，次の事項を満たしていなければならない。
 - (1) 次の条件を満たす場合には，3年次において卒業研究（10単位）を履修することができる。
 - ① 2年次及び3年次において，履修科目の上限超過登録が認められていること。
 - ② 2年次後期末までに，次の要件を満たしていること。
 - イ．成績順位が，応用化学科の上位1%以内程度であること。
 - ロ．応用化学科内規による卒業研究申請の要件を満たしていること。
 - ③ 3年次後期の履修により，卒業要件を充足する可能性があること。
 - (2) 2年次において履修科目の上限超過登録が認められた者は，3年次向けの授業科目についても履修することができ，また，3年次において履修科目の上限超過登録が認められた者は，4年次向けの授業科目についても履修することができる。
4. この内規は，平成19年4月入学者から適用する。

5. 各授業科目の関係

科目の種類	1年前期	1年後期	2年前期	2年後期	3年前期	3年後期	4年前期	4年後期	
全学共通授業科目 (U)	教養原論	※ 教養原論×2	※ 教養原論×2	※ 教養原論×2	※ 教養原論×2				
	外国語科目	◎ 英語リーディングI ◎ 英語オーラルI	◎ 英語リーディングII ◎ 英語オーラルII	◎ 英語リーディングIII ◎ 英語オーラルIII 英語アドバンスD	英語アドバンスD×2				
		◎ 第二外国語IA ◎ 第二外国語IB	◎ 第二外国語IIA ◎ 第二外国語IIB	第二外国語III	第二外国語IV				
	情報科目	※ 情報基礎							
	健康・スポーツ科学科目	◎ 健康スポーツ科学実習I 健康スポーツ科学講義	健康スポーツ科学実習II						
	共通専門基礎科目	◎ 微積分学 ◎ 線形代数学I	○ 多変数の微積分学 ◎ 線形代数学II 微積分演習						
		○ 物理学B1	○ 物理学B2 ○ 物理学B3						
	専門基礎科目	◎ 物理化学I ◎ 物理化学II	◎ 化学実験	○ 材料化学					
		数学演習		◎ 常微分方程式論 ○ 複素関数論	○ フーリエ解析				
	工学部科目 (T)	◎ 導入ゼミナール		◎ 探求ゼミナール	(全科目)				
		◎ 物理化学演習I	◎ 物理化学III	◎ 物理化学IV	○ 物理化学演習II				
		◎ 無機化学I	○ 無機化学II	○ 無機化学III	◎ 機器分析化学	◎ 無機・分析化学演習			
		◎ 有機化学I	○ 有機化学II	○ 有機化学III	◎ 有機・高分子化学演習	○ 高分子コロイド化学			
			◎ 高分子化学I	○ 高分子化学II					
			○ 化学工学量論	◎ 移動現象論	◎ 分離工学	◎ 移動現象論・分離工学演習			
				○ 生化学	◎ プロセスシステム工学	○ プロセス設計			
				◎ 化学実験安全指導	◎ 化学反応工学	◎ 化学反応工学演習			
					◎ 生物化学工学	○ 生物機能化学			
					○ バイオマテリアル	◎ 生物化学工学演習			
	○ コンピュータ基礎			◎ 応用化学実験I ◎ 応用化学実験II	◎ 応用化学実験III ◎ 応用化学実験IV				

◎: 必修科目
○: 選択必修科目
※: 卒業に必要な科目
無印: 選択科目

◎ 卒業研究

コンピュータ演習
◎ 外国書購読
安全工学
環境エネルギー化学
粉体工学
特別講義I
特別講義II
特別講義III
特別講義IV

この授業要覧には、専門基礎科目（工学部共通科目）および応用化学専門科目の授業内容が掲載されている。共通専門基礎科目を含む全学共通授業科目については、大学教育推進機構Webサイト(<http://www.kurihe.kobe-u.ac.jp/>)のシラバスを参照すること。ただし全学共通授業科目のうち、物理化学I, IIについては内容の継続性を重視し、本授業要覧に掲載した。

物理化学 I Physical Chemistry I		(全学共通授業科目)	
学期区分	前期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	教授 上田裕清 Y. Ueda		
<p>授業の目的： 原子や分子中での電子の振る舞いを理解するには、波動方程式の助けを借りねばならない。このような取り扱いを量子力学と呼ぶ。物理化学 I では原子の挙動、分子の形成について波動方程式の観点から理解し、量子力学および化学結合論の初歩についての知識を習得する。また、集合体としての構造についても初歩的理解を得る。</p>			
<p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 原子の電子構造と周期律 <ol style="list-style-type: none"> (1) 水素の原子スペクトル (2) Bohr の水素原子模型 (3) 物質の波動性 (4) 量子数 2) 化学結合 <ol style="list-style-type: none"> (1) イオン結合 (2) 共有結合 (3) 分子軌道法 (4) 結合の極性 3) 分子の構造 <ol style="list-style-type: none"> (1) 共有結合の方向性 (sp 混成軌道/sp² 混成軌道/sp³ 混成軌道) (2) 水素結合 (3) 立体異性 (幾何異性/光学異性) (4) 巨大分子 4) 結晶の構造 <ol style="list-style-type: none"> (1) 結晶の構造の研究法 (2) 単位格子 (3) イオン結晶, 金属結晶, 共有結晶, 分子結晶 (4) 半導体 			
<p>成績評価方法： 期末試験 (50%), 小テスト (20%) と講義の出席日数 (30%) とで評価する。</p>			
<p>履修上の注意： 化学の成り立ちは構造のみならず、機能と密接な関係がある。この後受講する色々な講義の基礎となるので十分に理解をしておこう。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書：乾 俊成, 中原昭次, 山内 脩, 吉川要三郎 共著 「改訂 化学—物質の構造, 性質および反応—」(化学同人) 参考書：G.M.Barrow 著, 藤代亮一訳「バーロー物理化学 (上)」第 5 版 (東京化学同人)</p>			
<p>学生へのメッセージ： 当該年度の授業回数などに応じて講義内容の変更, 削減, 追加などがありうる。 月曜日の午後 5 時以降, 研究室で質問を受け付けるので, 授業内容や問題についての質問があれば, 遠慮せずに来て下さい。</p>			
<p>備考：本科目は応用化学科の専門科目のうち, 全学共通授業科目として開講するものである。</p>			

物理化学Ⅱ		Physical Chemistry Ⅱ		(全学共通授業科目)	
学期区分	前期	区分・単位	必修 2単位		
担当教員	教授 松山秀人 H.Matsuyama				
<p>授業の目的： 物理化学は物質について、条件の変化や他の物質との反応により何ができるかということについての一般原理を物質の性質に基づいて理解する学問であり、他の専門分野の基礎をなすものである。本講義では物質および現象を巨視的（現象論的）に取り扱う熱力学を中心に論述する。本講義では、物理化学全般を修得するために必要な気体の物理的性質と熱力学の基本原理をわかりやすく論述する。</p> <p>到達目標： 本講義では、気体の物理的性質の理解、エネルギーの概念と熱力学第1法則、エントロピーと熱力学第2法則、自由エネルギーについて理解することを目標とする。</p> <p>授業内容：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・熱力学の意義と系の記述 ・力と仕事 ・気体の物理的法則 ・気体の状態方程式 ・エネルギーと熱力学第1法則 ・体積変化にともなう力学的仕事 ・内部エネルギー，エンタルピー ・等温変化と断熱変化 ・熱化学 ・エントロピーと熱力学第2法則 ・温度および相変化にともなうエントロピー変化 ・Carnot サイクル <p>授業の進め方： 教科書と配布するプリントにしたがって、講義および演習を行う。授業では板書の他、OHPやPCプロジェクターなども使用する場合がありますので、出来るだけ前方に着席の方が望ましい。講義期間中に中間テストを実施する。なお、毎回その日の講義内容についての簡単な演習を実施し、これにより出席・欠席を点検する。</p> <p>成績評価方法： 出席（30%）、中間および期末テスト（70%）。</p> <p>履修上の注意： 講義開始時間は厳守するので、遅刻者に対しては出席点を減点するので注意すること。</p>					
<p>教科書： G.M.Barrow 著・藤代亮一訳、「バーロー物理化学（上）」第6版（東京化学同人）</p> <p>学生へのメッセージ： 質問等は水曜日の午後5時以降に研究室で受付けます。質問は歓迎しますので、遠慮なく来室して下さい。</p> <p>備考：本科目は応用化学科の専門科目のうち、全学共通授業科目として開講するものである。</p>					

導入ゼミナール Seminar (Introduction)			
学期区分	前期	区分・単位	必修 1単位
担当教員	非常勤講師 稲葉伸一（工学倫理担当）および応用化学科教員		
<p>授業の目的： 応用化学科は物質化学と化学工学の分野を有機的に統合して取り扱う工学部の化学系学科である。分子レベルのミクロな基礎化学から、分子集合体である化学物質・材料への機能の付与、機能性の発現、物質の創製及び生産技術への生物機能の工学的応用、実際のマクロな工業規模の製造、生産技術やシステムにわたる広範囲な領域に関する教育を行う。また、授業の前半は工学倫理の初年度教育として共通的な工学倫理教育を行う。</p> <p>到達目標： 工学倫理に関する関心を高め、しっかりとした倫理的判断が出来るようになること。更に、応用化学科の上記目標を理解し、本応用化学科にどのような研究領域があるかを知ることにより、自分自身で将来の目標を模索し、技術者、研究者としての自覚を持てるようになること。</p> <p>授業内容： 前半では以下の内容の講義を行う。 第1週 倫理とは。モラルと倫理 第2週 環境と倫理 第3週 組織の中の技術者倫理 第4週 技術者のアイデンティティ 第5週 安全とリスク 第6週 法規と注意義務 第7週 倫理実行の手法</p> <p>第8週以降は各教育研究分野の教員から毎週2分野が交代で、研究紹介を行う。</p> <p>授業の進め方： 前半は Power Point を用いて講義し、学生からの意見を適宜求める。後半は、各研究グループが趣向を変えつつ研究内容を紹介し、各教員の教育研究に対する哲学を述べる。</p> <p>成績評価方法： 成績は毎回の出席、レポート、講義・討論の中での質問・発言のユニーク性などで評価する。</p> <p>履修上の注意： 毎回必ず出席することを前提とする。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 参考文献：中村収三等 著「技術者 OB が教える実践的工学倫理」化学同人（2006） 授業の内容については適時プリント等を配布する。</p> <p>学生へのメッセージ： 可能な限り早く、応用化学科において教員などと討論、議論することにより、各自の将来について夢を見つけること。</p>			

探求ゼミナール Seminar (Advance course)			
学期区分	前期	区分・単位	必修 1単位
担当教員	応用化学科教員		
<p>授業の目的： 応用化学科の学生に対して、少人数単位での教員とのふれ合いの場を設け、いち早く化学研究に対する能動的な動機付けを行い、課題探求能力を養うことを目的とする。具体的には、グループで課題を設定し、それに対して学習し、解決していく中で、親密な交流、チームワーク能力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力の修得に努める。そして人間的にも調和のとれた化学研究者・技術者の育成を目指す。</p> <p>到達目標： 探求ゼミナールでは、特に化学研究に対する能動的な動機付けを行い、主体的に課題を設定し、探求し、解決するための、基礎的方法および技術を修得することを目標とする。</p> <p>授業内容： 少人数グループに分かれて、以下の手順に従って、個々のテーマに取り組む。 1. 学生のグループ分け (12~13人/組) 2. 教員のグループ分け (4~5人/組) 3. 学生グループの各々教員グループへの割り振り 4. 各グループ毎に、学生が主体的に相談し、探求テーマを設定 5. 探求テーマの問題整理およびグループ内の分担 6. 調査・分析 7. 成果のまとめ 8. 最終成果発表会 (2会場で各組15-20分程度)</p> <p>授業の進め方： 12~13名程度のグループに分かれて、各グループを担当する教員グループ (4~5名) の指導のもと、自主的に設定した探求テーマに取り組む。</p> <p>成績評価方法： 成績は毎回の各グループでの学習度合い、探求度合い、および発表会のプレゼンテーション能力など、総合的な修得度を勘案して評価する。</p> <p>履修上の注意： 毎回必ず出席する事を前提にする。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 特になし。</p> <p>学生へのメッセージ： 自ら積極的に課題探求能力の発掘を図り、グループ内での親密な交流、チームワーク能力、コミュニケーション能力などを身に付けることを期待しています。本ゼミナールでは、教員は助言者的な位置づけと考えて、身近に接することができるようになることを望みます。</p>			

物理化学Ⅲ		Physical Chemistry Ⅲ	
学期区分	前期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	講師 松尾成信 S. Matsuo		
<p>授業の目的： 反応や物質の分離・精製を取り扱う化学プロセスの多くで、平衡論に関する基礎知識が必要となる。本講義では相平衡と化学平衡を中心に、各種の物理・化学変化のメカニズムについて学習する。</p> <p>到達目標： 熱力学的平衡における自由エネルギー役割を学習することで、相転移や化学反応の本質を理解するとともに、平衡定数が温度や圧力等の外部変数によってどのような影響を受けるかを修得する。同時に統計力学的な取り扱いについても学習し、系を構成する分子のエネルギーと化学平衡の関係についても理解する。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 熱力学の復習（熱平衡の条件とギブスエネルギー、化学ポテンシャル） 2) 平衡論への準備（気体のギブスエネルギーとフガシティー） 3) 純物質の平衡論（相転移、Clapeyron-Clausius 式） 4) 混合系の熱力学Ⅰ（理想気体と理想溶液の混合） 5) 混合系の熱力学Ⅱ（束一的性質、非理想溶液） 6) 相図Ⅰ（法律、気液平衡） 7) 相図Ⅱ（液液平衡、固液平衡） 8) 化学平衡Ⅰ（反応ギブスエネルギー、平衡定数と外部変数の影響） 9) 化学平衡Ⅱ（平衡の統計力学的取り扱い） <p>授業の進め方： 講義は配布プリントを注品に進めるが、内容の理解を深めるため演習問題（宿題）をできる限り多く取り入れる。</p> <p>成績評価方法： 中間テスト（30%）、期末テスト（30%）、演習（20%）、出席（20%）により評価する。</p> <p>履修上の注意： 「物理化学Ⅱ」、「物理化学演習Ⅰ」で学んだ熱力学の基礎概念の応用であるので、両科目を十分に復習しておくことが望まれる。</p>			
<p>教科書・参考文献など： G.M.Barrow 著，藤代亮一訳「バーロー物理化学（上）」第6版（東京化学同人）</p> <p>学生へのメッセージ： 授業内容についての質問は、月曜日の午後5時以降に研究室で受け付けるので、遠慮なく来室して下さい。</p>			

物理化学Ⅳ		Physical Chemistry Ⅳ	
学期区分	後期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	准教授 西山 寛 S. Nishiyama, 准教授 石田謙司 K. Ishida		
<p>授業の目的： 物理化学Ⅰ～Ⅱにおいては、主に平衡状態について学ぶ。物理化学Ⅳにおいては、化学反応が進行する非平衡状態を取り扱う。化学反応速度の定義を始めとし、反応速度の定量的取り扱い、反応機構と速度式、反応速度理論などの反応速度に関する基礎の修得を1つの目的とする。加えて、工業的に重要度の高い不均一触媒反応の速度論についても修得することを目的とする。</p> <p>到達目標： 速度式の立て方から速度式の解析法、実験結果からの速度パラメータの求め方など、速度論的解析が行える能力を修得することを1つの目標とする。また、得られた反応速度式、速度パラメータから反応機構を推定する論理的能力を養うことが2つ目の目標である。加えて不均一系の反応速度論、吸着と表面反応についての解析法を修得する。</p> <p>授業内容： 以下の項目について、講義を行う。 1) 化学平衡と反応速度 2) 反応速度の定義 3) 反応速度の温度依存性 4) 反応速度の測定方法 5) 逐次反応と並列反応の速度論 6) 定常状態近似法 7) 衝突理論 8) 遷移状態理論 9) 固体表面への吸着理論 10) 不均一触媒反応の速度論</p> <p>授業の進め方： 主としてOHPあるいはPCプロジェクターを用いた講義で行い、必要に応じて授業時間中に簡単な計算演習を加える予定である。</p> <p>成績評価方法： 出席点（授業中の提出物も含む）および期末試験の成績によって評価する。評価割合は、出席点約20%、期末試験成績約80%である。</p> <p>履修上の注意： 本講義の受講する前に、物理化学Ⅰ～Ⅲおよび物理化学演習Ⅰを修得していることが望ましい。<u>演習用に常に計算機およびグラフ用紙を持参すること。</u></p>			
<p>教科書・参考文献など： 東京化学同人「バーロー物理化学（上・下）」を教科書として使用する。また、東京化学同人「反応速度論」慶伊富長著、東京化学同人「触媒化学」、慶伊富長ら訳、Wiley Toppan「Kinetics and Mechanism」A.A.Frost and R.G. Pearson 著（英語）「アトキンス物理化学（下）」（東京化学同人）、井上晴夫ら著「光化学Ⅰ」（丸善）などを参考書として推薦する。</p> <p>学生へのメッセージ： 本講義は、「化学反応工学」等の速度を取り扱う科目の導入であるので、復習を十分に行い修得に努力することを希望する。不明な点や理解し難い点については放置しないこと。質問等に関しては、1)～4)、9)、10)に関するものは、西山居室（4W-302）まで、5)～8)に関するものは、石田（4E-211）までおこし下さい。</p>			

物理化学演習 I (a)(b) Exercises for Physical Chemistry I (a)(b)			
学期区分	後期	区分・単位	必修 1単位
担当教員	教授 上田裕清 Y. Ueda 講師 松尾成信 S. Matsuo		
<p>授業の目的： この講義では、原子・分子の電子状態と結合様式およびエントロピーと自由エネルギーについて講述するとともにこれらに関する演習を通じて化学結合と熱力学法則についての理解を深める。</p> <p>到達目標： Schrodinger 波動方程式や混成軌道関数が算出でき、また、化学反応におけるエントロピーと自由エネルギーの概念を理解し、それらの値を求めることができるようになることを目指して講述する。</p> <p>授業内容：</p> <p>(a) 1) 電子の性質 2) Schrodinger の波動方程式 (箱の中の自由電子の振る舞い) 3) 電子配置 (巢箱モデル) 4) 混成軌道 5) 分子分極 6) 演習</p> <p>(b) 1) 分子の集団エネルギー 2) 熱力学第二法則 3) エントロピーのミクロ定義 4) 自由エネルギーと平衡 5) 演習</p> <p>授業の進め方： 適宜配布するプリントを中心にして講義を行う。講義の終わりに演習問題を解き、それをレポートとして提出する。</p> <p>成績評価方法： 期末試験 (50%)、小テスト (20%) と講義の出席日数 (30%) とで評価する。</p> <p>履修上の注意： 物理化学 I, II の履修を前提とする。</p>			
<p>教科書・参考文献など： G.M.Barrow 著, 藤代亮一訳「バーロー物理化学 (上)」第 6 版 (東京化学同人)</p> <p>学生へのメッセージ： 当該年度の授業回数などに応じて講義内容の変更, 追加などがありうる。 月曜日の午後 5 時以降, 研究室で質問を受け付けるので, 授業内容や問題についての質問があれば, 遠慮せずに来て下さい。</p>			

物理化学演習Ⅱ (a)(b) Exercises for Physical Chemistry II (a)(b)			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 1単位
担当教員	准教授 石田謙司 K. Ishida 講師 松尾成信 S. Matsuo		
<p>授業の目的： 系の動的平衡と反応速度の仕組みを正確に理解し、「反応速度論」および「平衡論」を実際に応用するための能力を各項目ごとに準備した演習問題を解くことにより養う。また、ミクロ（量子力学）とマクロ（熱力学）の橋渡しをする統計力学の概念についても演習を交えて講述し、化学で学習する多くの現象や法則が共通の規則（ボルツマン分布則）の上に成り立っていることを理解させる。</p> <p>到達目標： 物理化学の光学的応用を考えた場合、如何にして反応機構を解明し、また反応を最適化するかが重要となる。こうした観点から、温度や圧力などの制御変数や触媒などが反応速度にどのように関わっているのかを学習する。また、ボルツマン分布則の導出を行うことで分子分配関数の物理的意味を理解するとともに、系を構成する粒子のミクロ情報（統合距離、振動数など）からその系の状態量（内部エネルギー、エントロピーなど）を算出する手法も習得する。</p> <p>授業内容： 各回で予定している講義内容は、以下のとおり。 (a) 1) 反応速度 2) 反応次数の決定 3) 反応機構 4) 活性化エネルギー 5) 質量作用の法則 6) 平衡定数と温度 (b) 1) 統計力学の意義（分子運動と内部エネルギー、種類のアサンブル） 2) 分子分配関数（エネルギーの量子化と縮退、ボルツマン分布則） 3) 熱力学への応用（速度分布、分子配座、Arrhenius 式） 4) 分配関数と状態量Ⅰ（原子結晶） 5) 分配関数と状態量Ⅱ（実在気体） 6) 平衡論のミクロ的解釈</p> <p>授業の進め方： 演習を中心として講義を進めるが、初めて学習する内容も多く含まれており、配布プリントなどを用いて適宜十分な説明を行う。基本的な演習問題の解法を講義中に示し、類似あるいは応用的な演習問題はレポートとして提出する。</p> <p>成績評価方法： 期末試験（50%）、小テスト（20%）と講義の出席日数（30%）とで評価する。</p> <p>履修上の注意： 物理化学Ⅱ、ⅢおよびⅣの履修を前提とする。</p>			
<p>教科書・参考文献など： G.M.Barrow 著、藤代亮一訳「バーロー物理化学（上）」第6版（東京化学同人）</p> <p>学生へのメッセージ： 物理化学の内容は演習問題を解くことで理解できる部分が多く、また応用力を養うためにも十分な予習、復習を期待する。なお、当該年度の授業回数などに応じて講義内容の変更、削減、追加などがありうる。 月曜日の午後5時以降、研究室で質問を受け付けるので、授業内容や問題についての質問があれば、遠慮せずに来て下さい。</p>			

無機化学 I		Applied Inorganic Chemistry I	
学期区分	後期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	准教授 水畑 穰 M. Mizuhata		
<p>授業の目的： 本講義では、応用無機化学の立場から、技術者に必要な無機化学の基礎である多様な元素の個性を電子配置より理解し、原子・イオン間に働く基本的な相互作用（結合）および、無機化合物の持つ特性を把握する為の基礎知識を修得する。</p> <p>到達目標： 無機化合物の特性を構成元素より理解するための考え方の修得。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 元素の電子配置と周期表（3回） 2) 原子・イオンの性質（4回） <ul style="list-style-type: none"> ○原子・イオンの大きさ ○イオン化エネルギー・電子親和力・電気陰性度 3) 化学結合の基礎（4回） <ul style="list-style-type: none"> ○原子価結合理論 ○分子軌道 ○イオン結合とイオン結晶 4) 配位子場理論の基礎（2～3回） <p>授業の進め方： 配布資料に基づき板書を加えて講述する。講義には、あくまでも応用化学の立場から、観念的にならないよう実例を上げ、基礎となる知識と考え方を講述します。</p> <p>成績評価方法： 期末試験：85%，出席：15%で評価する。</p> <p>履修上の注意： 出欠をとります。講義内容の理解には、参考書併用し、物理化学と平行して学習する必要があります。</p>			
<p>教科書： シュライバー「無機化学」(上) (東京化学同人) なお、適宜 Web に資料を公開する。</p> <p>参考書： バトラー・ハロッド著 無機化学上 (丸善), ヒューイ著 無機化学上 (東京化学同人)</p> <p>学生へのメッセージ： 受け身の受講では、理解は難しい。化学技術者・研究者としての今後の進路を自覚して受講して下さい。また、出来るだけ早い段階に、大学の講義と受験の為の学習との違いを理解して下さい。</p>			

無機化学Ⅱ Applied Inorganic Chemistry Ⅱ			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 出来成人 S. Deki		
<p>授業の目的： 無機材料を理解する上で、構成する個々の原子・イオン・分子の性質と共に集合体としての構造およびその特性を理解することが必要である。集合体としての無機化合物の多用な性質を秩序性をキー・ワードとして、系統立てて理解することを目的とする。あわせて無機集合体の基本的な合成方法の考え方について理解する事を目的とする。</p> <p>到達目標： 単結晶からアモルファスまでの一連の無機集合体について構造と物性の基礎知識及び思考方法を身につけ、より高度な専門分野の理解が可能となり、合わせて関連分野の英語論文の読解が可能となることを目標とする。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 集合体と秩序性 (3回) <ul style="list-style-type: none"> ○ 短距離秩序性と長距離秩序性 (秩序と乱れ) ○ 高次構造 2) 結晶とその構造 (4回) <ul style="list-style-type: none"> ○ 結晶構造 ○ 結晶構造解析 3) 結晶の中の乱れ (3回) <ul style="list-style-type: none"> ○ 欠陥 ○ 非化学量論化合物 4) アモルファスとガラス非晶質材料 (1回) 5) 無機材料合成 (3回) <p>授業の進め方： 英語の教科書をベースとして補助教材を用いて、無機材料との基礎と応用の関連性について講述する。化学用語も許す限り英語で表現し、英語の技術用語の理解を促す。</p> <p>成績評価方法： 期末試験 (レポートを含む) : 85% 出席 : 15% で評価する。</p> <p>履修上の注意： 英語の専門教科書は不慣れで、読解が難しいようであるが、その表現は直接的・理論的で理解が容易である。積極的に化学英語の語彙を増やす努力も合わせて望まれる。物理化学の基礎が必要である。</p>			
<p>教科書： T.Weller 著 “Inorganic Materials Chemistry” (Oxford Science Publications)</p> <p>参考書： バトラー・ハロッド著 無機化学下 (丸善) 無機化学上・下 (東京化学同人)</p> <p>学生へのメッセージ： 国際化の中で英語の論文を読み・書きする事が日常化してきている。どうか英語で専門科目を理解する慣れとそのための努力を強く望みます。</p>			

無機化学Ⅲ Applied Inorganic Chemistry Ⅲ			
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 出来成人 S. Deki		
<p>授業の目的： 無機化学における代表的な反応であるイオンの酸化・還元反応系を中心に，エネルギー変換の立場から電気化学反応系として理解することを目的とする。</p> <p>到達目標： 電気化学系における反応を速度論・平衡論から理解し，その測定法は・解析法を習得とする。</p> <p>授業内容： 無機材料化学，電気化学（電池，電解，腐食）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 化学反応とエネルギー変換（2回） 2) 電気化学系と物理量（2回） 3) 電極反応と電極電位（3回） 4) 電解と電池（4回） 5) 電析と腐食（1回） 6) 測定法と解析（2回） <p>授業の進め方： 教科書及び配付資料に基づき，OHP，板書，補助教材を加えて講述する。実際の測定例に基づくデータも示し解析法も具体的に示す。</p> <p>成績評価方法： 期末試験：85%，出席：15%で評価する。</p> <p>履修上の注意： 物理化学の基礎的理解が望まれる。</p>			
<p>教科書： 電気化学会編「新しい電気化学」（培風館）</p> <p>学生へのメッセージ： 電気-化学間のエネルギー変換は応用化学の重要な側面である。電池などエネルギー変換デバイスの分野のみならず，将来，化学工学を目指す学生には化学情報の電気信号への変換，材料化学を目指す学生には，材料評価法としても重要な領域である。</p>			

分析化学 Analytical Chemistry			
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	准教授 成相裕之 H. Nariai		
<p>授業の目的： 対象とする物質の化学的組成を定性的・定量的に識別するための方法を開発・確立することを目的とする。この講義では、定性および定量分析を行うための基礎理論を修得させた後、実際の基本的操作や反応について概説する。</p> <p>到達目標： 本講義は、応用化学科の2年生を対象として分析化学的な考え方を修得する事を目標とする。化学分析法は、主として溶液内反応を利用した化学操作を伴う分析法である。最近、機器分析法の進歩は著しいが、それらと異なった適用領域をもつとともに、機器分析法の活用のためにも重要である。ここでは、溶液および溶液内化学反応・化学平衡について理論と分析化学への応用を理解する。また、理論のさらなる理解のために、計算問題による演習も行う。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> はじめに 定量分析化学における実験器具、溶液と濃度、電解質の溶解（溶液）など 酸・塩基反応と中和滴定 酸・塩基の定義、電離（または解離）平衡、中和滴定曲線、加水分解反応など 沈殿と重量分析 沈殿の生成、沈殿の溶解、硫化物の生成と溶解など 錯化合物とキレート滴定 概論、錯化合物生成の利用、キレート滴定、錯生成反応を支配する因子など 酸化還元反応と酸化還元滴定 電極電位とネルンスト式、酸化還元平衡、酸化還元滴定など その他 クロマトグラフィーによる分析法、最新の分析法など <p>授業の進め方： 本授業は、講義を中心に進めてゆく。教科書・参考書等には広い分野の要点が網羅されているので、すべてを理解するのは到底不可能である。したがって、講義では実際に会う内容について取り上げ解説するので、毎回出席し、内容の軽重についても学習することが必要である。また、指示された参考書をも利用し、理解を深めることが望まれる。なお、時々演習を課す予定である。</p> <p>成績評価方法： 成績は、定期試験の結果により評価する。その他、授業中に行う演習の結果も、特にボーダーライン上の評価では、参考にするつもりである。</p> <p>履修上の注意： 特にはないが、言うまでもなく、出席しなければ、内容の理解とそれに基づく結果は望めない。</p>			
<p>教科書・参考書など： 教科書：分析化学の基礎（木村 優・中島理一郎 共著、裳華房）</p> <p>学生へのメッセージ：</p> <ol style="list-style-type: none"> 大学での授業の主体は、言うまでもなく学生諸君達である。教員は諸君達の“真理の探究”のあくまでも助言者であると考えてほしい。諸君達が“進取の精神”で物事に立ち向かってゆくことを望みます。 オフィスアワーは特に設けません。質問があれば適宜質問に来て下さい。 			

機器分析化学 Instrumental Analytical Chemistry			
学期区分	前期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	教授 竹内俊文 T. Takeuchi, 准教授 新森英之 H. Shinmori		
<p>授業の目的： 科学技術の著しい進歩とともに機器分析法があらゆる分野で用いられるようになり，その果たす役割はますます大きくなってきている。この講義では，機器分析法の基になっている原理に関する基礎的な事項を修得させるとともに，いくつかの方法や応用を生体機能分析を含めて講述する。</p> <p>到達目標： 本講義は，応用化学科の3年生を対象として，機器分析法の特徴（長所と短所）について解説する。そして機器分析法の原理的なことを修得する。これらを理解することで機器分析法の応用特に生化学分野へ適用についても講述する。機器分析装置が進歩し，ブラックボックス化させないためには，原理と得られる結果との関係について，常に注視しておくことが大切であることを理解させる。</p> <p>授業内容： ここで講義する主な内容は，以下に述べるものである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 機器分析法の概要と位置付け 2) 化学平衡分析 酸解離定数，結合定数 3) 熱力学的パラメータの分析法 4) 速度論的解析 5) 核磁気共鳴法 (NMR 法) 6) 吸光光度法 (UV-Vis 法) 7) 蛍光光度法 8) 赤外吸収スペクトル (IR) 9) 質量分析法 (MS 法) 10) その他の機器分析法 クロマトグラフィー法，電気化学分析，X線解析 <p>授業の進め方： 本授業は，講義を中心に進めてゆく。教科書には広い分野の要点が網羅されているので，すべてを理解するのは到底不可能である。したがって，講義に毎回出席し，内容の軽重についても学習することが必要である。また，指示された参考書をも利用し，理解を求めることが望まれる。なお，プリント配布やOHPを活用して，その項の理解度を深める。</p> <p>成績評価方法： 成績は，定期試験の結果を約8割，出席を約2割で評価する。</p> <p>履修上の注意： 分析化学を修得していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書：「生体機能関連化学実験法」日本化学会生体機能関連化学部会編（化学同人） 参考書：「10年使える有機スペクトル解析」新津隆士・海野雅史・鍵裕之著書（三共出版）</p> <p>学生へのメッセージ：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 大学での授業の主体は，言うまでもなく学生諸君達である。教員は諸君達の“真理の探究”のあくまでも助言者であると考えてほしい。諸君達が“進取の精神”で物事に立ち向かってゆくことを望みます。 2. オフィスアワーは特に設けません。質問があれば適宜質問に来て下さい。 			

無機・分析化学演習 Exercises for Inorganic Chemistry and Analytical Chemistry			
学期区分	後期	区分・単位	必修 1単位
担当教員	准教授 水畑 穰 M. Mizuhata, 准教授 新森英之 H. Shinmori, 助教 梶並昭彦 A. Kajinami, 助教 牧 秀志 H. Maki		
<p>授業の目的： 無機化学および分析化学（主に機器分析化学）の講義内容を，演習を通して確実に習得する。</p> <p>到達目標： 無機化学演習については，無機化学の理解に必要な理論に基づいたデータの定量的な扱い方，解釈の仕方を理解し，無機材料を扱う上での思考方法を各自が持つことを目指す。また，分析化学演習については実差異の機器分析データの解析方法，解釈のあり方を学び，化学種の化学構造や存在状態に関する考察を行う。</p> <p>授業内容： 無機化学演習</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 化学結合に関する演習（2回） 電子配置・結合（共有・イオン・金属等） 2. 融体に関する演習（1回） 酸塩基平衡・配位化学と錯体・溶液・ガラス 3. 電気化学に関する演習（2回） 電極・電気化学反応・バンド 4. 総合演習（1回） 無機材料の合成と物性測定 <p>分析化学演習</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 化学種の構造決定と構造解析法（4回） 質量分析法，核磁気共鳴スペクトル，赤外線吸収スペクトル，紫外・可視吸収スペクトル，X線回析法 2. 酸解離定数および錯体安定定数等の決定（1回） 電位差滴定法，吸光光度法，核磁気共鳴法 3. 多成分同時定量法（1回） 原子吸光法，蛍光X線分析法 <p>※各演習について総合的演習の時間を設けることがある。</p> <p>授業の進め方： 1学年を2クラスに分け，各クラスに対して同一内容の無機化学演習及び分析化学演習を課する。無機化学演習と分析化学演習はそれぞれ独立したカリキュラムで構成されており，これらの開講順序はクラスにより異なる。</p> <p>成績評価方法： 出席30%，レポート30%，期末試験40%とする。ただし，出席点は減点法（欠席－10点，遅刻－5点）により算出する。3回以上欠席したものは出席点が0点となるので，注意すること。</p> <p>履修上の注意： 無機化学Ⅰ，機器分析化学を履修したものを対象とする。また，無機化学Ⅱ，Ⅲ及び分析化学を履修していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書：演習担当者が作成したテキストを使用する。 参考書：演習問題を解く上で参考にすべき書籍は多岐にわたる。これらはテキストに参考文献として記載する。</p> <p>学生へのメッセージ： 他の演習科目同様，各自が実際に問題を解き，納得することが重要である。演習に関する質問は随時受け付ける。ただし，予め教員室に来室，または電子メールにより担当者の都合を伺ってから質問にくること。（質問用の電子メールアドレスは，講義の際に指示する。）</p>			

有機化学 I		Organic Chemistry I	
学期区分	後期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	准教授 岡田悦治 E. Okada		
<p>授業の目的： この講義では、化学の領域だけでなく生命科学関連分野（医学、薬学、農学、生物学など）においても基礎となる有機化学の基本原則（化学結合と化学異性、脂肪族炭化水素と芳香族炭化水素の反応、機構、構造および命名法についての一般概念）を確実に修得することを目的とする。</p> <p>到達目標： 伝統的に、有機化学は“丸暗記の学問”であると考えられてきた。この誤った先入観をとり除くために、暗記箇所（記述的表現）の割合を必要最小限にとどめ、入門的講義ではあるが初期段階から、重要な有機化学反応に関する反応機構的考察を簡潔に解説する。これにより、学習したそんなに多くない基礎的知識を応用し、新しい事実を推論できる実践的な能力が身につくことを目指す。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 結合と異性（4回） 共有結合、原子価、構造異性体、構造式の書き方、形式電荷、共鳴、シグマ結合、sp^3 混成軌道、化合物の分類法（分子骨格による分類・官能基にもとづく分類） 2. アルカンとシクロアルカンの化学（3～4回） 命名法、立体配座異性体、Newman 投影法、立体配置異性体、酸化と燃焼、ハロゲン化、遊離基連鎖機構 3. アルケンとアルキンの化学（4回） 命名法、パイ結合、シストランス異性体、sp^2 混成軌道、sp 混成軌道、求電子付加反応（水素付加、極性付加反応、ホウ水素化、共役付加）、Markovnikov 則、付加還元反応、酸化（過マンガン酸カリウムによるジオールへの変換、オゾン分解、エポキシ化） 4. 芳香族化合物の化学（2～3回） 命名法、ベンゼン（共鳴構造モデル、軌道モデル、共鳴エネルギー）、芳香族求電子置換反応（ハロゲン化、ニトロ化、スルホン化、アルキル化、アシル化）、置換基効果（活性化基と不活性化基、オルト・パラ配向性基、メタ配向性基） <p>授業の進め方： 教科書に沿って進行するが、その大部分がノート講義形式となる。</p> <p>成績評価方法： 試験：後期試験期間の他に、途中で3回の理解度確認小テストを行う。 成績：出席点20点、小テスト30点、期末テスト50点の総計100点として評価する。</p> <p>履修上の注意： 特になし。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書として、「ハート／基礎有機化学」（培風館）</p> <p>学生へのメッセージ： 月曜日と火曜日の17時から18時まで、担当教員室で、主としてこの講義内容についての質問を受け付けますので、遠慮せずに来て下さい。</p>			

有機化学Ⅱ		Organic Chemistry II	
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	准教授 神鳥安啓 Y. Kamitori		
<p>授業の目的： 有機化学，生物化学等の基礎内容となっている。有機分子の立体化学，置換反応や離脱反応，アルコール，フェノール，エーテル，エポキシド及びカルボニル化合物の合成と反応等について講義する。</p> <p>到達目標： 授業内容に記されたように，有機分子の構造，反応性及び合成の個々の基礎的内容を修得する。そして，教科書の章末問題を解いて，構造と反応性の相関，反応性を支配する因子，反応性に基づく有効な合成法等を把握できる応用能力を付けることを希望する。更に，教科書に記されている「話題」を読み，有機化学と多分野の学問や社会との関連をも理解されることをも望む。</p> <p>授業内容： 以下の内容について講義する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 立体異性（3回） 2. 有機ハロゲン化合物の置換反応と離脱反応（3回） 3. アルコール，フェノール及びチオールの反応と合成等（2～3回） 4. エーテルやエポキシドの反応と合成等（2回） 5. アルデヒドやケトンの反応と合成等（3～4回） <p>授業の進め方： 主に教科書を中心にして講義する。</p> <p>成績評価方法： 出席点20点，小テスト30点，最終試験50点の総計100点として評価する。</p> <p>履修上の注意： 有機化学Ⅰを修得しておくことを要望する。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書として，「ハート／基礎有機化学」（培風館）を使用する。</p> <p>学生へのメッセージ： 出席点と小テストの成績が50点あるので毎回の授業を良く聞き，教科書等を活用した予習，復習を怠らないこと。また，よく理解できないところ，疑問点は遠慮せずに質問して下さい。</p>			

有機化学Ⅲ		Organic Chemistry Ⅲ	
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 森 敦紀 A. Mori		
<p>授業の目的： この授業は有機化学Ⅰ、Ⅱの後を受けておこなうもので、卒業研究や大学院での研究、さらには将来、社会で化学のエキスパートとして活躍する上で欠かすことのできない有機化学の基礎を完成させることを目的とするものである。</p> <p>到達目標： これまでの授業で得た知識をもとに、カルボニル化合物、芳香族化合物等の基本的な反応を、有機電子論に基づく反応機構を考察することにより理解し、今後いろいろな場面で遭遇するであろう有機化学的な議論をするに充分耐えうるだけの基礎能力を身につけるとともに、体得した知識、考え方を利用して複雑な構造の有機化合物を得るための合成戦略を自らの手で設計することができるような実力を付けることを目標とする。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) カルボニル化合物の求核置換反応（3回） カルボン酸誘導体の合成と反応 2) 共役付加反応（2回） 酸触媒反応，塩基触媒反応，マイケル付加，応用 3) 酸化と還元（4回） カルボニル化合物の還元，アルコールの酸化，その他の酸化，還元 4) 転位反応，多中心反応（3回） 基本的な転位反応，不安定中間体，協奏反応（環化付加反応，シグマトロピー転位） 5) 芳香族求核置換反応，ラジカル反応（2回） 各種求核置換反応，ベンザインを経由する反応，ラジカルの生成と反応 <p>授業の進め方： 講義メモに基づき解説する。参考資料等は指定したWEBページ上に必要に応じて公開するので、各自ダウンロードして用いる。随時、小テストを実施して理解度のチェックをおこなう。</p> <p>成績評価方法： 小テスト，中間テスト，最終テストの結果を総合的に判断して評価する。</p> <p>履修上の注意： 有機化学Ⅰ，Ⅱを履修していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 参考図書として、「知っておきたい有機反応100（日本薬学会編）」東京化学同人を用いるとともに、随時、講義において適切なものを紹介する。</p> <p>学生へのメッセージ： むやみに暗記して知識を得るのではなく、本質を理解して考える習慣をつけるよう努力してください。疑問に思うことがあれば、遠慮なく質問してください。授業の途中でもかまいません。また、小テストの答案への記入、電子メール等を利用した方法なども可。教員室にも来ていただければ、可能な限り対応します。</p>			

高分子化学 I		Polymer Chemistry I	
学期区分	前期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	准教授 南 秀人 H. Minami		
<p>授業の目的： 高分子とは、原子や原子団が共有結合で鎖のように長くつながった分子量の大きな分子のことで、私たちが見つけている衣服やコンタクトレンズ、毎日使っている文房具やパソコンなど、さらに、航空・宇宙材料や医療材料といった最先端の材料にいたるまで、高分子は身の回りに沢山溢れており、今や生活に無くてはならない材料となっています。</p> <p>この授業では、高分子と低分子の違いを認識し、その上で高分子合成における連鎖反応と逐次反応の特徴や工業的に大部分の高分子が合成されている付加重合（ラジカル重合、カチオン重合、アニオン重合、配置イオン重合）の動力学などを勉強し、高分子がどの様に合成されているかを習得します。さらに縮重合・重付加・付加縮合・開環重合などの重合反応についても解説を行い、高分子合成の基礎的な知識を習得することを目的とします。</p>			
<p>到達目標： 高分子とは何か。どのようにして合成できるのか。広く、基礎的な知識を蓄積します。</p>			
<p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 高分子合成の勉強を始めるにあたって最小限知っていなければならない高分子の構造と物性について 2) 高分子合成の基礎と実験法 3) 高分子合成の60～70%を占めるといふビニル化合物のラジカル重合、及びイオン重合 4) 非ビニル系化合物の重縮合、重付加、付加縮合 5) 高分子反応による新規高分子の合成、機能化 			
<p>授業の進め方： 下記の教科書をもとに進めます。学部学生にとって重要と思われるところを中心に、難易度が高く、大学院生レベルのところは一部省略しますが、一応14章全てについて言及します。 教科書で触れられていない、最近の話題についても解説します。</p>			
<p>成績評価方法： 試験での成績に、出席点を加味します。</p>			
<p>履修上の注意： できれば、反応速度論の理解があることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書として「高分子合成の化学」大津隆行著、出版社「化学同人」を用いる。</p>			
<p>学生へのメッセージ： 質問などがある人は自然科学総合研究棟1号館302号室まで来室下さい。</p>			

高分子化学Ⅱ		Polymer Chemistry Ⅱ	
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 西野 孝 T. Nishino		
<p>授業の目的： 高分子の分子構造，溶液構造，結晶構造，高次構造の基礎とその解析法について述べ，次いで固体物性，特に熱物性と分子構造との関連性について論述します。これらにより，高分子の構造と物性について分子論に立脚した系統的な理解を図ることを目的とします。</p>			
<p>到達目標： 高分子材料は皆さんの身の回りにあふれています。ただし，それらはただ闇雲に使われているのではなく，個々の高分子の特性が目的に合わせて利用されています。“何故その高分子を使わなければならないのか”，“もっとよい材料はないのか”，“ひょっとしてこんな機能・性能を付与できないだろうか”それらに自然と思いを馳せ，立ち止まって考えられる様になれればと考えます。そのためには，高分子の構造・物性についての基礎知識が必要不可欠となります。</p>			
<p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 高分子鎖の成り立ち；高分子のコンフォメーションの概論，特異性 2) 高分子の溶液中での構造；糸まりの形態 3) 高分子の固体中での構造；高次構造（単結晶，球晶，繊維構造） 4) 高分子の結晶化度；高分子の分析手段（X線回折，熱分析，分光分析） 5) 高分子の融解とガラス転移；熱力学的解説，分子構造との関連性 6) 高分子の分子構造と結晶構造各論 			
<p>授業の進め方： 毎回，出席調査を兼ねて，講義の中で生じた質問，疑問点，発展的な発想を書いてもらいます。次回の講義の際，その中で優れた発想を紹介し，重要なポイント，十分な理解の行き届かなかった点について改めて解説します。したがって，授業中はよく聞いて，頭を働かせ続ける必要があります。さらに，レポートにおいて，単に調査結果をまとめるだけでなく，自ら考える必要のある課題を与えることがあります。</p>			
<p>成績評価方法： 成績は，期末試験（重み100），レポート（10），出席（20）を合計して評価します。</p>			
<p>履修上の注意： 高分子化学Ⅰの履修を前提とします。</p>			
<p>教科書・参考文献など： ノート講義を基本とし，理解を助けるため適時プリントを配付します。参考書として，高分子化学（第4版，村橋俊介他，共立出版），実力養成化学スクール実用高分子化学（丸善），Introduction to Polymers, 2nd Ed., Young, Lovell, Chapman and Hall, 1991.</p>			
<p>学生へのメッセージ： 当該学年の授業回数などに応じて，講義内容の変更，削減，追加などがありえます。授業への積極的な取り組みを期待します。質問等のある場合は講義日の17時以降に研究室に来て下さい。</p>			

高分子コロイド化学 Polymer Colloid Chemistry			
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 大久保政芳 M. Okubo		
<p>授業の目的： コロイドは我々の生活に密接なものであり、かつ最近の先端技術のなかでも重要な位置を占めている。本講義ではコロイド・界面化学の基礎概念を述べるとともに工業的に広範に用いられている高分子コロイドの合成、性質、応用に関する専門知識を修得させる。</p> <p>到達目標： コロイドとはなにか、を考えることにより、不均一系を取り扱う上での基礎的概念を理解させることを目標とする。3年後期にある高分子化学実験の内容にも密接に関連させ、実験の相乗効果を期待している。</p> <p>授業内容： コロイド・界面化学の一般概念を広い観点から解説し、その基礎的な概念を理解する。ついで、分散質が高分子微粒子である高分子コロイドに話題をしばり、その特徴、各種合成法、について考える。特に、有力な方法である乳化重合法についてその理論的背景を解説する。その中で、話題性の高い、研究報告を具体的に取り上げ、不均一系の難しさ、面白さを理解させる。</p> <p>授業の進め方： 講義は PowerPoint を用いて行う。その主要なものは希望者に事前にホームページ上で公開する。</p> <p>成績評価方法： 本試験での成績に、出席点を加味する。 講義を6回欠席した時点で自動的に履修を放棄したものとする。</p> <p>履修上の注意： 高分子化学Ⅰ、高分子化学Ⅱを履修していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 高分子化学Ⅰで教科書として用いた「高分子合成の化学」大津隆行著、出版社「化学同人」を参考書として用いる。</p> <p>学生へのメッセージ： 高分子コロイドの世界を楽しく勉強しましょう。</p>			

有機・高分子化学演習 Exercises for Organic Chemistry and Polymer Chemistry			
学期区分	前期	区分・単位	必修 1単位
担当教員	准教授 岡田悦治 E. Okada, 准教授 神鳥安啓 Y. Kamitori, 准教授 南 秀人 H. Minami, 助教 小寺 賢 M. Kotera		
<p>授業の目的： この授業では、有機化学 I, II, III および高分子化学 I, II の講義で学んだ基礎的知識をもとに、演習を通してこれまでの講義内容をより深く理解するとともに、創造性や実際的能力を養うことを目的とする。</p> <p>到達目標： 有機化学系（授業内容の 1-4） これまでに系統的に学んできた数多くの重要な有機化学反応を駆使し、市販の単純な化合物から、より複雑な標的化合物だけをいかに効率的につくるか？その合成経路を設計するための論理的アプローチを習得することを目指す。 高分子化学系（授業内容の 5-9） 実際の実験により得られた数値やデータを用いて計算および解析を行うことにより、高分子合成や高分子構造・物性、およびそれらの解析法についての基礎知識を整理し、具体的に習得することを目指す。</p> <p>授業内容： 有機化学系 1. 有機合成の概念（1回） 2. 逆合成解析 I（2回） 考え方と方法 3. 逆合成解析 II（2～3回） 潜在極性，官能基相互変換，戦略と計画 4. 有機合成の実例と実践的練習（1～2回） 高分子化学系 5. ラジカル重合動力学（分子量，共重合，連鎖移動反応など）（2回） 6. 重付加・重縮合（1回） 7. 高分子構造評価法の解説と実際（1～2回） 8. 高分子物性評価法の解説と実際（1回） 9. 高分子表面評価法の解説と実際（1回）</p> <p>授業の進め方： 有機化学系，高分子化学系 各回の前半にノート講義形式で解説を行い，後半にプリント配付や OHP を利用して演習を行う。</p> <p>成績評価方法： 有機化学系50点（出席点20点，レポート30点）と高分子化学系50点（出席20点，レポート30点）の総計100点として評価する。</p> <p>履修上の注意： 有機化学 I, II, III 及び高分子化学 I, II の講義を履修していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 有機化学系 参考書として，“Oxford Chemistry Primers 31：Organic Synthesis”（Oxford University Press） 高分子化学系 参考書として，高分子合成の化学（大津隆行，化学同人），高分子と複合材料の力学的性質（L.E.Nielsen 著，小野木重治訳，化学同人），高分子化学（第4版，村橋俊介他，共立出版）</p> <p>学生へのメッセージ： 各担当教員室で，主としてこの演習内容についての質問を受け付けますので，遠慮せずに来て下さい。なお，質問受付日時は各担当教員により異なりますので，指示に従ってください。</p>			

化学工学量論 Basic Principles in Chemical Engineering			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	助授 菰田悦之 Y. Komoda		
<p>授業の目的： 化学製造工程における化学工学的的方法論の初歩として、物質収支・熱収支の考え方と流動・伝熱の初歩に関して平易に説明する。</p> <p>到達目標： 与えられた生産プロセスに対して物質収支式、熱収支式を立てることができ、その解を得ることができるようになること。さらに、流動・伝熱に関する基礎的な原理を理解し、化学製造工程における流体輸送、熱交換器の簡単な設計ができるようになること。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 化学工学の基礎的な考え方 ② 化学製造工程の組み立て方、およびその要素の重要性 ③ 簡単なプロセスにおける物質収支の取り方 ④ リサイクルを伴うプロセスの物質収支 ⑤ 化学反応を伴うプロセスの物質収支 ⑥ 化学反応を伴わないプロセスの熱収支 ⑦ 化学反応を伴うプロセスの熱収支 ⑧ 流動の基礎 ⑨ 流体摩擦係数 ⑩ 次元解析 ⑪ 管路の圧損の計算方法 ⑫ 伝導伝熱と対流伝熱 ⑬ 伝熱係数 ⑭ 熱交換器の設計 <p>授業の進め方： 基礎的な概念の説明に重点を置き、各部分でのレポート提出により、授業の理解度を深める。</p> <p>成績評価方法： 出席およびレポートによる平常点を重視する。全出席でレポート評価が全部(A)の場合は平常点を30点でカウントする。</p> <p>履修上の注意： 化学工学量論は選択科目ではあるが、2年次以降に履修する化学工学系科目の基礎となる概念を植え付ける目的として開講されているので、重要な科目であると認識して受講して欲しい。</p>			
<p>教科書： 薄井洋基 他4名著：「標準化学工学」化学同人刊（2006）</p> <p>学生へのメッセージ： レポートを各自の力で解いて提出するように心がけることが重要である。また分からないことは担当教員に質問することが大切である。</p>			

移動現象論		Transport Science	
学期区分	後期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	教授 大村直人 N. Ohmura		
<p>授業の目的： すべての化学プロセスを支配する運動量（流動・混合）、エネルギー（加熱・冷却伝熱）、物質（拡散・対流移動）の移動の基本原則を理解し、化学プロセスの設計・制御、化学装置の基本設計・操作に必要な基礎知識を習得する。</p> <p>到達目標： 本講義では、化学プロセスの現象を制御するための原理（拡散、対流移動）とその移動速度の求め方、収支の取り方ならびに移動の促進の仕方など、化学プロセス、化学装置の設計・操作に関する基本的な知識を習得する。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 粘性の法則と熱伝導の法則 2) 拡散の法則と運動量、熱、物質の拡散の相似性 3) マクロ収支、エネルギー保存の法則 4) 力学的エネルギー収支、摩擦損失 5) 微分収支、熱移動方程式 6) シェルバランス法 7) 連続の式と運動方程式 8) 円管内流れの性質、レイノルズ数 9) 伝熱抵抗の性質、伝熱係数 10) 熱交換器の設計 <p>授業の進め方： 教科書と講義用資料にしたがって、講義および演習を行う。授業では板書の他、OHPやPCプロジェクターなども使用する場合がありますので、出来るだけ前方に着席の方が望ましい。講義期間中に中間テストを実施する。なお、毎回その日の講義内容についての簡単なアンケートを実施し、これにより出席・欠席を点検する。</p> <p>成績評価方法： 出席および、レポート・演習（20%）、中間および期末テスト（80%）。</p> <p>履修上の注意： 出席に関しては授業態度を加味するので、私語などは減点対象とする。 微分積分学、化学工学量論を履修しておくこと。</p>			
<p>参考書： 福田秀樹 他著「標準化学工学」化学同人</p> <p>学生へのメッセージ： 質問等を受け付けるオフィスアワーについては、授業開始時に指示します。質問は歓迎しますので、遠慮なく来室して下さい。</p>			

分離工学 Separation Engineering			
学期区分	前期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	教授 加藤滋雄 S. Katoh		
<p>授業の目的： 化学工学量論，移動現象論の基礎知識に基づいて，拡散系分離操作について学習する。すなわち，蒸留，ガス吸収，吸着，クロマトグラフィー，膜分離などの分離原理，分離特性評価法，その設計法などについて講義し，化学プロセスの中で重要な位置を占めているこれらの分離操作についての理解を深める。</p> <p>到達目標： 拡散系分離操作についてその原理から応用までを理解する。</p> <p>授業内容： 分離とその原理（3回） 各種分離法の原理と構成 気液平衡分離（5回） 気液平衡，蒸留（フラッシュ蒸留，単蒸留，精留），拡散，ガス吸収 吸着分離（3回） 吸着平衡，吸着操作，クロマトグラフィー 膜分離（3回）</p> <p>授業の進め方： 教科書を使用して進めるとともに，何回かレポートを課す。</p> <p>成績評価方法： 出席 10%，レポート 10%，試験 80%。</p> <p>履修上の注意： 化学工学量論，移動現象論を履修していること。また，移動現象論・分離工学演習で，当講義の演習を行うとともに，吸収分離，クロマトグラフィーについて講義・演習を追加する。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 分離工学 加藤滋雄他 著 オーム社 を教科書として使用する。</p> <p>学生へのメッセージ： 授業中の質問，メール（katoh@kobe-u.ac.jp）等での質問を歓迎する。</p>			

移動現象論・分離工学演習 Exercises for Transport Science and Separation Engineering			
学期区分	後期	区分・単位	必修 1単位
担当教員	准教授 今駒博信 H. Imakoma, 准教授 鈴木 洋 H. Suzuki, 助教 勝田知尚 T. Katsuda		
<p>授業の目的： 移動現象論および分離工学で論述した内容の理解を深める目的で、両講義の代表的な操作に関する演習をおこない、移動現象論と分離工学に習熟することを目的とする。</p> <p>到達目標： 講義で習得した基礎式を、実際に近い演習問題の解決に利用できる程度の能力を身につける。</p> <p>授業内容： 1. 移動現象論に関する演習（と復習） 2. 分離工学に関する演習（と復習）</p> <p>授業の進め方： 授業中に演習をおこなう。適宜レポート提出を課す。</p> <p>成績評価方法： 出席50点、レポート50点の総計100点として評価する。ただし不十分なレポートは受け付けない場合がある。</p> <p>履修上の注意： 移動現象論および分離工学を履修していること。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 移動現象論および分離工学の教科書を使用する。その他に関しては講義中に指示する。</p> <p>学生へのメッセージ： 質問等に関しては、講義中に担当教員がオフィスアワーなどを指示する。</p>			

プロセスシステム工学 Proceaa System Engineering			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 大村直人 N. Ohmura		
<p>授業の目的： 蒸留塔や反応器などの化学装置の設計・製作においては不確定な要素が多く、またプロセスを操作する環境が変化する場合も多い。従って、仕様通りの装置を製作しても所定の目的を達成できるとは限らない。製作された装置は大幅な変更は出来ないの、あとは装置を上手に運転してできるだけ所定の目的を達成するよう工夫することが重要となる。 プロセスを操作する環境が変化する状況のもとで、それを適切に運転し、所定の目的を達成する有力手段が制御技術である。 本講義では、化学プロセスを制御対象として動的解析法および制御系の設計法について講義し、制御技術を理解することも目的とする。</p> <p>到達目標： 化学プロセスを対象として以下のことを理解する。 1) 動的な物質収支、熱収支および動的モデルの導き方。 2) 動的挙動の計算。 3) フィードフォワード制御系およびフィードバック制御系の設計法。</p> <p>授業内容： 1) プロセス制御の概念 2) プロセスのモデリング 3) プロセス動的挙動 4) プロセスの入出力関係 5) フィードフォワード制御系の設計 6) フィードバック制御系の設計</p> <p>授業の進め方： 板書、OHPによる講述が主である。適時プリントを配付する。</p> <p>成績評価方法： 講義時間中に行う2回の試験、レポート（2～3回）および出席で評価する。（試験70%、レポート15%、出席15%）</p> <p>履修上の注意：</p>			
<p>参考書： 樺田榮一、中西英二 著「化学プロセス制御」朝倉書店</p> <p>学生へのメッセージ： 講義は定刻に開始する。</p>			

プロセス設計 Prozess Design			
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 1単位
担当教員	教授 松山秀人 H. Matsuyama		
<p>授業の目的： 化学工学量論，移動現象論，分離工学，化学反応工学，生物化学工学で学んだ個別的な知識を生かして，ある目的を持ったプロセスを設計する方法論を学ぶこと。</p> <p>到達目標： 熱移動と物質移動に関する2つの典型的なプロセスの設計ができる基礎学力の習得。</p> <p>授業内容： A) 熱交換器ネットワークの解析と合成 B) 省エネルギー蒸留塔システムの解析と合成</p> <p>授業の進め方： 1. 専門の講義ノートを準備，持参して講義に出席すること。ルーズリーフその他の用紙を閉じたものは認めない。 2. このノートに授業中の内容をメモするだけでなく，予習・復習および演習問題・宿題の回答を記すこと。特に授業中にメモした内容を帰宅後，反芻し整理して文書としてまとめたもの毎回作成すること。 3. 各自作成したノートは2，3回に1度提出してもらう。予習の項は，毎回，次回の講義内容を予告するからそれについて各自調べたことを書くこと。 以上の内容は第三者が読んでも分かる様に，めりはりをつけて体裁を整えること。たとえば，左側のページには授業中の覚書を，右側のページには覚書を文書として起こしたものを書く。さらに予習・復習および演習問題・宿題についてはその旨を大きく書くなり，書体を変えるなりして第三者に分かりやすくすること。たとえば 予習「熱交換器の種類について」 の様に。 ノートはその内容と同時に，体裁・レイアウトも評価の対象となることに注意。</p> <p>成績評価方法： 各自作成したノートをおよそ一週間おきに提出してもらい，この評価（5段階）と演習問題・宿題の点数（10点満点）の合計で60%以上得たものを合格とする。したがって定期試験は行わない。</p> <p>履修上の注意： 最初の講義の日に講義の受け方についての留意点を話すから必ず出席すること。2回目以降からの出席は認めない。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 特になし。</p> <p>学生へのメッセージ： 質問等は水曜日の午後5時以降に研究室で受付けます。 質問は歓迎しますので，遠慮なく来室して下さい。</p>			

化学反応工学 Chemical Reaction Engineering			
学期区分	前期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	准教授 西山 寛 S. Nishiyama		
<p>授業の目的： 化学工学分野の主要な科目の一つである“反応工学”の基礎的な内容について述べ、反応速度・反応器設計についての理解を深める。</p> <p>到達目標： 実験データから、反応速度式を表示出来ること及び理想的反応器（管型反応器、攪拌槽型反応器）の設計式を用いて、反応器体積や転化率を見積もることが出来ること。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. はじめに 反応工学とは、反応器設計の原理、速度論と熱力学および化学量論関係の復習 2. 反応速度論 均一反応の速度論、アウレニウス則の復習 3. 速度式の解析 不可逆反応の積分速度式、可逆反応の速度式、全圧法、複合反応速度式 4. 反応器設計の基礎 反応器設計と実験室的速度データ、物質およびエネルギー収支、理想的攪拌槽型反応器(定常状態流れ、回分操作、半回分操作)、理想的管型流れ(栓流れ)反応器、理想的反応器からのずれ、空間速度・空間時間 5. 均一反応器の設計(等温条件) 理想回分反応器、理想管型流れ反応器(微分反応器、積分反応器、微分法と積分法)、理想攪拌槽型反応器(単一攪拌槽型反応器、直列攪拌槽型反応器)、攪拌槽型反応器と管型反応器との比較、半回分反応器 <p>授業の進め方： 基本的には、講述と板書による。図表については、OHPおよびPCプロジェクターも併用する。</p> <p>成績評価方法： 出席点(授業中の提出物も含む)および期末試験の成績によって評価する。評価割合は、出席点が約20%、期末試験成績が80%である。</p> <p>履修上の注意： 授業中に実施する簡単な演習用に関数電卓を持参すること。</p>			
<p>教科書・参考文献など： J.M.Smith 著 “Chemical Engineering Kinetics” 向学社；東稔節治、浅井 悟 著 “化学反応工学” 朝倉書店；橋本健治 著 “反応工学” 培風館 を参考書として推薦する。</p> <p>学生へのメッセージ： 講義を聴いた後、関連する演習問題を解くことを併用することにより、理解が深まる科目である。 本科目は、物理化学Ⅳと関係が深いので、十分復習しておくこと。不明な点等への質問は、4W-302の西山までお越し下さい。</p>			

化学反応工学演習 a および b Exercises for Chemical Reaction Engineering			
学期区分	後期	区分・単位	必修 1単位
担当教員	准教授 西山 寛 S. Nishiyama, 助教 市橋祐一 Y. Ichihashi		
<p>授業の目的： 化学反応工学で修得した内容を演習を通じて理解を深めるとともに、実用反応器での諸問題について講義・演習を行い、化学プロセス設計とともに実生産プロセスの設計について学ぶ。</p> <p>到達目標： 化学反応工学で修得した反応器内での物質収支、反応速度論に関して実際に数値を与えて演習を行い、反応器設計の基礎の取得を目的とする。</p> <p>授業内容： 化学反応工学演習 a：化学反応工学に関する演習ならびに講義を行う。 1) 反応速度式の決定法 2) 反応速度の温度依存性と活性化エネルギー 3) 連続反応器（理想流れ） 4) 連続反応器 その2 5) 実在反応器の流れ状態 6) 複合反応の速度論 化学反応工学演習 b：触媒化学および最近のトピックス（エネルギー・環境問題など）</p> <p>授業の進め方： 50人、2クラス制とし、演習 a と b を同時開講する。学期の中間でクラスを交代し同じ授業を再び行う。（あるいは、隔週で交代する）</p> <p>成績評価方法： 主席点（演習中の提出物の評価も含む）並びに小テストの結果により評価する。 演習 a：評価割合は、出席点50%、小テスト50%を目安とし総点数50点とする。 演習 b：評価割合は、出席点20%、小テスト80%を目安とし総点数50点とする。 演習 a および b の成績の合計点を本演習の総合成績とする。</p> <p>履修上の注意： 演習に先立ち充分学反応工学の講義の復習を行うこと。<u>特に演習 a には必ず化学反応工学で用いた資料、ノート、計算機およびグラフ用紙を持参すること。</u></p>			
<p>教科書・参考文献など： 培風館「反応化学」橋本健二著、朝倉書店「化学反応工学」東念ら共著、化学工学会編、「反応工学」小宮山宏著、などを参考書として推薦する。</p> <p>学生へのメッセージ： 本科目は演習科目であるので出席して演習を行うことが重要である。出席回数が基準に満たない場合は、無条件に不合格となるので注意すること。質問に関しては、演習 a に関しては、市橋（4D-406）まで、演習 b に関しては、西山（4W-302）までお越し下さい。</p>			

生化学 Biochemistry			
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	准教授 山地秀樹 H.Yamaji		
<p>授業の目的： 生命現象を化学の観点から理解するために、生体を構成する分子の性質、生体内で起こっている化学反応、生物のエネルギーの獲得方法、および遺伝情報の伝達と発現の仕方などについて学習する。これらは、生物のもつ機能を利用した物質生産プロセスなどを構築するための基礎知識として不可欠のものである。</p> <p>到達目標： 生命現象を分子レベルで理解し、生物機能を応用できるようになるための基礎的な知識を習得する。また、暗記するのではなく、理解することを目標とする。</p> <p>授業内容： 細胞 生体を構成する分子とその性質 アミノ酸、タンパク質、核酸、糖、脂質 酵素反応 酵素反応の特徴、酵素反応速度論、酵素反応の阻害 代謝とエネルギー生産 解糖系、クエン酸回路、電子伝達系 遺伝情報の複製と発現 DNAの複製、タンパク質の生合成</p> <p>授業の進め方： 教科書を中心に適時配布する資料も用いて進める。</p> <p>成績評価方法： 出席・レポート30%、試験70%で評価する。</p> <p>履修上の注意： 生物化学工学、生物機能工学などを履修したいものは本講義を受講し、生化学の知識を習得しておくことが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書：スタンダード生化学，有坂文雄，裳華房 参考書：コーン・スタンプ生化学（第5版），東京化学同人 分子生物学講義中継 Part 0（上・下），井出利憲，羊土社 マッキー生化学 分子から解き明かす生命（第3版），化学同人</p> <p>学生へのメッセージ： 本講義を通じて生物の巧妙さを感じてほしい。質問などは遠慮せずに行ってください。</p>			

生物化学工学 Biochemical Engineering			
学期区分	前期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	教授 福田秀樹 H. Fukuda		
<p>授業の目的： この講義では、微生物反応を定量的に取り扱う際に必要となる生物化学工学の修得を目的とする。</p> <p>到達目標： 微生物反応の工学的解析法として現象解明と速度論的な解析法に重点をおき、物質生産や反応器などの最適設計を行うための道具として駆使できるようになることを目指す。</p> <p>授業内容： 微生物反応の特性（2回） 微生物の分類と命名法，微生物の特性，微生物と環境，微生物反応の特徴 微生物反応の量論（2回） 菌体収率，代謝産物収率，微生物反応熱 微生物反応の速度論（3回） 増殖速度，基質消費速度，代謝産物生成速度 バイオリアクターの操作（4回） バイオリアクターの操作法，回分操作，半回分操作，連続操作 微生物反应用バイオリアクター（3回） 通気攪拌槽，気泡塔，流動塔，充填塔，物質移動，スケールアップ</p> <p>授業の進め方： 教科書を中心にして講義を行う。必要であれば，講義に OHP およびビデオを取り入れる。3～4回のレポートによる宿題を課して提出させる。</p> <p>成績評価方法： 出席点およびレポート20点，期末試験80点の総計100点として評価する。</p> <p>履修上の注意： 微分積分学，線形代数，生化学，移動現象論を履修していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 標準化学工学（化学同人）2006年出版</p> <p>学生へのメッセージ： 授業内容や問題について質問があれば，遠慮せずに来て下さい。</p>			

生物機能化学 Biomolecular Chemistry and Engineering			
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 近藤昭彦 A. Kondo		
<p>授業の目的： 生体の持つ機能性分子そのものを利用する，あるいはその機能発現の原理を模倣することで，高度なシステムを構築することは，バイオテクノロジーの一つの柱である。本講義では，生体における高機能性分子の代表であるタンパク質を中心として，その基礎および工学的利用法について理解することを目指す。</p> <p>到達目標： タンパク質の性質，タンパク質の構造と機能，タンパク質の生合成等の基礎的な項目を理解すると共に，タンパク質の分子設計，生産そしてその利用システムの構築といった工学的利用の考え方を修得する。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 生体機能性分子概説（1回） 2) タンパク質の構造と性質（4回） 3) タンパク質の機能（2回） 4) タンパク質の生合成（2回） 5) タンパク質の分子設計と生産（3回） 6) タンパク質の工学的な利用（2回） <p>授業の進め方： オーバーヘッドプロジェクター等を極力活用してビジュアルに講義を進める。</p> <p>成績評価方法： 出席20%，レポート20%，期末試験60%で評価する。</p> <p>履修上の注意： 生化学を履修していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 左右田・中村・高木・林著「タンパク質 科学と工学」（講談社サイエンティフィック）</p> <p>学生へのメッセージ： 生命を作り上げてきた驚異の高機能性分子，タンパク質について理解し，バイオテクノロジーでいかに利用するかを考えて行きたい。</p>			

バイオマテリアル Biomaterials			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 西野 孝 T. Nishino		
<p>授業の目的： バイオマテリアルを生体内で利用するにあたっては、力学的適合性、界面適合性が重要となります。本講義では、バイオマテリアルを理解する上で重要な、力学物性、表面物性、界面物性の基礎について、特に高分子材料を中心に論じます。次いで、バイオマテリアルの応用例と問題点、さらには生分解性材料、天然高分子について解説します。</p> <p>到達目標： 生体に関わる特異な部位で利用されるバイオマテリアルですが、その基礎には材料としての普遍的な力学物性、表面物性の理解が必要不可欠となります。そこでまず、これらの点について十分な修得を目指します。次いで、基礎知識に基づいて、材料性能・機能を応用・展開させる考え方の修得を目指します。</p> <p>授業内容： 1) バイオマテリアルとは（必須条件、応用例と問題点） 2) バイオマテリアルの力学物性（力学物性概論、粘弾性挙動、ゴム弾性） 3) バイオマテリアルの表面・界面化学（表面化学概論、表面改質各論） 4) 天然高分子、生分解性材料の構造・機能・物性</p> <p>授業の進め方： 高分子化学Ⅱと同じく、毎回、出席調査を兼ねて、講義の中で生じた質問、疑問点、発展的な発想を書いてもらいます。次回の講義の際、その中で優れた発想を紹介し、重要なポイント、十分な理解の行き届かなかった点について改めて解説します。したがって、授業中はよく聞いて、頭を働かせ続ける必要があります。さらに、レポートにおいて、単に調査結果をまとめるだけでなく、自ら考える必要のある課題を与えることがあります。</p> <p>成績評価方法： 成績は、期末試験（重み100）、レポート（10）、出席（20）を合計して評価します。</p> <p>履修上の注意： 高分子化学Ⅰ、Ⅱの履修を前提とします。</p>			
<p>教科書・参考文献など： ノート講義を基本とし、理解を助けるため適時プリントを配付します。 参考書として、高分子化学（第4版、村橋俊介他、共立出版）、人工臓器物語（筏 義人、裳華房）、Biomaterials Science, 2nd Ed., B.D. Ratner et al. eds., Elsevier, 2004.</p> <p>学生へのメッセージ： 当該年度の授業回数などに応じて、講義内容の変更、削減、追加などがあります。授業への積極的な取り組みを期待します。質問等のある場合は講義日の17時以降に研究室に来て下さい。</p>			

生物化学工学演習 Exercises for Biochemical Engineering			
学期区分	後期	区分・単位	必修 1単位
担当教員	教授 福田秀樹 H. Fukuda, 教授 近藤昭彦 A. Kondo, 准教授 山地秀樹 H. Yamaji		
<p>授業の目的： この講義では、酵素反応を定量的に取り扱う際に必要となる生物化学工学を習得する。さらに、酵素反応・微生物反応の工学的な解析法について、演習を通じて理解を深めることを目的とする。</p> <p>到達目標： 講義および演習を通じて、酵素反応・微生物反応の現象解明と速度論的な解析法を習得し、物質生産や反応器などの最適設計を行うための道具として駆使できるようになることを目指す。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 酵素反応の特性 酵素の分類, 特性, 固定化酵素 (2) 均相系酵素反応速度論 1基質反応, 多基質反応, 失活の速度論 (3) 固定化酵素反応の速度論 固定化酵素の総括反応速度, 固定化酵素の効率評価, 固定化酵素の性質 (4) 酵素反応解析演習 (5) 微生物反応解析演習 <p>授業の進め方：</p> <p>(1)～(3)については、教科書を中心にして1クラスで講義を行う。必要であれば、講義にOHPおよびビデオを取り入れる。</p> <p>(4), (5)に関しては、2クラスに分かれて演習を行う。演習においては、宿題やレポートを課して提出させる。</p> <p>成績評価方法： 出席点40点, レポート60点の総計100点として評価する。</p> <p>履修上の注意： 微分積分学, 線形代数学, 生化学, 移動現象論, 化学反応工学, 生物化学工学を履修していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 生物反応工学（第3版）（山根恒夫著，産業図書）</p> <p>学生へのメッセージ： 授業内容や演習問題について質問があれば、遠慮せずに来て下さい。</p>			

コンピュータ基礎 Intoduction of Computer Applications			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 1単位
担当教員	准教授 鈴木 洋 H. Suzuki, 助教 菰田悦之 Y. Komoda, 助教 小寺 賢 M. Kotera		
<p>授業の目的： 化学プロセスの解析と設計に必要な技術計算をコンピュータで行うために必要な基礎知識，基本的なソフトウェアの運用法，および簡単なプログラミング技術について習得することを目的とする。</p> <p>到達目標： 実際の化学技術社会において応用可能なコンピュータの基礎知識を習得する。また技術の多様化に対応できるよう，基本的なプログラミング技術を学ぶ。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ワードプロセッサの基本知識 2. 表計算とアルゴリズム 3. グラフィックとプレゼンテーション技術 <p>授業の進め方： コンピュータの基礎的内容を，コンピュータを使用した演習を交えながら，講義する。また，各項目において適宜レポートを課す。</p> <p>成績評価方法： 出席点50点，レポート50点の総計100点として評価する。</p> <p>履修上の注意： 本講義は，「情報基礎」の後半に開講する。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 参考文献 MS Word, MS Excel, MS Power Point の使い方に関する本 「基礎数学・統計学通論」 北川・稲葉 著 共立出版</p> <p>学生へのメッセージ： 質問等に関しては，電子メールにて随時受け付ける。</p>			

コンピュータ演習 Computer Practice			
学期区分	前期	区分・単位	選択 1単位
担当教員	教授 大村直人 N. Ohmura, 准教授 今駒博信 H. Imakoma, 助教 南原興二 K. Nanbara, 助教 菰田悦之 Y. Komoda		
<p>授業の目的： 化学および化学工学技術者・研究者に必要なパソコンを利用したデータ処理・化学工学計算技術の修得を目的とする。</p> <p>到達目標： データ処理アプリケーションの主流であるエクセルおよびエクセル VBA の修得を目指す。</p> <p>授業内容： 1) エクセルによるデータ処理 2) エクセル VBA の基礎 3) エクセル VBA による化学工学計算</p> <p>授業の進め方： 各項目について講義を行った後、プログラムを作成する。これをコンピュータで計算させ、得られた結果をレポートにまとめ提出する。</p> <p>成績評価方法： 出席点30点，レポート70点の総計100点として評価する。</p> <p>履修上の注意： 「コンピュータ基礎」を履修していること。</p>			
<p>教科書・参考文献など： プリントを配布する。</p> <p>学生へのメッセージ： 本演習に関する質問等については，開講時に担当者，オフィスアワーなどを指示する。</p>			

安全工学 Engineering for Environmental Safety			
学期区分	前期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	非常勤講師		
<p>授業の目的： 化学技術者には、化学物質による事故・災害を未然に防止するなど、環境・安全と両立する技術開発が求められている。このため、化学物質や化学プロセスの安全や環境保全に関する基礎的知識、化学工業の製造現場における具体的取り組みなどについて述べ、化学工業の環境・安全に対する理解を深める。</p> <p>到達目標： 化学工業における環境・安全問題について基礎的な知識を習得するとともに、自ら実践する気構えをもつ。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 環境・安全と安全工学 2. 化学工業における事故・災害事例 3. 火災と爆発 4. 発火源とその対策 5. 化学物質の危険性 6. 化学物質と環境保全 7. 化学物質と法規制 8. プロセスの安全性評価と評価手法 9. ヒューマンファクター 10. 化学工業製造現場の実際 11. 環境・安全の実践（倫理） <p>授業の進め方： 配布するプリントに従い講義を進める。OHPとPCプロジェクターを併用する。毎回講義内容についてアンケートを実施し、質問などにも対応する。又、これにより出欠を確認する。</p> <p>成績評価方法： 出席点50点、レポート50点、総合100点で評価する。</p> <p>履修上の注意： 化学に関する基本的な知識があればよい。</p>			
<p>教科書・参考文献など：</p> <p>参考書 前澤正禮著「化学安全工学概論」共立出版 日本化学会編「化学安全ガイド」丸善 化学工学協会編「化学プラントの安全対策」丸善</p> <p>学生へのメッセージ： 環境・安全は、学内の研究生活においても重要な事柄です。研究生活にも活用して下さい。</p>			

環境・エネルギー化学 Environmental and Energy Chemistry			
学期区分	前期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	非常勤講師		
<p>授業の目的： 環境保全ならびにエネルギー利用の効率化に対する認識を深めるため、環境汚染問題、環境保全や省エネルギーのための工学的取り組み、環境負荷の少ない化学プロセス構築のための技術開発などについて、座学から適切な講師を迎えて多面的に講義する。</p> <p>到達目標： 化学工業における環境保全、エネルギー問題について認識を深め、積極的な取り組みを可能にする。</p> <p>授業の進め方： 非常勤講師による集中講義形式による。</p> <p>成績評価方法： 出席60%，レポート40%。</p> <p>履修上の注意：</p>			
<p>教科書・参考文献など：</p> <p>学生へのメッセージ：</p>			

粉体工学 Powder Technology			
学期区分	前期	区分・単位	選択 2単位
担当教員	非常勤講師		
<p>授業の目的： 気体や液体である流体を主な対象として取り扱う化学プロセス内では、また対象が粉粒体である場合も多い。流体と粉粒体は基礎的性質がまったく異なるため、その単位操作も流体とは異なる。さらに最近では粉粒体の特性を変えて機能性粒子を製造する技術も進んでいる。この講義では、化学プロセス内で粉粒体を取り扱う際や機能性粒子を製造する際に基本となる工学的知識を身につけることを目的とする。</p> <p>到達目標： 私たちの身の回りには粉粒体を利用した製品が溢れているにも関わらず、知識不足のためそれらに興味を抱く機会が少ない。この講義では、身の回りにある製品が“なぜ”粉粒体を利用し、その粉粒体を“どのように”製造するか、という視点を通じ、粉粒体に興味を持てる程度の基礎的知識を習得することを目標とする。</p> <p>授業の内容： 1. 粉と生活 2. “なぜ”粉にするの？ 3. “どのように”粉にするの？ 4. 粉を測る 5. 粉を分ける 6. 粉の特性を変える 7. 粉体工学の夢</p> <p>授業の進め方： 各項目について、講義を行ったのち課題に対するレポート提出を課す。</p> <p>成績評価方法： 出席50点、レポート50点の総計100点として評価する。ただし不十分なレポートは受け付けられない場合がある。</p> <p>履修上の注意： 特になし。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 椿淳一郎／鈴木直隆，神田良照共著 日刊工業新聞社：「入門・粒子・粉体工学」</p> <p>学生へのメッセージ： 質問等に関しては、講義中に担当教員が回答する。</p>			

化学実験安全指導 Safety Instruction for Chemical Experiments			
学期区分	後期	区分・単位	必修 1単位
担当教員	応用化学科教員		
<p>授業の目的： 化学実験には常に傷害、火災、中毒、爆発その他の事故が潜在している。従って、実験を行うにあたっては適切な準備と行動、不断の注意、正しい実験態度が要求される。さらに、万一事故が生じた場合には、適切な処置をとらなければならない。また、実験上の試薬、廃棄物の取り扱いについても習熟していないと化学実験を行う資格はない。本講では、応用化学実験Ⅰ～Ⅳおよび卒業研究を行うに当たっての注意点について理解を深めるとともに、危険物や有害物質の取り扱い法、廃棄物の処置法などについて具体的に講述する。</p> <p>到達目標： 実験上の危険性について具体的に解説を聞き、適切な準備と行動の重要性を認識する。試薬・廃棄物の取り扱いに習熟し、突然の事故に対して冷静に対処できる手法を身につけることを目標とする。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 危険な装置の取り扱い 2) 危険な物質と有害な物質の取り扱い 3) 廃棄物の処理 4) 応急処置法 5) 化学実験の基本操作法 6) 放射線と放射性物質の特性と注意点 <p>授業の進め方： 応用化学科の教員がオムニバス方式で毎回、上記各点についての講義を行い、最終回に試験を行う。</p> <p>成績評価方法： 出席を基本とし（成績評価の8割）、それにレポート成績（2割）を加味する。特別な理由なく、欠席回数3回以上のものは単位を修得させない。</p> <p>履修上の注意： 本講義を修得しないものは、応用化学実験を履修できないので注意すること。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書として、化学同人編集部「新版 実験を安全に行うために」、同「新版 続実験を安全に行うために」（化学同人）</p> <p>学生へのメッセージ： 実験中の事故は時には大きな惨事になる危険性がある。準備不足、不注意、安易な考えで実験を行うことは本人のみならず、回りの人間を巻き込むことになる。</p>			

応用化学実験 I Chemical Science and Engineering Laboratory I																	
学期区分	前期	区分・単位	必修 3単位														
担当教員	応用化学科教員																
<p>授業の目的： 応用化学実験 I は、有機化学合成実験および物理化学・電気化学系実験から構成される。これらの実験を通じて基礎的な実験技術を修得し、実験データの解析方法と得られた物理変化・化学変化に対する考察力を養成するとともに、関連する講義の理解を深める。</p> <p>授業の進め方： 数名の班に分かれ、以下の各実験テーマをローテーションしながら履修する。 (全12回)</p> <table border="0"> <tr> <td>(有機化学系実験)</td> <td>(物理化学・電気化学系実験)</td> </tr> <tr> <td>1. アセトアニリドの合成</td> <td>1. 液体の蒸気圧</td> </tr> <tr> <td>2. オレンジ II の合成</td> <td>2. 合金の融点図</td> </tr> <tr> <td>3. p-ニトロアセトアニリドの合成</td> <td>3. 液体の密度と粘度</td> </tr> <tr> <td>4. p-ニトロアニリンの合成</td> <td>4. 2次反応の速度定数</td> </tr> <tr> <td>5. NMR スペクトル測定</td> <td>5. 電気伝導度測定</td> </tr> <tr> <td>6. オレンジ II による染色</td> <td>6. 起電力測定と分解電圧測定</td> </tr> </table> <p>成績評価方法： 各テーマについて、出席20点、レポート提出40点、レポート評価40点とし、合計をそのテーマの評価とする。ただし、不十分なレポートは受付けないことがある。各テーマの平均を総合評価とし、60点以上を合格とする。</p> <p>履修上の注意： 応用化学実験 I を履修するためには、「化学実験」および「化学実験安全指導」の単位を修得していなければならない。</p>				(有機化学系実験)	(物理化学・電気化学系実験)	1. アセトアニリドの合成	1. 液体の蒸気圧	2. オレンジ II の合成	2. 合金の融点図	3. p-ニトロアセトアニリドの合成	3. 液体の密度と粘度	4. p-ニトロアニリンの合成	4. 2次反応の速度定数	5. NMR スペクトル測定	5. 電気伝導度測定	6. オレンジ II による染色	6. 起電力測定と分解電圧測定
(有機化学系実験)	(物理化学・電気化学系実験)																
1. アセトアニリドの合成	1. 液体の蒸気圧																
2. オレンジ II の合成	2. 合金の融点図																
3. p-ニトロアセトアニリドの合成	3. 液体の密度と粘度																
4. p-ニトロアニリンの合成	4. 2次反応の速度定数																
5. NMR スペクトル測定	5. 電気伝導度測定																
6. オレンジ II による染色	6. 起電力測定と分解電圧測定																
<p>教科書・参考文献など： 各実験テーマに関する指針書（プリント）を適宜配布する。 「工業有機化学実験」 長井芳男編（丸善） 「バーロー物理化学（上）」（東京化学同人） 「実験を安全に行うために」、 「統実験を安全に行うために」 （化学同人）</p> <p>学生へのメッセージ： 予め指針書および参考書を熟読し、テーマの内容と目的を十分理解した上で実験に臨むこと。 実験器具、薬品と取り扱いには細心の注意を払い、また廃液の処理については教員の指示に従うこと。</p>																	

応用化学実験Ⅱ Chemical Science and Engineering Laboratory Ⅱ			
学期区分	前期	区分・単位	必修 3単位
担当教員	応用化学科教員		
<p>授業の目的： 応用化学実験Ⅱは、反応工学実験，化学工学実験およびプロセス工学実験から構成される。これらの実験を通じて基礎的な実験技術を修得し，実験データの解析手法と得られた現象に対する考察力を養成するとともに，関連する講義の理解を深める。</p> <p>授業の進め方： 数名の班に分かれ，以下の各実験テーマをローテーションしながら履修する。各テーマの終わりにレポートを作成して提出する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. BET 法による多孔質体の表面積評価 2. 管型流通連続反応器の速度解析 3. 気相拡散係数の測定 4. 円筒槽内からの水の流出 5. 熱交換器の試作 6. 化学プロセスのデータ処理 <p>成績評価方法： 各テーマについて，出席20点，レポート提出40点，レポート評価40点とし，合計をそのテーマの評価とする。ただし，不十分なレポートは受付けないことがある。各テーマの平均を総合評価とし，60点以上を合格とする。</p> <p>履修上の注意： 応用化学実験Ⅱを履修するためには，「化学実験」および「化学実験安全指導」の単位を修得していなければならない。 実験に際して，グラフ用紙，電卓を持参すること。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 適宜プリントを配布する。</p> <p>学生へのメッセージ： 予め指針書を熟読し，テーマの内容と目的を十分理解した上で実験に臨むこと。 実験器具，薬品と取り扱いには細心の注意を払い，また廃液の処理については教員の指示に従うこと。 当該年度の授業回数などに応じて，実験内容の変更，削除，追加などがありうる。</p>			

応用化学実験Ⅲ Chemical Science and Engineering Laboratory Ⅲ			
学期区分	後期	区分・単位	必修 3単位
担当教員	応用化学科教員		
<p>授業の目的：</p> <p>応用化学実験Ⅲは、無機・有機薄膜・高分子等各種材料から構成される機能性材料の合成に関する実験を行う。材料の合成を通じて、ある目的を有する材料を合成するために必要な考え方、実験の進め方とともに、材料合成に必要な各種の実験手法について習得する。また、材料合成の際に必要な材料評価の方法として、各種分析法（機器分析を含む）を習得する。</p> <p>授業の進め方：</p> <p>以下のテーマに関して少人数のグループに分かれて実験を行う。それぞれのテーマの終了後、各自で実験レポートを作成し提出する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・繊維状β型硫酸カルシウム水和物の合成と形状制御（無機材料・4回） ・機能性有機薄膜の作製と光学特性の測定（薄膜材料・4回） ・酢酸ビニルの重合とその物性と反応（高分子材料・4回） <p>成績評価方法：</p> <p>各実験について、出席20点、レポート提出40点、レポート評価40点として、その合計を評価とする。ただし、実験の特徴・進度によってこれらの配点の配分が多少変動することがある。（テキストに記載）また、出席しなかったテーマについてはレポート提出資格がない。また、不十分なレポートは受け付けないことがある。各実験の平均を総合評価とし、60点以上を合格とする。</p> <p>履修上の注意：</p> <p>「化学実験」および「化学実験安全指導」の単位を修得していなければならない。実験室内では白衣・眼鏡を着用すること。</p>			
<p>教科書・参考文献など：</p> <p>応用化学科学生実験 WG 編 「応用化学実験テキスト」Ⅲ, Ⅳ</p> <p>学生へのメッセージ：</p> <p>実験の理解を深めるために、必ず予習すること。実験中は、安全に注意するとともに、起こっている現象についても注意深く観察すること。当該年度の授業回数などに応じて実験内容の変更、削除、追加などがありうる。</p>			

応用化学実験Ⅳ Chemical Science and Engineering Laboratory Ⅳ			
学期区分	後期	区分・単位	必修 3単位
担当教員	応用化学科教員		
<p>授業の目的：</p> <p>応用化学実験Ⅳは、生物化学工学実験と生物材料化学実験から構成される。生物化学工学実験では、酵素反応、微生物反応、および生化学物質の分離精製に関する実験を通じて、生物化学工学に関する基礎的な実験技術を修得し、工学的な解析手法と考察力を養成するとともに、講義の理解を深める。生物材料化学実験では、バイオマテリアルとその素材、ならびに天然生物材料の構造と物性に関する基礎実験技術を修得し、現象の解析手法と考察力を養成するとともに講義の理解を深める。</p> <p>授業の進め方：</p> <p>生物化学工学実験では、数名で1つのグループを編成し、以下に示す3つの実験テーマをローテーションしながら履修する。各実験テーマはそれぞれ2日間で完結する。生物材料化学実験では、以下に示す様な数多くの実験テーマをローテーションしながら履修する。それぞれのテーマの終了後、各自で実験レポートを作成し提出する。</p> <p>生物化学工学実験</p> <ul style="list-style-type: none"> ・酵素 β-ガラクトシダーゼの反応速度パラメータの測定 ・アルギン酸カルシウムゲル固定化酵母によるエタノール発酵 ・イオン交換クロマトグラフィーによるタンパク質の分離 <p>生物材料工学実験</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バイオマテリアルとその素材の構造と物性（熱、力学、表面、光学） ・天然生物材料の化学的同定、構造（X線回折）および物性（酵素分解性） ・天然生物材料の分離（ゲル電気泳動、ペーパクロマト） <p>成績評価方法：</p> <p>各実験について、出席20点、レポート提出40点、レポート評価40点として、その合計を評価とする。ただし、出席しなかったテーマについてはレポート提出資格がない。また、不十分なレポートは受け付けないことがある。各実験の平均を総合評価とし、60点以上を合格とする。</p> <p>履修上の注意：</p> <p>「化学実験」および「化学実験安全指導」の単位を取得していなければならない。実験室内では白衣・保護眼鏡を着用すること。</p>			
<p>教科書・参考文献など：</p> <p>応用化学科学生実験 WG 編「応用化学実験テキスト」Ⅲ, Ⅳ</p> <p>学生へのメッセージ：</p> <p>実験の理解を深めるために、必ず予習すること。実験中は、安全に注意するとともに、起こっている現象についても注意深く観察すること。当該年度の授業回数などに応じて実験内容の変更、削除、追加などがありうる。</p>			

外国書購読		Reading of Scientific Papers	
学期区分	前期	区分・単位	必修 1単位
担当教員	応用化学科教員		
<p>授業の目的： 科学技術の国際化の流れの中で、共通言語となっている英語を中心に、日本語以外の専門書および論文の読解能力の向上と専門用語の修得を目指す。また将来学術論文を英語で執筆することも視野に入れ、語法、表現法についても学ぶ。</p> <p>到達目標： 専門書および論文に現れる基礎的な語法、表現法を学び、読解力と作文の基礎力を身につける。例えば簡単な実験方法や図表説明等を英語で記述できることを目指す。</p> <p>授業内容： 卒業研究関連の専門書および論文を中心に所属研究グループ教員と共に購読する。</p> <p>授業の進め方： 外国書購読の指導には応用化学科全教員が参加し、学生は各研究グループに分属して指導を受ける。所属する研究グループによって手法が異なるが、一般的には英語の専門書および論文を購読し、その内容や要約を複数回、研究グループ内にて発表・解説する。具体的な授業計画は、研究グループ個々に提示される。</p> <p>成績評価方法： 出席状況、理解度、文章の表現能力および発表に対する質疑応答を考慮して総合的に評価する。</p> <p>履修上の注意： 単に日本語に翻訳するだけでなく、例えば結果を述べるための表現、実験装置や考察に関する表現など科学技術外国語に特有な表現力を各自が整理して身につけていくという積極的な態度が望まれる。</p>			

特別講義 I～IV Special Lecture I～IV			
学期区分	前期	区分・単位	選 択 I～IVとも 各1単位
担当教員	非常勤講師		
<p>授業の目的： 学外の多彩な研究者・技術者により，化学およびその関連分野に関する化学工業に関する話題を提供する。卒業研究を行う4年生がより深い学術的探求心と興味を持つことによって産業との架け橋となるべく，より実践的な講義内容とする。</p> <p>到達目標： 学会・産業界で活躍する多くの化学者が取り組んでいる学術分野および研究開発分野についての理解を深め，これまで履修してきた学科目や自らが行っている卒業研究に対する多面的な見方が出来るようにする。</p> <p>授業内容： 物質化学，化学工学および関連分野</p> <p>授業の進め方： 担当の講師が決定次第，掲示により告知する。</p> <p>成績評価方法： 出席状況，理解度等を中心に評価する。詳細は各担当の講師の説明を受けること。</p> <p>履修上の注意： ほとんどの科目が集中講義により行われるので，開講時期の掲示・告知に注意すること。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 担当の講師からの指示を仰ぐこと。</p> <p>学生へのメッセージ： 短期間にさまざまな分野の実践的・先端的な化学の分野にふれることは将来的にも多くない滅多にないチャンスであると捉え，積極的な受講を期待します。なお，4年次の開講であり，卒業研究を行いながらの受講となるため，あらかじめ日程等に注意しておくこと。</p>			

卒業研究			
学期区分	前・後期	区分・単位	必修 10単位
担当教員	応用化学科教員		
<p>授業の目的： 卒業研究は、応用化学科での学習の総まとめであり、その目的は研究テーマに関連した事前調査、実験計画の立案、得られた実験結果の整理・考察、結論の導出などの研究方法・態度を実習・体験することである。</p> <p>到達目標： 研究グループ単位の小集団教育の中で、教員による個別指導や学生の自主的勉学を通してテーマ設定や研究の進め方、さらに結果のまとめ方やプレゼンテーション能力を修得する。</p> <p>授業内容： 3年次までの講義・実験等で勉強してきた既知の学問体系に対する知識を軸として、卒業研究では、最先端の研究に参加することで化学の面白さと同時に苦しさも体験する。研究は研究グループに所属して行い、テーマ設定や研究の進め方については、研究指導者との討論を通して決定される。従って、3年次までとは次元のかなり異なる大学生活となるので、研究グループの選択には真剣に取り組むことが望ましい。研究グループと研究内容は3年次の学年末に「研究グループ案内」として発表する。研究成果は「要旨」と「論文」にまとめ学科に提出する。さらに「要旨」に基づいた「論文発表」を学科内教員の前で行い、研究成果に対する質疑応答も行う。</p> <p>授業の進め方： 卒業研究の指導には応用化学科全教員が参加し、学生は各研究グループに所属して指導を受ける。所属する研究グループによって、テーマ・研究手法などが異なるが、一般的には、日々の研究を中心に文献講読、研究会、中間発表などが定期的に行われる。具体的な授業計画は、研究グループ個々に提示される。</p> <p>成績評価の方法： 所属研究グループにおける研究に取り組む姿勢はもちろんのこと、1) 研究会・セミナーへの出席状況、2) 調査・問題提起能力、3) 計画・実行能力、4) 文章・プレゼンテーション等の表現能力および5) 卒業論文を教職員全員が審査して総合的に評価する。また、卒業論文の審査には、要旨の提出、論文発表、論文提出が不可欠である。なお、得られた研究成果そのものが直接の評価対象ではない。</p> <p>履修上の注意： 卒業研究を申請しようとする学生には別途内規により定めた申請条件（4. 履修上の注意 参照）を満たしていること。</p>			

VIII 情報知能工学科

1. 教育の目指すもの

科学技術の進歩とともに社会構造が大きく変革し、高度情報社会に移行しつつあり、技術が社会へ社会が技術への相互依存度を益々高めている。ここにおいて工学技術者は社会と調和した技術を開発する責を負うものである。情報知能工学科は、知能化システムを通じて豊かで安心して暮らせる社会の実現に貢献できる人材を育成することを目指す。

科学の基本概念には、細分化する方法の分析科学と統合化する方法のシステム科学とがある。情報知能工学科は、情報科学を基盤としつつその二つを組み合わせ、情報の取得、加工、生成、伝達という観点から高度に知能化されたシステムの構築と知能化科学の創成を行う。

基礎教育として、数学、物理工学、機械工学、電気工学などの幅広い分野を学ぶことにより現象の分析的な理解能力を養う。そしてシステム科学として、システムの計測・制御工学、設計工学、生体工学などによって統合化の能力を養うとともに、計算機を中心とした情報処理工学、認識工学、知識工学などの情報科学を理解させる。これらの基礎および専門知識を統合・融合化して、自らの知能化科学を創造させる。学生自らがテーマを見つけ、柔軟性のある発想による創造力を養い、問題解決能力を身に付けることによって多様性のあるシステムの知能化に関する研究・開発に従事できる技術者を養成する。

学生実験によっていろいろの現象の理解を体験から会得させ、計算機演習による情報基礎技術の修得、および重要科目の演習による深い思考力を修得させる。また卒業研究では総合的理解能力と問題解決能力とを実践的に修得させる。さらに教養科目、工学倫理科目による自己啓発を促し、社会的にバランスの取れた人材育成を目指す。

2. 構成と教育組織

講座	教育研究分野	教授	准教授	講師	助教	助手	事務職員
情報 報 基 礎	情報メディア	有木 康雄 (自3号館801)		滝口 哲也 (自3号館807)			山崎 智美 (D2-401)
	プログラミング言語	田村 直之 (学情センター3F2)		番原 睦則 (学情センター3F4)			黒田 教子 (S510)
	知能システム	鳩野 逸生 (学情センター3F1)	伴 好弘 (学情センター3F3)				井口 直子 (S510)
	人工知能	上原 邦昭 (自3号館802)	安村 禎明 (自3号館808)			関 和広 (自3号館808)	
	知的ソフトウェア	大川 剛直 (自3号館702)	江口 浩二 (自3号館703)			尾崎 知伸 (自3号館708)	
	情報数理	角田 譲 (自3号館414) 桔梗 宏孝 (自3号館413) 新井 敏康 (自3号館415)	菊池 誠 (自3号館426) 垣内 逸郎 (自3号館425) Brendle (自3号館424)				矢田部俊介 (自3号館417)
情報 シ ス テ ム	知能ロボティクス	羅 志偉 (S515)					
	無線通信	賀谷 信幸 (S303-1)				岩下 真士 (S306)	
	情報フォトニクス		的場 修 (S303-2)			仁田 功一 (S209)	
	計算機システム		永田 真 (自3号館704)			鎌田十三郎 (自3号館714)	
	プロセッサ・ アーキテクチャ	吉本 雅彦 (S409-2)	太田 能 (S202)			川口 博 (S201)	高木 由美
シ ス テ ム デ ザ イ ン	システム計画	貝原 俊也 (S502)				指尾健太郎 (S405)	
	システム設計	多田 幸生 (S506)	花原 和之 (S505)			浦久保孝光 (S106)	
	システム制御	太田 有三 (S503)	藤崎 泰正 (S504)			森 耕平 (S301)	
	システム情報	玉置 久 (自3号館516)					
	システム構造	小島 史男 (自3号館301)	小林 太 (自3号館304)				
	分布系同定・ 応用関数解析	中桐 信一 (3W-406)		白川 健 (3W-404)			
	分布系制御・ 非線形解析	南部 隆夫 (3W-405)	内藤 雄基 (3W-403)				

3. 履修科目一覧表

専門科目

(◎, ◎1は必修, ○1, ○2, ○, ○A, ○B, ○Cは選択必修を示す)

記号	授業科目	単位数	毎週の授業時間								担当教員	講義番号	備考	
			1		2		3		4					
			前	後	前	後	前	後	前	後				
◎	基礎解析 I	2	2											
◎	基礎解析 II	2		2										
◎	線形代数学 I	2	2											
◎	線形代数学 II	2		2										
○1	数理統計学	2		2										
○1	微積分演習	1		2										
○1	離散数学	2	2									0417		
○1	複素関数論	2			2							0322		
○1	常微分方程式論	2			2							0323		
○1	ベクトル解析	2		2								0217		
○1	フーリエ解析	2			2							0312		
○1	数値解析	2					2					0221		
○1	確率論基礎	2			2					垣内		5001		
○1	確率過程論	2				2				石川		5002		
○1	応用解析演習	2			2					藤崎, 浦久保		0326		
○2	物理学 C1	2	2											
○2	物理学 C2	2		2										
○2	物理学 C3	2		2										
○2	物理学 C4	2			2									
○2	解析力学 B	2				2								
◎	物理学実験	2		4										
◎	情報知能工学総論及び安全工学	1	1							全教員		5100		
◎1	アルゴリズムとデータ構造及び演習	2			4					大川		5101		
◎1	プログラミング言語論及び演習	2				4				田村, 熊本, 番原		5102		
◎1	電気回路及び演習	2				4				賀谷		5103		
◎1	スペクトル解析及び演習	2					4			小島, 玉置		5104		
◎1	システム計画学及び演習	2					4			貝原		5105		
◎1	システム解析学及び演習	2						4		太田 (有), 森		5106		
○	論理回路	2	2							未定		5200		
○	数理論理学	2					2			ブレンドル		5201		
○	光情報工学基礎	2						2		的場		5202		
○	グラフ理論	2	2							江口		5203		
○	計算機工学	2	2							安村		5204		
○	電子回路	2				2				永田		5205		
○	システム設計学	2						2		多田		5206		
○	回路理論	2					2			玉置		5207		
○	デジタル回路	2						2		吉本		5208		

3. 履修科目一覧表

専門科目

(◎, ◎1は必修, ○1, ○2, ○, ○A, ○B, ○Cは選択必修を示す)

記号	授業科目	単位数	毎週の授業時間								担当教員	講義番号	備考
			1		2		3		4				
			前	後	前	後	前	後	前	後			
○A	オートマトンと形式言語	2			2						桔梗	5301	
○A	言語工学	2				2					上原	5302	
○A	システムプログラム	2				2					鳩野, 伴	5303	
○A	計算機アーキテクチャ	2					2				吉本	5304	
○A	人工知能	2					2				上原	5305	
○A	データベースシステム	2				2					有木	5306	
○A	ソフトウェア工学	2					2				未定	5307	
○B	情報通信工学	2					2				太田 (能)	5300	
○B	センシング工学	2					2				羅	5400	
○B	電磁気学応用	2			2						未定	4501	
○B	信号解析	2				2					小島	5402	
○B	光情報工学	2					2				的場	5403	
○B	画像工学	2					2				有木	5404	
○B	デジタル信号処理	2					2				滝口	5405	
○C	オペレーションズリサーチ	2			2						貝原	5500	
○C	システム制御理論Ⅰ	2				2					太田 (有), 森	5501	
○C	システム制御理論Ⅱ	2					2				藤崎	5502	
○C	電子制御機械論	2				2					羅	5503	
○C	システムモデル論	2					2				小林	5504	
○C	ロボット工学	2					2				花原	5505	
○C	計算機援用工学	2					2				多田	5506	
◎	情報知能工学実験Ⅰ	2			4						全教員	5600	
◎	情報知能工学実験Ⅱ	2				4					全教員	5601	
◎	情報知能工学演習Ⅰ	1	2								全教員	5602	
◎	情報知能工学演習Ⅱ	1		2							全教員	5603	
◎	情報知能工学演習Ⅲ	1			2						全教員	5604	
◎	情報知能工学演習Ⅳ	1			2						全教員	5605	
◎	情報知能工学演習Ⅴ	1				2					全教員	5606	
◎	情報知能工学プロジェクト	2					4				全教員	5607	
◎	卒業研究	10						20	20		全教員	5608	
	その他必要と認める専門科目												その都度定める

週授業時間数（専門科目）

		時間数	1		2		3		4		備考
			前	後	前	後	前	後	前	後	
◎	必修	75	7	10	2	6	6	4	20	20	
◎1	必修	24	0		12	12					
○1	選択必修	22	2	6	8	2	2				
○2	選択必修	10	2	4	2	2					
○	選択必修	18	6	0	0	4	8				
○A	選択必修	14				2	6	6			
○B	選択必修	14				2	2	10			
○C	選択必修	14				2	4	8			
	計	191	17	20	24	32	28	30	20	20	

単位数（専門科目）

		単位数	1		2		3		4		備考
			前	後	前	後	前	後	前	後	
◎	必修	32	6	7	1	3	3	2		10	
◎1	必修	12	0		6	6					
○1	選択必修	21	2	5	8	2	2	2			
○2	選択必修	10	2	4	2	2					
○	選択必修	18	6	0	0	4	8				
○A	選択必修	14				2	6	6			
○B	選択必修	14				2	2	10			
○C	選択必修	14				2	4	8			
	計	135	16	16	17	23	25	28		10	

専門科目に係る4年生への進級要件及び卒業要件

	◎				◎1	○1	○2	○	○A	○B	○C	計
	総論	実験/演習	数学	卒研								
開講単位数	1	13	8	10	12	21	10	18	14	14	14	135
4年生への進級要件	1	13	8		10	≥10	≥6	≥28				≥76
								≥10	いずれかから≥10			
卒業要件	1	13	8	10	12	≥10	≥6	≥32				≥92
								≥10	いずれかから≥10			

注意：卒業要件として、上表の他に専門科目あるいは外国語科目の選択科目、健康・スポーツ科学の選択科目を4単位以上取得すること。

4. 履修上の注意

履修要領

- (1) 「記号」の◎、◎1は必修科目、○1、○2、○、○A、○B及び○Cは選択必修科目を示す。
- (2) 学生が1年間に履修登録可能な単位数は、工学部規則第6条に規定されている単位を上限とする。(工学部学生便覧参照)
- (3) 学生は、卒業するためには下記の要件をすべて満たさなければならない。

教養原論	16単位以上
外国語科目	
外国語第1	6単位
外国語第2	4単位
情報科目	
情報基礎	1単位
健康・スポーツ科学	
健康・スポーツ科学実習I	1単位
専門科目、外国語科目の選択科目及び健康・スポーツ科学の選択科目の合計	96単位以上
総計	124単位以上

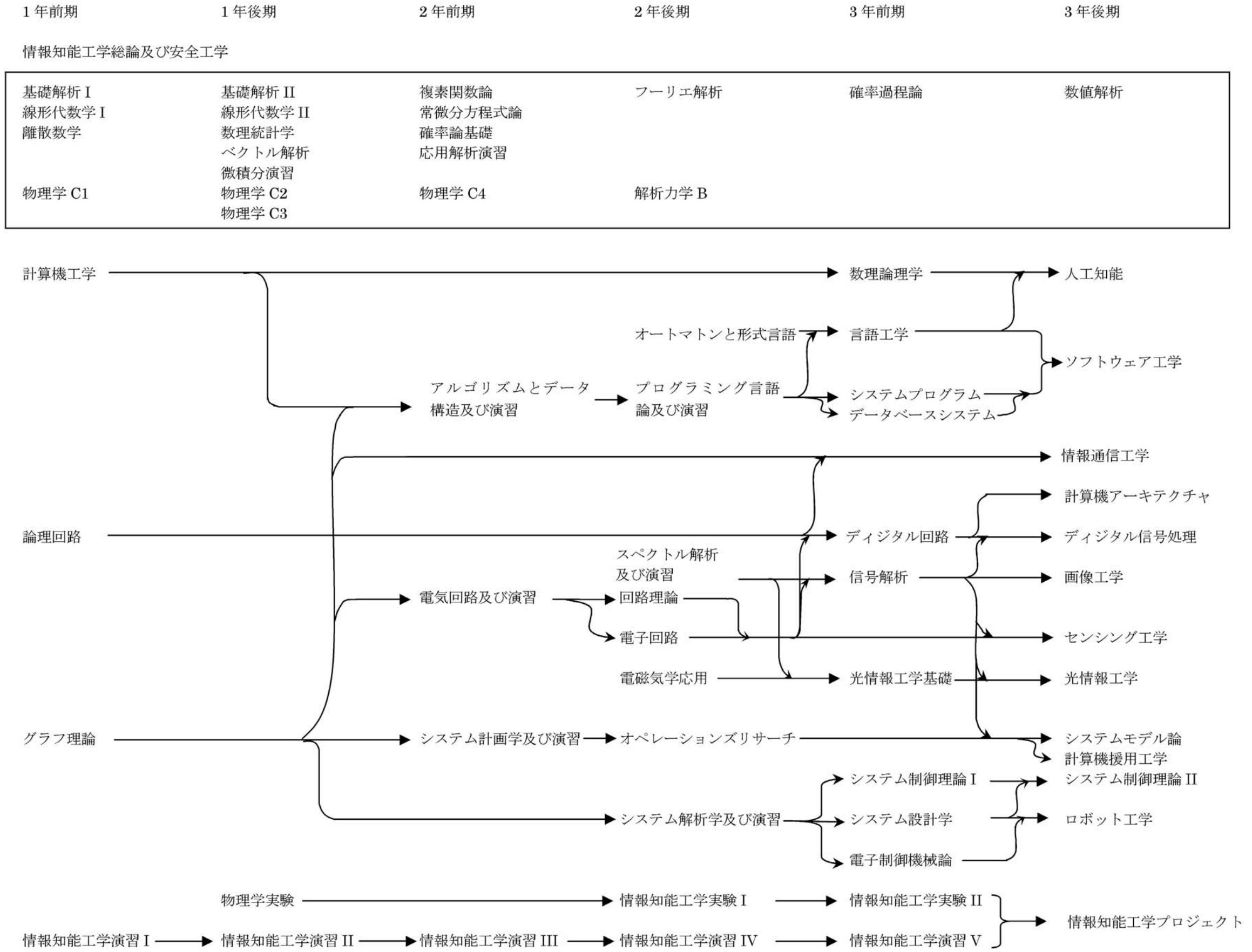
専門科目修得方法

- | | |
|---------------------|--------------------|
| 必修科目◎ (15科目) | 32単位 (卒業研究10単位を含む) |
| 必修科目◎1 (6科目) | 12単位 |
| 選択必修科目○1 (11科目) | 10単位以上 |
| 選択必修科目○2 (5科目) | 6単位以上 |
| 選択必修科目○と○A、○B、○Cの合計 | 32単位以上 |
| 選択必修科目○ (9科目) | 10単位以上 |
| 選択必修科目○A、○B、○Cのいずれか | 10単位以上 |
- (○Aを10単位以上、または、○Bを10単位以上、または、○Cを10単位以上)
- (4) 他学科または他学部の専門科目の授業科目中、当学科が認めた場合は当学科の選択科目とみなすことができる。
 - (5) 上記の履修要件は学生便覧に従う。特に教養原論の履修については、学生便覧の神戸大学工学部規則第5条(別表第2)に注意すること。
- (注) この履修規則は平成19年4月入学者から適用する。

[2] 内規

- (1) 情報知能工学実験・演習・プロジェクト履修要件
 - ・物理学実験を履修していない場合は、実験Iは履修できない。
 - ・物理学実験及び実験Iの両方を履修し、かつ少なくとも一方の単位を取得している場合に、実験IIを履修することができる。
 - ・実験IIを履修していない場合は、情報知能工学プロジェクトは履修できない。
 - ・情報基礎を履修していない場合は、演習II～V及び情報知能工学プロジェクトのうち、計算機の利用を主とする科目は履修できない。
- (2) 卒業研究を履修するためには、次の条件を満たしていることが必要である。
 - ・卒業に必要な教養原論、外国語科目、情報科目および健康・スポーツ科学の単位をすべて修得していること。
 - ・必修科目◎のうち、卒業研究を除くすべての単位を修得していること。
 - ・必修科目◎1のうち、10単位以上修得していること。
 - ・選択必修科目○1、○2のうち、卒業に必要なすべての単位を修得していること。
 - ・選択必修科目○と○A、○B、○Cの合計で、28単位以上修得していること。
 - ・選択必修科目○のうち、10単位以上修得していること。
 - ・選択必修科目○A、○B、○Cのいずれかについて、10単位以上修得していること。

5. 各専門科目の関係



確率論基礎 Foundations of Probability and Statistics			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	准教授 垣内逸郎 I. Kakiuchi		
<p>授業の目的： われわれの周囲にある現象を数理を用いて理解し探求しようとするとき、偶然的な変動に従うものを取り扱う確率理論の知識が役に立つことが多い。確率は統計解析と対比しつつ学習するとわかりやすく、確率および統計的な考え方は情報知能工学の一つの基礎となる。本講義は、統計データの情報をどのように解析・処理し、どのような判断を下したらよいかを与える統計的手法とその理論的背景となる確率基礎理論を解説する。</p> <p>到達目標： 身近に存在するさまざまな現象から得られる情報を、数表化したり、視覚化したり、数学的道具を用いてより科学的に分析することによって、広く役立てていくことができる能力の習得を目標とする。そのために統計解析の本質を理解し、われわれの生活の中で、あるいは、われわれをとりまく社会、自然の中でどのように適用され、応用されているかといった知識を身につける。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 確率の基礎：確率空間、確率変数と確率分布、期待値、モーメント母関数 2. 正規関に関連する標本分布：カイ二乗分布、t分布、F分布 3. 中心極限定理 4. 検定と推定の考え方：第1種、第2種の過誤の確率、検出力 5. 回帰分析法 6. 分散分析法：一元配置、二元配置 7. 確率と統計のいろいろな問題 <p>授業の進め方： 教室での講義と講義内演習を中心に授業を進めるが、パソコンによるデータ解析の実行など、本講義の理解の手助けということだけでなく、その習熟のためにも大いに活用したい。</p> <p>成績評価方法： 期末試験を中心に、小テスト、レポート、出席状況など総合的に評価する。</p> <p>履修上の注意： 数理統計学（専門基礎科目）を履修していることが望ましいが、知識の前提はしない。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書は指定しない。適宜プリントを配布し、参考書は授業中に紹介する。</p> <p>学生へのメッセージ： 統計的手法の有効性は、データを解析し合理的な結論をだすことにある。また、統計的手法を勉強する面白さは、現実のデータの解析を行う実力がついてくることを実感できるところにある。したがって、演習問題を自主的に解くなど、積極的な学習態度が重要である。</p>			

確率過程論 Theory of stochastic process			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	非常勤講師 石川昌明 M. Ishikawa		
<p>授業の目的： 確率過程論は確率論の1部門であるが、工学における不規則信号の解析技術の根幹をなすものである。また最近では金融工学への応用など、適用範囲もひろがっている。本講では、まずマルコフ過程、ブラウン運動の数学モデルであるウイナー過程などの典型的な確率過程について述べる。次に確率システムのダイナミクスである確率微分方程式およびその微分則について学習する。後半においては、その応用技術として、不規則信号検定の処理法やカルマン・フィルタ等の確率システムの推定問題を取り扱う。</p> <p>到達目標： 確率過程の基本的な考えに習熟し、確率システムにおける不規則信号処理の方法論を身につける。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 確率過程とは 2. 確率過程の記述法 定常と非定常，エルゴード性 3. マルコフ過程 遷移確率密度関数，拡散過程 4. ブラウン運動とウイナー過程 5. 確率過程のダイナミクス 確率積分，確率微分則，確率微分方程式 6. 検定問題 7. 推定問題 カルマンフィルタ，リカッチ方程式とその求解法 <p>授業の進め方： 講義を中心とするが、適宜、MATLAB等を利用して、実際問題への応用を試みたい。</p> <p>成績評価方法： 出席，レポート提出および学期末の最終試験の結果を総合して決定する。</p> <p>履修上の注意： 基礎解析Ⅰ，Ⅱおよび確率論基礎を履修していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 講義中に適宜指示する。</p> <p>学生へのメッセージ： 授業内容に関する疑問点等に答えるために毎週一定の日時を定めオフィス・アワーを設ける。</p>			

応用解析演習 Exercises on Applied Analysis			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	准教授 藤崎泰正 Y. Fujisaki, 助教 浦久保孝光 T. Urakubo		
<p>授業の目的： 応用解析Ⅰ・Ⅱで習った事柄を中心に情報知能工学で必要とされる応用数学の基礎的な知識をより確実に理解するために、演習を行う。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 線形代数 行列とその演算，線形空間，行列式，1次変換，固有値など 2. 複素関数 微分法，積分法，関数の展開，留数定理など 3. 常微分方程式 1階常微分方程式，高階常微分方程式など <p>授業の進め方： 毎回最初に演習する事項に関する内容を説明してから，問題を解く形式で授業する。適宜，レポートを課す。</p> <p>成績評価方法： 講義時間内提出のレポート，講義時間後提出のレポートおよび試験により評価する。</p> <p>履修上の注意： 線形代数Ⅰ，Ⅱ，応用解析Ⅰ，Ⅱなどを受講していること。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 講義時に指示する。</p> <p>学生へのメッセージ： 講義で習った内容の知識を深めるためには，実際に演習問題を解くことも重要です。積極的に問題を解いて下さい。講義に出席し，課された問題を全て解くことができるようになって下さい。</p>			

情報知能工学総論および安全工学 Introduction to Computer and Systems Engineering and Safety Engineering			
学期区分	前期	区分・単位	必修 1単位
担当教員	情報知能工学科全教員		
<p>授業の目的： 情報知能工学を構成する主な学問分野の内容およびそれらに関連して安全のために必要と考えられる諸事項について概説を行う。</p> <p>到達目標： 以下の3点を達成するように留意すること。 ①情報知能工学を構成する主な学問分野の概要を学び、今後の大学生活においてどのような勉強が必要かということとを認識すると共に、大学生としての勉強方法を理解する。 ②各科目履修する際に安全にしてどのような点に気をつける必要があるかということを理解する。 ③職業論理に関する常識を身につける。</p> <p>授業内容： 概略、以下のような内容を行う。 1. 情報知能工学科のカリキュラム概説 2. 情報分野における技術、研究、安全に関する事項の概要 3. 計測分野における技術、研究、安全に関する事項の概要 4. システム分野における技術、研究、安全に関する事項の概要 5. 数学分野の概要 6. 講演会 7. 企業見学</p> <p>授業の進め方： 1はガイダンスである。2から5までは、教員による授業を行う。6では、OBまたは企業人による体験談などの講演を行う。7では、情報知能工学分野の業務を行っている企業の見学を行う。</p> <p>成績評価方法： 出席を重視して成績をつける。なお、教員によってレポート課題をかす場合もあるが、その場合は、レポートの内容も成績評価に勘案される。</p> <p>履修上の注意： 学生諸君からいえば、新しい言葉、概念などが随所に出てくるが、積極的に質問を行うこと。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 必要な資料は、その都度配布する。</p> <p>学生へのメッセージ： 情報知能工学は、いわゆる、情報工学科に比べそのカバーしている範囲が多岐に渡っているため、高学年になるとある程度自分の専門とする分野を限定する必要性が生じてくる。したがって、将来的に各自がどのような分野に興味を持てるかなどの判断材料の1つとして役立てるように、自覚を持って積極的に受講することを希望する。</p>			

アルゴリズムとデータ構造及び演習 Algorithms and Data Structures			
学期区分	前期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	教授 大川剛直 T. Ohkawa		
<p>授業の目的： 計算機ソフトウェアを作成・評価するための重要な要素は、そのソフトウェアで採用されているアルゴリズムとデータ構造である。本講義では、アルゴリズムおよびデータ構造に関する基礎概念や基礎理論的な事項を中心に講義すると共に演習を行う。C言語の基礎知識を有していること。</p> <p>到達目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. アルゴリズムとデータ構造の概念全般の理解。 2. 計算量の理解、特に、最大時間計算量と平均時間計算量の概念の理解。 3. 配列、リスト、スタック、キュー、木などの重要なデータ構造の理解。 4. データ探索、整列、グラフ処理の各種のアルゴリズムとデータ構造、および、計算量の理解。 5. NP完全性の概念およびNP完全な問題の理解。 6. 重要なアルゴリズムおよびデータ構造を含むプログラムの読解力および応用力の習得。 <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. アルゴリズム、および、データ構造の基本概念について述べる。 2. 計算量 (Computational Complexity) の基本概念とその重要性について、逐次探索や2分探索などの例を用いて論じる。 3. 配列、リスト、スタック、キュー、木などの基本的なデータ構造の概念、データ型の定義方法、これらの利用法について論じる。 4. データ探索のためのアルゴリズムとデータ構造をとりあげ、各々の計算量や長所短所などについて説明する。具体的には、逐次探索、2分探索、2分木探索、平衡木 (AVL木、B木など)、ハッシュ法などによる探索方式をとりあげる。 5. データの整列 (ソーティング) のためのアルゴリズムとデータ構造をとりあげ、各々の計算量や長所短所などについて説明する。具体的には、最大値法やクイックソートなどをあげる。 6. グラフ処理のためのアルゴリズムとデータ構造として、深さ優先探索、トポロジカルソート、最短経路探索などをとりあげる。 7. NP完全、NP困難な問題、および、アルゴリズムの設計技法についてその概要を述べる。 <p>授業の進め方：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 講義と演習を組み合わせて進める。 2. 計算機を用いた演習を行う。 3. さらに、講義中に理解を完全にするため、質問や討議を歓迎する。 <p>成績評価方法： 成績は時間中の小テストやレポートをもとに評価する。</p> <p>履修上の注意： 情報知能工学演習Ⅱで学ぶ程度のプログラミング能力は必須である。 「グラフ理論」及び「離散数学」を履修していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 授業中に指定する。</p> <p>学生へのメッセージ： 本講義は、アルゴリズムとデータ構造に関する学部レベルの導入的／入門的な講義である。学んだ内容を自らの手でプログラムとして動作させるという実習の繰り返しが実力となる。</p>			

プログラミング言語論及び演習 Paradigm of Programming Languages and Practice			
学期区分	後期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	教授 田村直之 N. Tamura, 准教授 熊本悦子 E. Kumamoto, 講師 番原睦則 M. Banbara		
授業の目的： プログラミング言語は、ソフトウェアを記述するための基本的な道具である。良いソフトウェアを開発するためには、道具であるプログラミング言語について、十分に理解しておく必要がある。 本講義は、プログラミング言語に関する基本的知識を身につけることを目的として、各種プログラミング言語の特徴およびプログラミングの考え方について解説する。また、講義内容の理解を深めるための演習を実施する。			
到達目標： 制御構造、データ型、モジュール構造などの、プログラミング言語の基本的な概念を十分理解し、それらを利用したプログラムを設計できること。オブジェクト指向言語や非手続き型言語の基礎的な概念を理解し、簡単なプログラムを作成できることを目標とする。			
授業内容： 1. はじめに プログラミング言語とは何か、プログラミング言語の分類、 プログラミング言語の実現方式、プログラミング言語の種類、 プログラミング言語の比較の方法 2. 構文と記述 BNF, 構文図, プログラム書法 3. 制御構造 構造化プログラミング, 条件分岐, 繰り返し, 手続き呼び出し, パラメータ渡しの方法, 例外処理 4. 宣言と式 スコープと寿命, ファーストクラス 5. データ型 データ型の種類と構造, 抽象データ型 6. モジュール 情報の隠蔽 7. オブジェクト指向言語 Java プログラミング言語 8. 非手続き型プログラミング言語 関数型言語, 論理型言語			
授業の進め方： 講義と演習を並行して行う。演習は、C言語およびJavaなどの他のいくつかの具体的なプログラミング言語について、コンピュータを利用したプログラミング演習を行う。講義および演習内容に関しては、Webページにオンライン資料を提示する。			
成績評価方法： 講義内容についての期末テストおよび演習の総合成績で評価する。特に演習は出席と課題の提出状況を重視する。			
履修上の注意： 情報知能工学演習Ⅱ, Ⅲで学ぶC言語の知識を前提とする。			
教科書・参考文献など： Webページを参照のこと。			
学生へのメッセージ： プログラミング言語を学ぶには、本を読んだり、講義を聞いたりするだけでなく、自分の手を動かして沢山プログラムを書くことが必要です。将棋の駒の動かし方を覚えただけでは、将棋は指せません！ある程度、C言語の復習も交えながら、講義を進めていきますので、ちゃんと講義・演習に参加しましょう。			

電気回路及び演習 Electric Circuit Theory			
学期区分	前期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	教授 賀谷信幸 N. Kaya		
<p>授業の目的： 情報社会を支えている電子機器の動作原理は、すべて電気回路理論によるものである。Personal Computer から Internet, 携帯電話, 衛星通信などのすべての電子回路やデジタル回路は電気回路理論を基礎としている。すなわち、電気回路では、もっとも基本的なキルヒホッフの法則による回路網理論, スイッチの入断時などの過渡現象, 正弦波電源に対する定常解の考え方を示している。これらの理論の講義と演習での学習が本授業の目的である。</p> <p>到達目標： LCR の受動素子による電気回路網において直流電源または正弦波電源による定常的な電流分布と電圧分布の解析法を習得すること。さらにスイッチの入断時における過渡現象の解析法を習得することが到達目標である。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 直流回路（オームの法則, キルヒホッフの法則, 電流・電圧電源, 電力, 二端子回路と四端子回路） 2. 簡単な回路の過渡現象 3. 簡単な回路の正弦波定常解（正弦波の複素数表示, 複素平面におけるインピーダンスの概念, ベクトル図, 共振） 4. 正弦波の電力とエネルギー（実効値, 有効電力, 無効電力） <p>授業の進め方： 本授業では電気回路の基本的な考え方と解析法を理解させるために、講義と並行して問題演習を行う。また、電気回路を理解するためには、微分方程式, 複素関数など、多くの数学の知識が必要である。しかしながら、本講義は2年前期に開講するため、数学が修得不十分である。そこで、授業中に電気回路に必要な数学の基本的な事項をも講義する。</p> <p>成績評価方法： 電気回路では問題が解けるようになってはじめて理解できたものとする。そこで、問題が解けるようになるために演習を付けている。成績評価は主に演習時の成績でおこなう。</p> <p>履修上の注意： 本講義は、情報知能工学科においてもっとも基本的な科目のひとつであることから、必修科目としている。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 電気回路論（電気学会）</p>			

スペクトル解析及び演習 Spectrum analysis and practice			
学期区分	後期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	教授 小島史男 F. Kojima, 教授 玉置 久 H. Tamaki		
<p>授業の目的： 工学のみでなく自然界や生物界の現象あるいは社会現象における諸変動を適当な変数の時系列としてみると、そこには規則的なものもありまた規則性がみられないものもある。このような状況をより正確に解析するためには、その信号がどのような正弦波の重ね合わせでできているかを解析する必要がある、これがスペクトルを見ることになる。この講義ではスペクトル解析の基礎を習得する。現在この解析はコンピュータを利用するのが普通であるので、信号のデジタル処理についても学習する。</p> <p>到達目標： この講義の数学的基礎はフーリエ級数およびフーリエ変換論にある。ただし、別途「フーリエ解析」の講義が準備されているので、当初はこれらの基礎概念についても簡単に触れるが、その証明等は省略する。この講義ではとくに工学者として信号のもつ意味を直感的に理解できる能力を育てるようにしたい。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. スペクトル解析とは何か 2. 数学的準備：ベクトル空間、たたみ込み、相関関数、最小二乗近似など 3. フーリエ級数展開とスペクトル 4. フーリエ変換とスペクトル 5. 離散時間フーリエ変換とスペクトル 6. 離散フーリエ変換とスペクトル 7. 高速フーリエ変換 8. デジタルフィルタ <p>授業の進め方： 講義は演習と組みになっているので、原則として講義と演習を交互に行う。</p> <p>成績評価方法： 期末試験の成績に演習の報告書の結果および演習の出席を加味する。</p> <p>履修上の注意：</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書：眞溪，デジタル信号処理工学，昭晃堂（2004）</p> <p>学生へのメッセージ： この講義は工学の基礎の基礎であるのでよく学習してほしい。</p>			

システム計画学及び演習 Systems Planning and Its Practice			
学期区分	前期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	教授 貝原俊也 T. Kaihara		
<p>授業の目的： システムを計画・運用するためには、システムの達成すべき目標を効率良く実現する方法について知ることが重要である。そこで、システムの最適な計画や効率的な運用を考えるための手法について様々なアプローチを取り上げる。基礎となる数学モデルや定式化、解法の理解のみならず、そのような解法が必要となる目的についても具体的な例や演習により習得する。</p> <p>到達目標： 現象を客観的に捉え、数学モデルによって記述する方法を理解する。その上で、数理的最適化や、在庫理論、意思決定手法などを対象に代表的ないくつかのシステム計画手法を習得する。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 講義全体概要 2. 線形計画法 3. 在庫管理 4. 意思決定手法 5. 待ち行列 <p>授業の進め方： 座学により理論的な知識を講述するとともに、演習や宿題を通じてその具体的な計算法を学ぶ。</p> <p>成績評価方法： 期末試験の成績に上記の演習や宿題の結果を加味した上で総合的に判断する。</p> <p>履修上の注意： 線形代数や微積分学、数理統計学についての基礎知識が必要となる。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書：「オペレーションズ・リサーチ」貝原俊也編著 オーム社 参考文献：「数理計画入門」福島雅夫著 朝倉書店 その他は、講義中に紹介する。</p> <p>学生へのメッセージ： 大規模化や複雑化が進む工学の分野において、体系的な問題解決法を身につけることがますます重要になっています。この講義では、その入門として、システム計画の最適化や効率的運用について、科学的に理解する力を身に付けてもらいます。</p>			

システム解析学及び演習 System Analysis and Its Practice			
学期区分	後期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	教授 太田有三 Y. Ohta, 助教 森 耕平 K. Mori		
<p>授業の目的： システム理論，制御理論の基礎的事項について講義，演習を行い，基礎的知識を修得するとともに，その過程を通じて論理的に考える能力を涵養することを主たる目的としている。また，学習したことを，Matlabなどのソフトを活用しつつ，ある程度使いこなせるようになることも目的としている。</p> <p>到達目標： 制御理論の枠組を理解すること，システム理論，制御理論の基礎的事項に関する知識・技法を修得し，具体的な計算ができるようになることが最低限の到達目標であるが，各自が論理的に考える能力を高めることを期待したい。</p> <p>授業内容： 下に示す内容の講義と演習を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 制御とはなにか 2. システムの数学的モデル 3. 状態方程式，近似線形化 4. 離散時間システム 5. 安定性と現代制御理論の概要 6. ジョルダン標準形 7. Z変換とパルス伝達関数 8. ジュリーの安定判別法 9. 状態方程式の解の計算（解の公式） 10. 状態方程式の解の計算（ラプラス変換を用いる方法） 11. 伝達関数 12. ラウス・フルビッツの安定判別法 13. 可制御性，可観測性，カルマンの正準形 <p>授業の進め方： 講義とその進行状況に応じてレポートを課す。レポートの課題と提出期限は，授業専用のWebページに掲示する。原則的にレポートの提出期限が過ぎた次の授業時間にその課題の演習を行う。また，ある程度の予備知識を身につけた段階で，理論だけでなく実際の現場でシステム理論，制御理論がどのように使われているかということを知り視野を広げてもらうことを目的に企業の技術者による講演，または，ビデオなどを用いた説明を行う。さらに，Matlabなどを用いる場合は，計算機を用いた実習を行う。</p> <p>成績評価方法： テストの成績85点，レポート15点。なお，レポートで特に内容が優れているものは，15点以上加点する場合がある。</p> <p>履修上の注意： 線形代数学Ⅰ，Ⅱ，基礎解析Ⅰ，Ⅱ，複素関数論，常微分方程式，回路理論などを履修していること。これらの科目に合格していなくても受講は認めるが，特に，線形代数学Ⅰ，Ⅱ，複素関数論，常微分方程式などの知識なしにシステム解析学の内容を理解することは困難である。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 講義資料をWebページから各自プリントアウトすること。参考書は適宜指示する。</p> <p>学生へのメッセージ： システム理論，制御理論の基礎的知識・技法の修得も重要であるが，これらの修得の過程を通じて論理的思考に慣れ，自分自身で論理的に考える能力を涵養することがより重要である。このためには，授業中に講義における理論展開を追跡し，理解する必要がある。講義資料をWebから取れるようにしている目的は，ひたすら板書をノートに写すのではなく，講義内容を十分理解するように余裕を持ってほしいためである。疑問があれば，授業中に納得するまで質問することを歓迎する。また，授業時間以外も，特に多忙なとき・他の用事がある時を除いて，質問を受け付けるが，できれば，太田 (ohta@cs.kobe-u.ac.jp) 宛てに希望の日時などを書いたメールを送り，予約を取ってくれることを希望する。</p>			

論理回路 Logic Circuits			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	未定		
<p>授業の目的： あらゆる電子装置や半導体集積回路（LSI）を設計するために重要な基礎技術の一つが論理回路である。とくに最近の電子装置では、従来のアナログ処理に比べてデジタル処理の使われる比率が急激に増加しており、これを設計するために論理回路は必須の技術となっている。本講義では、論理回路の基礎をなすブール代数および数の体系から始めて、論理回路を設計するための基礎となる論理回路とその簡素化を学び、続いて組合せ論理回路と順序論理回路の設計について実例を交えながら学ぶことにより、論理回路に関する基礎技術を習得する。</p> <p>到達目標： 論理関数とその簡素化について基礎を習得し、組合せ論理回路の設計手法を身につける。またフリップフロップと順序論理回路について基本を学ぶ。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 数の体系 2. 論理関数の基礎 3. 論理関数の簡素化 4. 組合せ論理回路の設計と解析 5. フリップフロップ 6. 順序論理回路とその設計 <p>授業の進め方： 教科書を用いた講義を行うが、2～3割程度は実用技術や最新技術に関して教科書にない内容を黒板を用いて講義する。講義資料としてプリントも配布する。出席をとる代わりに、毎回簡単なレポート課題を出す。</p> <p>成績評価方法： 学期末の試験による。成績がボーダーラインにある場合は、レポートの提出状況を加味して評価する。</p> <p>履修上の注意： 論理回路を実際に設計する技の面では、教科書にない黒板を利用した講義の部分がたいへん重要なので、しっかり出席しノートをとること。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 講義中に指示する。</p> <p>学生へのメッセージ： 身の回りのあらゆる電子装置、例えばMD、携帯電話、パソコン、デジタルテレビなどをより高性能にし、これまでできなかったことを可能にするための基礎となる技術が論理回路です。自分で設計できるようになれば、とても面白いものです。</p>			

数理論理学		Mathematical Logic	
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	准教授 ブレンドル ヤーグ J. Brendle		
<p>授業の目的：</p> <p>Mathematical Logic investigates reasoning in mathematics and, more generally, in deductive science. It provides the language used in modern mathematics, gives a rigorous formalisation of what a <i>proof</i> of a mathematical statement is, and then goes on to argue that every <i>true</i> statement is indeed <i>provable</i> in this rigorous sense ; this is the content of the <i>completeness theorem</i>. Logic plays a fundamental role in computer science too. This is true in particular for formal languages and deduction systems (the syntactical aspects of logic) which figure prominently in theoretical computer science. The goal of this class is to give a concise introduction to both <i>propositional logic</i> and <i>predicate logic</i>.</p> <p>到達目標：</p> <p>We plan to go deep enough into the subject to be able to explain the main ideas underlying the completeness theorem. However, since this class is for computer science majors, we will focus on formal languages, natural deduction, and examples, rather than going into details of proofs.</p> <p>授業内容：</p> <p>Chapter one. Propositional Logic</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Propositions and connectives 2. Truth tables and tautologies (Semantics) 3. Deduction (Syntax) 4. Completeness <p>Chapter two. Predicate Logic</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Predicates and quantifiers 2. Structures and models (Semantics) 3. Deduction (Syntax) 4. Completeness <p>授業の進め方：</p> <p>As is usual for a math class, main notions and arguments will be explained on the blackboard, followed by many examples.</p> <p>成績評価方法：</p> <p>The grade for this course will be based mainly on several homework reports. Additionally, there will be small quizzes during the lecture whose outcome will be taken into consideration as well for the final grade. The reports and quizzes will be set in English. (レポートの結果を主として評価するが、講義の途中で小テストを実施するので、その結果も加味する。解答は英語が望ましいが、困難な場合は日本語でもよい。)</p> <p>履修上の注意：</p> <p>The whole course will be conducted in English. なお、理解を促すため、講義中はゆっくりとしたスピードで英語を話し、専門用語については、日本語でも表記する。</p>			
<p>教科書・参考文献など：</p> <p>教科書：なし。</p> <p>参考書：Dirk van Dalen, <i>Logic and Structure</i>, Third Edition, Springer 1997.</p> <p>学生へのメッセージ：</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) English language skills needed for understanding mathematics are much lower than those needed for studying other sciences. Therefore : please try out this class without fear! (数学で使われている英語は、他の分野の英語より遥かに簡単なので、心配しないで受講してみてください。) (2) Please feel free to ask questions during class or afterwards, or to arrange an appointment to come and see me in my office! 英語で質問することが難しい場合は、遠慮なく日本語で聞いてください。 			

光情報工学基礎 Introduction to Optics			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	准教授 的場 修 O. Matoba		
<p>授業の目的： 現在の情報社会の通信網および工学分野の各方面においても、光を利用した情報の通信および情報の獲得が多く行われるようになってきている。 今後も光の利用技術は発展し、工業および情報処理の分野においては欠かせないものとなるであろう。この講義では、光の波動性から出てくる反射の法則、屈折の法則、干渉縞の発生する仕組みを理解し、さらにレンズ系による結像作用が理解できるようになることを目標とする。この講義は「光情報工学」（3年後期）の基礎となるものであり、光学関係の専門書を読むための基礎をかためることを目的としている。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 光の基本的性質 (電磁波としての光波、複素表示と光強度、平面波と球面波、位相速度と光路長、反射と屈折、結像素子、レンズの明るさ) 2. 光波の干渉 (2光波干渉、干渉条件、多光波干渉、干渉素子) 3. 振幅変調による光波の伝搬 (回折現象、矩形開口、矩形波振幅格子) 4. 位相変調による光波の伝搬 (レンズと位相変調関数、レンズによるフーリエ変換作用、レンズによる結像作用、正弦波位相格子による変調) 5. 光波の記録と再生 (ホログラフィ法、ホログラフィ干渉法) <p>授業の進め方： 教科書を使って講義を進め、演習問題を講義中または宿題として出題し、レポートとして提出させる。</p> <p>成績評価方法： 学期末試験の結果に、出席状況、演習問題、レポートなどの結果を加えて評価する。</p> <p>履修上の注意： 特に無し。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 講義中に指示する。</p> <p>学生へのメッセージ： できるだけ質問すること。</p>			

グラフ理論 Graph Theory			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	准教授 江口浩二 K. Eguchi		
<p>授業の目的： グラフ理論は点と線で描かれた図形を扱う理論であり，非常に多岐の分野に応用されている。本講義では，グラフ理論の数学的な基礎と，いくつかの典型的な応用について述べる。</p> <p>到達目標： グラフの基本的な概念と用語を習得し，最短路問題やネットワークフロー問題を始めとする典型的な問題と解法について理解する。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. グラフ理論とは何か 2. グラフの定義と例 3. 道と閉路 4. 最短路問題 5. 木 6. 平面性 7. グラフの彩色 8. 有向グラフ 9. マッチング 10. ネットワークフロー <p>授業の進め方： 講義を中心に進める。適宜，授業時間内に演習を行う。</p> <p>成績評価方法： 定期試験の成績と平常点により評価する。平常点は主に授業時間内の演習の結果を参考にする。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 「グラフ理論入門（原書第4版）」R. J. ウイルソン著，西関隆夫・西関裕子共訳，近代科学社 学生へのメッセージ： 授業内容に関する質問は，授業中，授業後に遠慮なく尋ねること。居室でも質問を受け付ける。</p>			

計算機工学		Computer Engineering	
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	准教授 安村禎明 Y. Yasumura		
<p>授業の目的： 電子計算機システムについて、ハードウェアおよびソフトウェアの基礎的な知識を与える。</p> <p>到達目標： 2年以降の授業を理解するために必要最小限の内容なので、全ての内容を理解することを期待する。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 情報処理とコンピュータ <ul style="list-style-type: none"> ・情報とデータ ・データの表現 ・コンピュータの基本構成 ・コンピュータの利用形態 2. ハードウェア <ul style="list-style-type: none"> ・コンピュータ本体 ・2次記憶装置と入力装置 3. ソフトウェア <ul style="list-style-type: none"> ・ソフトウェアとは ・プログラミング言語と言語プロセッサ ・オペレーティングシステム 4. コンピュータネットワーク <ul style="list-style-type: none"> ・データ通信 ・ネットワークシステムの構成と制御 <p>授業の進め方： 教科書を用い、黒板やOHPを用いる。中間試験や授業時間内の演習を行うことがある。</p> <p>成績評価方法： 試験結果を重視し、演習なども参考にする。</p> <p>履修上の注意： 新聞、雑誌や書物に親しみ、情報通信に関する勉強を日頃から行うこと。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 講義時に指示する。</p> <p>学生へのメッセージ： 質問のあるときは、授業後や居室での質問を受け付けている。</p>			

電子回路 Electronic Circuits		後期	区分・単位	選択必修	2単位
学期区分	後期	区分・単位	選択必修	2単位	
担当教員	准教授 永田 真 M. Nagata				
<p>授業の目的： 携帯情報機器を担う電子装置の基本となる電子回路について学ぶ。近年の高機能で高性能な電子機器はシリコン集積化電子回路により実現されている。本講義では、はじめに半導体デバイスについて、とりわけ現在の主流であるCMOS (Complementary Metal-Oxide Semiconductor) デバイスを中心に解説する。続いて、トランジスタを用いた電子回路について実例を交えながら学び、電子回路の基本的な構成原理を習得する。</p> <p>到達目標： 半導体デバイスの構造と動作原理の理解を第一のステップとし、さらにデバイスの等価回路表現及びこれを用いた電子回路の設計方法の習得を講義の到達目標とする。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 半導体デバイスの基礎 2. 電子回路の基礎 3. 半導体デバイスの等価回路とバイアス 4. 増幅回路 5. 帰還 (フィードバック) 6. 発振回路 7. 無線・通信回路 <p>授業の進め方： テキストやプリントを用いて講義するが、詳しい解説や最新のトピックは黒板を使って行う。出席をとる代わりに、簡単なレポート課題を出す。</p> <p>成績評価方法： 学期末の試験に、レポートの提出状況を加味して評価する。</p> <p>履修上の注意： 黒板の内容をノートに書き写すことにより、多くの事柄が知識として自然に身に付く。とくに、デバイスの構造や動作特性、電子回路の回路図や入出力特性など、数式だけではなく、「絵」として記憶に残すことが本当の理解につながる。</p>					
<p>教科書・参考文献など： 講義中に指示する。</p> <p>学生へのメッセージ： 携帯電話、携帯音楽プレーヤ、PDA、など、身の回りに数多くある便利な携帯型情報端末機器について、ブラックボックスとして (中身を知らずに) 使っていませんか。本講義で得る電子回路の知識は、これらの機器の成り立ちを理解し、技術革新による将来の姿を思い描く最初の一步になります。</p>					

システム設計学 Systems Design			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 多田幸生 Y. Tada		
<p>授業の目的： 工業製品，大規模構造物から組織にいたるまでの広義の対象を一般的にシステムとしてとらえ，それらの合理的な設計を行うための基礎的な考え方を学ぶ。概念設計から詳細設計・生産設計までのシステム設計の各プロセスにおけるモデル化法，解析法についても学ぶ。計算機援用設計の時代においては，設計情報をどのように取り扱うかは重要な課題であり，このことについても検討する。</p> <p>到達目標： 将来何らかのシステム設計に携わるであろう時に最小限考慮すべきことはつかんでほしい。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. システムの定義 2. 設計における初期研究（傾向予測など予測技法） 3. 概念設計（システムの構造化など） 4. 詳細設計 <ol style="list-style-type: none"> a. 回帰分析 b. モデル化法 c. 数値シミュレーション（差分法 etc） d. 最適化手法 e. フィジビリティスタディ（経済性評価） f. データベース，AI <p>授業の進め方： ノート講義，プロジェクタ使用，discussion タイム，小テスト</p> <p>成績評価方法： 期末試験＋出席程度およびレポート提出による加算</p> <p>履修上の注意： 数学を勉強しておくように。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書：尾田・米澤共編『機械設計工学2 [システムと設計]』改訂版培風館 参考書：岸 光男著「機械システム入門シリーズ6」『システム工学』共立出版 その他 適宜 資料配布</p> <p>学生へのメッセージ： システム設計においては，いろいろなことを考慮する必要があります。 広い心を持ちましょう。</p>			

回路理論 Circuit Theory			
学期区分	後 期	区分・単位	選択必修 2 単位
担当教員	教授 玉置 久 H. Tamaki		
<p>授業の目的： 電気回路及び演習で習得した内容を基礎とし、回路の過渡応答ならびに周期的な入力に対する定常応答に関して講述する。</p> <p>到達目標： 受動素子からなる比較的簡単な電気回路を例として、過渡現象の解析法を習得する。</p> <p>授業内容： 以下に示す項目を中心に講義する。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 電気回路とグラフ理論（復習） (2) 状態方程式の導出 (3) ラプラス変換による微分方程式の解法 (4) 一次回路：零入力応答，零状態応答，完全応答 (5) 二次回路：零入力応答，零状態応答，完全応答 (6) 周期的な応答に対する定常状態応答 (7) 分布定数回路の基礎方程式と正弦波定常解 <p>授業の進め方： 資料として配布するプリントに沿い、板書を中心に講義を進める。また、適宜レポートとして演習問題を課す。</p> <p>成績評価方法： 数回のレポート課題および学期末の試験の結果に基づいて評価する。</p> <p>履修上の注意： 電気回路および微分方程式に関する基礎知識を習得していること。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 小澤，電気回路Ⅱ，昭晃堂（1980） 日比野，電気回路 B，オーム社（1997）</p> <p>学生へのメッセージ： 本講義では回路の解析に主眼を置いているが，設計に際しても解析の知識が肝要である。単なる理論という見方ではなく，実際に利用する場面を想定しながら勉強してもらいたい。</p>			

デジタル回路 Digital Circuits			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 吉本雅彦 M. Yoshimoto		
<p>授業の目的： デジタル回路技術は、主にコンピュータの発展とともに進歩してきたが、今や携帯電話や家電製品といった身の回りの電子装置を実現するためにも不可欠の技術となった。本講義は、1年前期の「論理回路」を引き継ぐ講義と位置付けられ、論理回路技術を用いて実際のデジタルシステムを設計するための設計手法と事例、半導体集積回路（LSI）の基礎、および計算機を用いた設計支援（CAD）の概要について学ぶ。また、最先端の情報家電や通信におけるデジタルシステムの事例なども紹介する予定である。</p> <p>到達目標： 論理回路設計の後継コースとしてより深い知識と技術を身につけるとともに、LSIの設計・製造技術の基礎を学ぶ。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. CMOS デジタル回路の基本素子 2. VLSI 設計フローとマスクパターン 3. CMOS デジタル回路設計 4. CMOS デジタル回路の性能評価 5. CMOS デジタル論理設計 6. レイアウト設計 <p>授業の進め方： 教科書および講義資料による。設計演習のレポート課題を出す。</p> <p>成績評価方法： 学期末の試験およびレポートにより総合評価する。</p> <p>履修上の注意： 論理回路，計算機工学，電子回路を履修していること。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 未定</p> <p>学生へのメッセージ： 3年前期の「計算機アーキテクチャ」と関係の深い講義です。しっかり学んで下さい。</p>			

オートマトンと形式言語 Automaton and Formal languages			
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 桔梗宏孝 H. Kikyo		
<p>授業の目的： 計算機科学，人工知能などの基礎概念である“オートマトン”と“形式言語”について解説する。オートマトンはコンピュータなどの計算機械の数学的モデルであり，形式言語はプログラミング言語などの人工言語を言う。</p> <p>到達目標： オートマトン・形式言語のコンパイラ構築などへの応用は，他の講義で学習する。本講義は，それらの応用のための基礎理論の理解が到達目標。具体的には，(1)有限オートマトン，正規集合，正規文法という三つの数学的概念を理解し，また，(2)それらが本質的に同等であり，お互いに変換可能であることを，その変換の仕組みを含めて理解すること，の二つである。</p> <p>授業内容： 次の項目を講義する。 1. 序論（講義内容の概説と，講義の進め方，成績のつけ方などの説明と背景となる数学的知識） 2. 有限オートマトン 3. 非決定性有限オートマトン 4. 正規言語，正規集合，正規表現 5. 形式文法 6. 正規文法と有限オートマトン 7. 文脈自由文法とプッシュダウンオートマトンのサーベイ 1，2は入門。3，4の有限オートマトンと，それが記述する正規言語を説明する。5では Perl, grep, mule などでも使われる正規表現の記述能力が正規言語と一致することを示す。6，7では，正規言語を，プログラミング言語に記述に使われる形式文法で表現する方法を述べる。8は，以上の理論を実用プログラミング言語等に応用する際に拡張について極く初歩的な入門。</p> <p>授業の進め方： 小テストやレポートを行う。</p> <p>成績評価方法： 小テスト・レポートと期末試験で成績をつける。比重は小テスト・レポート3割，期末試験7割。中間試験（小テストに分類する）を行う場合がある。</p> <p>履修上の注意： なし。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 参考書：「オートマトン 言語理論 計算論 I」，ホップクロフト／ウルマン／モトワニ著，サイエンス社 学生へのメッセージ： 講義資料とレポートや試験の情報はホームページに掲載する。ホームページの情報は講義時に連絡する。</p>			

言語工学 Theory of Programming Languages			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 上原邦昭 K. Uehara		
<p>授業の目的： プログラミング言語をより深く理解するためには、コンパイラについての知識が必要不可欠である。また、言語を設計する際にも、現在利用できるコンパイラ作成技術を知らなければ、実用的なものを開発することはできない。本講義では、コンパイラに関する理論的成果を基礎に、多くのコンパイラに共通した普遍的・一般的な事項に焦点を当てて講述する。</p> <p>到達目標： 簡単なプログラミング言語の設計、コンパイラの開発が可能となる能力を養う。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. コンパイラの概要 2. 字句解析 <ol style="list-style-type: none"> 2.1 正規表現と正規集合 2.2 有限オートマトン 2.3 オートマトンの簡略化 3. 構文解析 <ol style="list-style-type: none"> 3.1 解析木 3.2 プッシュダウン・オートマトン 3.3 LL 文法 3.4 First と Follow 3.5 LR 文法 4. 中間コード生成 <ol style="list-style-type: none"> 4.1 3-アドレスコード 4.2 Pコード 4.3 逆ポーランド記法 5. コード最適化 6. 目的コード生成 <p>授業の進め方： 講義を中心とするが、適宜、レポートや小テストを実施し、授業の理解度を確かめる。</p> <p>成績評価方法： 出席、レポート提出、小テスト、および学期末の最終試験の結果を総合して決定する。</p> <p>履修上の注意： アルゴリズムとデータ構造、オートマトンと形式言語、数理論理学などの授業を前提として進める。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 大山口通夫：コンパイラの理論，コロナ社 辻野嘉宏：コンパイラ，昭晃堂 湯浅太一：コンパイラ，昭晃堂</p> <p>学生へのメッセージ： 授業に関する疑問点に答えるために、毎週一定の時間をオフィスアワーとする。さらに、ティーチングアシスタントによる授業のサポートを行う。</p>			

システムプログラム System Program			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 鳩野逸生 I. Hatono, 准教授 伴 好弘 Y. Ban		
<p>授業の目的： 高度なソフトウェアシステムであるオペレーティングシステムについて基礎から実システムまで取り上げて講述する。オペレーティングシステムにおいて用いられている諸概念はコンピュータシステム全般の理解にとって不可欠なものである。これらの概念の基礎を理解することを目的とする。</p> <p>到達目標： オペレーティングシステムの構成について十分理解できること。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オペレーティングシステムの役割 2. ユーザインタフェースとプログラミングインタフェース 3. オペレーティングシステムの構成 4. ファイルと入出力処理 5. プロセスとその管理 6. メモリの管理 7. UNIX システムコール <p>授業の進め方： 板書およびOHPを用いて授業する。時間が許せば、システムコールに関するプログラミング演習あるいは課題を課す。</p> <p>成績評価方法： 試験成績および演習を重視して評価する</p> <p>履修上の注意： 情報関連の科目を履修し内容を理解していること。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 大久保英嗣著「オペレーティングシステムの基礎」サイエンス社</p> <p>学生へのメッセージ： 質問がある場合は、授業後教室や電子メールで受け付ける。</p>			

計算機アーキテクチャ Computer Architecture			
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 吉本雅彦 M. Yoshimoto		
<p>授業の目的： コンピュータは、身の回りのパソコンから企業の中核をなす計算機システムや、さらには機器に組み込まれて外からは見えない組み込み CPU（例えば携帯電話、自動車、テレビ等）まで、社会のあらゆるところで活躍している。本講義では、計算機ハードウェアの基本的な構成について学ぶとともに、プログラムを自動的に実行していくメカニズムや計算機を実現するための構成要素およびその設計方法について基礎事項を身につける。またごく簡単な CPU（計算機の中央処理装置）が自分で設計できることを目指す。</p> <p>到達目標： 計算機が自動的にプログラムを実行するための基本的な仕掛けについて理解する。計算機の演算装置に関する構成要素と設計方法の基本を身につける。計算機の制御装置の基本構成を理解し、簡単な計算機が設計できるようになる。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 計算機システムの基本構造 2. アセンブリ言語と命令セットアーキテクチャ（COMET を例にして） 3. 演算装置の構成と要素回路の設計 4. 制御装置の構成とマイクロプログラム 5. 割り込み 6. メモリ構成とキャッシュ 7. 入出力装置 <p>授業の進め方： 教科書を用いた講義を行うが、講義資料としてプリントも配布する。講義の中で、論理回路設計の事例についても解説する。</p> <p>成績評価方法： 学期末の試験による。毎時間出席をとるが、これは試験の成績がボーダーライン上にある場合に、最終評価に加味する。</p> <p>履修上の注意： 論理回路、計算機工学、デジタル回路を履修していること。黒板を用いて教科書にない情報を多く提供するので、しっかり出席しノートをとること。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 「コンピュータ アーキテクチャ」福本、岩崎 共著（昭晃堂）</p> <p>学生へのメッセージ： コンピュータの設計は、あらゆるデジタルシステムの設計に通じます。自分でコンピュータが設計できるようになれば、わくわくするほど面白い世界が開けます。</p>			

人工知能 Artificial Intelligence			
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 上原邦昭, K. Uehara		
<p>授業の目的： コンピュータの発明以来、多くの研究者により、コンピュータをより一層人間のように振る舞わせるための技術開発が試みられている。たとえば、画像理解、自然言語理解、問題解決、機械学習、知識工学など様々な研究が行われている。このような研究を総称して本授業では、これらのなかでも、特に問題解決、論理と推論、知識表現、エキスパートシステムの動作原理等を中心に講述する。</p> <p>到達目標： 解決すべき問題を述語論理によって表現する能力、さらにいくつかの問題解決手法を用いる能力を養うようにする。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 問題解決プロセス 2. 基本的な探索法 3. ヒューリスティックスを利用した探索法 4. エキスパートシステムの動作原理 5. 述語論理 6. 導出原理 7. 述語論理による問題解決 <p>授業の進め方： 講義を中心とするが、適宜、レポートや小テストを実施し、授業の理解度を確かめる。</p> <p>成績評価方法： 出席、レポート提出、小テスト、および学期末の最終試験の結果を総合して決定する。</p> <p>履修上の注意： アルゴリズムとデータ構造、グラフ理論、オートマトンと形式言語、数理論理学などの授業を前提として進める。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 太原育夫：人工知能の基礎知識，近代科学社 西田豊明：人工知能の基礎，丸善</p> <p>学生へのメッセージ： 授業に関する疑問点に答えるために、毎週一定の時間をオフィスアワーとする。ティーチングアシスタントによる授業のサポートを行う。</p>			

データベースシステム Database Systems			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 有木康雄 Y. Ariki		
<p>授業の目的： 計算機システム内に大量の情報を組織化して格納し、複数の利用者がこれを共有できる形で管理し、データの検索や更新などを行うのがデータベースシステムである。本講義では、データベースシステムの構成や利用に関する基本概念、設計法、基本的アルゴリズムなどに関して論述する。また、データベースの実例について、その構成や機能に関して述べる。</p> <p>到達目標： データベースシステムの構築と検索方法を習得する。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. データベース、データベース管理システムなどの基本概念について述べる。 2. データ表現の枠組みとしてのデータモデルについて説明し、代表的なデータモデルとして、実体関連モデル、階層型モデル、ネットワークモデル、関係モデルなどについて説明する。 3. 検索や更新などを行うためのデータベース操作言語の基礎、リレーショナル代数について述べる。 4. リレーショナルデータベース言語 MySQL を使って、単純質問をプログラムする。 5. リレーショナルデータベース言語 MySQL を使って、結合質問、副問い合わせ、更新操作を行なう。 6. リレーショナルデータベース言語 MySQL とリレーショナル代数との関係について述べる。 7. リレーショナルデータベース言語 MySQL を使って、検索問題をプログラムする。 8. リレーショナルデータベースの設計理論の基礎である関数従属性、完全関数従属性、第1正規化、第2正規化について述べる。 9. 推移的関数従属性、第3正規化、ボイス - コッド正規化について述べる。 10. 情報無損失分解、多値従属性、結合従属性、第4正規化、第5正規化について述べる。 11. リレーショナルデータベースの活用としてデータマイニングのアルゴリズムを MySQL で記述する。 <p>授業の進め方： プレゼンテーションソフトを使って講義する。理論を講義した後に、MySQL を動かして実演する。</p> <p>成績評価方法： 学期末に筆記試験を行い、この成績をもとに評価する。</p> <p>履修上の注意： 出席を取らないことはしないが、資料のみでは講義内容を理解することは容易ではない。講義に出席することが原則である。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 授業中に指示する。</p> <p>学生へのメッセージ： 本講義は、データベースに関する学部レベルの導入／入門的な講義である。出席を取らないことはしないが、資料のみでは講義内容を理解することは容易ではない。講義に出席することが原則である。</p>			

ソフトウェア工学 Software Engineering			
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	未定		
<p>授業の目的： 実用的かつ大規模なソフトウェアの開発には、演習レベルのソフトウェアの作成とは全く異なる様々な問題が存在する。本講義では、ソフトウェア工学の主要なトピックを説明するとともに、それらを通じてソフトウェア開発における本質的な「困難さ」について触れ、ソフトウェア工学の意義を示すことを目指す。</p> <p>到達目標： ソフトウェア開発において何が問題となっているかを理解し、代表的なソフトウェア要求分析手法、設計手法の概要を把握する。また、ソフトウェアの品質やテスト、人的側面といった話題についても、基本的な知識を身につける。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ソフトウェア工学とは — 要求から製品化、保守、廃棄までのソフトウェアの一生ともいべきライフサイクルについて概観する。さらに、各段階における根本的な問題点を説明し、ソフトウェア工学の目的について述べる。 2. 要求分析 — ソフトウェアに対する要求の分析手法と、要求仕様におけるソフトウェアのモデル化について述べる。 3. システム設計 — 構造的なモジュール設計法について述べる。ソフトウェアの部品化や情報隠蔽について説明する。 4. テスト — ソフトウェアのテスト手法について述べるとともに、正当性証明についても論じる。 5. オブジェクト指向モデル — オブジェクト指向によるモデル化と、これに基づいた分析、設計手法について説明する。 6. ソフトウェア開発環境 — コンパイラ、デバッガから CASE ツール、グループウェアまで、ソフトウェア開発を支援する環境について述べる。 7. ソフトウェアの品質 — ソフトウェアの「良い」、「悪い」を定量的に分析する試みについて紹介する。 8. ソフトウェア開発プロジェクト — ソフトウェア開発における人的要因について述べる。また、開発コストの見積りについても触れる。 <p>授業の進め方： 教室での講義を中心に授業を進める。必要に応じて、授業内容に即した実習を時間内に行う。</p> <p>成績評価方法： 出席点、および実習の結果を合わせて評価する。</p> <p>履修上の注意： システムプログラム、および言語工学を履修していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 講義中に指示する。</p> <p>学生へのメッセージ： 本講義で述べる内容は、プログラムだけでなく、広く情報システム一般の設計や保守管理に共通する概念や問題点を含む。情報エンジニアを目指す上で必須の授業である。</p>			

情報通信工学 Information and Communication Engineering			
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	准教授 太田 能 C. Ohta		
<p>授業の目的： 本講義では、情報通信の基礎技術として特に重要な事項を学ぶことを目的としている。</p> <p>到達目標： 基本原理を理解した上で各方式の利点・欠点を論じられるようになることが目標である。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 通信プロトコル 2. 伝送路技術 3. 多重化 4. 誤り制御 5. メディアアクセス制御 6. 経路制御 7. 輻輳制御 8. TCP/IP プロトコル <p>授業の進め方： 主にスライドを使って説明する。また、理解度を確認するために小テストをほぼ毎回実施する。</p> <p>成績評価方法： 期末試験の結果を6～7割の比で考慮し、残りを小テスト・レポート・出席の結果でもって評価する。</p> <p>履修上の注意： 伝送路技術では、基礎から理解できるよう、スペクトル解析などの基礎理論と関連づけながら解説するので、スペクトル解析及び演習をしっかりと学んでおいて欲しい。また経路制御では、グラフ理論で学ぶ内容がでてくるから、本講義の受講前に復習しておいて欲しい。スライドを使って説明するので、座席はできるだけ前に座ること。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 以下の本を参考書とする。 James F. Kurose and Keith W. Ross, インターネット技術のすべて, ピアソン, エデュケーション 岡田博美著, 情報ネットワーク 改訂版, 培風館</p> <p>学生へのメッセージ： グラフツールを使って自分の眼で確かめると面白さがよくわかる。興味を持って取り組んで欲しい。</p>			

センシング工学 Sensing Technology			
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 羅志偉 Z.W. Luo		
<p>授業の目的： 数十億年にわたる悠々たる進化の歴史で、生物は森羅万象の世界における時間的・空間的に変化する様々な物理的・化学的な刺激に特定に反応するたんぱく質や細胞・器官が形成され、分化し、ついに今日のような環境に柔軟に適応する高度な感覚機能が生まれたのである。生物の感覚機能に啓発されて工学的に多種多様なセンサが開発され、今日の計測・制御システムなどに広く応用されるようになってきている。また、近年の電子・半導体工学・情報科学・MEMS技術の発展に促進されて、センサ技術の高精度化・高速化・集積化と小型化が一段と進み、特定の機能に特化したセンサ性能としてはすでに生物を大幅に超えるまで技術が進歩してきている。本講義では、センシングの基礎となる情報変換の物理・化学原理、工学における信号の誤差評価とノイズ対策、実用的なセンシング技術および信号処理の技術について講義をし、また生物やロボットなどにおける最新の基礎研究の成果と技術開発事例について紹介する。</p> <p>到達目標： 情報変換の基本的な物理・化学原理および信号計測における誤差評価とノイズ対策方法を理解して、実用的なセンシング技術および計算機や電子デバイスによる信号の計測処理技術を身に付ける。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. センシング工学の体系化 2. センシングデバイスの物理・化学原理 3. 計測の誤差評価とノイズ対策 4. 力, 光, 温度, 流れの実用的センサの構成と機能 5. 計算機と電子デバイスによる信号の計測処理 6. センサーフュージョン 7. アクティブセンシング 8. 生物とロボットのセンシング機能対比 <p>授業の進め方： 講義を行う。講義中には頻繁に演習を行い、講義内容の理解を助ける。</p> <p>成績評価方法： 出席、講義中の演習、試験によって評価する。</p> <p>履修上の注意： 特になし。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 必要の都度、講義中に参考資料を紹介する。</p> <p>学生へのメッセージ： センシングとは感じることで、知的なシステムを構築するための必要不可欠な機能です。センシティブ（敏感）の気持ちでこの講義に取り組みましょう。</p>			

電磁気学応用 Electromagnetism			
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	未定		
<p>授業の目的： 我々は、電磁気学の法則に従って動作する電気・電子機器に囲まれて生活している。特に電磁波はラジオ波，マイクロ波から光通信波長帯域，紫外線域まで現代エレクトロニクスの情報伝送・エネルギー伝送媒体として広く利用されている。情報通信にかぎらず，センサー，光メモリなどの先端情報処理機器の動作を理解し，安全に利用するうえで，電磁気学は重要な基礎科目である。この授業では，電磁気学の基本法則を復習したのち電磁波方程式を導出し，電磁気学で扱う物理現象・法則の物理的意味が理解できることを目的とする。また電磁波を利用した応用例を理解できることを目標とする。</p> <p>到達目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 授業で扱う電磁気学の基本法則の物理的意味が理解できること。 2. 電磁波の伝播に対しての物理的イメージを持ち，情報伝送媒体・エネルギー伝送媒体としての特性を理解すること。 <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 静電場の基本法則 2. 定常電流 3. 静磁場の基本法則 4. 電磁誘導 5. マクスウェル方程式 6. 電磁波の放射 7. 電磁波の利用 <p>授業の進め方： 教科書・板書・配布資料を用いて講義を進める。また，理解を深めるために演習問題，レポートを適宜課す。</p> <p>成績評価方法： 学期末試験の結果に，出席状況，授業中の演習問題，レポートなどの結果を加えて評価する。</p> <p>履修上の注意： 物理学C3を履修していることが望ましい。また，数学の知識として線形代数学Ⅰ・Ⅱ，ベクトル解析，基礎解析Ⅰ・Ⅱを履修していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 講義時に指示する。</p> <p>学生へのメッセージ： 電磁気で扱う物理現象・法則の物理的意味が理解できるようになることに重点を置くので，授業の内容についてわからないことがあれば，遠慮無くいつでも質問して下さい。また，講義後の質問も随時受け付けます。</p>			

信号解析 Signal Analysis			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 小島史男 F. Kojima		
<p>授業の目的： 計測制御システム工学は、生産技術の革新を担う基礎工学の一分野であるとともに、計算技術が最も直接的に応用される学問分野である。ここでは、計測からシステム制御に至る体系を意識しながら、不規則信号処理に関する基本的学習をおこなう。信号 (signal) とは対象とするシステムのある物理量に関する測定結果のことをいう。信号に含まれる不必要な成分を取り除き、システムの状態に関して必要となる情報を抽出する作業を信号解析と呼ぶ。この講義では、スペクトル解析で学習した信号解析の基本的な方法論に立脚し、確率的な信号の処理法について学習する。</p> <p>到達目標： 不規則信号処理の計算に習熟し、信号解析の基本的な手続きを修得できるようにする。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 信号処理の実際 2. 確率と確率過程 3. 不規則信号とスペクトル解析 自己相関関数, パワースペクトル 4. 定常過程とスペクトル 5. システム同定 AR モデル, MA モデル, ARMA モデル 6. 時系列解析の応用 <p>授業の進め方： 講義を中心とするが、適宜、コンピュータ等を利用して、実際問題への応用を試みたい。</p> <p>成績評価方法： 出席、演習の成績、レポート提出および学期末の最終試験の結果を総合して決定する。</p> <p>履修上の注意： 確率論基礎を履修していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 講義中に適宜指示する。</p> <p>学生へのメッセージ： 授業内容に関する疑問点等に答えるために毎週一定の日時を定めオフィス・アワーを設ける。</p>			

光情報工学 Optical Information Processing			
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	准教授 的場 修 O. Matoba		
<p>授業の目的： 人が得る情報の70%以上は、視覚を通して、画像情報として得ている。しかし、画像は膨大な情報量を持ち、現代の技術を持ってしてもその処理には困難を極める。このため画像を並列的に演算処理する概念は、極めて重要である。画像の修正・認識を例題に並列処理法を示す。</p> <p>到達目標： 画像は光波という波動場によって、2次元空間にわたり時間的に変化しながら伝搬する。振幅変調と位相変調とによる情報をもつ光波は、時・空間的に伝達されたあと、その情報を光学システムによって画像として形成する。変調・伝搬・画像形成の各過程を詳しく知り、画像の修正・認識方法を理解する。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 光の基本的性質（「光情報工学基礎」の復習） 2. フーリエ変換の性質 （たたみ込み積分や相関関数の性質とフーリエ変換、矩形関数やデルタ関数のフーリエ変換） 3. 線形光学システム （空間領域での応答特性、スペクトル領域での応答特性、光学システムの伝達関数、画像の劣化と評価） 4. 光情報処理 （空間周波数フィルタリング、画像の復元・修正、画像の認識） <p>授業の進め方： テキストにしたがって講義を進める。 最先端技術の多くは、光学技術に関係しており、新聞・雑誌・TVなどを通じて頻繁に報道されている。開発された新技術の根底にある基礎技術が、講義内容と直接重要な関わりがある例を、時間の許す範囲で説明する。</p> <p>成績評価方法： 出席、演習問題、学期末テストなどで評価する。</p> <p>履修上の注意： 「光情報工学基礎」を履修していること。 フーリエ変換、複素関数、スペクトル解析など理解していることが望ましい。また信号解析と密接な関係がある。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 講義時に指示する。</p> <p>学生へのメッセージ： 自分なりの簡単なモデルを頭に置くことで、直感的な理解が容易になる。教員のもつイメージ（モデル）を参考にして、自分なりのモデルを構築して下さい。</p>			

画像工学 Image Processing			
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 有木康雄 Y. Ariki		
<p>授業の目的： 画像は社会のいろいろな分野で用いられている。工業製品の自動組み立てや欠陥品の自動検査を行う工業用ロボットの目、染色体や赤血球の異常を検出する医用画像処理、人工衛星や航空写真から資源探査を行うリモートセンシング、書類や名刺・函面を文字認識してファイリングする文書処理、放送局における画像や映像の編集処理、顔・指紋・静脈をもとにしたインターネット用の個人認証。本講義では、これらに共通する基本的な画像処理と画像認識について述べる。</p> <p>到達目標： 画像処理および画像認識の基礎理論とプログラミングを習得する。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. IT技術を用いた画像処理，画像の表現 2. 物体を抜き出す，輪郭を抜き出す 3. 雑音を除く，見やすい画像を作る 4. 特徴を調べる，主軸を求める 5. 色で抜き出す，色を変える 6. 形を変える 7. 周波数で処理する（FFT），画像データを圧縮する（1次元DCT，2次元DCT） 8. パターンの表現と最短距離識別法，単純類似度法と複合類似度法 9. 全微分・偏微分，ラグランジェの未定乗数法 10. ラグランジェの未定乗数法，ベクトル微分と固有値分解，主成分分析法と判別分析法 11. ダイナミックプログラミング 12. ニューラルネットと最急降下法 13. サポートベクタマシンと Ada Boost <p>授業の進め方： プレゼンテーションソフトを使って講義する。理論を講義した後に，プログラムを動かして実演する。また，C言語による画像処理プログラムについて詳細に講義する。</p> <p>成績評価方法： 学期末に筆記試験を行い，この成績をもとに評価する。</p> <p>履修上の注意： 線形代数や微積分など，基礎的な数学は習得していること。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書として，「C言語で学ぶ実践画像処理」（井上誠喜著，オーム社）を使用する。参考文献は，「わかりやすいパターン認識」（石井健一郎，オーム社）。</p> <p>学生へのメッセージ： 理論を聞き，処理の実演を見て画像処理プログラムを理解するだけでなく，C言語や，Java言語を使って自分でもプログラム開発を行って下さい。</p>			

デジタル信号処理 Digital Signal Processing			
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	講師 滝口哲也 T. Takiguchi		
<p>授業の目的： デジタル技術の発達とともに、あらゆる分野で信号はデジタル化されている。この講義ではデジタル信号処理の基本的な解析方法とデジタルフィルタの設計方法について述べる。</p> <p>到達目標： 離散時間信号に対するフーリエ変換を理解するとともに、デジタル信号処理の基本的知識・方法を修得することを目的とする。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. デジタル信号処理の概要 2. 離散時間信号とシステム 離散時間信号，離散フーリエ変換，標本化定理，Z変換，離散時間システム 3. デジタルフィルタの近似と構成 FIR フィルタ，IIR フィルタ 4. マイクロホンアレーによる信号処理 遅延和アレー，適応型アレー 5. 適応信号処理 適応信号処理，適応デジタルフィルタ <p>授業の進め方： 講義形式，授業内容を理解するために，適宜，演習を行う。</p> <p>成績評価方法： 定期試験，演習などで総合的に評価する。</p> <p>履修上の注意： スペクトル解析，信号解析などを履修していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 講義時に指示する。</p> <p>学生へのメッセージ：</p>			

オペレーションズリサーチ Operations Research			
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 貝原俊也 T. Kaihara		
<p>授業の目的： システムを計画・構築する際には、その最適性の実現が重要となる。そこで、本講義では、システム最適化に関する代表的な手法を取り上げ講述する。また、基礎となる数学モデルや定式化、解法の理解のみならず、そのような解法が必要となる目的についても具体的な例により説明を行なう。</p> <p>到達目標： システムの最適化を対象として、現象を客観的に捉えて数学モデルによって記述し、最適解を導き出す方法を理解する。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 最適化問題の構造 いくつかの最適化問題の例を挙げて、その構造について理解する。 2. 組合せ最適化 -分枝限定法 -動的計画法, など 3. グラフとネットワーク -最短路問題, など 4. スケジューリング理論 5. 線形計画問題 -双対性 -双対シンプレックス法, など 6. 非線形計画問題 <p>授業の進め方： 毎回の講義が一つのテーマにまとまるようにする。演習問題や課題を用意し、講義時間内に演習を実施することがある。適宜、補助資料を配布する。</p> <p>成績評価方法： 期末試験の成績に上記演習の結果を加味した上で総合的に判断する。</p> <p>履修上の注意： 2年前期のシステム計画学を履修し、単位を取得していることが望ましい。また、線形代数学や微積分学についての基礎知識が必要となる。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書：「オペレーションズ・リサーチ」貝原俊也編著 オーム社 参考文献：「数理計画入門」福島雅夫著 朝倉書店 その他は、講義中に紹介する。</p> <p>学生へのメッセージ： 一見複雑に見える工学システムについて、最適な計画立案をするための基本知識を学びます。ただ単に最適化のテクニックについて学ぶのではなく、システムの問題解決のアプローチを身につけるように努力して下さい。</p>			

システム制御理論 I Control Systems Theory I			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 太田 有三 Y. Ohta, 助教 森 耕平 K. Mori		
<p>授業の目的： 制御理論（特に、周波数領域における設計、及び、デジタル再設計）の基礎的事項について講義、演習を行い、基礎的知識を修得することを主たる目的としている。また、学習したことを、Matlabなどのソフトを活用しつつ、ある程度使いこなせるようになることも目的としている。</p> <p>到達目標： 1入力1出力系に対する周波数応答と時間応答の関連などに習熟し、簡単な仕様が与えられた場合に、Matlabなどのソフトを活用してそれを実現する制御器の設計ができるようになること。また、デジタル再設計に関する基礎的事項を理解すること。</p> <p>授業内容： 下に示す内容について講義を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ダイナミカルシステムの表現 2. ダイナミカルシステムの過渡応答と安定性 3. フィードバック制御系の特性 4. ボード線図と時間応答 5. ナイキスト線図と安定定理 6. 開ループ特性と閉ループ特性の関係 7. ゲイン調整、位相進み要素、位相遅れ要素を用いた設計例 8. デジタル再設計 9. 演算時間遅れを考慮した制御器 <p>授業の進め方： 講義とその進行状況に応じて適宜演習を行うとともにレポートを課す。また、周波数応答の計算、周波数領域における設計等にはMatlabを用いるが、その場合には、計算機を用いた実習を行う。</p> <p>成績評価方法： テストの成績85点、レポート15点。なお、レポートで特に内容が優れているものは、15点以上加点する場合がある。</p> <p>履修上の注意： 線形代数学 I, II, 基礎解析 I, II, 複素関数論, 常微分方程式, 回路理論, システム解析学および演習などを履修していること。これらの科目に合格していなくても受講は認めるが、特に、線形代数学 I, II, 複素関数論, システム解析学および演習などの知識なしにシステム制御理論 I の内容を理解することは困難である。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 講義資料を Web ページから各自プリントアウトすること。参考書は適宜指示する。</p> <p>学生へのメッセージ： 制御理論の基礎的知識・技法の修得も重要であるが、これらの修得の過程を通じて論理的思考に慣れ、自分自身で論理的に考える能力を涵養することがより重要である。このためには、授業中に講義における理論展開を追跡し、理解する必要がある。疑問があれば、授業中に納得するまで質問することを歓迎する。また、授業時間以外も、特に多忙なとき・他の用事がある時を除いて、質問を受け付けるが、できれば、太田 (ohta@cs.kobe-u.ac.jp) 宛てに希望の日時などを書いたメールを送り、予約を取ってくれることを希望する。</p>			

システム制御理論Ⅱ Control Systems Theory Ⅱ			
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	准教授 藤崎泰正 Y. Fujisaki		
<p>授業の目的： 航空機，自動車，鉄道，産業ロボット，大型宇宙ステーション，化学プラント，製鉄プラントなど，現代のシステムは高度な制御技術に支えられている。この講義では，これら現代の制御技術の数理的な基礎である現代制御理論を取り上げ，システムを解析したりコントローラを設計する手順を求めるための基礎理論を講述する。</p> <p>到達目標： 各種の制御系設計法の背後にある数理的な本質を理解することにより，実際問題に対して現代制御理論を誤りなく適用できる能力を身に付けることを目標とする。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> システム制御理論の概要 制御技術と制御理論，制御理論の目指すもの，制御理論の歴史 状態方程式と伝達関数 状態方程式，状態方程式の解，状態の座標変換，伝達関数 可制御性と可観測性 可制御性，可観測性，双対性，正準構造 極と零点 極，可逆性，零点 安定性 内部安定性，入出力安定性，可安定性，可検出性，リアプノフ関数，リアプノフ方程式 極配置 極配置問題，極配置アルゴリズム 最適レギュレータ 最適レギュレータ問題，リッカチ方程式，最適制御則，ロバスト安定性，感度特性，漸近的特性（チープコントロール） オブザーバ 同次元状態オブザーバ，最小次元状態オブザーバ，未知入力オブザーバ，線形関数オブザーバの基本式，分離定理 サーボ系 サーボ系の構成手順，内部モデル原理 本講義のまとめ <p>授業の進め方： 制御系を具体的に設計することを通して現代制御理論に対する理解を深めることができるように，数値計算ソフトウェア Matlab を用いた演習を併せて実施する。</p> <p>成績評価方法： 中間試験40点，期末試験50点，レポート10点の総計100点として評価する。</p> <p>履修上の注意： 「システム解析学および演習」を修得していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書として，吉川，井村「現代制御論」（昭晃堂）を用いる。</p> <p>学生へのメッセージ： 質問がある場合には，講義中に遠慮なく尋ねること。また，講義時間外でも，事情の許す限り対応するので，教員室（情報知能工学科棟（旧システム工学棟）5階，S504）に直接来るか，あるいは電子メールにて fujisaki@cs.kobe-u.ac.jp まで問い合わせること。</p>			

電子制御機械論 Intelligent Mechatronics Theory			
学期区分	前期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 羅志偉 Z. W. Luo		
<p>授業の目的： 電子技術（エレクトロニクス）を用いて機械（メカニクス）を動かして制御する工学技術はメカトロニクスと呼ばれ、機械システムにおけるエネルギー効率の改善や、機能の多様性・柔軟性の達成、さらには知能の実現につながることから、今日の飛行機、自動車、工作機械、ロボットなどに広く応用されるようになっている。本講義では、こうしたメカトロニクスに関するシステムの基本構成、力学原理、実用的な電子回路、駆動アクチュエータ、電子計算機による制御技術などを講義する。また、生物の身体運動系とも対比させながら、最新の研究開発現状を紹介し、将来の発展を展望する。</p> <p>到達目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 電子・機械システムの基本構成原理を理解すること。 2. メカトロニクスにおける駆動系と制御系の構成、設計と実用回路を習得すること。 3. 生物システムと対比して現状の電子・機械システムの限界を明確に認識すること。 <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. メカトロニクスの体系化 2. 電子・機械システムの構成要素と結合原理 3. アクチュエータの原理と電子制御 4. 計算機による実時間制御 5. 機械の知能化 6. 生物の身体運動機能との対比 <p>授業の進め方： 講義を行う。講義中には頻繁に演習を行い、講義内容の理解を助ける。</p> <p>成績評価方法： 出席、講義中の演習、試験によって評価する。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 必要の都度、講義中に参考資料を紹介する。</p> <p>学生へのメッセージ： システムとしての機械を再認識し、いままで勉強してきた電子回路、制御工学、計算機技術などの知識を総結集して、生きる機械を探求し、その動きに感動を覚えよう。</p>			

システムモデル論 Theory of System Identification			
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	准教授 小林 太 F. Kobayashi		
<p>授業の目的： システムとは、複数の要素が有機的に組み合わせられ、全体としてまとまった機能を有する要素の集合体のことである。本講義では、システムを数理的に置き換えるためのさまざまなモデルについて論ずる。</p> <p>到達目標： モデルとは何か、またさまざまなモデルにおける重要な概念を理解させる。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 計算モデル 2. 統計モデル 3. ファジィモデル 4. ニューロモデル <p>授業の進め方： 講義を中心とし、適宜レポートによる演習課題を課す。</p> <p>成績評価方法： 出席、レポート提出および学期末テストを総合して評価する。</p> <p>履修上の注意： 本学科指定の工学部基礎科目を履修すること。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 教科書は使用しない。参考文献については、講義時に述べる。</p> <p>学生へのメッセージ： 人を頼らず、自分で考える習慣を付けること。</p>			

ロボット工学 Robotics			
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	准教授 花原和之 K. Hanahara		
<p>授業の目的： ロボットは、いまやSFの世界の中だけのものではなく、現代の科学技術における必要不可欠の要素のひとつである。本講義では、ロボット工学の基礎的な側面のいくつかについて述べる。特に、ロボットのように一見複雑に見える多自由度のシステムを、いかにして単純な要素に分解して扱うか、どのように数理モデルを構築するか、といった点を中心に述べる。</p> <p>到達目標： ロボット等の多自由度のシステムを取り扱う際の基本的な考え方を身に付ける。マトリクスとベクトルで記述されるロボットのふるまいを通じ、複雑に見えるシステムや、多くの要素からなるシステムを統一的に抽象化して扱う手法を習得する。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ロボットの歴史—「ロボット」という言葉の登場から実現、実用化までを概観する。産業用ロボットとSFに登場するロボットの差異、その変遷といった事項についても述べる。 2. 座標変換・同次変換—座標変換は、ロボット工学のみならずコンピュータグラフィックス等、多くの「部分」により構成されるシステムを取り扱う際に必須となる考え方である。同次座標系を用いて座標変換を統一的に取り扱う手法について講述する。 3. 運動学—ロボットの運動をシステムティックに記述するアプローチについて述べる。そのための手法として代表的なD-Hパラメータによる表記を通じ、一見複雑に見える機構を分解して取り扱う場合の表記方法等を講義する。 4. 力学の基礎—剛体の運動を扱う動力学の基礎の復習から始め、ロボットのような多自由度システムの運動方程式の定式化について述べる。 5. 動作の生成—ロボットに目的とする動作を行わせるための命令およびプログラミングの手法について概観する。 6. ロボットの現状—現代のロボットはどこまでのことができるのか。近年のロボット研究の成果を通じてロボットの世界を概観する。 <p>授業の進め方： 教室での講義を中心に授業を進める。必要に応じて若干の演習を授業時間内に実施し、またレポートによる課題を与える。</p> <p>成績評価方法： 定期試験、演習、およびレポートによって評価する。</p> <p>履修上の注意： 線形代数および力学の基礎知識を習得していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 講義中に指示する。</p> <p>学生へのメッセージ： ロボット工学は、複雑に見えるシステムを要素に分解し、これを組み立てて統一的に取り扱うアプローチに関する基本的な考え方を習得するという点で、他の分野にも通じる内容を持つ、ある意味で幅の広い学問である。諸君の積極的な受講を期待する。</p>			

計算機援用工学 Computer Aided Engineering			
学期区分	後期	区分・単位	選択必修 2単位
担当教員	教授 多田幸生 Y. Tada		
<p>授業の目的： 工学のさまざまな分野における計算機の利用技術の中で、現実の世界を計算機内に構築した仮想モデルとして表現し、そのモデルを用いて実世界の特性を解明する技術が重要なものの一つである。ここでは、このようなモデル構築とその応用としてのシミュレーション技法について基本的な考え方と方法を述べる。</p> <p>到達目標： 80%以上の理解</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. システムシミュレーション <ol style="list-style-type: none"> (a) モデリング (b) さまざまなシミュレーション (c) 離散型シミュレーション 2. 微分方程式のシミュレーション <ol style="list-style-type: none"> (a) 差分法（2次元） (b) 重み付き残差法 (c) 変分法 (d) 有限要素法 3. 3次元モデリング 4. 設計データと生産データ <p>授業の進め方： 板書，プロジェクタ，小テスト，レポート</p> <p>成績評価方法： 期末試験＋小テスト＋出席程度およびレポート提出による加算</p> <p>履修上の注意： 数学を勉強しておくように</p>			
<p>教科書・参考文献など： 適宜，資料配布</p> <p>学生へのメッセージ： きびしくやります。 微分方程式の解法くらい復習しておきましょう。 いつでも部屋に来て下さい welcome です。</p>			

情報知能工学実験 I Computer and Systems Engineering Laboratory I			
学期区分	後期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	情報知能工学科全教員		
<p>授業の目的： 講義課目において学習した理論的な内容を、情報知能工学実験において電子機器等の具体的なハードを取扱い適用することにより、さらに理解を深めること、すなわち情報知能工学科に必要な情報の獲得、伝達、認識をより深く理解することが情報知能工学実験の目的である。メカトロニクスをテーマに、センシング技術の理解、計算機ソフトの開発、電子回路の設計製作、制御技術の修得をめざす。情報知能工学実験 I では、デジタル回路の設計・製作と LEGO Mindstorms を実験テーマとする。</p> <p>到達目標： 情報知能工学実験では、与えられたテーマに対するアプローチの方法、問題の解決法を学び、これらに加えて報告書のまとめ方を習得することが到達目標である。特に実験 I では、基本的なデジタル回路の設計製作法とデジタル IC の取扱い方法、アクチュエータの制御システムを習得することが重要な到達目標である。</p> <p>授業内容： 本実験では 2 テーマを行う。 1. デジタル回路の設計と製作 デジタル回路の設計法を理解し、与えられた課題の順序制御回路を設計製作する。 2. LEGO Mindstorms LEGO Mindstorms を用いて、制御システムを考案し、実際に製作およびソフト開発をおこなう。</p> <p>授業の進め方： 6 週間で 1 テーマの実験を行う。あらかじめ指導書を読み、関係する講義科目で学習した内容を復習することにより、実行する実験内容をよく理解しておくこと。 原則として 2 名で 1 グループを構成して、共同で実験を行う。6 週間のうち第 1 週では実験課題の説明、製作法などを講述する。2 週から 5 週で製作等をおこない、最終週で報告をおこなう。</p> <p>成績評価方法： 与えられた実験課題に対して積極的に取り組んでいるかどうかの実験態度、実験結果等により作製される報告書、出席点により評価する。</p> <p>履修上の注意： 本実験は、情報知能工学科においてもっとも基本的な科目のひとつであることから、必修科目としている。 各班の 2 人で共同して実験を行うので、お互いに協力することが必要である。1 人のみで行ってはならないし、他の 1 人が何もしないで見ているのみであってはならない。 作製したプログラム、設計図、回路図および実験結果は、1 人が持っているはいけない。必ず、常に 2 人が所有し、共通の情報を実験を行わない期間においても共有して下さい。 各班のメンバー間で、常に連絡が取れ、実験課題について、相談できるようにして下さい。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 情報知能工学科実験指導書 I</p> <p>学生へのメッセージ： 実験に関し不明な点がある時は随時担当教員および TA に相談すること。 工具、器具、パソコン等は、丁寧に扱い、壊すことのないように注意して下さい。また、これらを壊した場合は、必ず指導教員に報告すること。実験指導で与えられる注意をよく聞き、怪我をしないように実験を行って下さい。</p>			

情報知能工学実験Ⅱ Computer and Systems Engineering Laboratory Ⅱ			
学期区分	前期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	情報知能工学科全教員		
<p>授業の目的： 実験を通して、情報知能工学に必要な情報の獲得、伝達、認識を理解させることが本講義の目的である。すなわちメカトロニクスとエレクトロニクスをテーマに、センシング技法の理解、計算機ソフトウェアの開発と利用法、電子回路の設計製作、制御技術、および信号処理技術の修得をめざす。実験Ⅱでは、アナログ回路とマイクロプロセッサ・システムの設計・製作を実験テーマとする。</p> <p>到達目標： 本実験では、与えられたテーマに対するアプローチの方法、問題の解決法を学び、最終的に報告書のまとめ方を習得することが到達目標である。特に実験Ⅱでは、基本的なアナログ回路の設計製作法とマイクロプロセッサを習得することも重要な到達目標である。</p> <p>授業内容： 本実験では2テーマを行う。 1. アナログ回路の設計と製作 アナログ信号処理の基本を理解し、OP アンプ、フィルタの回路設計および製作をおこなう。 2. マイクロプロセッサの理解とシステム設計 基本的なマイクロプロセッサである PIC によるハードとソフト開発をおこなう。</p> <p>授業の進め方： 6週間で1テーマの実験をおこなう。2～3名で1グループを構成して、共同で実験をおこなう。6週のうち第1週では実験課題の説明、製作法などを講述する。2週から5週で製作等をおこない、最終週で報告をおこなう。</p> <p>成績評価方法： 報告書ならびに出席で評価する。</p> <p>履修上の注意： 本実験は、情報知能工学科においてもっとも基本的な科目のひとつであることから、必須科目としている。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 情報知能工学科実験指導書Ⅱ</p> <p>学生へのメッセージ： 実験に関し不明な点がある時は随時担当教員およびTAに相談すること。</p>			

情報知能工学演習 I Computer and Systems Engineering Practice I			
学期区分	前期	区分・単位	必修 1単位
担当教員	情報知能工学科全教員		
<p>授業の目的： 基本的な計算機の使い方を覚え、その操作になれること。情報知能工学演習Ⅱ～Ⅴの受講のために必要な、オフライン教科書の利用方法、UNIXに関する基礎知識を習得すること。また、プログラミング言語であるC言語の基礎的な事項（変数、制御文、配列、関数）を学び、簡便なプログラムを作成する力をつけること。</p> <p>到達目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. UNIXの基礎知識を習得する。 2. 基礎的なUNIXコマンドを学び、各種操作に習熟する。 3. UNIX環境でのプログラム開発手順を把握する。 4. C言語を用いた基礎的な計算の実装能力を養う。 <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. UNIXにおけるファイルシステム概念 2. UNIX上でのファイル操作、ファイル管理 3. プログラム作成・開発の手順 4. C言語を用いた基礎的な計算の実践 <p>授業の進め方：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 授業は演習用の計算機で一人一台の計算機を使用しながら行う。 2. 各授業冒頭に演習内容に関する説明を行い、残りの大半の時間を各自演習にあてる。 3. 演習室は、学科内の授業で使用していない間は課題等のために使用することができる。空き時間を積極的に利用してほしい。 4. 詳細はWWW上のテキストにしたがって進行する予定である。 <p>成績評価方法： 出席状況、テスト、レポートにより評価する。</p> <p>履修上の注意： 必ず出席すること。4回以上欠席した受講者には原則として、単位を認定しない。 30分以上の遅刻は欠席扱いとする。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 授業開始時に指示する。</p> <p>学生へのメッセージ： 情報知能工学演習Ⅰで習得すべき内容は、単に理解するというのではなく、自然に使いこなせるようになるまで、しっかり慣れておく必要がある。また、C言語は、演習Ⅱ～Ⅳやアルゴリズムとデータ構造及び演習などで使用するプログラミング言語である。本演習を通じてC言語の基礎をしっかりと身に付けておいてほしい。</p>			

情報知能工学演習Ⅱ Computer and Systems Engineering Practice Ⅱ			
学期区分	後期	区分・単位	必修 1単位
担当教員	情報知能工学科全教員		
<p>授業の目的： 情報知能工学演習Ⅰに続きC言語の基本事項の勉強を通してプログラミングの基礎を身につけること、および、ビット演算、バイナリ入出力、関数のポインタ、記憶領域の動的確保など、比較的高度な概念や操作に親しむことを目的とする。</p> <p>到達目標： ポインタ、文字列処理、構造体、ファイル入出力をきちんと身につけ、その上で、基本的なUNIXコマンド、基本的なデータ構造、気のきいた小規模なソフトウェアの簡易実装ができるようになる。また、デバッガの使用などを通じてメモリの構造をイメージできるようになる。</p> <p>授業の進め方： 情報知能工学演習Ⅰで用いた市販のテキストとHTML形式のテキストを用いて大まかな説明を行い、その後は必要に応じて質問に個別に対応する。演習の回数が進むにつれて学生の自主性が強く求められるようになる。</p> <p>成績評価方法： 出席状況、筆記試験、レポート、口頭試問により評価する。</p> <p>履修上の注意： 情報基礎の単位を取得しており、情報知能工学演習Ⅰを履修済みの学生を対象とする。情報知能工学演習Ⅰの合否は問わないが、習熟度に自信が無い場合には夏休み中に十分な予復習をしておくことを強く勧める。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 詳細は開講時に指示する。</p> <p>学生へのメッセージ：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 演習の題材全てを演習時間内だけで習得することはほぼ不可能である。 積極的な態度で授業時間以外にも勉強や演習をしてもらいたい。 2. 情報知能工学演習Ⅲのシラバスも参照すること。 			

情報知能工学演習Ⅲ Computer and Systems Engineering Practice Ⅲ			
学期区分	前期	区分・単位	必修 1単位
担当教員	情報知能工学科全教員		
<p>授業の目的： グループワークによる大規模ソフトウェアの開発を通して、問題分析、問題設定、問題解決、能動的学習、グループワーク、コミュニケーション能力の育成を図る。</p> <p>到達目標：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問題を分析し、開発方針を決め、適切な手法をとりながら、粘り強く一つの目標を達成する能力を身に付ける。 ・プログラムの共同開発（モジュール設計・開発・統合、保守）をスケジュール管理しながらすすめる能力を身に付ける。 ・プレゼンテーションを通じて自分の考えを明確かつ論理的に表現する能力を身に付ける。 <p>授業の進め方：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最終目標のみを与え、大規模アプリケーションをグループに分かれて開発する。 ・教員はアドバイザーとして開発をサポートする。 ・仕様書、進捗報告書、最終レポートの提出を義務付ける。 ・開発プログラムに関するプレゼンテーションをおこなう。 <p>成績評価方法： 出席状況、各種提出物、プレゼンテーションにより評価する。</p> <p>履修上の注意： 情報知能工学演習Ⅱを履修していること。</p>			
<p>学生へのメッセージ： 本演習はグループワークの重要性を認識する良い機会である。チームに貢献できるよう各自が積極的に取り組むことを期待する。</p>			

情報知能工学演習Ⅳ Computer and Systems Engineering Practice Ⅳ			
学期区分	後期	区分・単位	必修 1単位
担当教員	情報知能工学科全教員		
<p>授業の目的： オブジェクト指向プログラミング言語の概念・原理を理解し，GUIアプリケーションなどの作成に必要な，先進的プログラミング技術を身につける。</p> <p>到達目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オブジェクト指向プログラミングの概念を理解すること。 2. オブジェクト指向に基づいたライブラリ設計に慣れ，利用できるようになること。 3. GUIなどに関する先進的プログラミング技術を身につけ，アプリケーション作成できるようになること。 <p>授業内容： Java 言語によるプログラミング演習を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オブジェクト指向プログラミングの概要 2. 各種 API 群の利用 3. GUI とイベント処理 <p>授業の進め方：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 各回のはじめに簡単な講義を行い，その後，理解を深めるための演習を行う。 2. オブジェクト指向の基礎学習においては，各回ごとに課題を出題し，解答の提出を義務づける。 3. 後半は，テーマ毎に課題を出題し，解答の提出を義務づける。 <p>成績評価方法： 提出された課題から得られる理解状況などにしたがって成績を評価する。</p> <p>履修上の注意： 情報知能工学演習Ⅲを履修していること。</p>			
<p>履修上の注意： 講義時に指示する。</p> <p>学生へのメッセージ： 社会に出て大きなシステムを構築するためには，既存のライブラリを駆使したり，複数人で作業を行ったりすることが必要になる。皆さんには，オブジェクト指向を通して，規格化されたインターフェイスの重要性，差分プログラミングの技法を身につけて欲しい。</p>			

情報知能工学演習V Computer and Systems Engineering Practice V			
学期区分	前期	区分・単位	必修 1単位
担当教員	情報知能工学科全教員		
<p>授業の目的： 演習Ⅳまでに学んだ内容を基礎に位置づけ、演習Ⅴではより先進的なプログラミング技術を身につける。</p> <p>到達目標： 学生はC言語またはオブジェクト指向言語による二つのコースのうち一つを選択する。 C言語コースでは、常微分方程式の数値解法（Runge-Kutta法）や線形計画問題の解法（内点法）を自らの手で実装することを通じ、今までに学んだ技術を総動員すれば工学上の実用的なソフトウェアを作成できることを実感する。また、実装の過程において、数値誤差や計算量をきちんと考慮しなければ作ったプログラムが信頼できないものや非効率なものになることを知る。 オブジェクト指向言語コースでは、I/O・ネットワーク・スレッドなどに関する先進的プログラミング技術を身につけ、アプリケーション作成できるようになることを目標とする。</p> <p>授業内容： C言語を用いるコースでは、高度な数値計算に関する演習をおこなう。C言語コースで実装する計算手法の説明はあらかじめ配布資料として公開する。資料にかかれた数式をそのままプログラミング言語に置き換えるだけで一応の実装はできる。しかし、数値誤差の見積りやデータの前処理を行わないと計算結果が信用できないものとなり。データの無駄な代入や並び変えを行なうと計算時間が膨大になる。一通りの実装を済ませた後では、このようなことを考慮しながらプログラムを改良し、その過程で様々な数値計算技法を学ぶ。 オブジェクト指向言語を用いるコースでは、上記要素技術について学習すると同時に、チャットシステムやネット対戦ゲームなどの現実的なアプリケーションの作成を通して、各種技術を統合的に利用するためのプログラミングデザインなどについても実習する。</p> <p>授業の進め方： 1. 各回のはじめに簡単な講義を行い、その後、理解を深めるための演習を行う。 2. 各テーマ毎（計4回程度）に課題を出題し、解答の提出を義務づける。</p> <p>成績評価方法： 提出された課題から得られる理解状況などにしたがって成績を評価する。</p> <p>履修上の注意： 情報知能工学演習Ⅳを履修していること。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 講義時に指示する。</p> <p>学生へのメッセージ： 内容が高度になるため、選択するコースの言語について十分に復習をおこなっておいて欲しい。</p>			

情報知能工学プロジェクト Computer and Systems Engineering Project			
学期区分	後期	区分・単位	必修 2単位
担当教員	情報知能工学科全教員		
<p>授業の目的： 情報知能工学科プロジェクトでは情報知能工学実験および演習で修得したハードウェア技術，センシング技術や制御をもとに，与えられた課題のシステムを開発する。特に，この開発では各自の創意工夫が問われる。</p> <p>到達目標： 本プロジェクトは，ミニ卒業論文の意味合いをもつ。一つの与えられたテーマを調査，提案，製作，評価のすべてを行い，研究の進め方を習得することが到達目標である。</p> <p>授業内容： 本プロジェクトは大きく2テーマに分かれる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. メカトロニクス開発 毎年異なる課題が与えられ，自主的にハードウェアとソフトウェアを開発する。最後に成果を競いあい，報告書をまとめる。 2. ソフトウェア開発 毎年異なる課題が与えられ，自主的にソフトウェアを開発する。最後に成果を公表して批評しあう。 <p>授業の進め方： 後期全体で1テーマのプロジェクトをおこなう。最終週に報告書ならびにコンテスト，あるいは報告会で成果を競う。</p> <p>成績評価方法： 報告書あるいは報告会の発表内容，ならびに出席で評価する。</p> <p>履修上の注意： 本プロジェクトは，情報知能工学科においてもっとも基本的な科目のひとつであることから，必須科目としている。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 情報知能工学科プロジェクト指導書</p> <p>学生へのメッセージ： 学期のはじめに説明会を開催し，テーマの説明とグループ分けを行う。 プロジェクトに関して不明な点がある時は随時担当教員およびTAに相談すること。</p>			

卒業研究 Research Works			
学期区分	通年	区分・単位	必修 10単位
担当教員	全教員		
<p>授業の目的： 各学年が一つの研究室に一年間所属し、指導教員のもとで一つの研究テーマについて研究を行う。ここでの研究活動を通して、これまでに聴講してきた様々な講義から得た知識の実践・活用・有効性の確認、さらにはより深い知識の習得を図る。また、新しい知識・技術を創造・開発する研究活動に経験することも目的の一つである。いずれにしても、与えられたテーマに対して、各自で問題点を抽出し、文献を調べ、解決法を見出すことが重要である。</p> <p>到達目標： 所属する研究室の研究分野における高度な専門知識を習得するとともに、これらの知識・技術を用いて研究を行い、その成果を卒業論文としてまとめること。また、論文の内容を限られた時間の中でわかりやすく発表すること。</p> <p>授業内容： 情報知能工学科には大きく分けて三つの大講座：情報システム講座、情報認識講座、知的システム講座があり、この下に情報に関わる多くの研究分野がある。学生の所属する研究室によりその内容が異なるので、詳細については神戸大学工学部情報知能工学科のホームページを参照のこと。</p> <p>授業の進め方： 詳細は各研究室によって異なるが、基本的には二つの部分から成る。その一つは、各研究室で必要とされる基礎知識・技術を習得・理解するため、論文を読んでその内容に関して議論すること。その二は、これらの知識・技術に基づき、新しい知識・技術・知見を創造・開発するための研究を進めること。</p> <p>成績評価方法： 研究室における勉学の態度により、総合的に評価する。</p> <p>履修上の注意： 研究室に配属になった後は、毎日研究室に出てきて勉学、研究に励むこと。研究室においては、他の学生と協調して研究生活を送ること。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 参考文献は、各研究分野によって異なり、各々の分野において多数あるが、主要な著書・論文等は各研究室に準備されている。また、各自の研究テーマに必要な文献を自ら調べることも重要である。</p> <p>学生へのメッセージ： 高度な専門知識を得るために、基礎的な勉学に励むとともに最新の論文等を読んで理解すること。また、卒業研究を、各自の自己創造性を発揮できる場とするよう努力すること。</p>			

Ⅸ 工学部共通科目

数学演習（市民工学科・電気電子工学科・機械工学科・応用化学科）			Exercise on Basic Mathematics
学期区分	1年前期	区分・単位	1単位
担当教員	各学科の演習担当助手，講師もしくは准教授		
<p>授業の目的： 1年前期開講の線形代数学Ⅰおよび微分積分学もしくは基礎解析Ⅰで習った事柄を中心にして，将来工学部の専門分野で必要とされる応用数学の基礎的な知識をより確実に理解し，運用できるようになるために演習をおこなう。</p> <p>授業内容： 線形代数については，次の項目に関する演習を行なう。 (1)行列の代数的操作法 (2)行列式の意味とその計算 (3)線形空間の定義とその例 (4)連立一次方程式の解法 Ⅰ変数の微分積分については，次の項目に関する演習を行なう。 (1)集合の上限と下限 (2)数列の収束と発散 (3)関数の極限值 (4)連続関数の基本的性質 (5)微分法 ・微分係数の求め方 ・導関数の計算 ・平均値の定理 ・テイラーの定理 ・最大最小問題への応用 (6)積分法 ・不定積分 ・定積分の計算 ・広義積分の計算 ・定積分の具体的な問題への応用</p> <p>授業の進め方： 線形代数学および微分積分学の演習書に基づいて演習を進める。毎回最初に演習する事項についてその内容の概要を簡単に説明してから，演習問題を解くスタイルで授業を進める。演習問題の選択は，演習担当者が演習書の中から適切に選ぶ。また質問事項に関しては，疑問点が氷解するまで懇切丁寧に考え方や答えを教える。必要に応じて，演習書の問題に関連するレポートを課すことがある。</p> <p>成績評価方法： 出席と試験により評価する。</p> <p>履修上の注意： 線形代数学Ⅰおよび微分積分学もしくは基礎解析Ⅰを受講していること。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 講義時に指示する。</p> <p>学生へのメッセージ： 講義で習った内容の知識を深め，その応用ができるようにするためには，実際に演習問題を解くことが重要です。積極的に多くの問題を解き，疑問的は質問するようにしてください。</p>			

複素関数論 (全学科) Complex Analysis			
学期区分	2年前期	区分・単位	2単位
担当教員	中桐信一, 南部隆夫, 内藤雄基, 白川 健, 足立幸信		
<p>授業の目的: 大教センターの講義において, 諸君らは微分積分学の基礎を学んできたわけであるが, そこで取り扱われている関数は, すべて実変数の実数値関数であった。しかし複素関数論の世界は, 実数値関数の世界とは全く異なる。例えば, 複素関数論においては一回微分可能であるならば, 無限回微分可能となるが, 実数値関数の世界では直ちに反例が提出できる。複素関数論は諸君らが今後習うフーリエ解析, 常微分方程式論, 偏微分方程式論に用いられる解析学の基礎中の基礎である。</p> <p>到達目標: 複素変数の複素数値関数の微分積分学を理解し, 主要な定理を実際の定積分等の計算に適用できるようになること。フーリエ解析, 常微分方程式, 偏微分方程式論に適用出来る程度に, 主要な定理を理解すること。</p> <p>授業内容:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 複素平面 2. 複素平面上の線積分 3. 解析関数と Cauchy-Riemann の関係式 4. Cauchy の積分定理 5. Cauchy の積分公式 6. Taylor 展開 7. 解析関数の特異点 8. Laurent 展開 9. 留数定理, 留数計算 10. 実定積分の計算への留数の応用 11. 解析的延長 12. 複素関数論の解析学の他の分野への応用 <p>上の数字は講義の回数を意味していません。</p> <p>授業の進め方: 講義を中心に進める。</p> <p>成績評価方法: 定期試験の成績を中心に評価を行うが, 適時小テストを行ったり, レポートの提出を求めることがある。</p> <p>履修上の注意: 最初の講義の時に詳しく説明する。</p>			
<p>教科書・参考文献など: 講義中に指示する。</p> <p>学生へのメッセージ: オフィスアワーは最初の講義の時に指定する。</p>			

常微分方程式論 (全学科)		Theory of Ordinary Differential Equations	
学期区分	2年前期	区分・単位	2単位
担当教員	中桐信一, 南部隆夫, 内藤雄基, 白川 健		
<p>授業の目的: 一個の独立変数の未知関数とその導関数を含む方程式を常微分方程式という。力学の多くの現象は常微分方程式を用いて記述される。常微分方程式は工学のみならず, 自然科学の重要な共通の『言語』の一つといえる。本講義の目的は具体的な常微分方程式の解法と, 常微分方程式の解の存在定理をはじめとする基本定理を解説することである。</p> <p>到達目標: 基本的な常微分方程式を解くことができ, かつ解の存在定理等の意味が理解できるようになる。</p> <p>授業内容:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 変数分離形の微分方程式 2. 同次形微分方程式 3. 線形微分方程式 4. 完全微分方程式, 積分因子 5. Ricatti の微分方程式 6. Cauchy の折れ線法と常微分方程式の解の存在定理 7. 常微分方程式の解の一意性と解の延長 8. 連立線形常微分方程式 9. 連立線形常微分方程式の基本解系 10. 定数変化法 11. n 階常微分方程式 12. ダランベールの階数低化法 <p>上の数字は講義の回数を意味していません。</p> <p>授業の進め方: 講義を中心に進める。</p> <p>成績評価方法: 定期試験の成績を中心に評価を行うが, 適時小テストを行ったり, レポートの提出を求めることがある。</p> <p>履修上の注意: 最初の講義の時に詳しく説明する。</p>			
<p>教科書・参考文献など: 講義中に提示する。</p> <p>学生へのメッセージ: オフィスアワーは最初の講義の時に指定する。</p>			

フーリエ解析 (全学科) Fourier Analysis			
学期区分	2年後期	区分・単位	2単位
担当教員	足立幸信, 中桐信一, 南部隆夫, 内藤雄基, 白川 健		
<p>授業の目的:</p> <p>フランスの数学者 Joseph Fourier が1807年にいわゆるフーリエ級数を提唱したのが、フーリエ解析の始まりである。フーリエ級数展開やフーリエ変換は、波動方程式、熱伝導方程式、常微分方程式の境界値問題等々、様々な解析学の問題解法に利用される大変重要な道具である。『関数をフーリエ級数展開する』、『関数をフーリエ変換する』という演算は、工学の様々な問題を解くに当たっての、日常的な操作といえる。フーリエ解析の数学的基礎を習得するのが本授業の目的である。</p> <p>到達目標:</p> <p>具体的な関数をフーリエ級数展開でき、またフーリエ変換することができるようにする。フーリエ変換やラプラス変換についての定理を理解する。フーリエ変換、ラプラス変換の工学への応用を理解する。</p> <p>授業内容:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 直交関数系とフーリエ級数 2. 直交関数列によるフーリエ式展開 3. 滑らかな周期関数のフーリエ展開 4. 不連続関数のフーリエ展開とギブス現象 5. 具体的な関数のフーリエ展開 6. フーリエ級数に関する Dirichlet-Jordan の条件 7. フーリエの積分公式 8. フーリエ変換, フーリエ逆変換 9. 具体的な関数のフーリエ変換 10. ラプラス変換, ラプラス逆変換 11. 具体的な関数のラプラス変換 12. フーリエ変換, ラプラス変換の工学への応用 <p>上の数字は講義の回数を意味していません。</p> <p>授業の進め方:</p> <p>講義を中心に進める。</p> <p>成績評価方法:</p> <p>定期試験の成績を中心に評価を行うが、適時小テストを行ったり、レポートの提出を求めることがある。</p> <p>履修上の注意:</p> <p>最初の講義の時に詳しく説明する。</p>			
<p>教科書・参考文献など:</p> <p>教科書: 応用数学概論, 小川枝郎著, 培風館 参考書: 講義中に紹介する。</p> <p>学生へのメッセージ:</p> <p>オフィスアワーは最初の講義の時に指定する。</p>			

ベクトル解析 (電気電子工学科・機械工学科・情報知能工学科)		Vector Analysis	
学期区分	1年後期	区分・単位	2単位
担当教員	中桐信一, 南部隆夫, 内藤雄基, 白川 健, 吉田 要		
<p>授業の目的: 多変数の微分積分学を, 体系的に取り扱うのがベクトル解析の目的である。古典力学, 特に流体力学, 電磁気学, 剛体の力学を理解するためには, ベクトル解析の知識は欠かすことができない。例えば電磁気学においては, ガウスの定理やストークスの定理は大変重要な役割を果たしている。ベクトル解析の数学的基礎を習得するのが本授業の目的である。</p> <p>到達目標: 具体的な曲線の曲率と曲率半径, 振率と振率半径を求めることができる。ガウスの定理, ストークスの定理の幾何学的意味を理解して, 具体的な問題に適用することができる。</p> <p>授業内容:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 内積と外積, ベクトル場 2. 多変数関数の微分法 3. フレネーセレの公式 4. 曲率と曲率半径 5. 振率と振率半径 6. 線積分 7. テンソル 8. 面積分 9. ガウスの定理 10. ストークスの定理 11. ガウスの定理, ストークスの定理の物理学への応用 12. ガウスの定理, ストークスの定理の解析学の他の分野への応用 <p>上の数字は講義の回数を意味していません。</p> <p>授業の進め方: 講義を中心に進める。</p> <p>成績評価方法: 定期試験の成績を中心に評価を行うが, 適時小テストを行ったり, レポートの提出を求めることがある。</p> <p>履修上の注意: 最初の講義の時に詳しく説明する。</p>			
<p>教科書・参考文献など: 講義中に指示する。</p> <p>学生へのメッセージ: オフィスアワーは最初の講義の時に指定する。</p>			

数値解析 (電気電子工学科・情報知能工学科)		Numerical Analysis	
学期区分	3年後期	区分・単位	2単位
担当教員	吉田 要, 中桐信一, 南部隆夫, 内藤雄基, 白川 健		
<p>授業の目的: 計算機の発達は自然科学者に数値計算という大変強力な武器を与えた。諸君らは工学を学ぶ上で様々な数値計算をする必要に迫られるだろう。本講義では数値計算を可能ならしめている数値計算法の数学的基礎を解説する。</p> <p>到達目標: 工学に現われる具体的な数値計算ができるようになること。</p> <p>授業内容:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 数値の表現 2. 誤差の発生 3. 丸め誤差 4. 行列式の計算 5. 区間演算 6. 線形漸化式 7. 数値積分 8. 最小2乗近似 9. ニュートン法 10. 工学に現われる数値計算問題の紹介 11. 工学に現われる数値計算問題の解法 12. 数値解析の解析法への応用 <p>上の数字は講義の回数を意味していません。</p> <p>授業の進め方: 講義を中心に進める。</p> <p>成績評価方法: 定期試験の成績を中心に評価を行うが、適時小テストを行ったり、レポートの提出を求めることがある。</p> <p>履修上の注意: 最初の講義の時に詳しく説明する。</p>			
<p>教科書・参考文献など: 講義中に指示する。</p> <p>学生へのメッセージ: オフィスアワーは最初の講義の時に指定する。</p>			

偏微分方程式 (電気電子工学科・機械工学科)		Theory of Partial Differential Equations	
学期区分	3年前期	区分・単位	2単位
担当教員	足立幸信, 中桐信一, 南部隆夫		
<p>授業の目的: 偏微分方程式は多変数の未知関数とその偏微分係数を含む方程式である。音の伝播, 熱の伝導, あるいは水の流れ等々の自然現象は全て偏微分方程式によって数学的に記述される。偏微分方程式は工学だけでなく, 様々な自然科学に現れる。本講義では偏微分方程式の基礎理論を説明する。</p> <p>到達目標: 工学に現れる具体的な偏微分方程式の解を求めることができるようになること。</p> <p>授業内容:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 偏微分方程式の分類 2. 波動方程式 3. 双曲型偏微分方程式 4. 熱伝導方程式 5. 放物型偏微分方程式 6. 楕円形偏微分方程式 7. 工学に現れる偏微分方程式の紹介 8. 工学に現れる偏微分方程式の解法 <p>上の数字は講義の回数を意味していません。</p> <p>授業の進め方: 講義を中心に進める。</p> <p>成績評価方法: 定期試験の成績を中心に評価を行うが, 適時小テストを行ったり, レポートの提出を求めることがある。</p> <p>履修上の注意: 最初の講義の時に詳しく説明する。</p>			
<p>教科書・参考文献など: 教科書は指定しない。 参考書: 「応用数学概論」小川枝郎著 (培風館) 「微分方程式入門」南部隆夫著 (朝倉書店)</p> <p>学生へのメッセージ: オフィスアワーは最初の講義の時に指定する。</p>			

離散数学 (電気電子工学科・情報知能工学科)		Discrete Mathematics	
学期区分	1年前期	区分・単位	2単位
担当教員	吉田 要		
<p>到達目的: 離散数学は近年のコンピュータの発達により、大変重要な分野となっている。集合論では、有限集合だけではなく、現代数学の基礎となってる無限集合についても扱い、無限を扱う場合の注意点などがわかりやすい例を用いて説明していく。直観的な理解を助けるために図式も用いる。</p> <p>授業内容: 算法, 順序集合, 2項関係, 同値関係, 同型写像, 準同型写像, 束, 有向グラフなど。</p> <p>履修上の注意: なし</p>			
<p>教科書・参考文献など: 未定</p>			

解析力学 A (市民工学科)		Advanced course in Mechanics	
学期区分	後期	区分・単位	2単位
担当教員	藤居義和		
<p>授業の目的：</p> <p>機械を設計する際には、その力学的強度や構造の安定性に関わる静力学的問題や、振動や回転運動における動力学的問題を解決する必要があります。そして、このような力学的問題を解決するためには、現実の対象物の力学系としての数学モデルの構築と運動方程式の誘導、そしてその解析を要求されます。本科目ではこれらの力学的問題を、力学の基礎概念を新しい視点から理解する解析力学の手法によって解きます。解析力学とは、固体力学とか流体力学のように扱う対象の性質による分類ではなく、系の運動を数学的にどう記述すると計算が簡単になり便利かということに重点が置かれたその方法が「解析的」な力学です。数学・力学の基礎的な内容を理解した上で、解析力学の手法を教授し力学の基礎概念を新しい視点から理解することによって、実際の機械・構造物を設計する際の力学問題の解析的基礎を与えます。</p> <p>到達目標：</p> <p>ある与えられた系の力学問題を解くうえで最も難しいことの一つは、その系を数式化するときどのように表したらよいかということです。解析力学におけるラグランジュの方法は、適当な座標系を選びさえすればあとは全く機械的に簡単に計算を進めるだけで、その系の力学問題を解くことが出来るという素晴らしい方法です。この解析力学の基本原理解の理解をいくつかの具体例で演習を行うことによって進め、現実の対象物の力学系としての数学モデルの構築、ラグランジュの運動方程式による力学の一般形の解法を修得することを到達目標とします。</p> <p>授業内容：</p> <p>応用との関連に留意して適時例題を取り入れる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 力学場のベクトル解析：場のポテンシャル、ベクトル解析操作の数学的表現、曲線座標系における解析操作 2. 一般化座標：一般化座標、一般化力、エネルギー保存法 3. 仮想仕事の原理：仮想変位、仮想仕事の原理、束縛力とラグランジュの未定乗数法 4. ダランベールの原理：ダランベールの原理、ラグランジュの変分方程式 5. 変分法：変分法の問題、オイラーの微分方程式、条件をとともなう変分法の問題 6. ハミルトンの原理：ハミルトンの原理、最小作用の原理 7. ラグランジュの運動方程式：束縛条件と一般化座標、一般化力、ラグランジュの運動方程式の応用 <p>授業の進め方：</p> <p>OHPと板書によるノート講義で進めますが、理解を深めるために演習を頻繁に行います。講義においては、式の展開など数学的な表現の一部を空白とし、学生が補う部分を設けます。また、応用との関連に留意して適時例題を演習形式で進めます。また、授業が一方通行にならないように授業中に随時質問を受け付け、理解の進んでいない場合には適宜反復して講義を進めます。また、授業に対する質問・疑問・希望・要望・提案・他なんでも書いて提出してもらおうということを頻繁に行い、学生の授業に対する期待と理解度を随時把握して、講義の速度と方向を適宜修正しながら進めます。</p> <p>成績評価方法：</p> <p>出席は取りませんが、授業中に行う演習課題成果などを中心に、定期試験と併せて、総合的に評価します。</p> <p>履修上の注意：</p> <p>基礎力学Ⅰ，機械基礎数学を履修していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など：</p> <p>参考書は自分に最も良く合ったものを選ぶことが大切です。「解析力学」という語がついた参考書が沢山あるので、図書館や大きな書店などで、自分にあったものを搜してみてください。希望があれば授業中に、教科書に準ずる参考書を推薦します。</p> <p>学生へのメッセージ：</p> <p>一見複雑でその解法が難解に見える力学系が、解析力学の手法によって、ある一種の美しさをもって解くことが出来ます。これらの手法にふれることによって、力学の基礎概念を新しい視点から理解する喜びを味わって下さい。</p>			

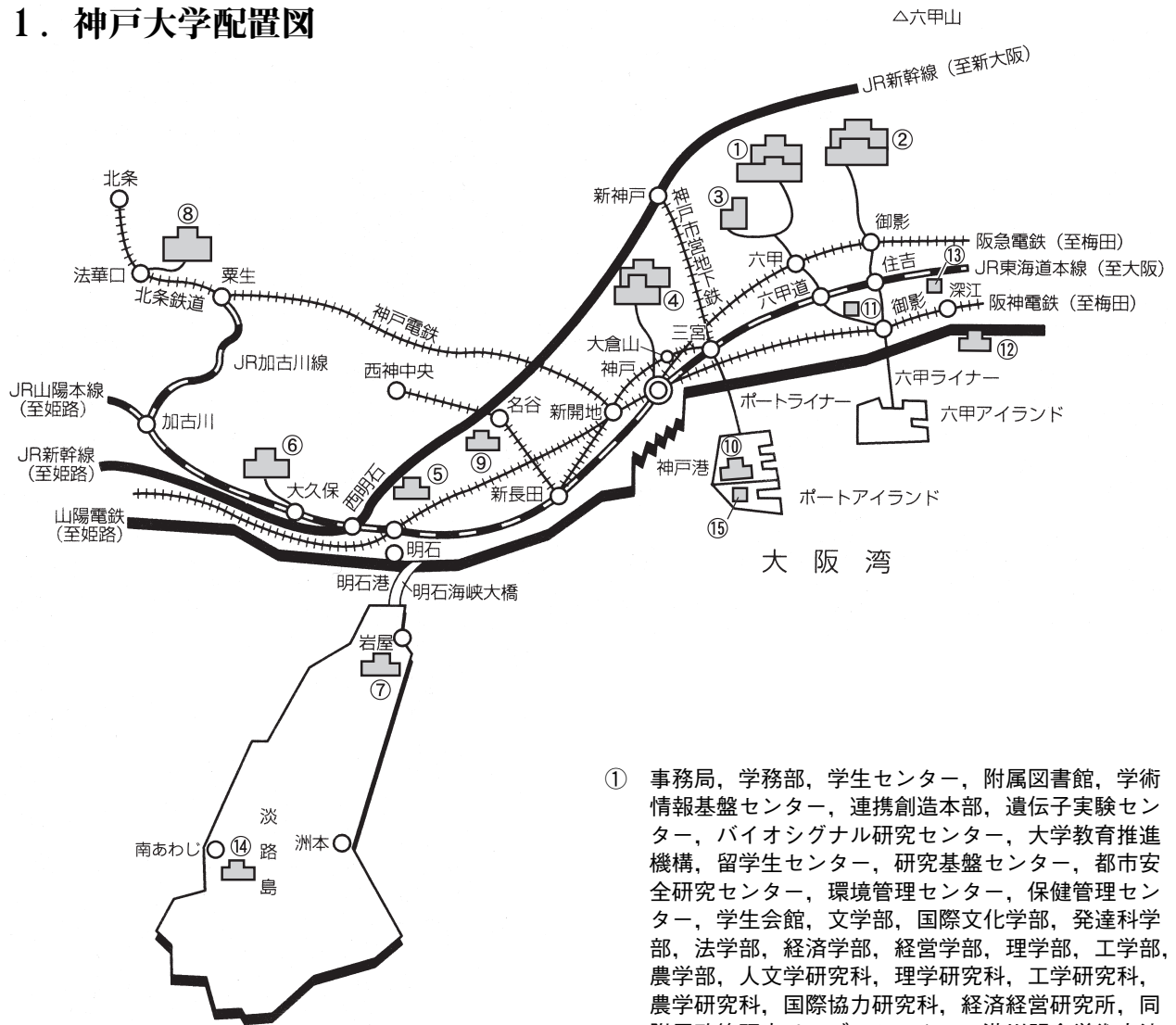
解析力学B (情報知能工学科)		Analytical Dynamics	
学期区分	後期	区分・単位	2単位
担当教員	藤居義和		
<p>授業の目的：</p> <p>機械を設計する際には、その力学的強度や構造の安定性に関わる静力学的問題や、振動や回転運動における動力学的問題を解決する必要があります。そして、このような力学的問題を解決するためには、現実の対象物の力学系としての数学モデルの構築と運動方程式の誘導、そしてその解析を要求されます。本科目ではこれらの力学的問題を、力学の基礎概念を新しい視点から理解する解析力学の手法によって解きます。解析力学とは、固体力学とか流体力学のように扱う対象の性質による分類ではなく、系の運動を数学的にどう記述すると計算が簡単になり便利かということに重点が置かれたその方法が「解析的」な力学です。数学・力学の基礎的な内容を理解した上で、解析力学の手法を教授し力学の基礎概念を新しい視点から理解することによって、実際の機械・構造物を設計する際の力学問題の解析的基礎を与えます。</p> <p>到達目標：</p> <p>ある与えられた系の力学問題を解くうえで最も難しいことの一つは、その系を数式化するときどのように表したらよいかということです。解析力学におけるラグランジュの方法は、適当な座標系を選びさえすればあとは全く機械的に簡単に計算を進めるだけで、その系の力学問題を解くことが出来るという素晴らしい方法です。この解析力学の基本原則の理解をいくつかの具体例で演習を行うことによって進め、現実の対象物の力学系としての数学モデルの構築、ラグランジュの運動方程式による力学の一般形の解法を修得することを到達目標とします。</p> <p>授業内容：</p> <p>応用との関連に留意して適時例題を取り入れる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 力学場のベクトル解析：場のポテンシャル、ベクトル解析操作の数学的表現、曲線座標系における解析操作 2. 一般化座標：一般化座標、一般化力、エネルギー保存法 3. 仮想仕事の原理：仮想変位、仮想仕事の原理、束縛力とラグランジュの未定乗数法 4. ダランベールの原理：ダランベールの原理、ラグランジュの変分方程式 5. 変分法：変分法の問題、オイラーの微分方程式、条件をとらぬ変分法の問題 6. ハミルトンの原理：ハミルトンの原理、最小作用の原理 7. ラグランジュの運動方程式：束縛条件と一般化座標、一般化力、ラグランジュの運動方程式の応用 <p>授業の進め方：</p> <p>OHPと板書によるノート講義で進めますが、理解を深めるために演習を頻繁に行います。講義においては、式の展開など数学的な表現の一部を空白とし、学生が補う部分を設けます。また、応用との関連に留意して適時例題を演習形式で進めます。また、授業が一方通行にならないように授業中に随時質問を受け付け、理解の進んでいない場合には適宜反復して講義を進めます。また、授業に対する質問・疑問・希望・要望・提案・他なんでも書いて提出してもらおうということを頻繁に行い、学生の授業に対する期待と理解度を随時把握して、講義の速度と方向を適宜修正しながら進めます。</p> <p>成績評価方法：</p> <p>出席は取りませんが、授業中に行う演習課題成果などを中心に、定期試験と併せて、総合的に評価します。</p> <p>履修上の注意：</p> <p>基礎力学Ⅰ，機械基礎数学を履修していることが望ましい。</p>			
<p>教科書・参考文献など：</p> <p>参考書は自分に最も良く合ったものを選ぶことが大切です。「解析力学」という語がついた参考書が沢山あるので、図書館や大きな書店などで、自分にあったものを搜してみてください。希望があれば授業中に、教科書に準ずる参考書を推薦します。</p> <p>学生へのメッセージ：</p> <p>一見複雑でその解法が難解に見える力学系が、解析力学の手法によって、ある一種の美しさをもって解くことが出来ます。これらの手法にふれることによって、力学の基礎概念を新しい視点から理解する喜びを味わって下さい。</p>			

熱・統計力学 (建築学科・市民工学科)		Statistical Approach to Thermodynamics		
学期区分	前期	区分・単位	選択	2単位
担当教員	松尾成信			
<p>授業の目的: 熱力学は自然界の諸現象において観測される巨視的な物性 (平衡および輸送物性) の相互関係を明らかにするものであり, その系を構成している分子や原子の働きについては言及していない。しかし, こうした熱力学状態量も, 実際には系を構成している分子個々の熱運動へのエネルギーの配分のされ方によって決定される。本講義は, この巨視的性質と微視的性質の橋渡しをする統計力学の意義を正しく理解することを目的とする。本科目を習得することにより, 自然界の現象の自発性を支配するエントロピーと自由エネルギーについての理解を深めることが期待できる。</p> <p>到達目標: 熱力学において最も基礎的な物性である内部エネルギーとエントロピーを, 系を構成する分子や原子が有する熱運動エネルギーおよびポテンシャルエネルギーから算出できるようになることを目標とする。このためボルツマン分布則を正確に理解することに重点をおき, さらに種々のアンサンブルを理解することで様々な系に対して統計力学を応用する能力を養う。</p> <p>授業内容: ボルツマン分布則, エントロピーの統計的基礎, 系の持つ種々のエネルギーに対する分配関数の求め方を明らかにした後, 簡単な系 (原子結晶, 理想気体など) の熱力学状態量の誘導法を講述する。各回の講義予定は以下のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 熱力学基礎: 状態方程式と熱力学第1法則 2. ミクロからマクロへ: 分視運動の自由度とエネルギー等分配則 3. 4. 統計的基礎: エネルギー準位とボルツマン分布則 (分子分配関数) 5. 局在系: (原子結晶, アインシュタインモデル) 6. 前半のまとめと中間テスト 7. エネルギー準位の縮退とボルツマン分布則の修正 8. 9. 非局在系 (理想気体から実在気体へ) 10. 11. 集合の種類と考え方 (カノニカルアンサンブル) 12. 分子シミュレーションへの応用 (モンテカルロ法) 13. 後半のまとめ方と演習 <p>授業の進め方: 配布プリントを中心に講義を進めるが, 問題を解くことで理解できる内容が多いので, 出席確認を兼ねた小テスト (演習) を適宜行う。</p> <p>成績評価方法: 中間テスト (40%), 期末テスト (40%), 出席率 (20%) により評価する。</p> <p>履修上の注意: 熱力学と量子力学の基礎を予め学習しておくことが望まれる。</p>				
<p>教科書・参考文献など: 小島和夫著『入門化学統計熱力学』(講談社), アトキンス著『物理化学 (下)』(東京化学同人)</p> <p>学生へのメッセージ: 月曜日の午後5時以降, 研究室で質問を受け付けるので, 授業内容についての質問があれば遠慮せずに来室して下さい。</p>				

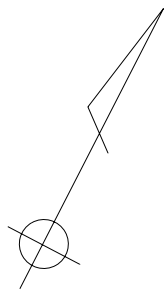
工業所有権法（電気電子工学科・機械工学科）		Industrial Property Law	
学期区分	後期	区分・単位	選択 1単位
担当教員	特命教授 山下 洸 K, Yamashita, 特命教授 石井良知 Y, Ishii		
<p>授業の目的： 企業等における活動では、特許等の知的財産権についての基礎的な知識が不可欠である。本講義では、特許制度を中心として、知的財産権制度の概要について解説し、知的財産権制度を活用、管理する際に必要となる基本的な知識を習得する。</p> <p>到達目標： 知的財産権制度を活用、管理する際に必要となる基本的な知識を習得する。</p> <p>授業内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 知的財産権制度の概要 知的財産の種類と概要、知的財産権法の世界的な動向 2. 特許制度の概要 制度の目的 特許される発明 3. 特許権獲得のための手続の概要 4. 発明者の権利，職務発明，神戸大学知的財産ポリシー 5. 特許権の効力と活用方法 6. 特許調査，企業における知的財産管理 7. 意匠制度，商標制度等の概要 <p>授業の進め方： 講義形式を中心とするが、学生が自ら考えをまとめる機会を設ける。</p> <p>成績評価方法： 授業への出席状況，及び講義の理解の程度によって総合的に評価する。</p> <p>履修上の注意： 技術的な事項以外に，特許法の条文など法律に関する話題にも関心を持って講義を聞いてください。</p>			
<p>教科書・参考文献など： 産業財産権標準テキスト及び配布資料を使用する。</p> <p>学生へのメッセージ： 講義の中で，疑問に思ったことなどがあれば，積極的に質問をしてください。</p>			

X 神戸大学校舎配置図

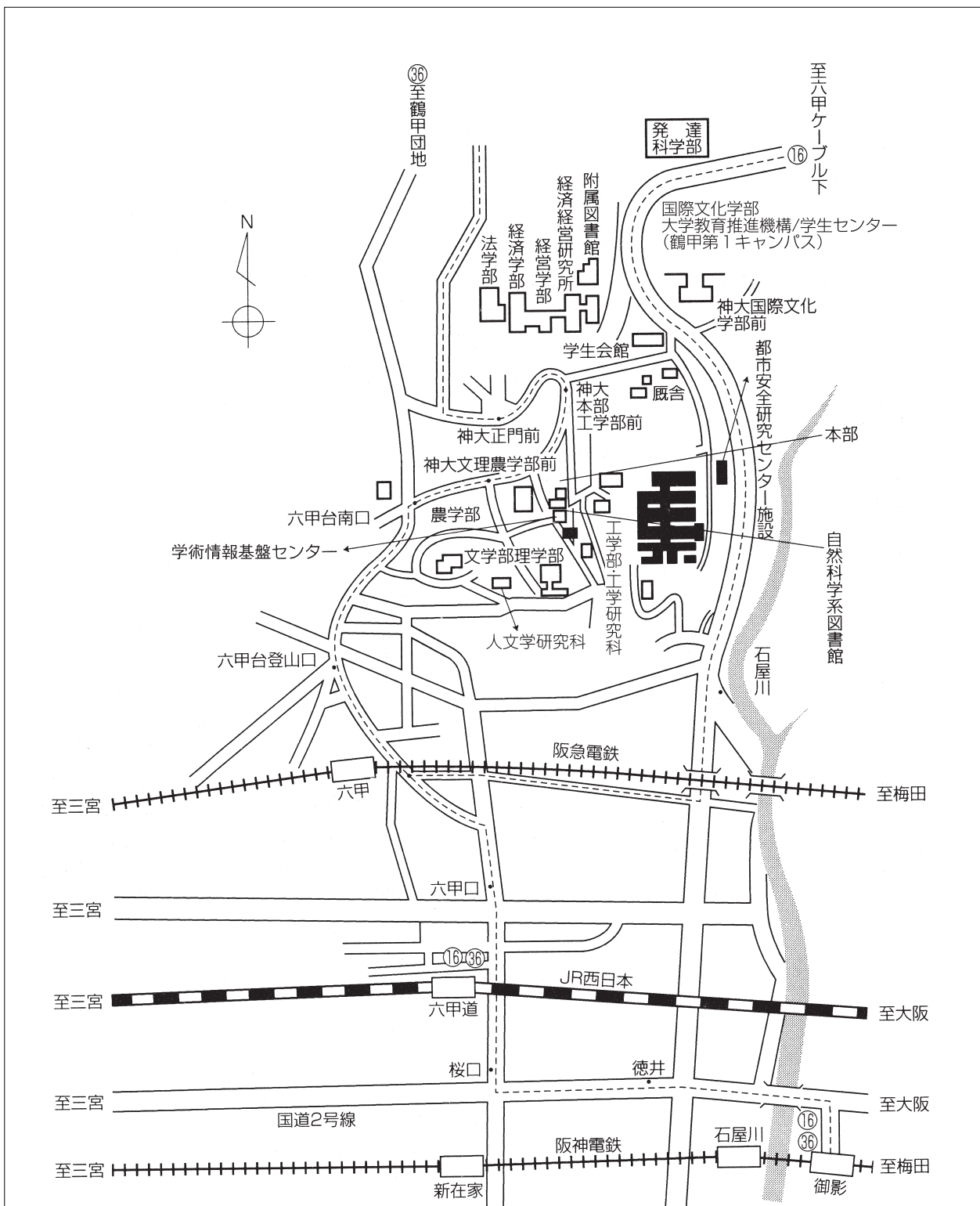
1. 神戸大学配置図



- ① 事務局, 学務部, 学生センター, 附属図書館, 学術情報基盤センター, 連携創造本部, 遺伝子実験センター, バイオシグナル研究センター, 大学教育推進機構, 留学生センター, 研究基盤センター, 都市安全研究センター, 環境管理センター, 保健管理センター, 学生会館, 文学部, 国際文化学部, 発達科学部, 法学部, 経済学部, 経営学部, 理学部, 工学部, 農学部, 人文学研究科, 理学研究科, 工学研究科, 農学研究科, 国際協力研究科, 経済経営研究所, 同附属政策研究リエゾンセンター, 瀧川記念学術交流会館, 眺望館, 神大会館, 山口誓子記念館
- ② 発達科学部附属住吉校, 住吉寮, 住吉国際学生宿舎, 女子寮
- ③ 国維寮
- ④ 医学部 (医学科), 同附属病院, 同附属動物実験施設, 同附属医学医療国際交流センター
- ⑤ 発達科学部附属明石校
- ⑥ 発達科学部附属養護学校
- ⑦ 内海域環境教育研究センター
- ⑧ 農学部附属食資源教育研究センター
- ⑨ 医学部 (保健学科)
- ⑩ インターナショナル・レジデンス
- ⑪ 学而荘
- ⑫ 海事科学部
- ⑬ 国際交流会館, 学生寮 (白鷗寮)
- ⑭ 海事科学部附属国際海事教育研究センター
- ⑮ インキュベーションセンター, 神戸バイオテクノロジー研究・人材育成センター



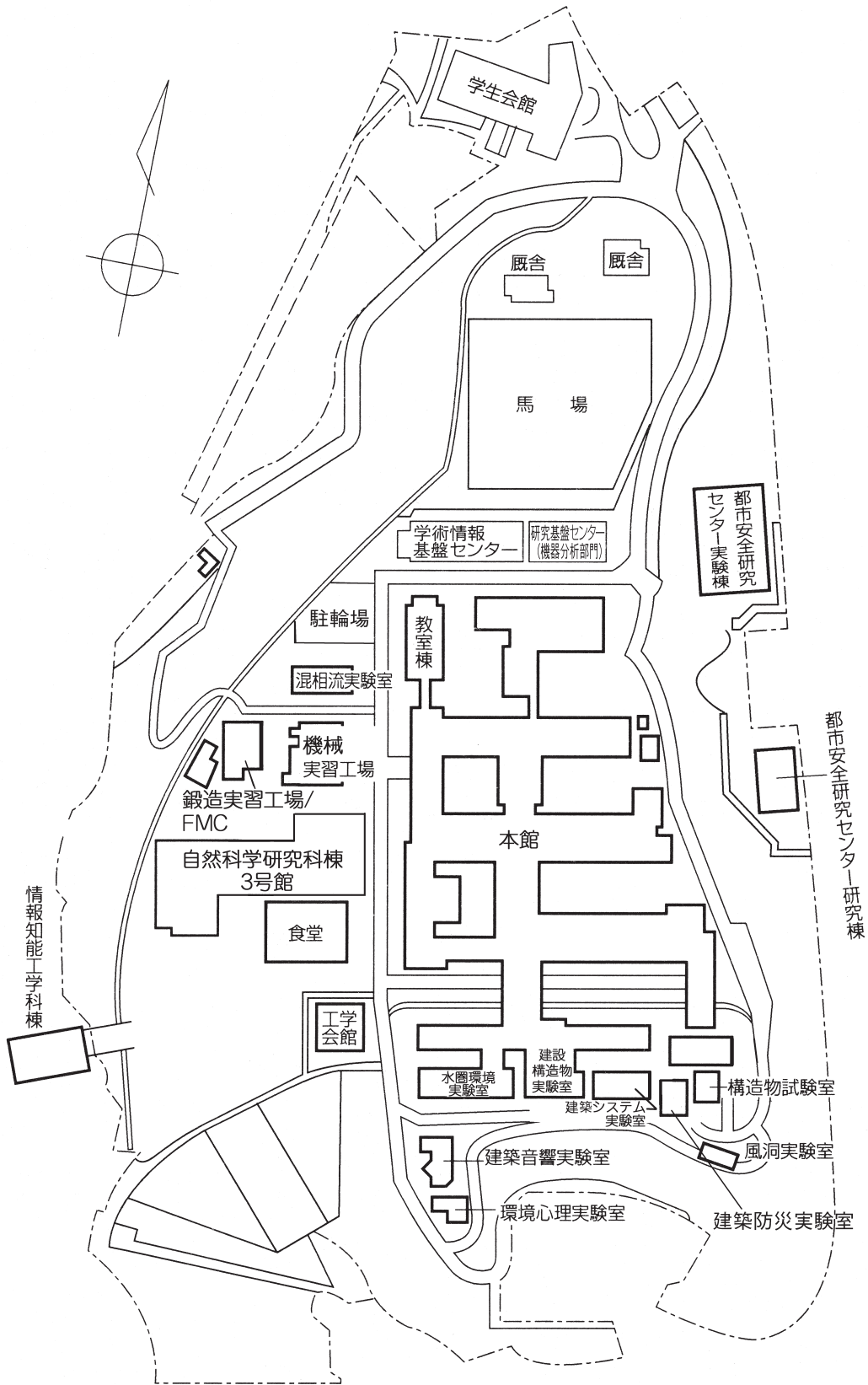
2. 工学部案内図



交通案内

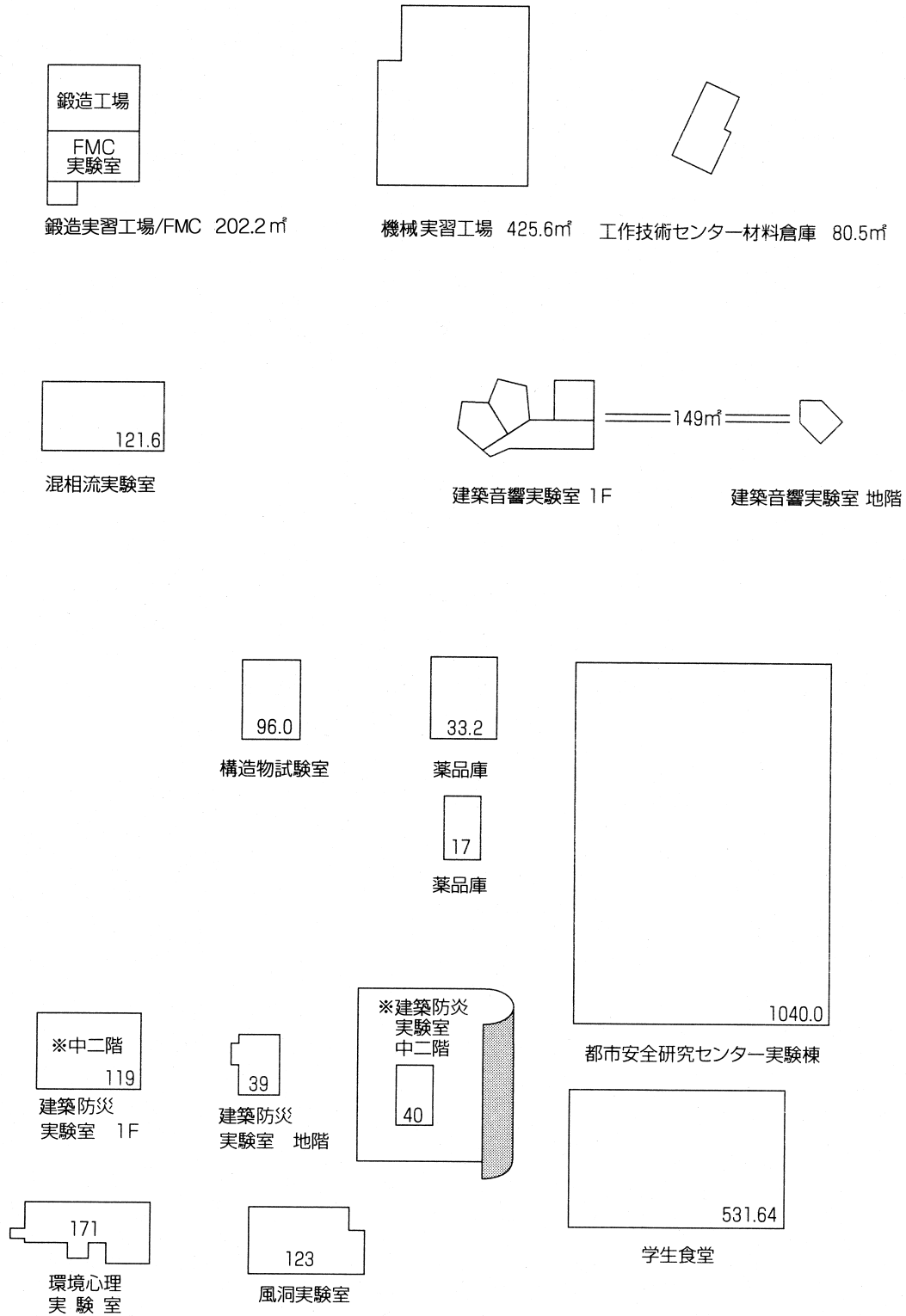
神戸市バス鶴甲団地行③⑥番に乗車し、神大本部・工学部前にて下車。
 神戸市バス六甲ケーブル下行⑬番に乗車し、神大国際文化学部前にて下車。阪急電鉄六甲駅より徒歩20分。

3. 工学部配置図



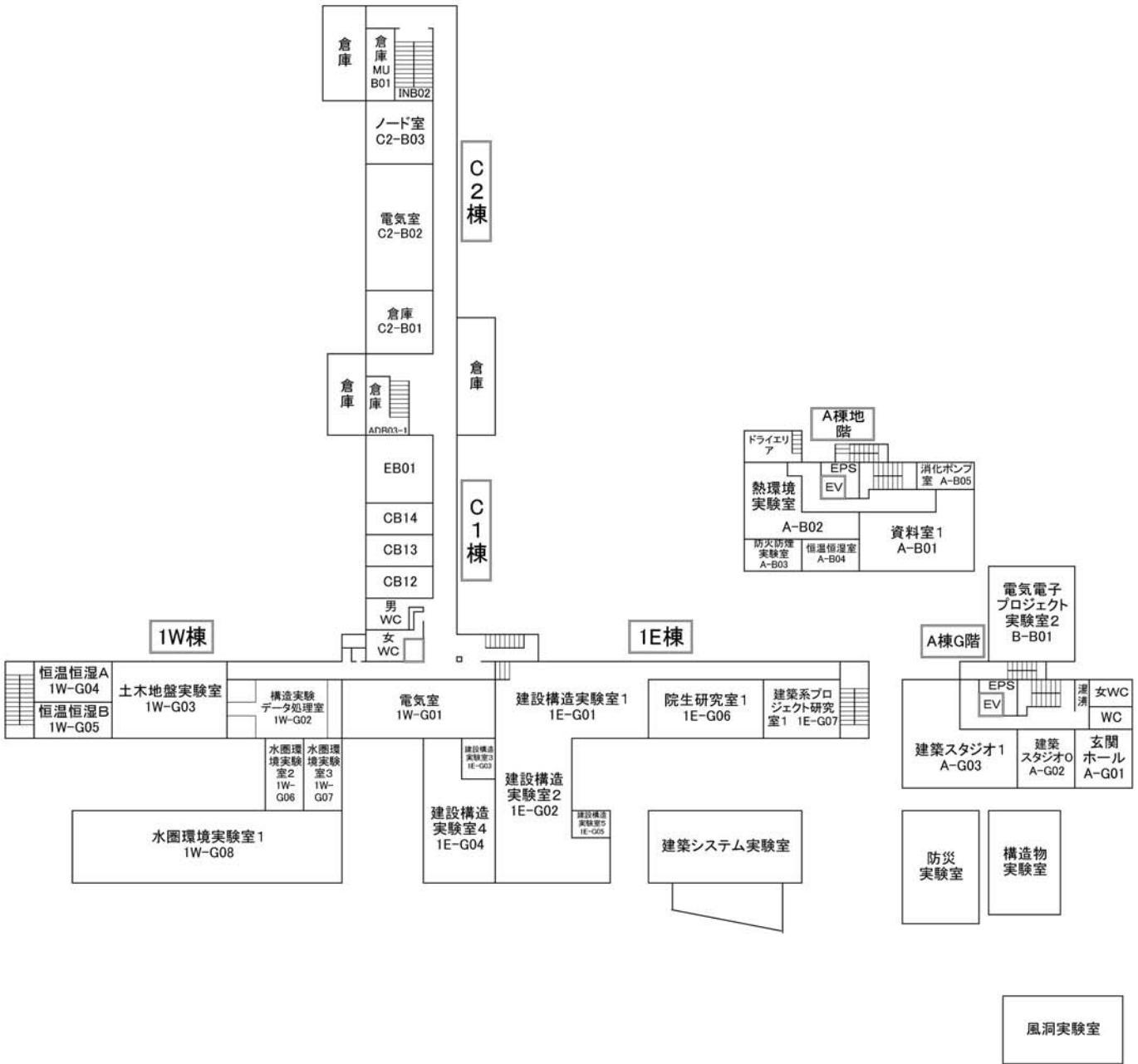
4. 工学部学舎平面图

(屋 外)



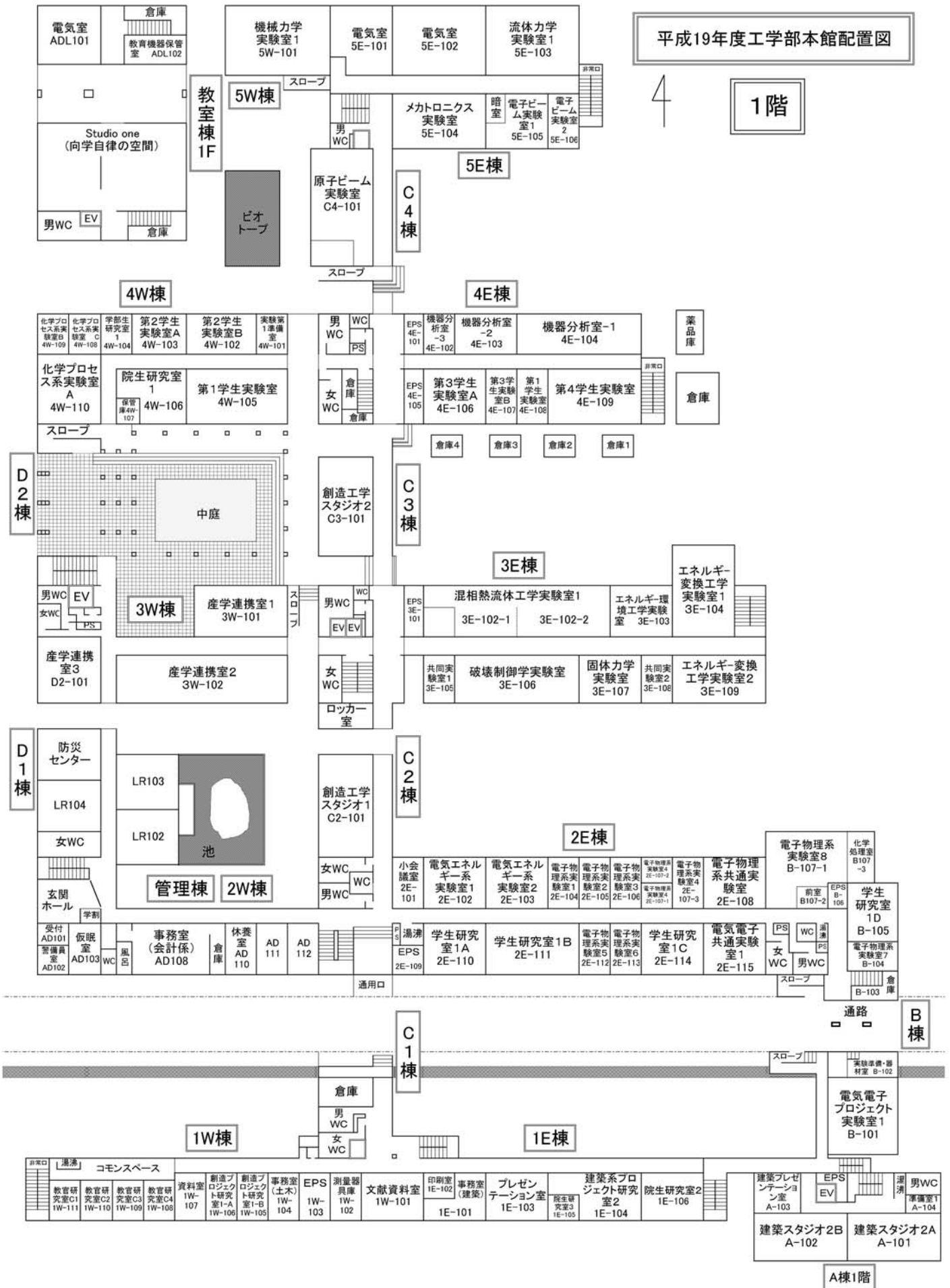
平成19年度工学部本館配置図

4 G階・地階



平成19年度工学部本館配置図

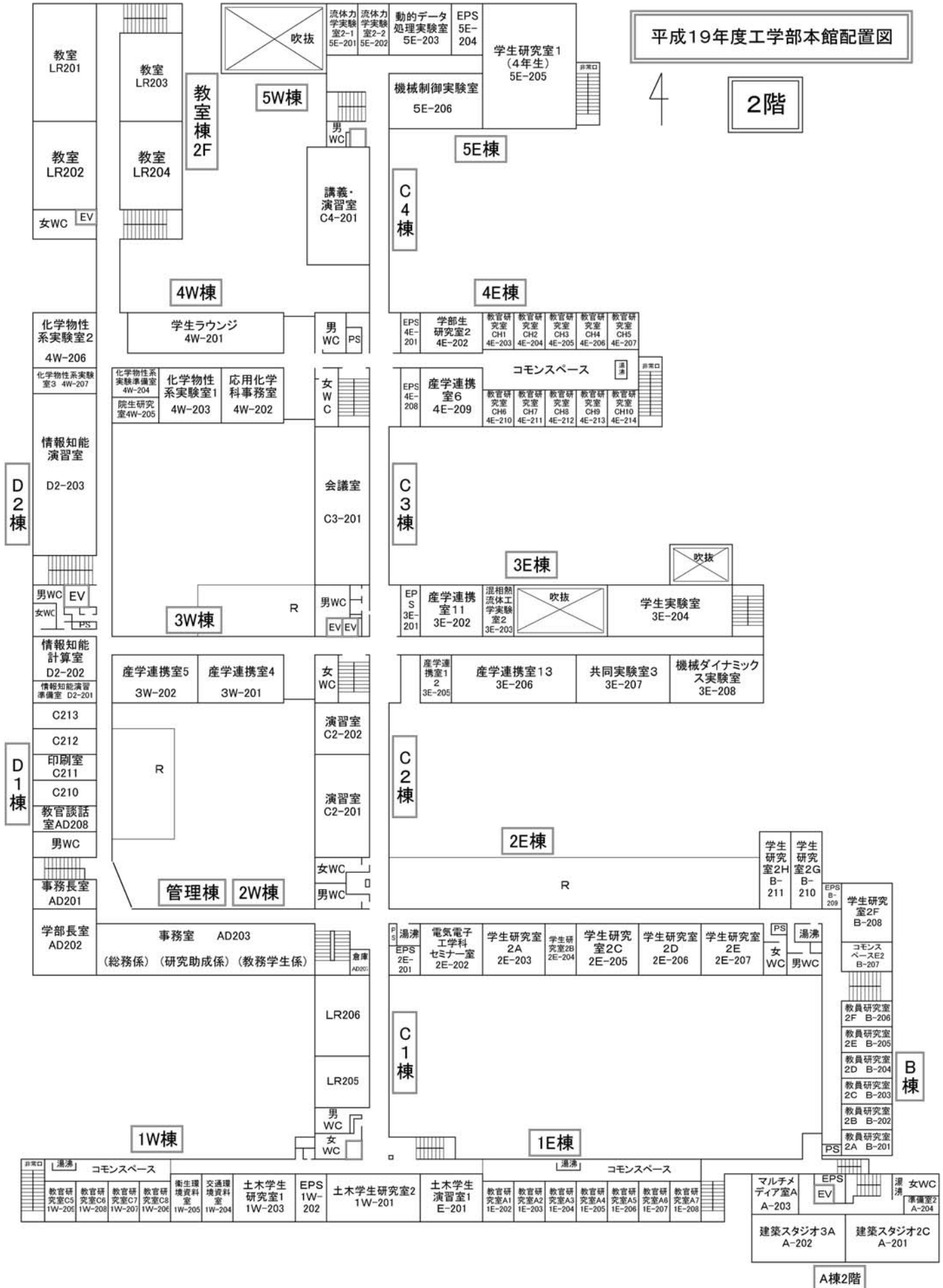
1階



平成19年度工学部本館配置図

4

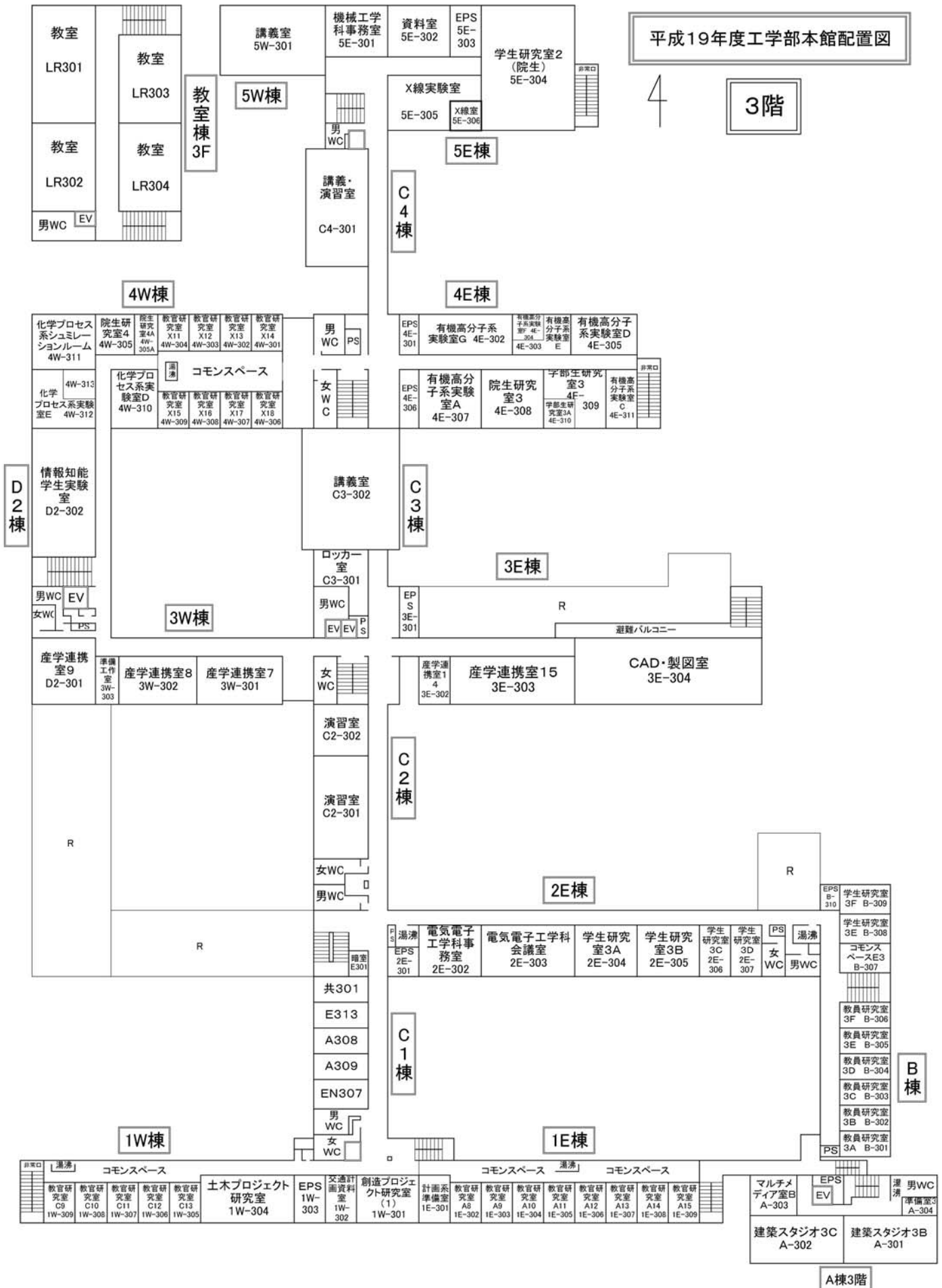
2階



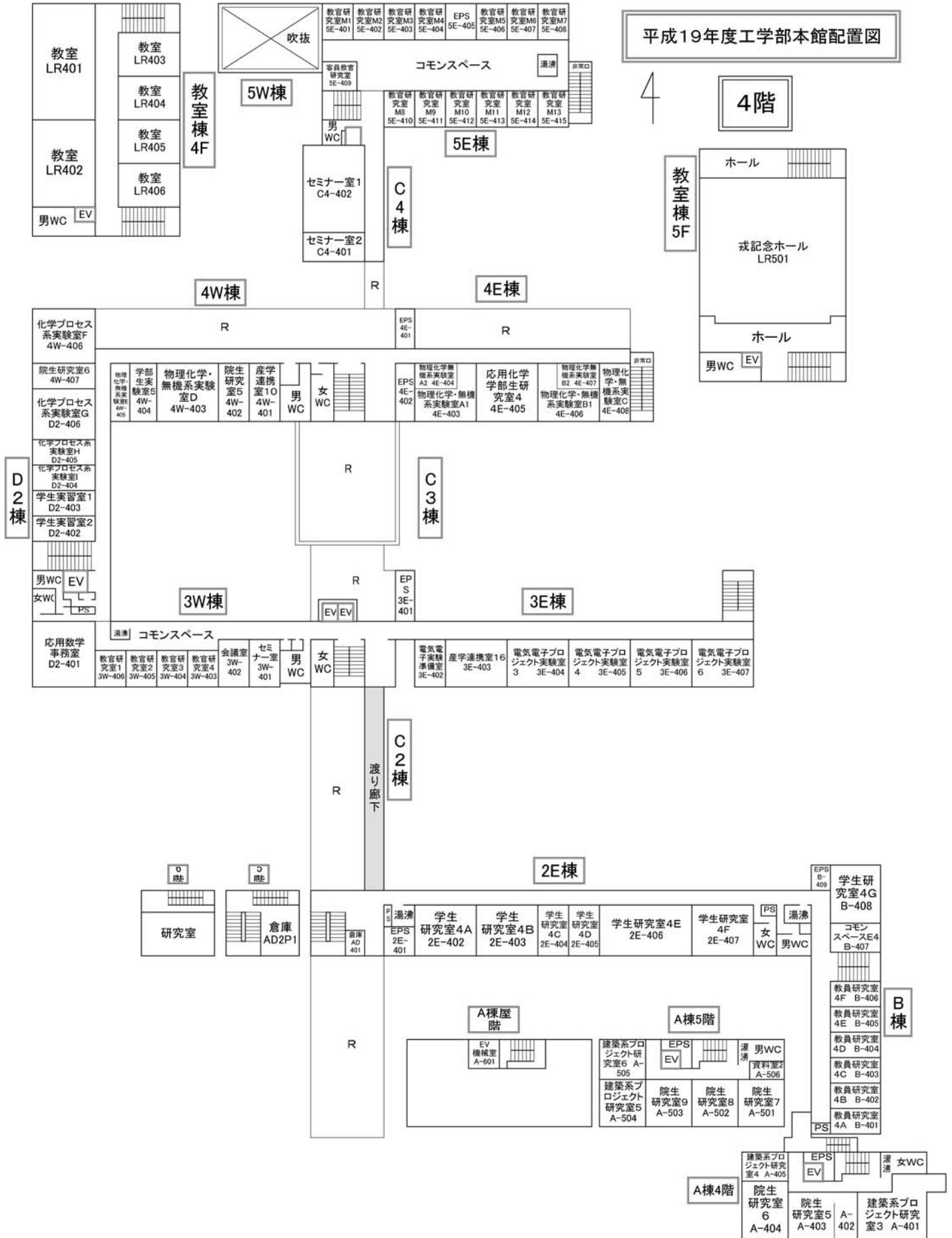
平成19年度工学部本館配置図

4

3階



平成19年度工学部本館配置図



(情報知能工学科棟)

(旧システム工学棟)

地階

SB02 控室	SB01
13.8	機械室
	98.3

S408-2 インテリジェントシステム
研究室Ⅳ 22.6

4階

S410 ロボ・メカ 研究室Ⅳ 48.4	S408 ロボ・メカ 研究室Ⅲ 45.0	WC	S402 インテリジェントシステム 研究室Ⅰ 92.1
S409-2 研究室	S409-1 計算機 アーキテクチャ 研究室Ⅱ	S407 ロボ・メカ 研究室Ⅱ 45.2	S406 ロボ・メカ 研究室Ⅰ 45.2
	S405 インテリジェント システム 研究室Ⅲ 45.2	S401 インテリジェント システム 研究室Ⅱ 46.1	

1階

S111 知能ロボット 研究室(2) 53.3	S110 知能ロボット 研究室(1) 27.4	S107 情報計測 デバイス 第3研究室 66.8	WC	S102 電気室 69.5
	S108 人間機械系 研究室(1) 50.3	S106 システム設計 研究室Ⅰ 68.5	玄関 ホール	S101 認識工学 研究室Ⅲ 92.1

S519 学部長管理室 21.0

5階

S518 学部長 管理室 30.6	S514 学部長 管理室 45.2	S513 研究室 21.6	WC	S510 研究室 23.4	S509 情報知能工 学科事務室 46.1
S517 学 理部 長 19.3	S516 " 21.6	S515 " 26.8	S508 " 22.6	S507 " 22.6	S506 " 22.6
	S505 " 22.6	S504 " 22.6	S503 " 22.6	S502 " 22.6	S501 研究 室 23.5

S109 人間機械系研究室(2) 17.4

ヒューマンインターフェイス
研究室Ⅲ

ヒューマンインターフェイス
研究室Ⅱ

2階

S208 情報計測 デバイス 第2研究室 38.0	S207 29.0	S205-2 44.2	S205-1 22.6	WC	S201 計算機 アーキテクチャ 研究室Ⅰ 160.8
S206 情報計測 デバイス 第1研究室 67.7	S209 ヒューマンインター フェイス研究室Ⅰ 90.3				

屋階

SP02 倉庫 13.3	SP01 エレベータ機械室 16.6
--------------------	--------------------------

認識工学研究室Ⅱ

S202 研究室

3階

S311 学部長 管理室 48.4	S308 システム制御 研究室 45.2	S307 21.6	WC	S302 システム制御 計算機室 92.1
S310 学 部 長 管 理 室 48.4	S309 応用数学 実験室 67.7	S306 認識工学 研究室Ⅰ 68.7		S301 システム制御 研究室Ⅰ 68.7

S312 応用数学研究室(2) 17.5

S310 応用数学研究室(1) 19.3

S303-1 研究室 22.6

S303-2 研究室 22.6

(都市安全研究センター研究棟)

1 階

R101 事務室 22.5	R102 研究室 22.5	R103 研究室 30.0	R104-1 都市基盤 解析室 (I) 30.0	R104-2 都市基盤 解析室 (II) 30.0
玄関		ホ一		
R105 機械室 30.0		WC	R106 実験 実測 準備室 13.8	R107 研究室 30.0
				R108 研究室 30.0

2 階

R201 安全システム 解析室 40.0	R202 研究室 30.0	R203 研究室 30.0	R204 研究室 30.0	R205 研究室 30.0
R206 研究室 30.0		WC	R207 資料 保管 室 13.8	R208 会議室 60.0

屋根

R P01 機械室 30.77

5. 工学部教室設備等一覧表

教室No	収容人数	スクリーン	教育機器	教室No	収容人数	スクリーン	教育機器
※102	30	○	OHP	401	150	○	OHP, SP, マルチメディアプロジェクター
※103	30	○	OHP				
201	150	○	OHP, SP, マルチメディアプロジェクター	402	110	○	OHP, VTR (VHS), 教材提示装置, 液晶プロジェクター
202	110	○	OHP, マルチメディアプロジェクター	※403	22	○	OHP
203	66	○	OHP	※404	22	○	OHP
204	66	○	OHP	※405	22	○	OHP
206	72	○	パソコン (DOS/V) 40台	※406	22	○	OHP
※207	60	○	OHP	501	300	○	OHP, VTR (VHS)・DVD, 液晶プロジェクター, 書画カメラ
※C4-201	102	○	OHP, PC プロジェクター, 書画カメラ ビデオデッキ, DVD プレーヤー				
301	150	○	OHP, SP, マルチメディアプロジェクター	C3-101	70	○	OHP, PC プロジェクター, 書画カメラ, ビデオデッキ, DVD プレーヤー
302	110	○	OHP, マルチメディアプロジェクター	C2-101	60		
303	66	○	OHP	C2-201	75		
304	66	○	OHP	C2-202	28		
5W-301	112	○	OHP, PC プロジェクター, 書画カメラ, ビデオデッキ, DVD プレーヤー	C2-301	75		
				C2-302	28		
※C4-301	102	○	OHP, PC プロジェクター, 書画カメラ ビデオデッキ, DVD プレーヤー				
C3-302	179	○	OHP, PC プロジェクター, 書画カメラ, ビデオデッキ, DVD プレーヤー				

(注) ※印は個人机又は長机 (※印以外は全て連結机)。

102, 103, 403, 404, 405, 406は演習室。

501は視聴覚室。206は情報コンセント教室。

OHP はオーバーヘッドプロジェクター, SP はスライドプロジェクター, VTR はビデオカセットデッキ。

6. 部局等所在地及び電話番号

部 局 等	所 在 地	電 話 番 号
事 務 局 総 務 部 企 画 部 研 究 推 進 部 国 際 部 財 務 部 学務部 入 試 課 施 設 部	〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1	大代表 (078) 881-1212
事 務 局 学務部 学 務 課 〃 学生生活課 〃 共通教育課	〒657-8501 神戸市灘区鶴甲1丁目2-1	
保 健 管 理 セ ン タ ー	〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1	
百 年 史 編 集 室	〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1	
附 属 図 書 館 社 会 科 学 系 図 書 館	〒657-8501 神戸市灘区六甲台町2-1	
自 然 科 学 系 図 書 館	〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1	
人 文 科 学 図 書 館	〒657-8501 神戸市灘区鶴甲1丁目2-1	
人 間 科 学 図 書 館	〒657-8501 神戸市灘区鶴甲3丁目11	
学 術 情 報 基 盤 セ ン タ ー	〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1	
連 携 創 造 本 部		
遺 伝 子 実 験 セ ン タ ー		
バ イ オ シ グ ナ ル 研 究 セ ン タ ー		
研 究 基 盤 セ ン タ ー		
都 市 安 全 研 究 セ ン タ ー		
分 子 フ ォ ト サ イ エ ン ス 研 究 セ ン タ ー		
国 際 コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン セ ン タ ー	〒657-8501 神戸市灘区鶴甲1丁目2-1	
大 学 教 育 推 進 機 構	〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1	
神 戸 大 学 百 年 記 念 館 (留 学 生 セ ン タ ー)	〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1	
環 境 管 理 セ ン タ ー	〒657-8501 神戸市灘区鶴甲1丁目2-1	
人 文 学 研 究 科 文 学 部	〒657-8501 神戸市灘区鶴甲1丁目2-1	
国 際 文 化 学 研 究 科 国 際 文 化 学 部	〒657-8501 神戸市灘区鶴甲3丁目11	
人 間 発 達 環 境 学 研 究 科 発 達 科 学 部	〒657-8501 神戸市灘区鶴甲3丁目11	

部 局 等	所 在 地	電 話 番 号
附 属 住 吉 寮 小 学 校 中 学 校	〒658-0063 神戸市東灘区住吉山手 5丁目11-1	(078) 851-4073
附 属 明 石 小 学 校 中 学 校 幼 稚 園	〒673-0878 明石市山下町3-4	小 学 校 (078) 912-1642・1643 中 学 校 (078) 911-3631 幼 稚 園 (078) 911-8288
附 属 養 護 学 校	〒674-0051 明石市大久保町大窪2752-4	(078) 936-5683・5684
法 学 研 究 科 ・ 法 学 部	〒657-8501 神戸市灘区六甲台町2-1	大 代 表 (078) 881-1212
経 済 学 研 究 科 ・ 経 済 学 部		
経 営 学 研 究 科 ・ 経 営 学 部		
理 学 研 究 科 理 学 部	〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1	
内 海 域 環 境 教 育 研 究 セ ン タ ー	〒656-2401 淡路市岩屋2746	(0799) 72-2374
医 学 研 究 科 ・ 医 学 部	〒650-0017 神戸市中央区楠町7丁目5-1	大 代 表 (078) 382-5111
附 属 病 院	〒650-0017 神戸市中央区楠町7丁目5-2	
医 学 部 保 健 学 科 (名 谷 地 区)	〒654-0142 神戸市須磨区友ヶ丘7丁目10-2	大 代 表 (078) 792-2555
工 学 研 究 科 ・ 工 学 部	〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1	大 代 表 (078) 881-1212
農 学 研 究 科 ・ 農 学 部		
附 属 食 資 源 教 育 研 究 セ ン タ ー	〒675-2103 加西市鶉野町1348	事 務 室 (0790) 49-0341
海 事 科 学 研 究 科 海 事 科 学 部	〒658-0022 神戸市東灘区深江南町5-1-1	大 代 表 (078) 431-6200
国 際 協 力 研 究 科	〒657-8501 神戸市灘区六甲台町2-1	大 代 表 (078) 881-1212
経 済 経 営 研 究 所 附 属 政 策 研 究 リ エ ゾ ン セ ン タ ー		
瀧 川 記 念 学 術 交 流 会 館	〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1	事 務 室 (078) 803-5583
職 員 会 館 「 眺 望 館 」		
神 大 会 館		(078) 803-5298
山 口 誓 子 記 念 館		(078) 803-5096
学 而 荘	〒657-0038 神戸市灘区深田町1丁目1-25	管 理 人 室 (078) 854-0250
イ ン タ ー ナ シ ョ ナ ル ・ レ ジ デ ン ス	〒650-0046 神戸市中央区港島中町2-4-2	大 代 表 (078) 302-5335
住 吉 寮	〒658-0063 神戸市東灘区住吉山手7丁目3-1	(078) 851-4075
住 吉 国 際 学 生 宿 舎		
女 子 寮	〒658-0063 神戸市東灘区住吉山手7丁目3-2	(078) 811-1300
国 維 寮	〒657-0813 神戸市灘区高尾通3丁目2-33	(078) 861-4333

授 業 要 覧 2007

神 戸 大 学 工 学 部

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
電話 (078) 803-6350

印刷・製本 有限会社 岸本出版印刷
電話 (078) 681-2456



※この冊子は100%再生紙を使用しています。